

ガーリーエアフォース PMCエースの機動

セルユニゾン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平和を謳歌していた中国に【ザイ】という飛翔物体が現れる。

世界は【ザイ】に対抗する為の専用のチューニングを施した戦闘機【ドーター】とそのパイロットである【アニマ】と共に世界の空を護る為に【ザイ】との空戦を繰り返すことになる。

だが、人類の中には別のベクトルで【ザイ】に抵抗しようという者もいた。

【AZJシステム】

それを搭載した戦闘機を操るパイロットの一人に【バトラ】という人物がいた。

【バトラ】この世界の住人ではなかった。

友人が建てたフラグを即日回収して死んだ男。その実態は神のミスだった。

その神の上司から人間辞める程の特典を貰い、ガリーエアフォースの世界に転生しPMC（民間軍事会社）に就職した彼は、ある戦争を生き残り、パイロットとして成長し、世界経済を守った。

そして、彼は操縦桿を握り続けていた。【ザイ】から世界を、この世界の住人を守る為に。

注意

* 作者の衝動が全力出撃して書きました。

* タイトルは仮のものです。予告なく変更する場合がございます

す。

* 作者は懲りずの三作目の為に更新速度はハリアーに巡航速度で振り切られる位に遅いです。

以上を容認できない方は戦闘空域からの撤退をお勧めします。

目次

MS社 データベース

アンタレス2・アルタイル1	1
アルタイル03・アンタレス03	4
アルタイル04・アンタレス04	7
AJZシステム	10
アルタイル04	12

番外編

特殊作戦 9月×小松基地Ⅱ?	14
特殊作戦 狗鷲は消えた白姫を知る	25
特殊作戦 バトラの義妹の過去	31
特殊作戦 MS社の階級小話とバトラの過去小話	37
特殊作戦 英国での絆	42
特殊作戦 縁日逢瀬	52
特殊作戦 縁日逢瀬 後編	61
特殊作戦 あり得た過程	70
特殊作戦 本社からの特別報酬	78
特殊作戦 聖夜の日の奇跡	88
特殊作戦 バレンタインの地獄と黒歴史	95
特殊作戦 バトラだって人間なんです!!	101

本編

プロローグ 死亡から転生	107
作戦1 転生から…	112
作戦2 初めての…	124
作戦3 義姉との再会	134

作戦 4	小松防衛戦そしてエースの道	153
作戦 5	嵐の前の静けさ	169
作戦 6	嵐が現れる	177
作戦 7	集結！そして……	198
作戦 8	蠍の毒と研ぎ澄まされた翼	218
作戦 9	第二次海鳥島攻略戦	241
作戦 10	作戦終了後 沖縄にて	266
作戦 11	不穏な影は音も無く……	278
作戦 12	厚木訪問	289
作戦 13	始動！人類の反抗作戦！！	305
作戦 14	脱出と裏切りと助けられる	320
作戦 15	イヌワシの亡命	332
作戦 16	イヌワシが来て5日後	343
作戦 17	試験・訓練って大抵の場合は実戦試験になるよね	357
作戦 18	イヌワシとサソリのデート	372
作戦 19	スラッシュ	383
作戦 20	イヌワシの公園	394
作戦 21	3回目の悪夢	403
作戦 22	蠍の悲しき過去と作戦前夜	410
作戦 23	亡霊成仏	419
作戦 24	白いイヌワシと青いサソリ	433
作戦 25	小松基地は平常稼働です	438
第27話	相反す者	445
作戦 28	シャルル・ド・ゴール潜入	454

作戦 2 9	シャルル・ド・ゴールの生存者？	466
作戦 3 0	突風救出完了と新参入、そして……	473
作戦 3 1	私に良い考えがある	488
作戦 3 2	モンゴル出兵	497
作戦 3 3	円卓での空戦と最悪との邂逅	506
作戦 3 4	動き出す最悪への歯車	516
作戦 3 5	平和な安息と動き出した歯車	528
作戦 3 6	陸の戦場	544
作戦 3 7	絶望の後には希望がある	553
作戦 3 8	陸地で交わる思い	567
作戦 3 9	史上初との邂逅	577
作戦 4 0	愚者の戦い	591
作戦 4 1	認められない物と認められる物	610
作戦 4 2	タリズマン……漸く	622
作戦 4 3	空を飛ぶ権利と資格	632
作戦 4 4	繰り返される悪夢	639
第 4 5 話	束草沖空戦	645
作戦 4 6	我儘の代償	652
作戦 4 7	絶望に抗う勇氣	659
作戦 4 8	第 2 次小松防衛戦開始	667
作戦 4 9	第 2 次小松防衛戦終結	674
作戦 5 0	小松防衛戦から一ヶ月	684
作戦 5 1	予備機選定と恋する乙女	693
作戦 5 2	ベトナムへ	702
作戦 5 3	残された者達は……	710

作戦 5 4	新たなる翼との対面	723
作戦 5 5	急襲	731
作戦 5 6	急襲を凌いで……	746
作戦 5 7	アンタレス隊の真価	756
作戦 5 8	ゲート破壊作戦始動!!	763
作戦 5 9	核を目指してフィヨルドの入り江	770
作戦 6 0	越えるべき壁	778
作戦 6 1	イかれた伝統芸能	797
作戦 6 2	コマツ・エマーゼンシー	804
作戦 6 3	K O M A T S U C O M B A T N o J u s t i c e	810
e		
作戦 6 4	護衛任務	816
作戦 6 5	バトラノダンス	822
作戦 6 6	e n d o f s t a r t	830
作戦 6 7	大規模空襲	835
作戦 6 8	意思を示して	843
作戦 6 9	日の出の攻撃	850
作戦 7 0	白い世界で懐旧を……	856
作戦 7 1	時には穏やかなじやない昔話を	862
作戦 7 1	北の基地から	868
作戦 7 2	北の空	875
作戦 7 3	戦いの中の戦い	883
作戦 7 4	最後の日の前日に	892

MS社 データベース アンタレス2・アルタイル1

本名：レオス

コールサイン：ALTAIR1 ANTARES2

TACネーム：バトラ

搭乗機体：RF4ーTBーAJZ ファントム2・Iー4ー4ー1

AJZ ウプイリ

人種：白人

頭髮：青みがかった銀色

目色：水色

好物：甘い物・空戦・兵器全般

嫌物：デスクワーク

経歴

とある航空傭兵団に借金返済を理由に少年兵として参加している所をMS社から借金の肩代わり・退団費用の全額負担を条件にANTARES1専属兵装操作官として入社。

ヴアラヒア事変とゴールデンアクス事件中にアンタレス隊の補充パイロットとして途中参加、以後はパイロットとして勤務。

ザイとの本格的戦闘が始まると新設されたアルタイル隊の隊長に就任し、RF4ーTBーAJZ ファントム2を用いて対ザイの最前線勤務を志願する。

那覇基地に対ザイ戦を目的に派遣後、雇い主である日本国政府に意向により所属基地を那覇から小松基地へと移す。

誘蛾灯事件ではIー4ー4ーAJZ ウプイリを使用して勤務。その後は2機体制にて継続勤務中。

性格

性格は本人では把握し切れていないが近しい者からは甘くも厳しく、楽しい事と面白い事好き。ただ、辛い過去からか生き死にドライだったり、狂気を感じさせる場所がある。

親との記憶が無い為に親の愛情と言うのを知らない筈だが、何か遠い昔を懐かしむ様に話す時がある為に何処かミステリアスな雰囲気ももつ

戦闘スタイルはカウンターマニューバやマニューバキル、発射後ロックオン機能を多用した時間差・波状攻撃をを得意とする珍しいタイプのパイロット。ヒットアンドアウェイやドッグファイトもそれ相応以上の実力を持つ。

対地・対空共に教官経験があり、片宮詩苑・片宮詩鞍・ベルクトの現場教官を現在も務めている。

勤務環境

基本的に彼を発端とする問題は大きな物は無く、所属するM42・43飛行中隊の隊員達との仲も至って良好であり不仲を原因とする対立は確認されていない。

但し、何かしらの理由による精神的な傷を持っている為か女性からの好意に気付きずらくなっている可能性が高く、それが原因による問題が発生しているが特筆する物は無い。

ただ、報告によると自衛隊所属のファントムより勧誘・ヘッドハンティングを受けているとの報告有り。移籍を警戒するならば雇用環境の改善を図るべきだと考える。

搭乗機体

RF4TBJAZ ファントム2

ANTARES1より受け継いだF4を単座仕様へと改造すると同時に偵察・爆撃・雷撃を行える様に各所を改造・強化を施している。

電子機器・エンジン・主翼・尾翼も強化・変更が行われ、エンジンには出力以外にも推力偏向ノズルの搭載などが行われており、翼は材質と形状変更が行われており、元となったF4の面影は殆ど無くなっている。

空対空ミサイル・空対地爆弾はパイロンに対応し、過重に耐えられれば全てが発射可能である。

魚雷は軽量な物であれば長魚雷も使用できるが基本は短魚雷によ

る肉薄雷撃・精密雷撃・対潜攻撃が主である。

現在は自衛隊の装備を運用できる様に整備した為に対艦ミサイルの運用も可能になりつつある。

魚雷投下の際のコールサインはFOX6

I044AJZ ウプイリ

バトラがロシアのディーラーに予備機として自費購入を行った機体。

元々はロシアの最新鋭艦載機として開発されたが高性能を求めた為に着艦性能に難がある為に余りにも熟練者向けの設計となり不採用に終わった。

ウプイリはこの内の4機目の機体を改造された機体で1・2号機のノスファイトウを元に3号機のカーミラで手に入った特殊兵装のデータも組み込まれた造られた機体。

一部の機能がコストなどの問題で使用出来ない状態だが自衛隊の秘匿兵器との連動が考えられている。

搭載可能なミサイルや爆弾はロシア系の中・小型の物であれば大抵は搭載可能。爆弾は無誘導であれば搭載可能である。

特殊兵装にマイクロミサイルランチャーやレールガンが装備されている。

マイクロミサイルランチャーのコールサインはドライブ。
レールガンはスラッシュ。

アルタイル03・アンタレス03

本名：片宮 詩鞍

コールサイン：ALTAIR03 ANTARES03

TACネーム：未登録

搭乗機体：A110A1AJZ サンダーボルトII・F12X1

AJZ ヴァイパーゼロII

人種：日本人

頭髪：艶のある黒色

目色：黒色

好物：兄様・甘い物

嫌物：戦い

経歴

ヴアラヒアの日本侵攻の拉致被害者の1人。

ゴールデンアクス事件中のネバダ廃空港攻略戦後に捕虜として保護される。その後はバトラの献身的介護やコミュニケーションにより男性不信、人間不信を克服。人員不足の際にアンタレス隊の補充パイロットとして途中志願参加、以後はパイロットとして正規雇用の後に勤務。

ザイトの本格的戦闘が始まると新設されたアルタイル隊の3番機として就任し、A110A1AJZを用いて米海軍第7艦隊にて対ザイトの最前線勤務を行う。

第七艦隊壊滅後に戦力増強を目的に活動拠点を小松基地へと移す。が度重なる出撃による機体損耗と作戦内容の変化からF12X1AJZを乗機に加えて継続勤務中。

性格

性格はバトラと似た性格をしているが戦闘行動に対する心理関係はどちらかといえば反戦、平和主義的な所もあるがバトラが関わると熱しやすい部分もある。

バトラの献身もありトラウマの克服やその後の関係もあり家族の様に想っていると同時に1人の女性として男性に向ける感情も併せ

持っている。

戦闘スタイルは対地上戦を得意とするが基本的な空戦も行えるオールラウンダーなタイプのパイロットだが、ドッグファイトはまだ未熟な点が残るが特異な物が無い定石の戦い方は多くの正規軍に取っては連携が取りやすいありがたい存在でもある。

勤務環境

基本的に彼女を発端とする問題は大きな物は無く、所属するM42・43飛行中隊の隊員達との仲も至って良好であり不仲を原因とする対立は確認されていない。

但し、バトラの女性関係の拗らせが原因による問題が発生しているが特筆する物は無い。

基本的にバトラの側で活動させて置けば移籍やヘッドハンティングの対象になったとしても退社の心配は無い。ただし寿退社の可能性が上がるので留意すべし。

搭乗機体

A-110 A-1AJZ サンダーボルトII

通常のA-110Aを元に操縦系や装甲、電子面を中心に改造・強化を施している機体。

外見は殆ど同じだが所々に追加装備が施された関係で外見的变化もある。正規軍の機体との差異は明確にある。1番の差異はコクピット内装である。グラスコクピットが両脇にある様なレイアウトとなっており、マルチタスクを前提にした癖のある操縦感だが、正規軍の物よりも精密な操作が行えるのが特徴であり、機動に関しては簡略化されている所もある。

基本的な空対空ミサイルとほぼ全ての空対地爆弾はほぼ全てのパイロンが対応し、過重に耐えられればPMCが手に入る物なら全種発射可能である。ただし、魚雷・対艦兵装には対応していない。

空戦に於いては高い搭載量を活かしたミサイルキャリア的な戦いをするが、豊富な砲火器を使った砲撃戦も得意とするがやはり攻撃機。対地上戦向けなのは確かである。また、単純な砲弾を利用する対空砲・対戦車砲や電磁砲まで搭載する当機はランニングコストが安い

のも特徴的な機体である。

F-2X-AJZ ヴァイパーゼロII

対ザイ戦に於いてより空戦向けの機体として運用する機体。

本機は日本のF-3との競合に於いてF-2の強化発展型による導入コストの低さや扱い易さを全面に押し出したが、海自の国産艦載機の計画と統合されると完全な局地戦闘機として設計されている事。艦載機へと設計変更すると似て居るが別物の機体と言う位に部品共有が難しい。双発機じゃないのに加えて陸上機と艦載機の同時調達を考えるとF-3の方が量産効果で同じ位のコストに落ち着く、で？

新規性何処？ などの理由で不採用に終わった機体である。

AJZ回収と共に開発資金回収も兼ねて売りに出た機体を買った物であり、自衛隊のF-2もF-3までの繋ぎとして改修された事により部品共有が行える事で稼働率が高いのも魅力な機体である。

搭載武装はF-2と同様だが、消費の激しい兵装に関しては米国製の物も一部搭載可能である。

アルタイル04・アンタレス04

本名：片宮 詩苑

コールサイン：ALTAIR03 ANTARES03

TACネーム：未登録

搭乗機体：A110A1AJZ サンダーボルトII・F12X1

AJZ ヴァイパーゼロII

人種：日本人

頭髪：艶のある黒色

目色：黒色

好物：兄様・甘い物

嫌物：戦い

経歴

ヴアラヒアの日本侵攻の拉致被害者の1人。

ゴールデンアクス事件中のネバダ廃空港攻略戦後に捕虜として保護される。その後はバトラの献身的介護やコミュニケーションにより男性不信、人間不信を克服。人員不足の際にアンタレス隊の補充パイロットとして途中志願参加、以後はパイロットとして正規雇用の後に勤務。

ザイトの本格的戦闘が始まると新設されたアルタイル隊の4番機として就任し、A110A1AJZを用いて米海軍第7艦隊にて対ザイトの最前線勤務を行う。

第七艦隊壊滅後に戦力増強を目的に活動拠点を小松基地へと移す。が度重なる出撃による機体損耗と作戦内容の変化からF12X1AJZを乗機に加えて継続勤務中。

性格

性格は双子の詩苑とほぼ同様の性格をしている。ただ、好みは僅かに違い、テレビ番組では、ドラマよりもバラエティーの方を好む傾向がある。

バトラの献身もありトラウマの克服やその後の関係もあり家族の様に想っていると同時に1人の女性として男性に向ける感情も併せ

持っている。

戦闘スタイルは対地上戦を得意とするが基本的な空戦も行えるオールラウンダーなタイプのパイロットだが、ドッグファイトはまだ未熟な点が残るが特異な物が無い定石の戦い方は多くの正規軍に取っては連携が取りやすいありがたい存在でもある。

勤務環境

基本的に彼女を発端とする問題は大きな物は無く、所属するM42・43飛行中隊の隊員達との仲も至って良好であり不仲を原因とする対立は確認されていない。

但し、バトラの女性関係の拗らせが原因による問題が発生しているが特筆する物は無い。

基本的にバトラの側で活動させて置けば移籍やヘッドハンティングの対象になったとしても退社の心配は無い。ただし寿退社の可能性が上がるので留意すべし。

搭乗機体

A-110 A-1AJZ サンダーボルトII

通常のA-110Aを元に操縦系や装甲、電子面を中心に改造・強化を施している機体。

外見は殆ど同じだが所々に追加装備が施された関係で外見的变化もあるので正規軍の機体との差異は明確にある。1番の差異はコクピット内装である。グラスコクピットが両脇にある様なレイアウトとなっており、マルチタスクを前提にした癖のある操縦感だが、正規軍の物よりも精密な操作が行えるのが特徴であり、機動に関しては簡略化されている所もある。

基本的な空対空ミサイルとほぼ全ての空対地爆弾はほぼ全てのパイロンが対応し、過重に耐えられればPMCが手に入る物なら全種発射可能である。ただし、魚雷・対艦兵装には対応していない。

空戦に於いては高い搭載量を活かしたミサイルキャリア的な戦いをするが、豊富な砲火器を使った砲撃戦も得意とするがやはり攻撃機。対地上戦向けなのは確かである。また、単純な砲弾を利用する対空砲・対戦車砲や電磁砲まで搭載する当機はランニングコストが安い

のも特徴的な機体である。

F-2X-AJZ ヴァイパーゼロII

対ザイ戦に於いてより空戦向けの機体として運用する機体。

本機は日本のF-3との競合に於いてF-2の強化発展型による導入コストの低さや扱い易さを全面に押し出したが、海自の国産艦載機の計画と統合されると完全な局地戦闘機として設計されている事。艦載機へと設計変更すると似て居るが別物の機体と言う位に部品共有が難しい。双発機じゃないのに加えて陸上機と艦載機の同時調達を考えるとF-3の方が量産効果で同じ位のコストに落ち着く、で？

新規性何処？ などの理由で不採用に終わった機体である。

AJZ回収と共に開発資金回収も兼ねて売りに出た機体を買った物であり、自衛隊のF-2もF-3までの繋ぎとして改修された事により部品共有が行える事で稼働率が高いのも魅力な機体である。

搭載武装はF-2と同様だが、消費の激しい兵装に関しては米国製の物も一部搭載可能である。

AJZシステム

AJZシステム（アンチザイジャミングシステム）

ザイの出現以降に判明した電子機器や人間の五感にも多大な影響を与えるEPCMにより逆境に立たされ続けた人類がドーターとアニマ以外の対抗手段として開発した対EPCM技術。

個人に適応した専用モデルと複数人で運用出来る量産モデルが存在する。

専用モデルは機材その物がかなり高価な高性能PC程度なのだが、脳波同期等の調整に多大な時間を要する為に生産速度と効率がドーター・アニマのセットよりも悪く、初めて遭遇するEPCMパターンに遭遇した場合は対応するまで満足な戦闘が出来ないという弱点がある。

ただし、性能は折り紙付きでザイとの格闘戦が行える程にはEPCMの影響を抑える事が出来る。しかし、未知のEPCMへの対応にはデータ蓄積が必要とされる為に若干のタイムラグが発生する。

当社で設計・開発・運用される一部の専用モデルにおいてはアニマ・ドーターとの共同戦線が多い為に未知のEPCMに対して、ドーター・アニマの方で解析されたパターンを通常回線の他にドーター専用回線を通して受け取れる様になっており、即座に対応できるOSがダウンロードされている。

現在の配備状況では一部のPMCの一部のエースパイロットの機体に装備されていると言う状況である。

量産モデルは専用モデルから一部の性能がオミットされ、脳波パターンの近い者同士の複数人で運用出来る様にした安価なタイプでザイとの戦闘では五感に対するEPCMが万全では無い為に一撃離脱戦法やF4Bの様な戦い方を強要されてしまう。その癖に調整の専用モデル程では無いが多くの時間を取る。

だが、1度に多くの機体にデータ流用でそれなりに効果のある戦闘機を作れる事もあり正規軍などの質よりも取り敢えず量を取る必要のある組織では歓迎されている。

最近では複座の大型機限定だが、その場で兵装士官が調整を施せられれば専用モデルとの同等の効果を一時的に得られる物が開発中であるが、現場からは疑問視する声が多い。

最近では大型の電子戦機・航空管制機・電子偵察機等の機体に搭載できる空間作用型A J Zシステムも開発されたがそれでもミサイルなどの電子装備が正常稼動する程の効果ではあり、価格も機体とそれに掛かる改造費用も考えると正規軍では二の足を踏み程の対費用効果である為に配備は然程、進んでいない。

運用も自衛隊や小国の軍に雇われたP M Cの空中管制機が支援要請を受けて行っている程である。

ただし、一部の国では旧式の軍艦に載せようという意見がある為に取り合いのある武器商人達はその路線で売り込もうと必死の争いを見せている。

アルタイル04

コールサイン：ALTAIR04

TACネーム：ベルクト

搭乗機体：Su147-ANM ベルクト

人種：白人

頭髪：白

目色：赤

好物：労働・手助け・文化興隆

嫌物：特に無し

経歴

最初はロシアで数的不利を補う誘蛾灯という計画の元で開発生産されたアニメとドーターだったがとある科学者がベルクトを救う為に日本へ亡命する際にバトラの護衛を受けたのがMS社との始まり。

その後は訓練や作戦をバトラ達と共に乗り越えて、正式にMS社へと入社する。

所属はアルタイル隊4番機で使用機体はSu147。その容姿と性格から社内では人気は高く本人の預かり知らぬ場所では彼女にしたい社員ランキング・娘にしたい社員ランキング・孫にしたい社員ランキングでは常に上位に食い込んでいる程で一部ではバトラを敵対視している社員もいる。というのももベルクト自身がバトラを好んでいると態度で示してしまった為でもあるが1番はバトラの過剰気味な気遣いがあつたのが1番の理由。

戦闘スタイルは至って普通的手段を用いる為によくも悪くも教科書通りの飛行をする。

性格

健気で素直の一言。自分の実力を過小評価する傾向がある。

反骨精神なども無く誰とでも仲良く出来るが自己主張が少な過ぎる気がしないでも無いという報告が上がる。

育ちの理由からか文化や常識の一部が欠落気味で間違った知識を埋め込まれる事もあるので注意されたし。既に伝統的な衣装として

花魁スタイルの浴衣を着せられている。

勤務環境

特にコレと言った問題を起こさないと報告に上がっており、先輩や同僚とも複雑な関係も持っているがそれが原因で喧嘩などを起こす事は無いので安心されたし。

搭乗機体

Su47 | ANM ベルクト

前進翼に推力偏向ノズルと高機動がウリの戦闘機。ピーキーな性能ゆえに正規軍では不採用になったがPMCではある種のステータス機体として注目を浴びている。ただし殆どがSu47という安価な機体を改造した機体でSu47として生産された機体に乗っているパイロットは少ない。ベルクトの機体は数少ないSu47の正式生産機体をドーターとして改造された強化改修機体でアニメとしての操縦と通常操縦を併せ持つ様にMS社で操縦系統を改造された機体を使用する。

装甲も防御などの利点からチタンをふんだんに使用した装甲に変更され、溶接も職人による手仕事で行われた為に通常機体よりも性能が上がっている。

自衛隊から貸し出される秘匿兵器以外に特殊な武装を積めない機体だがロシア系の武装の他、一部の米国製の武装も詰める。

役割としては完全な制空担当で鈍足な片宮姉妹の護衛や援護などを担当する。

番外編

特殊作戦 9月×小松基地Ⅱ？

「は？ 航空祭？」

基地司令の団から言われた言葉にバトラが気が抜けた声で話す。

「そうだ。9月は小松航空祭の時期だ。それで君たちにはそれに協力して貰いたいのだ」

団の言葉に半分乗り気では無いバトラ。

MS社でもお呼ばれや独自で航空祭を行うが、航空祭のイベントや写真販売などの売り上げ生やすポケットマネーに変わるので乗り気なのだが、小松航空祭は訳が違うと言う事でバトラは乗り気では無いが、航空祭自体は行くのもやるのも好きなので乗り気だ。

「わたくしは構いませんが……何をすれば良いのでしょうか？」

「それは私も気になります」

初めての航空祭出演に何をすれば良いかわからない片宮姉妹だが、乗り気だ。

「簡単に言うと撮影会や写真のモデル、編隊飛行か曲芸飛行、その両方だな」

「至って普通だな」

「まあな。1個か2個くらいはぶっ飛んだ事して良いんだが、流石に自重する」

口外に何しても許されるご時世なら自重しないと言い張る団にバトラは頭を抱える。

「でも、なんで俺たちに？ 自衛隊の航空祭なら自衛隊でやって、その間の警戒に私達というのが普通では？」

「その辺は大丈夫だ。待機や君達には実弾を背負って展示して貰う。エンジン切ったり、ピン刺しっぱなしなら問題無いからな」

つまりその気なれば直ぐに出られると言う団。

バトラは憂いを絶たれた事で腕を組む。まだ、乗り気になりきって居なかった。

「イベントの売り上げを懐に入れても良いぞ」

「乗った」

熱い手のひら返しである。

「よし！ ベルクトや他のアニメ連中にも声を掛けてくる」

その後の交渉でイーグルは乗り気満々で、グリペンも緊急時（戦闘や作戦）が発生以来しない限りの完全休みを慧と一緒に取れるように計らうことを条件に了承。ラファールも対価として特に文句を言わずに参加を了承する。ベルクトは恥ずかしいという理由で断っていたが、バトラが乗り気な事を話すとバトラと一緒に行動を意識して良いと言う条件で参加を決意。ファントムは最後まで渋っていたが……

「売り上げ勝負で勝ったら、1日だけバトラを好きして良い」

と言うバーフォードの裏切りによりファントムは参加を決めた。

後にこの事がバトラにバレたバーフォードは航空祭での燃料費や整備費・塗装変更費の全額負担を娘への悪評拡散停止を条件に了承させられた。

9月のバーフォードの給料は24パーセント減になった。（尚、この被害はバトラの専用機1機での価格）

その後は大忙しで、MS社が試験的に作った装甲キャノピーの画面を使ったシミュレーターも使って編隊飛行や曲芸飛行の訓練を行う。幸いな事に編隊飛行は仕事で常日頃から行っていた為に問題無く、曲芸飛行も戦闘機動から少し見栄えを良くする程度や、ブルーインパルスのような集団曲芸では為にこれと言った問題は無かった。しかし、個人曲芸で問題が発生している奴が1人居た。

「ベルクト……今日は柚子だ」

「ありがとうございます……」

膝枕しながら、団扇で扇ぎながら、用意していた柑橘系ドリンクを飲ませる。

少しは楽になったのか顔色が青から何時もの薄ピンクに近づく。

「やっぱり、側転と腹ブレーキ？」

「そうです」

弱々しく語るベルクトに楓が団扇を持たない手で額を撫でる。

「少し、荒治療しよっか」

「え？」

笑顔で紡がれたバトラの言葉にベルクトは酔いとは違った意味で顔を青くした。

小松航空祭当日の小松基地には家族ずれの客から大きい子供も集まった。その数は例年の数値を軽く突破した。

というのも、目撃例こそあったが余り公にされていなかったドーターが展示されるという事前情報や、一時期話題になった白銀のSU-47も展示される事とMS社は東京防衛の立役者でそのパイロットが集まったの曲芸飛行と写真販売に写真撮影もするという情報も加わり、大きな友達やMS社パイロットに憧れる子供達が家族を引き連れてやってきていた。

MS社もMS社ブースで実際にMS社の食堂で出される料理を出したり、趣味で行っている事を披露したり、質問に答えたりなどをしている。

E-747とも呼べるダッシュユ8の空中管制機も展示され、一部は内部公開もされた。(輸送機としての仕事ができる余ったスペースと旧式機器が並ぶ場所のみ)

だが、ドーターの集まるが具合が凄かった。

軍用機ではあり得ないカラーリングもだが、現在も飛べる退役機が並んでいた事も理由だろう。だが、ハッチは装甲で閉じられていて、パイロットの公開は無く、でつち上げの自衛隊とMS社が説明していた。

人の集まりという点ではMS社の戦闘機達も負けていなかった。

PMCという理由から各国の退役機や不採用機が並んでおり、しかも、飛行可能であると同時に一部は曲芸飛行を行うとすればそれは大

きな子供が涎を滝のように流がすとも言える光景だ。

小さな子供達や中位の子供達はMS社のパイロットを捕まえては写真撮影や写真を買って行く。大きい子供も同様だ。

そして、イベントは目玉の曲芸飛行の時間に入る。

最初に曲芸飛行を務めるのはMS社でF-4Mを中心に防空・対地作戦を行う舞台で今回は曲芸用機体であるイングリッシュ・エレトリック社製のライトニングが編隊飛行と上昇を入れ込まれた曲芸飛行を披露する。

終了すると観客からの拍手喝采を受けながら、小松基地を1回だけ回り、編隊着陸を行い、場を沸かせた。

次の機体はまさかのP-38ライトニングの図面を利用したレプリカでエンジンを大型の電動モーターに変えて、実機のライトニングと同等の性能に持っている。

この世界のモーターは第二世界大戦の中期までの一部のエンジンと同じ馬力を生み出す程に高性能になっている。

ライトニングは3機編隊と数が少なかったがその編隊飛行を維持したまま急旋回や急上昇・急降下を行い、P-38特有の逆向きに回転するエンジンという特性を利用した機動を編隊飛行を維持したまま見せるなどの技を披露すると同時にアナウンスから普段の任務は輸送任務もできるように魔改造されたTu-114を使った輸送任務に従事する機長3人組だと言われると観客は驚きに包まれた。

そして曲芸飛行はドーター5機によるダイヤモンド編隊での飛行と2機ずつに分かれて、昔ながら模擬空戦が行われた。

組み合わせはファントム・イーグルの大型機ペア。ラファール・グリペンの小型機ペア。片宮姉妹ペアによる高度過ぎる姉妹喧嘩にベルクトはバトラのIle-44とのロシア機ペアでの模擬空戦だった。

形式は全て同じ方法で5秒以上後方の一定範囲に入られると負けというレシプロ機時代の模擬空戦に現在の空戦を混ぜた物で行われる。5秒背後に居るかミサイルロックオン完了後から5秒ロックオンされ続けるかのどちらかである。

ザイの侵入に備えて武装は積んでいるもののマスターアームは

切ったまま使用する。

進め方は小松基地上空で行き違い、劣位優位無しでスタートと言う感じだ。

まずはファントム・イーグルペアの模擬空戦。

イーグルの力強さと派手さが混じる機動とファントムの緻密さに華麗さが混じった機動のぶつかり合いだった。

行き違うとイーグルは後ろを取る為に急旋回を始める。対してファントムは機種を上に向けた状態で失速ストールを起こさせて、イーグルの機動を狂わせる。

イーグルはファントムの機動についていけずにそのままファントムの前方をパスしてしまう。そんな隙を逃すほどにファントムも若くは無い。

無様に背中を晒したイーグルの背後に喰らい付く。

ファントムの火器管制装置がイーグルを捉えると同時にレーダーがイーグルを捉えようとする。

イーグルも捉えられる訳には行かないとロックオン範囲外に逃げようと急旋回をかけるが、ファントムは機体を必要最低限の機体操作で後ろを飛び続ける。

イーグルは旋回で引き剥がすのは無理と判断して機動を変える。

機体を反転させて、背面飛行になると同時に上昇するようにエレベーター昇降舵を動かす。背面飛行で上昇するように動かせば降下する。イーグルは背面急降下で逃走を図るがファントムは反転と降下を同時に行い、イーグルからレーダー照射を外してしまうが、背後は取り続ける。

イーグルの機動もちゃんとしているが、ファントムの動きはイーグル以上に洗練されている。

その戦いは華やかな機動と呼べるイーグルの機動と研がれた機動と呼べるファントムの機動の戦いでもあった。

華やかな機動というのは無駄がある時も多く、無駄をなくした研がれた機動からは逃れられずに背後とロックオン後の5秒をクリアされ、イーグルの敗北で終わった。

この空戦を観戦武官兼解説者のバトラはこの戦いをイーグルの機動を撃破に効率を割いた機動とファントムは機動を飛行に効率を割いた機動と締めくくった。

ファントムとイーグルの2機が滑走路に接近する為に編隊を組みながら旋回を行っている間に紅の有翼獅子グリペンと黒き突風ラファールが滑走路に侵入する。

有翼獅子と突風が滑走路を走り出すと同時にイーグルとファントムが着陸する。

グリペンとラファールは後ろの2機が着陸したと同時に離陸し、管制塔の指示する様に飛行してからお互いに行き違うと向かい合う様に旋回戦を始める。

2機とも映画の様に翼端から引く2本の飛行機雲が絡み合う様に飛行するが何方がどんな機動と言える程洗練されていない為か先の2機と比べると何処か拙くも見える。

これはJAS39の操縦に独特な機動や何かしらに洗練された機動がある訳では無い操縦者の慧。つい最近まで戦闘機に乗っていなかったブルーランジェも当然ながら操縦者特有の癖も機動も訓練を受けていた訳では無い。

だが、あくまでも拙く見えるのは実戦経験豊富なファントムとイーグルが生み出した特有の機動のぶつけ合いを見た後で且つ、見ているものが素人だからであり、2機の空戦は見るものが見ればちゃんと教科書通りの飛び方に準じており、時折やる回避や敵機を振り切る時にまだ拙さが見える程度の機動で慧とブルーランジェの技術が低い訳では無いという事がわかる。

簡単に言うとメジャーリーグの試合を見てから甲子園クラスの試合を見ている様な物だ。

そんな2機の空戦だが、実戦経験の差が如実に出てくる。

慧の機動にブルーランジェは付いていけない場所や回避機動を起こす際に機体に前準備として傾けてから実際に機動を始めるまでのタイムラグに差があったりと回避機動を重ねる度に徐々にブルーランジェが追い込まれるが、HiMATが可能という利点を活かしてなん

とか振り切っている。

ブーランジェがHiMAT2連続というブーランジェ本人にも身体的にきつい事をして、慧を背後から振り切ると同時に背後に着く。

慧とグリペンも姿を見失ってから背後に居る事をロックオン機能を切っていた所為で発見が遅れ、気付いた時には5秒背後に居座られた事で撃墜判定が出された。

バトラはこの機動を経験で補ったグリペンと性能で補ったラファールと評した。

片宮姉妹の模擬空戦でも、離陸と着陸を同時に行うパフォーマンスを見せて飛び立っていく。

片宮姉妹の機体は両方とも同じ機体で小松基地の自衛隊員は慣れた様な目で見上げ、別の基地や陸上自衛隊の隊員、軍用機に精通する者も驚きの表情で見上げ、一部の人間は外国人の反応の様に狂喜乱舞している。

それは自分達の頭上を落雷の名を称する軍用機。フェアチャイルド・リパブリック社の代名詞にして、名機中名機、神とも呼ばれ。

陸上戦力最大の味方

陸上戦力最大の仇敵

粉碎の復讐者

破壊神の神具

破壊神の加護

破壊神の息子

とも呼ばれる機体。

A-110攻撃機の2機だった。

A-110は軍用機に精通する者なら名前を聞いただけでわかると思うがその名通り攻撃機……つまり、陸上戦力の撃破(A-110を使用した場合は撃滅)が任務で、決して空戦をする軍用機では無い。

だが、A-110を見た民間人達にバトラが叫び、一部の人間が叫ぶ返す。

何の為に生まれた!?

――A-110に乗る為だ!!

何の為にA-110に乗るんだ!?

ーゴミを吹っ飛ばす為だ!!

A-110は何故飛ぶんだ!?

ーアヴェンジャーを運ぶ為だ!!

お前が敵にすべき事は何だ!?

ー機首と同軸アヴェンジャー!!

アヴェンジャーは何故30mm何だ!?

ーF-16のオカマ野郎が20mmだからだ!!

アヴェンジャーとは何だ!?

ー撃つまで撃たれ、撃つ後は撃たれない!!

A-110とは何だ!?

ーアパッチより強く!! F-16より強く!! F-111より

強く!! どれよりも安い!!

A-110乗りが食う物は!?

ーステークとウイスキー!!

ロブスターとワインを食うのは誰だ!?

ー前線早漏F-16!! ミサイルが終わればおケツをまくるツ

!!

お前の親父は誰だ!?

ーベトコン殺しのスカイライダー!! 音速機とは気合いが違

うツ!!

我等空軍攻撃機! 機銃上等! ミサイル上等! 被弾が怖くて

空が飛べるか!! 我等空軍攻撃機! 機銃上等! ミサイル上等!

被弾が怖くて空が飛べるか!! 我等空軍攻撃機! 機銃上等!

ミサイル上等! 被弾が怖くて空が飛べるか!!

こんな事をしている内に2機のA-110は空戦を始めていた。

先程までの機体の空戦とは違い速くても800km/h前後の為に低速で派手さこそ低減している様に見えるが、低速であるがこそゆっくりと見る事ができ、何処か騎士の決闘の様な趣が感じられる戦いが演じられ、観客達を飽きさせない。

更に地上に主翼の端が知ってしまう様な高度で腹を見せ合って行

き違ったりと観客達を沸かせる。

だが、決着は付かず時間切れという結果で終わってしまう。

バトラはこの空戦を共に同等の実力の持ち主故に良く起こることとして片付けた。

そして、同じ様に同時離着陸を行い空に飛び上がった機体に観客達が興奮を隠せなくなる。

伝説の試験機S u r 47と不運の不採用機I l l 44が同時に飛び立ったからだ。F ー4やF ー15以上のサイズに同じ大きさの戦闘機が2機同時に離陸するだけでも絵になる光景だが、バトラとベルクトはそこに機体が浮き上がり、少し上昇するとランディングギアを出したまま推力偏向ノズルを動かして、ロールしながら斜めに上昇。

1回転半すると垂直に上昇し始めると同時にギアを格納する。バトラはクルピットしながら失速降下を行い地面との差が10m程になると急加速してベルクトと距離を取り、所定の高度で行き違い空戦を始めた。だか、空戦を始める前の機動が準備運動だったと思知らされるのは空戦が始まってからだだった。

わざと後ろを付かせてカウンターマニューバで後ろを取り返し、ベルクトがブレイクすればわざと引き剥がされ、ベルクトが後ろに付こうとすれば均衡する様に動き、わざと長期化させる。ある程度すればわざと背中につけさせ、カウンターマニューバをするが、ベルクトもそれに追従する様にカウンターマニューバを繰り出す。コブラ機動からノンタイムで機体の腹側から後ろ向きで回り、背後に付く。ベルクトもクルピットで背後に回り込もうとするが、回られた瞬間にバトラはコブラ機動からの側転する様な機動で右に逃げる。

ベルクトもロールしながら右旋回することでリーダーの範囲から逃さない様に動くがバトラは機体が上を向いている内にアフターバーナーで推力を手に入れるが背中から倒れる様に回転させてベルクトの背後に付くがベルクトは加速したと同時にエルロンロールで追いかける為に加速していたバトラはオーバーシュートしてしまう。

バトラは即座に旋回下降で逃亡を図る。ベルクトもそれを追い掛ける。

試合時間も残り僅かにして、ベルクトがロックオン3秒経過というところでバトラが行動を起こした。

バトラはカウンターマニューバを行い、ベルクトの上を通って背後に回った。

ここまではただのカウンターマニューバだが、背後で3秒だけ水平飛行した瞬間にロックオン5秒という条件をバトラが満たし、勝敗が決した。バトラが行ったのは普段のカウンターマニューバとは違うカウンターマニューバだった。

通常は機体のコブラ機動で起こし、ノズルの下を後方の機体を通り、90度上を向いた状態の機体を背中側に倒して1回転させながら背後に回るのだが、今回のバトラの機動は普段よりも離れた状態でコブラ機動を行い、推力偏向ノズルを利用して普段よりも機体が背中側に倒して背面飛行の姿勢で後方の機体を通り抜けさせようとする。後方の機体がバトラの背面を通り抜けたと思った瞬間にバトラは推力偏向ノズル機体の腹側からから推力カッツをしながら背面にずらし、背面になった瞬間に推力を最大出力で噴射。機体は急激に回転し後方の機体が下を通り抜け様とした瞬間にはレーダーのロックオン可能範囲に存在し後方の機体が進むに合わせてバトラの機体の機首が動くのでロックオンが切れなかった。

簡単に言ってしまうえば、普段のカウンターマニューバは背中合わせで入れ違い、敵機後方で前を向くという物だが、今回のカウンターマニューバは敵機の背面で宙返りを行い、バトラは敵機の背面と自分の機首を向けた状態に入れ違い、ロックオン範囲から外れない角度で後ろに回ったと言う機動だ。

この機動を見た全員は人間辞めてると評した。

実際問題この動作の為の機体操作の精密性もさる事ながらそのGが9Gを容易く超える為に強化機体に乗るアニメかバトラにしか耐えられない機動の為、的を得た発言である。

バトラの変態機動の所為で後の曲芸飛行はブルーインパルスの飛行でさえも味気の無い物にしてしまったが今まで以上の来場者数と好評で終わった。

余談だが、バトラとファントムの売り上げ競争はバトラは一部PM Cでは、シミュレーターとの代わりとしても使える程に出来の良い『ACECOMBAT リベレイション スカイ(解放の空)』というアーケード版エースコンバットと一緒にプレイしようという必殺技を使用する。

これは少し改造すればシミュレーターとしても使える程に出来の良いアーケード版エースコンバットをケーブル接続で置いてのみ可能とする100対100対戦をバトラ込みで行うという物で、機材はスタートボタンを押せば幾らでも動く様に改造された物で参加料100円という安さで行なった。一部の機体は離れた立ち入り禁止の格納庫に置いてベルクト・片宮姉妹とも行えるというイベントタイムには待ち時間150分を記録。更に飛び込みで現役自衛官パイロットやウイングマーク持ちの小松基地司令との超本格的飛行機ごっこが出来ると有り、ファントムとの売り上げ合戦では6倍の大差をつけて勝利した。

航空祭の片付け終了後にファントムはイベントタイムを外して計算したがそれでも1.5倍の差が有り、orz状態になった。ベルクトは良い経験になったとバトラに感謝していた。

特殊作戦 狗鷲は消えた白姫を知る

「え？ バトラの初めての僚機だった人の事を知りたい？」

誰もいない空中管制機の機内でグレアムに告げたベルクトの言葉にグレアムはついつい、オウム返しをしてしまう。

ベルクトはそうですと無言で頷くだけだった。

グレアムはベルクトが何故、知りたいのか？ どうして、自分に来たのかを察して、溜め息を1つ吐く。

グレアムは吐き終わると周囲を見渡し、誰も居ない事を確認してから口を開いた。

「そうですね……あれは……」

グレアムの口から思い出される様に話し出された。

あれはバラウールという巨大電磁投射砲の破壊作戦が立案されてすぐでした。

各地でヴァラヒアというテロ組織と同調してなのか、各地で様々なテロ組織が活動を行った所為で、実力がまだ不足気味だったMS社の部隊は少なく無い被害を被っていました。

本社はバラウール破壊作戦に起死回生を掛けて、様々な場所に居た部隊に合流の命令を出し、現地で部隊再編が行われました。

私達の部隊にはバラウールへの直接攻撃と制空を行うという任務の性格から攻撃機乗りの少女が1人来ました

はい。お気付きだと思います。

バトラが持った。初めてのウイングマン、サーシャ・V・ヴァクニアでした。彼と彼女は隊長の『互いにまだ良くわかってないでしょ？ 一緒に過ごす時間を多くしなさい』と言うアドバイスを聞いて、2人は良く一緒に居ました。

お互いに部隊仲間を失って傷心になってましたから、傷の舐め合いでもあったのかもしれませんが。

それはもう、寝食を共にすると言う言葉を体現していました。

同じ部屋ですか？

はい、寝てました。テントの数が少なく、男達は基地内のソファや段ボールで寝てましたけど。

経緯ですか？

サーシャが段ボールで寝てたバトラを説得して同じ部屋で寝かせたんです。今、思うとその時からサーシャの……バトラを見る目が仲間以上の物になっていた気がしますね。

続けますね。

それからですね。風物詩が生まれたのは。

朝起きたらいつもサーシャがバトラと一緒に不機嫌な顔で飲食スペースに朝食を取りに来るんです。

これもバトラを遠からず想っていたからでしょうね。

そこからは訓練は勿論ですが、整備や補給も整備士に混ざって2人も一緒に作業してました。機銃への弾薬補給とか位でしたけど。スクランブルも中佐の計らいで2人一緒に実戦を経験したりと作戦に向けて2人は絆を深めていきました。

僚機として人として、仲間としても……勿論、サーシャは一方通行ですが、男性としてもバトラとの関係を深めていきました。

2人が出会ってから数週間でしょうか。ついにバラウール破壊作戦。作戦名【首長竜討伐】が発令されました。

我々の戦闘機隊は4機の内2機を護衛兼制空権確保要員に残りをバラウール直接攻撃要員に振り分けました。

バトラとサーシャは機体が攻撃機と言う事でバラウール攻撃要員として参加しました。

作戦は簡単でした。

地上攻撃部隊の第1波と制空権確保専門の部隊がバラウールまでの道中に居る敵の撃破。第2波地上攻撃部隊がバラウールへの攻撃を、その護衛の戦闘機部隊が取り逃がした航空機を倒すと言うものでした。

第2波だったバトラとサーシャは足の遅い機体や回避行動が遅れた機体は撃墜されながらもバラウールを目視範囲に捉えました。

その瞬間に電子妨害が発生。電子妨害を無力化する為に各機が散開しました。

結果的に言えば、電子妨害は無力化し、バラウールは破壊できました。サーシャを犠牲にしつつもですが……

そこからはベルクトさんも知っている通りの結末です。

「何かありますか？」

グレアムは天井を見ていた目をベルクトに向け、マグカップに注がれたコーヒーを飲む。

ベルクトは自分に注がれたカフェオレに映る自分の顔を見ながら、口を開いた。

「バトラさんは今も……」

その先は紡がれなかった。

ベルクトの心がこの先を紡ぐ事を拒否しているかの様にその喉と口は動かない。

グレアムはもう一口コーヒーを飲むとカップを置き、目を瞑った。

「本人に全て終わってからザイが出現する間のほんの束の間に聞いてみました。彼は『無念も後悔も無い……そう言ったら完全な嘘になる。でも、納得はしている。戦争だったから、遅かれ早かれ死ぬし、死に別れる。死に別れた後に最悪な事を知った、気付いたと思っっている』その後は死んで行った仲間達への後悔や無念を話してくれました」

「やっぱり……」

「ですが、死んだ人間にいつまでも固執するのは、死んだぞいつが安心出来ない。みたいな事も言っていましたね。彼の中に折り合いが付いているんだと思います。でも、やっぱり話したがない内容ですが」

ベルクトは俯きながら、基地内を歩く。

悲しい過去なのは知っているが、やはり聞くとその悲しみは予想以上に深いものだった。

思いを寄せる人物には笑っていて欲しいと思ってしまうのは、女のエゴなのか……そして、自分もヤリツクに思いを寄せていた。

「それでも、バトラさんは……」

好きな人と死に別れた後で恋をしたとしても、それを理由に断る事はしない筈だ。

「呼んだか？」

「へ？ え、え……え？ え？」

「そんな驚かれても、困るんだが……」

後ろに困惑するバトラが立っていた。

「えつと……聞きました？」

「何をだ？ それより元気が無いな。ヤリツク絡みか？」

その言葉にベルクトはどう言おうか迷ってしまう。確かにヤリツク絡みだが、大部分はサーシャとバトラ絡みだ。

言葉を探している内にバトラが語り掛ける。

「ヤリツクも言ってただろう。自分なりの幸せをつて、想う事は悪

い事では無いが、囚われるのは良くないぞ」

その言葉にベルクトは決心がついたのか。口を開く。

「サーシャさんに付いてはどう思っているんですか？」

「聞いたのか。うむ……そうだな」

考える素振りをしながら空を見る。

空には街の光に飲まれて見えない星があるもののしっかりと星の姿を見る事が出来る。

バトラにはその光景が思い出せる人物と思い出せない人物に分けて見えてしまった。

「どうなんだろうな。あいつのスキンシップやお願いを嫌だと思つた事は少なかった気がするな。だが、それが友情なのか愛情なのかは分からない。あいつをどう思っていたのか……あいつの声が聞けれ

ばわかるかもな」

そう言つて、諦めた様な笑みを見せるバトラにベルクトが抱き着く。

「私を……私をサーシャさんとして、扱つても良いですから、笑つて下さい」

涙声で訴えるベルクトにバトラの手が伸びて、頭を撫でる。

「次、そんな事を言つてみる。はっ倒すからな。でも、ありがとう。そこまでの気持ちを抱いてくれて、これはお礼だ」

そう言つて、バトラはベルクトの頬に口付けをする。

「へ……」

ベルクトはそんな声を上げて、フリーズしてしまう。

だが、ベルクトの顔は恥ずかしさと嬉しさに綻んでいる。そんなベルクトを見て、バトラが愛しそうに笑みを浮かべる。

「外見は似てるが反応は似てないな。サーシャはこんな時は嬉しいが何か不満と言う表情をしたんだがな」

バトラはそれが好意からの表情だったと失ってから気付いた。

そして、同時は知らなかったが、頬へのキスの意味も強ち間違いは無い。だからこそ、サーシャは不満に思うと同時に嬉しかったのだろうと言うのは今になって分かった。

「明日も仕事だからな、もう寝るぞ」

「へ？ あ、ちよつと待つて下さいー！」

歩き出したバトラをベルクトが追い掛ける。

追い付いた辺りでバトラが笑いながら、冗談めかして話す。

「こっちは男子寮だぞ？ あ、一緒に寝たいのか？ 俺はベルクトみたいな可愛くて美人相手なら全然、良いぞ」

バトラの言葉に沸点を容易く超えたベルクトは顔を真っ赤にして否定すると走り去るように自室へと帰つて行つた。

その光景を見たバーフォードは微笑ましく思いながら、カノープスへと乗り込んで行つた。

バーフォードが見ていた事には気付かずバトラはもう一度だけ夜空を見上げて、頬へのキスの意味を思い出していた。

だが、暫くすると歩き出して自室へと戻り、今日を終えた。

頬へのキスは親愛と好意と満足感

特殊作戦 バトラの義妹の過去

夜の小松基地格納庫に3人の人影があった。

「え？ 私達が兄様と呼ぶ理由ですか？」

陽光を弾く程にツヤのある黒髪を微風に舞わせる詩苑が微風に雪の様に白く美しい長髪をなびかせるベルクトに問い掛ける。

ベルクトがはいと頷いて見せる。

詩苑は詩鞍に視線を向けて話して良いか聞くと陽光を吸い込む程に美しい黒髪が舞わない様に抑えていた詩鞍が口を開ける。

「話しても良いですが、大切な思い出であると同時に思い出したく無い思い出でもあります。訳を聞いても良いですか？」

ベルクトは言葉を考えているのか少し考えると言葉を並べ始める。

「私もバトラさんは尊敬していますが、詩苑さんや詩鞍さんのは少し違う気がして……」

「……お話ししましょう」

私達がお兄様と出会ったのは戦場でした。

驚かれていますね。まあ、出会い方と言えばあなたの方が全然、良いですよ？

それに戦場で会っていたと知ったのはずっと後ですが、話を戻しますね。

お兄様と出会ったのは戦場で、敵同士でした。

ネバダ州の廃空港に集結していた私達、ゴールデンアクス計画私設軍のメンバーでA-110Aに乗って、地上攻撃を担当していました。

ああ、MS社に最初から所属していた訳ではありませんよ。強いて

言えば、MS社に寝返ったと言った方が良いですね。

どうしてテロリストの仲間だったのかはヴァラヒア事変の時まで遡ります。

ヴァラヒアは最初に第七艦隊と航空自衛隊の合同訓練に参加していたMS社の部隊を襲撃した後に日本の東京を狙い、その後には新島と伊豆半島方面からの航空戦力と房総半島からの陸上戦力による挟撃が行われました。

兄様は防空戦に参加しましたが房総半島からの陸上部隊上陸を許してしまい私達はヴァラヒアの拉致にあいました。

その後は酷い物でした。

少年兵にする様な洗脳や教育を施されて……

「詩鞍。辛いならこれ以上は話さなくて良いわ」

顔を青くして震え始めた詩鞍を気遣い詩苑が話し掛けると少し気分が悪くなったのか木箱の上に横にさせる。

話は詩鞍が引き継ぐ。

深くは言いませんが、人間として扱われる時があった言った方が良いくらいの扱い方でした。

それでも、私達に脱走の選択を取れる余裕はありませんでした。

飛行機の操縦方法は知っていても、目的地への飛び方を知らない。自分達が飛ぶ頃には戦線は太平洋から欧州に移っていて、日本までの飛び方がわからず、洗脳されて自殺は出来ない、それでも自我が辛うじてあるという生き地獄の様な日々を過ごしていました。

兄様が核ミサイルサイロの破壊をした時は私達はトルコの小基地に居た私達は残存兵の人達に連れられてネバダ州の廃空港へと移動させられました。

其処ではヴァラヒア以上に酷い扱いを受けながら過ごしていました。

そんなある日に兄様達……アンタレス隊が攻撃を仕掛けて来ました。

地上部隊を連れていたMS社に私達はA-10Aでの出撃を命令

されて攻撃に行く途中で先行していた兄様の機体が放った機関砲にエンジン2基を同時に破壊されて飛行不能にされて、詩苑も旋回しようとした瞬間にロケット弾を尾翼に喰らって撃墜されました。

その後にごれ位経った知りませんが、詩苑をコクピットから引きずり出してから荒野を彷徨って居ると低空飛行で兄様の乗る機体が近づいて来ました。

これで死ぬると思った私達は其処では気絶してしまいました。

でも、闇の世界で聞こえたのは轟音と誰かに揺さぶられている様な感覚でした。

目を覚ました私達の目の前にはまだ、白色が混じった黒い髪の兄様がいました。

「え？ バトラさんの髪って白いですよね？」

「ストレス性の白髪ですよ。まあ、その話はおいおいするとして、私達の話が続けます」

兄様は私達に色々な事をしてくれました。

ヴァラヒアや私設軍にいた時には考えられない待遇をする様にお願いしたり、契約や交渉したりしてくれました。

因みにその時の呼び方は貴方からバトラさん、バトラさんからバトラ様でした。

思えば、あの時から……脱線しましたね。

その時には徐々にヴァラヒアや私設軍で負ったトラウマも治って来ていたんです。それで、恩返ししたいと言いました。

私達は男性に恐怖を覚えていたので嫌な事をされると思っていましたけど、兄様からなら嬉しいだろうなって思っていました。けど……帰って来たのは予想外の言葉でした。

『気にするな。お前達の過去を調べたが、こつち側に居るべき人間じゃない。恩返しなんて考えずに向こう側で生きて行く準備をしろ』私達は不運で兄様と同じ人殺しの道に行っただんです。それを知っているからこそ、戻れる今のタイミングで戻れと言っていました。

はい。優しい人なんです。

その2日後にゴールデンアクス事件もMS社の手により白日の元に晒されて集結。各国で起きていたテロも沈静化して行きました。

じゃあ、なんで私達がここに居るのかですか？

兄様を放って置けなかったというのが1番の理由です。

最終決戦前の最後の巨大兵器の撃墜作戦で2番機と3番機を喪失。志願した私達を3番機、4番機としてアンタレス隊は再編されましたが……最終決戦でゴールデンアクス私設軍のエースパイロットとの空戦で私達は退避して1番機と兄様が4機編隊のエースに挑み……兄様を残して1番機は撃墜され、発狂した兄様にエース部隊は立て続けに撃墜され、最後のエースパイロットもコクピットを30mmで粉々にされて、撃墜されました。

「それって……復讐を果たしてしまったんですか……」

「ええ、兄様はその場で復讐を果たしましたが、その後は酷い有様でした」

詩苑が木箱から起き上がりながら話す。

ベルクトが意識を向けたのを確認すると詩苑が語り出す。

復讐を目的に生きた人間は復讐を果たすと空っぽの人間になる。それは復讐のみを追い求めて大切な物を新しく得なかったから、友情や愛情に囲まれて、復讐の刃が鈍るのを防ぐ為。けど、大切な物を失って直ぐに復讐を果たした者は生き方を失う。

生きる理由が出来る前にその理由になり得る物を捨ててしまうから。

最終決戦が終わって世界が平和になったのに兄様の世界の時計は最終決戦の時から今も動いていません。

「今も動いていないって……どういう事ですか？」

「兄様は懐中時計はなんですけど、1番機が撃墜された瞬間に懐中時計が電池切れを起こして、その後から変えていないんです」

「どうして……」

「わかりません。兄様は何もしていない時はその懐中時計をいつも

見ているんです。動かなくなった懐中時計の文字盤をずっと見ているんです」

悲しい雰囲気漂う中で詩鞍が語り始める。

生きた屍の様な兄様を見て、兄様は強い人間なのだと思います。強くなるには2つある。人間のまま強くなるのと人間で居られなくて弱い化物になる事だと。

数少ない大切な物を失った兄様は正しく、其処にあるだけの物で私達は恩返しとして兄様の生きる理由になれないか色々努力しました。呼び方も家族を失った様な兄様に家族を感じられる様にと思っただけです。

「それでネグリジエ姿で寝室に突貫してたのか？」

突然の男性声に肩を触れてた感触を感じた詩鞍。

「ひゃあ!! 兄様! いつから其処に」

「最後の俺を兄と呼び出した理由から」

そう話すと目に見えて安堵の表情を浮かべる詩鞍。

ベルクトはバトラに質問を飛ばす事にした。

「因みにどんな事を？」

「さつき言った夜這いまがいな行為以外にか? 妙にベツタリだったり、甲斐甲斐しく世話やこうとしたり、何処か連れ出そうとしたりだったかな?」

「バトラさんはその時……」

「鬱陶しい放って置いてくれって奴だったか……」

バトラが嬉しそうに笑う。

「こいつらが俺が死にそうで、何処か遠くに行きそうで、側に居て欲しい、生きたいと思って欲しい、その為の理由に私達を使って良いとまで言われてな。嬉しかったよ。自己嫌悪の行き着くところまで行っていた身としては」

「やっぱり、依存してたんですか?」

「バツチリしてたな。まあ、1年位したら生きる意味を見つけたか

らそれ以降の依存はないな」

詩苑と詩鞍が聞こえない声でそのまま依存してくれれば良かったのにと恨み節を送る。

「お互いに助け助けられて、今の関係だ。今は辛い時を助けてくれた大切な戦友だよ」

そう言った瞬間に詩苑と詩鞍がバトラの両腕に抱き着く。

バトラは両腕に感じる柔らかい双丘に顔を赤くする。

「本当にそれだけですか!」

「あんな激しくしたのにですか!」

「何処まで行っただんですか!?!」

「ベルクトが考えている様な事は無い!」

ベルクトが前から抱きついて来て精神的にピンチに陥っていると背中にファントムが張り付き、更に精神事情が悪化したバトラが助けられたのは精神が切れる5秒前にバーフォードによる一喝だった。

その後は5人仲良く正座で説教を食らったがバトラは終始心の中で突っ込んでいた。

俺は被害者だよ?

特殊作戦 MS社の階級小話とバトラの過去小話

「そう言えば、PMCにも階級ってあるのか？」

シユミレーターの突然の故障により訓練を一時繰り上げて、小休止をしていると慧からこんな質問がバトラに飛んで来た。

バトラはミネラルウォーターを喉に流し込んでから口を開く。

「民間軍事会社と言えども、階級があった方が楽だならな。あるぞ」
そう言われると気になるのが人間の性。

慧は好奇心に駆られて階級を聞く。

「特務大尉だ。でも、戦時待遇と言うか戦時階級でな。平時だと特務准尉になる」

「うん？ 自衛隊だと何になるんだ？」

「自衛隊に特務階級は無いからなく。一尉とかかな？」

「特務って何だよ」

「武功を挙げて階級が上がった叩き上げ兵の事。少しMS社の階級環境について少し教えてやるよ」

MS社では何かしらの理由で保護された。テロ組織に利用されて社会復帰が難しかったり、借金のツケ、元テロリストや海賊業から足を洗うなどの理由から入った非正規ルートで入社した社員が三等兵から一等兵に配属される。

昇格は勤務年数により決まるが三等兵は3年で二等兵に上がり、二等兵は5年で一等兵に上がる。

一等兵からは一定数以上の資格を得ると上等兵と言う階級へと上がれる。

上等兵には上記の条件が当てはまる社員の他に正規ルートで入社し、研修として5年間一等兵として勤務した社員も無条件で上がる事が出来る。

そして、正規ルートから入社した社員はこれらの三等兵から上等兵までの社員を指揮する現場指揮官として兵長と言う座に付ける。

因みにバトラはヘッドハンティングと言う事と実戦経験有りと言う事で特例条件を満たしたので上等兵からスタートしている。

そして、上等兵か兵長の階級で試験をクリアするか指定資格を一定数以上の獲得で伍長へと昇格出来る。

そして、伍長から働きや試験により軍曹、曹長へと昇格する。

「まあ、これが俗に言う現場職での限界だな。曹長以上の昇格は現場職ではこれ以上は望めない」

「じゃあ、マイケルさんとかとバトラは如何なんだ？」

「それはまた、別の話でな。そうだな……学校の入り方でも一般入試と推薦入試ってあるだろ？ MS社も正規ルートでの入社には複数ある」

外部からの楽なルートとして、バトラのようなヘッドハンティングによる入社と社内推薦による入社があるが、前者は曹長までが限界だが、後者や元々の正規ルートに管理職員候補入社試験と言うルートで入社すれば曹長以上の昇格が見込める。

これは俗言う階級が高い方がやり易い仕事と言う奴で決して現場と無関係と言う訳では無い。

主に司令官やオペレーターなど誰かに指示を出したり、何か言ったりする事が多い仕事に就きたい者達が受ける試験だ。

このルートだと研修時で曹長。5年間の勤務の後に准尉。資格や試験のクリア、働き次第で大尉まで上がる。

そして、この道で入って大尉までなった社員で、佐官以上の社員から推薦状を貰い、合格率10パーセントの試験をクリアして少佐の道に入る事ができる。

そして、そこからの昇格は評価と推薦状と回数制限ありの試験をクリアして昇格する。

ただし、ヘッドハンティングでは前居た組織での階級や働きにより階級が変動する事がある。

そして、将官からは前任者に託されるか正規軍でそこまで上り詰め始めて就く事が出来る階級だ。

逆に言えば託されるような人物であれば、三等兵からいきなり大將になったりも出来る。

「最後の話が衝撃的過ぎるわ」

「俺もな。で、特務って言うのは戦時中に勤務した人間で武功を挙げた人間や勲章が与えられるような事をした社員に与えられる。まあ、勲章制度があるが基本的に勲章よりもボーナスを欲しがらるからな」
普通の軍隊らしからぬ所があるのもPMCの面白いところなのだろう。

普通なら勲章を欲しがらる(一部の正規軍人以外)がMS社は勲章よりも臨時ボーナスが欲しいと叫ぶのだ。

「俺は上等兵からの昇格はヴァラヒア事変中。つまりは武功を挙げて叩き上げだから特務軍曹だ。兵長は上等兵からの出される管理職だから、飛ばそうと思えば飛ばせる」

そこまで聞くと慧の中で新たな疑問も生じた。

「特務が付くといいい事ってあるのか？」

「給料はあっても無くても変わらないが、勤務地が基地内じゃなくて現場で固定されるな。軍曹からは基地内での書類仕事が発生して、階級が上がれば基地内での勤務時間が増える」

「良いことなのか？」

「俺みたいな事務が出来ない奴には良いことだな。M42飛行中隊で特務なのは俺だけだ」

その発言に苦笑いでしか返せない慧は話題をバトラから方宮姉妹へと変更する。

「あの2人の階級ってなんなんだ？」

「あいつらか？ 確か戦時階級で兵長で、平時が上等兵だったか？」

「兵長ですよ。試験をザイ襲撃直前に合格しましたからね」

突然の女声にバトラが飛び退く。

「なんだよ。詩苑か。兵長試験に合格したのか」

「詩鞍ですよ。報告書見なかったんですか？」

「ああ……覚えて無いだけだ」

「酷い……お兄様にとっての私はそんな存在なんですな……」

如何にもな声と体勢で泣き始める詩苑に慧とバトラが反応に困っている。女性自衛官達がヒソヒソと話し始める。

「お前の外観でそういうのされると困る。あと、俺が請求書と武器

関係以外の書類チェックはそれなりなのは知ってるだろう」

「確かにそうなんですけど……もう少し部下に関心を持って欲しいです」

「関心が無かったら、部下にしないし訓練も付き合わないさ。俺が求めるのは階級では無く現場で動ける実力重視だ」

詩苑はそれに複雑そうな視線を送る。

関心はあるがそれは仕事仲間だからだけでそれ以外の関心は無いとも受け取れる発言に詩苑は視線だけで訴えるがバトラは何処吹く風で受け止める。

「まだ、あるか?」

「少尉試験は受けないんですか?」

いきなりの詩鞍登場にバトラが若干だが跳ねて、視線を右往左往させる。

特務准尉になれば少尉への繰り上がり試験は受けられるのだが、バトラはそれを受けようとしていなかった。

勿論、それには理由があった。

「いやな……ほら、叩き上げて感覚が多いじゃん。なんでそうなるのかを理論的に説明出来なくて……」

「訓練中はできてるじゃないですか」

「多少の感覚がある奴なら通じるんだよ。試験はそうはいかないからな。声が簡単だがペンは難しいと言う奴だ」

「……それ以外にもあるんじゃないんですか?」

バトラが溜息を吐く。

「隠せないな」

「ちゃっちゃと吐いて下さい。同じ兵長仲間からは特務准尉が隊長の部隊とか言われてるんですから。小隊ならまだしも中隊なら少尉にはなって下さいよ」

「馬鹿野郎。俺の戦績だったら少尉に上がった途端に大尉コースだ」

万年上等兵が武功だけで特務准尉まで上がった為に非正規入社組には英雄的扱いのバトラだが、正規ルート組の社員にとっては繰り上

がりで隊長になったとしても体面的には少なくとも少尉になって欲しいと言うのはある。

だが、バトラは試験が面倒、少尉になった瞬間に大尉コースと言う事で受けたがらない。

「まあ、兎に角だ。これ以上の昇格は無しだ。上がりかけたらバーフォードをブン殴ってやる！」

「バーフォード大佐を殴らないで下さい。早く吐き出して下さい！なんで受けないのか」

「大尉になったらあの人の同僚になっちまう。俺はあの人の後ろを飛びたいんだ。大尉になったら真正銘でこの隊を率いることになる」

詩鞍が首を傾げる。

「アンタレス隊の隊長は未来奈さんだ。俺は臨時隊長。あの人の階級は特務大尉。俺の入社方法だと試験を受けないと尉官や管理職には就けない。ついには大尉になるから特務大尉より偉くなっちまうからな」

「今でも未来奈さんの部下なんですわね」

「ああ。あの人が居たからここに居る。お前達に会えたんだ、彼女には感謝しているし最初の恋心を抱いた人だから……」

その言葉を聞いて、詩鞍と詩苑が驚く。

「まさか、お兄様が初恋をしていたなんて……」

「正直言って、愛を知らない方かと……」

「お前ら……はっ倒すぞ！」

詩鞍と詩苑が可愛らしい悲鳴を上げながら追いかけてっことをしている間に機材は直ったが訓練再開は数時間後だった。

特殊作戦 英国での絆

ミッドウエー島のMS社倉庫で面接を終えたベルクトがハリアーに乗るバトラを見つけて声を掛ける。

「ハリアーですか？」

「ああ、シーハリアーだけだな」

コクピットから降りたバトラがベルクトに近寄るとベルクトが更に続ける。

「この機体も買ったんですか？」

自前の機体を持つベルクトとしては戦闘機を買うと言う行為が新鮮に思えるベルクトが声を掛ける。

「これは貰ったんだよ。話してなかったか？ 英国王室から贈られた物だって話」

「……えっと……何処か聞いた様な聞かなかった様な……」

「まあ、思い出話で話してやるか。その辺りで座って話そう。長いからな」

「本当に参加しなきゃダメですか？」

バトラが机に突っ伏せながらバーフォードに聞くとバーフォードは呆れ顔を隠す事無く浮かべて、何度か頷く。

「部隊が俺と隊長以外全滅なのにか？」

流石に不謹慎ではないだろうかと前世が日本人だったバトラが呟く。前世はそこまで宗教に煩くない家だったが、流石に身内が死んだばかりの時に祝い事やこう言う式典への参加は如何かと思う所があった。

「英国としては民衆の言葉に押された形だよ。首都の1番辛い時に先陣を切って戦い、首都防衛の立役者の1人である君に勲章の1つも無しかと言う感じだな」

ヴァラヒア事変とゴールデンアクス事件が終結して暫く経った頃に英国から王室主催のパーティーに参加して欲しいと言う要請があったのだ。しかし、此れはバトラ達に英国として表立って賛辞を送り、勲章を授与する為の口実でも有った。

「俺たちは謳われざる兵士だ。本社が身元を隠したのもバーフォード中佐は知ってるでしょう？」

「そう言えばそうだが、こちらも英国にはお世話になってるんだ。王室限定のパーティーには出てくれないと……」

「なら、勲章だけ郵送すれば良いだろ？」

バトラの言葉にバーフォードはまた頭を抱える。

「あのな。英国の国民からすれば君は謎の多い英雄なんだ。そんな英雄の事を国民は知りたいたいと思ってるんだ。彼らの持つ君の情報とはある民間軍事会社の社員と言うだけだ。何処の民間軍事会社なのか、性別はどっちでどんな性格で容姿なのか気になってるんだ」

「隠したのは国際情勢を刺激しない為だろ？」

意味がなくなるじゃないか。それに堅苦しいのは嫌いなんだ」

未だに渋るバトラにバーフォードは『出来れば使いたくなかったんだがな……』と呟くと懐から茶封筒を取り出して、バトラに渡す。

バトラは顔を引きつらせながら封筒を開封して開いたのを確認するとバーフォードが告げる。

「バトラ。君には本社命令でM42飛行中隊全員、並びに護衛として片宮姉妹と共に英国王室主催のパーティーに参加して頂く」

バトラは椅子ごと床に倒れた。

「とても良く似合っていますよ」「はい！ カッコ良いですよ」

アメリカ海軍で言うウェルカムドレスと呼ばれる位置に存在する

MS社制服を着た片宮姉妹がパーティー会場の一角で同じ種類の服を着たバトラに賛辞を送る。

「ハア〜早く終わらないかな〜」

祝い事や宴会などは好きなバトラだが、こう言った礼儀作法に煩い催し物は苦手なバトラはひっそりと溜息を吐く。

こう言った催し物は無礼講の中の礼儀でやるのが一番楽しいと思うバトラにとっては今回のパーティーはつまらない以外の何物でもなかった。

だが、パーティーはそんなバトラを放って進んで行き、バトラの勲章授与が終わるとMS社のお偉いさんと政府関係者の交渉が陰で始まり、そんな影の世界を隠すかの様にパーティー会場の中心では舞踏会が始まり、片宮姉妹は様々な紳士から踊りに誘われ、軽く流すかの様にステップを踏み始める。

オペレーター陣はマイケルが粗相をしない様に目を光らせている。バトラは一瞬だけ横で行われている事を見るとパーティー会場から出て行こうとする。

「どちらに向かわれますの?」

出て行こうとしたバトラに聞き慣れない声の英語が鼓膜を叩く。

バトラが振り返ると目の前には変に飾り付ける様に結う事はせずストレートの薄いプラチナの髪に南国の海を思わせる水色の瞳もした美しい少女が立っていた。

「ん? まあ、その辺りを」

多くは語らずに会場から出て行こうとするバトラだが目の前の少女は手を差し出して来る。

「急を要する用事ではないのでしょうか? 一曲踊りませんか?」

そう言って差し出された手だがバトラは陸の踊りは踊れないからと断ろうとしたが、周りの視線に気付き、首を傾げる。

そんなバトラに踊りを終えた詩鞍が耳打ちで訳を教え始める。

『お兄様。彼女はリリウム・オルコットさん。皇太子のお嫁さんの妹さんです』

その言葉にバトラが吹き掛けるが寸前で思い留まる。

まさかの人物に驚きが隠せないが死地を何度も飛び抜けた頭は直ぐに冷静を取り戻し、詩鞍との会話を選択する。

『この場合は断ったらやばいのか?』

『情報筋では社交界で姿は見せましたがまだ、社交界デビューから1回も踊っていないそうです。さつきまで何人かに誘われてましたが、全て断ってます。お兄様と踊りたいんですよ』

『戦闘機を用意してくれって言ったらどうなるかな?』

『警護に付いている狙撃兵から狙撃が飛んで来ても可笑しくないかと』

それはL115A3で殺されるか踊るか何方か好きな方を選べと状況が伝えて来ていると判断したバトラは1秒未満で見栄より命を選択した。

「下手と言うより出来ませんが一緒に貰います」

「ふふ、無理に合わせる事はありませんわ。体も……」

リリウムに手を引かれながらバトラがダンスホールに出ると周りに居た観衆全ての目に2人が映る。

皇太子の妃の妹であるリリウムにスペシャルゲストのバトラと一緒に踊るとなれば嫌でも観衆の目を引くだろう。

「言葉も、心もですわ」

2人にしか聞こえない声量でそう言いながらニツコリと微笑むと体位を調整させるとリリウムリードで2人が簡単なステップから始める。

「足元を見てると余計に踏み回すわ。相手の目を見てください」

「わかった」

暫くステップを続けると基本と流れを掴んだバトラがまあ、違和感はないがまだリード無しでは踏めないレベルまで行くとリリウムがまた、お互いにしか聞こえない声量で語り出す。

「正直に答えて下さいませんか? 今回のパーティーは楽しいですか?」

「まさか、早く終わってくれですよ」

最初の言葉も心も無理に合わせる必要が無いと言われたバトラは

普段通りに接する。するとリリウムは笑顔を浮かべて応答する。

「賞賛されるのは苦手ですか？」

「そうじゃ無い。ただ、謳われるべき兵士では無いだけさ」

「意外です。男性は皆、謳われたいと思う人ばかりだと思っ
ていましたから」

「勲章より金かシーハリアーが欲しいね」

物欲的ですねとリリウムが語りかけるとバトラも笑みを浮かべてそれを認める。

バトラも理由はどうであれ金欲しさで操縦桿を握り始めたのだから。

「空を飛ぶ……いえ、空を踊る感じはどんな感じですか？」

「うん？ 曲芸飛行の事か？」

「いえ、空中戦の事です」

「意外だ。高貴な身分で空中戦に惚れるとは」

「あら？ 女性は殿方の凛々しくてカッコ良い姿に魅せられる
ものですわよ？」

リリウムの言葉にバトラも面白い事を聞いたと笑うとどう答えた物かと踊りながら思索する。

やはり、空中戦と言うのは言葉で言い表すのは難しい。

「うーん……」

「では、空を飛ぶというのはどんな感じですか？」

リリウムのその質問にも回答が導き出せないでいるとバトラの脳味噌がある情報を開示した。

「確かこの屋敷のヘリポートと格納庫にハリアーⅢが配備されてた
な」

「ええ、万が一の時はそこからハリアーが出ますわ」

「1機拝借するか……」

その言葉にリリウムが面白そうとばかりに笑顔になる。

「まあ、空へ連れて行って下さるの！」

「説明が難しいからな。感じて貰うのが1番だが……」

「是非、行きたいわ。どうしましょうか？」

「普通に出るのは難しいな……ここからヘリポートに近い窓は？」

「ふふ、映画で見た事あるわよ。是非とも映画らしくお姫様だつこで行って欲しいわ。あの窓よ」

そう言つて目で窓を照らし合わせる。ダンスホールから近く、人も少ない場所だつた事もあり、ダンスホールを一周回つた所で丁度曲が終わるとリリウムから追加情報が開示された。

「曲が終わつた後はみんなはどうするんだ？」

「一旦、離れて礼をするものよ」

「じゃあ、その時だ」

そして、例の窓近くで曲が終わり、男女共に離れるのが可笑しく無い瞬間を狙つてバトラが素早くリリウムをお姫様だつこで抱えて窓から飛び出す。

会場は一階と言う事もあつてか特に危険は無く、そのままリリウムを下ろすと手を引いて走り始める。

「ふふ、ドレスが汚れるのも御構い無しに走るのも面白いわ」

「そうか！ 空を飛ぶのはもつと楽しいぞ」

2人は素早くヘリポートに出ると騒ぎを聞きつけた整備士達が立ちほだかるが、リリウムを見つけると全員が含み笑いを浮かべながらハリアーの発進準備を開始する。

彼らはリリウムから空を飛ぶ事とはどんな事か聞かれており、なんとか出来ないかと考えていた所でコレである。更に整備士がバトラがロンドン防衛戦でハリアーの整備をしていた整備士と言うのも後押しした。

バトラは拳銃を引つ手繰ると空き缶に銃弾を叩き込む。

彼らが脅されたと言う言い訳を作る為だ。

「良し！ 頼むぞー！」

「任された！」

バトラがハリアーをヘリポートからVTOLで離陸させると海の方へ機首を向ける。

「取り敢えず、領空内を適当に飛びましようか」

「ふふ、プロにお任せするわ」

リリウムが楽しそうに笑うのを肩越しに確認するとバトラが機体のレスポンスを確認する事も含めて上昇や下降、右旋回左旋回を何回かくる返す間もリリウムの表情はコロコロと変わり、コクピットには楽しそうな笑い声が響く。

「ねえ。クルクル回るのはどんな感じなのかしら」

「クルクル？ エルロンロールにバレルロールか？ 身体を固定しておけよ！」

ハリアーをエルロンロールやバレルロールを休み休み披露するとリリウムはまた楽しそうに笑う。

「楽しいわ。乗馬なんか目じや無いくらい楽しいわ！」

「乗馬は苦手ですね。馬の気持ちや感情が邪魔に思ってしまうんです」

「ふふ、それは確かに難しいわね。でも、それが機械には無い楽しさだと思っわ！」

「言いますね。機械を操る人には見えませんが？」

「ふふ、思っわと言っただでしょ？ 運転や操縦はした事無いわ」

「言いますね！」

バトラが機体を捻りながら旋回したり上昇や下降を行った後にナイフエッジを披露するとリリウムは興奮を隠さずに笑う。が、レーダーがそんな楽しい時間をぶち壊す。

「おっと、追っ手だ。どうする？ 帰るか？」

「あら？ 空戦をする良い機会では無くて？」

「(絶対にエース級だろ！)」

バトラがリリウムの無茶を聞いていると3機のハリアーがバトラを左右と背後にべったりと張り付く。

〈〈ANTARES02！ 今すぐ引き返せ！〉〉

「女性!? 驚きだ！」

「あら？ 女性パイロットは近くに居ましたわよね？」

「正規軍だとまだ珍しいかな」

バトラはリリウムと話しながら通信を3機に入れる。

〈〈ああ、お嬢さん方。お勤めご苦労様です〉〉

〈〈私達が女だとわかったの!? この暗闇で!?!〉〉

〈〈嘘でしょ! なに、MS社のパイロットってみんなこんななの!?!〉〉

〈〈カマかけにハマるんじゃない! もう一度言う! 今すぐ引き返すんだ!〉〉

再度の呼び掛けにバトラがリリウムに『どうする?』と目で問い掛ける。リリウムは『映画だところするんでしたっけ?』と呟きながら首を親指で切る動作をする。

「掴まって、喋るなよ!」

バトラは通信を3機に入れる。

〈〈今宵は良い夜だ。こんな夜には踊りたくなってくる。お姫さんもご所望な事だしな……:Shall we dance?〉〉

バトラが機体をエルロンロールをしながら減速し隊長機の後ろに回るとレーダーをロックオンする。

〈〈ロックされた!? ブレイク!〉〉

「ミサイル持っていないだろが……」

〈〈落ち着きなさい! ミサイルを持っていないわ。誰かがロックオンすれば良いのよ!〉〉

「おー。中々に冷静。これは手強いぞ!」

模擬戦の中でロックオンされたら負けと言うルールがあるのだが、それに気付かされた2・3番機がバトラをロックオンしようとするがVTOL機能で垂直に上昇されレーダーロックオンが切れたのと2番機のコンソールに機銃が被弾したと訓練で知らせる部分が点灯する。

〈〈各機、気を付けなさい! 彼は戦闘ヘリの戦闘を熟知してるわ!〉〉

バトラは上昇したと同時に機首を2番機が通過する方向に予め向けた後に機首を下に向けて通り過ぎる瞬間に訓練モードで機銃を放っていた。

この動きは偶に戦闘ヘリが戦闘機を相手にして空戦する時に見せる技だ。

〈後ろに着いた！〉

3番機がバトラの背後に着いたがバトラは左右に機体を動かしてロックオンされ切れない様に動き始める。

そして、隙を見て機体を車のドリフトの様に動かし、射線から逃れながら相手の側面を飛び、機銃で撃破判定をもぎ取る。

〈なんて言う動きを！〉

隊長機が迫るがバトラはVTOL機能を使って機首を向けるが隊長機も垂直上昇で機銃の攻撃を回避する。

〈貫ったわ！〉

そこから背後に素早く回り込んだ隊長機にバトラが薄っすらと笑う。

〈中々やる。だが……〉

〈コレで勝ち……どこ!?〉

バトラは機体をループさせて、背面になった瞬間にノズルを動かして機首の方向を無理矢理に変えて、背面飛行のまま落下、行き違いに機銃を放ち、撃破判定をもぎ取る。

〈まだ、常識に囚われ過ぎている〉

バトラは背面飛行から戻ると海面近くでVTOLに移り、3機が待つ高度まで上昇する。

〈燃料が丁度いい、言われなくても帰るさ〉

「そんな事が有ったんですね。と言うか誘拐紛いな事をした事あるんですね」

「まあな。その後はバーフォード中佐から殴られたけどな」

「当然の流れですね。じゃあ、この機体をその時の？」

「まさか、アレはⅢでこっちはⅡだよ。こっちに來てから魔改造し

たからロイヤルより飛ぶぞ」

ベルクトが『純正のままだったらもう、海の藻屑ですよ』と笑う。

「そう言えば、ザイの初撃墜はハリアーだって聞きましたけどバトラさんですよ？」

「もう1人同じ日に撃墜記録出してるんだよ。俺を追撃したハリアーの隊長がな」

「あ、訓練したんですね。迷惑掛けた謝罪で」

「なんで、わかってまうかな」

「バトラさんがわかりやすいんです!!」

時刻はベルクトとバトラが話している時間。何処かの海の英国軽空母の一室。

「クシユン！」

「隊長？ 風邪ですか？ 艦内感染とか止めて下さいよ」

金髪の女性がくしゃみをすると茶髪の女性が語り掛けるとティツシユで鼻を拭いてから金髪の女性が話し始める。

「誰かが私の噂話してるのよ」

そう話すと同時にザイを確認した事を示すサイレンが鳴り響く。

「ザイが出たわよ！」

黒髪の女性が2人を呼びに来たのか扉を勢い良く開け放つ。

「早く行くわよ！」

「はい！」

そう言って、3人が出て行った部屋の中では、扉が閉まった風圧で動いたコルクボードが有り、リリウムをセンターにバトラと先程の女性が写った写真がラミネートされ、写真を傷付けない様に工夫されて、大事そうに貼られていた。

特殊作戦 縁日逢瀬

「うん？ こんなご時世にやるのか？」

小松基地の掲示板に見慣れない色鮮やかなポスターを見つけたバトラが立ち止まる。

そのポスターには7月の6・7日に海沿いのビーチを丸々使った縁日と花火大会のお知らせだった。

「ザイの脅威が目の前にあるからこそやるんだろうさ」

「バーフォード中佐」

バトラに声を掛けたのはバーフォードで手にはシフト表らしき物を持っており、バトラは縁日と花火大会開催の2日間の内、2日目が午前勤務になっているのが気になり質問を飛ばす。

「なあ。バーフォード中佐？ 俺の勤務が2日目が完全なフリーについての説明を求めます」

「上官として命令する。アルタイル隊とアンタレス隊に所属するメンバーに対して日頃の感謝を込めて縁日に付き合え。まあ、あれだ。3人とデートして来たって事だな」

「あー。甚平は用意してありますから」

「ウィリアムのクソ野郎がああああああ!!」

拒否する以前に既に外堀を埋められ、城郭にも侵入を許していた。

今回の縁日と花火大会だが、夕方の5時から始まり、夜の9時30分に終わるスケジュールだ。

しかも花火大会は9時から30分にかけて行われる。バーフォードから渡されたタイムスケジュールにはバトラ・詩鞍・詩苑・ベルクト、そして何時の間にやら増えたフロントムの5人で花火大会を見る事が命令されており、デートに使える時間は5時から9時の4時間。

つまり、240分の猶予を均等に分けて、バトラは詩鞍・詩苑・ベルクト・ファントムの4人と60分間のデートを4セットする事になる。

因みに今回のデート代だが全てがバーフォード持ちと言うバトラの決死とも言える交渉を果たす裏で誰がどの順番でバトラと縁日デートをするか4人の美女が仁義なき空戦をバーチャル世界で行っていたのをバトラは知らないまま、縁日の舞台へと歩いているのだが、その足取りは重かった。

「で？ 最初は誰だ？」

砂浜にベニヤ板を置いて作られた縁日横丁とも言うべき場所の出入り口でバトラが独り言を喋りながら懐中時計を取り出して時刻を確認する。

横丁が解放されるのは5時なのだが、時計は16:55を指している。

顔を上げると誰かの影が目に入り、顔を向ける。

「最初はお前か」

視界に映ったのは何時もの南海の海を思わせる緑色の髪に美しいハイゼル色の瞳を細め笑いかけるファントムだった。

「嫌そうですね。まあ、仕事をしたいと言っていた貴方らしいですが、今宵は仕事を忘れて欲しいです」

「遊ぶ時は名一杯遊ぶのが俺流だ」

そうですか。とファントムは頷くと腕を少し広げて袖を見やすくすると身体を左右に捻りながら膝を曲げて、バトラに浴衣を着た自分を見せ始める。

バトラは何をしているんだと首を傾げる問いかにもなと言える程に軽い怒りを滲ませる表情を浮かべる。

「何かしたか？」

「していないのが問題です。全く、女性が服を見せている時は褒めて欲しいんですよ」

ファントムの言葉にバトラが凄く驚いたと口を大きく開ける。

「ま……まさか、お前にそんな少女的な感性があったとは……」

「……殴りますよ?」

言うが早く、バトラは僅かながらに露出している脛の部分をそれなりの強さで蹴られる。

バトラは蹴られた所を摩りながらもファントムの浴衣に目を向ける。

「それで?」

エメラルドブルーの布をメインに海面を網目状に反射する光の様な白で大きめの六角形で埋め尽くし、その六角形の中には六角形と同じ白で同じ位の大きさの6枚の花弁を持つ花の様な模様が描かれている。

帯はシンプルに白一色の模様無しだが飾り紐に濃い緑を使ってアクセントを加えている。

「はえーよ……まあ……でも……」

今までは清楚で美しい洋装が多かったファントムだが、今回の浴衣は上品で美しいと言える和装だった。

事実、遊びに着た女学生達には影でファントムの格好に着いてヒソヒソと称賛している。男子達にはファントムの上品な美しさはわからないらしく、一目見ると直ぐに視線を

「シンプルなデザインだが、上品な美しさがあるな。ファ……幽香には合ってるんじゃないか?」

ファントムと呼ぶと怪しまれる為にバトラは偽名である幽香と呼ぶ。

「ありがとうございます。バトラさんの服装も似合ってますよ」

バトラの甚平は那覇基地時代に貰った物で水中撮影されたジンベイザメの身体の模様をペイントした物。

ジンベイザメの体表と水中の独特な光の入り具合もしっかりとペイントされている事でシンプルではあるが何処かおしやれな雰囲気を出している。

腰にはシンプルに薄水色の帯に甚平と同じ布で作られた巾着をぶら下げて、財布代わりになっている。

「なんか恥ずかしいな。服装を褒められるのは……」

「そうですね？ 解放された様ですし、行きましようか？」

そう言つてフアントムが一步前に出て、肘が少し曲がる程度に手を差し出す。バトラは恥ずかしさからか手を取る事はせずにそそくさと前に出て縁日の会場へと入つて行く。

「ほお……結構あるな」

バトラがフアントムの横を歩きながらも横目で出店を窺ぐ様に見て行く。

出入り口付近という事もあるのか食べ歩きの出来る串物を一本単位で売っているお店が多い。

「私はこう言う所に来たのは初めてなんですが、何か楽しみ方と言うのはあるんですか？」

フアントムの質問にバトラは無いと首を振つて見せる。お祭りと言うのは兎に角は楽しんだ者勝ちだ。

2人は様々な店を回つてはこれが食べたいと思つた物をバーフォードの金で何も考えずに買つて行く。

「奢つて貰つてよかつたんですか？」

そう言うフアントムの手には縁日の顔とも言える綿飴や綿菓子と呼ばれる白い菓子が握られている。

「良いんだよ。こう言う時くらいは男に見栄を張らせろ」

フアントムはそうですかと頷くと手に持つた綿飴をおちよぼ口で食べる。

「ん。ただの砂糖の筈なんですか美味しいですね。ポツタクリも良いところですが」

綿飴や綿菓子は専用の機械を使つてザラメを溶かし、それを糸状になる様に回転しながら放出。空気により冷えて糸状になった砂糖を割り箸や棒で巻き集めて作る菓子だ。

原材料がザラメと安く、1人前に使う原価は10円から20円程だが、フアントムの買った物は200円とポツタクリ商売に思えるが袋詰めされた物を吊るしている店だと300円程なのを考えると相場以下の価格だ。

「雰囲気があるからな。そう言うのもあるだろう」

だが、綿菓子や綿飴が縁日や祭りで美味しいと思えるのはこう言ったお祭りごとで周りが心地良い騒がしさや祭り特有の空気があるからだろう。その雰囲気もお金で買っていると思えば高い買い物とは思えなくも無い。

「成る程……食べますか？」

そう言つて軽く突き出すフアントムにバトラが手を出そうとする
と引つ込められる。

「手がベタつきますよ。砂糖なんですから、口で直接どうぞ」

今度は顔に突き出されるとバトラも観念したのか口で直接食べる。
口に広がるのはフワフワとした食感の直ぐ後に来る砂糖の純粹な甘
さだが、雰囲気とデザートによくあるシエアによりそれ以上の味をバト
ラの舌に与える。

「ふん」

バトラが食べた瞬間に今度はフアントムが口に入れるがわざと指
で回してバトラが齧った場所から齧る。

「あ」

バトラが間接キスだと気付くとフアントムは今更気付いた所で遅
いですよと言わんばかりの可愛いらしいドヤ顔を浮かべるが、バトラ
はそんな事は慣れていないし気にしていないとドヤ顔を送るとフアン
トムは不貞腐れた顔で歩く速度を速めると直ぐに綿飴を食べ切つて
しまう。

途中で輪投げを行うがフアントムの完璧なスローイングに対して
バトラは手榴弾を投げる様な動作で輪つかを揺らさずに投げる不恰
好な投げ方で景品の団扇を取つて行く。

次に射的に来たのだがコルクを集めるのが面倒なのか着色料は色
づけされた水を使つて行う射的だった。

屋根と景品の交換券の間に新聞紙が垂れ下がっており、水でふやか
して落とすタイプだ。

これはフアントムが普通にしては上手い射撃で1つを手に入れた
が、バトラは新聞紙の向きを見て、10回の射撃に精密な射撃と新聞
紙は縦先に弱いと言う性質を利用して4つ取る。

ファントムは緑色のサイリウムを貰い、バトラは青と赤、白と紫のサイリウムを貰う。

そうこうしている間に約束の60分は体感では意外にも早く済んでしまう。それはそれだけ2人の縁日が楽しい時間だった事の表している。

「それじゃあ、私は1人で回ってみます。では、花火の時間に」

「了解した。気を付けろよ?」

ファントムが手を振って人混みの中に消えて直ぐに人混みからもう1人のデート相手が出て来る。

「今度は……」

白や赤、橙色、薄桃色の菊と黄色い色の桜菊の葉がペイントされた黒い浴衣と言う上品な佇まいに白い網目模様の入った薄桃色の帯に飾り結びで結んだ水色の布が清涼感を出す服装に身を包んだ詩苑だった。

ファントムとは違うペイントで彩られた浴衣だが与える印象は清涼感のある上品さだ。

そんな浴衣をこれまたお嬢様の様な雰囲気を感じ出す詩苑が着ている為に浴衣の雑誌に載せられそうな程にマッチしている。

「何時ものとは違った雰囲気だな」

「洋装と和装ですから勿論ですよ。それよりもお兄様のお腹は大丈夫ですか?」

「綿菓子位しか食ってないからまだまだ入るぞ」

ファントムとのデートは雰囲気を感じ取ったり遊んだりを中心だった為にそれほど何か食べたと言う物は無い。

「あ、そうだ。これやるよ」

そう言っ腕を出せとジェスチャーすると右腕にサイリウムを輪っか状にした物を取り付ける。

「えへへ、ありがとうございます。お兄様」

「そんなにくっつかれると歩き辛いぞ」

「いいじゃないですか」

2人が屋台と屋台の間を抜け出て縁日のメインストリートとも言

える場所に出て行く。

6時から7時の部である詩苑の為に食べるとしたら焼きそばやお好み焼き、変わり種で広島焼きだろう。

目に映る屋台1つ1つを見て何を食べるか相談し合う。

屋台が多いと競争も激しいのか様々な違いを見せようと躍起になっっている出店の店長達の姿が映る。

ファントムの時は常套手段である袋に頼らない代わりに価格を抑え、作りたてを出すと言う工夫がされていたが、焼きそばやお好み焼き、広島焼きとなると中の具材を変えていたりしている。

「此処は豚肉なんですね」

「3軒先はイカ……タコなんて変わり種まで」

色々を見て回った2人だが最終的に選んだのは塩と胡椒でシンプルな味付けをした塩焼きそばだった。

「意外です。お兄様が塩焼きそばが好きなんて。男性って味が濃いのが好きですよね？」

「ソースも好きだぞ？ 今日気分的に塩っただけで。お前もこれで良かったのか？」

ベンチに座って同じプラスチックの容器に入った塩焼きそばを別々の箸でつつく。

塩焼きそばを選んだのはバトラだが、薄味で青海苔不使用の店を選んだのは詩苑だ。

「濃い味付けよりは薄味派って言うのもありますが、お兄様の前で唇や歯に海苔なんてつけられません」

あわよくばキスの雰囲気になった時に歯や唇に海苔が付いていたら多少なり雰囲気も萎えてしまう。

詩苑はもしもの時の為に食べる物を内心で吟味していた。

2人で特設のベンチで食べる2人を仲の良い兄妹を見るような目で周りの大人達は微笑ましく見ていき、高校生位の男子達は何か羨ましそうに見ては嫉妬や怒り、殺意を滲ませる様な目で睨みつけていく。女子は見た目の違い過ぎる故にイケメンの彼氏と縁日に来たお嬢様タイプの美少女に嫉妬や羨ましさを含んだ視線で一目見ると先

に進んで行く。

「人が増えて来ましたね」

「はぐれない様に注意しながら行こうか」

近くにゴミ箱に容器を捨てたバトラが立ち上がると今度はヨーヨー掬いの出店に顔を出す。

「手頃なサイズでも狙うか」

甚平の袖を拭いながらそう漏らすと店の親父さんがバトラを煽る様に声を掛ける。

「男の子がそんな事を言っちゃいけないーぜ！ 男なら大物狙いだろ
うよー！」

そう言っつて新しく作った特大ヨーヨーをプールに投入するとバトラバトラもそのヨーヨーを狙う。

「よっしやー！」

1発で取ったバトラだがゲットの条件は自分でプールよりも高く上げて掴むか外に出すである。

バトラが持とうとした瞬間に別の子供が勢いよく上げた事で跳ねた水滴により手で掴む直前に釣り針が切れてプールへと落下した。

「あ」

「こ、今度は私がしますね」

子供達も空気を読んで全く動かないでくれたお陰か詩苑は難なくバトラが落としたヨーヨーを掬い上げる事に成功する。

何とも言えない雰囲気になった為にバトラは逃げる様に別の屋台で胡瓜の1本漬けを買ってかぶりつく。

「あれは残念でしたね」

「そうだな。食べるか？」

「あ、頂きます」

そして、齧った辺りで間接キスをした事に気付いて顔を真っ赤にした辺りでバトラの携帯からブザーが鳴り響く。どうやらタイムリミット5分前の様だった。

バトラは次の相手との場所に人混みを避けながら進むと丁度リミット1分前だった。

「それはやるよ。じゃあ、後で」

「はい、まひゃあひよで」

舌足らずで何処か上の空な詩苑を心配しつつも直ぐにファントムがフォローに回るのを見つけるとファントムがウイंकを送ってきた事に内心で戦慄を覚えるが、次に相手の為に合流地点へと向かった。

特殊作戦 縁日逢瀬 後編

「お待たせしました」

「さつきまで詩苑と一緒だったんだがな。と言うか2人一緒だと思っていたぞ」

「今回は別々と言う事になりました」

微笑む詩鞍にそれ以上の事は聞かず、バトラは服に視線を向ける。鮮やかな白を下地に薄い水色の茎に咲いた薄桃色の薔薇がペイントされた浴衣に茎よりも表が濃い水色で裏が濃い乳白色の布を使った帯を巻き、帯の上には白い網状のレースを使った白くフワフワとした花が咲き、白とピンクのグラデーションが入られた飾り紐を結んでいる。髪型は頭を巻く様に三つ編みの髪を巻き、後頭部の左寄りの場所に大きな白い薔薇の花飾りを付けている。

「詩苑とはうって変わって清楚で可愛い格好だな」

「今日位はイメチェンをしようかと」

「アリなんじゃないか？」

「ありがとうございます。それじゃあ、行きましょう」

縁日の中を暫く歩くと詩鞍から口を開いた。

「お祭りに来たのなんて何年振りでしょうか？」

「少なくともここ数年はないだろう」

「それより以前にもこう言った所には来た覚えがないんです」

それを聞いてバトラがそつと詩鞍の身体を抱き寄せる。

「ほら、詩鞍。あまり遠くに行くのと逸れるぞ」

「子供じゃ無いんですからその位は大丈夫です」

遠慮する詩鞍だがバトラは肩に置いた腕に力を込めて、はねられない様にする。

「なら、今日は楽しもう。お前に地上で兄貴らしい事をしてられなかったしな」

「え!? あのお兄様……そうですね」

バトラの意図を察した詩鞍がそつと肩を寄せる。

「それでは、言い付け通り、お兄様と離れない様にしますね」

肩を寄せ合って歩くバトラと詩鞍も仲の良い兄妹のようで2人はあの出店はどうだと言いながら通りを歩いて行く。

「あ！ あれって……」

「ラムネか。こんな中ぐらいまで来ないと見なかったのは珍しい」

「そうなんですか？」

「ラムネなんかの飲み物は食事スペースの近くや出入り口付近に多い筈なんだよ」

「成る程……あの、ラムネって美味しいんですか……？」

驚くバトラだが直ぐに心の内にしまい、詩鞍の手を引いてラムネの出店の前までやって来る。

「すみません。ラムネを1本下さい」

「あいよ。1本で150円だ」

店主が氷水を入れたクーラーボックスからラムネの瓶を1本取り出してバトラに渡すとバトラは詩鞍にラムネを渡してから会計をませる。

「あの……奢って頂けるんですか……？」

「ああ、この位は流石にな」

「そうですね……ありがとうございます、お兄様」

詩鞍は貰ったラムネの瓶をまじまじと見つめる。

薄い水色のラムネ瓶は何か幻想的な美しさを感じさせ、中で見える気泡や外を垂れる氷水の水滴が涼しげな印象を持つ者に与える。

「……これは自分で開けるんですね。ああ、わかりました。こうすればいいんですね……あれ？ 違うんでしょうか……ですが、こうだった気が……うーん……やっぱりこうでしょうか……？」

「詩鞍、お前ってラムネの開け方知らないだろ？」

「……はい……」

何処か申し訳無さそうに話す詩鞍にバトラは笑って語り掛ける。

「やっぱりな。わからないなら俺に頼めばいいものを」

「買って頂いた上に開けて頂くのも申し訳なく思っ……」

「そんな遠慮するなよ。ほら、瓶を貸して。代わりにこのフランクフルト持って置いて」

詩鞍が瓶を観察している間にフランクフルトを買って来ていたバトラが詩鞍のラムネとフランクフルトを交換する。

「は、はい……」

「ラムネは最初にこの蓋を外して、分解する。すると凸型のパーツが取れる。これをビー玉の上に乗せてから体重を掛けると、落ちる！」

バトラがビー玉を落とした瞬間に手と瓶の間からラムネが噴き出す。

「うおおっ！」

「うわあっ！」

「ななな、なんで噴き出すんだよ！」

「ど、どうすれば良いですか!?!」

「まずは落ち着け、放って置けば……ほら、収まった」

噴き出すのが終わるとバトラはゆっくりと瓶から押さえていた手を離す。

「ラムネってこう言う飲み物なんですか？」

「いや、振ったり、強い衝撃を与えなければこうはならない」

「……あ」

「あの、もしかして……振った？」

「すすすすみません！ 開けるのに試行錯誤していた時に逆さにしたたり、少し振ったりしました……」

「成る程な。まあ、初めてラムネを飲む奴の通過儀礼の様な物だ。

詩苑にでも食らわせてやれ」

「はあ……お兄様！ 手が凄く濡れていますよ。何か拭くものを……」

「気もするな。ほら、コレ。少し減ったけどな」

そう言つてラムネとフランクフルトを交換するバトラに詩鞍は何も言わずにラムネ瓶をまじまじと見つめた後に口をつける。

「お、美味しいです……」

「それは上々。因みに個人的にはラムネと塩気のある物の組み合わせが最高だ」

そう言つてバトラが粗挽き胡椒と塩で味を付けたフランクフルトの2本の内1本を詩鞍に渡すと詩鞍がフランクフルトを何か珍しい物を見るかの様にまじまじと見つめた後に女性らしくおちよぼ口でフランクフルトを口に入れる。

それを見つめてしまった男達が行つてはいけない方向のイメージを脳裏に構築した瞬間にフランクフルトが噛みちぎられ、男達はそそくさと現場から撤退する。

「確かに合いますね。ラムネの甘さと爽やかさが合います」

「だろ？」

そう言つてバトラは詩鞍の物にマスタードを足したフランクフルトをかぶりつく様に食べ始めると詩鞍がラムネ瓶を差し出す。

「飲みますか？ あ、いえ、開けて貰つたお礼にと」

「ちようど良かった。何か飲もうか迷つていたんだ」

バトラがラムネ瓶に口をつけると詩鞍が大きく息を吐いた事に気付く。

「あ、間接キス……」

「意識しました？」

「意識しました……と言うか嫌か？」

詩鞍はバトラの意識したと言ふ所と自分が意識した所の意味が全く違う事に気付くと顔を真っ赤にしてラムネ瓶をひったくると一気飲みで飲み干して、近くのゴミ箱に入れてしまう。

「嫌だったか？ 今度から気をつけるか」

「(まさか、こんな形でキスをするなんて思つてませんでした……) 2人のすれ違いは終わりの時間が近ずいても変わらず、詩鞍はタイムアップを迎えて、2人は少し気恥ずかしそうに分かれるがバトラは直ぐに首を振つて意識を変える。

「ベルじゃなかった。カーシャ。何処だ？」

ベルクトと言う名前だと怪しまれると言う事でカーシャと言うそれっぽい名前を偽名として設定している。

「ああ！ バトラさん！」

そう言つて人混みを突っ切つて現れたのは白い髪を後頭部と頭頂

部の間でフンワリと纏めて頸を完全に露出させたベルクトだった。

「お、来たな。それじゃあ、行くか」

バトラが歩き出すとベルクトが拗ねた様な雰囲気を出しながら先に進む。

バトラはなんとも言えない表情を浮かべながらベルクトに話し掛ける。

「何に怒ってんだ？ 気に障る事したか？」

「ヒント」

ベルクトが何かを期待する子供の様な笑みを浮かべてバトラに振り返る。

「女性とのお出掛けで気にすべき事はありませんか？」

普段のベルクトからは想像がつかない程の怒気を放ちながらベルクトが笑みを浮かべながら口を動かす。

「ああ、お前もか」

「……他の人もそうだったんですね」

「感想を言う身にもなってくれ。センスが無い男には苦行なんだぞ？」

「……それはわかりますが、それでも似合ってるって一言が欲しくて、女の子は恥を飲んででもお洒落をするんです！」

ベルクトの熱弁にバトラは1歩下がるがベルクトがその1歩を詰める事はせずにその場で膨れっ面をしていると帽子を被った中年の男性が話し掛ける。

「服を褒めろ。それも似合っているだけですませるなよ」

そう言つて、背中を強く叩くとバトラが何かを言う前に人混みに消えてしまった。

バトラは仕方ないと溜息を吐くと疲れてきていたセンスに起床ラッパを吹かしてからベルクトの浴衣に目を向ける。

「!? ちょっと待て！ その服はお前のセンスか！」

「あの……似合ってませんか？」

ベルクトの格好なのだが、髪型は普段の髪型で下に流している髪を後頭部にふんわりと纏めて首下は大きく露出する髪型にマリンプ

ルーの布に白いハイビスカスがペイントされた浴衣に濃い白のフリルをあしらった光沢のある水色の帯だけで留めている。

これだけならまあ、普通の浴衣だ。ただし上の一文にこの文章を足すとただの浴衣では無くなる。

下前と上前のつま先が四分丈で終わっているデザインで簡単に言うともニスカ浴衣や花魁スタイルと言われる色気の高い浴衣だ。

着方も普通の着方では無く、首元と胸元が露出する様に少し開けた着方をしており、ベルクトの双丘の一部が見えてしまっている。

「えつと……服も着方もサラ軍曹から教わったんですが……」

「サア〜ラア〜ア〜デエ〜シヨオーンツ!!」

まさかのサラ軍曹の入れ知恵と言う事にバトラが叫ぶ。こう言ったある意味では間違った知識を与えるのはマイケル軍曹が殆どなのだ。が今回は常識人であるサラ軍曹だった為にベルクトも深くは考えずに鵜呑みにしてしまっていた。

「似合ってませんか？」

「大丈夫だ。ただ今まではマリンプルーのワンピースとかだったから少し意外性が大き過ぎた。というよりも色気のある服も似合うんだな」

今までは露出少なめのワンピースなどを私服にしていたベルクトは清楚で可憐な印象が強かったがこうもどストレートに色気の漂う服は初めてでバトラのセンスのキャパを軽く超えていた。

バトラが脳内ブリーフィングでこれ以上はヤバイと判断すると早々な話題転換に走る事を決定する。

「大丈夫だったか？ 変な奴が関わって来たとか」

「はい。流石にバーフォード中佐が心配して下さってマイケルさんをさつきまで同行させてくれました」

「あいつは爽やか笑顔の面白白人だが、軍服の下は細マッチョだからな」

「それもあると思いますが、マイケルさんは軍服でしたよ？」

「誰も近寄ら……ああ、ミリオタが近付くか」

「ええ。色々話をされましたよ」

軽い与太話をしている間にベルクトの調子も戻ったのか軽い足取りで数歩だけ進むとバトラに振り返って縁日を回ろうと言い出し、バトラもその横に付いて縁日を回り始める。

バトラもベルクトも何も食べていない事が判るとお互いに気になった物をシェアしながら食べ歩く。

たこ焼きを2人ともハフハフしながら3つずつシェアしたり、ブルーハワイ味のかき氷を2人で分けたり、牛串や焼き鳥と言った串物は1本をシェアするのはベルクトが恥ずかしがった事で1人で1本食べたりしながら縁日の雰囲気を楽しむ様に2人は横に並んで歩く。

「……う……うう」

次は何をしようかと話している間、ベルクトの右手は何かを掴む様な素振りを見せては引っ込めるがバトラの手が不意に近付いた瞬間に手が触れると不自然な速さで袖の中に隠れる。

「……ん」

バトラも左手を可能な限り自然を装い動かして、ベルクトの意思を感じている事をアピールするものの平常では無いベルクトが察するには難しいアピール方法だった。

ベルクトの手が袖に入った事を確認するとバトラは本音を隠す様に背中に右手を回して、目線を出店に走らせる。

そんなバトラにベルクトは目だけでバトラを見つめながらバトラの浴衣の袖口を掴み、袖口を弱々しく引くが、袖口が大きく作られた浴衣に対して細腕とも言えるバトラの腕は引っ張られた感触に気付く事は無かった。

そんな悶々とした雰囲気の中の2人が居ようとも時間はお構い無く進み、全員とも待ち合わせ場所である花火鑑賞の待ち合わせ場所まで付いてしまう。

此処まで来るとベルクトの腕は既にバトラの袖口から手を離れた状態でファントム・詩鞍・詩苑との合流を果たすとバトラを囲む様に座り、空を見上げた瞬間に花火が打ち上がるり、夜空に火の花を咲かせる。

「綺麗ですね」

「本当に」

片宮姉妹が感慨深そうに話すと 何処かで買い足したのかメロンシロップの掛かったかき氷を飲み込んでからファントムが漏らす。

「今日が1番印象深そうなのはカーシヤっぽいですね」

「綺麗ですね……花火なんて始めてみました。本当に綺麗」

「最近汚い花火しか見てないからなく。余計だろ」

バトラが離れた瞬間に鳩尾と脇腹に女子4人の肩肘が入る。

確かに対ザイ戦の最前線を飛ぶ5人にはザイが爆発する汚い花火ばかり見ているだろうが、こんな時に話すのは雰囲気をぶち壊すだけである。

そんな事をしている間でも花火の打ち上げは続き、10分ほどするとバトラがベルクトの耳元の近付く、ベルクトだけが聞き取れるだろう音量で話し掛ける。

「綺麗だろ」

「綺麗です」

空に割物の芯入り銀冠菊を見た瞬間にベルクトの姿がサーシヤに見えたバトラは内心でサーシヤとベルクトに謝りながら、ベルクトの耳元に口を寄せる。

「お前に日本の花火を見せたかった……」

それは腐りきった消して叶う筈の無いサーシヤとバトラとの約束。それを似ているとは言えでも、ベルクトにサーシヤの影を重ねて行った。

叶っている筈も無いし、叶ったなど思いたくも無いが、バトラは腐りきったこの約束を叶いたくて仕方なくなり、サーシヤの影をベルクトに重ねながら口を開いていた。

ベルクトもバトラの行動の真意がわかっているのと何かが伝わって来る感覚を感じて、ベルクトもバトラにだけ聞こえる様に静かに口を開く。

「……好きでした」

ベルクトの右手がバトラの左手にほんの少し触れると何も言わずに指を絡ませる。

「……ありがとう」

バトラもそれだけ言う空を見上げて直ぐに黙ってベルクトの右手をぎゅつと握り返す。

花火の打ち上げが終わると片宮姉妹がお互いに笑顔で感想を言い合い、フアントムとベルクト、バトラもそれを微笑みながら見守る。

バトラとベルクトの手は花火が終わると自然に離れていたが、ベルクトは手が離れた瞬間に何かか抜ける様な感覚を感じ、ベルクトは夜空を見上げる。

バトラも吊られて上を見上げると息を飲んだ。

「約束……叶いましたね」

「……ああ、ああ」

バトラが嬉し涙を流しながら、笑顔で頷く。

2人が見上げた夜空には満天の星と共に花火の後に漂う煙の中に入って、小松空港の方向に飛んで行く、アンタレス隊のエンブレムが描かれた通常塗装のS u r 2 5の機影が見えた。

特殊作戦 あり得た過程

「レオス」

暗い空間に一瞬にして光が差すと周りには青い空に白いエーデルワイスが咲き誇る花畑に立ったアンタレス01こと未来奈が立っていた。

そしてレオスと呼ばれたバトラは花畑に横たわっていた。

「俺は……死んだのか？」

「ううん。正確には死に掛けているかな？」

そう言つて微笑む未来奈にバトラが全てを察した。

彼女は死んでいる。それはもう死体が無いとか理由が無くとも認めなくてはいけなかった。心で理解してしまったから。

バトラは涙を流しながら声を殺して泣いていると未来奈が言葉を紡ぐ。

「あなたは直ぐに復讐を果たしてしまった。復讐に囚われた者や駆られた者は復讐を果たせば虚しさにだけ苛まれる。そして、徐々に、確実に腐って行くのが常だった。けど、あなたは違った」

バトラに複数の影が重なる。それは今までにアンタレス隊として共に戦つてきた仲間達だった。

「バトラさん。貴方が腐らなかつたのは気付いたからじゃないですか？」

サーシャの言葉を聞いて涙を拭い声をした方向を見るとベルクトに似た顔をした少女が微笑みながらしゃがんでバトラの顔を覗いていた。

「無くした物」

「奪われた物」

「そして、失われた物ばかりを見ていたけど、気付く事が出来た」

「残された物がある事に」

バトラの言葉に仲間達が笑顔で頷くとサーシャと未来奈がバトラに手を伸ばす。

「まだ、ここに来るには早過ぎる。戻りなさいバトラ特務大尉」

「長く待たせて下さいね、バトラ特務准尉。武運を祈ります」

2人の手をとって立ち上がったバトラの目に病的なまでに白い天井が映る。

「バトラさん」

声をした方向に向けば痛々しい姿ではあるがしつかりと2本の足で床に立つファントムがバトラの顔を見下ろしている。

「飛べますか?」

「飛んでみせる」

ファントムはバトラがそう答えるとやっぱりですかと笑いながら頷き、行きますよと手で合図を送るとバトラは負傷から目覚めたばかりとは思えない動きでベットから立ち上がり、廊下へと連れ立って出ると機付員が2人を出迎える。点滴が刺さっていた場所は止血をしていない為に止めなく血が滲み出るがそんな事は無視しろと言いながら報告をバトラに促されると機付員が現場と機体に着いて簡潔に素早く報告を上げる。

バトラとファントムは普段のフライトで着ている服に素早く着替えると機体のコクピットに収まり各々の準備を行うと2機の戦闘機が連れ立って空へと旅立った。

慧の視界が突如としてモニターの電源が切れる様な音と共に真っ暗になる。普通ならこれで驚き、慌てふためくだろうが、暗転する一瞬前に聞こえた電子戦機の墜落を告げる通信がグリペンに必要な最低限のリソースを提供出来なくなった故の事だとわかる。

目標のザイが自分達の存在を危険視してデコイを散布し、グリペンが必死の覚悟でタイフーンの置き土産を使って、本物を洗い出そうとしていたが電子戦機が墜落。必要最低限のリソースを下回った事でもただ飛ぶだけのミサイル発射台と化したJAS39にザイを撃墜出来る能力は無い。

ミサイルは発射しただけではただの噴進弾。一直線に飛ぶのさえ怪しい鉄塊となる。

「此処まできてー!」

慧がイラつきを隠す事なくキャノピーを叩くとボオオンと不気味な音を立てながらディスプレイが復旧。続けてインディゲーターが復旧し、全天モニターに照準と黒い靄の様なザイが数個、順番に浮かび上がる。

慧が首を振ると左隣に居るはずの無い人物しか駆れない筈の機体が存在した。

跳ね上がった外翼に逆さにしたYの様な尾翼に長く伸びた機首。そしボディの所々が内側から輝く発光するエメラルド色の光に浮かび上がるF-4だ。

「まいったく、世話の焼ける人達ですね。たかだが爆撃機を1機墜とすのに何をそんなに大騒ぎしているんですか。おちおち養生もして貰えませんかよ」

通信と同時にデータリンクが勝手に再開される。電子戦機隊とJAS39の間に新たなユニットが現れる。敵味方識別コードでも、データリンクでも味方の識別コードを出している。

BARBIE03。

「フアントム!? お前、大丈夫だったのか」

慧の通信にフアントムが溜息を零す。

「大丈夫な訳無いでしょう。満身創痍に疲労困憊を併発して……まあ、自分1人では満足に飛ばす事は愚か普通に飛ぶ事さえ困難な状況ですよ。しかも、試験中の早期警戒モジュールまでぶっつけ本番で載せられて、故障機と負傷兵に対する扱いとは到底思えませんよ」

フアントムからの通信が終わると同時に雲から別の機体が現れる。藍色の鍔の様なシルエットの機体。

I-44。この機体を駆る事が出来るのはこの世で1人だけだと慧は思っている。

ANTARES01。

完全無欠にして最強無敵のハッピーエンドに行く為に必要な欠け

てはいけないピースの1つ。

〈おかえり、希望か勇気を取り戻したみたいだな。言いたい事は色々があるがそれは後にしよう。今はただ、この戦場を駆け抜けるのみ！〉

フロントムと早期警戒モジュールの救援によりリソースを取り戻したグリペンが迎撃の為に必要な情報をかき集めては解析し、デコイを弾いて本物を割り当てて行く。

〈敵進路アップデート、投弾アプローチに入っている。阻止限界点まで残り7秒〉

秒読みが始まったが未だにデコイと本物の算出が出来ずにいるとバトラの機体の主翼からロケットが吹き出るとその推力に物を言わせた上昇で高度を上げて行く。

高度が3万を超えるとバトラは上部ウエポンベイを開放して、中からEMLを展開するとバトラは兵装を操作するパネルに手を伸ばし、カバーが付いた赤いボタンを押す。

するとHUDに注意を促す警告文が現れるがそれを無視する。

蓄電量が100を超えるが直ぐに200、300と増えて行き、コクピットに警告を知らせるブザーとランプが作動すると同時に発射の命令を下すトリガーを引く。2発の砲弾は時間を置いて、発射され、ザイの放出したデコイの2つを破壊する。

これにより絞り切れなかった3機の内2機を破壊した事でグリペンが素早く残りの計算を終える。

〈……各種情報を整理、追加、再計算……完了。データ抽出、照準情報に同期完了、経路修正・ターゲット最終選定〉

〈敵機捕捉！ いっけえええ!!〉

慧が押し下りリリースボタンから送られた信号により1t近くある凶器が虚空に放たれる。

重力の鎖から逃れる為だけのエンジンを火を噴きながら上昇し、1段目のブースターが切り離されると更に加速して重力の鎖を1本、また1本と振り解いて行く。

そして最後には外周スラスターで軌道を修正しながら敵進路に

突っ込む。

敵も回避する為に蛇行する。もしも放たれた凶器が従来の直撃しなければ意味の無い物だったら良かったのだろうが放たれた凶器は未だに実験中の代物で敵の直撃直前に抱えた炸薬を爆発させて、中に仕込んでいたダングステンペレットを目標正面にぶち撒ける。

拳1つ分はあるダングステンペレットはその重さと保持する運動エネルギーによりまずは左翼を食い破り、腹部の耐熱シールドを続けて破壊。さらに垂直安定板と舵を粉碎し、安定を失うと残ったペレットが胴体に直撃して、捻じ切れる様に胴体が切断される。そして、それは爆弾倉にも到達し、内部にあつた爆弾にすら被害を与え誘爆させる。

指先ほどの爆炎を確認すると遅れて音と衝撃波が襲うがJAS39とニコイチされたF-4を少し揺らす程度だった。

F-4が制御された動きで降下を開始するがJAS39は力を失った様に降下するが直ぐに機体を水平に戻す。

〈作戦は成功した！ 全機帰投せよ！ 繰り返す！ 作戦は成功！ 全機帰投せよ！〉

カノープスから通信が入るが大陸の至近とあつてかザイの迎撃はまだ多くあり、直ぐに帰投できる訳では無く、慌ててAJZ化された戦闘機隊とドーター達が退路の確保に移るがその行動は杞憂に終わる。

〈まさか、もう終わっていたか〉

〈EPCで通信出来なかったのが痛いな〉

〈でも、帰投する彼らの退路を確保しなきゃ〉

IFFに味方として反応するF-4EJ改が両翼を青く塗ったF-15に片翼だけが赤いF-15に通常カラーのF-14の3機を連れて現れる。

〈退路は我々が確保する。君達は帰投しなさい〉

小松の基地司令が乗るF-4EJ改からの通信を受けて全機が日本に機首を向けて全力で飛ぶ。

その遥かの高い高度で飛ぶJAS39とF-4、I-44は可能

な限りの速度で日本に向けて飛んでいたが、I 0-44からは機体の上部から、正確にはEMLから黒煙を吐き出させながら飛行していた。

〈バトラさんもお疲れ様です。まさか、ブースターで加速してザイをEMLで撃て。と聞いた時は呆氣に取られましたよ〉

〈俺もだ。そもそも話で言うところは保険で、あいつらはミスった時用の物だ〉

〈あの頑丈だったEMLの砲身が発射後に黒煙を吹くとは思いませんでした〉

〈安全圏は300パーセントだ。500パーセントで撃つてこれだ。正直な話、爆発されたら死んでいた〉

上部ウエポンベイはエンジン吸気口の真上でエンジン本体と燃料タンクの直ぐ近くに配置されており、ここが誘爆した場合はエンジンへの異物吸引で済めば良いが、最悪はエンジンや燃料への誘爆で機体が木っ端微塵、粉微塵にされかねない。

〈それは兎も角として、お疲れ様でした〉

ファントムがそれだけ言い切ると回線を切る。バトラは回線が切れている事を確認すると操縦桿を握り直し口ずさむ。

「とにかく勝った。ま……家に帰ろう。愛機の炎をぶち撒けながら……俺達のやり方こそが強さの証だ。いつまでも、ずっと続く強さの証だ……」

作戦が終わったが傷ついた身体で無茶をした事で入院が伸びていたバトラだが、ようやく外出の許可が下りるとバトラは花屋で買ったアサガオ・オドントグロッサム・ガーベラ・シオン・エーデルワイスの花弁とフウセンカズラの実を潮風に晒して、螺旋を描かせながら空へと飛ばす。

「出てきたらどうだ？」

その言葉にベルクトが物陰から申し訳無さそうに出て来る。

「どうした？」

「いえ、外出をしたと聞いて気になって」

バトラはそうかと頷くと海に視線を向ける。ベルクトはバトラの1歩後ろで海を眺めているとバトラが語り始める。

「未来奈って言う1番機が居たんだ。俺の最初で最後の隊長だ。あのF-4は元はあの人の奴であの人が帰ってきた時に返そうと思っていたんだ。色を塗り替えたのは変えたら何をしているんだって怒って出てきそうっていう子供心からだ」

「でも……アンタレスの1番機は……」

「ああ。死んでいる。みんなが言うけど、俺だけは信じたくなかった。死体が無い、機体の残骸も見つかっていないって、言って現実から目を逸らしていた。でも……でもさ……」

此処から先は涙声で呟く。

「わかったんだよ。あの人は死んだだって……」

バトラの頭をベルクトの細く白い腕が抱き寄せるとベルクトはバトラの白い髪を愛しいものを触るように優しく触るとふわりと潮風と共に聞き慣れ無い声がベルクトにだけ聞こえる。

『この子をお願いね』

ベルクトはバトラを抱きしめる力を強くする事で答え、離れた小松基地でも同じ声が聞こえたファントムとその声が聞き慣れた2人の少女は強く頷いていた。

アサガオの花言葉は儂い恋・固い絆・愛情。

オドントグロツサムの花言葉は特別な存在。

ガーベラの花言葉は希望・常に前進。

シオンの花言葉は君を忘れない。

フウセンカズラの花言葉は一緒に飛びたい。
そして、エーデルワイスの花言葉は勇気と……

大切な思い出。

特殊作戦 本社からの特別報酬

「おおー おくく」「これもいいよな」「あ、このケツなんか最高じゃないですか？」

小松基地の設けられたMS社・自衛隊共同の休憩室でMS社の社員と自衛隊が1冊の本を囲み、印刷された画を指差しながら何かを言い合っているのを壁越しに顔を半分だけ覗かせて睨み付ける様に見える眼が4つ存在した。

「なんか……その……」

遠慮気味に呟いたのは赤い目の持ち主はロシアから亡命して自衛隊に保護され、とある作戦中のMIAをでっち上げてMS社へと逃亡し、新入社員としてこの地に帰って来た特異な経歴の所持つ絹の様な白髪にスピネルの様な赤い目の美少女、ベルクトだった。

「なんか会話が下賤です」「多いに不愉快にさせますね」

ベルクトの上から覗くのは敵だった筈が今の部隊の隊長に拾われ、異性としても、人間としても惚れたからこそこの場所にいる濡羽色の髪と目を持った大和撫子、片宮姉妹が苛立つげに呟く。

「女性がいると言うのを考えて頂きたいですね」

片宮姉妹の上からは緑のおかっぱ髪に琥珀色の目を持った一見すれば何処かのお嬢様を思わせる風貌の少女、ファントムがその額に青筋を浮かべながら握り拳を握っていた。

「あ、このファントムいいな」

「アレですね。エッチイって奴です」

いや、その感性はどうなの？ と総スカンを喰らう自衛隊員を叩いた内の1人、PMCのエースパイロットであり、睨み付ける少女4人の中から最もヘイトを稼ぐ人間が放った言葉に片宮姉妹の堪忍袋の緒が切れた。

「こんな所で何を見てるんですか！」

詩鞍が素早く雑誌を引っ手繰ると詩苑へと投げ渡して、取り替えされない様にしつつ、中身を受け取った詩苑が改め様とするとやはり気になるのかベルクトと妙に顔が赤いファントムも覗き込む。

「……戦闘機雑誌？」

ベルクトの第一声にフロントムが続く。

「カタログですね。額が可笑しいですが」

どれもドルやユーロなどの外国通貨でとんでもない価格が表示されている。

まあ、買う側がPMC。それもこのカタログは改造機専門であるが故にエース向けであり、その額はパーセンテージに戻せば、一般人が新車や中古車を買う様な価格帯だ。

「こんな車を売るかの様に気安いですか？」

「どうなのでしょう？ F-2Xは隠れディーラーからの仕入れですが」

片宮姉妹の言葉も仕方ないだろう。

今までは鹵獲機体やディーラーとの暗号の様な言葉ややり取りでの購入。最近ではバトラの高い買い物でベトナムの地で行ったキャスパーとのloniでの商談など、こう言った雑誌を使った売り込みが有るとは思えなかった。

そんな事を含めた姉妹の言葉にバトラは頷いて答える。

「ディーラーとの縁が強い場合は要らない。ただ、そう言うのがしっかりしていない新生エース向けだよ」

「ならどうしてバトラさんがこんな雑誌を？」

ベルクトが首を傾げる。

その光景を見た自衛隊の1人が倒れると周りの隊員が『傷は深いぞ！ 生きろ！』『落ち着いて耐G呼吸をするんだ！』『このままだと尊死するぞ！』『担架だ、担架持ってこい！』『ついでにAEDもだ！』

後ろの阿鼻叫喚を尻目にバトラが適当な椅子に座る様に進めると何処からかホワイトボードを持って来ると黒ペンで日本語の文字を書く。

その字は『PMCパイロットの収入源』と書かれていた。

「教導ですか？」

「なんで、フロントムも座ってんのか知らねーけどこのまま進めんで。」

俺たちの収入源はなんだ？」

「会社の基本給ですね」

「詩鞍の通りだ。俺たちも会社員だ。少ないながらもそれもあるがそれで武器を買うのは難しい」

「それと戦果報酬ですか」

「詩苑も正解だ。パーセンテージではこれが一番デカイ。高給取りは総じてエースだな。武器の購入もこれから捻出される」

「派遣報酬でしたっけ？」

「ベルクトも分かってきたな。俺たちを派遣して基地に残留させるにも金を取る。まあ、売約されてその間の仕事ができなくなるから拘束期間や任務難易度によって金出せって奴だ」

バトラは言われた3つを丸で囲む。

「それらを含めて三大報酬だ」

「それを教える為にこんな事しないでしよう？ 本題に入っては？」

バトラの説明にファントムが先を促すと先程の雑誌をバトラは開く。

「此処で副業での報酬も加わるが、お前らは此奴を作るのに掛かる人がどれだけ要るかわかるか？」

そう言われて開かれたのは電子戦機部門のページでそこにはE A-18Gの改造機の画像が何枚か添付され、日本語と日本語の文字が並べられている。

この画像のE A-18Gだが、まずは機首の延長と3つ膨らみの追加、機首に合わせてバランスと機動性向上の小型カナード翼の追加にストレーキの延長、更にストレーキが発生される空気の渦から尾翼を守りながらブレンデットウイングボディを意識した形状になる様にデザインなコンフォーエルタンクの追加。

固定装備では主翼の端に搭載された電子機器を尾翼の頂上に移動してミサイル搭載量を回復しつつも機首部の3つの膨らみの内機首横の2つは固定武装として12.7mm機関銃を2基2門を基本搭載とし、一番大きい機首下の膨らみには二連装型12.7mm機関銃か螺旋弾倉対応スリム型20mmリヴォルバーカノンないし電子装

備の追加搭載が行える。

正しく原型レイプを受けたE A ー18 Gを見て全員が首を傾げる。「まあ、此処に掲載される奴は飛行機の各部門の有識者が最低で3人、有識者の意見を現実的にする技術者が各所で最低3人に現実的な案を形にする職人が最低でも1人、そして現実的で有るが常軌を逸脱せず、常識に囚われない狂人が1人だ」

「あ、成る程。つまりはバトラさん見たいな狂人はアイデア料でも稼げると」

合点が行ったと話したフアントムの言葉で残りの全員がバトラが雑誌を読んでいた事が分かった。

つまりは自分の案が採用されていたならそれで金を請求出来るからだ。そして雑誌の文章にも武装やコンフォーエルトクスの案がバトラからのアイデアである事が掲載されていた。

「正解だ。要らないと思うけど、ご褒美は欲しい？」

「部屋の鍵を開けておいて下さい」

「罨仕掛けておくわ」

ご褒美とは言えない言葉にフアントムは内心で罨さえ突破すれば何してもいいよと判断したのかやってやると雄叫びを上げるが表では面白くないですねと仏頂面を浮かべている。

「それなら普通に通達来ませんか？」

「来るよ。こういうのはトラブル回避で本社経由で社内同士でしかないから」

ならどうして雑誌を開いているのかベルクトが再び問い掛けるとバトラは苦笑いを浮かべながら企業が作る正規改造品のページを見せる。

この雑誌には所謂プライベートター達の機体と改造機を商品として扱う企業、車で言うゲンバラの様な企業が出展するプロフェッショナル達の機体が同時に掲載されている。

「何か買うんですか？」

「本社が戦力強化で新しい武装を与えるからその武装用に使って言う通達」

「？ 何が来るんです？」

「ADFW01の背面専用武装」

何に乗せるつもりだよと思っているとその武装の資料を見せるとファントムが顔を青くする。

その武装とはEPCM下でも問題なく動ける無人機の制御ユニットだった。

「つてー！ 実験武装じゃないですか！」

更にファントムは上海上陸作戦で裏切ってきた無人機ブロウラーを思い出す。

ザイにハッキングされ自分達を撃ってきた無人機とアメリカのドクターを操るF/A-18Eのアニマ、ライノもさえも撃つて来たあの作戦でファントムは機体の制御ユニットであるアニマはあくまでも火器管制装置、グリペンと慧の関係が最も望ましい形であると認識しだす機会にもなった。そして同時に無人機という存在に対する生理的嫌悪も抱く切っ掛けとなる。

無論ながらバトラは長い事……よりかは濃密な関係を築いているファントムがそう言った事を抱いていることは知っている。だが、今回の話はバトラ個人としては戦力強化などの業務的な所では無く、今回の商談相手が心情的にどうしても断り難い相手であること、そしてこれが本部から新型ザイのデータを獲得した為の特別報酬でもある為に取り敢えずは買うつもりである。

「で？ お相手は、女性ですか？」

ファントムも心情的な意味で断り切れないバトラを悟ってか何処か威圧のないし怒気を僅かに孕ませた声で問う。

「……いい「嘘ですね」……何でベルクトが……」

ファントムか片宮姉妹が嘘を見抜くと思っていたが、言い当てたのはベルクトだった事もあり手強い味方が出て来た事に頼もしいと思うと同時に恐ろしいと思ってしまう。

「はい、女性です……」

「その方から何をかうつもりで、いつ来るんですか？」

「UAVです。そして今日の午後、民間エリアで飛行機で乗り付けて、

そこから徒歩でこつちに「来ちやつたわ」

バトラの背後から無音で近付き、抱き締めて来た美人女性を見てファントムとベルクトは固まり、片宮姉妹は口と目を開いて固まる。バトラは早過ぎる登場に固まっていたが直ぐに復帰してブリキ人形のような動きで顔を上に向ける。

「誰？ あの人」

「アマーリア・トロボフスキー。私の実家、ダツソー社のUAV・兵装部門の部長兼兵器ブローカーであり、UAVエース。今回はバトラに売るUAVを勧めに来たらしい」

金髪碧眼の活発少女という言葉が一番合う雰囲気を漂わせるイーグルの言葉にアマーリアを護衛していた紫帯びた黒髪長髪のキャリアウーマンという言葉がぴったりなラファールが答える。

「アマーリア・トロボフスキー。ダツソー社のブローカーですね。確かにバトラさんほどの腕であれば常連、上客かもしれません。が、馴れ馴れしさが過ぎるじゃないですか？」

ファントムのその言葉にバトラは落ち着けと手で制し、アマーリアも自立するまでの子供を育てきった様な母親が持つ落ち着いた雰囲気ですらファントムに答える

「彼とは客と店員って関係だけじゃないのよ」

「ヴァラヒア事変の時に会ってね。終局してからは自分の義息子にならないかって誘いも来たんだ」

それを聞いた片宮姉妹も何となく理解してしまう。

バトラ自身は悪ぶろうとするがそれでも隠し切れないお人好し、優しさが滲み出てしまう。巷で言うただ素直で優しいだけでなく少しは悪げがあるがそれが可愛い感じになってしまいう息子や孫の様な雰囲気になってしまっている。

それに合わせて親しい友人や当時は片思いだが寄せられ、寄せていた相手が死んだとしても変わらない雰囲気。隠された薄幸感が子供がいないアマーリアの隠された母性かなにかを刺激してしまったのだ。

「アマーリアさん。時間は速いですが商談を始めましょう」

「もう！ 固い、固すぎるわ。バトラちゃん。家族とお話しするつもりでいいのよ？」

歳の差は親と子の差が2人だが、アマーリアは腐っても美人。バトラを狙う乙女4人から見れば十分過ぎる強敵である。それを察してか、胃に穴が空きそうなので早く進めて下さいと目で訴えるバトラにアマーリアは残念そうにしながらも仕事の目付きへと変わり、資料を見せる。

内部は当たり障りの無いジェットエンジンを搭載した無人機達が占める中でバトラの目に留まった機体があった。

「なあにこれえ……」

見せられた無人機は三胴式の機体。エンジンはターボプロップエンジンを2基に串型配置でジェットエンジンが搭載されている。

胴体中央部は蝙蝠の様に幅広でそこに内臓懸架で2発、外部懸架で4発に20mm機関砲を2門備える。

「無人機同士のドンパチに限れば機銃が過剰ですよ」

無人機の搭載機銃としては無しか12.7mmが主流だ。20mmクラスからは重量的な問題で余り乗せたがらない。

それを聞いたアマーリアは頷いて答える。

「これね。航続距離重視の機体だけど、搭載量とか機動性とかは他と同じ位あるのよ」

性能諸元も悪くなく、サイズ的にもF-5クラスの小型機を買うと考えれば1機の予算で2機と保守部品が幾らか買える価格帯である、何よりもオプションパーツ次第では母機誘導だが、長距離ミサイルの運搬・発射もこなせる上に無人機にしては大柄で航続距離もあり、拡張性の高さ故に他の無人機の空中給油機としても運用可能な事もバトラは魅力に感じていた。

「あ、これは全翼機ですか？」

フロントムも気にしているのか覗き込んだ時に視界に飛び込んで来たのは全翼機の無人機で全体が蝙蝠の様な見た目をした半ステルス性能を持つ機体だった。

性能としてはターボプロップとジェットエンジンを1基ずつ搭載

したオリジナルの串型配置エンジンを1セット2つを搭載してマツハ1を超える程度の速度を有した上で完全内臓式で6発を懸架した上で機銃は機首横に20mmか30mmの機関砲を2基搭載する。

「ターボプロップ邪魔では？」

「これが重要なよ」

思った事を呟いたフロントムだが、完全ステルスのジェットエンジンのみの型では行動半径の問題で付いて来れ無い仕様になっていた。だが、こっちの型ならターボプロップの性能がいいのか巡航速度ならターボプロップだけで追い付けるので燃費向上による行動半径の増加でバトラの行動半径に付いて来れる機体に仕上がっていた。

「こっちは対地向けでしょうか？」

詩鞍が見つけたのは余りにも異質は無人機だった。

形状こそ普通の後退翼機だが、胴体に対して長い主翼に2基のターボプロップエンジンを推進式で搭載する事で作った余剰範囲のエンジン前方にレーダーなどの電子装備を納めた事で空いた胴体中央に、螺旋弾倉式50mmリヴォオルバーカノンを搭載した上で翼にも多数の兵器を懸架出来る。

「A-10みたいな機体と一緒に使うって事が多いわね」

速度はA-10程度で有り、無人機故に広域殲滅力は劣るが機銃での貫通力は優れている。運用次第ではA-10程の速度の機体なら専属の対空護衛機体としても使える。

これも魅力的に見えて来た詩鞍だが、詩苑は別の機体に目が付き、その内容を見て絶句した。

「水陸両用水素ロケットUAV……」

半格納式のフロートをもつ搭載した無人機で、水上に着陸する事で自動で水素燃料を作り出し、ロケットエンジンへと補給、点火する事で推力を得る無人機だ。

武装は胴体に無誘導投下型兵器を2発まで外部懸架し、胴体を挟む様に配置された爆弾倉に無誘導投下型兵器を6発まで搭載出来る。電子機器は無人機の操作に必要な最低限のみと安い。だが、武装が貧弱かと思っていた詩苑だがアマーリアが爆弾発言を投下した。

「母機の誘導が有れば大型対艦ミサイルなら2発、ペンギンなんかの小型なら8発、強化型ボディなら大型対艦ミサイルを3発まで強化出来るわ」

速度性能も現行ジェット以上の速度が出せる上に専用コードで牽引すれば追加で対艦ミサイルを運べる。使い方次第では時間に糸目をつけなければ立地次第では無限に行動できる。

F-2Xの対艦性能強化には持つてこいの無人機型ハードポイントの様な運用が出来る事に魅力を感じた詩苑はこれもいいですねとバトラに上目遣いで勧めるとアマリアもこれでもか勧めて来る。

「べ、ベルクトお前は？」

多勢に無勢。そう判断したバトラはベルクトに話題を振って2人から逃げようとする。

振られたベルクトも一瞬だけ驚くが直ぐにバトラの意図を理解したのか資料のページを結構な枚数を捲ってコレですと見せる。

「それってアクロバット用よ？」

アマリアがベルクトの指した写真を見て首を傾げた。

中央がVを逆さにした様になり抜いた独特な形状の水平尾翼を持った胴体びジェットエンジンを1発と逆ガルウイングの前進翼にも後退翼にも見える独特なレイアウトの主翼には半格納式の大出力小型モーターを推進式で2基搭載し独特な形状の機体だった。

「ん？ 元は戦闘向けなのか？」

使い手を選ぶ程の機動性故に扱い切れなかった事と機体形状に加えて、作戦行動をするには胴体中央に増槽を付けなくてはいけない為に武装が制限される問題で短距離ミサイルしか載せられないなどの制約も多く成功しなかった機体だったが、バトラはミサイルの豊富さに惹かれた。

翼端に1発づつ、主翼の斜めった部分に上下で2発づつ、モーター部分に1発づつと12発。機銃武装は12.7mmをモーター部分前部に二連装を1基づつ搭載している。

「あ、でもこれじゃないとドーターについて行けなさそうだな」

今までの無人機は動画もタブレットで見えていたバトラ達だが、対

G無視の機動が出来る無人機でも機動性ではドーターにはついていけない為に対ザイ戦では追加のハードポイントとしか期待出来ない無人機だったが、この機体だけはドックファイトでも戦える性能を持っていた。

「エースかプロフェッショナル以外は置いてけぼりにする機動性にミサイル携行量……これ以外の選択肢が無いのでは？」

「ファントムも話も理解できるが正直に言う空対空しかできないのはちよつとな……」

単機が単機が重要なPMCでは単能機は扱いに困る場合がある。悩むバトラだが、本社からは値段は気にしないから買いたい奴買えと許可を貰っている。

「この5種、3機づつ」

「わかったわ。直ぐに用意出来ると思うわ。ただ、ベルクトちゃんの奴はアクロバット用に外された奴を付け直ししないとイケ無いから少し待って頂戴」

そう言いながらアマリアは契約書を取り出し、バトラも急ぎでは無いからちゃんとした奴を寄越してくれと言いながら必要事項を手慣れた様子で書き込むとアマリアは急用でフランスに戻る様にコンサルタント兼ボディーガードに言われると名残惜しそうにしながらも去って行く。

「楽しみですね」

「あわよくばスライス用の機体出来るかもな」

「いい案ですね」

笑い合うファントムとバトラだが、後日に本社から少しは自重しろと言う文句と試験運用武装のデータと機体が交換条件に変えられてバトラはorz状態になる事には誰も予想だにしなかった。

特殊作戦 聖夜の日の奇跡

「数が多過ぎる!!」

爆撃機の群れを高速で飛び抜けながら機銃を放つ為にステイツクのトリガーを引くバトラ。

場所は日本海上空。ザイの爆撃機迎撃戦なのだが、僚機は大量の護衛機に阻まれており、爆撃機部隊に接敵出来たのはバトラだけだった。護衛機は既に他の僚機に刺し向かっていた事もあり、今は爆撃機だけの丸裸も当然だったが、バトラは苦戦していた。

「電子妨害もだけど、機銃がウザい!!」

電子妨害によりミサイルが使用できなくなったただけで無く、今回の爆撃機は機銃が爆撃機にとつての脅威だった時代の機体らしく、各所に機銃を搭載しており、弾幕により思う様な迎撃作戦が展開出来なかった。

それでも、一撃離脱を繰り返しながら何とか数を減らそうとするが、同じ機体を狙った数回のアタックで1機を撃墜出来る状態だった。

機銃弾は撃てる時に撃って、1回で仕留めているので減りこそ少ないがアタックを途中で辞めねばならないなどと言う状況だった。

「電子戦機をー!」

そう言いながら電子戦機を探す、機銃の嵐がそれを邪魔する。

せめてミサイルが使えれば。そう思った瞬間に雲を突き抜けて、一本のミサイルが飛来した。

「!? このミサイルはー!」

誰が、という言葉は吐かれる直後に雲から飛び出した僅かにブルーサファイアに輝く見た事の無い機体が現れると、目の前の爆撃機の操縦席に当たるだろう場所を撃ち砕く。

頭を失った爆撃機は機体を駒の様に回転させながら落下する。その様子を戦果確認をする余裕が無いのか、機銃群を躲して、爆撃機の群れから離れる様に飛行するサファイアブルーに輝く機体。

バトラはサファイアブルーに輝く機体から離れる様に飛びながら

も、主翼と胴体に照射する様に爆撃機に機銃を浴びせて、爆撃機の群れから離脱する。

機銃の攻撃が疎らになる場所まで離脱した2機の戦闘機にそれぞれ乗る男性パイロット、バトラと御木静一、そして静一の後席に座るライノと呼ばれる少女も同じ思いを同時に抱く。

あの機体は何かと。

「あの機体とコンタクトは？」

静一は後ろの少女、ライノに可能か問う。EPCM環境下では、通常の電子装備は使えない。アニマによる制御を受けた電子機器、もしくはAJZ装置を乗せた機体の電子装置だけである。

「うーん、EPCMがキツ過ぎるね。さっきのミサイルもリソースの殆どを割いて漸く爆撃機に百発百中レベルだからねー」

静一とライノが乗る機体、F/A-41Aは後席のアニマ、ライノの制御を受けた電子機器を乗せる戦闘機だ。

その性能はAJZ装置を乗せた電子機器を載せるバトラのI-444 ウプイリよりは強力だが、それでも無効化させるEPCMが周囲の空間を覆っていた。

「CCISは？」

F/A-41Aに搭載された特殊兵装とも言えるコンピュータの存在を指摘するが、バックミラーに映るライノが被りを振る。

全くの無反応だった。だが、反応が無いと言う事である事がライノにはわかっていた。

「静一、アレはアニマの乗ったドーターじゃない」

CCISと言う装置をよく知るライノの言葉を静一はそんな筈は無いだろうと思いつつも信じた。

常識的に考えれば、バトラの機体はドーターでパイロットはアニマだろう。だが、アニマの乗るドーターに必ずと言っていい程にある筈の輝く装甲はウプイリには無く、あるのは手入れを欠かさずされている装甲だけが放てる陽光の反射のみだった。

「じゃあ、なんだ？」

「わかんない」

戯けた様子で告げるライノに静一は何も言わずに前に向き直る。この間にも機銃の弾を回避する為に機体を小刻みに動かしているのを見るに、腕は確かなパイロットの様だ。

「なら」

少し危険だが、ザイを撃った事実仲間と言う訳では無いが、敵ではないと判断してか、ゆっくりとF/A-41Aの前に出るとバンクを振る。

それを見た静一もバンクを振り返すとその反応に満足したバトラは機体を翻して、爆撃機の群れへと向かう。

「今のは？」

不可解な行動にライノが静一に問い掛ける。

バンクと呼ばれる行為は簡単に言えば主翼を上下に軽く揺らす様な動きで、意味としては戦闘機動と言うよりも、通信機が乏しかった時代に味方や謝辞を告げるなどの意味で使われる動作だ。

今の時代では早々に見ない行動だが、静一はこのバンクの意味を知識として知っており、バトラは前世から引き継いだ記憶の中の1つとして知っていた。ローテクとはハイテクが使えなくなった時に珍重されるものだ。

バトラは上方から攻める為に上昇後にハンマーヘッドで機首を下に向けるとスロットルを開けて加速する事で機銃の嵐を誤誘導させた上でイワシの群れの中で一通り暴れた後に抜けるアシカの様な動きで離脱を行う。

バトラが背中を見せて離脱しようとする機銃は集中するが、群れの中から黒煙や炎を吐きながら数機が落ち、空いた機銃の隙間からF/A-41Aがヘッドオンで突っ込む。

これで数機の爆撃機が頭を吹き飛ばされる形で空中をゆっくりと回転しながら落下する。

F/A-41Aはエルロンロールから背面急降下で離脱と同時に別の爆撃機を撃墜、さらにライノが最初から最後まで誘導するミサイルで1機を撃墜。その際の残骸が別の爆撃機に乗った事でもう1機を撃墜する。

此処まで撃墜しても爆撃機の群れは徐々に日本海を超えて本土に近づく。

2人とも小松基地からの出撃だった故に焦りを見せ始めた瞬間にまたも雲から1発のミサイルが飛来し、バトラの下を素通りにして爆撃機に偽装していた電子戦機が撃墜される。

〈エルジア・フアーバンテイ社所属のアクイラ隊の1番機のAQUILA01よ。そちらの方々は味方？ それとも敵？〉

黒を基本色に白と黄色の混ぜた迷彩色に塗られたS-32が雲間から現れる。

この機体はドーターの特徴を持っていない事は静一にもバトラにも分かっていった。同時に通信機からノイズが消えている事にも。

〈マーティネズセキュリティテイテイ社所属のアンタレス隊1番機ANTARES01。ザイを共通の敵とするならば敵対する気は無い〉

〈ステラ社所属のステラ隊1番機STELLA01。此方も敵対する気は無い〉

それでもまずは敵でない事を示し、離れた場所で互いに近付き、敵意が無い事を示す。

〈初めまして。せい……STELLA01のWSO、ライノだよ〉
〈紹介が遅れました。E/F-117G ゲイザーのアニメでAQUIL02、です〉

残りのメンバーが漸く、交流らしい交流が出来る様になると機銃の嵐が吹き荒れ、各機が旋回で逃げる。

〈ゲイザーは未熟だな。電子戦機らしく援護を！〉

バトラが瞬時にゲイザーが空戦能力に難があるパイロットだと見抜いて指示を飛ばす。

やはり、ヴァラヒア事変とゴールデンアクス事件で戦争を経験したバトラの身に不思議と宿ったカリスマに偶然にも出会ったパイロット達は自然とバトラの言葉に反発はせずに従う雰囲気纏わせる。

〈電子戦機の位置破壊を。他のメンバーは各個に自由攻撃！〉

それでも、バトラは他の機体の性能も実力も知っていない事もある。

り、ゲイザーにのみ指示を飛ばす。

ゲイザーもAQUIL01よりも強いカリスマを秘めた口調に素直に従い、電子戦機を見つけると2発のミサイルをリリースする。

放たれたミサイルは白煙を引きながら、電子戦機のアニマが持つ類い稀な演算能力から生み出された巧みな誘導を受けて機銃の網をくぐり抜けて、爆撃機に守られる様に飛んでいた偽装電子戦機を破壊する。

〈よし!! ミサイルロックが出来る様になった!!〉

未だに周囲のレーダーを妨害する程のEPCMが撒かれているが、対ザイ様にチューンされた電子装備を邪魔する電子戦機だけがばら撒くEPCMが無くなった事で短距離だけであるが各機のロックオン機能が正常に作動する様になる。

バトラは此れ幸いと一旦は爆撃機の群れから剥がれて、ミサイルロックオン機能の調整を行う。

その隙を埋めようと動いたのはAQUIL01、ミュベール・スタークスが爆撃機の群れに飛び込む。

パワーダイブをしながらの攻撃で一機を撃破するとそのまま下に抜けるが、此処で一手間を掛ける。

〈ゲイザー〉

〈了解〉

短い通信だが、それだけで彼女達は意思疎通を行い、ミュベールがミサイルをリリース。ゲイザーが誘導を行い、ミュベールが離脱する際に危険だろう爆撃機を優先して撃墜する。

ゲイザーの援護を貰って離脱したミュベールが通った穴に今度は静一が飛び込み、爆撃機の群れを突っ切るルートを選ぶ。

前方から迫る機銃をバレルロールで躲し、最も密集した地点に機種を向けると同時にFOX2のコールサインと共にミサイルをリリース。リリースされたミサイルはライノが完璧に誘導して見せて撃墜した。

〈イン・ガン・レンジ、ファイア〉

その間も静一は爆撃機に喰らい付く。

正面の爆撃機に機銃を叩き込んで黒煙を吐かせると、そこ爆撃機を撫で躲す様に機体を逸らして素通りした際に放たれた機銃は空を切り、別の爆撃機に命中して撃墜する。

「アハハ、同士討ちしてる」

楽しいと言わんばかりにライノの笑い声がコクピットに響く。だが、同時に目が慣れて来たのか、機銃が塗装を剥がす程度だが被弾し始める。

静一はこれ以上は無理と爆撃機の主翼をミサイルでへし折り、別の爆撃機と空中衝突を起こさせ、その残骸を盾にする様に背面急降下で離脱する。

〈加速した!!〉

ミューベールの通信が響く。

爆撃機の主翼から此処に居る者ならばとうの昔に見慣れたアフタバナーの炎が吹き出されていた。

数が少なくなったザイの爆撃機が起死回生の一手に隠していた手段だった。

主翼に追加搭載されたであろうロケットブースターから得られた推力に物を言わせて離脱しようとする。

〈この方向は……小松!〉

ライノの言葉が響くとミューベールが追撃にアフタバナーを発動させ様と手を動かした瞬間に前方の1機が撃墜されると、他の機体も次々と撃墜されるが、他の3機はそれよりも目を引く光景が周囲を埋め尽くしていた。

なんて事は無いミサイルの発射煙なのだが、その量が尋常では無い。

背後から追い抜いて周囲を不規則に暴れ回る様に飛来するミサイル達。その煙が幾重にももつれ合うように空に線を引き、ある種の不思議な光景が生まれていた。

小さなミサイル故に火力が低いが、熱源を的確に命中し、さらに1機に対していくつも当たった事で爆撃機がまるで風に引き裂かれる木の葉にバラバラになりながら撃墜される。

〈全機撃墜。きょう、ん？〉

気付くとさつきまで居た3機の反応が無くなっていた。それに気付いたバトラの耳にベルクトの鈴が鳴る様な声が響く。

〈すみません。補給してたら遅れ、どうしました？〉

〈いや、なんでも……〉

バトラはそう答えるとカノープスのレーダーに新たな敵機が現れていない事が報告され、全機帰投の命令が出されと目の前を飛ぶベルクトのSu-47が目に見えてソワソワと主翼を揺らす。

〈どうした？ ひだんか？〉

〈地、違います！ 今日には25日ですよ。後でみんなを誘ってクリスマスパーティーしようって言ってたじゃないですか!!〉

今回の出撃に間に合わなかったパイロットが幼馴染とクリスマスパーティーをすると言う話を聞いて、バトラ以外のメンバーが乗り気になってしまった事とバーフォードの休暇代わりの許可が出た事で決定してしまったクリスマスパーティー。

〈そうだな、帰ろう。バトラ、RTB〉

偶然に出会った同業達との今日の共闘は聖夜の日の奇跡として、バトラの胸の内にだけ秘められた。

特殊作戦 バレンタインの地獄と黒歴史

2月14日。

世界各地でカップルの愛の誓いをする日とされる。

元々は269年にローマ皇帝の迫害下で殉教した聖ウァレンティヌスに由来する記念日だと、主に西方教会の広がる地域において伝えられているが、この辺りは諸説ある故にそこまで詳しく話さないが、一般的にはこの日にお菓子を送って恋人に想いを伝えたりする、気になるあの人との繋がりを持ち易くなる日でもある。

余談だが、この日にチョコを渡すと良いと言う話は製菓会社の商魂たくましが伺える話なのは意外と知られている。

そんな日はもれなく軍事基地である小松基地でも例外なく訪れる。ザイとの戦争中であるが、シーレーンは未だに無事で物資的な面での困窮している訳でも無く、逆にこんな時代だからと男性も女性何かしようという行動を起こしている。

女性同士は勿論だが、戦闘機搭乗員同士でもチョコを交換していたと例年とはちよつと違った光景が出来ていたが、同時に例年通りのこと言うよりはお約束とも言える光景も出来ていた。

「うう……大丈夫でしょうか……」

降り積もったばかりの新雪の様に白い肌に、照り付ける太陽光を受けてスターダストの様にキラキラとした光を放つ程に手入れをされた艶のある銀系の髪、顔には大きく丸みを帯びたルビーの様な赤く綺麗な目が白く細い身体の中で浮き上がるそれは妖精の様だが、その目は不安で曇っていた。

華奢な身体つきに色素が薄く感じられる白い肌と髪は美しくも可愛らしく、何よりもその儂げな雰囲気にも誰かが声を掛けられ無かったが、その少女の事を知る人間は皆が、内心で応援をする者とミスれば良いのにと不幸を願う者の視線に気付かずに歩き続ける少女の名はベルクトと言う。

「？」

そのベルクトが向かい側から言い争う様な声を聞いて伏せていた

目線を上に上げた瞬間に見えた3人の顔を見て、ベルクトの顔には落胆と理解を示す表情に変わる。

鴉の濡れ羽色とでも言うべき黒髪はしっとりとした艶を含ませているが太陽の光を吸う程に黒く、目も黒曜で大きいそれは可憐さを更に引き立てている。華奢な体格だがベルクトの様な儂さは無く、空で戦う者の肉が付いた引き締まった身体の双子の姉妹の姿にベルクトは小さくため息が出してしまう。

そしてそんな2人からの口撃をのらりくらりと言い躲すのは新緑の森を思わせる澄んだ薄緑色だが、手入れしなければ出せない特有の張り艶で輝いている髪にエメラルドの様に透き通った丸い目と身体は細く無駄な肉は無く、周りに振り撒く純情で純粹な雰囲気は何処かのお嬢様だと言われても領いてしまう少女にベルクトは目付きを鋭くするが、鋭くしきれないその目は恐ろしいというよりも可愛らしい感じがしてしまう。

「貴女もでしたか」

「そうですよね」

「わかっていた事ですが」

「詩鞍さん、詩苑さん、ファントムさんもおはようございます」

ベルクトに声を掛けた双子の姉妹は詩鞍と詩苑、そしてファントムだった。

この3人もベルクトと同じくバレンタインの贈り物を同じ人物に贈るつもりだったのだが、当然ながらその相手は想い人だ。恋敵と偶然（ほぼ必然の確率）でも出会えば嬉しい物では無い。ただ、誤解して欲しくないがこの4人は恋敵ではあるが喧嘩しかしない訳では無いし、共に食事をする中でもある。

「皆さんは何を？」

4人が同じ場所を目指して歩いているとファントムの口から言葉が漏れ出る。

「それを言うなら貴女からどうぞ」

「聞いてどうするつもりですか？」

警戒心むき出しの双子の姉妹にファントムは贈り物を滅茶苦茶に

するつもりは無いと前置きをしてから言葉を紡ぐ。

「同じ物だったら渡し方を考えなければいけませんから」

「それこそファントムさんからどうぞな案件ですよね？」

ベルクトの言葉にファントムは言い返しますねと流し目で見るがベルクトの成長を見てかファントムから口を開こうとすると残りの3人は耳を澄まして一字一句を聞き逃しまいとする。

「チョコ入りのマシユマロです」

それを聞いた全員が貴女にそれは無理だろうとと言う言葉を飲み込む。

意外と知られないがバレンタインの贈り物には意味がある。

ファントムのチョコ入りのマシユマロは『純白の愛で包み込む』であるのだが、毒舌で現実主義なお前が純白な愛を語るなど言いたい。

余談であるが何も無いマシユマロは『純白の愛』では無く口に入ると直ぐに溶けて消える事から『その程度の関係で留めたい』『あなたが嫌い』と言う意味になるので注意だ。

「……バームクーヘンです」

「マドレーヌですよ」

詩鞍がファントムの言葉を聞いて話し始める。恋敵だがフェアな戦いをしたいと言う思いもある。想い人が壮絶な人生を歩んでいる以上はフェアに戦って選んで欲しいと言う想いからだ。詩苑もそれを感じ取ってか自分の贈り物を素直に告げる。

バームクーヘンは何層も巻かれた生地から『幸せが重なって長く繋がる様に』と言う意味があり、マドレーヌは貝がピタリと合わさった見た目から『円満な関係』『もつと仲良くなりたいたい』である。

2人はもつと仲良くなって、円満な関係のまま、幸せが長く繋がって重ね続けられる関係を作っていた。

「私はキャラメルのカップケーキを」

ベルクトも自分の贈り物を告げる。

キャラメルは幼い頃から食べる物でもある程に親しみ深いお菓子であり、『一緒に居ると安心出来る』と言う意味があり、カップケーキは『あなたは特別な人』と言う意味があり、

ベルクトはキャラメルカップケーキに『一緒に居ると安心出来る特別な人』と言う想いが込められている。

それぞれの贈り物に全員が警戒の色を滲み出している中で件の部屋に着く。

他の部屋と特に変わった点は何も無いがその部屋だけは不思議な雰囲気がある。それは強者が寢床にしている場所にだけ漂う圧迫感の様な物だった。

この部屋も主はアンタレス隊所属にしてそのリーダー、バトラの部屋だ。

「開けますよ」

フアントムが意を決してドアノブに手をつける。バトラは起きて着替えた後は不在でなければ鍵を開けているタイプだ。

起きているならそのまま開ければいい。あえてノックをしないのは少しでも驚かせようと言う意思であり、周りはそれに何も言わなかった。

2月14日はバレンタインデー、それは乙女にとっては戦いの日であると同時にポシヤる訳にはいかない日であり、この4人の恋路でトトカルチヨしている奴一部の人間達には成功して欲しい日であると同時にポシヤって欲しいが手を出す事は条約で禁止されているので何も出来ない。

一部の人間達は部屋に入った4人に対して様々な思いを抱きながら見送る。

部屋に足音を消して入った4人だが直ぐに違和感に気付く。普通なら此処でバトラは気付いて何かしらのアクションを取ってくるがそれが無い。

それよりも鍵を開けたまま、机にうつ伏せになる様に眠るMS社の制服を着るバトラが視界に映った事で肩をベルクトが揺ると上半身は背もたれにもたれる様に倒れるとバトラの違和感に気付いた。

「ッ！ キャアアアアアアアア!!」

ベルクトの叫び声に廊下で伺っていただけの周りの人間達が飛び込もうとするが、バトラの違和感に気付いた詩苑と詩鞍のチームワークによって扉を押さえ付け、フアントムが鍵を閉める。

「耳元で騒ぐな……」

玄関先での攻防が終わると同時にシナプスが繋がったバトラが目
を覚ますが、本人が直ぐに身体の異常を感じ取った。

「妙に身体が重い……」

倦怠感などの体調不良のそれでは無い。言うならば重い防具を身
体に付けた様な重量感に両手で身体を弄ると両腕に柔らかくも触り
慣れない感触を味わう。

「……………」

それを肉眼で確認したバトラの顔が無表情に変わる。

普段のバトラであれば、座った状態で見下ろせば自分の太腿が見え
る筈なのだが、視界には妙に出っ張った胸が見え、それが重量感の証
拠である事を確認すると次は無言で足の間に片腕を突っ込んで生ま
れてから今まで付き合い続けた物があるか確認するが、普段は有る筈
の物も無くなっていた。

「な、なんじゃコレエエエエエ!!」

一言で言うならば女体化していたバトラの叫び声が響き渡る。し
かもその声が何処か女性の様に甲高い物になっていた。が、フアント
ムが頭を叩く事で一体の落ち着きを取り戻すところだった原因を探
る事にする。

「一番怪しいのはこれだな」

そう言って机に置いていたマグカップを取る。

中には飲みかけと言うか飲んでから寝落ちしたのか汚れており、ほ
のかにミルクとチョコレートの香りがする。

「チョコレートシロップですか?」

「ああ、イギリスから贈られた奴だ」

ベルクトの言葉にコレが空き箱ねとゴミ箱の脇に立てた段ボール
を指差すとフアントムが検分を始める。

「送り主はリリウム・オルコット。ああ、英国の王室関係者ですね。場
所はロンドン。何処も可笑しくは」

「ロンドン……」

フアントムの言葉にベルクトがなにかを思い出そうと首を傾げる

と全員がベルクトの方を向いて思い出すのを待つ。

「イギリス人のオカルト好きの社員さんから聞きましたけど、本物の魔法道具を売るお店があるって……」

それを聞いたバトラが頭を抱える。神はこの世に存在する事を理解している故に魔法があってもおかしくないと思えてしまう。

「戻るのコレ……」

ずっとこのままな訳にはいかない。だが、戻る方法は無いかとシロップの空瓶のラベルを確認すると意外にも直ぐにその答えが見つかった。

「目を覚まして24時間後に元に戻る……」

その言葉に全員がホッと息を吐くと同時に何かを思い付いた詩苑が爆弾を投下してしまう。

「24時間ですよね……つまりはこの状況のお兄様を色々出来るのも24時間のみ……」

「詩苑、手を抑えてー!」

詩鞍の言葉にヤバイと思ったバトラだがその時には既に両手を抑えられた上に床に押し倒されてしまう。

その状況にベルクトが気付きながらも目を手で覆うが気になるのか赤い目が指の間から見えており、ファントムも気付いたのか嬉々として混ざろうとする。

「ひ……」

3人の少女の目が獲物を狙う獣のそれになった事に息を吐いて、ベルクトに助けってくれとアイコンタクトを取るがベルクトがごめんなさいと言いながら手を伸ばすのを見て諦めた様に微笑んでからバトラにとっての地獄の時間と黒歴史が始まり、リリウムにいつか会ったら文句を言ってやると誓った瞬間でもあった。

特殊作戦 バトラだつて人間なんです!!

小松基地の隊員食堂。そこは今日を戦い、明日を生きる自衛官達の腹を満たす糧食班の班員達の戦場。そこには自衛官の制服に混じつて、何処か海軍を思わせる青い制服に身を包んだ女性が3人居た。

「お兄様、遅くないですか?」

そう零すのは青い制服に身を包んだ女性の内の1人、片宮詩鞍だ。

「今日はお休みですが……」

にしても遅いと腕時計で時間を確認するのは同じ制服を着る片宮詩苑だ。その言葉に漸く慣れて来たが未だに不恰好に持っていた箸を置いて口の中の食べ物を飲み込んだのは同じ制服を着たベルクトだった。

「バトラさんは昨日は大変でしたから」

時刻は昼飯時、それでも今日一日中で姿を一度も表していない仲間の1人、バトラを心配する。

件の人物だが、前線となつている小松基地に新人教育の一環でMS社所有の訓練機の一機が老朽化が原因か高G機動で尾翼が捩げる現象が発生、沿岸部だった事もあって、まずは訓練生を射出座席にて射出、教官席だったバトラは機体を何とか海まで持つて行った後に脱出したのだが、真冬の日本海をバタフライで泳いで基地に帰つて来る事故があった。

そんな真冬の日本海バタフライ事件の当事者はと言うと……

「お昼になつて姿を見せないと思つたら……」

このご時世ではあり得ないが、このバトラという男、休日返上で働こうとする。労働環境に煩いアメリカ企業のMS社では目の上のたん瘤とでもいう存在だった。

そんな人間が昼まで惰眠をむさぼる筈が無いと白シャツにカメラを付けた白のスカート、暗く濃い紫のコルセットスカートを付けた何処かのお嬢様を思わせる少女、ファントムはバトラの部屋を訪れていた。

「39. 1度……解熱剤は飲みますか?」

ベットに横たわるバトラにフアントムは優しめの声で声を掛けるが、その奥には呆れと怒りが孕んでいた。が、当の本人は熱による倦怠感もあつてか声を出さずに首を横に数回降るだけだったが、それを見たフアントムは青筋を立てつつも、何も言わずに迷う事なく勝手に薬箱を取り出して解熱剤を探し始める。

「(熱による倦怠感。特に呼吸は熱で荒いだけ、鼻詰まりはありませんが、喉の腫れは凄いですね。唾を飲むのも辛そうですし、首を動かすのもゆっくりで小刻み、関節痛も凄いですね……今の所は完璧な風邪の症状。解熱剤を飲ませて自己診断を聞き出しましょう……)」

フアントムはバトラの行動や表情、その他の情報から純粹な風邪だと判断するが風邪に近い別の病気も疑い、取り敢えずは解熱剤を飲ませて自己診断をさせる事にする。

が、部屋の主に何も言わずに道具を探し出したフアントムに対して、バトラに元気が有れば何も言わずに迷う事無く、薬箱を取り出した事に突っ込むのだろうがそんな事に気付けない位に熱でグツタリとしている。

「全く、パイロットはただでさえも過酷な環境に置かれるんですよ。あんな事があつたなら予防で薬を飲むとかですわね」

解熱剤を取り出すとコップに水道水を入れてお盆に乗せるとベット脇に戻りながらお小言を零す。

それが追撃になったのかバトラは更にベットに身を鎮めるが、フアントムは御構い無しにお小言を漏らしながらバトラの上半身を起さす。

お小言を漏らしながらもそのお小言は普段は違って柔らかい物であり、看護をしてくれる事には変わりない様でベットで寝返りをする事すら億劫だったバトラは黙って抵抗する事なく為すがままに上半身を起こされる。

フアントムは器用に右手でバトラが倒れない様にしつつ、左手でお盆から解熱剤を取り出してバトラの口に入れると水を含ませる。

解熱剤は風邪の治りが遅くなるが故に飲まないバトラだが、フアン

トムの負担になるから早く出て行けと言う意味もあったのだが、ファントムにはお見通しだったらしく、看護をされる事となる。

「軽くお粥でも作って来ますから、寝ていて下さい」

解熱剤は直ぐには作用しない。その時間を利用してファントムは風邪で食べ易く、尚且つ栄養価に優れた料理を作るべく部屋を出て行くとする。

「ふぁんとむ……」

「はい？」

扉のノブに手を置いた瞬間に消え入りそうな程に小さなバトラの声を聞いたファントムが壁から顔を覗かせるとバトラはベットに倒れたままの姿勢で暫く待っても次の言葉が出ない故に寝言だろうと視線を外すと今度こそドアを開けた瞬間。

「ありがとう……」

ファントムはその言葉が寝言だとわかっていても気恥ずかしくなり、顔を赤くしながら後ろ手に扉を閉めると早歩きで廊下を去って行った。

「二あ」

ファントムがバトラの部屋を出て1時間か2時間ほど経った頃。

バトラの部屋へと目指すファントムと流石に遅過ぎると様子を見に来たベルクトが廊下が鉢合わせをする。

「それは？」

耐熱性のタッパーに入れられた白い物体を見たベルクトが小首を傾げる。

ファントムはこれ幸いとベルクトにその先の看護を任せると言つて、耐熱性のタッパーに入れたお粥を押し付ける様に渡すと足早に去って行く。

彼女はさも自然な流れでお粥を作ったは良いが完成してタッパーに詰めたタイミングでこれを自分がバトラに食べさせないといけない事に気付くと気恥ずかしさから頬を朱に染めたまま戻らない状況

に陥っており、任せられるなら誰かに押し付けたいが自分から頼むはプライドとバトラを狙うライバル達に弱みを見せる事になると思うと頼めないでいた。が、ベルクトが様子を見に行くと言うならば丁度良いとお粥を押し付けて消える事にする。

押し付けられたベルクトだが、タツパーの中がお粥だと分かる。ファントムが既に見舞いに行き、食事が取れないしは取れる状態にまでして部屋を出て行ったのだと判断するとベルクトは。

「(ファントムさんも律儀と言うか公平と言うか)」

内心でファントムが看病を譲ってくれたと完結して意気揚々とバトラの部屋に向かうが移動中にお粥は冷めてしまったので入室すると同時に首を振って電子レンジを見つけるとバトラが寝ているであろうベットの視線を向ける。

「ん？ ベルクトか。ファントムはどうした？」

解熱剤で熱が下がったからか、意識レベルの回復が見られたバトラは壁の向こう側から顔を覗かせる白い髪を見てベルクトだと判断すると手招きをしながら呼び寄せる。

自分が来たのに他の女性の名前を出されるのは同じ恋する乙女としては面白くないベルクトだが、先にファントムが来ていた事、電子レンジの操作音などを考えると不思議に思うのも仕方ないと納得し、脇に座るベルクトだが……

「すまん、すまんって(サーシャもこんな事あったな)」

顔は如何にも拗ねてますと言う風に唇を尖らせてそっぽを向くベルクトにバトラは失礼だと思いつつも今は亡きウィングマン、サーシャに前隊長の未来奈の事を話す時にこんな顔をしてなど、辛い中で何気無い風景を思い出して懐かしさを感じずにはおられなかった。だが、懐かしさに浸る余裕はバトラには無い。どうしようかと思っている。とレンジのベルが鳴り、温めが終わった事を知らされる。

「まー、なんだ……頼めるか？」

気恥ずかしそうに話すバトラにベルクトは内容を察したのか、不機嫌な顔から一転、直ぐに頼られた事が嬉しいと言う風な笑みを浮かべると足取り軽やかにレンジに入れたタツパーと食器を取りに行く。

こんな事で機嫌を良くしたり悪くする女性と言う生き物に対してバトラは純粹に『わからない』『大変そう』『扱い易い』『取扱注意』の言葉が脳裏に浮かぶが、ベルクトの影が見えた瞬間にはそれを心の奥底にまで撃墜する。

「さあ、どうぞ。」

ベルクトはそんなバトラの脳裏に気付かず、ベットに斜めに腰掛けるとお碗に移したお粥をスプーンで掬い上げて、さも当然の様に自身の息を吹きかける事で冷ましてから突き出す。

「熱いので気を付けて下さい」

自分で食べようと腕を突き出そうとした瞬間の自然な動作を見ていたバトラは顔を赤くしながらも自分で食べると言った際の面倒ごとを考えると言い出せず、黙って口を開けて、食べさせて貰う。

「フアントムさんもシャイですよ。お粥を作ったのに、来ないだなんて」

ほんわかとした笑みを浮かべるベルクトだが、肝心のバトラはお粥は日本のそれではなく、少しすり潰した米を使う中華粥だった事でその食べ易さに驚くが、直ぐにその驚きは無くなり、名状し難き味に脳内が占領される。

「あ、うん。そうだね」

ベルクトが首を傾げたのを見て反応を示すバトラにベルクトは何食わぬ顔で次を勧める。

バトラは味の事を取り敢えず感じない様に雛鳥の様にお粥を体内へと流し込んで行く。もしもこのお粥が中華粥でなければ出来ない芸当で有るが故にその辺りはフアントムに感謝するバトラだが、完治して病み上がりで無くなったら必ず制裁を下すと心に誓いながら、全て食べ終えたバトラはベルクトにそれらしい言い訳をして直ぐに横になる。

死んだ様に倒れたバトラだが、ベルクトも解熱剤で下げる前は高熱だったのだろうと判断すると直ぐに自分が居ては休まらないだろうと直ぐに部屋を出た。

治ったバトラはファントムを相手にコマツ・チエイスとも言うべき
逃走劇・追走劇を展開した後にファントムは八代通の元へコブラツイ
ストを掛けられた後に連行、検査が行われた結果……
「間抜けが見つかったか」

その結果は味覚に関する部分にエラーが確認された。

本編

プロローグ 死亡から転生

「今日のお前の珍回答『細胞融合』」

「止めて!?! 出来たばかりの黒歴史を掘り起こすの止めてよ!?!」

「えー、やだー。だって面白いじゃーん」

「そんな声で言おうとも止めへんで!」

「何で、関西弁?」

「なんでやろ?」

その日あったことで賑わう、よく見かける下校風景だ。

それが遊びで建てたフラグ一つで崩壊するなど、あの時の俺は否、俺たちは思いもしなかった。

「なあ、細胞融合」

「細胞融合言うな。俺泣くで」

「別に泣き叫んでいいけど?」 「泣き叫べばいいんじゃないかな?」

「…………俺のこと嫌い?」

「そんな訳ないじゃん（お菓子くれる人として）」（メソラシー）

「ええー、好きだよ?」（からかい甲斐のある人として）」（メソラ

シー）

「ははは、そんなことないアルよ」

「うわあああん。そんなのあんまりだあー」

「そして、その後の細胞融合を見た者はいない」

「そんな馬鹿なことがあるか!あと!細胞融合言うな!」

「細胞融合!上だ!」

「へ?」

俺は上を見上げようとした時に頭部に何か当たる音と割れる音がした。

「は!? ここは……どこだ?」

目を覚ますと一面が緑で覆われた草原に寝転んでいた。

「あ! 目が覚めましたか?」

「あ……ああ。一応ね」

起き上がった瞬間にローマ彫刻の像なんかが着けてる服を着た、金髪の女性が急に声を掛けてきた。

「すいませんでした!!」

「え? え、えーと……何が?」

いきなり土下座する金髪女性に面食らう俺氏に金髪女性が説明をする。

「えーと、説明すると長くなるのですが……」

「OK。面倒そうな空気だ。単刀直入に言ってくれ」

「はい。実は……」

彼女が説明に入ったので静聴しよう。

「つまりだ。色々言ってたのを三行で説明すると。

貴方の部下のミスで俺が死んだ。

死因は頭部への植木鉢の落下。

謝罪に貴方を転生させます。

「でいいんだよね?」

「はい。本当に申し訳ありませんでした。お詫びに特典を三つお付けして転生させます」

成る程、テンプレだ。

「では、特典はどうしますか?」

「その前に聞きたいことが複数あるのだが、いいか?」

「ええ、どうぞ」

「二つ目は巻き込まれた人はいないのか?」

自分の被害が広がってたら目も当てられない。

「居ませんよ。近くにいたご友人も怪我一つしてません」

「よかった。二つ目は特典は転生後しか効かないのかだ」

これによつては選び方が変わる。

「貴方が生きていた世界でも、一部は効きます。主に非物理的な物ですが」

「成る程ね。じゃあ、転生後の世界の情報をくれ」

これは選ぶ内容を吟味する上で必要最低限の情報だ。使えない特典を貰つても死に損だからな。

「そこは私がそれ程高位の神ではないので、貴方の記憶の世界に抽選で決めます。先にやりますか？」

「頼む」

「では、三つだけ」

そう言つて俺の頭に手をかざすと俺の頭からカードが三枚出てきた。

「では、どうぞ」

引けということか。

「これだ！」

裏返すと文字が書いてあつた。

「ガリーエアフォースか」

最近になって読んだラノベのタイトルだ。舞台は現実世界だから、ファンタジー系の特典は面白く無い。

「ガリーエアフォースですね。では、特典はどうしますか？」

ここは悩みどころだ。一つは決まっているが他は決まっていない。

「うーん」

「お困りですか？」

「あ、はい」

唸つてしまつていたのか声を掛けてきた。

「上神の時はどんなチートにしようか迷う人が多いのですが、大抵の場合は大丈夫ですよ。いきすぎな物は多少の制限・条件が付きますが」

「チートは余り好きじゃない」

「えーと、言いづらいのですが…チートを一個は言つて頂けると…」

「ああ、顔が悪くなるのね」

「……はい」

「そうだな。チートは流石に失礼かと思って控えていたのだが、先方が良いというのだ。チートを二つ程は頼もう」

「はい、問題ありませんよ。三つでも良いですよ?」

「欲張りと言わなければ宜しくないからな」

「二つ目はエ〇スコンバットと二次大戦の全エースパイロット達の全機動が行える技術だな」

結構、チートだと思う。だつて架空と現実のエースパイロットの全員の全部の戦闘技術の合わせ技だ。

「飛行機がないと意味が無い技術ならそれが制限と条件ですから、問題無いですね」

意図し無い制限・条件が俺を襲う!

「二つ目は15G以上に耐えられる体が欲しいな」

これもチートだろう。人間つて9Gがギリギリなんだぜ? 15Gは確実に人間辞めてる。

「制限も条件も無しですね。15Gなんて戦闘機に乗らなきゃ味合わ無い環境ですよ?」

再び意図し無い制約と条件が俺を襲う!

「3つ目は……俺が生きていた世界に俺が存在したという事実を消してくれ……可能か?」

「可能か不可能かを答えるなら可能です。これが、貴方の存在を証明する物を消してくれ、なら無理でしたが、存在という非物質的な物なので可能ですが………いいんですか? 貴方が居たことすら忘れられますよ?」

「良いんだよ。寿命なら割り切れるが、事故で悲しまれてしまうのは申し訳が立たないからな。何事も無かった様に過ごして欲しいから」

「わかりました。では、転生させます」

「あ、待ってください! 少しお願いをしたいのだが良いか?」

「ええ、良いですよ」

よかった。訊かなくても良いがやっぱり知りたい。

「他の転生先ってなんだった？」

「え？ああ、SAOとISでしたよ？」

「どれでも、よかったな。まあ、これも運命だ。変更なんて言わねーよ。じゃあ、転生をお願いします」

「はい！」

そう言っつて、何処から落ちてきた紐を引っ張ろうとする神様を見てジャンプして位置を変更する。

「アブネー！これもテンプレだな」

「じゃあ、これもテンプレですか？」

『ゴンツ』

サイドからの強烈な一撃に耐えられず穴に落ちる俺は最後に叫んだ。

「とんね○ずの水落かよー！ー！」

(行きましたね。しかし、初めてのケースでした。大抵は全部の特典をチートにして、死んだ世界のことには気にしない人ばかりでしたが、特典の一つを潰してまで死んだ世界のことを考えるとはいけませんでした。少し、サービスマシしよう)

何処から落ちてきた革製の表紙が特徴の本を開き、何かを書き足す。神は満足気に頷くと本をしまった。

「強力な物じゃ無いのが申し訳無いですが、特典を追加しておきました」

彼がどんな風に生きるのか楽しみですね。と呟くと仕事に戻っていった。

作戦1 転生から…

『デーンデーン デン デデデン デデデデデン…』

「ケータイ鳴ってるよ〜」

（誰だ？ 俺の至福の時を邪魔する奴は……）

微睡みの中で僅かに目を開けると南海の様な青の瞳にウエービーなロングヘアに所々跳ねている髪が活発な印象を与え、やや舌足らずで幼い感じの声とデニムに袖無しジャケット、黒いタンクトップという服装がやんちゃで活発な印象を強くする。しかし、視界の下の方に映る二つの丘が大人な印象を加えている。

「……イーグルか……眠いんだ……後にしてくれ……」

上から覗き込む様にして起こそうとしていたのはこの基地に配属されている仲間の「イーグル」だ。

イーグルは数少ない対ザイ用にチューニングされた戦闘機「ドーター」のパイロットである「アニメ」だ。ドーターは操縦系統が既存の戦闘機ものとはかけ離れた操縦系統でそれに合わせた訓練を受けているらしい。

【ザイ】は2年前にタクラマカン砂漠に出現した飛翔物体だ。災厄を意味する名を付けられた飛翔物体は瞬く間に中国大陸に進出し、制圧した。ザイと対等に戦えるのは【アニメ】と【ドーター】の組み合わせと15Gに耐えられる特典で人間やめた俺だけだ。

因みにアニメとドーターの組み合わせで一機、二機と数えるらしいが俺はそう考えられないタイプだ。ていうか、パイロットと機体込みで一機とはどう言う事なのか？

「じゃあ、このケータイどうするの？」

そう言われイーグルに差し出された携帯端末を目をこすりながら受け取る。未だに携帯端末は【戦場の中】を流している。

「フアツ!？」

映し出されていた連絡先の名前を見て、俺は速攻で眠気が吹き飛んだ。

「はい！ こちらアルタイル1です！ お電話遅れました！」

相手には見えはし無いが敬礼をしてしまおう。

《まあ、寝ていたのだろうか？そんなことよりも、お前に仕事が入った》

こんなんでも怒られないのは3年前の出来事を共に乗り越えたからだ。今では上司というより戦友と言える関係だ。

「ちよつと待って下さい。移動するんで」

《聞かれても大丈夫だ。ランク2の仕事だからな》

俺の会社では仕事の機密性の高さにランクを付けている。ランク2は関係者には普通に開示される情報レベルだ。

「ランク2ね。差し詰め拠点の変更か？」

《ああ、上層部から那覇での仕事はもういいとのことだ》

「じゃあ、次の仕事の話を頼む」

《そうだな。今日の昼には那覇を出て、小松に行ってくれ無いか？》

今、俺がいるのは航空自衛隊那覇基地だ。仕事という理由からここにいるが、本当はもつと高い金額で契約してもいいという国もあつたのだが友からの頼みでは断りづらい。

そう言った理由から自衛隊の基地にいる。

「小松？　なんで？　あそこにはここと同じアニメとドーターが配属・配備されていた筈だろう？」

ここ那覇基地には、アニメとドーターの組み合わせが二組いる。確か小松にもこことは別のアニメとドーターが配属されていた筈だ。小松は過去に一度もザイからの襲撃を受けていない都市だったからわざわざ防空能力強化の為に俺を転属させる必要は無い筈だ。それを考えると俺の嫌いな政治的判断というのら政治家共の保身の道具にされていそうだ。

『我々は、手綱を喰いちぎる狼だよ！』

そう考えた俺の頭に3年前の出来事の指導者の言葉を思い出した。が、電話の主からの言葉を聞き杞憂に終わった。

《それを戦力と見れないから、君のご指名だ》

ただ、単純に戦力にならないから、らしい。防空能力の強化という

よりは繋ぎな事なのだろうか？

そういえば、あいつがそんなこと言ってたけど、解決してないのね。まあ、政治家が関わっていないならば答えはひとつ。

「了解いたしました。アルタイル1 謹んでその命令をお受けします」

仕事を受ける一択だ。

〈へじゃあ、頼むぞ。正式な書類のデータを君のPCに送っておくから確認してくれ。ではな〉

「ええ、ではまた」

そう言っただけで切ろうとした時に声が遅れて聞こえた。

〈ああ、娘が君からのプレゼントを喜んでいたよ。ありがとう〉
送ったのは星の砂だ。一人でコツコツとためて送ってやった。まだ、二桁にもいかない年齢だ。丁度いいだろうと送ったがお気に召した様でよかった。

「……仕事の電話で話すことか？」

仕事の電話で言うことでもない様な気がする。

そう言っただけで切った。

(しかし、仕事は兎も角として懐かしい夢を見たな)

俺がこの世界に神様のお詫びで転生した18年前の出来事が夢で
てきた。

俺の親は父親だけ、しかも莫大な借金を抱えていたからか夜逃げして俺は航空機にクソ親の借金返済の為に15歳から乗っている。無論、無免である。が、15か16歳の時にある民間軍事企業が自分の借金を肩代わりしたくてくれた。それを理由に航空傭兵団を抜けて肩代わりしてくれた民間軍事企業に就職した。そして就職1年目に長期の大仕事が入ったお陰で肩代わりしてくれた金を返しきり、最近になってようやくちゃんとした給料が入る様になった。因みに給料は出来高制。

「小松に行くの？ なら、私も「無理だからな」え〜〜」

小松にはイーグルがお父様と呼ぶ人物がいる。こいつの性格上、間違いないでいきそうだから先に釘を刺しておかないと絶対につ

いてくる。

イーグルはなんと言うか父親大好きっ子な子供だ。その父親は嫌そうな顔をするが。

(さてと、愛機のチェックをするかなと)

『なんで、なんで』と言いよる。大きな子供を放置してハンガーに向かう。

外に出ると潮風が吹く。

サンサンと照りつける太陽の光の中を歩く。一年前の出来事の最初の方や傭兵団にいた頃は砂漠で砂が体に付くので不快に思うがここはそうじゃ無いので過ごしやすい。

「やあ、整備はどうだい？ 今日の日に小松まで行きたいのだが、行けるかい？」

その言葉にサムズアップで答える整備員達に感謝の言葉を送りつつ機体に近づく。

俺の愛機は3年近く前に一番機から二番機の番号・位置と一緒に贈られた機体を大切に使っている。それまでは傭兵時代に使っていた軽戦闘機で仕事していた。それも貰い物^{鹵獲品}だった。

今の俺の愛機は退役したF-4B型の魔改造機だ。3年前の出来事の間は何回も傷つきその度に修理・改修・強化された機体だ。(3年以上前から手を付けられていたらしいが)最早、シルエットが原型を留めているのが不思議な位の魔改造だ。中身なんかはB型の面影すら無い。

RF-4TB-AZJ フアントムII

ミサイルの搭載数・運用能力の強化に加え対地攻撃能力と対艦能力を付加された上にある任務を遂行する為に偵察能力も加えられて、ザイの出現から1年後にザイのジャミングのみだが、ジャミングを無力化する電波を機体周辺に発生させる装置を装着するという魔改造が施された、F-4B フアントムが素体になっている。IIは二回の大規模改修を施された事を指す。

《Rは偵察機 TBはTorpedo Bomber(雷撃爆撃機)を指す。AZJは対サイジャミングの略》

「じゃあ、昼は頼むな」

ノーズに額を付けながら呟いて離れる。

「彼にも朝オイルと燃料飯を食入わせて置いてくれるか？」

「わかった。しかし……しくなるな」

天井を見上げながら呟く整備員。

「俺もだ。沖縄は好きなんだが、仕事だからな。仕方ないのさ」

そう締め括り、朝飯を取りに食堂に入ると中々の多さに食堂をやめて、売店に移る。

牛乳にシリアルとフルーツを購入して食べる事にした。昼にフライトがあるので腹にガスが溜まりそうなのは控える様にする。俺の隊の3番機が一回ガスの膨張で胃に大損害を負わせているので気を付ける。

(これ食ったら、部屋片付けよう)

と言っても、PC位だが。

部屋の鍵を返して、間借りしているハンガーに赴くと地上にいるパイロットの殆どがキャノピーを開き、タラップが取り付けられた愛機と出入り口までの間に立ち敬礼で見送りに来ていた。

「バッチリ、整備しとる。安心していけ！」

笑顔で伝えるのはこのハンガーの整備主任だ。浅黒の肌に気前の良さそうな笑顔が好印象を与えるおじさんだ。

「うううう。自分はまだ……貴方に教えて欲しい……事がまだ

……」

「イーグル歩く拡声器めく。面倒な奴に) あく、うん。仕方ない事だから」

着任時は生意気な新人パイロットだったが今でも俺を信頼して訓練してくれとも言ってくる三尉だ。こいつは、こうなる気がしたから面倒なので、黙って行こうと思ったらちやつかり来てやがった。何時か殴ろう歩く拡声器を。

「小松でも頑張れよ」

「はい (おいおい、基地司令まで来たよ!)」

なんと基地司令まで来ていた。この人は現場からの叩き上げの司令で現場の事をよく知っているからこそその行動を起こしてくれるの

で結構、頼りになる人だ。

「……じゃあ、行ってきます」

梯子の前で振り返り、敬礼しながら挨拶すると口々に『行ってら
しい』と言われ恥ずかしくなつてタラップを駆け足気味に登る。

「バッテリーオン。キャノピー閉めるぞ。離れろ」

最後の方は要らないがつい癖で行つてしまふ。これも3年位前の
出来事での癖だ。

上から一枚の湾曲した液晶パネルが降りてくる。完全に閉まると
外の光が完全に遮断されて、計器とスイッチ類以外の光がわからない
があるスイッチを押すと外からの光が入ってきたように明るくなる。
正しくは外の光が入つたのではなく、全天周モニターが写している物
である。

〈〈滑走路への侵入を許可する〉〉

〈〈r o g e r 解〉〉

スロットルを開き加速する。翼が空気層を切つて、揚力を作る。
一定の速さになると陸からタイヤが離れて空に上がつて行く。

〈〈貴機の高度制限を解除します。無事の旅を祈っております〉〉

〈〈ありがとう〉〉

高度を上げて大型機と小型機の高度の間の高度を巡航速度で小松
へと飛び、海の上を飛んでいる時に通信が入つた。

〈〈スクランブル要請！ ポイント……〉〉

那覇基地からのスクランブルだった。このスクランブル要請に俺
が答える義務は無い。

（義務は無いが……義理と借りがある！）

何も言わず俺の愛機のハンガーを貸してくれた基地司令に俺の我
儘な整備・改造を笑顔で引き受けてくれたおじさんに俺を慕ってくれ
るパイロットと隊員達にせめてもの恩返しをしたい。

俺は機首をスクランブル要請のあつたポイント方向に向けて、高出
力で索敵レーダーを飛ばし索敵する。

俺の愛機のファントムには高出力にすると超長距離まで索敵範囲
を広げられるレーダーが搭載されている。しかし、弱点もある。一つ

目は逆探知されやすい事。高出力でレーダーを使うから当たり前だ。二つ目に作動から情報を手に入れるまでに時間差がある事とECM（電子妨害）を受けた途端に性能が悪くなる。具体的に言うとな次大戦の日本製電探の方が性能が良い。しかし、これは高出力での索敵であり、通常出力なら普通よりもロックオン速度が高く、その他各種性能が少し良いくらいのレーダーだ。

そんな注意事項を思い出していると情報が届いた。

（距離は3500。中国大陸方面からの侵入。数は5機。増槽を付けたまま戦闘域まで行つて、アウトレンジで長距離ミサイルを発射してから照準を合わせる。接敵したら即座に増槽を破棄して5分で戦闘を終えれば、補給無しで小松まで行けるか？）

撃滅はしなくてもいいのだ。那覇からはバイパーとイーグルが飛んでくる筈なのだ。

〈〈俺も迎撃に出る！ 間違いなくザイだ！〉〉

中国大陸が制圧されてから東シナ海は最前線だ。そして、東シナ海に一番近い航空自衛隊基地は那覇基地。つまり、中国大陸の方向からならザイじゃない可能性の方が低い。

〈〈ありがたい。だが、報酬は出さんぞ〉〉

〈〈サービスだ！〉〉

スロットルを開いて、急ぎ足で指定されたポイントまで行く。

その頃的那覇基地では軍用機ではあり得ない山吹色に塗られた【F-15J イーグル】と同じく軍用機ではあり得ない色の【F-2 バイパーゼロ】が滑走路に佇んでいた。

「アルタイル1が居なくても、問題ないんだから！」

山吹色のF-15Jが飛び立って行く。

「……………」

少し遅れて、ラベンダーパールのF-2も飛び立つ。

〈〈BARBIE02とBARBIE04はすぐに向かってくれ。今、ALTAIR1が向かってきている〉〉

「え!? わかった！ 落とされる前に行かなきゃ！」

速度を上げるイーグルにバイパーゼロも速度を上げる。

イーグルとバイパーゼロが速度を上げている頃にはALTAIR 01はザイをレーザー誘導型遠距離ミサイルの射程距離に捉えていた。

「FOX2!」

操縦桿についたスイッチを一回押す。

主翼から一本の白い煙が凄まじい速度で発射された。

発射されたミサイルはレーザー誘導の為にレーザー照射による誘導しなくてはならないが誘導性能が既存のものより良い上に飛距離が長く、使いやすいため遠距離攻撃に重宝する。

3年前の作戦で砂漠のど真ん中に短距離空対空ミサイルと燃料を積んだ輸送車を待機させて、その付近からこのミサイルを発射、着弾後に短距離空対空ミサイルを積んで、短距離離陸能力にものを言わせて制空任務に就くという無茶苦茶をやった思い出がある。

誘導を受けるミサイルは目標に寸分違わず向かうがザイ特有の90度に近い10G超えのマニューバ、HiMATの所為で振り切られてしまう。

(まあ、そうなるな)

元から、レーザー誘導のミサイルが当たるなんて思っちゃい無い。これが当たるのは機動性が鈍い重・中爆撃機型だけだ。戦闘機型のこいつらに当てられないのはわかっていた事。だから、撃墜するのが目的ではない。攻撃し易い位置に付くための囮として飛ばした。

ポイントに着いた俺は機動が遅れたザイに上斜め45度から急降下する。

「In gunrange fire!」

機首の下に取り付けられた改造30mm連装銃から30mmの弾丸を発射するが90度に近い機動で回避され後ろに付かれる。

「missile alert」

正面モニターに赤字で小さく点滅する。

(ツチ。ロックオンされたか!)

回避機動に入ろうとした時にはモニターに表示された高度計などが赤くなる。ミサイルが発射された合図だ。

(回避は無理くせーな……ならば！)

腹と同じくらいの高さにある小型ディスプレイの横にあるスイッチをOFFからONに切り替えると小型ディスプレイに白字で

「Active defense system standby」

と表示された。

ザイのミサイルが近接自爆寸前の距離でザイのミサイルが爆発した。

後部に搭載された12.5mm弾による迎撃システムにより迎撃したお陰で機体に損傷はない。

「Target lock-on」

「(しめた!) FOX2!」

別の機体をレーダーがロックオンしたのを確認してサイドワインダーを発射する。近距離から発射されたミサイルにザイも回避機動をとるが近すぎたせいで振り切れずミサイルがザイを貫き、爆発した。

「One kill!!」

「missile alert」

「しまった!」

ミサイルアラートの表示を見た瞬間に加速するが、ザイからミサイルが発射される。

こっちはコブラ機動で熱源を隠す事で回避するが、ミサイルを発射したザイが加速して襲い掛かかって来るのを確認する。俺はそのまま推力に物を言わせて加速して、距離をとる事にする。

ザイも下から90度に機首を起こして追いかけてくるが、ザイが機首を起こしをした時に角度を変えて上昇。機首を垂直に起こした事で機体の背をザイに向ける形になるがそのまま減速を続けると一回転。下を通ろうとしたザイの背に機首を向ける結果になり、素早く30mm弾を発射するが撃墜には至らなかった。

「クッソ！」

悔しがる俺にレーダーがさつき撃ったザイの反応が無くなった事を報告してきた。その方向に目を向けると破片が舞っていた。どうも後で誘爆して撃墜したようだった。

「back alert」

後方警戒レーダーが後ろに付かれた事を報告する。

「返り討ちにしてやるよ」

俺は慌てずに機体をロールさせながらエアブレーキを全開にする。ザイの弾丸が手を伸ばせば触れてしまいそうな距離で飛んでくるが気にせずマニューバ続けるとガラス細工の様なザイが至近距離でモニターに映り出される。迷う事なく機銃を発射する。

ザイも必死の回避機動で逃げようとするが、5メートルを切った距離からの容赦ないフルオート射撃には逃げられ無かったようだ。

ザイはそのM字のような主翼の左端に弾丸が当たってバランスを崩され背中を此方に向けて、コブラ機動のような格好になる。

被弾面積が増えたザイに容赦無く30mの弾丸が殺到する。その殺到した30mの弾はザイの特徴である、ガラス細工の様な機体に穴を開けていき、物言わぬスクラップを超えて目の前でバラバラに砕いた。しかし、気づくと一機が後ろに食いついていた。

「しまった………とでも言うと思ったか？」

バレルロールしながら、エアブレーキを展開して減速。ザイをオーバーヘッドさせてやる。

前にザイが来た瞬間、ロックオンする前にAAMを発射して発射後ロックオンを使い、発射したミサイルに追尾機能を付加させる。

しかし、ザイの直角に近い角度でのマニューバにミサイルの追尾機能が追いつかなかった。

ザイは直角に近い角度でのマニューバを繰り返して後ろに付く。

「ツチー！」

増槽を破棄しながら加速して一旦距離を取ろうとするが、向こうも加速して追ってくるが後ろに火花が上がるとガラス細工の破片の様なもの下落ちていく。

〈二ヒビ。危なかったでしょ?〉

舌足らずな声が通信機から聞こえた。視線を後ろに向けると後ろに山吹色のF-15Jが飛んでいた。

〈イーグル、ナイススキル!〉

俺なら後ろに付かれてもなんとかなったと思うが助けられた身だ。ありがとうお礼は言っておく。

〈ムツフー〉

通信機から大きな鼻息が聞こえたと同時にディスプレイにメッセージが表示された。

「敵機を撃墜 enemy kill」

(いつの間?!)

バイパーから敵機撃墜の報告を貰うが、イーグルと短いやり取りの間に何時、バイパーがザイを墜としたのかわからなかった。

〈バイパー、良くやった〉

「thank you」

人見知りで話してこないの、メッセージしか飛んでこない。

結局、俺は最後まで、バイパーの声を聞けなかった。

(そろそろ、慣れてくれても良いと思うんだが……)

極度の人見知りに恥ずかしがりやには酷な話だろうと考えを改める。

念のために全てザイを落としたのか確認する為に索敵レーダーを高出力モードで飛ばすがザイの反応は一機も無かった。

〈へじやあな。最後に君達と戦えてよかった。東シナ海は君達二人に任せて良さそうだ〉

〈当たり前でしょ!バイパーと私が入れば十分なんだから!もう戻ってくるな!〉

イーグルの自信に満ちた声が通信機から聞こえる。

〈そうだな。まあ、上層部が俺に仕事を回さなきゃなら無くなる様な仕事はするなよ。ま、無理か〉

〈むつきー!どう言う事よ!〉

〈撃墜数レースで一回でも、俺に勝ったか?〉

〈…一回だけ…〉

〈あれは一般的にドロワーって言うんだぞ？〉

どっちの機銃で落としたのかわからない重爆撃型が有ったのだが、それをイーグルが墜としたならイーグルの勝ちだが、俺なら俺の勝ちだ。

判定が面倒なのでドロワーにしてバイパーにその戦果を譲ってお終いだっただが、こいつ、今になって掘り起こしやがった。

〈まあ、お前ら二人と二機が入れば問題ないだろう。頑張れよ。君達の武運を祈る〉

バンク（機体の主翼をその場で上下させる行動）をイーグルとバイパーゼロに送った後に小松へと機首を向けた。

遅れてバイパーからメツセージが届く。

「good luck」

（『幸運を祈る』…か。さていつも通りの仕事をいつも通りするだけだ）

バンクして見送ってくれるイーグルとバイパーゼロを見ながらそう考えていた俺は、新たな出会いと未知の試練が小松で待ち受けているなんて、この時の俺は考えもしていなかった。

作戦2 初めての……

ゴオオオオオオオン……

小松基地と小松空港の滑走路に藍一色で塗られたF-4が着陸する。

(なんとか着いたな……)

そう内心で呟く俺は燃料計の残量に目を向けた。

「1………か」

目盛りは最後の1つを指していた。

「貴様がアルタイル01だな」

突然、下から声を掛けられて下に目をやると小太りの醜男がいた。

「八代通さんか……」

「俺で悪かったな」

「呼び出したのはあんたか？」

いきなりの転属だ。それも最前線的那覇から前線になるであろう小松にだ。相当の権力を持った人物で無ければあり得ない事が起きている。

「正解だ。グリペンが未だに不完全な上に不安定でな。流石にグリペンだけじゃどうしようも無くなって来たから、グリペンに割く時間が欲しくて少し無理をした」

「大丈夫なのか？」

「正直に言うとお大丈夫じゃない。俺じゃなくてグリペンがな。エースパイロットを前線から後方に穴埋めで呼び出した挙句に不完全な状態なままだったら、今度こそ廃棄待った無しだな」

「なんとかしてやれよ」

「言われなくてもな」

話を切り上げて基地司令に挨拶に向かった。

「ふうー楽しかった」

お偉いさんに挨拶に行つて言う言葉じゃないだろうが事実だ。

基地司令は那覇基地の司令と違い、元ファントムライダーだったのだ。しかも、ファントムが好きで好きで仕方ないと言う様子で未だにウイングマークを維持している程で堅苦しい挨拶が終わったらF—4談義で大いに盛り上がった。

「さて、第三格納庫だったかな？」

俺は問題の機体を見る為に第三格納庫へと足を向けた。

「こいつが……」

目の前に深紅のグリペンが鎮座している。

そのグリペンはボディの各所が開けられ整備・点検が行われていた。

「近くにアニマはいないのか…」

近くにそれらしい人物はいないので別の場所に行く事にした。

『グウー』

腹の虫が補給要請を出してきた。

(そういえば、那覇で空戦してそのままこっち来てあれこれしてたからな。何も食ってない)

丁度いいので食堂に行く事にした。ごたごたも粗方片付いているから問題ない。

「はいよ」

「ありがとうございます」

食堂でAランチを貰って席を探す。

「こっちで一緒に如何かな？」

突然、声をした方に目を向けると笑顔で手を振る基地司令がいた。

「なんで、ここに？」

「食堂で飯を食う以外に何かするか？」

「そう言われればそうですね」

「だろ？後F—4で語り合えるのが、君以外に居なかったから嬉し

くてな」

お茶目な司令だ。

「そんな事より食べよう。冷えたらまずい」

「二重の意味でまずいですね」

「上手い！」

F-4 談義の花を再び満開にした楽しい朝食を終わらせた。

これがこの日あった楽しい事の最後だった。

「お前に紹介しよう。知っていると思うが：グリペンだ。お前と僚機を組む事になる」

と言つて、紹介されたのは薄い桃色の髪グリペンと呼ぶ少女だった。

「……………研究のし過ぎで頭に蛆が湧いたのか？」

元々、俺を小松に転属させたのはこのグリペンの不調の原因をより詳しく調べる為の穴埋めであつて、この少女とロッテを組む為ではない。

《ロッテはドイツで考案された戦術で戦闘機を二機一組で組む部隊単位のこと》

「お前の言いたいことはわかっているが、上もアニメとドーターである以上は実戦に出したいんだよ」

まあ、そうだ。数・価格的なことで見ればAJZ改修した方が多いし安い時間がかり過ぎるし必然的に専用機化する事になるので戦闘機の追加生産もするので部隊を作るのであればアニメ・ドーターより高くつく。さらに、AJZ改修はパイロット1人1人の脳波に完全に合致させるだけのデータ採取と不適合している間の悪影響があるので中々進めれないと言う開発期間の長さ長いのでどっちもどっちである。のだが、本社は数を揃えやすいのと考え方や利益重視でAJZ改修を世界は無人機と言うことでアニメ・ドーターを進めている。

「まあ、わかったけど、報酬の話とこいつの問題点は教えて欲しいの

だが?」

「報酬はスクランブル待機、一回に付き500ドル。スクランブルがあれば一回1000ドル。ザイの場合は一機撃墜に付き4000ドルだな」

妥当である。

「問題点は覚醒時間。簡単に言うとききていられる時間が不定期であることだな」

「待機中もフライト中もお構い無しか?」

「お構い無しだ」

「…………グリペンが行動不能になった場合のスクランブル待機は500ドル。スクランブルは1100ドル。ザイ撃墜時は一機4300ドルに変更しろ。それが条件だ」

ザイ相手に単騎突撃でロツテと同じ価格なんて死んでもごめんだ。

「…………わかった。上と交渉する」

よし!割に合う仕事になった。

「はあ、後、A J Zの最新のデータをお前のデータだけでいいから売ってくれないか?」

「本社に許可を取ってからになるぞ」

「構わんよ」

「わかった。連絡していみるよ」

因みに日本はA J Z改修も量産化を目指して行っている。

方法としては脳波が比較的似ている人物を集めて適合させていく形らしいが、専用化されたものと違い、アニマの様に全てのE P C M (電子・感覚対抗手段) に抵抗出来ないのだ。

その為にあらゆるE P C Mのデータから予め対抗できる様にデータを蓄積していなければならない。

実用化すればドーターの無いアニマの様なものができるようになる。

「降いたよ。じゃあ、データを取り出してくる」

「機体はサンカクだ」

「了解」

サンカクって第三格納庫のことだよな?」

歩き出した俺の後ろをグリペンと八代通が歩いているのに気づいた。

「なんで、ついてくる？」

「私たちも：サンカクに用事があるから」

「八代通。グリペンのドーターって：「サンカクだ」：わかったよ。待機場も隣接ってか？」

「よくわかったな。その通りだ」

はあーと溜め息を一回してサンカクに歩を進めた。

「で？これがグリペンのドーターね……」

「……そう」

静かに肯定するグリペン。

「今日中のフライトは無理そうだな……」

目の前にあるのは真紅のグリペンだ。それもOH途中のグリペンだ。

「で？どうしろと？」

八代通は気付いたらいなかったなので、グリペンに訊きながら振り向いた途端

『ドサア』

何が倒れる音がして足元を見るとグリペンが床に倒れていた。

「お、おい！っちー！これが問題って奴か！」

本社からの通知には機能喪失の問題があると書かれていたがこういうことか！これならお構い無しという訳にも納得だ。

「おい！彼女はどうすればいい！」

近くにいた整備士に声を掛ける。

「ああ、キャノピーの中に押し込んでおいてくれ」

帽子を斜めに被った不良中年がそう話すのを確認するとキャノピーの中にグリペンを座らせる。

（へエ〜ドーターの操縦席ってなんというか……）

見慣れないというか見慣れたものが無いのだ。一番大きい所では

操縦桿が無いのだ。

(あいつらってどうやって飛ばしてたんだ?)

これを見るとついつい考えてしまう。山吹色のF-15Jと紫色のF-2を…。

「おい！少し手伝ってくれ」

いきなり、八代通に呼ばれた。

「なんだよ……いきなり」

「少し、手伝ってくれ」

「何がだ？」

「拉致だ」

「………はい？」

今、俺は黒いバンに乗せられて、拉致開始場所に向かっている。因みにバンは定番H I A C Eだ。八代通が言うには、上海でグリペンが再起動するきっかけになった少年が小松基地の監視カメラに映っていたのでグリペンの問題解明と解決の糸口の為に拉致るそうだ。

「……天才って、頭のネジが複数本ぶっ飛んでるって言うけど、はっきりわかんね」

「てめーの言いたいことはそれだけか？」

「だって、その通りだろ？呼び出せばいい物を拉致るって言うんだぞ。一緒にいる女の子共々」

「いきなり、自衛隊から小松基地に来て言っても警戒して来ないだろう」

「わかんねーぞ。戦闘機好きならホイホイ来るだろう」

「違ったらどうする？」

「専門外だ」

「行くぞ」

八代通の言葉と同時にバンがドリフトする。どうやら言い争っている内に着いた様だ。

後方のバンも道を塞ぐ様に停車して逃げ道を無くすと同時に俺は

バンの扉を開け放ち、女の子の方の両手を抑えるとさるぐつつわを別の人間がつけて悲鳴をあげられない状況にする。

男の子の方も一歩遅れて確保されるのを確認するとバンに詰め込み小松基地へと帰った。

(さて、向こうは三文劇、こっちは説得だな)

トランクで暴れまわる女の子を見て頭を抱える。

(面倒なことになりそうだ)

「慧をどうするつもりよー！」

警衛所に放り込むなりそんなことを言い出す少女に内心で尊敬する。

こんな状況だ。まず、自分の身を案じる筈なのだが、彼女は一緒にいた少年のことを聞いてきた。

「助けて下さいー！彼女を止めて下さいー！」

「あ？どうし……はー、把握した」

どうも激昂して暴れまわり自衛隊員にひっかき傷を負わせており、かつ無遠慮に暴れまわり捕まえづらいのだろう。

武術を嗜んでいない奴が暴れまわるのを抑える方が難しいと聞くがその通りらしい。まあ、彼らは空自で陸自なら話は別かもしれないが

：

「あー、君。少し落ち着きたまえ」

声をかけた途端にこっちを向き飛び込んできた。

「慧をどうするつもりよー！」

顔をひっかこうと右手を振り下ろすが、俺は左手でそれを押さええて引つ張り腕を伸ばし切らせて、右手を組み抱き寄せる。

そうアームロックだ。暴れる奴を黙らせるにはこれが一番だ。

「落ち着いた？」

「落ち着いた！落ち着いたから離してー！」

「それ以上はいけない！」

「うんそうだね」

取り敢えず解放する。

「ふうー。まあ、彼から聞いていると思うけど、慧？君には大事な話があつてこんな強行手段に出たんだ。そこは謝ろう」

「慧を傷付けていないんでしようね？」

「そこは大丈夫だ」

「じゃあ、そろそろ合わせて」

「ふむ」

窓を除くとサンカクの近くで誘導灯を円を描く様に振る人物が見えた。

「よし、いいぞ。ついてきてくれ」

ドアを開けて歩き出す俺の後ろに少女・自衛隊員の順で歩く。

「ねえ。あんたの名前は？」

「俺はアルタイル01、TACネームはバトラだ」

「本名じゃないでしょ？本名は？」

「仕事の関係で教えられんなのでな。ご了承願おう」

「そう。私は明華ミンホアよ。よろしく」

「ああ、よろしく」

待合室から八代通がいる部屋までいかんせん遠いので世間話で間を持たせる。

「所で明華さんはその慧君のことが好きなのかな？」

「なんでそんな話が出てくるのよ！」

面白い具合に狼狽する。

「そりゃーね。部屋に入れてさるぐつわを取るなり、慧をどうするつもりだ。だぞ？・そうとも捉えられる」

「あいつは手のかかる弟分みたいなものよ！」

「そういうことにして置こう。ただ、一言だけ言わせてもらおうならこのご時世だ。大切な人ならできるだけ近くにいてやりな。縛るのではなく、自分が近くにいてやりなよ」

「え？・それって……」

「まあ、彼が離れようとしても、それを縛り付けずに帰って来るのを待ってられる位の器量がある方が男にはグツと来るぞという話だ」

「だから！慧と私はそんな関係じゃ無いってい「着いたぞここだ」
「慧！慧、無事だったの!?!」

素晴らしい位の手のひら返しだ。

その後は八代通が謝罪等を行い解散の流れとなった。

「いい友達を持ったな」

慧と呼ばれていた少年とすれ違う瞬間に囁いた。

「え？それはいい「早く行きな。自転車。持って行かれて知らねーぞ
？」あ、はい」

走り去っていく少年と少女を見て、あんな青春を送れたかな？と考
えてしまう。

「どうした？バトラ。あの二人を見つめて。あ、明華に一目惚…ア
ダダダ」

軽くアームロックを掛けておく。

「そんなじゃねーよ。俺の青春は全て硝煙にまみれているから二人
が羨ましいだけさ」

「そ、そうか…じゃあ、そろそろ離してくれ」

「うんそうだね」『ゴキイ』

「それ以上はいけない!」

肩から嫌な音がしたが気にせず解放してやった。

「取り敢えず、グリペンの不調の原因解明に足掛かりはできたな」

「あ…ああ」

今だに肩を押さえる八代通を放ったらかしして俺はラジオで
ニュースを聞くことにした。

〈へ本日午後四時に空母ジョージ・ワシントンが横須賀を出港しまし
た。空母ジョージ・ワシントンの他に第七艦隊などの艦艇も随伴し、
反政府勢力の侵攻で孤立した中国臨海地区との連絡を取るのが目的
とされ、中国の内戦に初めてアメリカの正規戦力が投入されることと
なり在中邦人の救出にも拍車が掛かると思われます〉

無理だろう。あくまでも行って帰ってくるだけでも奇跡とも言え
る。アメリカはアニマとドーターを一組だけしか保有していないし、
彼女らが第七艦隊に在留しているが彼女らはどっちかと言えば対地

向けの機材を使っているから護衛向きじゃ無いだろう。

(アメリカの世界の指導者思想だろうな…)

アメリカが二次大戦を終えてから世界のトップに近い状況になり、胡座をかいていたが、三年前に軍の能力の殆どを凍結させられて民間軍事会社の俺たちに世界の経済を守られて、ロシアからのクーデター組織に首都を攻撃され掛けるなどの出来事で威厳がボロボロのアメリカが起死回生の一手にやらかしたんだろう。

(アメリカが損害を受けるだけだろうが…彼女達は生きて帰って来るだろうか?)

あの戦争の最終局面から入り、生き延びたあの三番機と四番機が墜ちるなんて思わ無いが、敵の本拠地近くに行くのだから心配はしてしまう。

「……………生きて帰ってこいよ……………」

空に浮かぶ月に彼女達の無事の生還を祈る様に呟いた。

作戦3 義姉との再会

「まず、最初に彼が近くにいる時のデータが無いと何も言えんからな。まずはそのデータを集める」

朝一で八代通から告げられた言葉だが、何故に俺まで呼び出されたのか？

「まずは、今日一日少しだけだが、彼とグリペンと一緒に行動させる」

まあ、それはわかる。

「だが、グリペンは国家機密の塊でその情報を横流しされても困る」
だろうな。何せ、今の各国の軍部のお偉い方はザイの電波妨害の無効化が出来るなら10Gオーバーの機動に無人機というアニメマを優先しているしAJZシステムの開発元が面倒くさいのもある。何せAJZシステムは対ザイ戦闘でしか使わないと言うことを全世界に正式で且つ民衆にも一目でわかるような公表すると言う一文の他にも様々な条件が出されており、AJZシステムを対人戦闘で使おうと考えている国にとっては邪魔でしかないのだ。

因みに本社は契約している。

「じゃあ、どうするんだよ？」

「常に俺たちが監視につきながらデータを取るのだが…」

「八代通たちは外出するから外出している間の監視が無くなる。だから俺に監視の手伝いをしてくれってことか？」

「そうだ」

「断る！」

「一回500ドルだ！」

「……………」

正直言つて、破格の値段だ。何せ、軍隊に所属していない人間を遠くから監視するだけで500ドルだ。こんな美味しい話は無い。ならば、保険を掛けてから受けるべきだ。

「いいぞ。じゃあ、契約書と報酬は現金手渡しだ。今回は日本円でもいいぞ」

「……………わかった」

何か騙そうとしてたな。まあ、悪いが仕事なんぞ。おいしい話ほど保険は掛けておくタイプの傭兵だからな。悪く思わないでくれよ。

(さて、配置は済ませている。あとは姫様と王子様が来るのを待つだけだな)

場所は警衛所の屋根の上に陣取っている。

え？どうやって登ったて？

普通に窓枠に脚を乗っけて屋根の出っ張りに手を掛けてその手を駆動力に屋根に跳び、屋根に登った。

お前航空傭兵だろって？インジェクト後の生命維持の技術は必須事項だぜ。

そんなことを考えていると警衛所にオリーブ色の髪の少年が来ていた。

『お待ちせ』

優しい声にパールピンクのロングヘアを風に揺れて、剥き出しの白い腕は陽光を弾き美しい。

(イーグルはどうだったかな?)

イーグルはあの性格が強すぎてそういうのを意識できなかった……いや、スキンシップが多いので気にしなかったのだろうか……パイパーはそもそもあまり姿を地上で見たことが無いからわかんない。

『……………』

『……………』

『……………?』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

肝心の話が聞こえない。勘付かれたか？

そう考える目の前で特に警戒することなく歩き出した。

(あの方角は……食堂か)

場所が分かれば追跡だ。離れすぎず、近すぎずの距離を取って追跡する。バレたら、どうしよう……。鳴谷さんは一回出歯亀にされてるから面倒だ。

食堂に着いた。服はばれないように自衛隊の服に自分の階級証を付けておくが自衛隊のものとは多少違うが本職や軍事マニアじゃなければわからないだろう。

「……………う？」

「…」

「……………」

グリペンが動き出すが直ぐ振り返る。

「……………う？」

「?」

「……………」

「……………」

「…」

しまった。距離を取りすぎていて会話が聞こえない！近づくか。自衛隊の格好してるし背中を向ければ気付かれないだろう……

「ただいま」

「お茶は？」

「ドジっ子？」

「ただいま」

「箸とかスプーンとかは？」

「……………」

ドジっ子らしいな。イーグルは天真爛漫な性格でファザコン。バパーは……あれはどう見れるかな？人見知りに対人恐怖症だからな……まあアニメ一人取っても色々な性格があるのだろう。グリペンと鳴谷さんの会話も特にピックアップする様な所は特にないな。何せ、質疑応答と思えば出話だ。特に何かの諜報機関の人間や教育を受けた人間では無いな。

(それに司令に聞かなくやいけないことができた……)

周りの自衛隊員がよそよそしい……グリペンに恐怖を抱いているのだ。基地内の分裂は正直言ってヤバイだろう。内部分裂なんて目も当てられない。まあ、戦闘機乗りなんて大抵は実力を示せば信頼はされる。

『戦闘機乗りに信頼されたいなら勝ち取りな。実力を示せば簡単だ』

自分が傭兵になった時に教育をしてくれた先輩パイロットの言葉を思い出していた。

(あの人はどうしてるかな?)

少し昔を懐かしむのだった。

その後の二人は第三格納庫・アラートハンガールの近くを通り、援体壕に入った。

ここは隠れ場所が少ない以上、内部には入れないが外から内部を遠くから双眼鏡で伺う(バードウォッチング用の小さいものだ)

特に何か連絡機器に触れる様子も無く、グリペンの検査の時間まで怪しい行動をすることはなかった。

(さて、正門までつけてから話かけるか……)

「鳴谷君。八代通からの仕事ってなんだった？」

本社の制服を自衛隊員の制服の下に着ていたので脱ぎ捨てるだけでいい。

「今回のことで自分の中で可能性を考えてみた」

「ほう、じゃあ聞かせてもらおうか」

「二つ、からかわれている。解決不能なシチュエーションに放り込み、笑いの種にする」

「……………それは無いな。技本はそんなことをする必要が無い。それにリスクがでかすぎる」

「二つ、実験台されている。グリペンが人体に有害な電波を出している、それにどれだけ耐えられるか見ている」

「そんな兵器をウロつかせるか？いつ爆発するかわからない爆弾を放置しない」

「三つ、勘違いされている。俺に状況を打開する力があると本気で思われている。で、八代通は成果が出るのを待っている」

「俺も八代通に聞いた話だが、お前が張り付いた途端にグリペンが動き出したんだ。状況証拠が揃ってるからそれを確かめたいだけだろう。三つ目が一番しつくり来る」

「ちゃんと説明して欲しいだが？」

慧が凄みを出しながら話すが航空傭兵に高校生の凄みが効くわけが無い。

「それは八代通に直接言えよ。それに俺は技本の人間じゃ無いからわからんよ」

「お前は誰だよー」

「コールサイン、アルマイル01。TACネームはバトラだ。それ以上でもそれ以下でも無い」

「本名じゃ無いだろう？」

「仕事柄言えないんだよ。まあ、お前が俺と同じ世界に入って来たのなら教えてやるよ」

「……………帰るよ」

「機会があれば、また会おう」

慧は自転車を走らせて帰って行った。

（八代通が帰って来るんだったな。一応呼び出し食らってるし行くか）

八代通が待つ部屋に嫌々向かった。

「明日は技本に来て欲しいそうだ」

「は？」

八代通から言われた一言に唾然する。

「なんで？」

流星に聞かずに居られない。

「AZF—X計画の機体について、対ザイ戦闘の第一人者である君に是非伺いたい所があるらしい」

「まあ、現場に立つ人間に意見を聞くのは良いことしか無いからな。現場の人間に意見を求めたからF—15やA—10の最強神話が生まれたわけだし。良いぜ、何処に行けば良いんだ？」

「……………」

キーン

ジェットエンジン特有のエンジン始動音がハンガー内に響く。

〈〈ALTAIR1はランウェイ08に侵入してくれ〉〉

〈〈ALTAIR1、ラジャー。ランウェイ08にアプローチを開始する〉〉

〈〈ALTAIR1、離陸を許可します〉〉

〈〈ラジャー。ALTAIR1、テイクオフ！〉〉

〈〈無事の旅をALTAIR1〉〉

〈〈ありがとう〉〉

これがあるから日本の航空管制官は好きだ。

〈〈高度制限を解除します〉〉

〈〈ラジャー〉〉

別人の声が高度制限の解除を言い渡された俺はランディングギアを格納して機首を横須賀に向けた。

目的地は横須賀に停泊している海上自衛隊の艦だ。

〈〈こちらほうしようだ。ALTAIR1はこちらの指示に従って下さい〉〉

艦艇を視認した位に通信機に連絡が入った。通信の相手は「かが」の改良型でアメリカで言う護衛空母相当の大きさの海上自衛隊初の

建艦同時からS/V T O L機の運用を考えられて建艦された本格的航空護衛艦【ほうしょう】だ。

〈真剣に頼む。俺は着艦が苦手だな。海上自衛隊の甲板に穴を開けたく無いからな〉

未だにシミュレーターで何かしらのトラブルの判定を貰うことがある。

主にワイヤーの切断・ギアを折る・人を轢く・艦橋に主翼をぶつけるなどだ。艦尾にF O X 4(カミカゼ)しないだけましだろう。(三年前は良くやってた)

〈はは、了解したよ。丁度よく艦首から風が来ているから止まりやすい筈だ。艦尾から侵入してくれ〉

〈それはありがたいな。横風は?〉

〈0.3メートルだ〉

〈ラジャー〉

スロットを絞りながら艦尾に近づく、この時に絞り過ぎると艦尾に突っ込むか、海上にドボンする。かといって不足すると止まれずにタッチアンドゴー(滑走路を滑走するが止まれ無いのもう一度離陸すること)する。

とりあえず、スロットルとエアブレーキで減速して艦尾に近づき、エアブレーキで調整して着艦する。航空甲板にタッチする時は甲板ギリギリの高さでストールする感覚だ。

因みに空母への着艦はその難しさから制御された墜落と言われる。普段以上にスロットルとエアブレーキの操作に気を使って操作する。

(空戦より気を使う……)

ガゴンという音が無事に機体が甲板に着艦出来たことを証明する。俺は着艦する時は甲板の上で失速して着艦するから大きな音が出るのだ。しかし、ここで気を抜いてはいけない。着艦した場所が艦首に近いと機尾のフックがワイヤーに引っ掛けることができないうちに止まれず、一旦加速して発艦しなければならなくなる。

「うお!!」

急に来た慣性に驚いてしまう。何度やつてもこのフックがワイヤーに引つかかる度に来るこの慣性には慣れないがこれが安心を与えるのも事実だ。

(……効きが甘い!)

慣性が来て数秒後にはブレーキをかけて止めようとするが効きが甘い。

(しまった。ブレーキの磨耗か!?)

『バキィィ』

何がか折れる音と一緒に機体が止まった。

『プシュー』

空気が抜ける音と一緒に装甲で覆われたキャノピーが開くと同時に梯子がつけられる。

「ありがとう(なんの音だ?後ろから聞こえたが……)」

梯子をかけてくれたクルーにお礼を言いながら降りて、機体の後ろに回る。

「お……折れてる……!!」

フックが折れていたのだ。

恐らくだが、着艦する時にケツの下げすぎでフックを甲板にぶつけて壊れた所にブレーキが効かずワイヤーを引っ張った所為でフックにダメージが入り折ってしまった。というのが俺の推測だ。

「ああ、折った理由だが……」

クルーが説明してくれたが概ね俺の推測通りだった。

(ええと、フック修理っていくらだったけ?)

「ヤッホー」

そんなことを考える俺に能天気な声が聞こえた。

「佳姉さんか………というか歳上として雰囲気出して下さいよ。珪さんみたいです」

「なんで、そこにお姉ちゃんの名前が出る訳?」

「いい比較対象だからです」

この人は長瀬 佳さん。海上自衛隊の艦載機のテストパイロットを務めている。

三年前の戦争で空でも、陸でもお世話になったことがあるのだが、その時に姉さんと呼んで欲しいと言われたのでそう呼んでいる。因みに自衛隊に味方して欲しいと言ったのも佳姉さんからの頼みだ。

「まあいいや。お姉ちゃんって元気かな？」

「さあ。最近は会ってませんからなんとも……ただ、ブレイズさんとは通信でお話しました。惚け話ばかりでしたが……」

「あはは……はあ……」（彼氏欲しいな〜）

「所で、通してここに？F-3は正式採用されてる筈ですからわざわざ、外部の人間を呼ぶ必要はないですよね？」

F-3は海上自衛隊に正式採用されている艦載機だ。現在は一部の基地と「かが」「ほうしよう」に配備されている。

開発背景はF-35のVTOL仕様機（垂直離着陸機）の開発がストップした為に開始された。

海上自衛隊が現在、艦載機として開発するF-3A 震電IIは二年前に採用された。試作機が三年前の戦争で一部を既存の電子機器に換装して実践参加したお陰で開発予算が多くなって実戦経験を積んで、その時に有用性を見せつけたのは大きいだろう。二年前にVTOL能力などの三年前には無かった機能を載せられて、一応のカタログスペックをクリアしたので正式採用を「ほうしよう」と同じ時期にされたが、現在も開発・研究が進められている。

「なんでも、AZF-S計画にF-3が選ばれてね。それで、より良いものを作りたいから、ザイとの実戦経験の多い貴方を読んだ訳なの」

「AZJシステムの搭載ですか……でも、あれは那覇にいる時に初期型F-15の改造機に載せるって聞きましたけど、あれは廃案ですか？」

「あれは、量産型アンチ・サイ・ジャミング空海自衛隊合同計画のM s A Zシステム搭載機の場合でこっちは海自衛隊だけの計画でAJZシステムを既存の機体に載せる計画なのよ」

「なんか、量産型がそこまで開発されてるとは……」

「詳しいことはわからないけどね。会議室に行きましょうか、詳し

い話がされると思っわ」

「そ・の・前・に佳姉さんの搭乗機を見・た・い・な？」

猫撫で声で話すバトラに佳は「時間あるし、良いわよ」と即答して格納庫に直結する艦載機ようエレベーターに乗って格納庫に行く。

(なんで、レオス(アルタイル01の本名)に甘えられると嫌って言えないんだろう……まあ、時間は1時間あるし良いか?)

完全なブラコンである。因みに時間より早く着いたのは旅客機の合間を縫って離陸した為である。予定通りの時間なら30分前に着く計算だった。

(まだ、俺ってこんな声出せるんだな!?)

甘えた張本人は驚いていた。

「これが今のお姉ちゃんの乗機よ！」

カナード翼に特徴的なエアインテークのレイアウトと水平尾翼がないのが特徴ではあるがそれ以上に前にV字の様になった主翼が特徴の機体。F-3A 震電II。

そのノーズに手をつけて話す佳。

「あれ?何か違う?」

記憶にあつた機体がないものがあつた。

主翼の端にある切れ込みが少し機体に寄つていふことと垂直尾翼の根元の形状が多少変わつていふことと腹の部分にハッチのがあるのに気づく。

「あら、鋭いわね。これは02と中身が一緒なのよね。前の機体。^{ゼロワン}01は遥さんが特殊な改造を施すことになつたわ」

「絶対にアニマ・ドーター化するつもりだ(そうなんだ。じゃあ、そろそろ会議室に行きましょう)」

「そうね。こっちはよ。着いてきて」

会議室に歩き出す二人の身長も相まって本当の姉弟に見える。弟の髪が青みがかつた銀色で無ければだが……。

「ようこそ、航空護衛艦【ほうしょう】へ私は艦長の金丘 国一 佐だ。よろしく」

「よろしくお願いします。コールサインアルタイル01、TACネームはバトラです。本名は本社からの命令で言えません」

「いや、その話は聞いていますよ」

「俺は浅野 航だ。F-3Aのパイロットをしている」

「よろしくお願いします。RF-4TP-AJZ ファントムIIのパイロットをしています。アルタイル01です。TACネームはバトラなので、好きな方で読んでくださって結構ですよ」

その後もほうしょう所属のパイロットが簡単な自己紹介をして、本題に入った。

「まず、君にはこの図を見て欲しい」

そう言われてプロジェクトが映し出した図を見るエリオット。

「機体構造や形状は問題ないです。9Gまでしか耐えれない所は不安ですが問題ないかと、これ以上は実機に乗らないとなんと……」

「まあ、本職では無いからその辺りは期待していないが実際に乗って見てくれ。まだF-3はザイとの実戦を行っていないからその辺りは期待している」

「微力を尽くします」

シミュレーションルームへと連れて行かれたエリオットは整備士から機体の説明を受けて、シミュレーターに乗り込んでいた。

「じゃあ、まずは発艦から、水平飛行までやろう」

「ラジャー。何か注意事項はあるか？ 零戦みたいに発艦する時に少し沈むとか」

「……………」

「マジなの!？」

「最初に発艦する。一番機と二番機だけだから……………」(震え声)

「声は震えてるじゃねーか!!」

〈〈ALTAIR1、発艦せよ!〉〉(逆ギレ)

〈〈キレるな!?!ALTAIR1、takeoff〉〉

発艦するF-3Aは艦首から離れると少し沈んでからふわりと上昇した。

〈〈なあ、これって機体か?艦か?〉〉

〈〈へり空母で運用するにはこの大きさが限界なんだ。強いて言うなら国の政治家共の所為だ〉〉

〈〈逆に言うとF-3Aだから、出来るわけなのよ〉〉

〈〈なるほどね。水平飛行に移ったけど次は?〉〉

〈〈ああ、仮想敵を出すからそれと戦ってくれ〉〉

〈〈ラジャー〉〉

レーダーに光点が出現する。数は2機の様だ。

〈〈先制してもいいのか?〉〉

〈〈構わん〉〉

〈〈ラジャー〉〉

俺はスロットルを操作して加速した。

「艦長。なぜ、F-2Aを?」

シミュレーターに出した仮想敵はF-2Aだったのだ。

それを佳が指摘する。

「何。彼の実力が見ただけだよ。他のパイロット達も同じだろう?」

そう言われて周りを見渡すとギラついた目でモニターを見るパイロット達がいた。

(彼の実力は本物よ)

その片鱗を三年前から見せていたのを知っている私は彼がF-2如きに墜とされる訳が無いのは知っている。姉としては鼻が高い。

(捉えた。というか、このミサイルの射程距離もそうだけどき……このレーダーのロックオン距離も遠いな)

射程距離ギリギリに仮想敵を捉えた俺はAAMの発射準備に入る。

〈FOX2〉

〈FOX2〉

ミサイルを発射してF-3Aは斜め上方に横回転しながら移動したら完全に回る切らずに背面飛行して再び同じ目標にミサイルを発射した。

機体はそのまま背面急降下を開始。途中で反転して海面に腹を見せる。

ミサイルを発射されたF-2Aは下方向にブレイクを開始し、位置エネルギーを運動エネルギーに変換してミサイルを回避する。

F-2Aが運動エネルギーを位置エネルギーに変換しようとした時にもう一発のミサイルが接近する。

F-2Aは再びブレイクするが位置エネルギーは運動エネルギーに変換済み、運動エネルギーも位置エネルギーに変換す少ない間で、位置エネルギーも運動エネルギーも少ない状況では満足な回避機動が取れるはずがなく、F-2Aはエンジンにミサイルを喰らい横向きに設置された花火の様に爆発した。

3Aが上昇の為に一瞬だけ水平飛行する場所に機銃を向ける。

(成る程ね……)

バトラもF-2Aの意図に気づく。空戦は腹の探り合いである。狙っていることがバレれば後の先の取られ撃墜されるのが相場である。無論、実力が高ければ返り討ちに出来るが。

F-3Aは海面に達した途端に偏向ノズルを真上に向けて、機首を斜め上に無理矢理に向ける。

[Lock-on]

〈FOX2〉

レーダーがF-2Aをロックオンしたのを確認して即座にミサイルを発射する。

F-2Aはフレア(ミサイル用デコイの一種)を撒きながらブレイクしてミサイルの回避を行うが、ミサイルとの距離が近過ぎるが故に

フレアに惑わされずに本体を追う。

F-3Aは絞っていたスロットルを開いて加速と同時に偏向ノズルも操作して急上昇する。バトラはここに主翼を操作して機体を横倒しに変えた。

F-2Aは横機動での回避は不可能と判断してスロットルを絞り、エアブレーキを展開。同時に主翼を操作して錐揉み回転に持つていく。錐揉み回転のその複雑な機動にミサイルは付いて行けずに大きく横にずれた位置を素通りしていった。F-2Aは一旦、F-3Aを引き剥がそうと加速する為にスロットルを開こうとする頃には立て向きの状態で後ろに張り付いていた。

〈FOX2〉

無情にも宣言されたミサイル発射の合図と共に左翼に搭載されたAAMが煙を吐きながら左翼から離れて、海洋迷彩の鉄の鷲に食いついた。

海洋迷彩の鉄の鷲は空に炎の花を咲かせて、海へと墜ちて行った。

〈全ての敵機を撃墜した。次はなんだ？〉

〈F-2A01 lost〉

〈F-2A02 lost〉

〈全ての敵機を撃墜した。次はなんだ？〉

『おいおい、幾ら攻撃機のF-2Aに最新鋭機のF-3を使ったと言え一方的じゃねーか！』

『そんな事よりも！初めて乗った機体である機動をやすやすとこなすあのパイロットは何者だよ！』

『あんな機動は見た事ない』

モニターに映し出されたバトラの戦いを見て騒つく室内。

「佳さん。彼は一体何をしたんですか？」

新人と思しきパイロットには何が何やらわかっていなかった。

「そうだね。まず1を墜としたところからだけ。まず、最初の一発

は囷で位置エネルギーを奪う為のもので撃墜目的で撃つたものじゃない。本命は間を置いて発射したミサイルで間を置いてのは運動エネルギーを位置エネルギーに変えようとしたその一瞬を狙ったからだね」

「エネルギーが少ない状況じゃ、満足に回避行動は取れませんね」
納得したと頷く新人パイロット。

「でも、なんでミサイルを撃った後に背面飛行急降下をしたのでしょうか？」

「それは恐らく、ミサイルを撃たれない為だね。撃たれる前に回避行動を起こした所為でF-2Aはバトラを追って、追おうとした時に01にミサイルが、02は急降下したバトラを追ったけど、急降下中であつた事と海面の反射でロックオンがしづらいからだよ」

「02の撃墜はどうやったのでしょう？」

「それが私にもわかんないだよね」

「あれはドリフトみたいなものだね」

「浅野！でも、飛行機でドリフトって出来るの？」

話に割り込んだのは浅野だつた。浅野には何をやつとのかわかつていた。

「横向きのコブラ機動だと思えばいい」

「コ……コブラ…機動？」

新人が頭を傾げる。

「コブラ機動っていうのは機体を水平から90度上に向ける機動の事だよ。海面でやったのは180度でクルピットだけだね」

「じゃあ、あの人は機体を横に向けた状態でそのコブラ機動をやつたって事ですか？」

「そうだ。彼奴はノズルが180度全てに向く事を把握していたから機体を横倒しすれば左右両方にコブラ出来るからやったんだ。で、「錐揉み回転したから速度を失って降下した所でコブラをやつて追いかけた訳だ！」……そうだ」

「成る程。でも、普通やりますか？」

最もな事を言う新人パイロット。しかし、佳が真っ向から斬り伏せ

た。

「ザイは普通の戦いでは墜とせない。いえ、普通の戦いでは生き残れない戦場を味わったのよ……彼は」

その言葉に新人パイロットは自分より年下の少年に畏怖を抱いた。

「へいや、充分だ。この後は実機に乗って貰うから実際に操縦してくれ」

「ラジャー。これはテストだった訳だ。契約違反……と言いたいところだが、ポツとでの若造に何が出来るのと言う様な顔だったから試したんだろう？ 差し詰め佳姉さんの発言か？」

「正解だ。でも、良かった。違約金とか言ってせびられるかとヒヤヒヤしたよ」

「傭兵は信頼されなきゃ仕事が出来んからな」

「はは、わかったよ。シミュレーターはこつちから落とすよ。お疲れ様」

「お疲れ様です」
電源が落ちたのか真っ暗になるシミュレーターから出て伸びをする。

「お疲れ様、バトラ。少し休憩を挟んだら実機搭乗でテストして頂戴」

「わかりました」

ギーーーーーン

垂直二段式エンジン特有の音が甲板に響く。

「それじゃあお願いね。機体は通常のものでザイとの戦闘は不可能よ。でも、他は一緒だから安心して」

「はい。じゃあ、行ってきます」

梯子を登りキャノピーに身を沈める。

「ALTAIRI発艦を許可します」

「ラジャー。エンジンスタート」

エンジンがアイドリングから起動し回転数が上昇する。

〈ALTAIR1発艦します！〉

真ん中から艦首の方向に滑走する。ほうしようににはカタパルトもスキージャンプ式飛行甲板もデッキも政治家の所為で装備されていない為に昔の空母の様な発艦が要求される。

〈ALTAIR1発艦成功。高度制限を解除します。試験飛行を行って下さい〉

〈ラジャー〉

そう言われて様々な機動を行う。

(うん。結構ダイレクトに機体に反映されるな……良し！次は増減速をチェックしよう)

エアブレーキを操作したり、スロットルを操作したりなどして色々試す。

(……ここここは改良した方が良さそうだな。全体的には90点かな)

試験飛行終了時刻になったので一旦、艦に帰る。

「取り敢えず、カナード翼だけど、あれをマニュアル制御できる様にした方が良いと思う」

カナード翼がグリペンと同じ様にスロットルを絞ると直立してエアブレーキになるのだ。エアブレーキを作動してもカナード翼が稼働しないのだ。

「何故？」

佳姉さんが質問するので正直に言う。

「安定性の為なら正解だけど、対ザイ戦闘になると出力を維持したままでエアブレーキのみで減速が出来ないのは辛いよ」

「如何してだ？」

浅野さんが質問する。

「ザイは加速もだけど減速も微妙な速さがあることと急減速して

オーバーシュートしようとしても急加速で逃げられる。となるとこつちも加速すれば良いんだけど、向こうは追っていて速度が乗っている。こつちは速度が遅い。ザイの速度に追いつこうとしてスロットルを開ける頃には向こうは加速しきっていて、HiMATで背後に回ってるんだよ」

「そんなに速いのか！」

「速いと言うオーバーシュートするとわかると追わずに離脱するんだよ。だから、こつちはスロットルを絞らずにエアブレーキだけでスロットルを絞った場合と同じ位に減速しなきゃならない訳」

「じゃあ、エアブレーキを増やせば良いじゃない？」

「エアブレーキを増やすとなると一回工場に持っていかないとダメでしょう？」

「費用とかを考えるとプログラムの変更と操縦席の簡易の改修で済む訳だ。他は？」

「垂直離着陸用のファンを飛行中でもハリアーみたいに使える様にした方が良いと思う」

「ハリアーに乗ったことあるの！」

佳が驚く。彼女達も訓練過程でVTOLに慣れる為にハリアーを使用した。使用していた。

「ええ、亡霊撃墜後にイギリス女王陛下から勲章と一緒に頂きました。まだ、保持してますよ」

「だが、何故にそう思ったのか聞いて良いか？」

「ザイのミサイルがあり得ない角度で飛んでくるとザイのHiMATに対抗するにはショートカットしかありませんからね。例えば、後ろに回ってくるならヘリみたい後ろに回るとか」

「ガンポットガン積みハリアーが初めての撃墜記録らしいが面制圧とそういった移動が出来るからか……」

「ハリアーは足が遅いのでカモに成りますけどね。だいたいこんな所ですね」

「ありがとう。私たちでは出てこない意見ばかりだったよありがとう」

艦長が締めに入る。

「いえ、役に立ったのなら幸いです」

「明日には君の機体も修理されているか帰れるよ。故障箇所以外は触らせてないから安心してくれ」

「わかりました。では、後日にここを出ます」

「では、宴会でもしようか。食堂で準備は整っているから直ぐ始めるぞー」

そう言つて我先にと食堂に向かう艦長から廊下の壁に反射した声があつた。

「酒が飲めるぞー」

「「「「飲みたいただけじゃねーか!!」」」」」

全パイロットのツツコミが艦内に木霊した。

作戦4 小松防衛戦そしてエースの道

〈〈ALTAIR1の発艦を許可します〉〉

〈〈ラジャー。モーターを点火する。甲板要員は退避してくれ〉〉

この放送が入ると甲板要員が急いで甲板より下の場所に入る。

〈〈甲板要員の退避完了。モーター点火よろし!〉〉

〈〈モーター点火!〉〉

RF-4TP-AJZには機体中央にロケットモーターが搭載されていた。

RF-4TP-AJZは短距離離陸が出来ない以上はカタパルトかスキージャンプが必要だが、それが無い「ほうしよう」から発艦するには爆発的な加速を叩き出し揚力を得るほか無い。それがロケットモーターの装着である。

ヒューゴオオオオ!!

ロケットモーターから轟音が出ると全通甲板を疾走しタイヤが甲板から飛び出た途端に引き込み、そのまま水平線と平行に加速する。

〈〈ALTAIR1の発艦を確認した〉〉

甲板に歓声上がる。そんな中で佳はALTAIR1が飛び去った方向に目を向けていた。

「どうした、長瀬」

「うん? いやね。昨日の事を思い出していたの」

「何かあったのか?」

「昨日の宴会の時に自衛隊に入らないかって誘ったんだけどね…」

「断られたと、その理由は?」

「魅力的だけど、少しだけその翼の行く先が気になる奴らがいるから断るよ」だって

浅野は空を見上げた。その翼の行く先が気になる人物は誰なのかと気にしながら…

ALTAIR1はモーター内の燃料が無くなると海上に放棄して小松へと飛翔し近づく。RF-4TP-AJZに小松から通信が入る。

「ALTAIR1は今すぐ島に向かってくれ！ザイが現れた！」

「何機だ?!」

「6機！」

「すぐに向かう！」

即座にアフターバーナー全開でマッハ2.0の速度で島へ飛翔するALTAIR01のRF-4TP-AJZのレーダーがすぐにグリペンの姿を捉える。

「グリペン！撤退しろ！流石に6機も相手じゃきついだらう。俺が時間を稼ぐからすぐに撤退しろ！」

「断る。ここは彗との思い出があるから、私が守る」

「そんな事はしつかりと飛べるようになってから言いやがれ！」

空になった増槽を破棄したお陰で速度が乗り、グリペンを追い越したALTAIR1は先頭のザイにロックオンする。

「バトラ、エンジン！FOX2！」

右主翼から白い煙を吐いてミサイルが発射された。ミサイルが発射されたのを確認すると即座に上昇して高度を稼ぐ事にする。ザイは格闘戦をしながらミサイルを撃つという戦術を取る。よって、ザイとは近距離でミサイルと機銃を撃ち合う事になるので必然的に巴戦（背後を取り合う様に旋回し合う戦い方）になる。

発射されたミサイルに反応したザイがブレイクしてミサイルの回避を試みる。

先頭機のブレイクに反応したザイ四機がブレイクしてALTAIR1に迫る。

「FOX2」

上昇していた状態から機体を起こしながら失速、RF-4TP-AJZは後ろ向きに宙返りしてザイに向き合った途端にミサイルを発射する。

迫るミサイルと追うザイはお互いの速度で距離を食い潰して回避

不能な距離になった。

「敵機撃墜！」

ザイを一機墜とした後に煙からザイが飛び出る。

「イン ガン レンジー！」

搭載された対空対地両用30mm連装機関砲の射程距離に入つた。

「ファイアー！」

バトラが操縦桿のトリガーを引いた瞬間に30mm二連装機関砲から大量の鉛弾を吐き出す。

ザイも機銃で反撃するが機関砲を発射しながらラダーを操作していたバトラのRF-4TP-AZJは直進しているように見えて微妙ながら横に水平移動していた為に弾丸はすぐ横を通り抜けていくだけだった。

ザイは虹色のガラス片を撒き散らしながら飛行を続けるがやがて爆発する。

「二機目。8000ドル頂きだ」

RF-4TP-AZJのリーダーが新たな機影を捉えた。

「十機の応援か。こりゃきつそうだ」

ガンで一機、墜として眩く。

計器から警告音が響く。

「インカミンミツソブレイク！ブレイク！」

フレアを巻き、背中から降下してミサイルを回避する。

ミサイルを回避し終わると小松から通信が入った。

「へ新たに出現したザイ3機と大型機、爆撃機型が海を越えます！至急戻って下さい！」

（わかってるけど、反転したら墜とされる）

三機のザイに囲まれていて思うように動かせずにいた。

「こなクソ！」

レバーを引いて尾翼が垂直になると同時に主翼の上と下から金属板が展開された。

急激に減速してオーバーシュート。そのままLOALで発射後ロックオン一機は撃

墜しそのまま失速して降下する事でミサイルを間一髪で回避するが後ろに敵機が一機食いつく。

(食いつかれた！)

海面ギリギリを低空飛行して逃げるが一機増えてまで、後ろにビツタリ食いついた二機は引きはがせないでいた。

そんな状況だろうと落ち着いてバツクミラーを睨む。

(まだ、もう少し……今！)

ハードポイントからミサイルを切り離し海面にミサイルを二発沈める。

ザイがミサイルを沈めた場所を通り抜ける瞬間に大量の海水がザイの腹を打ち付けバランスを崩したザイは音速のまま海面に叩きつけられ粉々に砕け散る。

機首を小松に向けてアフターバーナー全開。ミサイルのロックオン距離に入ると四機全てにロックオンする。

〈ALTAIRドライブ！〉

残った全ミサイル9発を発射して撃墜を試みる。

結果は護衛のザイは三機全て撃墜したが大型の撃墜は身代わりになった護衛機の所為で撃墜できなかった。

〈大型機が攻撃態勢に移りました〉

間に合わない。そう思った時に大型ザイが爆発した。

〈危なかったでしょ？〉

やや舌足らずで懐かしい声が通信機から出てくる。

〈救援が遅い！早く来てたなら応援に来い！一機は案山子なんだ〉

〈出るタイミングを伺っていたんだ。この目立ちがり屋は〉

八代通の悪態が通信機から聞こえた。

〈ミツシヨコンプリントRTB〉これより帰投する

索敵レーダーに新しい機影がないのを確認して小松への帰投ルートに乗った。

三十分後の滑走路に藍・山吹・深紅の戦闘機がアプローチする。

三機の戦闘機がデルタ編隊のまま着陸する。

エプロンまで進んだ三機に整備員が取り付く。ただし、グリペンには救急車も取り付きコックピットを強制的に開けてグリペンを引きずり出す。

（まさか、3日間見ないだけで酷く衰弱しているな）

相当、シヨックな事があつたのだろう。アルマイル隊のメンバーもシヨックを受けてこうなつた奴がいたな。

そんなことを思い出しながら、キャノピーの開閉を行う。

プシュー

空気が抜ける音と共に装甲版が四つに分かれる。

全体の三割を占める前面が前方にスライドして左右で四割を占める側面が下方にスライドしてコックピットが剥き出しになり、残りの三割が後面の装甲で後ろにスライドして簡単に乗り入れしやすくなる。

「ありがとう」

梯子を持って来てくれた整備員にお礼を言ってから山吹色のF-15Jに視線を向ける。しかし、そのキャノピーは既に開け放たれていて当のパイロットは中年の醜男に抱きついていた。

「八代通。嫌ならきつぱり突っ撥ねないと悪化するぞ」

金髪の少女を引き剥がす様を見て助言してやる。

「ふん。傭兵に言われると説得力があるな」

「高級傭兵だからな。仕事は選べるんだ」

「何が、高級だ。菓子のちり紙並みに軽い命だろう」

「そうだな。だが、俺はそのちり紙並みの命を110個以上は吹き飛ばした命だぜ」

皮肉に皮肉で返す応酬を見て金髪のパイロットが話に割り込む。

「そんな事よりも！東シナ海では毎日、ザイを墜としました。日本海の平和はイーグルが守るから！」

底抜けに空気が読めないのと明るい声に場の全員が毒気を抜かれていた。

そんなこんなで小松に帰って来て数日がたった。

あれからザイが攻めて来なかった為に本社にいる爺さんに使った弾薬や消耗品を送って貰った。

滑走路には爺さん、所持機の電動レシプロ輸送機が滑走している。なんでも、ハイパワーモーターに二重反転プロペラを二基付けて、小型輸送機と同じ量を運べるそうだ。

(というか、自前のレシプロ輸送機って何機持っているんだよ……) 色々なカラーリングを見てきたが、モスグリーンのカラーリングは初めてだ。

そうこうしている内に駐機して積み下ろしの作業の為のハッチが手作業で開けられていく。

「イビヒビ、毎度ありがとよ。これにサイン頼むよ」

「不備が無いか調べてからな」

「おいおい、俺がビジネスでミスした事があつたかい？」

「二本100ドルのミサイルが近接自爆しなかったからな。消耗品に関しては信頼してるが、ミサイル関係は信頼も信用もしていない」
軽くミサイルをチェックするが問題なかったので受取書にサインする。

「確かに…うし、下ろせ！」

輸送機から物資が下されていく。

「しかし、どうしてここに？」

この爺さんは基本的にデリバリーに参加しない筈なのだ。

「日本製品は日本で買いつけるのが一番安くて程度も良いからよ」

「成る程、あー！」

大切な事を思い出した俺は懐を探る。

「あつた、あつた。ほい爺さんこれ」

「お？これは電卓かい？」

「ああ、千いくらの日本製電卓だ。あんたの電卓は一桁増えるって言ってただろう？」

「確かにな。有難く貰つとくよ」

「そこで、幾らかまけてやるって言わない辺りが商魂たくましいな」
「まあな。そうだ！」

何かを思い出した様に手を叩く爺さん。これをした時は50パーの確率でロクでも無い事が起きる。

「3と4はどうした？最近、弾薬の注文がめっきり減って稼げないんだ」

だと思ったよ。あいつらは対地だから、無いかと多くの弾薬を使う。

「残念だが、あいつらは今、第七艦隊の仕事だ」

「道理でフックの装着を要望した訳だ。しかし、そうか、あいつらは第七艦隊の仕事にな……」

何か悲壮な顔をする爺さんが気になった。

「どうした？」

「お前さん。知らねーのかい？」

「何が？」

「第七艦隊はな……」

「……………」

あれから5日たった今でも毎日、『第七艦隊が壊滅したっていう情報だよ』と繰り返し再生される爺さんの言葉。

別に仲間が死んでもそこまで落ち込まない。実際、三年前の戦争では昨日、同じ飯を食った仲間が居ないなんて事もあったし。いつもは混む食堂が閑散としている事もあったから何とも無いと思った。だが、それが部下ならどうだろうか？

「どうしたのだね？バトラ君。荷物が届いてからその調子だが？」
司令が話しかけてくる。

「いえ、なにm「なににも、とか言ってもそうは見えないのだがね？」

……話しましょう。できれば、誰にも聞かれない場所で」

「……………ならば、司令室だ」

司令室に移動した後で鍵を掛けて、誰も入れなくする。

「では、どうしたのだね？」

「はい。私の部下は第七艦隊の仕事をしておりましてね」

「第七艦隊……そうか。君もその情報を……」

「はい。それで、部下の安否が心配で」

「君も人なのだな」

「はい？」

司令から発せられた言葉に面食らうバトラ。

「君は誰が死のうか知ったことでは無いと言う人物だと思ったのだがね……」

「まさか、仲間は別です」

「だろうな。知っているかい？ エースには種類と言う物があるという言葉を」

「それはもう」

当たり前だ。一番最初に習った事だ。

「「エースは三つに分けられる。【プライドナイドに生きる者トエース」

【強さを求める者マーセナリーエース】【戦況を読む者ソルジャーエース】この三つだ」

「ですよね？」

「ああ、君はどのエースを目指す？ 私はF-4で飛ぶ事を誇りにした。そして、アグレッサーのF-15をも墜とした」

「……」

「君はどのエースだ？」

「私は……」

「見つければいいさ。君は若いから時間はまだまだあるからな」

「はい……」

ドアが閉まった後に誰に話す訳でもなく呟く。

「大丈夫かな？」

その呟きはスクランブル警報に包まれて消えた。

「ZAIの大編隊を捉えた。離陸可能な機体は出撃せよ」
遂に来たか。俺が走りながら思ったのはその事だった。

今思えば、洋上の艦隊がやられたと言う事を中国から日本に行くルートの一つである日本海ルートが開通した以上は攻め込んでくるのも時間の問題だ。前回の襲撃は威力偵察といったところだろう。

「O Hは終わってるか！」

「バッチリだ！」

「thanks」

コックピットの中に入ってコンソールを操作して起動の準備と武装の確認をする。

（大型ハードポイントは全て増槽か……）

今回は迎撃戦だからそれほど大量の燃料はいらないと考えていい。

「第二から第五大型ハードポイントの増槽を外して追加ハードポイントキットを着けてくれ。追加のハードポイントにはX M A A中距離ミサイルを載せてくれ」

たとえば、16発でも先制攻撃できるに越した事は無い。

「わかった。おい！2分で支度しな！」

『おい！外した増槽をその辺に置いてくくなよ！』

「X M A A載せ終えました！」

その通信を聞きバックミラーで確認するが安全が抜かれた合図が見えない。

「安全ピンは抜いたか？」

「今、抜きました！」

「よし！ALTAIR01出撃準備終了しました！」

管制塔に連絡を入れた。

「よし！すぐに迎撃に出てくれ！」

「敵編隊の編成と数は？」

「総数50機以上の大編隊だ。それも、ストライクパッケージ戦爆連合だ。編成の内15機が重爆撃型だ。残りは制空型だ」

「ラジャー。今、滑走路に出てる機体と二機編隊離陸すればいいのか？」

〈ああ、BARBIE02と編隊離陸して敵機を迎撃してくれ〉
〈ラジャー〉

滑走路にタスキングして動翼チェックして、異常が無い事を確認した。

〈BARBIE02、クリアード・フォー・テイクオフ！〉

〈ALTAIRO1、オールグリーン・テイクオフ！〉

二機が同時に滑走して空へと飛び立つ。

〈射程に入った。FOX2！〉

6発の中距離ミサイルを放ち先制攻撃を行うが肝心の重爆撃型には当たらず盾になった制空型に命中した。しかし、全6発が命中した。

〈ちっ！ALTAIRO1！エンゲージ！〉

ザイとの距離が詰まった為に戦闘状態の宣言をする。

〈インガンレンジ〉

〈ファイア！〉

ヘッドオンの状態になったザイにワンタップ分の30ミリ弾を与えてやる。撃った後はラダー操作で少し右にずれてザイの機銃を避ける。

〈ALTAIRO1迎撃目標変更要請。新たな敵編隊が小松基地を襲撃中。迎撃求む〉

〈ネガティブ〉

なんて言っただて6機のザイに囲まれてるから無理だ。

ザイの爆撃機が弾倉を開き、爆弾を投下した。

投下した爆弾は爆音と爆風を撒き散らし一本しか無い滑走路を破壊した。

（不味い！あんなのが街に落とされたとしたら悲惨な事になるぞ！）

ザイを短距離ミサイルで2機を同時に墜としたことで包囲網に穴が空いた。

（これ以上は！）

爆弾を落とす前の爆撃機に肉薄するが距離がある。

爆撃機は弾倉を開けて爆弾の投下準備を行っていた。

『lock-on』

今、ロックオンしてもミサイルの飛翔距離を考えると間に合うか分からないがスイツチを押そうとする。

〈〈FOX 〉〉〈〈イン・ガン・レンジ！ファイア！！〉〉

二人の通信が割り込むと特大の弾丸が機首から命中すると爆撃機が大爆発を起こした。

おそらくだが、機首から命中した弾が内部に到達して弾倉の爆弾に着弾して誘爆を起こした。

(この火力が出せる味方はあいつらだけだな……)

後ろを振り向くと独特な形状をした機体が接近していた。

〈〈兄様。只今帰投しました〉〉

〈〈只今より、兄様の指揮下に入ります〉〉

黒と白のかなりのカスタムが施されたA-10が両脇に2機追隨する。

〈〈帰って来たのか？心配したぞ？〉〉

心の底から安堵する。この二人は三年近く前に俺がこの世界に残した二人なのだ。

この2機は第七艦隊の仕事に就いていたALTAIR03と04だ。因みにALTAIR02は並々ならぬ理由で欠番である。

〈〈はい。そのことは地上でお話し致します〉〉

〈〈今はこの状況をどうかしましょう〉〉

〈〈そうだな。ALTAIR03と04は爆撃機を優先的に頼む。BARBIE02はALTAIR03と04の援護を俺と一緒に頼む〉〉

機体を加速させて上昇させる。それに釣られてザイが後ろを追う。

〈〈兄様！後ろからザイが！〉〉

ALTAIR03が警告を出すにせよ上昇を続ける。

『missile alert』

ミサイルが発射されたのを確認してフレアとチャフを撒きながら緩やかな右カーブを描いて降下する。

ミサイルはフレアに釣られて自爆するのを確認するとロックオン距離にイーグルを追うザイ三機を捉える。

〈FOX2〉

中距離ミサイルを発射して撃墜を試みる。ザイは予想外のミサイルに反応が遅れたのか回避出来ずに命中した。

〈イーグル。後ろの頼む〉

〈任せて〉

その言葉の通りに瞬く間に後ろのザイ三機を墜とす。

〈ALTAIRO4。ファイア〉

ALTAIRO4が主翼の下に搭載された57ミリガンポットが火を吹いた。

対爆撃機のドクトリンを忠実に頭から侵入してコックピットを撃つのかと思つたが、貫通するとわかつているせいか弾倉のある場所を狙つて発射された弾丸（砲弾と言うサイズかもしれない）は狙つた通りに弾倉の爆弾を爆破して爆撃機を塵一つ残さずに消滅させた。

〈ALTAIRO3。撃ちます〉

そう宣言すると機関砲らしからぬボン　ボン　ボンと言う音を出して57mmガンポットから弾が撃ち出される。

そして爆撃機を塵一つ残さずに消滅させる。

「この腹と肩に来る音はあいつらじゃなきや出せんな」

全くその通りである。今のご時世30mmあればでかい方で57mmなんて巨砲の域だ。そんな物を前から撃ち込まれるザイには同情する。だが、あの二人はそれと同じ位恐ろしいのをまだ、抱えてはいるがな。

哀れな爆撃機から意識を外して、警戒の為に下に視線をずらすと高速道路に紅い鏃のような機体が用意されていた。

その場所に5機のザイが襲い掛かっていた。

「不味い！」

スロットル全開の急降下して急いで1500まで近づく。

〈FOX2〉

短距離ミサイルを5発放ち撃墜する。

〈〈ありがとう〉〉

グリペンから通信が入る。

〈〈気になるな。それよりも機体の挙動が怪しいぞ?〉〉

そんなグリペンが狙い目と言わんばかりに10機のザイが襲い掛かる。

〈〈(つち) FOX2〉〉

中距離ミサイルを発射する。これで中距離ミサイルは撃ち止めだ。ザイは1機撃墜されるとブレイクして7機がこつちに来て1機がグリペンの方に行った。

〈〈グリペン!そつちに1機行ったぞ!〉〉

バレルロールでミサイルを回避してお返しに手頃な奴にミサイルを発射して撃墜してやる。

グリペンが視界に入るとカナードを直立させて追尾を振り切ったのだ。

だが、普通ならグリペンであれをやれば速力の差で振り切られ急旋回で後ろに着かれて撃墜される。そう……普通ならだ。あの深紅のグリペンはドーターだ。ドーターはアニマの手足に等しく動く。よって、スロットルをそのままにエアブレーキだけで減速など朝飯前だろう。

追い抜かして直後に機銃を喰らったザイが黒煙の糸を引いて墜ちて行った。

〈〈ラストだ。FOX2〉〉

グリペンが鬼ごっこしている内にこつちはガンとミサイルで7機墜とした。これでミサイルの残弾は短距離ミサイルが1発だ。

爆撃機も最後の1機が小松に侵入しようとしていたがイノシシ^{A110}が取り付こうとするがザイに後ろから追われる。鈍足のA110では撃墜されるのも時間の問題だろう。

〈〈兄様!助けてください〉〉

〈〈後ろに張り付かれました〉〉

案の定、応援の要請が届いた。

〈〈すぐ行く〉〉

もう一度スロットルを開いて救援に向かう。

自分の部下だけは自分が飛んでいる間は墜とさせない！それが俺の誇りだ。そして、その誇りを貫く為に強さを求めよう。ナイト・マーセナリーエース。それが俺の目指すエースコンバットだ!!

<<FOX2>>

ALTAIR03とすれ違って、コブラ機動。コブラをそのまま倒して背面飛行しながらロックオン終了後に最後のミサイルをリリースして背面急降下でALTAIR04を追う敵機にダイブし30m弾を浴びせる。

30ミリを真上から浴びて穴だらけになったザイは爆発すると同時にミサイルがザイを撃墜した。

そして、グリペンが爆撃機と護衛機に突っ込み、爆撃機を撃墜したお陰で統率をなくした残存のザイは編隊を解いて右往左往するように飛び始める。

<<ALTAIR03、ALTAIR04。七面鳥狩りだ>>

<<<はい！>>>

その後は海上自衛隊のF-3が合流して残党狩りを終わらせた。

あれから3週間がたった。

明華^{ミンホテ}に起こされた俺は忘れ物が無いか確認して、部屋をもう一度振り返ると机の上に一冊のテキストとファイルに挟まれた紙を認める。

テキストは紫色の背表紙に書かれたタイトルは「自衛隊航空学生・試験問題集とファイルから覗くタイトルは隠れて読めないが」……入社希望書だ。

現役社員からの推薦扱いで希望書と規約に同意する同意書さえ出せば簡単に入社出来るそうさ。

この紙を見て思い出したのはあの時の小松防衛の後のことだった。グリペンのこともそうだが、バトラの行動も気になった。小松防衛戦から3日後に見舞いと一緒に讃えてきたのだ。

あのカナード直立は俺の操作と指示だったとグリペンから聞いて話をしにきたらしい。

そして、俺はそこでこう聞かれた。

『所で君は何故、飛ぼうと思った？』

それに俺は、中国の空を取り戻したい。何よりもグリペンと一緒に飛びたいとはつきり言ったら彼は照れながら、も話した。

『私が飛び始める頃の理由より素晴らしい理由を持っているようだ。では、君はその為に航空自衛隊の学校に行きたいのか？』

俺ははいと答えると、

『私はグリペンを用意するから俺の会社に入らないか？』

そう言う一枚の紙を渡してきた。それは彼が所属する民間軍事会社への就職希望の紙だった。

『ここなら空自の学校より早く空に行けるぞ』

それが、魅力的で取り敢えず受け取った。しかし、俺は明華と同じ学校へ進学した。

勿論だが、航空学生もあの希望書も空までの最短経路で自分の手で中国の空を取り戻す直通の道筋だ。だが、この小松と言う町はもう、俺にとってひどく貴重な場所になっている。

彼女がいる町

彼女と出会い、思い出を積み上げ、守りきった土地その事実が俺の両足を楔の様に大地に打ち付ける。

(大丈夫だ。空は逃げない。待っててくれるさ)

そう言い聞かせる様に独りごちて扉を開ける。下から明華が呼ぶ声が響く。

「……………と言う訳です」

「つまりだ。空母が発着艦できなくなる様な損傷を受ける直前にカタパルトで発艦して貰ったから小松に来れたと言うことか」

3週間経ってようやく落ち着いたので第七艦隊のことを聞くこと

が出来た。

結論から言うと失敗したが玉砕はしてない。ただし、再編は必要な程の損害を受けた。

「後は、私たちの機体が高い航続距離を持っていたのも幸いでした」「成る程ね。まあ、兎も角だ。無事で無いよりだ！今日は小松防衛戦の祝勝会とお前達の無事を祝って良いパスタの店を予約したんだ。俺の奢りで好きな食いな」

「やったー」

笑顔で喜ぶ二人を見て笑う俺だが、後日にあの醜男が目上のコブを作るとは思いもしなかった。

作戦5 嵐の前の静けさ

『pipipipipipi』

レーダーのロックオンを知らせる音が鳴り止まない。しかし、今回に限っては鳴り止まらせれないと言った方が正しいだろう。

赤くなったターゲットコンテナには紅い小型戦闘機が入っている。
(10秒だ)

ミサイル発射の為にトリガーを引こうとした時に紅い機体がパワーダイブに入った。

「逃げれるとでも?」

すかさずこちらもパワーダイブで追撃する。

向こうもこちらに気づき急旋回する。

(高度を失って速度を得たのにもう捨てるのか?)

俺なら海面ギリギリまで降下して上昇して、相手の上を取るように入力しながら上昇する。

「FOX2」

短距離ミサイルの距離で中距離ミサイルを放つ。

紅い機体はフレアを巻くがこのミサイルは金属反射で追尾する。

赤外線を欺瞞するフレアでは防げない。向こうも気づいてチャフを巻くが距離は近すぎる故に防げず撃墜された。

〈〈BARBIE01の被弾を確認〉〉

一機墜としたが残りが3機いる。

二機は57mm弾を撃ち合っている。てか、対爆撃機用じゃなかったか?それ。

(あの二機だけで撃ち合っているのを見ると…)

ロックオンの警告音がコックピットに鳴り響く。

後ろを見ると案の定、山吹色の機体が食いついた。

〈〈今日こそ墜としてやるんだから!〉〉

惜しいな。黙って撃っていけば撃墜出来たかもしれないのに。

俺は機体を減速させて同時に横回転させながら上昇してミサイルをやり過ごす。

〈へしまった!!〉

こつちも下降中だった所為で向こうも速度が乗っていた所為で追い抜かしてしまったようだ。向こうもすかさず加速してやり過ぎそうとするがこつちもやられる訳には行かない。

エアブレーキをしまうと同時に山吹色の機体のノーズが自機のノーズを超えた辺りから30m弾を発射する。

〈BARBIE02の撃墜確認〉

「ドライブ！」

未だに巴戦をしている二機に高軌道ミサイルQAAAM18発と中距離ミサイルXAAAMを3発放ってやる。

〈ちよつとこれは無理です〉

〈イジエクト〉

〈ALTAIR04の撃墜確認。ALTAIR03の緊急脱出成功。状況終了、帰投せよRTB〉

空は今日も憎たらしい程に青い。

「まず、お前はエネルギーの節約を考えよう」

グリペン・慧のペアに俺の思ったことを伝える。

「お前達は無闇やたらに戦闘機動をするからすぐ後ろにつかれるんだ」

「じゃあ、どうすんだ？」

「勉強と経験だ！幸いここは練度化物で知られた自衛隊なんだ。最高の教師はいるだろう？」

「教えてくれるのか？」

慧が言っているのはアニメの事だろう。

「そこは問題無い。小松防衛戦以降は空気が変わっただろう？」

「なんでだ？」

「航空機乗りを黙らせるには実力を示すのが一番だったこと」

「成る程な」

「わかったら行きな。時間は有限だぜ」

「おう！」

何処かにグリペンと一緒に消えていった。

「さてと……」

振り向いた先に不貞腐れてるイーグルがいた。

「なんで、墜とせなかつたの!」

「撃つタイミングを教えたのと速度と距離を考えなかつたからだろう?」

「う〜〜……」

「ま、頑張れ」

そう言つてハンガーに格納された機体の後部コックピットに乗り込む。

「何をしたらっしやるのですか?」

RF-4TP-AJZの後部コックピットがあつた場所に備え付けられているPCを弄ろうとしているとアルタイル03が声を掛けてきた。

「何つて、本社からの電子メールの確認だ。お前もチェックしてるか?」

「そこは妹がしてくれてますから」

「……………ごく偶に個人で来るから自分でも確認しな?」

「……………わかりました。確認してきます」

そう言つて白い方のA-110に乗り込む。

(全く、さて確認をと)

P A S S W O R D ●●●●●●●●

L o g g i n

『P e r s o n n e』

『W e a p o n r y』

『O b j e c t i v e』

▶? 『M i s s i o n』

『E x i t.』

アルタイル隊各員は先の小松防衛戦もご苦労だった。

日本は先日、アニメ、及びドクターのみの飛行隊を編成したと言う情報が入った。アルタイル隊はこの飛行隊の援護部隊として引き続

き日本に在中してくれ。尚、指揮下は今まで通りと同じくMS社所属だ。

以上が連絡だ。

アルタイル隊の各員は仕事に励んでくれ。

(これはまた、面倒な事を…)

アニメ・ドーターだけの飛行隊を作るそれが世界にどれ程の影響を与えるのかわかっているのだろうか？

そんな事を考える彼に一通のメールが入る。

(なんだ?)

アルタイル隊の化けの皮を剥ぐ準備はしておいてくれ。いつ剥がすかは君に一任する。

(こんな物を送ってくるとなると佐官クラス以上にしか開示されていない情報に面倒な物が送られてきたのか…)

とりあえずは剥がす準備はしておこう。

PCの電源を落としてコックピットから降りて後ろを向く。

彼の視線の先には垂直尾翼に描かれた、鷲の絵に鷲一際大きく描かれた星がある鷲座が描かれたシールだった。

「よし！終了と。買い物でも行くか」

暗い話題は置いておこう。

「う~~~~ん」

A-110から何か聞こえるが放っておこう。

トライクに乗って基地近くの店に来ていた。

購入したのは輸入物の菓子だ。輸入物となると基地では手に入りづらい。

近くの駐車場に止めてある愛車に跨がろうとすると黒のインナーにデニムシャツに顎に髭を生やした顔は絵に描いたような遊び人だ。

「ちよつと、ちよつとつれないじゃん、お嬢ちゃん。少しお話ししよ
うよ」

そんな遊び人が自分と同じ位の身長 of 少女に軽薄な猫なで声で話
掛けていた。

(うん。どう見てもイケナイ構図です。ありがとうございます)

流石に誘拐まがいな事をされるとも限らないので近づいて様子を
伺う。

少女の格好は一人旅中のお嬢様といったところだった。白いブラ
ウスに黒いコルセットスカートと言う服装に持っているトランクは
派手さとは真逆なシンプルでクラシックな手提げ型だった。そこ
におかつ髪が清楚な印象を与えていて、ますます、この遊び人につ
いて行くような少女じゃない。

周りから見ると早く助けに行けよ状態かもしれないが万が一でも
勝気な性格だったら嫌な気分が終わる。と言う事を考えるとマズい
状況になるまで手を出さない方が良いと言うのが俺の持論だ。

「どこ行くの？一人旅？」

無言の少女の事など気にせず話す遊び人。

「でも、不安じゃない？君みたいな可愛い子だと悪い奴がいっぱい
寄ってきそうだし。そうだ！俺が案内役になってやろうか」

悪い人はどう見ても貴方です。本当にありがとうございます。
そして、あんたが案内するのはベツトウエーだろ。

(ナンパにしても強引な気がする)

いや、ナンパされたこともしたことも無いけどさ。

そうこうしている内に向こうも無言の少女の対応が気に入らない
らしく。声が少々威圧的になる。そして、遊び人の指輪をつけた長い
指が二の腕を撫でてブラウスの胸に伸びようとする。

(流石にここまでくると止めるか)

物陰から飛び出す。

「こっちの連れに何してやがる！」

「つち。男連れかよ」

そう吐き捨てて何処かに消える遊び人。

「大きなお世話だったかな？」

「いえ、助かりました」

「柔らかな声だった。」

「助かりました。見知らぬ土地でどうしたら良いかわかりませんでしたから」

「そんな時は嫌ってはつきり言いな。黙ってるとつけ込んでくるからな。それでもダメな時はタマに爪先蹴りをお見舞いして逃げるが一番だぜ。後、この季節はあんな輩が多いから気をつけなよ」

手を振って去ろうとする。

「あ、少し道をお尋ねしたいのですが？」

「なんだ？」

呼び止められてしまった。

「小松空港にはどう行ったらいいでしょう？」

「小松空港？」

やばいな公共交通機関での行き方なんて知らねーぜ。しかし、ここで調べるとなると格好が付かない。

「小松空港なら俺が送って行くがどうだ？」

とりあえず、暗に知りません宣告しておく。

まあ、『見ず知らずの男に送られるな』と教育を受けてそうだなと言った後で後悔する。

「その出来れば自衛隊の基地の方にお願ひできますか？」

「え？……あ、可能だよ。じゃあ車持ってくるから」

一瞬、何故に小松基地と思ったが親が働いているのだろうと勝手に自己解釈しておく。無闇に家庭事情に踏み込まないのは普通だ。

「色々、ありが」お礼は着いた時に貰うよ。無事に着けるとい保証は無いからな」

トライクの所まで移動してロータリーに戻ってくる。

「後部コック……座席に乗ってくれ」

つい職業病を発症してしまった。

俺の愛車は爺さんが後ろが完全に潰れたヴィンテージ物の大型バイクを無理矢理トライクに改造したものだ。バイクは詳しくないの

で原車は知らない。

「念のためにヘルメット被ってくれ」

一様日本の法律では車扱いで要らないが一応つけているのでその予備を渡す。

「……パイロット用のヘルメットですね……」

「……………趣味だ」

性能と外見の両立を目指した結果だ。

だって、市販の奴でいいの無かったからね。

見た目と機能性の両立は難しいよね。

ていうか、良くパイロット用ってわかったな。

「出すぞ」

「はい」

そして、小松基地に到着した。

え？道中どうしたって？何も無く終始無言でしたが何か？

「……真っ直ぐ行けば、詰所だから」

「ありがとうございます」

「気にすんな。ついでだったしな」

そして、そのまま駐車場に停めに行く。

「あー！メット、返して貰って無かった」

ま、いつか。予備だし。

「気にすんな。ついでだったしな」

そう言って私がお礼を言った後に発車していきました。

私はポケットから小さなビスを取り出してそのあたりに投げしておく。今頃彼は携帯端末がバラバラになっていることでしょう。

(いっそ、生身を分解するべきだったでしょうか?)

今更ながら自分の甘さが悔やまれるがもし実行に移していれば、彼との接触は出来なかっただろう。

アルマイル隊の隊長。

まさか、小松に来てすぐに遭遇出来るとは。運命の不思議さに驚きたくなる。

「アルタイル01、バトラと言ったかしら」

本当なら移動中に色々聞きかかったが各国のマスコミにも二つの名前が出ていないこととこの情報は関係者にしか知られていないと考えるとどちらの情報も出せない。よって話掛けるきっかけが無い。名前を聞いても『答えない』『はぐらかす』が落ちでしょう。

そして、話し掛けなかった理由は自分以上に濃密な死線を潜り抜けた強者だと見ただけで理解したというのもあります。

私は携帯端末を起動して回線を繋ぐ。繋ぐ相手は待っていたかのようにワンコールで出てきた。

〈〈遅いぞ。今、何処にいる〉〉

野太い男性の声。

〈〈今、小松基地の目の前です〉〉

〈〈すぐに迎えに行く。そこで待っている〉〉

〈〈はい。八代通室長^{お父様}〉〉

少し待つと前から男性が近づいてきた。

「よく来たな。三沢と同じことをするなよ」

「あら、私は何もしていませんが、何の話でしょう?」

「どの口が言うんだか」

「この口です。ですが、退屈はしなそうです」

「詳細は後で聞かせてもらおう」

「はい。では後程。RF-4EJ-ANM フアントムII。小松基地に参陣致しました」

作戦6 嵐が現れる

「ん？ あれは……」

買い物をした後日、機体を磨く為にハンガールの近くを通る俺について先日まで、無かった機体がハンガーに駐機されていた。

彼奴は磨かないと拗ねた様になって咄嗟に動いてくれなくなる。

「これってF-4ですよね？」

後ろから慧に話し掛けられた。

振り向くと見慣れない、と言っても俺は見慣れている機体を指差ししていた。

「あれって、F-4ですよ。ベストセラー機の」

「まあ、F-4……では、あるな」

だが、機体の一部違うのを見るとあれは……

「ほう、知っているのか……とは、言わんぞ。ベストセラーって事は世界各国に認められて、有名でもあるからな。だが、残念だな、あれはF-4だが、F-4じゃない」

「じゃあ、なんなんだ？」

「俺のファントムと同じ改造機だよ。RF-4EJ改 ファントムⅡ。Rは偵察機を意味する。中身は他のF-4系列とは別物。全く違う機体と言って良い」

「なんか、目が輝いていないか？」

「当たり前だろう。ファントムが好きでファントムライダーやってるんだ」

好きな機体じゃなきゃ命を乗せられないだろう。

「ファントムライダーってなんだ？」

「F-4系列に乗るパイロットの事だ。他にも、F-15系列に乗るパイロットをイーグルドライバースと呼ぶ」

「成る程な。因みにグリペンのパイロットの事はなんて言うんだ？」

「さあ、俺は知らない」

慧が目に見えてがっかりしている。

「丁度良かった。おい！ アルタイル01もこっち来い！」
八代通に呼ばれ第3格納庫に入る。

入ったと同時に薄緑色のファントムのキャノピーから蒸気が発生して、機械音を出しながらキャノピーが開く。

蒼空を背景にして、漏れ出た緑の光の中で小さいシルエットが浮かび上がる。

「あら」

聞き覚えがある柔らかい声がした。

「ごきげんよう。昨日は助かりました」

和人形を思わせる容貌に、令嬢を沸騰させる落ち着いた物腰、そしてきめの細かい白い肌に頭髪は何処かのリゾート地の海の色をしたエメラルドグリーンをしている。

「何処で会ったか？」

少なくとも向こうは俺に会った事がある様だが、俺は知らない。

「あら？ 昨日、後ろに乗せて貰って、これも借りたのですが……覚えていませんか？」

そう言って、コックピットから取り出して差し出したのは俺の貸した予備のパイロット用ヘルメットだった。

「成る程、思い出したよ。しかし、そんなエメラルドグリーンの……」

ヘルメットから少女の方に顔を向けると髪の色が黒色になっていた。

「訂正する。黒の髪じゃなかったからわからなかったよ。」

「あら、そうですか？ 薬で黒髪にしてみましたの。外では目立ちたくなかったのです。黒色の方が好きですか？」

「いや、そうじゃ無いが……エメラルドグリーンも黒色も似合っているとは言っておこう」

「ふふ、女性を喜ばせるのが上手いんですね」

男であれば、誰でも惹かれる様な笑みを出しながら話す少女。

事実、慧が視線をずらしている。

「君は余り傭兵をわかっていないようだ。余り、傭兵の褒め言葉は

そのまま受け取らない方が良いでしょう。裏や底があるからな」

「忠告ありがとうございます。では、今度から注意させていただきます」

「なんだ、顔見知りか？」

八代通からの言葉を聞いて、少女は機体から軽い足音と共に降り立ち、姿勢を正す。

「ご挨拶が遅れました。RF-4EJ-ANMファントムⅡです。どうぞ、ファントムとお呼びください」

「MS社、M43飛行中隊アルタイル隊所属。コールサインはアルタイル01だ。TACネームはバトラだ。訳有りで本名は言えないんだ」

「お、おう」

何か慧が驚いているが多分だが、人間だと思っていたのだろう。

「へえ」

底冷えするような声が聞こえたので、振り返ると。

「な、何だ。アルタイル03……そんな声出して……」

漆塗りの様な黒髪に、これまた、黒曜石の様な黒色の瞳を持った。

日本人女性が立っていた。

その瞳は石の様に冷たく、無機質な視線を向けている。

「随分と親しい様ですが……どういったご関係ですか？」

「何って、昨日の昼くらいに愛車に乗せたくらいだが？」

「へえ」

また、底冷えする声が掛けられて、右を向くと。

「アルタイル04か……どうしたよ？」

アルタイル03と同じ黒髪に黒色の瞳を持った少女が睨んでいた。

「いえ、その女性と仲良く話していたのでどんなご関係かなと」

「姉妹揃って、同じことを言うな」

「姉妹ですから。それよりも」

「地上にいる時は名前呼びって言いましたよね？」

「……すまんかった。職業病という事で一つ……」

「名前まで呼ぶまで許しません！」

頬をぶくつと膨らまして文句を言うが、正直に言うとは怖く無い。ましてや可愛い位だ。

「すまんかった。詩苑しおん、詩鞍しあん」

「わかればいいんです。わかれば」

「お兄様ならわかって頂けると思っていました」

素晴らしい程、華麗で素早いテノヒラクルーだ。

「バートローラー！」

「イーグル！後ろに飛びつくな！」

後ろからイーグルに飛びつかれた。

「ダレデスカ？ソノヒト？」

ギャー！！二人してグリーンベレーで抜いてるー！！ヤベー！

グリーンベレーって言うのは、そう言う名前のナイフだからね。決して、筋肉ムキムキマッチョメンの変態に殴り飛ばされた人のことじゃ無いからね。その人達が使っているナイフだからね。

って、誰に言ってるんだ俺？

「おおお、落ち着きなさいいいい」

「ワタシタチハオチツイテイマス」

嘘だ！ だったら、そのナイフは納めている筈だ！

「こいつは、自衛隊所属の僚機だ」

「ジャア、ナンデヒツツイテルンデス」

「スキンシップ好き」

そう言ったと同時に八代通に気づいたイーグルがそっちに行った。

「まあ、いいでしょう」

イーグルの行動のお陰で助かった。

「全員集まっているから丁度いい。傾聴」

八代通の言葉に全員が注意を向ける。

「突然だが我々、小松基地所属のアニメは空自の指揮系統から独立する事になった」

……あ、うん。そう言う事ね。何となく合点がいった。

でも、それは俺だけの様だ。そもそも俺も、本社から意味深な情報を貰っているので理解できたわけで、他の面々は全く、理解できてい

ない。

「まさか、クーデレ「おつと、勘違いするなよ。別に航空自衛隊離れるって訳じゃない」

慧の言葉を遮って、説明する八代通。

「所属はそのまま日本国自衛隊だが、技本や統幕と同じく防衛大臣の直轄になる。部隊名は【独立混成飛行実験隊】通称【独飛】だ」
「アニメ・ドーターの驚異的な性能は一般的なパイロットでは連携など無理だ。出来たとしても、一部のエースパイロットのみ。そうした場合だとかえって精鋭部隊として1つにまとめた方が何かと都合が良い場面が多い。」

「どんな部隊なんだ？」

「おいおい、慧君やその質問はねーぜ。」

「要はアニメ・ドーターの集中運用部隊だ」

「簡単に言うならエースだけの精鋭部隊と言った所でしようか？」

「詩苑。良い言い方だ。そう言われると直ぐに理解できるな。」

「でも、なんで今更の集中運用ですか？」

「ああ、詩鞍。お前はまだ、上の汚さを知らないんだな。」

「まあ、集中運用は特殊な保守・点検・整備を纏めると同時にバラバラだった戦力を集める事でザイに対する対処能力を高められます。そう言った観点から一つに纏めていった方が運用しやすい訳です」

「運用……しやすい」

「ドーターの維持管理の部局は現在、お父様の特別技術研究室しかありません。今まではその技術者が各地に分散して見ていましたが、それでは保守部材も冗長ですしノウハウの共有も困難です」

「更に言うならば、アニメ・ドーターはその性能の高さから通常戦闘機部隊とでは連携が取りづらい。だが、それも一極端に集約する事で解決するだ。ドゥーユーアンダースタンド？」

「はあ……わかりました」

「じゃあ、なんで最初からそうしなかつたんだ？話を聞く限り最初から一つに纏めておいた方が良くないんだろ？」

「政治家が馬鹿で遅いから」

「……………」

「実際、その通りですね。先の小松空襲が上に効いたんですよ」
「分けられていた理由は二つ」

「ファントムがそのパイロットらしからぬ細い指を二本立てた。」

「二つは私達の素体です」

この言葉で一つの事が頭を過ぎった。

「まさか……八代通……お前、現役の機体を使ったんじゃないかな？」

「……………」

無言は肯定と受け取ろう。

「お前は馬鹿か!? 現役の機体を使ったら、当該飛行隊の装備だとか言ってる！ ドーター化されても所属が肯定されるに決まってるだろ！グリペンみたいに外部で用意しろよ！」

「仕方ないだろう！ 上の指示で自衛隊の機材を使えと言われてたんだ！ 4機目のグリペンは元々、自衛隊の機材が時間かかるから別の機材を用意されたのがグリペンなんだよ！」

「だとしても！ F-15の初期の物とか！ F-4に至っては邀撃仕様機が退役済みだろ！それ使えよ！」

「F-4の邀撃仕様機とRF-4は同時着手だ！ それでも、RF-4の方が早く出来たんだよ！」

「F-4の邀撃仕様機をR化させれば良いだろうが！なんでそうしなかった！ そうすれば、小松防衛も一機増えただろうが！」

「金が無いんだよ！」

「政治家の給料減らせ！」

「出来たら苦労せんわ！」

「……「煩い（（ですよ））」……」

「はい」

八代通との痴話喧嘩は他の六人に止められた。

「まあ、さつき言ってた通りです。当該飛行隊の装備と言う事で固定されてしまったんです」

中指を折る、フロントム。

「二つ目に私達は対ザイの切り札的存在である事。A J Z 戦闘機が海上自衛隊にしか確保されていない中では、アニマを、私達をなかなか手放そうとしなかった。防空の要として手元に置いておきたがった。まあ、高いお守り・ご神体と言った所でしようか?」

「兵器は使わないに越した事は無いが、使う時には躊躇せず使わないと意味が無い」

誰に話すとも無く喋った。

「それと、政治家共も小松空襲で気づいた。アニマを分散させていてはザイが大規模侵攻した時にまずい。戦力の分散が愚策・下策だと遅過ぎる位に気づいたな。だから、八代通のこの提案に乗った。何か有っても、八代通の提案だと言えば言い逃れが出来るしな」

「言い逃れって、なんで?」

「政治家が嫌いな物の一つに責任を払うって奴が有るんだよ。政治家が簡単に動く時は切羽詰まった状態で、尚且つ自分の責任を擦り付けられる奴がいる時だ」

「汚すぎます……」

「そう言う世界なんだよ。俺みたいな高級傭兵になるならこう言った世界も知っておけ」

「……はい」

人が好きで戦う事を選んだ二人からしては酷な話だったかもしれないな。

「貴方達、誰」

硬い棘を含んだ声と視線がフロントムに注ぐイーグル。

「これは失礼しました。三沢基地から参りました。RF-4EJ-ANMフロントムIIです。今回の独立飛行実験隊のチームメンバーです」

フロントムが柔らかな笑みを浮かべながら、答える。

「私はM43飛行中隊アルタイル隊所属の三番機。片宮 詩苑です」

「私もM43飛行中隊アルタイル隊所属の四番機。片宮 詩鞍で

す」

片宮姉妹もフロントムと同じく柔らかな笑みで答える。

「F-4う？」

イーグルが鼻を鳴らした。

「まだ飛んでたんだ。てつきり全部退役済みだと思ってたけど」

「それ以上はいけません！」

詩苑がイーグル止めに入る。にしても、こいつ……………

「しかも、偵察機改修型？ 世代落ちの廃物利用品がイーグルウ

エエエツ！」

どうも、死にたいらしい。

イーグルが世代落ちの廃物利用品と言った頃には俺は蹴り飛ばす準備をしていた。そして、言い切る前に飛ばしていた。フロントムも片手を上げて、何か言おうと思っていたのだろうがお構い無しだ。

「ほお、イーグル。フロントム好きのフロントムライダーの前でそんな事を言うとかわ。恐れ知らずなのか、馬鹿なのか分からんな」

「フロントムが馬鹿にされた様な気がして」 〓 (。ω。) ノ
何処からか司令が来た。

「こいつが馬鹿にしました」 (。・D・)

「宜しい。ならば、肅清だ」

取り敢えず、イーグルを無理矢理立たせて羽交締めにしておく。

「五十発交代で良いな」

「良いですよ」

この後無茶苦茶腹パンした。

数分後にはイーグルは突っ伏していた。

司令とバトラは片足をイーグルに乗せて、ガッツポーズをしていた。
た。

「皆さんもご注意して下さい。お兄様の前でフロントムを馬鹿にする
とあなります」

「お……………おう……」

「まあ、見ただけで相手の強さを測れないのでは、実力は知れてますね。先の小松防衛戦では大恥かいたのかしら」

「実力！ 今、実力って言った！」

「ええ、私が居れば味方への損害も抑えられたかと思いますが？」
完全な挑発と宣戦布告だ。しかし、ファントムの言い分も正しいんだよな。

俺はまだ、そのレベルまで行つて無いからわからんが後ろにつかれた時や交差した時に相手の強さを感じる事が出来る。

「でも、小松防衛戦でファントムさんが居てくれれば、損害も抑えられたかと」

「詩鞍の言いたい事はわかるがな。過ぎた事と戦場で、れば・ならの話は要らない。まあ、実際の話を言うと頭数が増える。それがエースなら損害も減つたのは間違い無いだろうな」

「丁度いいから、ファントムの飛行試験も兼ねてD A C Tでもするか」

「「だ……くと……う？」」

慧と詩鞍・詩苑が口を揃える。

「お前ら……」

呆れて、溜息を吐く。

「D A C Tって言うのは日本語で言うと異機種間戦闘訓練の事だ。D A C Tは性能や形状も違う戦闘機同士での戦闘の癖やコツを掴む為の物だ」

逆の訓練もあるんだが、それはその時に教えよう。

「ていうか、慧も片宮姉妹もパイロットを目指す、パイロットならこの位は知っておけ」

「……わかった」

「本社での訓練ってD A C Tだったんですね」

「本社での訓練にそんな名前があつたなんて」

「まあ、本社で同じ機種の機体を探すのが大変だからな。基本的にD A C Tだ」

「よし、決まりで良いな。全員準備しろ」

「わかった」

「はい」

「わかりました」

「ファイターしか居ないですが…」

「ロツテ組みましよう詩苑」

ヤル気満々の女性陣の後ろで慧が。

「え、俺も!？」

「まあ、そうなるな」

グリペンがやる以上はお前も出席だ。

「許可が出るんですか?ここに司令が居るのに」

「ん? 私の許可か? 良いぞ。好きにやりたまえ」

「え、ええ〜……」

案外軽く出たな。ていうかこの司令は基本的に訓練なら寛容的だ。

「よっしゃ、イーグルは叩き墜としてやる」

右手の拳を左手の掌にぶつけてから愛機の元へと向かう。

キイイイイイイイイ

(良いアイドリングだ)

近くに自分と同じ魔改造フロントムが居て、嬉しいのだろう。

自己診断装置B I T Eの表示を見るが、心配すら必要無いようだ。

へアルタイル隊各機へ。マスターアーム全装のチェックを怠るな

今回はかなりの対ザイ戦力が出るので実弾を装備する事になった。

万が一、ザイが現れたら即座に対抗できるようにだ。

(武装はA A Mが4発にQ A A M高機動ミサイルが4発とR A A M中距離ミサイルが6発か)

いつも使っている中射程のミサイルがX A A Mじゃないのは今回の戦闘では対地目標がないからだ。

R A A Mは純粋な空対空ミサイルでX A A Mは空対両用ミサイル
と言うべきだろう。

(マスターアームはO F Fだ)

マスターアームを確認してから、管制塔に連絡する。

〈小松タワー、ALTAIR01、レディフォー・デイ・パーチャー〉

〈…：ALTAIR01、ランウェイ24、クリアード・フォー・テイクオフ・ウエン・レディ〉

〈ラジャー・ALTAIR01、ランウェイ24、クリアードフォー・テイクオフ〉

後ろから響く轟音。ブレーキを放して、エンジンに押し出せれる瞬間の瞬の沈み込みの後、滑走を開始する。

〈小松タワー、BARBIE03、レディ・フォー・デイパーチャー〉

（如何やら、後発はファントムの様だ。仕方ない少し早く上がるか、後が詰まっているしな）

俺は機体のランディングギアが浮かんで直ぐに偏向ノズルを上に向かって、機首を無理矢理に上に向けて直ぐにスロットルを開けて大空に滑走路とほぼ垂直に近い角度で飛び立つ。

航空ショーなんかで偏向ノズル持ちの機体が行う離陸の方法だ。

その後、エメラルドグリーンの機体が飛び立った。

〈大丈夫ですか？あんな離陸して〉

ファントムから連絡が入った。

〈大丈夫だよ。ザラだったから、如何って事無いぞ。というか、何故に貴機がこっちの心配を？〉

〈貴方とは真剣にやりたいので〉

〈そうか。しかし、さっきの管制官の間が空き過ぎて無かったか？〉

〈通信に癖語はやめた方が宜しいかと思いますが？〉

〈そうか、気をつけるよ〉

そんな話を並びながらしていると目標のポイントに全機が着いた様だった。

〈やり方はブリーフィングで話したが、もう一度言うぞ。集合ポイントに六方向から接近して、交錯した後に火器の使用を許可する。交

錯時の行動・体位は自由だ。実弾を載せているが訓練の為に火器はセンサーとプログラムに同期した上で行う。武装は実戦形式で短距離・中距離・高機動ミサイルの三種が使用可能だ。では、訓練状況を開始する。タイム・アット・ワンエイト」

司令の言葉でスタート三分前を知らせる。

俺は徐々に高度を上げて行き、誰よりも高い高度に着く。

（駆け引きはもう始まっている）

それを知っている。ALTAIR03と04は03が先に交錯する様に飛んでいる。

（先にロツテを組むつもりか）

戦術を考え出した俺の耳にファントムの午後の紅茶を進める様な、上品な口調の通信が入る。

〈へなんだったら五対一でも構いませんよ。その方が早く整備に戻れますから〉

〈キーーツ！〉

まるで俺たちに興味無いと言わんばかりの内容にイーグルが我慢の限界を超えたのか叫びだした。鼻息の荒さが無線越しでも伝わる。

〈へいいー！！ほんとうにムカつくルートル！いいよ。望み通り貴方から墜として上げる！〉

（おいおい、冷静さを欠くなど何回教えたっけ？ あ、加速した）

イーグルが他の機体など考えない様な機動を始めた。

（ほお、グリペンはいーグルに乗っかるのか。片宮姉妹はいつも通りと）

前者はイーグルの実力を知っているからで後者は慣れない者同士のシュヴァアルム四機編隊より慣れてる者同士のロツテ二機編隊を選んだ。

「シュヴァアルムはドイツ空軍が確率した編隊戦術。ロツテの二機編隊よりも相互の戦術に幅を持たせて、お互いの死角を更に小さくする戦術」

〈状況開始一分前〉

七…六…五…四…三…二…

〈〈エンゲージ〉〉

ファントムとイーグルが同時に集合ポイントで交錯すると同時に交戦を宣言した。それを追う様にグリペンが飛行する。

二本の航跡雲が急なカーブを描き、絡み合った糸の様な軌跡を残す。

俺はポイントの座標の縦のラインに沿う様に上昇して高度を稼ぐ。ALTAIRO3と04は集合ポイントで降下、低空で合流して、空戦している機体から離れる様に移動する。

〈FOX2ー!〉

戦術マップに映されたイーグルのマーカーから白いラインが数本出てきた。

この白いラインはイーグルがミサイルを発射した事を意味するものだ。

〈BARBIE02、ミス〉

ミサイルが外れた。ファントムがフレアとチャフを放出したからだろう。

〈甘い、甘い!〉

嬉々として速度を上げて追いかけるイーグルの後ろにエメラルドグリーンのRF-4EJが飛んでいた。

〈BARBIE02、ロスト〉

「はっ。」

二重の意味で訳がわからなくなった。

イーグルがミサイルを撃った時は戦術マップではファントムが前にいた筈だ。では、何故にファントムが後ろにいるのかがわからない。

コンバットマニューバを使った訳では無いだろう。イーグルの動きは前にファントムを捉えている動きだった。

〈BARBIE01、ロスト〉

そんな事を思っている内にグリペンも墜とされた。

何が起きているのかわからなかった。イーグルを墜とした位置とグリペンを墜とした位置が離れすぎている。

(何をやった? 兎に角、訳がわからない)

ファントムのマークーはALTAIR03と04のロッテに向かっていた。

〈〈詩鞍！ブレイク！〉〉

〈〈ブレイク〉〉

ファントムの接近に気づいた二人が左右に散開する。

ファントムは後ろを飛んでいた詩鞍の黒いA-10を追う。

〈〈フオック……！ ブレイク！〉〉

後ろから白いA-10が迫っているのに気づいたファントムが右に旋回しながら上昇して逃げる。

〈〈イン・ガン・レンジ！ ファイア！〉〉

ヴアアアアアアア

機首を上に向けた詩苑のA-10の30mmガトリングガン「アヴェンジャー」から銃が出す銃声とは思えない銃声を出して30mmの炸裂弾が撃ち出される。

「くっ……」

ファントムも背中から倒れる様に機体を降下させて回避させるが、回避先には旋回を終えた詩鞍の黒いA-10が報復者を静かに向けていた。

〈〈ファイア〉〉

涼やかに言い渡された報復の合図。陸上部隊を地獄の底に叩き落とす悪魔の咆哮が海に再び、木霊した。

が、ファントムも負けておらずスロツトルを絞らずのエアブレーキ全開で、スロツトルして弾丸を回避して水面ギリギリで水平飛行に戻した。

〈〈FOX2〉〉

そこに追撃で詩苑の白いA-10が短距離ミサイルを発射する。

下が海である以上は上昇するしか無い。ファントムは上昇して直ぐにスロツトルを全開にして速度を上げる。

二機のA-10もその後を追う。

ある程度の高度に達するとファントムがコブラ機動で機首を上
跳ね上げて静止した様になってからバク転の動きで後ろに回った。

二機のA-110を追いかけようとした頃にはファントムが詩鞍の
黒いA-110の後ろに付いていた。

「まだですー!」

^{バレル}樽の内側をなぞる様な機動、バレルロールをしてから右斜め下に逃
げる戦闘機動、エルロンロールで逃げる。

振り切られたファントムの後ろを詩苑の白いA-110が追いか
ける。

〈〈ALT AIR 04、ALT AIR 03、ロスト〉〉

二機に撃墜判定が下された。

〈〈ALT AIR 04、ALT AIR 03、ロスト〉〉

一体、何が起きた？ 二対一で二機を即座に撃墜しただと？

首を動かすと、右斜め横から黒い点が上がってきた。

俺は直ぐに降下してヘッドオンに持ち込む。

〈〈エンジン〉〉

機銃を撃つてから尾翼の操作で横に動く。

操縦桿を操作しながら位置を確認する為に振り返る。

ロックオンアラート。エメラルドグリーンの機体が後ろにいた。

(ならば、好都合。予定していた機動にフレアとチャフを足してや
る。)

フレアとチャフを巻いてから機首を上に向けて180度の宙返り、
ファントムが下を通り過ぎる直後に横方向にスピニングして水平飛行に
戻す。

有名なインメルマントーンと言う技だ。

発射後ロックオン

水平飛行に戻した瞬間にLOALを起動して、中距離ミサイルを投
下、暫く落下した後点火してファントムに食らいつこうと前進を始
める。

左に90度バンクしてから左に急旋回するファントムを追って旋回する。

照準が合った。

トリガーを引こうとした途端にディスプレイが赤く染まり撃墜された。

〈ALTAIR01、ロスト〉

「……………」

ファントムの機動には不可解な所が多い、まるでワープをしたかのような動きで四機を撃墜した。そして俺もだ。
D A C Tは不可解な物を残して終了した。

小松基地に戻る頃には他の機体は帰ってきていた。

旅客機の問題で俺が最後に着陸する事になったからだ。

機体を指定された場所に止めると整備員達に取り付く。

「ふうー」

一息付いてからキャノピーを開ける。

プシューと蒸気が抜ける音の後に装甲キャノピーが開いた後、通常のガラスキャノピーが開けられる。

「お疲れ様です」

下から柔らかな声がかげられた。

「ファントムか。何か用か？」

「いえ、先程の後ろに回った機動はインメルマンターンですよ？
何故、後ろに回る為にその技を使ったのか気になりました」

インメルマンターンはすれ違った敵機の後ろに回る機動で決して後ろの敵機の後ろに回る機動ではないのは確かだ。

「高度を失いたく無かったただだよ。そう考えるとあれが最善手だ
と思ったんだが、失敗だったな。事実、墜とされてる」

「そうですか。では、ご機嫌よう」

そう言っただけとするとファントムに俺が声をかける。

「待てよ、俺はお前の疑問に答えたんだ。俺の疑問にも答えてもら

うぞ」

「何ですか？」

「さっきの訓練で俺をどうやって墜とした？いや、どうやって、最適なポイントに移動した？」

その質問にファントムは妖艶な笑みを浮かべて答える。

「どうやった。と、申されましても私は普通に動いただけですが？」

「そうか、地力の差か。ありがとな」

そう言っただけでバトラは後ろに振り返り、背中をファントムに見せて、手を振りながら離れた。

「ファントムと何を話してたの？」

「グリペンに慧君か？どうした？」

「いや、何を話してたのか気になったのと、ファントムの事で話があるんだ」

「ん？ ファントムの事で？」

「ああ、グリペンの話だとズルしてたらしんだ」

「どんなズルだ？」

「あぁー」

「うーん……」

慧の話を思い出す。

話を要約するとドーターのデータ・リンクに嘘の情報を流してらしい。

(どうりで、すれ違った時に何も感じなかったのか?)

AJZ戦闘機はドーターと同じ方法でアニメと他のAJZ戦闘機とデータ・リンクを行っている。

アニメであるファントムが俺たちに偽の情報を送るなどは造作も無い事なのだろう。

訓練で後ろにつかれた時のファントムが偽の画像で合ったならば、何も感じなかったのにも納得がいく。

俺は感覚を馬鹿にしない。俺自身が感覚で如何にかしてきた部分もあるからだ。そして、その感覚が――

――機械に出せない。人の操縦する機械の可能性なのだ――
(取り敢えず、どうしたものかな?)

もう一度、模擬戦をしても負けるのはわかっている。まずはあいつのハッキングを如何にかしないといけない。

「あー！ あいつの情報持ってない！」

ファントムの情報は、八代通から貰った資料以上の情報が無い。情報がなければ何も対策が立てられない。

「八代通。ファントムの情報をくれ」

「何なんですか、あいつは」

八代通を探していたら、慧君も探しているという事で一緒に探して、見つけたので一緒に追求している所だ。

「どうしたんだ、二人とも」

慧が訓練であった事を話す。

「何というかわからないですよ」

「俺は如何しても、信用も信頼もできん。悪いがそんな奴とは飛べんぞ」

煙草の紫煙を天井に吐いてから、話し出す。

「そう言うな。お前達が居ても、こっちのお抱えの部隊が二機だけでは編隊が組めないだろう」

「数合わせって事ですか？」

「まあ、半分な」

八代通がそんな事を言うが間違いだ。

「八代通。この世には二機編隊と言う言葉があつてだな。二機では、編隊が組めないとか言ってるが組めない訳じゃないだろう？」

「小松防衛で三機では足りないとかわかっただろう？」

「だとしても、人間性に問題がある！ 仲間との訓練であんな事を

する奴を信用も信頼もできんぞ！　いつ、後ろから撃たれるかわからない奴が部隊内にいるなんてごめんだ！」

「確かに、怖いですね」

俺の言い分に慧君は賛同してくれた。

「あいつは悪人だと思うか？」

それを聞いた八代通が煙草を灰皿に捨てながら訊く。

「悪人」

「悪人だね！　仲間を陥れる様な奴は悪人以外の何者でもないね！」

「だが、実力で黙らせろと言っていたらどう？」

「あれは陥れるじゃなくて、試す、証明させるだ！　第一！　あんな方法が実力なんて認めない！」

空戦。それもドックファイトは魂と魂のぶつけ合いだ。

仲間・経験・技術・機体そして何よりも誇りを魂に変えてぶつけ合う、ぶつけ合って初めて実力が現れる。

偽情報を掴ませて、自分に調子良くななんて方法で勝って自分の実力なんていう奴は絶対に認められない。

「成る程な。じゃあ、その誤解だけは正しておくか」

何が誤解だ。空戦を汚した時点で悪人なのは変わらん。

「あいつの価値観・行動理念は『人類の救済』だ」

「……はっ」

「人間ではなく、人類をだ。それも一人でな」

「無理だろ。物量作戦で来られたらどうしようもないぞ」

一機では、持っていける弾薬に限りがある。一機相手に百機で挑めば勝ち確だ。

実際、アメリカのドクトリンは敵の三倍の火力で戦うだ。それだけで、物量作戦がどれだけ強いかわかるだろう。

「でも、それって……」無理だろうな。そう思ってしまったし、そう思っているからこそだろう。だから、今日みたいな行動に出る」

慧君の言葉を遮って八代通が話す。

「何でまた、そんな事を……自衛隊の教育か？」

皮肉を込めて言ってる。

「教育か……」

八代通は煙草を天井に吐いて、天井じゃない何処か遠くを見ているように目を細めた。

「ある意味では、そうかもしれないな。自衛隊初のアニマだ。次のアニマがいつ生まれるかわからなかったのもあるし、俺にとっても処女作だったからな……色々と妙な期待を掛けすぎたのかもしれない」

「で、単機で全てを抱え込もうとした……か」

「だろうな……」

沈黙が三人の間に降りる。

「あいつ、三沢基地に配属されていたと言っただろう」

「ええ」

「ああ」

「三沢基地ではアニマ関係でのトラブルは発生していなかった。小松ではあんなにもグリペン絡みで発生していたにも関わらずだ」

「土地柄か周りの人が良かったですか？」

「慧君……それはないと思うぞ。多分だが、個人情報でも手に入れて、それを計算しつくしたタイミングと方法で流して、対立関係でも作っただらう？」

「正解だ。典型的な分割統治だ」

「何でそんな奴を？」

俺もそう思う。こうしている間にも情報が取られていそうだ。

(俺なんかは、見られたくない情報がある訳だしな)

「なんでと言われても、あいつの戦闘技術・戦闘経験が圧倒的だからだ。それに三沢の報告書も奴を肯定するものばかりだったからな」

「釘は刺したのか？」

「刺したが、するだろうな。その様子だとな。グリペンと君、お前ならあるいはと思ったが」

「……すみません、もう決裂済みです」

「どうでしょう？ ワンチャンのワンチャンはあるかな？」

「お前に期待するよ」

「了解。何かあったら直接、報告する」

「頼むぞ」

バトラは八代通と別れた。そして、ある方角を向くとうなじの部分
を虫が這うような感覚に襲われた。

「何か、あるのか？」

俺は、その方角にバトラは鋭い視線を向けていた。

作戦7 集結！そして……

「詩苑か詩鞍は居るかな？」

誰に話すと言う訳でも無く、喋りながら食堂に入る。

「居た居た」

見慣れてるのも有るが、二人とも、上物の漆塗り容器の様な綺麗で光沢のある黒髪は小松基地の中では、二人しか見ない。

女性自衛隊員が二人の髪や肌、顔の作りを羨まし言っているのを良く聞くほどだ。

「二人とも、ちょっと良いか？つて朝食中かなら後で出直そう」

「お兄様のお話であれば何時でも構いません!!」

同時にこちらに顔を向ける二人。

二人とも、大きくて、可愛いらしい目は黒曜石でできているのではと思うほどに綺麗な黒色をしていて、肌もきめ細かく、百合の花の様に白い。纏う雰囲気も鈴蘭の様にお淑やかなだ。

会った頃から思っていたが、言葉遣いや雰囲気と朝早いとはいえずっかりと身嗜みが整えている辺りに俺と会うまでは何処かの良家の出身ではないかと思ってしまう。

(何で、こんな所に居るんだろうな?)

畳の部屋で琴や生花をやっている方が似合っているような華奢な白い手は何かの因果か黒い操縦桿を握っている。

体に付ける匂いも、何かの花の匂いの香水を付けると容易く想像できるが、何故か彼女達には花の香水よりも硝煙の匂いが付く。

「あの……私たちの顔に何かございますか？」

おっと、今は関係ないことだな。

「ただの考え事だ。回りくどく言うと思ったんだが、面倒だから単刀直入に言うぞ」

「はい」

「今日の昼にバーフォード中佐達が小松に来る」

というのが朝の一幕だ。今は着陸した空中管制機のタラップの近くで搭乗員が降りるのを片宮姉妹と待っている。

白い扉が開き、青を中心に白い色が付いた海洋迷彩の様なカラーリングの軍服に身を包んだ男が降りてくる。

「バーフォード中佐。長旅、お疲れ様です」

敬礼しながら喋る。

「そう畏るな。お前と俺の仲だ」

「二応の形式上はやっておかないといけないので」

「レオ「こつちでは、バトラで」そうですね。お久しぶりです」

「お久しぶりです。グレアム軍曹」

グレアム軍曹と腕相撲をするかの様に握手する。

グレアム軍曹は俺の担当オペレーターだ。まだ自分が四番機を務めていた頃からの付き合いだ。

俺の方が階級は上だが、年上なので出来るだけ敬語を使うが数秒でお互いに無くなる。

「久しぶりね。詩苑」

「はい、お久しぶりです。サラさん」

その後降りてきたのはサラ軍曹で詩苑の担当オペレーターを買って出た人だ。

「詩鞍も久しぶりね。元気にしてた」

「はい、この通りです。京香さん」

その後ろから降りてきたのは京香軍曹だ。詩鞍の担当オペレーターに自分から買って出た人だ。

「皆、久しぶりだ」

「マイケル軍曹も久しぶりですね」

マイケル軍曹は現在、担当のオペレーターがいない為にバーフォード中佐の補佐・空中管制機のリーダー手を兼任している。

「所で、件のメールだが、マイケル軍曹のメールだろ？」

「わかりますか？」

「バーフォード中佐の様に要点を押さえているが、そうする理由が書いてない所があったからな。女性陣のメールは纏まりは有るが長

くなる。そこから消去法で考えるとマイケル軍曹のメールだ」

「ははは、このM43飛行中隊は俺が居た今までのどの隊よりも個性豊かだがらな」

楽しそうに笑うバーフォード中佐につられて全員が笑う。

「何で、小松に？大規模作戦でもあるんですか？」

MS社の規則だと、空中管制機が来るのは長期作戦や大規模作戦の時などでそれ以外は基本的に出てこない。

「本社の連中も小松防衛戦の所為で、重い腰を上げたんだろう。MS社のエース部隊であるM43中隊を失うわけにいかないと言う訳で俺たち管制官が来たんだ」

「成る程」

空中管制機がいれば、戦場全体の情報を常にチェックして渡してくれるし、攻撃に集中すると後ろが疎かになる事も多い。そんな時に後ろの敵機を警告してくれる空中管制官の存在はありがたい。

「日本で何時、大規模作戦が発令されるかわからないからな。それに備えての事だ」

テ〜テ〜テ〜テ テテン〜テレレテテン

携帯から『戦場の中』が流れる。

「失礼」

バーフォード中佐に断りを入れてから取る。

〈へはい。誰です？〉

〈へアルマイル 隊の全員は技本の執務棟、ブリーフィングルームに十五分後までに集合せよってハルカが〉

〈へグリペン……まずは自分の名前を言ってから喋れよ。まあ、了解した〉

携帯を切る。

「すみません。雇い主の方から召集が」

「そうか、俺たちも技本のブリーフィングルームに行く事になっている。案内を頼めるか？」

「俺もブリーフィングルームに行くので、エスコートはさせて頂き
ます」

敬礼しながら、話す。

「おい！詩苑！詩鞍！ブリーフィングルームに行くぞ！」

「はい！」

M43飛行中隊の主要メンバーでブリーフィングルームに移動を開始する。

「遅いぞ慧君。戦闘機パイロットなら少なくとも三分前に着いておけ」

慧君が着いたのは指定された時間の直前だった。時間通りに来ているので人としては問題無いだろうが、戦闘機パイロットならもう少し時間にシビアでいて欲しい。

「すみません。遠出してて……」

「まあ、怒ってるわけじゃ無いし、最低限の時間通りに来たから責めるつもりでも無かったんだがな。そう思ったなら謝ろう」

「あくまでも、時間通りじゃなくて、時間より早く来た方が良いぞという話だ」

バーフォード中佐の援護のおかげで慧君の雰囲気が軽くなる。

「あ、はい。って……誰ですか？」

「遅いよ！気づくの遅いよ！」

「そこは自己紹介の時間があるから、その時に纏めてやらせてもらう」

「は、はあ……」

とりあえず、納得してくれた。

「よし、全員集まっているな」

ドアが開く音と一緒に中年太りした醜男が入ってきた。

「さて、本題に入る前に自己紹介をお願いしたい」
入ってきた人物は八代通だった。

八代通が言い終わると後ろのメンバーに視線を向ける。

「うむ。私はMS社M42飛行中隊司令のフレドリック・バーフォード中佐だ。空では空中管制機【カノープス】に搭乗して部隊全

体の指揮をしている」

「バーフォード中佐の補佐をしている。マイケル・アリーナだ。階級は軍曹でバーフォード中佐と同じく空中管制機「カノープス」の搭乗員だ」

「私はグレアム・ハートリーです。階級は軍曹です。空中管制機「カノープス」からアルタイル01のオペレーターをしています」

「サラ・アンデション軍曹です。アルタイル03 詩苑の担当オペレーターです。空中管制機「カノープス」の搭乗員をしています」

「アルタイル04 詩鞍のオペレーターを担当しています。羽沢京香です。階級は軍曹で空中管制機「カノープス」の搭乗員です」

「他に聞きたい事があれば各自でやってくれ。本題に入るぞ」

八代通が真剣な顔つきになる。

「本日〇六三〇東シナ海南西部の防空識別圏にザイが侵入した。那覇基地所属の自衛隊・嘉手納の米軍機がスクランブルしたものの双方に被害が大きく撃退に至っていない」

「八代通室長。その後のザイの状況を教えて頂きたい」

バーフォード中佐が状況把握の為の質問を出す。

「その後の残存勢力は石垣島北方百五十キロ上空を周回中に一部が近隣の無人島に落下した事が観測機から報告が入っている」

「で、その後に面倒事か？」

「そうだ。これ、何だと思う」

一枚のスライドを見せる。

至って普通の無人島が映った空撮写真だが、拡大された場所には似つかわしくないものがあつた。

ザイの虹色に近い色をした正六角形の柱を光の糸で繋いだ物体。こんな物が幾何学模様を描いていた。

「墜落したザイの破片とか？漏れ出した燃料とか？」

「何かのレーダーサイトですか？」

「地理的に港でしょうか？」

慧君・詩苑・詩鞍の順で答える。

「そんな物ならどれ程良かったか」

八代通の発言を聞き、もう一度よく見る。

山頂にあるのはリーダーサイトか？岩肌に空いた大きな六角形の穴。そして、光の糸を有線通信のケーブルだと仮定すれば。

「「「「「FOB」」」」」

「MS社メンバーの言う通りだ。これはFOBだ」

「「「「「FO………何ですか？」」」」

「詩苑、詩鞍………お前ら………」

慧君ならまだしも、お前ら二人が疑問符を出すな。

「FOBはForward Operating Baseの略語よ」

「Forward Operating Baseは簡単に言うと前線基地よ」

「「「ぜ、前線基地!?!」」」

サラ軍曹の言葉には疑問符を浮かべていた三人だが、京香軍曹の言葉には驚きを隠せない様子の三人。

「彼奴らにそんな知性が」

不思議がる慧君だが、何ら不思議がる事じゃない。

「鳴谷さん。ザイにも燃料切れという概念があるなら、可能な限り前線に近い場所に基地を作るたがる筈です。何もタクラマカン砂漠からここまでずっと、飛びつばなしな訳がありません」

「こんなザイの町の様な物が中国に幾つも有るって言うんですか!?!」

マイケル軍曹の言葉に驚く慧君にバーフォード中佐が苦笑しながら喋る。

「FOBの建て方は月面基地に近い方法だろう。発電機や通信機器、観測設備を月や火星に打ち込んだ後にプログラムが作動して展開・稼働させるだろう？それを地上で大規模に行っているんだ」

「ん、ん？…どういう事ですか？」

バーフォードの言葉に理解が追いついていない様子だ。

それを感じ取ったのかグレアム軍曹が口を挟む。

「簡単に言うと地面に突入して搭載物を下す輸送機型ですね。これ

が基地設備を構築する為に無人島に突っ込んで、搭載物を展開して基地を構築中という訳です」

「な、成る程」

「となると、上空の機体は直掩機だな」

慧君の理解が追いついた所で俺が攻略の為の話に持つて行く。

「かなりの数ですね。基地の構築が終わるまで我々を寄せ付けなかつもりだと」

フアントムは頭の周りが早いな。

「もつと、増えるかもな。このシエルターだが、恐らく滑走路兼用だ。格納庫から直接、離陸してくる。こつちが攻略に乗り出したら、迎撃機が腐る程出てくる」

「そう考えて然るべきだろう」

八代通が何とも言えない表情をする。

多分、言いたい事が全部言われたのだろう。

「構築が終わるとどうなるの？基地ができると思えば悪い事になる？」

ストレートな質問をするのはグリペンだ。

「良いか悪いかで言えば、最悪だな」

スライドが変わり、何本もの等高線を思わせるラインが重ねられた地図が出された。

俺はこれが防衛線だと即座に理解できた。

「この第一列島線、これが極東における対ザイの防衛ラインだ」

重ねられた線の一本、沖縄・台湾・フィリピンを結ぶ線がハイライトされる。

「ここが維持できているおかげで太平洋の海路・空路は守られている。少し広いが【マレー・インドネシア我らの海】というやつだな。西側がザイに圧迫さ

れても、東側の援護で持ちこたえられる。陣地の縦深性が維持されている訳だ。しかし、これが破られると」

スライドが変わる。

「大陸からザイが押し寄せてくる」

言われなくともわかる。日本が物理的に孤立して、後は滅びを待つだけになるだろう。

「そして奴らが今回、押し寄せた場所はここだ」
そして、スライドが変わり、東シナ海の小島を映す。

「丁度、台湾と沖縄の中間点、第一列島線の直上。ここが継続的に押さえられるという事は太平洋の防衛ラインが崩されているのと同義だ。どう控えめに見ても壊滅的状况だな」

「で、基地ができる前に独飛で潰す。独飛の設立に無茶した以上、独飛は結果が欲しい訳だ」

「ああ、連中がお誂え向きの事態を作ってくれたんだ。独飛の実力を示す最高の時だ。連中には感謝しないとな」

「ああ、俺も奴らのお陰で明日の飯が食えるんだ。感謝の印にミサイルと爆弾をプレゼントしなきゃな」

「ふふふふふふふ」

慧君が訳がわからないものを見ている様な顔をしているが気にしない。

「イーグル達が行って、蹴散らして来れば良いんだよね？」

あ、うん。此奴は馬鹿だ馬鹿だ思ってたけど違った。此奴は単純なだけだ。敵を見つけた、潰す、以上という感じにだ。

まあ、F-15は制空戦闘機として生まれたのだ。彼女がF-15の意思の具現化されたものであるならば、何ら不思議なことじゃない。

「そんな単純な問題じゃありませんよ」

「拠点破壊はそう単純じゃないんだよ」

フアントムと被った。

「私たちは戦闘機であり、爆撃機ではありません。精一杯の爆装をした所で地上に投射できる火力は微々たるものです。とてもこの島全体を無力化するなどできません。それに爆装のみ、空対装備無しで多数の直掩機が上空を飛ぶ中での出撃など、はっきり言うとお自殺行為です」

フアントムの言葉に紫苑が手を上げて意見を出す。

「要所だけ潰すって、いう作戦はダメですか？」

「私たち姉妹の機体はA-10です。対地なら得意中の得意です」

詩苑の意見に詩鞍が多少ある胸を張って話す。

「要所だけを潰すのは良いかもしれんが、圧倒的に人手が足りない。A-10は確かに対地作戦においては無類の強さを誇るが足が遅いから、攻撃までの護衛が四機じゃ、とても足りない。せめて後、五か六機は欲しい」

防御力・攻撃力に飛んだA-10だが、速力が無いのが弱点だ。

「直ぐにその数のAJZ戦闘機を用意するのは無理だ」

バーフォード中佐が俺の意見が無理な事だと話す。

「誰も、基地破壊を航空機で行うと言ってないだろう」

「「「「え!?!」」」」

MS社の片宮姉妹以外の全員が何を言っているんだ此奴はと言いたげな表情を向ける。

「いや、こつちが何を言っているんだって言いたいんだがな」

「すみません。IUPFの頃の習慣でつい」
多国籍治安維持軍

「どんな習慣!?!」

「え? 敵が異様に航空戦力が充実していて、陸上戦力が案山子になる事が多かった位だから、航空戦力が多く使われた位だが?」

「いえ、陸上戦力も使いましたよ。あくまで航空戦力が無いと成功しない作戦ばかりだっただけです」

慧君の言葉にグレアムと一緒に答える。

「まあ、今回は自衛隊は一二式誘導弾改、米軍は第七艦隊残存艦のトマホーク巡航ミサイルを百発単位、ミサイル飽和攻撃で基地を破壊する。一目標に平均五発、計五十トンの炸薬が九十秒以内に降り注ぐ。アウトレンジ攻撃だ」

眼鏡の奥の双眸が凜猛な輝きを放つ。

(マジか……)

防衛線の真上に前線基地を建てる敵も敵だが、小さな島に百発単位の巡航ミサイルを撃ち込む味方も味方だった。

(まあ、状況を考えれば普通か?)

視線をスライドに戻す。

ここが敵に抑えられ続けければ首元にナイフを突き付けられ続ける

のと同じ状況だ。

守る国がある人間は敵を駆逐する為ならば、投入可能な戦力は全て投入して駆逐する。例え、世界地図を書き直さなければならなくなってもだ。守るべき国がある人間達の獰猛さを再認識させられた。

「だが、E P C M対策はどうなっている？衛星誘導が効かないそうだが？」

「そこはドーターの出番だ。中間誘導からはドーターが引き継ぎ各目標に導く」

「A J Z戦闘機では、引き継ぎは不可能ですか？」
詩鞍が拳手して質問する。

「可能だ。お前達のA J Z戦闘機がE P C Mを無力できている間は可能だが、今回は確実にミサイルを誘導したい以上は新しい波長のE P C Mを受けると一瞬でも影響を受けるA J Z戦闘機には任せられない」

「わかりました」

詩鞍が悔しそうな表情で顔を伏せる。

多分、制空型のザイしか居ない状況下のこの作戦では自分達は唯のお荷物だと思ったからこそその進言だったのかも知れんな。

「詩鞍と詩苑はファントムの直掩をしてくれ、この作戦ではファントムの突入と護衛が重要になる」

「勿論だが、他の二機とMS社の諸君には、ファントムの直掩をお願いしたい。ファントムには偵察ポッドを交換してデータ・リンク機能向上させるが、今回の作戦で誘導するミサイルの数が数だ。警戒が疎かになるだろうから、他の二機は勿論だが、MS社の諸君にもファントムの直掩をお願いしたい」

「確かにそうですが、この方達に私の背中を預けるとい事ですか？」

「それが直掩というものだろう」

顎に手を当てて考えるが此奴は間違いない。

「お断りします」

「うう言う」。

「あり得ませんわ！」

「あり得ませんよ！」

「私達の護衛じゃ命が幾つあっても足りないなんて、何様のつもりですか！」

詩苑と詩鞍からの怒声が通信機から聞こえた。

「落ち着けよ。これから先にいつか護衛で雇われた時にそんな事を言われるのはザラだぞ」

実際にトルコ山岳部を抜ける旅客機の護衛の際に護衛対象からそんな事を言われた事をパイロットスーツのジツパーを上げながら、思いつく事を出す。

ブリーフィングが長引いた所為か慌ただしい出撃準備だ。

「守ってやると思うからそうなるんだ。守らせて頂くとさえ思えばそれでも無いだろう？」

「お兄様は優し過ぎます」

「俺は優しくは無いよ。甘いかな」

「一体、どう「お前は早く乗れ！」ええー」

小走りで会話していた俺たちの前で梯子に片足を乗せたまま乗り込もうとしないイーグルに整備員達が困ってそうだったので、ケツを蹴り上げて乗り込ませる。

「いたーい！」

あれこれ言われる前にキャノピーを閉めてやる。

通信は飛び上がる直後まで開かないでいてやろう。

「お先に」

片宮姉妹よりも近くに駐機されていたので、一足早く乗り込む。

Gスーツの吸気ホースを接続して、ちゃんと接続されているかも確認した。燃料も問題なし。コントローラチエックも問題なしのサインを貰って、車輪止めが外される。

その頃にはもう、ドーターは全機発進済みだった。

自衛隊員の誘導にしたがいスロットルを開いて、前進して誘導が終わると誘導してくれた自衛隊員が敬礼を送ってくれたので、敬礼で返す。

〈敬礼して送って下さるんですね〉

詩苑から通信が入った。

〈自衛隊は俺が無名の頃にも世話になったがその時からだぞ〉

〈アメリカ軍では一部の人からしかされませんでしたから新鮮ですな〉

詩鞍が通信に割り込む。

〈ALTAIRO1、コンタクト・デパーチャー〉

〈ALTAIRO1、クリアード・フォー・テイクオフ〉

スロットルを加速させて、空へと飛び立った。

暫くするとALTAIRO3と04も上がってくる。

〈アルタイル隊聞こえるか？こちらは空中管制機「カノープス」のバーフォードだ。アルタイル隊、聞こえるか？〉

狙ったかのように通信が入った。

〈こちらALTAIRO1、感度良好だ〉

〈ALTAIRO3、感度良好です〉

〈ALTAIRO4も感度良好です〉

〈ファントムの態度に怒りを覚えていると思うが、空に上がった以上は忘れる。墜とされるぞ〉

〈〈ラジャー〉〉

〈さて、作戦は地上で話した通りだが、状況が芳しく無い。先程、ザイが追加の物資コンテナを投下したらしい。おそらく、構築速度を上げるためだろう〉

此方の動きが読まれていたのか？

〈だが、やる事は変わらない。自衛隊機は室戸岬沖会場で空中給油を受けた後に作戦空域に向かうらしい。此方も室戸岬沖で空中給油を受けて、その時に自衛隊と合流してくれ〉

〈ラジャー。自衛隊機の現在位置は？〉

〈〈はい。自衛隊機は室戸岬沖に進入した所です〉〉
〈〈これなら、空中給油中に合流できるはずだ〉〉

その後、暫くすると空中給油機の姿を捉えた。
フアントムの給油が入る。

〈〈フアントムが最後か?〉〉

一般通信で通信を入れる。

〈〈ええ、遅かったですね〉〉

〈〈武装の載せ替えに手間取ったらしい〉〉

今回の武装は数々の教訓を生かして、機首下部のアクティブミサイル誘導装置を外して20mm機関銃を搭載して、中距離対空ミサイルRAMと高機動ミサイルRAMを十一発ずつの搭載だ。

RAMは接近してくる敵機を撃破する為、RAMは接近戦の時に敵機を確実に墜とす為だ。

距離は空中給油を受けるので増槽は置いて来た。

〈〈ALTAIRO1から給油してくれ〉〉

〈〈ラジャー〉〉

給油を受けている間にフアントムへ暗号回線を繋ぐ。

〈〈フアントム、少し良いか?〉〉

〈〈貴方も暗号回線で通信ですか〉〉

呆れた様な声が聞こえる。

〈〈BARBIE01のレーダー／火器管制員の性格から考えると日本を守る為にとか言ったんだらう?だが、違う〉〉

〈〈じゃあ、なんですか?〉〉

〈〈この作戦の現場指揮官はBARBIE03のお前だ。貴機の判断が作戦の成功、失敗はそうだが、命を背負っているのと同義だ〉〉

〈〈ええ、それで〉〉

〈〈信じろと言った所で無駄だろう。だが、助け合って欲しい。以上だ〉〉

〈〈信じろと助け合いの違いが良くわかりませんね〉〉

〈〈それは貴機次第だ〉〉

暗号回線を切る。

給油が終わったので空中給油機から離れる。
その後は誰からの通信も入らなかった。

暫く、飛行をしているとカノーパスから通信が入る。

〈〈此方、バーフォード。アルタイル隊、もう直ぐ、作戦空域だ。各機、戦闘準備〉〉

マスターアームをONにする。

〈〈ザイの迎撃機が接近してます〉〉

マイケル軍曹の通信が入る。

〈〈詩苑！詩鞍！ファントムの直掩を頼む！〉〉

イーグルとグリペンの前に躍り出て、デルタ編隊の一番機的位置を飛ぶ。

〈〈俺たちは護衛の第一防衛ラインだ。接近してくるザイにプレッシャーを与えて、接近を諦めさせるのと、それでも接近してくる奴は墜とすんだ。ただし、深追いはするなよ〉〉

〈〈了解〉〉

〈〈ラジャー〉〉

二機から了解の合図が入る。

〈〈EPCMLレベルが上昇しています。ガスト25…26…27まだ、上がります。29…30！AJZシステムの起動を！〉〉

AJZシステムが起動すると、藍色の装甲版がキャノピーを覆う。

〈〈死ぬなよ〉〉

一般回線にバトラが呟くと機体が加速する。

〈〈前方より、ザイが接近しています。機体識別はN型です〉〉

前方からエッジが深く、人が乗れる程厚い刀身のカウボーイナイフに後退翼を付けたザイが二機、接近する。

〈〈ALTAIR01、エンゲージ〉〉

バトラが^交エンゲージ^{開始}を宣言する。

〈〈イン・ガン・レンジ、ファイア〉〉

機関銃攻撃を宣言。

一秒に満たない時間での20mm機関銃の射撃を止めると同時に左バンクして、ザイの機関銃弾を回避。

一番機の位置に付いたザイは、ナイフで言うエッジの部分から黒煙が吹き、横に大きく向き、後続の二番機と衝突してガラス片となり、海に沈む。

〈〈ALTAIRO1、敵機を二機撃墜〉〉

〈〈流石です！ALTAIRO1！〉〉

敵機を撃墜して直ぐにグレアムが賞賛をバトラに送る。

〈〈サンキュー。N型はナイフで言うエッジの部分に弾を当てれば、少ない弾で墜とせるぞ〉〉

〈〈ラジャー〉〉

グリペンが返答する。

〈〈無理に狙う必要はないぞ〉〉

〈〈ALTAIRO1、新手です。数はM型が八です〉〉

マイケルが新手の接近を報告する。

デルタ編隊で接近するザイが八機がRF-4TP-AZJのリーダーが捉える。

ザイをリーダーが捉えた途端にザイが四つのロツテに分かれ、接近する。

〈〈ALTAIRO3、04に告ぐ。ザイが接近する可能性がある。〉〉

注意を〉〉

通信を終えるとザイが視界に映る。

M字の主翼が特徴的なザイだ。

〈〈イーグルとグリペンは一機でロツテはやれるか？〉〉

〈〈できる〉〉

〈〈よー〉〉

〈〈じゃあ、頼む〉〉

一番前のロツテに狙いを定める。

〈〈FOX2！〉〉

RAAMを一発放ち、上昇する。

M型のザイが追いかける様に上昇を開始するが、二番機の位置にいたザイがミサイルを喰らい、墜ちて行く。

〈〈敵機の撃墜を確認しました〉〉

一番機のザイはRF―4TP―AZJを追って上昇するが、RF―4TP―AZJは嘲笑う様にザイの下に旋回して、水平飛行する。

それを追ってザイも左旋回するが、RF―4TP―AZJはダイブブレーキを開いて、急降下を開始する。

ザイも追いかけて急降下を開始する。

〈〈イーグル！後ろのザイを墜とせ！〉〉

F―15Jの後ろに回り込もうとしていたザイに機関銃を1秒撃ちながら、バトラが叫ぶ。

〈〈りよーかい〉〉

F―15Jの前方と後方で爆発が起きたと同時にF―15Jがトリムアップ。

RF―4TP―AZJの後ろを追っていたザイに機関銃を一秒撃ち、撃墜する。

〈〈ナイスキル！〉〉

〈〈イーグルもバトラもやるな！〉〉

バトラとマイケルがイーグルを褒める。

〈〈ALTAIR03、敵機撃墜〉〉

〈〈ALTAIR04、敵機を撃墜〉〉

その後すぐに詩苑と詩鞍が敵機を撃墜した事をサラと京香が報告する。

〈〈ちよつと！何してんの！〉〉

イーグルの叫びを通信機が吐き出す。

〈〈上〉〉

ファントムの言葉に上を向くバトラ。

「ん？」

バトラが太陽から黒い点が近づいてくるのを見つける。

〈〈03、04！上空から十機！〉〉

〈〈詩苑！上空から敵機です！〉〉

〈〈詩鞍！上空から来てます！〉〉
カノープスのオペレーターの声が響く。

ザイが十機、RF-4EJから少し離れた位置を飛ぶ黒と白のA-10に殺到する。

〈〈ブレイク！〉〉

〈〈FOX2！FOX2！〉〉

RAAMを同時ロックオン可能な限界数の四機に発射して、QAMを^{発射後ロックオン}LOALで二発発射。

LOALはで発射されたQAMは母機^{RF-4TP}の誘導で飛び、母機が1500メートル以内にザイを収めるとミサイル自身がザイを追う。

RAAMが四発全て命中した後少し間を置いて、QAMが二発命中する。

その後は残りの四機もグリペンとイーグルの働きで撃墜された。

〈〈残り何発だ？〉〉

〈〈BARBIE01、対空ミサイル5発と機関砲弾〉〉

〈〈イーグルは6発で、機銃はまだ余裕あるよ〉〉

〈〈此方は、20mmを消費したが、30mmはマックスで、ミサイルはRAAMが五発とQAMは九発だ〉〉

〈〈こっちは機関砲しか使ってないです〉〉

〈〈こっちもミサイルはフルです。どうして奇襲が？〉〉

〈〈相手が電波封止をしていれば警告は出ませんよ。此方のレーダーは上まで届きませんし、太陽を背にされたら発見も困難ですよ〉〉
ファントムには余裕がある様に感じるバトラがレーダーでファントムのRF-4EJの位置を探る。

(離れ過ぎだろ！)

戦闘域から出た所を旋回していた。

〈〈敵大規模編隊が接近！〉〉

〈〈あー、もう！また！〉〉

イーグルが文句を言いつつ、機首を敵編隊に向ける。

ザイも編隊を維持したまま接敵する。

〈〈何でも良いから早く来てよ！ミサイルが無くなっちゃう！〉〉

三本の白い茎の先に三つの炎の花が咲かせながら、イーグルが叫ぶ。

〈〈自分の身を守るのに精一杯の様ですが？この上に私の護衛ができるんですか？〉〉

〈〈できるかどうかじゃなくて、やってるんだから！さっさとー〉〉
〈〈BARBIE02被弾！〉〉

山吹色のF-15Jの主翼から煙を吐いているが、至近弾だったおかげか飛行に支障はない様だ。

〈〈更に新手。接敵まで三十秒！〉〉

〈〈は！やつこさんは俺らを本気で殺したいらしいな！〉〉

〈〈お兄様はやらせません！〉〉

〈〈ALTAIRO3、任務を忘れるな。護衛機体は同じ、フロントムでもBARBIE03だ〉〉

〈〈……………〉〉

〈〈が、此奴はまずいな。ここにまだ、十五機に後詰めが五十機か〉〉
(先に来た新手が俺とイーグルが五機は墜としたから、二十機に後詰め五十に最初の十機合わせて、八十か。下手な空母よりあるな)

〈〈地上からミサイルが発射された。注意しろ〉〉

バトラが機数から規模を計算しているとカノーパスから通信が入る。

ミサイルは戦闘機部隊と同高度に達すると爆発し光のリングを作り出す。

爆風に巻き込まれた機体が洗濯機に入れられた服の様に揉まれる。

〈〈ALTAIRO1！無事か！〉〉

バーフォードが叫ぶ。

〈〈右の主翼が損傷しているが、戦闘に支障なし〉〉

〈〈他の機体はどうだ？〉〉

〈〈ALTAIRO3と04はBARBIE03の近くだったので無事です〉〉

マイケルが詩苑と詩鞍について報告し、バトラはグリペンとイーグルを見つけて報告する。

〈〈BARBIE01、02共に損傷が確認できる。だが、飛行に問題はなさそうだな〉〉

〈〈それは良かった〉〉

〈〈バーフォード。あれは何だ?〉〉

〈〈地对空クラスター弾と言うべきものだろうな〉〉

〈〈なんだ。唯の面制圧兵器か。じゃあ、問題無いか〉〉

〈〈被害高度は此方で報告しますので、退避をお願いします。腐っても、クラスター弾です。燃料気化弾頭よりは被害範囲は狭い筈ですから、簡単です〉〉

敵機をQAAAMで撃墜するバトラ。

〈〈地对空クラスターミサイルを確認……嘘だろ……〉〉

〈〈どうした、マイケル軍曹〉〉

〈〈五発同時です!被害範囲をH ヘッド・アップ・ディスプレイ U Dに表示します〉〉

〈〈真っ赤じゃねーか!〉〉

HUDのほぼ全てが真っ赤だった。

〈〈被害高度は1000から2000です〉〉

急降下で被害高度から逃れるRF4TP。

高度1000を切った途端に光のリングが三つ出来上がる。

〈〈無理ですね。撤退しましょう〉〉

ファントムが落ち着いた声で話す。

〈〈賛成だ。あのミサイルをどうにかしないと無理だな〉〉

〈〈冗談でしょ!?!ここまで来て!〉〉

〈〈残弾が尽きる前に撤退すべき〉〉

〈〈弾が無くなったら、逃げられませんよ〉〉

〈〈ファントムさん、私のミサイルが十二発残ってます。これを誘導して、お兄様の撤退ルート上の敵機に当てれますか?〉〉

〈〈可能ですね〉〉

〈〈全機、残りのミサイルを撤退ルート上の敵機に集中しろ!撤退だ。作戦を練り直す〉〉

残った全ミサイルが撤退ルート上の敵機を焼き尽くしたと同時に撤退ルートに雪崩れ込み、撤退する。

これがM43飛行中隊と航空自衛隊の初の敗北だった。

作戦8 蠍の毒と研ぎ澄まされた翼

〈〈着陸を許可します〉〉

航空自衛隊那覇基地の管制塔から許可を貰った藍色のF-4。バトラのRF-4TB-AJZ ファントムIIが滑走路に着陸する為
に高度を下げて、主脚を引き出す。

前に着陸した白色のA-10が滑走路から退避した所で、紅色のJAS 39Dと山吹色のF-15J、翡翠色のRF-4EJ-ANM、黒色のA-10の近くへと進む。

RF-4TB-AZJは徐々に高度と速度を下げて行き、滑走路に主脚が接触する。

ゴムとコンクリートが擦れる独特な音を立てながら、滑走路を滑走する。

RF-4TB-AZJが突如、尾翼のラバーを操作して滑走路脇の土の場所に突っ込もうとする。

〈〈バトラ！何を！〉〉

管制官が叫ぶ。

バトラは管制官の叫び声を無視して、ラバーを操作する。

ラバーを操作された機体が横へ動き出した途端に左翼の主脚が折れてが無くなり、金属とコンクリートが何回も当たった音を後ろに立てる。

機体重量が右と前に集中した様で機首の主脚も機体から離れる。

機首を地面に擦りながらも止まる気配は無く機体は滑走路脇の土に機首から突っ込む。

機首のピトー管は地面に突き立てた瞬間に折れる。

それでもピトー管位では機体の慣性は止まらない。

機首が再び地面に刺さると機体の後ろが跳ね上がり、機体は逆立ちに近い状態になる。

〈〈90度まで〉〉立てー！！！

管制官が叫ぶ。

〈〈ヤメロー！！！〉〉

バトラも管制官に叫ぶ。

機体は機首を起点に75度まで傾くが、キャノピーが少し地面に埋まるとそこで固定される。

機首は地面に突き刺さってはいたが、装甲板がキャノピーから離れると地表に隙間が出来たおかげかキャノピーが開き、バトラは閉じ込められると言う最悪の事態は回避できた。

「よっ」と

バトラがコックピットから出ると機首を滑り台の様に滑べって地面に降りる。

「75度で止まるなよ。後、15度頑張れよ」

バトラが那覇基地にいた頃に世話になった整備員がニヤけ顔で声をかける。

「おやさんも管制官みたいなことを言うのな！」

流星にバトラもこれには叫ぶ。

「艦載機の90度直立は伝統だろ？」

「捨てちまえ！そんな伝統！」

艦載機の90度立つは不名誉な事なのだ。（ネタの業界では名誉な事）

「はははっ」と笑いながらささる整備員を後ろで睨みつけるバトラだが、すぐに辞めて滑走路に視線を向ける。

視線の先では折れた二本の主脚を回収し終えて、漏れたオイルの撤去も終えかけている自衛隊員の姿があった。

M43飛行中隊と自衛隊のアニメ達那覇基地に居るのかと説明すると、撤退する頃に八代通から那覇基地に向かうようにカノーパス経由で知らされた為だ。

バトラの視線は逆立ち気味の愛機に向けられる。

（大丈夫だろうか？）

主脚とピトー管が折れただけなら多少の修理で直ぐに戦線復帰が出来る。しかし、内部の電子系統まで壊れているなら近い内での再出撃は絶望的だろう。

「だが、取り敢えず……」

今は目の前の問題を解決しないとな。

「全く、戦闘ならまだしも着陸位は出来たんだぞ？」

「でも、慧も高G飛行で疲れてたから」

ん？待てよ。少し確かめたい事が出来た。もし、俺の推理が正しければ簡単に問題解決が出来る。

「なあ、慧君」

「何ですか？」

若干、怯え気味の慧君に俺は苦笑しながら話す。

「作戦失敗の事で怒ってはないよ。独断先行で動いた奴がいて失敗した訳じゃない」

それを聞いて息を吐く慧君。

心なしか胸を撫で下ろしている様にも見える。慧君に恐怖を植え付ける様な事をしたかな？

あ、訓練で滅茶苦茶やったな……………

つい最近だと数メートルの距離でコックピットに30mmを叩き込んだ覚えがある。

「小松防衛戦の後でグリペンから慧君の操作と指示だって聞いたが……………何処までやった？」

「え？えつと……………」

思い出そうと顎に手を当てて考える慧。

「グリペンが不具合を直すまでのほんの少しです」

ああ、挙動が変だったあの後の少しか。

「グリペン」

パールピンクの髪が一瞬、跳ね上がる。

声を掛けられると思わなかったのだろう。

「なに？」

感情を感じずらい声。単純にまだ、言葉に感情を乗せるというのが出来ていないだけだろう。こればかりはコミュニケーションを繰り返すしてグリペン自身が知っていかなければならない。

「アニメのデータ・リンクを普通の人間は受け取れないよな？」

「普通の人間ならA J Zの仲介を受けて、HUDに表示されない限

り無理」

つまり、A J Zが無いと無理という事か。

なら、打開作はある。だが、ここで話すのはよそう。歩く拡声器がある。

「後でハンガー裏に来てくれ話したい事がある」

「え?……あ、ちよつと」の言葉が無視して手を振りながら歩き去る。

(取り敢えず、一つ目の問題は解決の糸口が出来た。後もう一つは……)

「なんでお父様の言う通りにしないの!」

思案の海に入り込みかけた時にイーグルの叫び声が聞こえた。

「私は作戦活動の自由を頂いていますので、私の判断で作戦を変更するのはなんらおかしい所は無いはずですが?それで怒鳴られるのはお門違いです」

「でも、作戦が失敗したじゃん!」

「それはあなた達の実力の問題でしょう。ちゃんと制空権を取って頂ければ仕事しましたよ?まあ、上空からの奇襲に反応出来ていないので無理な話だと思いますが?」

イーグルとファントムの只ならぬ雰囲気周囲の自衛官達も目を丸くしている。

(少しイラつくな)

作戦失敗は全て俺たちに有る。と言う言い分にイラつきが隠せない。

誰かが作戦無視、独断専行をしたのならわかるがそのどれもしていないのにその意見は頂けない。

作戦失敗は部隊全員の責任で有るべきなのだ。

「ファントムの言い分もわかるが、俺だったらあんなミッションは楽なもんだと思うがな?」

挑発気味に言ってる。

「あら、それはどんな意味ですか?」

良し、喰い付いた。

「俺も今回の作戦に似た作戦を行った事が有るんだが、その時はひっきりなしに飛んでくる高機動のS A M地对空ミサイルの雨と電磁浮遊機雷の森を800キロ前後の速さで飛び抜けて800キロの速さで動く移動目標に当てたんだがな」

「つまり、制止目標に巡行ミサイルを当ててるくらいは簡単だと?」
嗜虐的な笑みに口角を上げるバトラ。

「そうだな。動かない目標。しかも、地上目標を相手にできないなんて言うとは、エースとは名ばかりだなんて思っただけさ」

「安い挑発ですね。そんなもので私が動くとしても? 貴方はもう少し頭が良い方だと思っていたのですが、残念です」

ああ、知ってるよ。そしてそう言う奴は自分より劣っていると思ってる奴に対してはプライドが高い。

「だろうな。だが、エースならあれくらいの作戦は簡単に終わらせる筈なんだよな。あ、無理か。D A C Tで自分よりも弱いと思ってる奴に小細工を使わなきゃ墜とせない位の実力なら」

ならば、そのプライドに傷を付けに掛ければ良い。

「真っ向勝負なら勝てる? そもそもこちらに貴方とのD A C Tをやったとしても利益が無いですね」

涼しげな表情で話すファントムにバトラが勝ち誇った顔で喋る。

「ほお〜そうか。なら、俺が負けた時はI U P F時代の仲間に救援を要請と思っていたがやめだな」

「成る程、良いですね。私にも利益が有ると。万が一にもありませんが貴方がもし勝ったら、私達だけで攻略する事になるですよね? 奇跡でも起きないと成功しませんよ」

ああ、そうか……そう言うか。なら、この喧嘩は俺の勝ちかな。

「奇跡が起きないと……か。エースパイロットは奇跡が起きるのを待たない。エースパイロットは」

奇跡を起こす。それこそがエースパイロットだ」

エースの必要最低限の条件だ。

「エースが負けられない戦場に出る。それは奇跡を起こす事を義務とされる時だ」

その言葉を聞いたフロントムがピクリと眉を動かす。

「つまり、次の作戦では、奇跡を起こすと言っても言いたいですね」
フロントムが嗜虐的に口元を歪めてから喋る。

「良いでしょう。ですが、この際ですから上下関係をしっかりとる為に条件を付けましょう」

「ほう。じゃあ、次の作戦から俺だけでも信頼して貰おうか？」

「では、私からは……」

指先を下唇に当てながら話す。その姿は女が男を誘うような姿だった。

「MS社を退社して、私のパートナーになって貰うとか？」

「いけません！そんな条件のm「黙れ」ツツ!」

詩苑の言葉を遮り、殺気も出して黙らせる。

「ああ、良いぜ。本物のエースと偽物のエースの差を教えてやる」
指を数回動かして、挑発する。

「自暴自棄なのか、そう見せているのかわかりませんが二回一緒に飛んでわかりましたが貴方では私に勝てませんよ。奇跡でも起きない限り」

「言っただろう？エースは奇跡を起こす事を義務とされた者の事を言おうと。奇跡は起きるよ。いや、起こす」

基地のサイレンが鳴り響く。

「なんだ!!」

周りが『緊急着陸！緊急着陸！』と叫んでいる。

「おいおい！なんだありゃあ……」

自衛隊の観測機だろう四発の大型ターボプロップが降下して来ていた。

主翼の片方が半分折れて、四発のターボプロップエンジンの内の一発が火を噴き、右の主脚の一切が出ていないままの状態で滑走路にタッチダウンする。

耳障りなブレーキ音と火花を散らす。大破した機体は数回バウン

ドした後にはオーバーラン寸前で止まる。

『消防と救難リフトを回せ!』

自衛隊員が叫ぶ。

(護衛機機が見えない。墜とされたか?)

あれは観測機だろうから間違いなく護衛機がいる筈だが、それが見えないとなると墜とされたの考えるのが普通だ。

『護衛機はどうした!』

『全機、墜とされたらしい!』

(良くやってくれました)

無事な着陸はできなかったが、護衛の対象機を基地まで帰したのだ。護衛機としての仕事は全うした。

俺は名も顔も知らぬ、亡き戦闘機乗りに対して、敬礼を送る。

(彼らは仕事をやり遂げた。なら、今度は俺たちの番だ!)

死んだ者が残った者に思う気持ちなど、残った者の押し付けかもしれない。だが、死んだ者がやり遂げようとした事を残った者が継ぐのは残った者の義務なのだ。

(押し付けかもしれませんが……必ず、成功させます)

それが自分出来る、最大限の弔いだと思うから。

「必ず墜とす」

肩越しに振り返ったバトラが静かにファントムに告げて、去っていく。バトラの背には覚悟をした者の風格が漂っていた。

バトラがハンガー裏で慧とグリペンに話した後にある場所に連絡してくれる様にマイケルに頼んで、バーフォードについて先程の事を報告に来ていた。

「と言う訳なんだ……うん、『また』だ。すまない。今更、謝って許して貰おうなんて思っていない。でも、この報告を聞いた時に安定感からくる安心感のような物を感じてくれたと思う。安心感が無くなりつつ有る世の中でそういった事を忘れないで欲しいんだ。そう思っこの報告をしたんだ。じゃあ、文句を聞くよ」

「……………」『ゴント』

バトラの報告を聞いたバーフォードはカノープス機内の小さな会議テーブルに無言のヘッドバットを放つ。

「私的には構わない。只、技本の方にも連絡した方が良いな」

バーフォードは眉間を揉みながら通信機をセットして、小松の八代通に繋げる。

「ほら、説明しろ」

バーフォードから受話器を受け取ったバトラが説明する。二回目なので速く終わった。

「慧君と同じ事をするな。まあ、構わんよ。彼奴にお灸を据えてやってくれ。やり方はシュミレーターだろう。敵前で訓練飛行なんて出来ないからな。あと、お前の機体は逆立ちしたんだって？」

「最後のは何処から聞いた？……………まあ良いや。父親公認なら手荒な真似をしても大丈夫だな」

「良いだろう。だが、どうやって勝つつもりだ？」

「へ？普通に撃墜するだけです、何か？」

「……………馬鹿だろ？」

呆れ声の八代通の声。

バトラはスピーカーをオンにしてから話す。

「化けの皮を剥ぐのさ。構わないですよ。バーフォード中佐」

「お前の判断に託すと言ったんだ。構わないさ」

「一体何の話だ？」

訳が分からないという風に話す八代通にバトラが静かに言い放つ。

「青い蠍の毒はちよつとばかり強いですよ」

夕方の午後五時、藍色のラインが中心に入った白いグリペンが四機、那覇基地に現れる。

四機並べて駐機されると一番機に乗っていたパイロットがバトラに話しかける。

「久し振りだな。r……いや、バトラ君。連絡は聞いている早速だが紹介してくれ」

「わかりました。ピンク色の髪の少女の隣に居る、緑色の髪の少年が連絡した人物です」

慧を指差して告げるバトラ。

そう言うとは一番機のパイロットが慧に近づく。

バトラやグリペン隊の他のメンバーは近くにカメラや人がいない事を確認する。

「君がケイ・ナルタニ君だね。私はインディゴ隊一番機のデミトリ・ハインリッヒ中佐だ。バトラ君から聞いていると思うが君とそこのお嬢さんの臨時教官を務める」

「あ、どうも。宜しくお願いします」

慧が挨拶を返して、グリペンは無言でお辞儀をする。

「宜しく。君達を必ず、立派な『グリップリダー』にしてみせよう」

「グリップ……リダー?」

のグリップリダーと言う言葉に首を傾げる慧に が答える。

「グリップリダーはスウェーデン語でグリペンのパイロットを示す言葉だ」

「英語だと何て言うんですか?」

「グリフォンライダー」

「グリップリダーの方がカッコ良いですね」

「そうかそうか。君はグリップリダー派か。気に入ったよ。早速、訓練を開始しよう。予約は?」

慧の肩を掴みながら訊くにバトラが答える。

「単座と複座が一個ずつ取ってあります。一時間でできる程度で良いのでお願いします」

慧君の話だと六時にフナさんが来るらしいので一時間しか時間が無い。

「わかった。では、案内してくれ」

「はい」

シミュレーターに乗り込む三人を見送った後に俺はハンガーに向かった。

「機体は直りそうですか？」

「事故を起こした愛機が作業員の手により修理が開始されていた。

「微妙だな。F-4のパーツじゃないところは大丈夫だが、F-4のパーツが無いから何とかF-15のパーツが使えないか試している所だ」

「そうですか。因みに何処が？」

「壊れている所は」と前置きを置いてから話す。

「主脚だけだな」

「マジかよ……」

主脚が折れていては滑走が出来ないので、飛ぶ事も出来ない。

「わかった。何とか頼む」

「任せておけまかちよーけ」

「頼みます」

午後七時、俺のシミュレータールームに慧・グリペン・バトラ・そして船戸の姿が有った。

「結構、グロテスクになったな」

バトラがシミュレーターの外見を指差しながら答える。

三機のシミュレーターを様々なコードで繋がれた外見は触手の生えた何かの生物に見えなくもない。

慧とグリペンはデミトリ中佐から最後のレクチャーを受けていた。

「仕方ないさ、突貫工事だったんだ。美観には目を瞑ってくれ」

「中身が大丈夫なら良い」

そう言い終えた瞬間、シミュレータールームの扉が開き体感温度が下がる。

「あら？そちらの方は誰ですか？」

の姿を見て質問するファントムにが帽子を取りながら答える。

民間軍事会社

「PMC【ベルカ・カンパニー】所属の航空部隊、インディゴ隊一番機のデミトリ・ハインリツヒ中佐だ。よろしく頼む」

「バトラが要請を出すと言った人ですか？」

ファントムが微笑みながら話すが、はかぶりを振って否定する。

「私はあくまでもセコンドだ。今回のね。君達がどんな作戦をするのかは知らないが、私は無関係だ」

「あら、なら誰でしょうか？」

勝ち誇った笑顔をバトラに向けるファントムにぶつきらぼうに話すバトラ。

「そちらが勝てば良い話だろうか？」

「そうですね」

ファントムが一步下がり、全体を見渡す。

「確認致しますけども、私がバトラさんに勝った場合はバトラさんが私のパートナーになる。バトラさんが私に勝った場合はバトラさんを信頼する。慧さんに私が勝った場合は慧さんは私に絶対服従。慧さんが私に勝った場合は私は文句を言わずに次の作戦に参加するで良いんですね」

「ああ、良いぜ」

「それで構わない」

慧・バトラの順で答える。

「ええ、わかりました。負けた後に泣き落としなんてみっともない事しないでくださいね」

「ふん、御託は良い。さっさと乗れ、時間がない」

バトラから右端のシミュレーターに乗り込み、ファントムは何も言わずに真ん中のシミュレーターに乗り込む。

「うん。良い出来だ」

シミュレーターの調子を確認した後に模擬戦の設定を確認する。

天候：曇り 雲量：7／8 風：110度 5ノット 僚機：無し

空域：那覇基地周辺

(何処もおかしい所は無いな)

確認が終了していき、訓練開始の合図を待つだけになった時、ファントムから通信が入る。

〈〈戦闘前に一つお話ししておきたい事が〉〉

何かやったけ？俺。

〈〈私のシユミレーターに仕込んでいた遅延プログラムは先程、無力しておきましたので悪しからず〉〉

何をやってきてるんだ慧君。

〈〈そうかい。じゃあ、安心して飛べるな〉〉

〈〈ええ、ですが貴方には失望しました。貴方はこんな事しないと
思っていましたけど……〉〉

本気で話すファントムの声から、ファントムの俺に対する評価は俺と違ったのだと痛感する。

〈〈……〉〉

〈〈では、御機嫌よう。あ、貴方の機材には手を出していないので安心して離陸・飛行をして下さい。まあ、戦闘が始まったら保証し兼ねますが〉〉

通信が切れる。

慧君は今頃ボコられてるだろうから良いとして。

電子世界的那覇基地ハンガーから藍色のF-4が出され、滑走路に導かれる。

藍色の亡霊は滑走路を悠然と滑走して浮き上がる。

後を追うようにして緑色の亡霊も浮き上がる。

空港がどんどん小さくなっていく。空港が黒い点になった頃に二機同時に雲間へ突入する。

水蒸気の塊を突き抜け蒼空に出ると緑色の亡霊と藍色の亡霊は正反対の方向に旋回する。

劣位も優位も無い、真つ向からのワン・オン・ワンのドックファイト。

二機の亡霊が水平飛行で互いに同じ速度・高度でヘッドオンするが機銃は撃たずにそのまま交錯する。

〈〈悪いが全力で行かせてもらう〉〉

〈機体のエンブレムを変えただけでそんなに強気になりますか〉
バトラの亡霊の垂直尾翼には鷲座の背景に鷲のエンブレムではなく、黒い蠍の上に蠍座が描かれたエンブレムが描かれていた。

〈BARBIE03〉

〈ANTARES02〉

もう一度ヘッドオンと同じ状況になる。

〈〈エンゲージ〉〉

二人が同時に宣言して20mm機銃が放たれる。

二機が背中合わせで交叉する。キャノピーのカメラの鈍い光がお互いに煌めく。

RF-4TBはRF-4EJの後ろに付こうと180度の右旋回で追うが、RF-4EJは斜め右方向に旋回して雲に突っ込む。

「逃がすかよ」

RF-4TBの旋回が終わりかけた頃にRF-4EJが雲に突っ込んだのを確認していたANTARES02は背面急降下で雲に突っ込む。

雲の中で旋回を始めて雲に出た頃には海に腹を見せて航行していた。

「何処に消えた？」

レーダーで確認するとレーダーは前方を指している。

「後ろだろ!!」

首の後ろを蜘蛛が這うような感覚を信じ、機体の三次元偏向パネルを真下に向けてのコブラ機動をして、そこから更に90度機体を背中側に傾ける。

水平飛行から合計180度の回転を背中側からやった事で機首は後ろを向くが背面飛行の状態になる。

そして、RF-4TBが背面飛行になったと同時に雲からRF-4EJが腹で雲を押しつけながら姿を表す。

こつちを向いていると思っていなかったのか反応が遅れた様子のBARBIE03はANTARES02にロックオンをする時間を与えてしまう。

〈〈FOX2〉〉

二機同時にミサイルがリリースされる。

ANTARES02は背面急降下を行った後にロールしながら上昇してミサイルシーカーの範囲外に逃れる。

BARBIE03はフレアを数個撒いて上昇する。フレアを戦闘機と勘違いしたミサイルが近づき爆発する。

雲に入ったRF-4EJを追って、RF-4TBも上昇した状態のまま雲に飛び込む。

「うお!!」

至近弾がRF-4TBの近くの雲に突き刺さる。

雲から出る時に若干の弧を描くように飛んでいたのが功を奏したのか、ANTARES02は無傷だった。

(不味いな。完全に後ろの上を取られてる。あれは偽の画像だとは思えんし……)

ANTARES02はバックミラーに映るRF-4EJの機動を見ながら考える。

空戦に置いて、真後ろを取られるのは危険極まりない。そして今回はそれに加えて、自分よりも上を取られた。これは不用意に上昇が出来ないことを意味していた。

万が一ここで上昇を行った場合は被弾面積を広げる事となり機銃の餌食になる。

RF-4TBは右に左と不規則に、時には増減速を行い機銃を避ける。

向こうも無駄弾を撃つつもりが無いのかあまり連射をしない。ANTARES02はほんのコンマ数秒直進飛行を行う。

BARBIE03はこのチャンス逃さまいと照準を素早く合わせた途端にRF-4TBの水平尾翼が直立、偏向パネルも上を向いた所為で少し機体が斜めになった所為で腹もエアブレーキの役目をしてその場で急ブレーキを掛けたかのように機体が減速した。

BARBIE03は減速に着いてこれずに射線に機体を被せてしまふ。

〈イン・ガン・レンジ！ファイア！〉

機銃が放たれるがH i M A Tで回避するB A R B I E 0 2の追隨の為にA N T A R E S 0 2も変態機動を開始した。

機体の下がった尻が振り子のように動き機体が横に向き、右横に向いた状態で右に9 0度バンクをした状態に持つていく。

その状態のままその場で腹側にドリフトターンのように機体が動き、R F ー4 E Jの横腹に機銃を向けて発射される。

R F ー4 E Jは素早く1 8 0度ロールで背面飛行になった同時に降下して雲間に逃れる。

R F ー4 T Bも追いかかる。

「!？」

雲から出た途端に一足早く、背面降下の状態で雲から出ていたR F ー4 E Jが逆コブラ機動で機首を向け、機銃を発射する。

R F ー4 T Bはエルロンロールで回避する。

「自己診断プログラム作動……索敵レーダー・ロックオン機能喪失」
（回避しきれなかった!？」

R F ー4 E Jの機銃弾は蠍から電子の目を二つ奪う。

A N T A R E S 0 2はデットウエイトでしか無いミサイルを噴進弾として使用。

残弾全ては一直線にR F ー4 E Jに殺到する。

R F ー4 E Jも背面降下の前にハードポイントがやられたのかミサイルを全て放棄していた。

R F ー4 E Jはバレルロールとロールで回避する。

そして、二機はヘッドオンに纏れ込む。

お互いに同時に機銃を発射する。

「弾切れ!？」

二機とも無傷でヘッドオンを終わらせる。

A N T A R E S 0 2がある操作を行うとH U Dにある文字が浮き上がる。

「三次元偏向パネルOFF」

共に2 0 m m機銃のみという状況からできる限り条件を同じにし

た状態で闘うと決めたANTARES02の意思表示でもあった。

RF14EJが雲に向かって上昇する。

RF14TBも速度を高度に効率的に変えていく。

雲の上に出た瞬間に二機は旋回し、お互いにこれが機械に出せるカーブなのかと思う程の緩やかなカーブを描く時もあるれば機械だからこそ出せると思える程の急カーブを描く時もある。

二機の鋼鉄の亡霊は、己の鉄翼の端に白い帯を残しながらお互いに後ろを取り合おうと必死に機体を動かす。

二機の残す水蒸気の帯が複雑に絡み合い、まるで闘犬を思わせる形を残す。

そんな二機の間を時々、明確な殺意が籠った機銃の弾が横切っていく。

〈ハハハ、楽しいなファントム！〉

〈その意見に同意は出来ないと思っていましたが……〉

ANTARES02の放った弾丸をほんの少しのヨーと左90度のバンクで回避したファントムが答える。

〈何をしでかすかわからない。そんな極限空間を楽しんでいる頃のことを思い出しました〉

さっきの弾丸のお返しだと言う風に20mm機銃を放つがANTARES02は半回転のバレルロールで易々と回避する。

回避した時に背面飛行になったのだが、その状態のままエアブレーキを全開にしてRF14EJをオーバーシュート（後ろの戦闘機が前の戦闘機を追い越す事）をさせる。

攻守が一瞬にして変わったが、BARBIE03は慌てずに機体を揺らして回避に専念する。

当たらない弾が雲に突き刺さり、雲を散らす。

RF14EJがエルロンロールで回避と同時に雲の中に入る。

RF14TBもエルロンロールで追いかけて雲の中に突入する。

RF14TBが雲から高度を下げて、バンクしながら旋回し始めた時にRF14EJが凄まじい速度で雲を切って現れる。

曇天の空の下、高度500でヘッドオンする二機が機銃を発射す

る。

〈〈弾切れ!?〉〉

発射して2秒で弾切れを起こした二機が交差する。

「なに!」

交差し終えた途端にRF-4EJが操縦不能に陥り、ロールしながら高度を下げていく。

ファントムも必死に機体のコントロールを戻そうとするが戻らずにロールしながら海へと落ちていった。

〈〈BRABIE03の反応ロスト。ANTARES02の勝利だ〉〉

管制官の言葉が通信機から聞こえた。

〈〈何を! 一体何をしたんですか!〉〉

ファントムの叫びが通信機から漏れる。

〈〈お互いに武器は尽きていた筈です! どうして私の片翼がなくなるんですか!〉〉

〈〈簡単な話さ。遠距離武器が無いなら近接武器を使えば良い〉〉

「意味がわかりません」と漏らすファントムに告げる。

〈〈過去のエースが使ったどの戦闘機にも搭載された近接武器……主翼だよ〉〉

〈〈な!? 主翼に主翼をぶつけて斬ったと言うんですか!〉〉

〈〈正解だ。日本の局地戦闘機のエースが使っていただろう?〉〉

〈〈そうですね……〉〉

〈〈さて、この勝負は俺の勝ちだが、俺の事は護衛として信頼できる実力は見せたかな?〉〉

〈〈ええ、勝っていた機動性を捨てて、機体重量と言うハンデを背負った中で正面から勝利した。文句なしです〉〉

そう紡がれた言葉には感情が見て取れた。

〈〈もう一つお聞きして良いですか?〉〉

〈〈ああ〉〉

〈〈何時から、本物の私を捉えていたんですか? いえ、何時からAJZシステムを切っていましたか?〉〉

気づいていたのか。

〈お前が最初にミサイルを撃った時だ。あれで本物だとわかったから、それ以外の情報は要らないという事で切ったんだ〉

〈成る程、確認が手に入るまでは手の平で踊ってやったと言う訳ですか……〉

何かを考えるように間が空いた隙に質問する。

〈AJZシステムを切っていると何時から知った？フナさんに頼んで装甲は出したままの設定にしていた筈だが〉

〈少し考えればわかります。私のハッキングはデータ・リンクを通してだと気付いていれば、AJZシステムを切る筈だと〉

お見通しか。

〈まあ、兎に角だ。次の攻略戦は頼むよ〉

〈ええ、ですがそれには条件があります〉

なんだ、この雰囲気が無理難題は無いだろうが……

〈私の直掩はANTARES02としてお願いします〉

つまり、信頼したのはANTARES02であつて、ALTAIR01では無いという事か。

〈了解した。次は慧君だったな。頑張れよ〉

〈ええ、ありがとうございます。このまま連戦でしょうから、私は中に残ります〉

その言葉を聞いた後にシミュレーターの電源を切つて出て行く。

「頑張れよ」

慧君の頭を少し弾いて、グリペンには頭をポンポンと叩く様に撫でていく。

「そうですね……」

「……………」

ファントムが一言呟き、グリペン・慧君の二人は何故か正座で待っているという状況だった。

結論から言うとグリペンペアの負けだった。

訓練の最後以外は良い勝負だった。

慧君が操縦してグリペンは火器管制に専念と言うのは現実的で良い判断だったのだが、最後のカウンターマニューバがいけなかった。ファントムが速度に乗り切る前にエアブレーキを展開した所為で的になりグリペンが蜂の巣になった。

「そうですね。次の作戦は慧さん。貴方が操縦してください」

「え？」

驚く慧君の肩に手を置く。

「グリペンの機体操縦が不安定な理由としては火器管制と操縦を同時に行っているからだろうから、その半分を慧君にやらせて半減させるのは良いアイデアだ」

「でしよう？」

微笑みかけるファントム。その表情には何も感じない表情の欠片もなかった。

「待ってくれ！勝手に話を進めるなよ。グリペンは良いのか？俺に操縦させて」

「構わない。私と慧は一心同体の様なもの。慧になら任せられる」

「あらあら、訓練前でもわかっていましたでしたが相当信頼されているんですね」

慧君の目を見て言い切るグリペンにファントムが末妹を見る姉の様な笑みを浮かべながら喋る。

グリペンとファントムのセリフに俺は昔の光景を思い出してしまう。

『良いのよ。私と貴方は一心同体よ。貴方なら私の全てを任せられるわ』

『会って間も無いのに相当な信頼ね』

あの人達が今を見ればなんと言うだろうか？

「——さー！バーーーーん！バトラさん!!」

「うお!!近いって！」

ファントムの大声に驚く。

「話を聞いていましたか？」

「……………すまん」

「ハア………」と溜め息を吐いてからファントムが話し出す。

「慧さんに操縦を教えた人にもう一度慧さんの指導をお願いできませんか？という話です」

「多分、むr「無理じゃないぞ」びつくりした！」

いつの間に行っていたのかデミトリ中佐が会話に参戦する。

「つい先程、台湾空軍から明日の自衛隊が行う作戦に参加する様に言われたんだ。だから、ここに1日いることになった」

「よし！教官ゲット！」

ガッツポーズする俺に慧君が冷水をかける。

「HiMAT対策はどうするんだ？ザイの超高機動に対応できるのが強みだろう？俺が操縦したらその強みがなくなるだろう？」

HiMATが出来るのがアニマの有利な点だが、グリペンの場合は話が別だ。

「後席に慧君が居たら元々、HiMATなんてできるわけ無いだろう。なら、慧君が操縦しても変わらない」

「う……………」

隣のグリペンが身じろぎする。

「まあ、実際問題。グリペンの能力は高くありません。操縦とレーザー・火器管制を同時に行えるだけの余裕が正直ないのです。どちらかに気を取られればどちらか片方が疎かになる。管理しきれなくなる。それはそこで肩を落としている貴方の相棒もわかっている筈です」

確かにグリペンはこれでもかと肩を落としている。

「であれば、どちらか片方をケイ君がやるのが現実的な解答だ。それにケイ君がレーザー・火器管制を行っても、アニマがレーザー・火器管制をやる程の利点がないんです。ならば、ケイ君が操縦をした方が利点があります」

「でも……………」

尻込みする慧君に俺が肩を叩く。

「HiMATは正直言うと諸刃の剣だ。空戦で大切なのは高度と速度、そして運動エネルギーを最小限の動きで転換して敵の優位な位置に付くことと……………」

「どれだけ自分の乗る機体を信じられるかだ」

「自分の…………乗る…………機体を信じる…………ハッ！」

慧君が何かに気づいたかの様に目を見開き、隣を向く。

向いた先にはグリペンの灰色の瞳が不安そうに慧君の若草色の瞳を覗き込む。

「すまん…………相棒だつて言ったのに……………」

「私達は機体を飛ばしているのではない。機体に飛ばして貰っているのだ。これは私の教官が言っていた言葉です」

突如として、デミトリ中佐が口を開く。

「私達は機体を信じられる様になって初めて『飛ばしあえる』関係になります。君達二人はそれを知らずに飛ばしあえる関係になったんです。グリペンはケイ君を信じているのにケイ君がグリペンを信じないというならお互いに飛ばして貰っている関係ですよ。まあ、さつきまでではですけどね」

真剣な顔付きから一変して笑顔で話す。

「さあ、ケイ君。グリペンを信じられる様になってからが本当のグリプリダーレの始まりです。訓練を開始しますよ」

「ええええええ……！」

襟首を捕まえられてドナドナされる慧を手を振って見送るファントムとバトラだが、グリペンは少しして追いつけて行った。

「貴方もファントムという機体を信じているんですか？」

「勿論、俺は自分の持っている全ての機体を信じている」

「ファントムとして、嬉しい言葉ですね」

「お前が言う俺の愛機の言葉を代弁する代弁者の様に思えてしまうのが問題だな」

一瞬の間を置き、お互いに笑い合う。

その姿はお互いを仲間と認め合う者同士の姿だった。
それが戦友という関係に変わるのは明日だ。

函館から一六機の黒と白の鋼鉄の翼手を持つ蝙蝠が飛び立つ。

〈〈そう言えば、今回の連絡はあのM43飛行中隊らしいぜ〉〉

〈〈そうなのか？しかし、俺たちが偶然とはいえロシアの端の方にいて運が良かったな〉〉

〈〈そうだな。だが、改造したばかりで目が慣れていないんじゃないのか？〉〉

〈〈まさか、たかがマツハ0。ちよいだろ？〉〉

〈〈そうは言ってられないぞ。あのM43飛行中隊が救援を呼ぶ位だ〉〉

〈〈相当、でかい相手って事か〉〉

〈〈だろうな。あの部隊が俺たちの様な部隊に救援を出すんだ〉〉

〈〈そして、俺たちの様な部隊を呼ぶ訳だから、相当面倒でもありそうだ〉〉

〈〈だろうな。俺たちはM43程ではないが、面倒な仕事を多く片付けてきた〉〉

〈〈その実績が試される訳だ〉〉

〈〈ふ、それ位信頼してるという訳だろう？なら、その信頼を破る訳にもいかん〉〉

〈〈ALTAIRO1の先輩にはお世話になりましたから、恩返しできそうです〉〉

〈〈どうやったら、こうも慕われるんだ？〉〉

〈〈貴様とは仁徳が違うんだろう〉〉

〈〈喧嘩しそうな事を言うな。まあ、元は最低賃金労働者だったらしいからな。助け合いが慣れてるのかも？〉〉

〈〈各機。彼らの信頼に答えろ。行くぞ！各機、強化された新たな機

体を使いこなせ！∨

了解と全員が口を揃えて答え、速度を上げる一六機の蝙蝠は南へと機首を向ける。

作戦9 第二次海鳥島攻略戦

「諸君。夜分遅くにすまない」

午後9時、バーフォードがブリーフィングルームに入るなり話した言葉だ。

集まったメンバーは、ドーターのO^{オーバーホール}H中の為に手持ち無沙汰だったイーグルとコンビネーション訓練を切り上げた片宮姉妹、同じくコンビネーション訓練をしていたファントムとバトラが集まっている。

グリペンは火器管制の、慧は操縦の習熟訓練の為、欠席である。

「早速、次なるミッションの説明……の前に紹介したい奴がいる。バトラ」

「はい」

バトラが立ち上がり、机の後ろに立つ。

「知っている奴がいると思うが改めて自己紹介しておく。コールサインはANTARES02、TACネームは今まで通りバトラだ。何か聞きたい事は？」

「はい！」

イーグルが我先にと手を挙げる。

「なんで今まで名前を変えてたの？」

「三年前の戦争終結からM42飛行中隊の事を嗅ぎ回るマスコミから逃げる為だな。何処から手に入れたか知れないがアンタレス隊の蠍の絵の部分だけ出回ったんだ(姿をくらませたのは別の理由もあるけどな)」

「へえくそうなんだ」

イーグルの質問が終わった瞬間に詩鞍が手を挙げる。

「はい。私達はどうなりますか？」

「二人は引き続きアルタイル隊メンバーとして行動をしてくれ」
詩鞍の質問にバーフォードが答える。

「他は無いな？」

そう聞くバトラだが、他に質問が上がる事はなかった。

「まあ、色々言ったが部隊名が変わる程度だ。マスコミに情報を渡

さないでくれと言う以外は何時も通りだ」

バーフォードがバトラの紹介を締めくくり、本題に入る。

作戦説明の前にバトラの愛機は95パーセントの修復が完了して明日の作戦には間に合うそうだ。それでは、作戦説明を開始するぞ。マイケル軍曹頼む」

「了解しました、バーフォード中佐」

プロジェクターのカバーを外して、ホワイトボードに一枚のスライドが映る。

「見覚えがあると思う。これは件のFOBだ」

スライドに映っていたのはFOBを真上から撮った物だった。

「敵の機数は多く見積もって110機程度と考えているが、敵の防空設備……」

スライドが入れ替わり、ガラスで作られた大型ミサイルが映る。

「この地对空クラスター弾が厄介だ。1発当たりの散布領域は1000Mと狭いがこれをF-100フレンドリーファイアお構い無しに発射してくる筈だ」

写真が切り替わり、炸裂した時の写真とFOB全体の写真になる。

この写真はA-JZ戦闘機の全天周モニター用のカメラの映像を使用したのだ憶測する。

「これは複数弾撃つ事で隙間を補っている。これの発射施設が最低でも5基ある」

FOB全体写真が拡大した物に変わり、FOBの各所に赤い丸が付く。

「この事態を受けた台湾が正規空軍と契約中のPMC部隊の投入を決定した。ここままで質問がある奴はいるか？」

「バーフォード中佐。台湾の戦力の仕事は？」

バトラが真つ先に手を上げて答える。

「それは後で言うところだった。他には……：「海上自衛隊は動くんですか？」それも台湾軍の仕事の時に話すつもりだった。他は無いか？……：無い様だな」

バーフォード中佐が質問を締め切り、目を伏せる。こう言う時は何か嫌な事を言う時だと俺を含めて、古株の人は全員知っている。

「まずは台湾だが、台湾の戦力は直掩機を引き剥がす為の囹の様な物だ。ベルカ所属のインディゴ隊はこの部隊を本命に思わせる為の味付けだ」

その顔は苦虫を噛み潰したような顔だった。

バーフォード中佐は囹作戦の様に仲間を犠牲にする作戦を嫌う。

勿論、使わざるを得ない状況なら使うが必ず生還できる目処を作ってから行い、作戦に参加する者に謝る必要も無いのに必ず謝る。

だから、信用も信頼もして着いて行ける。このアンタレス隊を指揮できるのは世界中の何処を探してもバーフォード中佐だけだ。

「了解しました。日本の対応はどうですか？」

「海上自衛隊の派遣の話もあったが、台湾軍が動いた事と首都防衛の為の戦力として、ミサイル艇と護衛艦・護衛空母は佐世保、及び横須賀に集結中だ」

日本の経済と政治が東京に集中しているので東京防衛は絶対の生命線である。

「さて、私たちの目先の問題がこれだ」

スライドが件のクラスター弾の写真に変わる。

「ザイFOBの攻略はこの地对空クラスター弾の攻略が不可欠だ。設定高度まで凄まじい速度で飛ぶ為、発射後の撃墜は難しい。となれば、発射前に潰すしか無い。よって「私達のA-10ですね？」……と、言いたい所なんだが……」

FOBに赤丸のついた写真に変わる。

その赤丸が赤線で繋がれる。

「見ての通り、発射施設が離れ過ぎている。なので、A-10の速力では2発以上の打ち上げに対処出来なくなる。そこで我々はバトラの意見具申を受けて、ロシアにて改造を終えたM56飛行中隊【デネブ隊】に救援を要請。これが受理された」

「デネブ隊は動いてくれたか！」

椅子から立ち上がってしまう。デネブ隊なら発射施設破壊は難しいことじゃ無い。

「ああ、快く引き受けてくれた」

バーフォード中佐が頷きながら答える。その顔は自信に満ちていた。

「あの……デネブ隊ってどんな部隊なんですか？」

バーフォードとバトラの二人で話しを進めていると詩鞍が手を挙げ、控え目な声で質問する。

その質問に二人が「しまった」という顔になる。

「すまない。君はまだ、他の部隊については余り知らないんだっかな」

バーフォードは帽子を被り直す。

バーフォードはこういった失敗をすると帽子を被り直す癖がある。

その癖を知っているバトラがバーフォードの行動を見てバトラが説明する

「俺たちMS社には爆撃を得意とする部隊が3つある。一つは俺たち【アルタイル隊】、もう一つが【ベガ隊】、そして最後に今回の【デネブ隊】だ」

「全部、夏の大三角形を形作る星座のα星ですね」

その言葉を聞いて詩鞍が率直な感想を漏らす。

「MS社所属の航空部隊は天体名を部隊名にする決まりがある」
暗に偶然では無いと言うところを伝える。

「へえ〜」と納得する詩鞍にバーフォードが補足説明を入れる。

「まあ、爆撃を得意とする所も部隊内で護衛機も持っている点でも、夏の大三角と被ったのは偶然の産物だ。まあ、得意とする爆撃方法は違うがな」

「デネブ隊の爆撃は何なんですか？」

詩鞍がバーフォードの最後の言葉に疑問を持ち質問する。

「水平爆撃だ。しかし、ただの水平爆撃じゃ無い」

「それは一体？」

バーフォードが指示を送り、スライドが白鳥座を背負う白鳥の絵に変わる。

その絵を指示棒で刺して、説明する。

「彼らの得意とする所は敵防空網に掻い潜る所と敵中枢への直接攻

撃だ」

「私達はA-10の搭載力と誘導性に物を言わせた防空網の壊滅、もしくは破壊ですから確かに違いますね。でも、それだと普通では？」

最もらしい意見を言う詩苑にバーフォードが質問する。

「敵防空網の突破の方法を回避という観点で答えてみる」

「簡単です。防空網のレーダーに掛からないように低空か高高度で接近する。です」

「模範解答だな。だが、彼らは言うならば防空網を速度任せに振り千切り、爆撃を行うんだ」

「へ？」

惚ける詩苑、詩鞍

「簡単に言うともミサイルを引き剥がす位の速度で飛んで爆弾を落とすからレーダーに映ろうが映らまいがミサイルが当たらない。だから防空網を突破して爆撃できる」

「シミュレーターで自分が撃ったミサイルを追い抜かして自分の撃ったミサイルに自分が追われるという謎現象が発生した位だ」

バーフォードの説明の後にバトラが説明を加え、どれ程の速度かをわかりやすく説明する。

「……」

バトラとバーフォードの説明を聞き、空いた口が塞がらない片宮姉妹とアニマペア。

「因みに16機の編隊な」

「それって、中隊と言つて良いかも分からない数ですね」

「MS社は4機から16機は中隊規模で登録されるから問題無し」

バトラの言葉にファントムが突っ込み、バトラが何食わぬ顔で話す。

「衝撃を受けていると思うが、現実に戻って来てくれ」

バーフォードが手を叩き、全員を現実に戻す。

「尚、彼らは作戦当日まで小松基地にて待機、出撃するが彼らは作戦当日は別行動だ。だが、協働攻略作戦である事に変わりはない。そこ

で我々はデネブ隊援護の為にアルマイル03と04のA-10に対地兵装と対空兵装を搭載して貰う予定だ」

「発射施設はデネブ隊の仕事でしたよね？なら、私達には対空兵装のみを施した方が良いのでは？」

バーフォードの言葉に聞き返す詩苑。

「速度で振り切る彼らだがある対空兵装には弱い。わかるか？ヒントは魔王を撃墜した武器だ」

「??」

頭をひねる詩苑だが、答えが浮かば無い。

「わからんか、対空機銃と対空高射砲だ」

スライドに上記の二つらしき物が映る。

それもザイの兵器の特徴なのか七色に光っている。

「君達二人には危険な仕事だが、耐弾性能の高さを利用して確実に、素早くこの二つを無力化してくれ。この二つが5割を切ったらデネブ隊を突入させる。デネブ隊の突入後はファントムの直掩に入ってくれ」

「了解しました」

バーフォードがイーグルと目を合わせる。

「イーグルはグリペンと共にアルマイル03と04の援護をお願いしたい」

「うん、わかったよー」

バーフォードは頷き、バトラに目を合わせる。バトラもバーフォードに目を合わせる。

「クラスター弾発射施設を破壊後、ファントムは速やかに海鳥島上空に侵入。侵入後は巡航ミサイルの誘導に入ってくれ」

「了解しました」

ファントムが笑顔で答える。

「バトラはファントム突入前と突入後の直掩を頼む。君の得意とする制空戦闘では無いが我がMS社が誇るエースの一人だ。必ずやり遂げられると信じている」

「……………」

無言の敬礼を持って答える。

バーフォードも無言の敬礼で返す。

「尚、グリペン達には私から伝えておく。以上だ。明日の作戦に備えてくれ」

一斉に席から立ち上がり、敬礼する。

その敬礼から滲み出る物は人により様々だった。

(ん、あれは?)

シユミレーターでファントムと訓練を重ねているとグレアム軍曹から「Stand at ease!!」と言われ二人揃って叩き出された所為で手持ち無沙汰になった。所をファントムに誘われ、ハンガーで話しているとハンガー前に慧君の姿が現れた。

「聞いてい……あ、慧さん」

ファントムも慧君の姿を見つけた様だ。

「如何しました?」

「如何したのか?」

二人同時に同じ様な事を言って恥ずかしくなり、右斜め上を向く。

横目で確認した時、ファントムも同じなのか、俯き気味だった。

「あ、ああ……仲良いな」

突っ込まないでくれ。

「まあな。次の作戦はファントムとロットテを組む様な物だし」

「ええ、まあ。次の作戦では二機編隊を組む様な間ですしね」

また、二人同時に同じ事を言ってしまうまた恥ずかしくなって二人同時にそっぽを向く。

「そうか……二人は怖く無いのか?」

慧君が唐突に聞いてくる。

そのおかげか恥ずかしさが無くなった。

「慧君は飛ぶのが怖いのか?」

後部座席に乗って空戦に参加していたのだ。今更、怖くなるという感情が理解出来ずに聞き返してしまう。

「飛ぶのが怖い訳じゃない。ただ……………」

「ただ？」

顔を伏せる慧君。その姿は恥ずかがっている様にも見えるが覚悟が出来ていない様にも見えた。

「死ぬのが怖い。それ以上に俺の操縦でグリペンを死なせるんじゃないかと思ってる」

成る程。自分以上にグリペンを死なせるのが怖いか……………それは心配だが、同時に裏切りでもある。それを気付かさせなければならぬ。

「慧君。グリペンは君に命を預けると言っただ。なら、預けられた人間としてしっかり返してやれ。それにデミトリ中佐の教えはそんな物だったのか？」

慧は凄まじい速度で首を振る。

「だろ？なら、今の自分に出来ることを正確に知り、そして実践すれば良い。無理なら救援を出せばいいしな」

「……………サンキュー、気が楽になったよ」

その顔には確かな覚悟が確認できた。

「なら、あそこのリーダー・火器管制官とのお話は要らないか？」

そう言うと「あ！グリペン！」と言いなながら近づいていった。

「それで良い。お前は一人で闘うじゃない。後ろの相棒と闘うんだ。一人で抱え込むなよ」

俺のこの呟きはきくと聞こえないだろうが、二人なら無意識に気付く筈だ。

「行っちゃいましたね。自分の疑問では無く、悩みが解決した途端に」

「だな」

ファントムが話し掛けてくる。

「それとさっきの発言には異様な程に実感がこもっている様に思いましたけども？」

中々に鋭いな。偵察機のアニメだからか？

「まあ、ファントムなら口を割らんだろう」

「言い振らす趣味は無いですよ？」

「嘘こけ！三沢で情報流してただろ！」とは言わない。彼女からはこの前の様な追い詰められた感じがなりを潜めているから大丈夫だと判断する。

「俺も後部座席に乗っていたんだよ。その時に実際に言われた事を言っただけだよ」

『貴方に私の命を預けている。なら、必ず返すから私にも貴方の命を預けてくれない？』

複座の戦闘機に乗り合った以上は運命共同体。それこそが複座戦闘機乗り達の絆の強さなのだ。

「そうですか……………」

ファントムが顎に手を当てながらこつちを見つめる。

女性に見つめられるのは苦手で俺は夏の夜空を見上げる。

(慧君の場合は……………)

慧君の場合はザイと戦う覚悟はあっても墜とす覚悟は無かった。それが今回、急に必要になっただけでなく後ろに別の命を乗せていると自覚して、不安と恐怖に押し潰されかけた。

だが、彼は一人じゃない。その不安を拭い去ってくれる、恐怖と共に戦う相棒が彼にはいるのだ。

(俺もそれが出来たら、あの人を失わずに済んだじゃないだろうか？)

あの人と俺はお互いに優しい性格だった。いや、優し過ぎた。

お互いがお互いを心配し過ぎて、思い過ぎたが故に……………

(あの人の悩みを…恐怖を…そして……………)
心の悲鳴を聴けなかった。

「何か悲しい事でも思い出しましたか？」

ファントムが聞いてくる。

(こいつは……………)

前々から思っていたがファントムは人の内心を掴むのが上手い。

まあ、戦術偵察機らしく情報戦に強いのはらしいがな。

「まあ、思い出しただけさ。彼らを見ているとね」

視界を慧君とグリペンに向ける。

フアントムも二人を見る。

「その悲しみは私が拭えますか？」

二人を見ながら喋るフアントム。

「僚機か長機、後部座席に乗ってか？」

「貴方のお好みの物で」

「無理だな」

同じ日本人でフアントムライダー。容姿もフアントムを黒髪にして、そのまま成長させた容姿だが……………

(あの人とは決定的に違う所がある)

フアントムが全より一であるがあの人全より十。M42飛行中隊を中心に考えていた。

そして、フアントムは俺の後ろ、後部座席に座りたい。しかし、俺が後部座席に座ったのだ。どっちみち、フアントムに代わりは務まらない。

「そうですか……………でも、諦めませんよ？何時の日か貴方の後ろの前に着きます」

「背中に乗せるつもりは無いし、前に着いたら青い蠍の毒にやれて、後ろに着いたら青い蠍の呪いにやられるぞ」

「股がらせるのは問題無いですか？」

RF4EJの方に乗れというわけですか？

「誤解を受けそうな言い方はやめろ」

『うふふ』と笑うフアントムにこいつはこれからも似た様な事を言うだろうなと予感めいた物を感じる。

「では、何故に飛び続け様と？」

「蠍によって地上に縛られた英雄は蠍が消えてから空に昇る」

その言葉にフアントムが首を捻る。

視線を夜空に戻す。

夏の夜空には未だに蠍が天を昇っていた。

周りにいつもより多くのエンジン音が響く。

東シナ海の平和を護る為に敵を討つべく。鋼鉄の鷲達が、猪が、亡霊が、先代の名を継ぐ者がその心臓を震わせる。

鋼鉄の鷲達の大部分を占める灰色の鷲は皆、先だった者が成そうとした事を成そうとする覚悟を纏っていた。

そんな鷲達の仕事は台湾空軍の間接援護と評して、二方面作戦に思わせる為に台湾空軍の逆側からFOBに接近する。

この作戦は協働攻略作戦が二つ重なるという作戦だった。

(まあ、IUPF時代にそんな事もあったけどな)

少し、昔を思い出す。

〈〈お先に〉〉

フアントムの通信で現実に戻ってくる。視線を動かすと、もう俺とフアントムしか居なかった。

〈〈ああ、行ってくれ。俺は後で飛ぶ〉〉

フアントムが離陸した後で離陸する。

作戦空域に向けて、飛びながら編隊を作る。

〈〈帰ったら海水浴でもするか?〉〉

〈〈え?〉〉

慧君が無線が一定範囲に全て聞こえると知らずにグリペンと会話する。

〈〈それは良いですね〉〉

〈〈え!?!〉〉

詩苑が会話に割り込むと驚く。肉声で話していたつもりなのだろう。

〈〈水着を持っていません〉〉

〈〈水着……ない〉〉

詩苑が通信を入れる。

〈〈買ってやるよ。好きなやつ〉〉

〈〈ビキニ?〉〉

慧が悪ノリで『サイズは?』と聞こうとした時、バトラが通信を入れる。

〈〈別にぜん r 〈それ以上言ったら75mm、叩き込みますよ?〉〉冗談だからロックオンやめて〉〉

詩鞍がガチでロックオンしてた。

75mmなんて叩き込んだらパイロットは機体諸共バラバラになる。そんなことを思うバトラの背中では冷や汗で濡れていた。

〈〈レディに言うことじゃ無いですね〉〉

隣のファントムから通信が入る。

〈〈戦場に女も男もあるか?〉〉

〈〈そうですけど……せめて、紳士らしくしようとは思わないんですか?〉〉

〈〈じゃあ、1万やるから好きな奴を買って来い。で、当日見せろ〉〉

〈〈そこで付き合おうと言わない辺りが紳士度が低いですよね〉〉

ファントムがなんか言ってるが無視だ。

〈〈楽しいな会話もここまでだ。デネブ隊が通信可能領域に入った。中継する〉〉

カノープスのバーフォード中佐からストップが入った。

〈〈俺はM56飛行中隊デネブ隊護衛班所属の班長のオデイロン・テルミドールだ。コールサインはDENEB01だ。TACネームはデネブ01だ〉〉

渋い声が通信機から流れる。

〈〈私はM56飛行中隊デネブ隊爆撃班所属の班長でイヴェット・テルミドールよ。コールサインはDENEB09で、TACネームはデネブ09よ〉〉

澄んだ女性の声が通信機から再度、流れる。

〈〈他にも14人居るが時間の関係で省略させて貰う〉〉

カノープスが通信を入れて、暫くすると16機の編隊が背後に現れる。

その編隊の機体は巨大だった。

〈バトラ。あの機体は？〉

慧君からデネブ隊の機体を見て通信を繋げて来た。

〈あれは「Mi g 25 フォックスバット」だ。高高度迎撃機で「F-15 イーグル」開発の基準になった機体だ〉

〈つて事はかなりの高性能？〉

〈高高度飛行と速度性能はな〉

彼ら、彼女らの機体はかなりの魔改造してるので原型機ではの話だな。中身の電子機器はMi g 31だし。

〈各機、作戦空域に入る。気を引き締めろ〉

《了解》

バーフォードの通信で全機が戦闘態勢に入る。

〈ザイの大編隊を捉えた。データリンクを開始する〉

この連合部隊の中で最高の索敵範囲を誇るRF-4TB-AZJがザイの大編隊を捉えた。光点の総数は……どう見積もっても110機を超えていた。

〈……計算間違えたか？〉

バーフォードが軽い現実逃避に入りかけたか所をオペレーター組がなんとか繋ぎ止める。

其の間の通信機はかなり混沌としていた。

〈どんな数で来ようと雑魚が集まった位で俺たちは墜とせない。だろ？〉

〈アートの言う通りだぜ。バーフォード中佐よ〉

〈了解した。DENEB05、06〉

数の多さに一瞬驚くバーフォードだが、デネブ05のアートの発言とデネブ06のクレイグの発言で納得する。

〈護衛班の各機に告ぐ、BARBIEとANTARES、ALTAIRを援護する。獄炎を放て〉

敵編隊との距離が50キロを切りかける頃にデネブ01からデネブ08までに指示を送る。

《了解》

了解の言葉を合図にR-40Rミサイルが発射される。

彼らのMi g 25はMi g 31の兵装システムは可能な限り同一にされている為、R-40Rを運用できる。

発射されたフェニックスの数は32発で、その全てが一直線にザイの群れに進む。

〈〈ANTARES02にミサイルの誘導権を与えろ〉〉

その通信が入って直ぐにAJZ戦闘機のデータリンクを介してRF-4TB-AZJのディスプレイに誘導権が譲渡されたことを示す文字が浮かぶ。

それと同時にRF-4TB-AZJの後部座席に載せられたコンピュータが最適な誘導位置を導き出す。

バトラはその場所にミサイルを誘導しようとする。

〈〈カノープス。ミサイル誘導に入る〉〉

こういった誘導能力の強化が図られたRF-4TB-AZJでも単座である以上はミサイル誘導中は操縦が疎かになる。

〈〈私がやりましょうか？〉〉

ファントムは人がやるより、アニメである自分がやった方が良いと思ひ通信を入れる。

〈〈ファントムは後で大量の巡行ミサイルを誘導するだろう、頭を休ませておけ〉〉

〈〈あら、お優しいですね。お任せします〉〉

バトラの気遣いに正直に甘えるファントム。あのDACTがなければこうはいかなかっただろう。

〈〈了解した。各機前に出て、ANTARES02を援護しろ〉〉

バーフォードの指示に従い、後ろにいた機体が前に出る。

誘導中で単調な飛行しか出来ないRF-4TB-AZJがロックオンされにくくする為である。

R-40RミサイルはRF-4TB-AZJの誘導に従い、ザイの編隊に突入する。

32発のミサイルはどれかがほったらかしにされる事なく誘導されているのにRF-4TB-AZJの誘導能力の高さとそのパイロットの技量の高さが伺える。

32発のミサイルはザイの編隊内に別れて侵入した。

〈弾着まで3…2…1…弾着!〉

グリアムの宣言と同時にR-40Rが共振すらも考えられた位置で爆ぜ、内部の燃料を一瞬で気化、爆発させてザイを焼き尽くすか、その揺れで機体を大きく揺さぶり味方同士でぶつかり合うザイも居れば、海面に叩きつけられ粉々になる機体もいた。

〈キヤアアアアアアアアアア!〉

〈キヤアアアアアアアアア!〉

〈うわわわわわわわわ!何!〉

〈キヤア!何!〉

〈なんですか、この揺れは!〉

その爆発のエネルギーは大気を押し出し、離れた位置を飛んでいる筈の味方陣営にまで衝撃を伝えた。

デネブ隊とバトラは知っていたので高度を上げるか下げるか、旋回して距離を保つなりの対応をしていた。

〈……レクチャー忘れてた〉

バトラが零す。

〈バトラは後でお話があるのでハンガー裏です〉

静かな声。しかし、その声には殺気が混ぜられている。

〈俺は絶対に行かないからね〉

O H A N A S I だろそれ? そう思いながらも俺はファントムの護衛位置に着く。

〈夜、部屋に忍び込みます〉

寝込みを襲うつもりか!?

〈バーフォード中佐! 助けてくれ!〉

〈殺さなければ、好きにしてくれ〉

見捨てられたバトラは無言でファントムの後ろを飛ぶ。

〈しかし、一体何が?〉

先程の通信で落ち着きを取り戻した慧がこぼした言葉を拾った人物がいた。

〈あれは「インフェルノ」、R-40Rを燃料気化弾頭に改造した物

よ◇

DENEB09が解説を入れる。

R-40Rは元々、自機より低い位置を飛ぶ敵機を撃墜する為に作られた長距離ミサイルだが、デネブ隊護衛班は純粋な長距離ミサイルとして運用している。

◇直掩機の消滅を確認！ALTAIRO3と04は突入して下さい◇

アリーナが通信で指示を出し、その指示を貰った二匹の猪がダイブで速度を稼ぎながら、高度を落とす。

そして、対空機銃と対空高射砲を75mmガンポッドの射程距離に収める。

◇◇イン・ガン・レンジ・ファイア!!◇◇

肩と腹に来る銃声を出しながら如何なる敵をも滅する砲弾が天災となり災厄に降りかかる。

その天災が降りかかった災厄はなす術もなく粉碎され、その姿をガラス片に変える。

必死の抵抗を見せるがその抵抗は猪にことごとく回避されるか弾かれて終わる。

災厄もやられるばかりでなく、直掩機を出して抵抗しようとするが飛び上がる前に有翼獅子に破壊され、数少ない飛び上がった機体も片っ端から鷲の餌食となった。

その後の地面には猪が走り去った後の様に何も残っていないかった。

◇多過ぎますね。嫌な予感ですが、もしかしたら…………◇

何かを計算したファントムが呟く。

◇嫌な予感は当たりやすいんだ。勘弁してくれよ◇

経験上、嫌な予感程だと当たりやすい物は無いと知っているバトラが苦言を漏らす。

◇バーフォード中佐！これを！◇

慌て気味のマイケルの声が通信機から聞こえて、バトラは『またかよ…』と頭を抱えた。

◇なんだと…………台湾空軍及び第7艦隊がザイの大編隊に襲われ

ている。台湾空軍のインディゴ隊が交戦しているが旗色は悪い。第7艦隊も航空自衛隊が援護に入ったが同様に旗色が悪い。フアントムの嫌な予感が的中した瞬間だった。

この報告を聞いた片宮姉妹は第7艦隊の方へと機首を向けようとする。

〈〈ALTAIR03、04任務に戻れ〉〉

バトラが冷たい声で任務に戻る様に告げる。

〈〈ですが!!〉〉

〈〈お願ひします!!〉〉

一緒に仕事をして、最後は身を挺して打ち出してくれた第7艦隊を見捨てれる程、片宮姉妹の心は戦う者としては成熟して居なかった。

〈〈!?詩苑!離れて!クラスター弾の範囲に入ってるわよ!!〉〉

〈〈詩鞍!!クラスター弾の射程範囲よ!脱出しなさい!!〉〉

京香とサラが警告を出す、時既に遅くクラスター弾の発射準備は終えていた。

〈〈クツソ!!〉〉

慧がJAS 39Dを操作してなんとかしようとするが距離が遠すぎた。

ザイはミサイルを発射しようとミサイルサイロのハッチを開ける。

〈〈—ATTACKING TARGETS /01 COVER

ALTAIR TEAM〈目標を攻撃する。01は引き続きアルタイル隊の援護に〉〉

その瞬間に紫色の鷹がミサイルサイロの上空を飛び向けるとサイロが火山が噴火したかの様に爆発した。

〈〈GOOD LUCK 01〉〉

先程の攻撃は自衛隊の4機目のアニメ・ドーターの【F—2A バイパーゼロ】だった。

彼女の仕事はFOB襲撃組の付近を単独で飛行。低空でザイの防空網を掻い潜り、TGTを破壊し、援護することだった。

F—2は優秀な攻撃機だが、デネブ隊程の速力は無かった為にこの様な役回りとなった。

〈〈バイパー、貴機の救援に感謝する〉〉
《THANK YOU・GOOD LUCK》

そんなメッセージを送り、バンクをしてから帰還していった。

〈〈バーフォード中佐。意見具申をよろしいかしら?〉〉

〈〈どうした、BARBIE03?〉〉

〈〈台湾空軍の救援にイーグルを、第7艦隊にデネブ隊を送れませんか?〉〉

〈〈確かに、距離的には妥当だな〉〉

バーフォードが納得仕掛けた頃、バトラが通信を入れる。

〈〈慧・グリペンも台湾の方に回せ、数が多過ぎるだろう〉〉

〈〈そうだな。よし、イー〉〉 〈〈なんで、私があんたの命令を聞かなくや行けないのよ!!〉〉

どうも、バーフォードにと言うよりはファントムの提案だということにご立腹のイーグルにどうあやそうかと頭を抱えるバーフォードにファントムが助け舟を出す。

〈〈味方に何かあった時はそうしろとお父様から言われています。イーグルならザイを千切っては投げ、千切っては投げの大活躍は間違いないだと、百倍の敵機を駆逐、圧倒しその勢いは中国大陸まで攻め込む程だとおっしゃてましたよ。悔しいですが同意見です〉〉

思い出す様にしかし、論す様に話すファントムにイーグルは無言だった。恐らく、本当か疑っていると言う感じだろう。

〈〈そうだけ。それにお前は最強戦闘機のF-15のJ型だろう?ザイの編隊の1つや2つ訳ない筈だ〉〉

〈〈ムッフー〉〉

バトラの通信でやる気を出したイーグルにバトラは内心で「チョロいぜ」と思ったが口には出さない。

〈〈任せてよ!大戦果を期待しててね!〉〉

〈〈行こうグリペン。あの人達に恩を返そう〉〉

〈〈うん〉〉

〈〈よし!BARBIE01と02は台湾空軍をDENEBO1から04は第7艦隊の救援に回れ、05から08はANTARES02

と協働して直掩機の撃滅だ。ALTAIR隊は今まで通り、敵の対空装備の撃破だ」

バーフォードの指示が終わると各機が行動を開始する。

JAS39DとF-15は台湾空軍へ、白いMiG25は4機でデルタ編隊を組み第7艦隊へ、残った4機のMiG25はRF-4TB-AZJを先頭にデルタ編隊を組む。

「さっきの嘘だろ？」

バトラが秘匿通信で会話する。

「勿論、嘘です」

きっぱりと言い切るファントムに『良い性格してるよ』と思うバトラ。

「BARBIE03の護衛任務を解除する。ANTARES02、戦闘機部隊の指揮官に着け」

「各機、敵陣地に突っ込む。突っ込んだ後は各機の勝手な錢勘定で動け」

ただの自由行動の許可。体のいい指揮の放棄とも取れる命令だが

……

「わかりやすい命令で助かるぜ」

「俺たち算数しか出来ない馬鹿ばかりだからな」

「いひひ、稼がせて貰うぜ」

「先輩、困った時はいつでも救援要請を出して下さいね」

仲間達には好評の様だった。

「各機、被撃墜だけはするなよ。海の上でのイジェクトは悲惨だぞ」

「DENEB05了解」

「DENEB06ヴィルク」

「DENEB07了解」

「DENEB08了解です」

「各機散開」

編隊を解き、ロット二組と単機に分かれる。

RF-4TB-AZJの前に2機のN型ザイが迫る。

「さて、稼ぎますか………」

誰に聞かせる訳でも無く呟いたその言葉は災厄に青い蠍がその毒針と鋏ハサミを振るう事を意味していた。

<<ANTARES02>>

<<DENEB05>>

<<DENEB06>>

<<DENEB07>>

<<DENEB08>>

<<<<<<エンゲージ！>>>>>>>>>>>>

各機が同時にエンゲージを宣言する。

2機編隊のN型ザイが迫る。

ザイは片方が加速してヘッドオンへ持ち込み、もう片方が上昇しながら右に旋回して背後に回ろうとする。

その機動を見たバトラは迷わずヘッドオンを選択する。

理由としては旋回する機体を上昇して追い、ドックファイトで2機を長い時間拘束するよりも自分が得意とするヘッドオンで1機を素早く撃破する方が良くと考えたからだ。

バトラとN型ザイがガンの射程距離にお互いを捉え、2機同時に発射した。

発射して直ぐにRF-4TB-AZJは上昇する。その下をN型ザイが単調な直線機動で過ぎ去っていく。

RF-4TB-AZJは180度のクルピットを使い、背面飛行で真後ろに機首を向ける。

機首を向けた先には右旋回を終えかけたN型ザイの姿があった。

ザイは後ろを向いたRF-4TB-AZJを見て、即座に離脱を選択して、腹を見せながら左に急旋回をする。

「敵に腹を見せるのは悪手だぜ」

バトラをそれを見越して右ヨーを操作で左の急旋回で逃げようとするザイに機銃の銃口を向ける。

<<インガン・レンジ・ファイア>>

機銃発射の宣言後に忠実に亡霊が敵を死に誘う30mmの弾丸は

吐き出す。

ザイはその弾丸をもろに受けて、粉々に粉碎される。

〈〈アンタレスが敵機を撃墜しました!〉〉

〈〈先を越されたか!〉〉

〈〈やべーぜ、クレイグ!全部持って行かれるぞ〉〉

〈〈俺の明日の食費がー!〉〉

〈〈流石です!先輩。僕も負けられません!〉〉

グリアムの報告にデネブ隊の各機は個性豊かな通信で返す。

〈〈俺も負けられねーな。FOX2!〉〉

アーツも負けじと短距離ミサイルを発射する。

〈〈敵機の撃墜を確認〉〉

〈〈よっしゃー!〉〉

マイケルの報告に喜ぶアーツだが、その後ろにN型ザイが忍び寄る。

〈〈アーツさん!後ろ!〉〉

〈〈やっべ!〉〉

DENEB08のアンツトニ(通称アツト)が注意を促し、それを受けてアーツはスロットルを全開する。

その瞬間にアーツのMiG25は最高速度マツハ2.5を記録するN型ザイが喰いつけない速度で飛翔する。

ガンファイトは不可能と判断して、苦し紛れにN型ザイはミサイルを放つがそのミサイルすらも置き去りにして直進するアーツのMiG25。

〈〈クラスター弾の被害範囲に侵入しています!脱出をデネブ05!〉〉

〈〈その必要はねーぜ!!〉〉

マイケルが通信を入れるがもうその頃にはアーツは二つの被害範囲を飛び抜けた後だった。

〈〈インガンレンジ・ファイア〉〉

アーツを追っていたN型ザイを25mm弾で撃墜するクレイグ。

〈〈こちらはALTAIRO3です。ポイントAからCの地対空兵

器を破壊》

《〈ALTAIR04もポイントCからEの地对空兵器を破壊が終
わりました》

《〈よし！DENEB09から16は突入！敵のミサイルサイロを
破壊しろ！》

《〈了解です。行くわよみんな？》

《《《《はい！》》》》

通信機から漏れたのは全て女性の声だった。

黒いMig25がマツハ3・0の速度でミサイルサイロに迫る。

ミサイルサイロのハッチが開き切る前に音速の3倍の速度で飛来し、黒い蝙蝠はそれぞれの目標に4発ずつ爆弾を投下する。

彼女らが投下した爆弾は通称【デイープ・スロート】と呼ばれる地中貫通爆弾【GBU28 バンカーバスター】である。

この爆弾はレーザー方式で誘導される誘導式投下型爆弾であるが彼女ら機体は速すぎる故にレーザー誘導が出来ない為に純粋な投下型爆弾としては運用しているがその命中率は70パーセントと高い。

事実、彼女らが投下したバンカーバスターは4発全てがその地中に存在するザイのミサイルサイロに命中している。

粘土質の地表で30m、鉄筋コンクリートで6mの厚さを貫通し、地中に存在する敵を死に誘う為に造られたこの地中貫通爆弾を抑えきれぬ程の強固なミサイルハッチなど持っている訳も無く、その全てがミサイルサイロの内部で炸裂しミサイルサイロを中からバラバラに破壊する。

彼女らが恐れられている理由は制空権を確保していようと強力な地对空兵器で武装した強力な防空網があるうと対空機銃と対空高射砲がなければ、その速度で突破して粘土質の地面に30m以上の深さか、鉄筋コンクリートを厚さ6m以上で造った施設でなければ容赦無く破壊して、自軍勢力下へとマツハ3・0近い速度でピンポンダッシュを決めて行くからである。因みに彼女らは無慈悲な2度目も辞さない。

尚、F-2が落としたのはこの爆弾では無く、純粋な投下式大型爆

弾で2発はハッチを破壊し、残りの2発がミサイルサイロ内部に侵入し炸裂したのである。

〈〈ではそろそろ始めます〉〉

ファントムが息を吸う。後ろを飛んでいた機体を先行させて、誘導位置に着く。

〈〈背中はお任せしてよろしいですか?〉〉

機体の下に吊るされた管制ポッドからアンテナが伸びて展開される。

〈〈当たり前だ〉〉

ファントムの援護位置に機体を持って行きながら答える。

〈〈そこは今から姫様の特等席だ。無遠慮に近づく無粋な輩は全部叩き墜としてやる。1機たりとも近づかせはしない〉〉

〈〈あら、格好いい。では、お願いしますね。私の騎士様〉〉

軽口を最後に会話が締めくくられる。

僅かな呼吸音の後に機体が緑に発光し、アンテナの先に光が灯る。

〈〈こちらカノープスのバーフォードだ。作戦開始の準備が整った。ドールハウスに作戦の開始を要請する〉〉

〈〈ドールハウス、ラジャー。作戦を開始する〉〉

巡航ミサイルが目標を破壊尽くすその瞬間までファントムを守りきるのがバトラの仕事だ。

バトラはミサイルのマスターアームをオンにする。

〈〈上空から敵機です。対処を〉〉

その通信を貰った途端に行動を開始する。

まずは機体をコブラで機首を上に向ける。

機体をロールしながら、位置変更をして最適な位置に機体を持って行く。

〈〈FOX2〉〉

最適な位置に着いた頃にはミサイルを発射。LOALで追尾させる。

ザイが爆炎の中に消える頃には失速させて背面から下に降下し、ある程度下がるとスロットルを開いてコントロールを復帰させる。

頭から落ちていく状況だった機体をピッチダウンで背面飛行しながら、下から迫るザイに中距離ミサイルを横腹からロックオンする。

〈FOX2〉

左翼から撃ち出されたミサイルは大きく右に進路をとり、ザイの横腹を貫く。

RF-4TB-AZJはロールをしながら右に旋回し、下から迫るザイと向き合う。

お互いに距離が近い為にガンファイトを選択すると思ったが、ガンファイト寸前の距離でミサイルを発射して加速中だったザイを的確に仕留める。

3機目ザイを墜とした頃に巡航ミサイルが飛来する。

その巡航ミサイルを迎撃しようとザイが転身をするがした機体からデネブ隊のMiG25かA-10に撃墜される。

撃墜されなかった巡航ミサイルが次々と島に降りかかる。

まるで豪雨の様に降りかかる。

着弾した巡航ミサイルは内部に抱えた爆薬を爆発させてザイのFOBを破壊する。

先程の精密爆撃と違う、完全な殲滅の為に絨毯爆撃に対空能力の一切を奪われたFOBはなす術も無く破壊されて行く様は正しく地獄絵図だった。

〈EPCMの低下を確認しました。これをFOBの完全破壊が原因と断定します。この後の観測機に引き継ぐので帰還して下さい〉

グリアム軍曹からの通信で小松に機首を向ける。

仕事を終えたファントムは隣を同高度で飛行する。

〈兄様。第7艦隊の方に行ってもよろしいでしょうか?〉

〈私からもお願いします〉

やはり、気になるのだろう。

〈燃料に余裕があるうちに戻って来い〉

その通信を聞くと『ありがとうございます』と言う通信を残し飛んで行く。

〈俺たちは台湾経由で欧州の方に飛びます〉

クレイグからの通信に『そうか』と返す。

〈〈また、生きていたら会いましょう〉〉

〈〈ああ、お互いに生きていたらな〉〉

その通信を最後にMig25は台湾へと飛んだ。

〈〈帰るか？フアントム〉〉

〈〈ええ、ここに残る理由が無いですし〉〉

〈〈ANTARES02、RTB〉〉

〈〈BARBIE03、RTB〉〉

2機の亡霊が並んで小松へと帰っていく。

作戦10 作戦終了後 沖繩にて

低速で横に並んで小松に帰投するファントムとバトラ。

2人の間に何の会話も無くただ、静かだったがその静寂をファントムが崩す。

〈バトラさん。少しよろしいですか?〉

〈ああいえ、返事は不要ですし盗聴の心配も無用です。この回線はアニマとAJZシステムのデータリンク機能を応用してしまから、情報も残りませんし他のアニマや回線にも拾われません。それと謝らせて貰いますが、他のAJZシステムとのリンクは切らせて貰いました。データリンクを介して聞かれかねないので。安心して下さいね。別に怪しい会話では有りませんよ? そちらは3人でこちらは1人で飛んでいましたし、こうして通信をし合う仲の仲間もないので寂しくなっただけです。独り言の聞き役になって頂きたいと言う慎ましやかなお願いです。よろしいでしょう〉

〈ええ〉

〈まずは今回のミッションありがとうございます。おかげさまで無事に目的を果たすことが出来ました。正直に言いますとアニマの1機、AJZ戦闘機の1機は失うかと思っただけなのですが最善の結果でしたね。これでも少しは喜んでいるんですよ? 私も貴方と一緒にこの国には愛着がありますからね。ただ、人類全体と天秤にかけると問題無く日本を見捨てられると言うだけです。あなた方には容認出来ない考え方でしょね。ですが、私には至極当然の理論なのです〉

〈へさておき、パイロット鳴谷 慧とレーダー/火器管制グリペンの組み合わせは悪くないと思います。何で分かるかというアニマ・ドーター同士のデータリンクは映像もデータリンクで分かるからです。彼女の管制するミサイルは射程内であればどの距離でも、敵味方の位置も気にせず当てられるのですから、多少の機動性の欠如など問題にならないでしょう。極端な話で言いますと最強のミサイル・キャリアーですね。HiMATを補って余りまるミサイル万能理論

の権化です。人間が操縦でアニマがサポートする。こう言う運用もありなのか、発想の転換だなと普通は思うのでしょうか。普通は〳〵

〳〵普通は〳〵

〳〵ええ、私などは捻くれ者ですから少しうがった見方をしてしまうですよ〳〵

〳〵簡単な事です。何故、他のアニマはそうっていないのかと〳〵

〳〵常識的に考えてみて下さい。私達、アニマはザイの部品を流用して作られた兵器です。コアの技術はブラックボックスでいつか制御不能に陥るかも知れません。そんな物を自律機動で飛ばすなど危険すぎると思いませんか？捕虜に核弾頭の起爆スイッチなど持たせません。本来は人間がドーターを操縦してアニマがサポートコンピュータに徹するべきなのです。しかし、技術の進歩のスタート地点は神の戯れで決まるって言っても過言では有りません。たまたまアニマの制御は自律制御でしか成功しなかった、と言うのがしっくり来る話です。事実そうだと思っていました〳〵

〳〵慧さんとグリペンに会うまでは〳〵

〳〵理想的なんですよ、慧さんとグリペンとA J Z戦闘機は人類が操る兵器としての形は。なら、ザイに挑む切り札として一枚であるアニマが何故、そうならないのかと疑問に思った訳なのです〳〵

〳〵黙って聞いて頂きありがとうございます。それと申し訳ありません。特に結論のない話をしてしまって。忘れて下さい〳〵

〳〵ただ、これだけですと本当に意味不明でしょうから1つ雑談をしましょう〳〵

〳〵ククク、雑談か？なら、返事はして良いな？〳〵

〳〵ええ、雑談ですから。私達には一般的に生前の記憶が無いと言われていきます〳〵

〳〵生前………と言う事はザイの時のか？〳〵

〳〵貴方の言う通りです。生まれた時にはもうアニマだった。細かな知識は全て機械学習で詰め込まれます。機械学習が始まる前から微かにある衝動が有ったのです。空っぽだった私に唯一存在していた思い。機械学習の影響でも何でも無い感情・情動は何だと思えます

か?」

「戦闘衝動か?」

「私は空戦を楽しいと思う感情を思い出しましたが、そんなバトルジャンキーの様な物では有りません」

「『この星を守らなければ』」

「……………」

「この星を守らなければ……………不思議な言葉と思いませんか?」

「仮にこれを私がザイであった頃の記憶だとしましょう。さて、私は一体何から地球を守ろうとしていたのでしょうか?」

「BARBIE02 ロスト」

「?と間抜けた声がスピーカーから漏れる。

（油断するからだ。馬鹿）

今回の訓練相手のイーグルに内心で毒吐く。

格闘戦になった状態から背後に回ったは良いが真後ろに飛んで行ったミサイルを無警戒に喰らい、機体の頭がグシャグシャになり撃墜された。

（ミサイルが真後ろには飛んでこないとは限らないんだぜ?イーグル）

見た事無いが実際に真後ろにロックオンできるパイロットと機体が居たらしい。

「お疲れ様、訓練終了だ。戻って来い。戻って来たらデブリーフィングだぞ」

デブリーフィングは訓練や作戦の後に行うブリーフィングの事だ。今回の訓練でイーグルもグリペン・慧ペア共に問題点を見つけたのでそれを伝える。

ファントムの意味深な通信から一晩挟んで7月28日の午前11時丁度、機体の整備、小松の受け入れ準備が整っていない事を理由に

那覇に滞在する事となった俺たちは暇だからと練度向上の名目の元に模擬戦をやっていた。

まあ、実際は暇潰しだな！

「納得いかない、納得いかない、納得いかない！なんかズルしなきやイーグルは墜とせない筈だもん！」

何か言い合った後にそう大声で叫ぶイーグルにバトラは溜息を吐く。

「と、申してやがりますが監視役のファントムさんの判定は？」

納得させる為にお互いのデータの監視を依頼した横のファントムに訊く。

俺の後ろで片宮姉妹が凄い睨んでいるが気にしたら負けかなと思っている。

「監視してましたけど、ズルは見当たりませんよ？まあ、あの誘導性は反則級ですけどね。真後ろにも飛んできるとは安置がありませんね」

「……………だそうです。まあ、真後ろに居るからと油断したお前の負けだな。実戦で見てただろ？」

イーグルはこのペアと一緒に台湾空軍の救援に行ったのだから、かなりの誘導性である事は知っている筈だがな。

「でも、真後ろに飛んで来るなんて……………」

「テメーの慢心じゃねーか!!」

軽くイーグルの頭を叩く。

頭を押さえながらしゃがみ、上目で睨むが怖く無い。

そんなイーグルの肩に白い手が置かれる。

「ファ、ファントム」

引きつった笑顔を浮かべるイーグルにっこりと微笑を浮かべる。その微笑は妹の失敗を見つけて伝えようとする前の姉の様にも見える。

「貴方は機体のパワーに頼り過ぎで無駄が多過ぎるんですよ。旋回率はあと1.5度は上げられる筈です。ロールの精度ももう少し向上出来るでしょう」

(全部、言われた……………)

楽で良いのだが仕事を取られた感じでなんか寂しい。

「でも、大丈夫ですよ」

もう一度、指摘する前の姉のような微笑を浮かべる。

「鍛え直してあげます」

ファントムが天使の様な微笑を浮かべて言ったのは地獄の様なものだった。

「え、ちよ、ちよつと」

イーグルはファントムに首根っこを掴むと、止める間も無く引きずっていた。

その後には驚の悲痛な悲鳴が続いたが慢心した自己責任と言う事で救援に行かない。

なんか、引きずって行くファントムの口元はひどく愉しそうな笑みを浮かべていた。

(あー!)

男だと面白い事を思いついたらやりたくなる訳ですよ。

「ファントム。慧にもレクチャーを頼む。問題点は分かっているだろう?」

「ええ、勿論」

「え?今、慧ってよんだああああ!?!」

ファントムのその言葉を聞いた瞬間に慧を転ばせる。

そして、ファントムが素早く首根っこを掴み、イーグルと一緒に引きずって行く。

「なんか、嫌な予感がする!」

慧の叫びに俺も同意しておく。

(ファントムは鬼軍曹くさいぞ?)

鬼軍曹のシゴキはキツイがその分の見返りは充分あるだろう。

「あ、そうそう。忘れる所でした」

ファントムがスカートを少しなびかせながら振り向く。

「私のパイロットになると言う話、貴方が私のRF-4EJの前席に座ると言う件ですが」

「ん？無効だろ？それ」

ファントムが大きな目を細めて、その細く白い指を下唇に当てながら話す。

その際に慧が脱走しようとするが片手で転ばせる。

「強制的にと言う話はなしです。ですが、貴方が望むなら私は何時でもお待ちしますよ？多分、貴方だけでは見れない景色をお見せ出来ると思いますから」

にっこりとそしてほのかに頬を紅く染めながら話すファントムに一瞬、俺はドキツとする。

「悪ふざけはよせよ。お前は充分に1人で戦えるだろ」

その感情を忘れる為に勤めて冷静に返す。

その対応を見たファントムは下唇に指を這わせたまま笑みを浮かべる。

「そうでしょうか？グリペン程度のドーターであれだけの性能向上ですよ？そこに私の力を充分に活かせる貴方が加わればもつと戦果を上げられる筈かと？」

「……………」

確かにそうだ。

「それ・に私の初めてを奪った方ですからね。その責任を取って頂かないと」

隠す気が無い程に頬を紅くして、軽く握った手を顎に当てながら下を向く姿は一種の想像を作り上げるには物資量が多過ぎる。

「これは一体、どう言う事ですか？」

詩鞍の追求。

極偶に凄いプレッシャーを出すので偶に怖くなる。

「ああ、言い直します。初黒星の間違いでした」

そう言って去って行くファントムを見て、この状況からの脱出策を思い付く。

「グリペン！ミサイル誘導について教えたやるからこっちこい！」

「わかった」

グリペンに訓練をつけると言う言い訳でこの場は脱した。

「えい！」

「きやあ！やりましたね！」

「こつちに流れ弾が！」

「倍返しですよ。詩鞍！」

海水をフロントムにかけるイーグルだが、流れ弾が詩苑と詩鞍にも当たり二人でイーグルに水を掛け合う。

4人の水着美女が遊んでいるのだ。周りの男達の視線は釘付けにされる。

7月の終わりで夏本番と言う感じのこの時期に海は人が多い。

バンを運転してくれた人の計らいで余り人が多く無い所を選んでくれたが、それでもこの時期だ。人は多い。

「何やってんだか………」

作戦前に出した慧の提案で作戦成功の祝いで海に行く事になった俺たち。

俺の財布からは何故か諭吉が4人も拉致されていた。

(片宮姉妹だけのつもりだったのに………)

俺は海に来たは良いものの何をするとせせず、財布の事で落ち込む俺。

それを忘れる為に片宮姉妹・フロントム・イーグルの姦しい空間に入りに行く勇氣は無い。

(あれって相棒同士の雰囲気か?)

少し離れた位置で水を掛け合う慧とグリペン。その光景はもう殆どの者が想像する海デートの一幕だ。

まあ、本人達にその気は無いだろうがやっている事がカップルのそれである事は言い訳ができないだろう。

「入りに行かないのか？」

胸毛がそれなりにあるバーフォード中佐が後ろからいきなり現れ

た。

服装は青に白の幾何学模様の入ったトランクスタイルの海パンだ。

「あの姦しい空間とカップル空間のどちらに入れと？」

「一人で رفتても良いだろうか？」

「と言うか、良くあんなハイテンションになれますね。魚の排泄物の上で」

「言ってやるな。せめて、サンゴの死骸と言え」

苦笑気味に言うバーフォード中佐だが、どっち道あの視線に困る空間には行きたく無い。

姦しい空間の方にいるイーグルは白に赤いハイビスカスが左胸にだけ描かれたビキニの上に裾が股下までのジーンパンの様な下の水着だ。

イーグルの少女らしからぬ胸が強調されているので視線に困る。

フアントムは薄緑の上に多過ぎない数が描かれた花柄のワンピースタイプだ。フアントムの清楚な雰囲気にもマッチしている。

ただ、中の水着が見えてしまう微妙な長さの所為で水着が下着に見えてしまうのと胸元は逆デルタにカットされていて深過ぎず、浅過ぎない谷が見えてしまいこれも視線に困る。

方宮姉妹は白と黒の色違いでデザインは一緒だ。しかし、着方が問題だ。

下は普通にサイドで紐を結ぶタイプだが、上は「紐を結んで着るタイプ」だ。

これだけ聞けば普通だと思うがこの言葉の前に「胸の中央で」と言う言葉がつくと大変な事になる。

何が言いたいか。ぶっちゃけて言うといーグルと同じサイズの尖り気味の胸。通称「ロケットオツパイ」(マイケル軍曹情報)の谷が全面的に押し出される。それだけでなく前に構造上の弱点があるので装甲板が取れやすいのだ。

そんなアクセシビリティが起きると分かっている空間に行く程馬鹿じゃない。

慧・グリペンのカップル空間は周りからKY認定受けそうだから行

きたくない。てか、あんな空間に行きたくない。

慧は至って普通な赤いトランクスタイルのみでグリペンはおレンジ色のセパレートトリボン付きのトップスにフリルのパティオだ。

ビキニを必死の形相で止めようとする慧が簡単に想像できる。

因みに蛇足だが、俺は藍色に水面の光をイメージした白い筋が入ったトランクスタイルの水着に黒のUVカット機能付きのラッシュガード着用である。

日焼けでの面倒事と日焼け止めを塗る面倒を省く為のラッシュガードだ。

「まあ、何考えているか大体分かるが……」
「なんで分かる!？」

「何年の付き合いだと思ってる?」
心の内を読みやがった!?! バーフォード中佐は読心術の使い手なのか!?

「下らん事を考えている暇はない様だぞ?」
「こつちに来ませんか?」

何時の間にやらファントムが近づいていた。

髪は緑から黒に変えているがその髪からは海水が滴り、煽情的とも言える光景を生み出していた。

「行かなきゃ駄目ですか?」

「行かなきゃ駄目ですよ。女性から声を掛けられたなら」
横からいきなりグリナム軍曹が現れる。

「クッソ!元とは言え女王陛下の空軍だった奴に言われると説得力あるぜ」

流石は紳士変態の国が祖国なだけあるな。

「失礼な事を考えていませんでしたか?」

「ハハ、ソクナコトナイデスヨ」

取り敢えず逃げよう。

「オオオオオオ!!」

マイケル軍曹が叫んだ。

どうやら、水着美女を見て興奮している様だ。バーフォード中佐か

ら制圧命令が出るまでは面白そうなので放って置く。

「フォオオオオオオオオ!!」

ファントムを見て、一段と叫ぶ。

「フィイイイイイイイ!!」

イーグルを見て跳ねる。

「フアアアアアアア!!」

詩苑を見て空にガッツポーズをする。

「フォフォフォフォ!!」

詩鞍を見てバルタ○星人になったな。

「ファオオオオオオ!!」

白に赤い縁取りだけのシンプルなビキニタイプに同じデザインのパレオを着た京香軍曹を見て砂浜に膝を着けて叫んだ。

「ファイルルウウウ……」

謎の叫びを上げかけた所で雰囲気もへったくれも無い灰色の競泳用水着を着たサラ軍曹を見て目に見えて落胆する。

「……マイケル軍曹」

呼ばれて、立ち上がり、振り向くマイケル軍曹。

「フン!!」

「ゴハア!」

腰としなりの入った爪先蹴りがマイケル軍曹の腹にクリーンヒットする。

そのまま少し飛んで、砂浜に突っ伏した。

「綺麗に入ったな」

「10点中10点です」

「もろに貰いましたね」

「あれ位は大丈夫だろ」

誰も一切心配しないMS社一同。片宮姉妹は相変わらず水を掛け合っている。

「で?どうしますか?」

ファントムが笑いながら訊いて来る。

「……わかった。付き合うよ」

周りの視線が『こんな美少女に誘われたんだから断る訳無いよな？』みたいな視線だったのは余談だ。

「ふふ、では行きましようか」

後ろを向く為フアントムがくるり回った時にワンピースの裾がまくれ上がり、丸みの強い女性らしいお尻と下の水着が露わになる。

その光景に一瞬、ビクツとなり動きを止める。

そんな反応をした俺に肩越しに振り返ったフアントムは妖艶な笑みを浮かべていた。

(こいつ……わざとやりやがった……)

そう思いながらも良い物を見れたと脳内に浮かぶのは男の性なのだろう。

「じゃあ、泳いで来ます。バーフォードさん」

「行って来い、バトラ」

こう言った時は仕事を思わせる事は極力言わないのが俺たちアンタレス隊の暗黙の了解だ。

「お話は済みましたか？」

「ああ、行くか？」

「ええ、勿論」

フアントムと並んで白い砂浜を進んで行く。

椰子の木が夏の風に揺れて、足の裏にサンゴの欠片の感触がある。視線を下から前にズラせば、太陽光を反射して美しく光る透明感のある波が寄せては返していく、コバルトブルーの海原が見渡す限り広がっている。

「さ、泳ぎましよう？」

膝まで海水に浸したフアントムが半身で振り返り言ってくる。

ふと、今年はザイとのドンパチばかりで夏らしい事はしていなかったなと思いつく。

「良いぞ。何処まで？」

「あちらの岩の方までで」

「OK」

波打ち際から歩を進める。波が来た時に膝が沈む位になった時に

フロントムが完全にこちらに向く。

「あの……………バトラさん……………」

珍しく歯切れが悪い。

「今日、貴方に見せた全ての笑顔は本物ですから。そしてこれからも……………」

そう言つて、笑顔を浮かべるフロントムは美しく、可愛かった。

貼り付けた様なお面の笑顔では無く、感情からくる笑顔。

俺は笑顔が苦手だ。

微笑む事は有つても、笑う事が有つても。

あの日から、あの時の様な花が咲いた様な笑顔は出来なくなった。

だが、この本物の笑顔の前で位はあの時の様な笑顔が出来るのでは無いだろうか？

「そうか……………それは良かった」

俺は多分、この日一番最高の笑顔が浮かべられたと思いたい。

作戦11 不穏な影は音も無く……………

小松に帰還して暫くたった頃。

滑走路がハンガーの前で、懐中時計を見ては右の空を見上げ、懐中時計を見ては左の空を見る落ち着きの無いバトラの姿があった。

「遅い……………」

バトラの待ち人は基本的に待たせない人物であり、大抵は予定の5分前には着ていることが多い。

「音沙汰無しで10分遅れか……………」

待つのは苦では無い性格なので問題無いが、こうも遅いと心配になる。

「おーやつと着いたな」

バトラが小松空港ではそうそう聞かない複発のレシプロエンジンの音を聞いて右の空を見る。

視線の先にはずんぐりむっくりした胴体の6発レシプロ機が着陸態勢に入っていた。

その機体は巨大な図体に見合わない優しいタッチで着陸する。

着陸した機体は誘導に従い、自衛隊の方に機首を向ける。

「おいおいおい！どんだけでかいんだよ!!」

後ろで驚きの声が聞こえたバトラが振り向くと先程、着陸した巨大な機体を指差して驚く慧の姿があった。

「あれはMS社所有の6発電動レシプロモーター搭載の輸送機【カンガル】だ」

「カ、カンガル？あの図体で？ギガ何とかの方がしっくりくる様なく……………」

「それは同意だ」

実際に俺もそう思うが何故、カンガルなのかは謎だ。

そう思っていると俺の視界に近寄って来る人影があった。

「すみません、遅れました。機長のファンセントです」

申し訳無さそうにしながら話す鼻が高い金髪の男。

「別に待つのは苦じゃ無いので、それよりもファンセントさんです

か………何故、貴方が遅れたんですか？」

MS社の輸送機パイロット一筋15年の機長であるファンセントさんが10分遅れは異常だ。

「言い訳すると欧州から出る時にスクランブルが発生してだけじゃなくて、飛行ルートにザイが出現した所為で迂回してきたんです」

「それは仕方ないな」

「助かります」

中には如何なる理由であれ遅れるのは許さないって人も居るが自分はこちらいった場合は無条件で許している。

「じゃあ、これが報酬です」

茶色い封筒を渡す。

「確認させて頂きます………確かに、後100ドルはお返しします」

そう言って100ドル分の紙幣を返してくるファンセントに俺は突っ撥ねる。

「ザイ出現は不可抗力だ。返金は要らない」

「ですが、こちらとしても運び屋としてのプライドがあります」
参ったな。こう言われるとどう言いくるめようか困る。

「じゃあ、それは皆へのチップだ。皆で美味しい物を食ってくれ」

「………わかりました。頂きます」

渋々と言った様子で懐にしまうファンセント。

このやり取りの間に藍色の戦闘機の胴体がカンガルーの胴体から荷下ろしされていた。

「後は主翼だけか？」

「はい。バトラさんの機体を格納後に固定作業を開始して終わったら離陸です」

「えっと………何やってるんだ？」

置いてきぼりを食らっていた慧が質問をする。

「ああ、定機検だな」

「定期券？」

「ニュアンスが違うな。定機検は略語で元に戻すと定期機体検査。」

まあ、車検みたいな奴だ」

「何だそれ？」

慧が？を浮かべる。

「MS社は一定期間のO Hでの検査が義務付けられていまして、検査自体は無料ですが、検査場までの輸送費もしくはは燃料費と修復費は自腹です」

ファンセントが補足を入れてくれた。

「ありがとうございます。ていうか、誰方ですか？」

「ああ、済まない。初めまして。MS社で輸送機【カンガルー第107便】の機長をしているファンセント・バンニクです。以後、宜しくお願い」

「宜しくお願いします」

2人で握手をする。

「で？慧はグリペンと訓練じゃなかったか？」

「あーそうだった！すいませんこれで！」

そう言う勢い良く走っていく慧に「気をつけろよ」と言っ
て見送る。

「機長。積み下ろしが完了しました。これより積荷作業を開始
します」

「わかった。始めてくれ」

その報告を聞いた俺はハンガー脇に目をやるとシートに被せられ
た戦闘機サイズの物体と2枚の板が置かれていた。

シートを被さられた戦闘機サイズの物体と2枚の板がカンガルー
の胴体に格納されて行く。

「じゃあ、頼みます」

「責任を持って預かります」

お互いに敬礼をして踵を返した。

(さて、組み上がりまで時間あるし、訓練室にでも行くか)
俺はその足で訓練室へと歩を進めた。

「やってるか？」

訓練室に入るなり話すバトラ。

「ええ、バッチリと」

その言葉に反応したのは白い肌に薄紅を垂らしたような唇に白いブラウスに黒のホルセットスカートを履いたおかつぱ髪の少女だった。これだけならまだ、何処かのお嬢様の様に思えるが髪色のエメラルドグリーンがそれを裏切る。

彼女は人間ではなく、対ザイの切り札の一つのアニメ・ドクター。その【RF-4EJ ファントムII】のアニメでファントムと呼ばれている。

「ファントム。慧とグリペンの様子は？」

シミュレーター映像を映す為のモニターに視線を移して話す。

「正直に言うとは比例してますね。慧さんの操縦がグリペンの管制に着いてきていませんね」

「そこはまだ、荒削りだ。管制と操縦には熟練に必要とする時間も違い過ぎる」

ファントムの言葉に仕方無いと返す。

「そうですね。慧さんだけで見ると、まだまだ荒削りですね。四角を球体にする為に四角を落として、そこを更に削った程度です」

そう言われてモニターを凝視する。

後ろに着かれかけてからのシザースは良い。実際、M型ザイを追い抜かせている。だが、撃破後と回避の機動は必ず右ロールから始まっている。

（それじゃあ、相手にどうぞ読んで下さいって言ってる様な物だぞ？）

そんな危なかしい所を見せつつ全てのザイを落とした慧とグリペンのペアがシミュレーション訓練を終了させた。

「随分、パイロット姿が板に付き始めましたね」

「パイロット姿が板に付き始めた様で何よりだ」

慧が入って来た時に同時に同じ事を言って2人して顔を赤くして

真逆の方向を向く。

「息がぴったり過ぎるだろ……………」

「ほっといてくれ……………それよりもグリペンは何？」

「ほっといて下さい。グリペンは如何したんですか？」

「まただよ……………お互いに何処と無く距離をあける。」

「検査だつてよ。今朝から様子がおかしいらしくて記憶の混濁に脳波だっけ？の乱れも有るから大事をとって定期調整も兼ねて検査するって言つて船戸さんに連れて行かれた」

「管制におかしな所は見られませんでしたか……………まあ、大事を取つたと言う訳ですか……………」

「理由は？」

「分からない。フナさんが言うのは悪い夢でも見たんだろうとか言つてたけど？」

訓練ではおかしな所は見られなかったし……………まあ、大丈夫だろう。

「まあ、そんな問題にならなそうな事はこの際置いておこう。目先の問題はお前の機動だ」

とりあえず、話を訓練に持つて行く。分からない事を話しても考えても分からから分かる奴に任せるのが良い。

「ご期待には添えてるかな？自分でもマシになつた気はするけど」

若干、胸を張つて言う慧に現実と言う名のミサイルを叩き込むか。

「戦闘機動が単純過ぎ。マニニューバの8割は右ロールが起点だし、速度と高度を同時に失つてる所もある。ザイを相手取るならM型はまだしもN型はちよつと厳しいな」

「それに推進剤の無駄も多いので、経済速度を理解していない証拠です。後、チャフとフレアは惜しまずに展開する事。人間の操縦で躲せる程ミサイルは鈍重じゃありません。教えましたよね？」

フロントムの追撃も加わつてボロクソに言われた慧が崩れる。

だが、慧。訓練次第でミサイルも500mから回避出来る様になる。機体が限られるがな！

まあ、このままなのは流石に可哀想だ。

「まあ、1ヶ月も満たない期間でこれだけだ。充分以上の出来だろう」

1ヶ月で飛ばすのがよつとの奴よりはマシ程度の腕のパイロットが出来上がるからちやんと動かせるだけ上出来だろう。まあ、グリペン限定だろうけど。

「ええ、ほんの少しですが、前回の作戦時よりも出来が良くなってますけどね。ほんの少しですが……」

ファントムのとって付けたかの様なフォローに苦笑いしながら頭を下げる慧。

「けーいー」

長い金色の髪に青い瞳と活発な印象を与える半袖のジャケットに黒いシャツと白いデニムパンツを履いた少女が視界に入る。

F-15Jのアニメであるイーグルだ。

「勝負」

イーグルのその一言で全てを理解した。

訓練用シミュレータを繋げて対戦形式の訓練がしたいのだろう。まあ、イーグルは最近、グリペンと慧に負けてばかりだから挽回したいのだろう。因みに余談だが戦績はイーグル・グリペンチーム・片宮姉妹は五分だ。

イーグルの機体性能に頼った機動にA-10の鈍足と慧の操縦で五分の結果になっている。片宮姉妹が速力のある機体に取り換えたら結果は変わるだろうが、どうだろうか？

まあ、今日はシミュレータは定期検査に入るのでどっち道無理という事で中国の遊びをし出した慧とイーグルを放って格納庫に向かう。(そろそろ、組み上がっている筈)

部屋から出るとファントムも着いて来ていた。

「どうかしたか？」

「いえ、片宮姉妹はどうしたのかなと？」

さして気の無い様子で言ってみせるファントムに思い出しながら話す。

「そう言えばバーフォード中佐に呼ばれてたぞさつき」

「そうですねか……」

急に立ち止まるファントムが気になり振り向く。

「では邪魔が入らずにお話出来そうですね」

「!!」

は、何を？とは言えなかった。ファントムが言い終わると同時に行動を開始していて、振り返っていた俺の右肩をワンプッシュして重心を右斜め後ろに倒す。

すぐ後ろは壁なので倒れる事はなく、壁にほんの少し急な角度で背中を預ける様な形になった。だが、ファントムの行動はこれで終わりじゃ無かった。

「なんのつもりだ？後、顔が近いぞ」

そう言わざるを得ない位置と体勢だったのだ。

俺は『へ』の字を120度くらい右にした様な体勢であるのとファントムの両足は『へ』の右半分が俺の足だとするとその足を跨いだ状態であり、両手は俺の顔の両隣にあり身動きが取れない。所謂、逆壁ドンという奴だ。

顔は普段よりも顔一つ低い位置に有る所為かファントムの首の少し下の位置に目線が有る。ほんの少しでも視線を下に動かしたら男には無いものが見えるだろうが、見ない。

「別に取って食おうとかは考えていないですよ？唯、例の件は考えていただけましたか」

例の件。と言うのは俺がファントムの前席に座ると言うものだろうな。

「何故に俺を前に乗せたがる。お前は1人で飛べる。わざわざ、2人で飛ぶ必要が無い」

ファントムは元々、2人乗りの時に本来の性能を見せるがそれを1人2役こなせるファントムがこだわる理由は無い筈だ。

「前にもお話したと思いますが、私は慧さんとグリペンの関係こそ有るべき姿だと思うのです。人が道具として私達を^{アニメ}十全に使い熟し性能を引き出す。正しく兵器としての本懐です。そうありたい・なりたいと願うのが不自然ですか？」

それは聞いた。勿論、それには同意見だ。だが……………

「何故に俺なんだ？他の連中でも良いだろう」

「言ったでしょう？十全に使い熟し性能を引き出すと。私の知る限りでは貴方以上に「F-4 ファントム」と言う戦闘機の性能を引き出すパイロットは知りませんから。慧さんもグリペンに特化して使い熟そうとしています。より完全な形になるには貴方しか居ないんですよ」

「つまり、その戦闘機に特化したパイロットが乗れば期待以上の性能が出せるという訳か？」

別に俺はF-4に特化している訳じゃない。メインがF-4というだけだ。

少し足を動かして顔の位置をファントムの顔の位置に合わせた。バランスも良くなったお陰で幾分楽になった。

「最高の理想形になった時、自分がどれ程のパフォーマンスを發揮するのか、高みに至れるのか。考えただけでも胸が躍ります」

「顔が近づいてるぞ？」

徐々に顔を近づけてくるファントム。

お互いの顔の位置は数cmあれば良い所だろう。

俺の心臓は早鐘を打っていた。

ファントムの様な少女にお互いの呼気だけでなく、体温まで感じられそうな距離まで近づけられれば緊張しない訳がない。

「私のような女は好みでは有りませんか？」

そのエメラルドの瞳を細めて両端の口角をほんの少し動かして見せる。その顔は直球的ではない妖艶さを生み出していた。

「お一人では見られないで有ろう光景をお見せできると思いますか？」

そう言うと肘を曲げて更に近寄ってくる。顔の間は1cmあれば良い所で胸に至っては自分の体に服越しでくっ付いている。

俺は一瞬だけ恐怖で体が跳ね上がった。この発言に今更ながら気づいたが、遠目で見られればファントムに言い寄られているだけに見える。万が一でもアリーナ軍曹辺りに見られれば面倒事にしかなら

ない。

「からかうのはよしてくれ。これは好みの問題ではないんだからな」

「そうですね」

意外にあつさり引き下がり俺を解放する。

解放されてから、改めて格納庫に向かいながら考える。

フアントムは一回の頻度が少ないが長くと言うよりも頻度が多く短くというやり方を好むようだ。しかも、これだけの用事で来ずにこの用件がいつで来るのでタチが悪い。

まあ、好みかどうかと言えば『分からない』と答えるだろう。

俺自身、外見はある程度で内面重視で考える。と思っている。

フアントムは感情は感じ取り易いし精神もちゃんと出来上がっている。現実主義だが、一部だけでそこ以外は話次第で融通が利く。

正直に言うとは嫌いではない。

だが、likeでの意味であってloveでは無いだろう。そもそもな話だが、俺自身に『人を好きになった』と言うか『人を好きになっていた』と言うのが正しいだろう。しかし……………

(それを……………失ってから気付くなんて……………)

俺はloveと言う意味の好きを理解出来ないタイプの様だ。

「如何しました？何か考え事でも？」

フアントムが俺の内心に機敏に反応した。

俺は出来るだけ平静を繕って会話を切り出す。

「慧とイーグルがやろうとした中国の遊びにお前は参加したか？」

「遠慮しますね」

やんわりと答える。

「あれは結局相手が0・5・10のどれを出すかの三択ですよ？だとすればミスしない限りは33パーセントに勝率は収斂される。それに自分の手は固定化出来る訳ですし、駆け引きも何も無いじゃないですか」

「運任せのゲームは嫌いか？」

口角を上げて話す。

「運任せのゲームは好きではありませんね」

同じ様な笑みを浮かべる。それは一昔前の内心が読み取れない笑みと似ていた。

「フロントムは攻略法がすっかりしている奴じゃ無いとやらない感じだな。お前は予め仕込みをして勝ちが濃厚になってから臨むってタイプだ」

「あら、貴方は随分と私を打算的なタイプと見られているんですね」
口角を上げた笑顔のまま目を半開きにする。

「間違っではないだろ？」

「否定はしません。コイントスにダイスロール、ロシアンルーレット、どれもこれも事前の仕込み無しに挑むなんて恐ろしくて臨めません。勝敗を確率に預けるのは思考停止と同義ですから。賭けるものが大きい程、戦いの手段にするには不適切です」

「だと思ったよ。鉄翼は纏う者の心と魂を写す」

「そう言う貴方は如何ですか？」

視線だけを移して問い掛ける。

「確率任せと言うのも嫌いじゃ無い。まあ、多少の仕込みはするがな、特に金が掛かる時なんかはな」

「ようやく、貴方がカウンターマニューバでの反撃を得意としているのか」

その言葉に俺は視線だけで問い掛ける。

「カウンターマニューバに入るのは計算的に出された位置で行いますが、行うマニューバは場当たりのです。計算で出されたタイミングに確率任せの動き。これが貴方のカウンターマニューバの秘密です」

『如何ですか?』と視線で問い掛ける。

「ドックファイトは魂と魂、誇りと誇り、そして……己の運命力のぶつけ合いだ。確率も味方にしないと生き残れないぞ」

勝ち誇った顔で話すバトラにフロントムは白い目を向けたまま口を開ける。

「そんなんで勝ち誇られても反応に困りますね……でも、自分の勝ちにくい環境でも勝ちに行ける、戦って行ける人が必要になるんで

しようね……………」

その言葉に俺はファントムの背中を軽く叩く。

「自分が勝ちやすい環境を整える。間違っても相手の采配に任せない。準備八割、実行二割と言う考え方を持つ奴も戦場では必要になる。案外そうなるまで戦わない姿勢が一番の危険回避の手段なのかもな」

「まさに、抑止力ですわ」

「自分で言うな」

廊下に静かな笑い声が生まれたが、直ぐに無くなる。

「ですが……………その持論を曲げて、貴方の様な人が必要になるかと思ひまして」

「何か……………有ったのか？」

その後の言葉は整備士の『バトラさん！チェックお願いします！』と言う言葉に止められた。

気が付けば俺達は外に出ていた。どうやら長いこと考えていた様だ。

「お、バトラ！組み上がっているぞ！調整頼む！」

「どうぞ行つて来て下さい。私はもう少ししたら定期テストがあるので」

そう言つて、何かを憂う雰囲気を纏つたまま何処に消えるファントムを目で追い掛ける俺に整備士の叫び声に現実に引き戻される。

「分かったー！直ぐ行く」

ファントムの言葉も気になるが、不確定で不透明な未来よりも、今直ぐ目の前に転がっている事をしよう。

俺は海を越えてやって来た鶴の相棒に駆け寄った。

作戦12 厚木訪問

真夏のある日の小松基地の食堂で食事を取っていた。

「慧さんたちは今頃、厚木で何してるでしょうね」

そう呟くのは琥珀の瞳にフリルのように波打った袖口にリボンがあしらわれた白いシャツを着て、下は落ち着いた紫色のコルセットスカートと言うお嬢様然とした印象を与える服装だが頭髪の鮮やかなライトグリーンがその印象を否定する。

その少女の名をファントムと言う。

ファントムは食べていたナポリタンの皿にフォークを戻してから、水の入ったグラスを傾け喉を潤す。

「歓迎パーティーで御馳走かも……イーグルも行きかけたのにく!!」

そうカレーを食べる手を止めてスプーンを離さぬまま文句を流す少女はイーグルと言う。

金髪にサファイアのような青い瞳を持ち、黒い女性向けタンクトップに腹まで行かない程度の長さのデニム生地の上着を羽織った白い短パンの活発な印象を与える。

「まあ、出発から四時間経過だ。厚木に着いたとしても歓迎パーティーはないだろうな」

炒飯を飲み込んでから、冷ややかに言い放つ少年。

白髪に真っ白い肌と寒色に埋め尽くされた顔は冷たい印象を与えるが眼だけが透き通ったサファイアの様に青く、それが全体的に幻想的で美しい印象を回りに与える。

身体には何処の国とも言えぬ青い迷彩服と、近づき難い印象をそこに付加してしまい残念だ。

その少年をバトラと言う。

「しかし、米軍もこちらの事はお構いなしですね」

ナポリタンを飲み込んでからうんざりした様子で話すファントムにバトラも水で喉を潤してからうんざりした様子で答える。

「トップは自分が言えば動いて当たり前だと考える。あそこはそう

言う国だ」

「でも、なんで慧達と片宮達は厚木に行ったんだろう?」

イーグルはカレーを口に運ぶ。

「慧は彼方さんの都合。片宮姉妹は第七絡みだろうさ」

今回は視点をずらして、厚木組に視点を移そう。

「私達はわかりませんが、なんで慧さんたちも?」

詩苑が助手席に座る八代通に投げかける。

場所はバンの車内で目的地は小松基地から数十分行った先の鳴谷家だ。

「お前達は米軍への挨拶回りだろうが、慧・グリペンペアは彼方さんからの要望だ。全く何がこっちの全アニメとMS社のAJZ戦闘機を持ってこいだ。出来るわけ無いだろう」

八代通がイラついたのかダツシユボードを蹴る。

そうこうしている内に鳴谷家にバンが到着する。

八代通はこれから外出しようとする慧を何も言わずにバンに乗せ、走らせる。

「ごめんなさいね。明華さんには私達からも口添えしますから」

「いいよ。面倒くさくなるから、今回は何ですか?今日は休みの筈ですけど?」

「先方が直前まで曖昧にしていたな。ついさつき今日これから来た」

「先方?」

「アメリカ軍です」

「ありがとう詩鞍。でも、何でアメリカ軍が?」

「俺も分からん。ここで説明しても中途半端で余計に混乱するだろう」

「わかりましたよ。顔合わせだけなら一時間見てればいいですよね?」

「残念ですがそれは無理です。私の目的地は神奈川県米軍厚木飛行場。往復で六時間です」

神奈川県中部にそれは存在する。

大和市と綾瀬市をまたぐ広大な敷地は数値にして506・9ヘクタール。この広さは小松などすっぽりと収まってしまおう。

その広大な敷地では70機以上の軍用機が配備され常時千人以上の軍人が勤務し横須賀港湾設備と連携して艦載機を絶やさぬ様にメンテナンスを行う。同じ役割を担う基地は日本には無く、役目・規模共に在日米軍の最大級にして重要拠点だ。

そんな場所に慧・グリペンペアと片宮姉妹はチャーター機で降り立つ。

「慧さんも着陸の衝撃に備えてしまiumたいですね」

「兄様に一回だけ小型のプライベートジェット機に乗せて頂いた時はもう少し衝撃は無かったですね」

「兄様の腕と比べられる機長の身になりなさい」

片宮姉妹も慧も戦闘機に乗り慣れているために如何しても衝撃に備えてしまう様だが今回の機体は旅客機で専門のパイロットと言う事もありそれ程衝撃は来ない。

機体は指示された場所に駐機されると可動式タラップが接続され昇降口が開く。

慧が迷彩服を着込んだ米軍軍人の見上げる視線に怯みながらタラップを降りて行く。順番は前から八代通・慧・グリペン・詩苑・詩鞍だ。

片宮姉妹がタラップに乗ると一部の軍人が手を笑顔で振るのを見て片宮姉妹も手を振りかえす。

全員が地上に降りると硬い靴音が横から聞こえそちらを向く。

「ウエルカム」

細身で背に高い白人が立っていた。手足は細く肩幅に開いた脚がコンパスの様に見えてしまう位に細い。瘦けた頬と落ちくぼんだ眼窩に尖った顎が印象的な身長2mの白人男性だが、猫背なので圧迫感が無い。

歓迎の言葉を発しているが八代通の姿を見た途端に暗い視線を向

ける。

「ひ、久しぶりだな。こうして会うのは二年振りじゃないか？」

イントネーションは正確だがややどもりのある日本語。

「別に会う理由も無かったしな。ネットでお前の論文を読んでいるが、相変わらず人の後追いばかりで新味がないから直接議論する気にならない」

肩を無愛想にすくめる八代通を見て長引きそうだと考えた片宮姉妹は少し席を外し、第七艦隊の艦載機パイロットと久々の再会を楽しむ。

その後ろで八代通とウイリアムが口喧嘩を展開して、横では青髪の少女にグリペンと慧が凸られていた。

「ライノ」

ウイリアムのきつい口調で全員がそちらを向く。片宮姉妹は八代通の側に戻る。

戻っている間にライノとウイリアムは何かを話した。

「あ、改めて自己紹介をさせてくれ。DARPAのウイリアム・ジャンケルだ。専門は人口知能だが今ではアニメ・ドーターが専門だな。このライノも我々の作品だ」

ライノが芝居がかった動作でお辞儀をしてから言葉を発した。

「U.S.N.P.A.C.F.L.Tアメリカ太平洋艦隊所属、F/A-18E-ANM、ライノです。

今回の作戦で一緒に行動させて貰うからよろしくね」
にんまりと笑うライノに慧が慌てて頭をさげる。

「鳴谷 慧です。で、こいつが」

「JAS39D-ANM、グリペン」

「片宮 詩苑です。こちらは」

「双子の片宮 詩鞍です」

令嬢を思わせる一礼を見せる片宮姉妹だが、グリペンは少し頭を下げた位だった。

「詩鞍。作戦って聞いてますか？」

「いえ、何も。初めて聞きますよ」

ひそひそとした声で話す。

「な、なんだ、何も聞かされていないのか」

非難めいた視線を八代通に向けるウイリアム。

「急な呼び出しだったからな。全員纏めてやった方が楽だろう」

「お、横着者が」

肩をすくめて話す八代通を非難する。

「まあいい。我々が行うのは上海上陸作戦だ。大陸に橋頭堡を築き

反攻の足掛かりにする」

「上海を……取り戻せるんですか」

慧が期待の眼差しをウイリアムに送る。

「無理じゃ無いでしょうか」

詩鞍がその空間に水を差す。詩鞍の脳裏には前回の作戦。海鳥島

ザイFOB攻略戦の壁の様に迫り来るザイの光景だった。

「ウミドリ島の件は此方も知っているためにだからこそアメリカは

東太平洋の第三艦隊を第七艦隊と合流させた上にアニメを導入する。

その上で日本のアニメ達も協力してくればきつと達成出来る」

力強く頷くウイリアムを見て、慧は体が震えた。その震えは恐怖の

震えでないことは顔に浮かんだ笑顔が証明していた。震えながらも

その両手の拳はきつく握りしめられている。

（母さんの仇を討つ）

こみ上げた衝動は、だが唐突に告げられた冷やかな言葉に押しと

どめられた。

「戦場に……空に憎しみをもち込もうとしていませんか」

「え……」

「三年前の戦争でお兄様が最初に教えて下さったは『空に、戦場に憎

しみをもち込むな。持ち込んだ者から犬死する』でした。今の貴方は

その様な気がしたので声をかけさせていただきました」

「……大丈夫。ごめん」

弱々しく謝る慧にほんの少しの微笑みで返してウイリアムに向き

直る。

「第三、第七艦隊とアニメ4機にAZJ戦闘機3機合わせてだけで

中国に上陸する為の戦力にしてはいささか質が足りないのでは？勿

論、兵器の質です」

「し、心配する必要は無い」

ややどもりながらもその目は自信を宿している。

ザイのEPCM下では通常兵器は鉄の塊に過ぎない。米軍は頼みの綱のAZJSは電子妨害の効かない戦闘機として通常戦闘に使うつもりでいた為に所持出来ず、アニマも中々生産出来ないでいた。

この現状を知る者なら中国上陸は夢のまた夢の話だと片付ける。

「アニマ・AZJSが対ザイのアプローチではないということさ」
頭上を通り過ぎて行つた黒い航空機を見るまではだ。

蒼空を複数の航空機が駆け抜けて行く。

大型の直線翼に丸み帯びたストレーキの精悍なシルエットは先程までエプロンで佇んでいたF/A-18ホーネットだ。それが四機。二個編隊で飛んでいる。

ほんの少し機体を傾かせての旋回に伴い主翼に陽光が反射して輝く。迎え角で上昇し高度を稼いでいく。一連の動作の間も若干広いが二機の雀蜂は不可視の糸に繋がれた様にフォーメーションを保つたまま上昇する。見事な編隊飛行だった。

見事な編隊飛行をする雀蜂の10キロ先には黒いブーメランの様な物が飛んでいた。

黒いブーメランに挟撃を行う様に雀蜂が二機ずつ左右に別れる。

雀蜂から二本の白煙、もう一機も同様。四本のミサイルがブーメランに飛んで行き、僅かな間を置いてもう一個の編隊からも二発ずつ発射される。計八本のミサイルはどれも命中コースに違いなく回避は不可能に思えた。
が。

空は鮮やかな青を変える事は無かった。爆発も黒煙も発生せず、広大な青いキャンバスに目標を失ったミサイルの白煙が色を付けるだ

けだった。

ホーネットのパイロット達は見失った敵機を探しているのか直線飛行をしてしまっていた。

直線飛行をしていたのは5秒にも満たない時間だが、黒いブーメランにとつては敵のマーカ―を戦術マップから消すには充分な時間だった。

事実、ホーネットを示すマーカ―が戦術マップから一つ消えている。

そこからは、蹂躪・虐殺と言う言葉が似合うだろう。なす術なく雀蜂が戦術マップから消えて行つた。

最後の一機が消えてからオペレーターの作戦終了を告げる言葉が紡がれ、モニタールームに誰のとは分からない溜め息が漏れた。

「ど、どうかな我々の研究成果は。中々の物だと思わないか」
ウィリアムは誇らしげに話す。

慧、詩苑、詩鞍はいきなり基地の建物に招待されてつい先程の模擬戦の映像を見せられた状況について来れずにいる様だった。八代通は腕を組んで椅子に座っており何も話す気はない様に見え、グリペンは訳が分からないと小首を傾げている。この空気の中慧が口を開ける。

「ええ、凄いと思います。凄いですけど…あれって何ですか？」

その言葉に詩鞍、詩苑の順で言葉を発した。

「ドーター………とは思えません」

「とすると無人機ですか？」

詩苑の言葉にウィリアムが薄い笑みを浮かべる。

「FQ-150Aブローラー。対ザイ用の無人戦闘機だ。ライノがベースだが他国提供の戦闘データを解析してソフトウェア化した物を組み込んでいる。戦闘経験値なら初期のアニマ・ドーターと同じ……いや、それ以上の筈だ」

この話に慧の表情が明るくなる。中国上陸はおろか奪還さえも夢では無いと考えているのだろう。

「ドーターの劣化コピーと言う訳ですか。EPCM対策は如何なん

ですか？AZJSを持ってないアメリカなりの解決策があるんですか？」

「も、勿論だ。我々のデータベースに過去のEPCMパターンが大量に蓄積されている。そこからアニメがどう判断し、どう行動したかを解析すれば自ずと適切なアルゴリズムが出てくる」

「量産型と同じ理論ですか」

「その通りだ」

量産型AZJSはパターン化されたEPCMを元にそれを打ち消すジャミングを発生させる物であり、脳波との同調を必要としない又は複数の脳波との若干な同調を行うと言う物だ。

「ふん。粗悪な形態模写が実戦で通用すると思っているのか？大方EPCMの影響を解明出来なかつたから統計に逃げたんだろう？」

八代通の挑発的な物言いにウィリアムも挑発的な物言いです。事により専門用語が混じった高度過ぎる子供の口喧嘩が発生する。それを見た米兵に食事でもどうかと提案されてそれに乗る事にした。一同はフードコートへと歩く。

その道中に慧からある質問が飛ぶ。

「どう思う？あの飛行機」

「戦力としての期待度は低いですね。純粹な工業製品ですから数は揃えられますがパターン外のEPCMが飛んできたら役に立たなくなりですよ」

基地の地図から慧に視線を移した詩鞍が冷たく言い放つ。

「詩苑は？」

「動きが単調なのに加えて反応速度も鈍いですから数が揃えら無いと難しいかと。あれでは逃げ回るのが精一杯といったところでしょうか」

少し考え込んでから答える詩苑。

「グリペンは？」

「詩鞍と詩苑に同意見。ただ、数が増えたら別。EPCM下でも充分に動ける仲間は貴重だから」

「八代通さんは嫌っていたけど？」

「ハルカは味方の損害を嫌うから。墜とされる事を前提に無人機を投入するのが嫌なんだと思う」

「そうか……バトラならどう言ったかな？」

「今回の相手は人では無いので兄様が何というか分かりません」

「兄様は無人機を嫌います。『偵察は分かる。でも戦闘まで無人機にやらせたらそれは戦争じゃ無い。本当の意味でのルール無きゲームになる』とおっしゃってましたし」

バトラの言葉の意味を理解出来ないのか首を傾げて分からないと呟く慧だが夏の日差しがそれを視界諸共遮る。

「あ。丁度良いところに」

外で出たところにライノに捕まった。

ライノの手には右に見慣れたピザ屋のロゴが描かれた紙パックが4つ。左にはかなりのサイズのこれまた見慣れたファストフード店のロゴが描かれていた。

量を想像した片宮姉妹が胸の上の部分を押しさえる。

「その量をお一人で？」

詩鞍が口を開いたがその声は震えていた。

「あはは、買い過ぎちゃって。ウィリーとの打ち合わせはお終い？」
常に眠たげな瞳が笑みで若干細くなる。

「終わったと言うか、出来なくなつたと言うのが正しい気がします」

「難しい話になって長引きそうだから今の内に食事を済ませようって事になってな」

詩苑と慧が思い出しながら喋る。

「カフェテリア？」

「のつもりですが？」

「まさか……」

詩鞍が答え詩苑が気付く。

「さっきも言ったけど買い過ぎちゃってね。よかったらランチに付き合わない？」

その言葉が終わるとゴクリと唾を飲む音と腹の虫が鳴く音が聞こえた。

「慧」

掠れた声を出す主はピンクの飴細工のような唇を開けて荒い息を上げている。グリペンだ。

「私は今、多大な忍耐を強いられている」

視線の先にはピザの箱。

「分かった。ご馳走になるよ。詩苑と詩鞍は？」

「誘われましたし断るのも無粋ですしご馳走になります」

「詩苑と同じ意見です。折角ですのでご馳走になります」

「じゃあ、あっちに行こう」

そう言って指を指した先には機首の長い展示戦闘機。

（あれは何でしょう。気になりますね。後で兄様に聞きましょう）

そう考えた詩苑が展示戦闘機の写真を撮る。

その後は楽しいランチをしながらライノからのハイテンションを孕んだ質問責めに遭う慧を微笑ましく見る片宮姉妹の図が出来上がっていた。

「ねえ。何故、アメリカはブロウラーなんていう無人機を作ったんでしょう。誓約をして全世界に発表すればAZJ戦闘機が作れるのにですよ」

詩鞍が質問を出す。

「合衆国は実用主義の権化。AZJ戦闘機はいわば正真正銘の専用機。軍人の数だけ戦闘機がいる」

「ですが、純粋な工業製品です。一機作るのに時間がかかりましたが装置を組み込むだけで対ザイ戦が出来ます。F-22量産の理由にもなりますし大量生産されれば一機辺りの値段も下がります」

「そうだね。一部の政治家、特に元軍人や軍について理解がある政治家はその案を叫んだけど駄目だった。一つは対人戦への使用が自衛以外に認められない事。それだけの数を揃えるには軍事予算を何倍にしなければいけない事が特に問題になった」

それを聞き今度は詩苑が言葉を発する。

「ですが、ザイの事を考えると」

「駄目だよ。合衆国にザイは攻め込んで無いから政治家はAZJは

誰でも使える戦闘機を減らす、対ザイ戦にしか使えないって言うデメリットしか見ない。合衆国が直接攻撃されれば世論が動くからそうなるだろうけど」

その言葉に詩苑と詩鞍の二人はいつかのバトラの言葉を思い出す。

『AZJ戦闘機がPMCにしか配備されていない理由？簡単だ世界は金か権力か武力でしか動かない。AZJ戦闘機は製作に金と時間が掛かる。正規軍に普及するのはザイに直接攻撃されて政治家が保身か世論が動き出した時くらいだろうさ。政治家は保身か世論がなきや都合の良い事しかしないのは万国共通だぞ』

「酷すぎます。それで苦しむ人が居るのに」

「政治家はそういうものだから。それに軍にしても対人戦で使える戦闘機が減るのは避けたいんだよ。万が一日本と開戦した場合にアニマの数は4：1だからあたし一人じゃとても手が回らない。だから通常戦闘機で補うしか無いしブロウラーなんていうまがいもの作っているんだろうけど」

「日本と開戦って、そんな場合じゃ無いだろう」

慧が口を挟む。

「そうだね。あたしも変だと思うし納得もいかない。だって外に敵がいるのにも敵を探している。でも『最悪に備えよ』は軍隊の基本だからね。世界中が敵に回った時を考えないといけない」

「「……………」」

慧は理解出来ず、詩苑・詩鞍は理解出来るが故に黙るしか出来ない。

「ね、君たちはどう思う？その姿を模したあたし達もいつかは仲間割れを起こすようになるのかな？仲間と余所者を区別して対立の芽を探し続けるのかな？」

ライノが目に見えて暗い表情をする。

『自分が信じなければ人を信じさせる事は出来ない』味方の作り方は政事と同じ所に繋がっている。そう兄様は言っていました」

「そして『互いに憎悪を持つとうと平和の歌に集った者達のようになれたら最高じゃないか』そうとも言っていました」

「そっか……………良いお兄さんだね」

「はい！自慢の兄様です」

二人は花が咲いたような笑みを浮かべ答える。

「な、何だこんな所に居たのか。てつきりフードコートにいるものだと思っていたから、さ、捜したぞ」

背の高い声。ウイリアムだ。

「ごめーん。私が呼び止めちゃった」

舌を出して悪戯っぽい笑顔を出すライノだが、紙コップが5つある時点でバレる嘘だ。

「な、鳴谷君にか、片宮君だったかな？少し時間が有るかな？グリペンも」

ライノの行動に何も語らずに話し出すウイリアム。

「有りますが、何か？」

「二つゲームに付き合ってくれないか？」

ウイリアムの話にあったゲームを慧がプレイする。

「もういいです」

結果から言うとは何かプレイして全て敗北した。

慧がプレイしているのは戦術ゲームと言えるものであり、勝利条件はザイの殲滅か十年人類を生き延びさせる事。

「変わって下さい」

慧の座っていた椅子に詩苑が座る。

「まず、この軍隊がAZJ化されていない前提なのでまず勝てませんね。となるとまずは生産でAJZ兵器を生産すべきですね。夢物語ですがそれしかありません」

そう言って生産のタブをクリックするがAZJ兵器が存在しなかった。

「ありませんね」

「AZJは実装していない」

「あ、無理です」

何もする事なく匙を放り投げる。

「おい！」

「私の作戦はロシア軍の一部と中国軍全軍でザイを足止めして欧州・アメリカ・日本の軍隊をA Z J兵器のみで装備してから決戦だったんです」

「中国の民間人は？」

「放置ですよ？動かしたらザイが意地でも攻撃してくるじゃないですか」

完全に中国を生贄に捧げる様な作戦に慧が絶句する。

「慧さんは落ち着いてください。これはゲームですから」

「だけどー！」

「私達、二人は兄様から捨てれるもの、捨てなきゃいけないものは何でも捨てなければ捨てれないもの、捨てたくないものを護れないと教わっています。詩苑の行動は私は正しいと思います」

「……………」

「まあ、落ち着いてくれたまえ。グリペンはどうだい？無理強いはしないが」

グリペンが慧を見つめる。その瞳はどうすれば良いのかと訊いている様だった。

「やってみれば良いんじゃないか？」

「じゃあ、やってみる」

そう言つて椅子に座りゲームを行う。

最初は手短かな軍隊を動かしてザイと交戦させるが即座に撃破される。しかも、中国奥地にしか目をやっていない所為で他方向から都市部が蹂躪されている。

「あんな「待つて下さい。慧さんの目は節穴ですか？」…え？」

慧が助言を出そうとした時に詩苑が止めた。

「ユーラシア大陸を見てください」

ユーラシア大陸は一年でザイに占領されているがちらほらと民間人を表す緑の点が存在した。その場所は全てがインフラの整った環

境では無いが故に人口は減っているが全滅はしていない。グリペンはザイの殲滅では無く人類の生存を考えてのプレイをしていた。

事実、都市部を離れた民間人をザイは攻撃を行っていないかった。

十年後世界はザイに支配されていたが人類は10億人が生存していた。

「な、何故だ！どうして君にその選択を行わせた」

「わからない。ただ、そうした方が良いと感じただけ」

「「感じた？」」

ウイリアムと詩苑・詩鞍の声が重なる。

「直感？」

グリペン自身が把握していない様だがウイリアムの興奮は収まらない。

「は、ハルカのプログラミングか？機械学習の影響か、それとも別の要因か？き、君は少し特殊なアニマと訊いているが、他の日本のアニマもそうするのか？それとも君だけが今の様な行動に出るのか？「ちよ、ちよつと、シヤンケルさん」君の思考ルーチンと記憶領域を解析したいな。表面的な部分だけで構わない。ライノと何が違うのか。か、構わないだろう。今の人格データを傷つけたりはしないから、ほんの少しだけで良いんだ」

慧の制止を無視してギラついた目で早口でまくし立てるウイリアムの背後で大きな音を立てて扉が開く。

「「八代通さん？」」

眼鏡を掛けた肥満漢が不機嫌極まりない顔で室内を睨みつけ、そのままの顔で早足で室内に入る。

「人が打ち合わせで拘束されている間にうちの子供に何をやらせているんだ？勝手な事はしないで貰おうか？」

「妙な真似はしていない。ゲームをしていただけだ」

凄まじいスピードで首を振るウイリアム。

「帰るぞ」

「わかりました」「了解しました」「あ、はい」

有無を言わせない雰囲気黙って付いていく四人の後ろからしや

がれ声が発せられる。

「ハルカ！我々人類には情報が必要なんだ。何故、もつと掘り下げない。今あるものをありのまま受け入れては何も進まないぞ！その子達は宝の山だぞ！」

「お前はアニマというものを理解していない様だなウィリー」

氷の様に冷たい声音。

それ以上は言わず歩き出す五人にウィリアムは呼び止めなかった。

帰りのチャーター機の室内。八代通と通路を挟んだ反対側に座る詩鞍が八代通に話しかけた。

「八代通さん。少し良いですか？」

「なんだ？」

多少のイラつきを孕んだ声に一瞬だけ身を強張らせたが質問をする。

「さっきのアニマを理解していないってどう言う意味ですか？」

八代通が溜め息を吐く。

「あいつは……あいつはアニマをただのプログラムだと思っている。だから、データ解析だの分析だのと言う。ソースコードを読み解けば隠された真実がわかる筈だとな」

「確かに所々でライノさんやグリペンを物の様に話してる所が有りましたね」

「ああ。単純な生き物でもその思考を完全に解き明かせたりはしない。ザイのコアもな。あれをコンピュータと捉えた瞬間に本質が分からなくなる。だからこそそのままに受け止めて、教育や対話で俺たちの味方にしなきゃいけない。生き物を育てる様に根気強く、時間を掛けてな」

「なんか、こう言っただけですかペットみたいですね」

「可愛くない奴が多いがな」

「ん」

慧の膝枕で眠るグリペンが身じろぎする。

「あら、声が大き過ぎましたかね？」

「あの、八代通さんこいつは人類の味方なんですよ。アニメはザイとは違うんですよね」

「当たり前だろう。今更、何を言っているんだ」

「グリペンは味方ですよ。貴方がグリペンを信じてあげている限り、グリペンは貴方を信じて味方でいてくれる筈です」

詩鞍の向かいに座る詩苑が窓の外から視線を慧に移して話す。それを聞いた慧はグリペンの手を起こさない程度に強く握った。

緋色の有翼獅子の少女もその手を握り返した。

作戦13 始動！人類の反抗作戦！！

空が夜の帳に支配される頃。俺は夜の格納庫の中で航空機雑誌を片手に毛布を羽織り、スクランブル待機を行っている。

つい最近になって契約が変更されシフト制でスクランブル待機が回ってくるようになった。出来高制の民間軍事会社社員としては待機するだけでも給料になるのは有り難い。

そう思いながらページを捲ると雑誌に人型の影が映り込む。

「ん？今日のスクランブル待機はイーグルとだった気がするが？」

視線を上げると緑色のおかっぱ頭に清楚系の服装をした少女、ファントムがそこにいた。

「イーグルに変わって頂きました。貴方に折り入ってお話したい事が有ったので」

「なら、携帯でも良かっただろ？何故、直接」

「他人に聞かれたくないので、この距離なら小さな声でも聞こえますしね」

そう言って、隣に腕を組み、少し震えてから座るファントムに羽織っていた毛布を被せる。

「……ありがとうございます」

その後に雑誌を開いたままファントムと俺の間に持って行き、肩を寄せて、自然な形で耳打ち程度の声で話せる状況に持って行く。

「少し、協力して欲しい事があります」

その内容に俺は驚くしか無かった。

コックピットに据え付けのパソコンを開く。本社からのメールが来ると朝早くにバーフォード中佐から連絡があったからだ。

「お！来た」

MS社の個人ページを開く。

P A S S W O R D



Log in

パスワードを打ち込み次に進む。

『Personne』

『Weaponry』

『Objective』

▶? 『Mission』

『Exit.』

ミッションのタブを選ぶ。

『MS社からの本社命令である。このメールを受け取ったものは明日の13:30までに下記の地点に集合せよ。』

緯度???

経度???

命令無視であると判断された場合はそれ相応のペナルティが課せられるので留意する事。尚、今作戦はアメリカ軍・他PMCとの協働攻略作戦である。最も高い戦果を出した隊及びパイロットには特典が用意されている。以上が連絡だ。諸君らが我々の期待を裏切らない事を切に願う。』

読み終わって、電源を切る。

(ファントムが言った通りの内容だとすると。本社幾らの金を積まれた？あんな糞みたいな作戦にあいつらは出せない。準備しといて良かった)

〈二人とも読み終わったか？訓練空域まで出るぞ〉

〈待つて下さい。エンジン確認がまだなんです〉

〈私もです〉

〈さっさとしろ〉

〈兄様。今日の訓練は中止をお願いします〉

〈何故だ？〉

詩苑が通信を入れる。

〈エンジンに細工が施されていました。何が起きるかわかりませ

んが念の為確認します」

「私もです」

「クッソ!!」

キャノピーに拳を着ける。

バレずらい場所で離陸には関係のない場所に細工を施したが二人で見つけてしまった。

(すまんな、ファントム。お前の情報を生かせなかった。正直に話すよ)

「機体から降りて、二人の元に赴く。」

「何故、気付いた?」

その言葉に二人が信じられないと言うような顔をする。

「兄様は私たちの機体を見ていませんよね……………」

「ああ」

「なら……………まさか!!兄様!」

「詩苑の思っている通りだ。俺が細工した」

その言葉を聞くと同時に二人が一步詰め込んで来る。

「何ですか!他人の機体に細工をしてでも勝とうとしないと言ったのは兄様の筈です!」

詩苑が興奮冷めやらぬように声を荒げる。

「……………」

「黙りですか……………貴方にとって自分の言った事はその程度の事と言う事ですか」

黙ったままの俺に詩苑の冷たい言葉が入る。これでこいつらに見放された……………いや、見放される事をしたと自覚している。

ただ、それが現実になっただけだ。

「これだけは聞け」

命令口調で言う。

たとえ、自分が嫌いな命令をしてでもこれだけは伝えなければいけない。

「聞きたくありません」「聞く気はありません」

二人は去ろうとするだが、逃がす訳には行かない。今、言わなければ

ば絶対に言えなくなる。そうなる気がしてならない。

「聞け。これは命令だ」

その言葉に二人は歩を止めて、向き直る事はしなかったが構わず告げる。

「今度の米軍との作戦でお前達は墜ちる。俺はそう判断した。だが、お前らに言った所で納得しないという事くらいは分かる。機体に細工をしたのは機体が壊れればお前たちは参加出来なくなるからだ。こうなった以上はもう止めない。だが、俺の言った事は留意しろ。以上で終わりだ。行つていいぞ」

俺は返事を聞かずに去る。見放される事くらいは分かっていた。しかし、仲間をこれ以上失いたくないのだ。戦場に出る以上は死ぬ奴も生きる奴も出る。それは理解している。それはもう嫌と言う程に。それでも自分の預かる部隊の隊員にだけは死んで欲しく無いのだ。

（自己満足……そんな事は判っている。だが、もう……）

目の前で墜ちて行く仲間を見たく無い。その為ならば、己の言った事さえも振り曲げる。たとえそれが味方を裏切る行為だとしても。

（あんな思いをするのもうごめんだ。今回の作戦であいつらの護衛なんて出来る訳がないし、規模的に自衛も出来ないだろう。なら、作戦に出させなければ良い）

その目論見は失敗した。後は彼女達の判断に委ねよう。

「待つて!!例の作戦ではアメリカ軍は対ザイの戦力としてアニメもドーターも一つしかありません。そんな中で戦力を減らしてどんなメリットがあるというんですか!」

珍しく詩苑の叫び声が聞こえる。

「俺の自己満足だ。それに今回の米軍には関わらない方が良い。今回のあの国は自分の利益しか見ていない」

その言葉に詩苑は怒りを燃やし、詩鞍は俯いたまま首を振る。

「ブロウラーと言う無人機を見せて貰いました。あの無人機を出してまでこの作戦に参加するアメリカ軍の何処が自己中心だと言うんですか!」

「無人機か……益々、自己中だな。良いか。この作戦で日本は最

悪の場合はアニメを全て失う。その替わりに今回の作戦で実戦に耐えられると証明された無人機を売り込み、軍事能力を完全に依存させるか掌握出来る」

「私たちはその生贄だと?」

「その側面もあるだろう。だが、今回の作戦はメールを見る限りかなりの大規模で尚且つ重要な作戦にPMCが参加出来ると言う時点でその側面が強い。米国はこの作戦は失敗しても良い。いや、失敗を前提としている」

「何故、そう言い切れるんですか!!」

「米国は三年前からPMC嫌いになっている。それに信頼出来る情報筋からはこの作戦はザイの反攻作戦の布石と言う情報を得ている。米国のこんな重要な作戦にPMCの参加が出来ている時点で参加側にこれだけ本気だと形だけを見せている。その道の人間が見ればハリボテの対応と言う事くらいは簡単に分かる」

「心からの対応だと」そんな物あると思っているのか?」良い加減にして下さい!あなたのアメリカ嫌いを聞きたい訳ではありません!」

「そうか。だが無人機がこの作戦を成功させたら、一月でどれだけの数が揃うだろうな?俺の予想だと4桁は行くだろうな。そして米国お得意の物量戦でザイとの戦争が終わる。米国にとつて成功すれば御の字。失敗しても無人機が量産出来ればそれはそれでよし。どちらに転ぼうと旨味がある。そんな状況の米国は信用出来ない」

「そうですか、そうですか。見損ないました!」

「私もです!!」

そう吐き捨てて、去って行く。

何も遮る物に邪魔されていない強い風が吹き荒び、それに当たった何かの液体が耳に当たる。

手で触れなくてそれが何か位は分かる。判り切っていた事だ。なのだが……………

「なぜ……………涙が溢れる……………」

その言葉は風に攫われ消えて行った。

夜のスクランブル待機はファントムと俺だった。

「そちらは如何だった（如何でした）？」

「わかりません」

「失敗かな？」

「ハアアー」

格納庫の一角は葬式の空気だった。

「何やったんですか？」

「エンジンに機体が少し壊れる程度の細工してがミス。米国の暗黒面教えたら逆効果だった」

「向こうを信用している人にやることじゃないですね」

「PMCにいるなら遅かれ早かれ出逢うんだ。なら、早い方が良い」

「タイミング、考えましよう」

「はい」

兎に角、彼奴らの判断に委ねよう。トップダウンで決まった事であるがエンジントラブルが解決できなかつたと言えば言い訳は聞く。MS社もそんな機体は作戦に出させない。

「生き残るぞ」「生き残りますよ」

二人同時に告げる。

スクランブル待機は珍しく何事も無く終わった。

それがかえってザイがこちらの動きに備えている気がした。

〈〈ANTARES02だな。そのまま着艦してくれ〉〉

〈〈ラジャー〉〉

指定されたポイントには一隻の正規空母と複数の護衛艦が艦隊を
組み停泊していた。

問題の起きず、着艦に成功する。

〈〈ようこそ、空母ケストレルへ。貴官の乗艦を歓迎します〉〉

〈〈ありがとう〉〉

P M Cオーシア・ズ・ユーク保有の正規空母。ケストレルへと着艦
した。P M Cオーシア・ズ・ユークは航空戦力の規模はM S社より少
ないが各国の最新とは言えないものの現代戦が問題無く行える程度
の設備を持った艦隊を保有・運用できるだけの資本を持っている。

彼らは場所を選ばずに動けるので中・小国に重宝されている。

「久し振りね。元気にしてた？」

「ええ、でなきやここにいませんよ」

「それもそうね」

親しげに話しかけてきたのは長瀬 珪さん。三年前の始まりと日
本防衛戦、ロンドン防衛戦にゴールデンアックス計画阻止と言った作
戦で何かとお世話になった部隊の二番機を務める人だ。機体は単座
仕様にされたF-14 トムキャットに近代化改修とA Z J Sを搭
載したF-14D-A Z J トムキャットだ。

「よう！バトラ。久し振りだな」

チョップパーさんが気さくに話しかけてきた。

「お久しぶりですね。スタジアムに落ちた所を救助してから会って
ませんでしたね。イジェクトシートの整備はバッチリですか？」

「言わないでくれよ！病院で15歳児に助けられた20代とか言わ
れて散々弄られたんだから！」

「俺の教官が言っていましたよ？被弾してもイジェクトは出来るくら
いにダメージコントロールはしろって」

「できるかー！ー！ー！！」

チョップパーさんの叫び声に甲板中から笑い声が聞こえる。

『航空機が着艦する。各員、安全な場所まで移動せよ』

「ほらー早く！」

「あーはいはい」

チョップパーとバトラが安全な場所まで退避した時に五機の戦闘機が視界に現れる。

「あれは……F-35 ライトニングⅡか」

そのF-35は完璧とも言える着艦を見せる。

そして、そのF-35が甲板から退かされてパイロットが降りてくる。

そのパイロットにバトラが近づくと気が付き、体を縮こまらせる。

「……………え……………えつと……………久し振り……………でいいかな……………？」

「ええ、お久しぶりです。メビウス1」

バトラが挨拶を仕返した途端に何も話さずに視線を彼方此方に這わすメビウス1にバトラはバイパー程では何にしろこの人も恥ずかしがり屋だなど思っている。

「相変わらずですか」

「これは治りませんよ。アンタレス04」

「メビウス2ですか、今はアンタレス02です」

「それを言ったら私も今はヘイロー1です」

旧友と会ったかのような雰囲気に含まれる甲板の一角。

3年前の戦争で大型航空兵器が世界中の空を飛び回っていた際にその大型兵器を撃墜した部隊の一つであるメビウス中隊だが、臨時編成部隊であった為に現在は解散し原隊復帰している物が多い。

現在のメビウス中隊は五機編成である。

空を見上げるメビウス2の脇を通りある人物がバトラに声をかける。

「元気そうだな。バトラ」

「貴方はまだ、死んでなかったんですね。というか死にませんよね。寿命で以外は」

「……………元教え子に散々な言われ様だな」

「貴方の経歴を見直して下さい。入る所を間違えてる気がします」

「その言葉はブーメランしてやる」

お互いに黒笑を浮かべる二人。

『パイロットの諸君はブリーフィングルームに集まってくれ。今作戦の説明を行う』

「行くぞー！二人とも」

「はい」

ブリーフィングルームに入ると名の知れたエースなどがそれなりの数が集まっていた。確かに報酬は良かった気がする。

「諸君。私は空母ケストレルの艦長を務めるアンダーセンだ。それでは今回の作戦を説明する」

そう言つてプロジェクターに映し出された作戦空域の写真を見せながら説明して行く。

フアントムからの情報通りにザイに対する反抗の為に中国に橋頭堡を築く。それに当たり、俺たちに航空支援並びに制空権の確保と維持が今回の仕事だった。

「ただし、バトラ君は自衛隊の部隊に編成されるのでそのつもりでいてくれ。何か質問はあるかね？」

一人のパイロットが手を挙げる。

「なんだね？」

「バトラの部隊員の姿が見えないのですがご存知ですか？」

「そのことならバトラ君の部隊員は自衛隊の指揮下でこの作戦に参加する」

「ありがとうございます」

「他は………無いようだ。では、作戦開始時刻まで自由にしてくれて構わない」

全員が立ち上がり敬礼をしながら見送る。

フロントムの通信だと向こうでは昨晚、歓迎会をしていた様だが此方ではそんな事は無く、今日の出撃の為の最終調整が行われていた。

《アンダーセンだ。わかっていると思うが君の任務は第三集団の援護だ。合流後は空中管制機カノープスの指示に従ってくれ》

《了解です》

エレベーターに載せられて格納庫から甲板に出るまでの短い間に通信のやり取りを終える。

上部甲板に出るとそのまま引つ張られ、カタパルトがノーズギアに接続される。

それを確認した俺は動翼テストを行い問題ない事を確認してエンジンを始動させる。

ある程度の回転数になった事をハンドサインで伝える。

それを見たカタパルトオフィサーが甲板に膝を着いて前に腕を出す射出の合図を行った。操縦桿から手を離し、計器に触らない様に腰の前で手を組み射出される体制を整えた途端にカタパルトで撃ち出された時の特有な感覚に襲われる。

艦首から少し離れた瞬間にギアを格納し、エンジンノズルを下にして上昇する。

高度1万フィートに入るとケストレルのオペレーターから通信が入った。

《米軍のUAV部隊が遅れ気味です。合流はもう少し後になると思います》

内心で舌打ちする。タイミングが一秒ずれるだけでどれだけの数が死ぬと思っているのかアメリカはわかっているのか心配になる。

《おはようございます、バトラさん》

《おはよう。機体の調子はどうか？》

《バッチリに決まっています》

一際カラフルな編隊が見えてくるとファントムから通信が入った。予定通りのポイントでデルタ編隊を組んで飛行していた。

編隊は先頭から青いホーネットに右にグリペン・イーグル・ファントム。左にサンダーボルトⅡが二機だ。

《こちらカノープスのバーフォードだ。バトラはファントムの僚機に付け》

《ANTARES02、了解です》

ファントムの後ろの位置に着き、レーダーを確認するとアメリカ海軍機のIFFが軒並みレーダー上から姿を消していく。

「米海軍も質が落ちたな」

度重なる世界紛争で正規軍は軒並みその質を下げってしまった。勿論、エースも生まれたがロシアのクーデターで米海軍だけで無く各国のエースも血祭りに上げられた。

その為に一つの部隊では無く、一人の兵士が高い練度を持ち、平均練度は減少傾向なのが正規軍だ。

それに対してPMCは元々、野良が集まって群れを作っているという形で助けを請われるか、必要だと思われた時に出来そうだったら助けると言う連携と言うよりも助け合いが混じったスタンドプレーを良くするので正規軍に比べると部隊単位での練度は低いが一人一人の練度は正規軍を引き剥がすには十分な練度を持っている。

その証拠はレーダーに映るIFFがPMCは殆ど減っていないが、米海軍だけは一瞬で最低一機、最高四機と言うスパンで消えている。

《いい加減にー》BRW ENGAGE》

慧が怒りを隠さずに聞こえた声がUAVの無機質なアナウンスに遮られた。

慧の事だ。米海軍がやられていくのを見て、UAVの動きが遅いと思つて焦つたのだろう。

UAVは急加速して水蒸気の衣を纏いながらミサイルを発射。ザイを十機撃墜した事で編隊に穴が開きその場所にUAVが侵入すると掘削する様に奥へ奥へと進んで行くがザイもやられるだけで無くUAVの後ろに付く。

《FOX2》

グリペンの同時に発射された2発のミサイルを1発ずつ喰らい撃墜される。

《慧一編隊から離れている。囲まれて死にたいのか?》

そう通信を入れるバトラに機体が斜め上前方からの敵機接近を知らせる。

その方向に視線を向ければ、丁度、ザイがミサイルを発射した瞬間でもあった。

(数は4!)

最初のミサイルを高度を維持したままロールしながら右にずれる事で回避し、続く3・4発目はロールしながら上昇して回避。最後の1発は右に急旋回して回避する

ザイも急加速をした後にバトラの後ろに回り込むがクルピットにより後ろに付かれた瞬間に左の機体のエンジン部が爆発し機首を上にしたまま横に回転して落ちて行く。

左の機体も離脱に移ろうと翼を翻した時に機関砲の弾丸がミサイルに命中し爆発、揚力を失いバラバラになった機体は慣性の法則に従って乱雑な回転をしながら海面に叩きつけられる。

《ブローラー隊が突っ込む。ALTAIR隊とANTARES隊は援護!》

《FOX3!》

サンダーボルトから中距離ミサイルが16発、バトラから4発発射される。

発射された中距離ミサイルは穴を塞ごうとしていたザイに命中し穴の維持に成功する。

続いてファントムとイーグルも中距離ミサイルを発射し穴を大きくしていく。

ミサイルを撃つには近すぎると発射速度を遅くした30mm機関砲でM型ザイの背中中央にある盛り上がった部分を撃ち撃墜する。それが二機、三機と重なり、十数発を使った頃に敵の出現が無くなった。

「よし！抜けた！」

敵防空網を突破して中国領土の空を飛んでいる。しかし、あくまでもこれは第一段階であり、俺たちの仕事は上陸作戦で最も大切な物である制空権の確保だ。

俺は機体を反転させようと操縦桿を傾けようとした。

《前方に反応！これは……爆撃機？》

何故に戦場の奥に爆撃機がいるのか？ミッドウエーの様に艦隊を爆撃するには二機と少な過ぎる。

「あ、あれは?！」

バトラの視界の先で翼下の爆弾を投下するとその爆撃から翼が生えて周りを飛び始める。

「ぱ、パラサイトファイターか!!」

パラサイトファイターとは爆撃機などの大型機を母機として戦場で発進し護衛や戦闘を行う戦闘機のことである。

《各機！逃げろ！数の差が多過ぎる！囲まれて撃墜されるぞ!》

そう通信機に叫んだ瞬間に脳味噌がシェイクされる様な錯覚が襲いかかった。

何度も受けた事があるからわかるがこれは高出力のEPCMに晒された時、特有の感覚だ。

AZJシステムが直ぐに打ち消したので治ったが頭の不快感を吹き飛ばす為に首を振った。そして、同時に背後に汗が流れた。

三年前にも何回もあったこの現象を信じた機体を数メートル上昇させてクルピットを行う。

「I N G U N R A N G E !!」

HUDの機関砲のレイトクルに背後にいたアメリカのUAVを捉える。

「F I R E !!」

機首の横に装備された30mm機関砲から鉛弾が発射され薄い黒の物体をズタズタに引き裂いた。

《ファントム！UAVが操られてる!!》

《わかっています。第2集団も全滅していますし、逃げましょう。作戦

は失敗です》

《で、でも》

慧が撤退に難色を示す。中国奪還は慧の今作戦参加の目的であるために撤退には否定的な思考だった。

《残りたければ残っていい。死んでも葬式も何もしないがな》

冷酷に言い放つバトラに慧がようやく撤退ルートに乗り始めた。

バトラのSu-33は片宮姉妹のA-10の上に移動し後ろを追いかけるブラウラーのうち1機はエンジンを破壊し、2機目は中央から縦に真つ二つにされた。小型のパラサイトファイターには機体の腹から回るクルピットで機首に機関砲を向け、発射し撃墜した。

《早く逃げる。時間は俺が稼ぐ》

鈍足のA-10を守る為にこの空域に残る事を選択したバトラの横に青いF/A-18が並ぶ。

《ボクも付き合うよ》

《俺もな》

《ライノはわかる。何で教官がここに？》

《迷った》

この返答に何も言い返せない二人を放ってオメガ11が動き出す。

《オメガ11エンゲージ！》

《バトラ、エンゲージ！》

《ライノもエンゲージ！》

三機がザイの編隊に食いつく。

ライノは一撃離脱で、オメガ11は数々のマニューバで撃墜し、バトラはカウンターマニューバで撃墜して行く。

《FOX2……こっちだよお二人さん！》

充分に時間を稼いだ頃にライノから編隊に穴を開けた事が知らされその穴に飛び込むオメガ11とバトラ。

その後は何とか振り切り落ちて着いて会話が出来る場所まで飛んだ。

《まずいな。ケストレルからも離れ過ぎてる》

《自衛隊の基地も然りです》

《台湾に飛ぶにしても燃料が心配だね。主に僕の》

《強化するのは航続距離だろ。何してんだよアメリカ》

《まあまあ、どうする？イジェクトする？》

《俺は何回もイジェクトしたから言えるけど、ライノが海の上でのイジェクトに耐えられるか心配だな》

《海の上でのイジェクトは悲惨ですからね》

《中国の空港は近いか？》

あー！

《なんて読むんだ？浦に東の国際空港》

《ごめんなさい。中国語はからつきしで》

《それ、プードンだね》

《敵中の空港に強行着陸。敵地中枢でイジェクトするよりはマシです
すね》

《だろ？ここから100キロだ》

《着陸できなかつたら潔く海水浴だね》

《バタフライで日本海横断しようぜえ》

《おう、そうだな》

《何でバタフライ限定！というか泳いで渡るの！渡れるの！》

敵地でやる会話じゃないが一行は一路浦東国際空港に向かう。

作戦14 脱出と裏切りと助けられる

とりあえず、空港に強行着陸を行う。

「拳銃良し……………」

機体から降りて直ぐにS&WのDA45Cリボルバーを抜く。DA45を元にトリガーセーフティとトリガーに連動して撃鉄が動く様に改造を施している。それに合わせてちよい大型化した。

「ふうー」

気配も無いため、息を吐く。

冷たい風が頬を撫でるので心地良いが航空機で賑わっていたであろう空港がゴーストタウンよろしく閑散とした空気で包まれているのは少し辛い。

「物資が残っていると良いんだがな。特に燃料」

黒い髪の男性が話しかける。オメガ1ー1さんだ。というか、今回はインジエクトしてないから不思議だ。

「残ってるんですか？上海撤退戦で持って行ってるんじゃない？」

「そんな悠長な時間があつたの？空港の機材を丸々、船に積み込み時間が」

青髪で状況の深刻さを感じさせないのほほんとした表情の少女。ホーネットだ。

「知らん。あの時はどこの誰もAZJが間に合わなかったからな」

使い物になったのは中国陥落から1週間後だったはずだ。

「機材を空襲から守ると考えると、俺なら地下施設か山だ。だが、時間的に山はあり得ん。地下を探すぞ！」

「ここは敵地ですから、単独行動は控えましょう。オメガ1ー1さんの武器は？」

「ストライクガン」

あの攻撃的でメツサカツコイイ銃か。銃身の先とグリップにスパイクが設けられていて鈍器にも使え、接近時でも撃てる様々な改造が施されているコルトのカスタムガン。

「コルトの改造銃だから45口径…規格はDA45Cと規格は一緒

……ホーネットは……はいはいM1911と」

「なんで、決めつけるのさ！いや、M1911A1だけど！なんで、リボルバー？」

ホーネットが突っ込みの後に俺の銃がリボルバーである事に気付く、今の時代にリボルバーは珍しいのだろう。

「自動拳銃が主流だが、^{弾づまり}ジャムを起こしにくいのは回転式だからな。いざという時に撃てなきや意味が無いだろう？」

自動拳銃が嫌いな訳じゃ無いが、今回は米海軍ということで45口径拳銃を持って来た。弾種統一はしておくべきだ。

「弾丸が同じだとわかったあたりで燃料と食料だ。食料は中のコンビニ探せばありそうだし、燃料からだな」

という訳でエプロン・ハンガー・貨物室と燃料がありそうな場所を探すが何もなかった。

「燃料のねの字も無い」

数時間も探し回って、何も見つからない。物資は全て奪われたか？空港を壊さないのも物資の節約の為か？

「とりあえず、何か食べない？フードコートに行けば、何かあるでしょう？」

ザイが飯を食わないと決まった訳では無いが探しに行くか？

「どうしますか？」

「まあ、良いだろう。空港の中に入ろう。ただし、警戒は怠るんじゃないぞ」

わかってますよ。そのくらいは。

その後は電気系統が生きていた事に驚き、何かあると銃を構えながら移動するも何も無く、フードコートに入ることができた。

「なんで？電気が？」

「その辺りも探索だな。とりあえず、食物がなくなっていたらザイか人間だな」

そんな訳でコンビニに入る。他の所は二ヶ月放置と考えると何か虫に食われてたり、卵を産め付けられてそう何でやめておく。

「二ヶ月経ってる所為か埃が……」

ホーネットが指摘した通り、埃が凄い積もってる。

「なら、少なくとも人間は居ない」

「二ヶ月だけなら保存食か冷凍は行けるだろうが、缶詰めあたりで良いか」

オメガガーシーさんの言う通り冷凍食品は調理が居るし、音が出るのでやめた方が良いだろう。

「飲み物もアルコールにソフトドリンク、ミネラルウォーター。スナック類もあるしなんとかなりそう」

「アルコールは焚き火とかの着火材になるから残すぞ。ジュースは腐りそうだから、水だな」

「じゃあ、適当に期限内のを食うか。ホットコーナーに何も無いのが救い」

「それは言えてますね」

「どこで食べるの?」

「ハンハン」

できれば四方を囲まれた場所で通路が多い場所の方が逃げやすい。

「ええ〜。普通にベンチは?」

「じゃあ、コックピット」

「遠いじゃん」

「仕方ない。フードコートで食うぞ。何も心配感じないし、というか感じなさすぎて逆に怖いわ」

本当にオメガガーシーさんの言う通りだと思う。

その後は食事を始める。めいめい好きなものから食べて行く。ジャーキー・常温の缶詰め・チョコバーと言った袋詰めの食品に手を付けていく。無茶苦茶な組み合わせだが腹は膨れていく。

ただ、静かだ。中国語と思しき広告が放送されているだけで戦火など感じさせない。生命も感じさせない。

「静かだねえ」

ホーネットがペットボトルから唇を離しながら話す。

「なかなか、良い場所じゃない? 水も電気も食料もある」

「だが、早く燃料補給をして帰るぞ。あんな事が有った訳だし、陸上

部隊の上陸は失敗していると考えて良いだろう」

俺の言葉にオメガ11さんも賛同する。

「水も電気も食品も有限だし、できるだけ早くここを出たい。敵地に長期滞在などリスクしかない」

「冗談だよ。落ち着いたら探索を再開しよう。こんな良い状態な訳だし、誰かがメンテナンスしないと維持できないはず、人か物資は見つかるはずだよ」

その言葉からしばらくして今度は別れて探索する事になった。全員が固まっついては効率が悪い事と何も無さそうというホーネットの言葉に押された。

「地下施設にも無し………本当に無いな」

そろそろ時間なので合流場所の待合室に戻る。窓から差し込む光は赤色でもう直ぐ空が闇に支配される前の最後の光の時間だった。

そんなこんなでも待合室には着いて、最後の情報交換をする。

「という訳です」

「ボクも同じかな?」

「俺もだ。夜の行動は避けよう」

オメガ11さんの発言で寢床を探す事になったのだが、ホーネットがホテルの部屋を取っているという事でそこに行く事になった。

ホーネットの誘導に従って進むと、円柱の柱に入ったエレベーターに乗ってホテルの通路に出る。

その後は405号室の鍵を開けて、ホーネットが入ってと催促する。

最初は困惑したが見張りの三交代かと納得して入室する。

「シャワーはホーネットからすませろ。俺たちは今後の予定だ」

ホーネットが渋るので、二人で無理矢理突っ込む。その後でオメガ11さんと向き合って会議を行う。

「ここまで探して何も無し。燃料が無い場合は強行離陸だな」

「心苦しいですけど、飛べるところまで飛んで、イジエクト、バタフライですね」

「ここからじゃ、台湾か日本の日本海側か………行ける!」

俺とオメガ11さんの身体能力なら行けるだろう。神様特典にオメガ11の身体能力が合って助かった。

その後は色々と話して順番にシャワーを浴びて、ホーネットを最初の見張りに立てて、寝る事になった。

「ん？………ホーネットが居ない？」

朝起きるとホーネットが居なかった。てか、あいつが最後まで見張りしたのか。真面目なのか自分を労らないのかわからん。

「ん？書き置き？」

内容は燃料を探してくるという内容だった。

「あの、野郎………あ、オメガ11さんは？」

首を回すと床で寝ていたオメガ11さんを見つけた。

「起きて下さい。朝ですよ」

「ああ………朝か………朝!?見張りは!!」

「ホーネットが最後までやりやりました」

そうかと言って納得したオメガ11さんと一緒に廊下に出る。銃位しか持ってきてきていないので忘れ物の心配は無い。

「ああ、ちようど良かった。燃料と修理部材があったから手伝って欲しいんだ」

お互いに顔を見合わせる。昨日は見つからなかった物が何故、今日になり見つかったのか。嫌な予感しかない。

「ホーネット。どこにあった？」

その言葉にパイロットらしからぬ華奢な首を傾げて、口元を歪ませて笑う。

「んー、どこ、どこね。そーいうのって意識すればどうにでもなっちゃうんだよね」

「はっ。」

「求めよ、さらば与えられん。イエス様も言っていたよね。あれは真理だ「御託はいい。どこで見つけた？」……………さつきから怖いよ」
「俺から言わせて貰えばお前が怖いよ。まるで目の前に敵がいるみたいでな。仲間ならどこで見つけた位は言えるだろう？」

俺もオメガ11さんもホルスターに入れた拳銃に手を伸ばして掴んでいる。今のホーネットは信用できなかった。

「そう。通じなさそうだね……………」

ライノがそう言うのと腰から拳銃を抜く様な動作をみて、二人が即座に行動に出た。

オメガ11とバトラの蹴りが同時にライノの華奢な体に突き刺さる様に炸裂する。

「逃げるぞ!!何がどうなったかわからんがホーネットは敵だ!」

オメガ11が叫ぶと同時に銃声が鳴ったが銃声が鳴る直前に二人が壁走りで45口径の銃弾を避け、床に戻ると同時に手短な部屋の扉に蹴りを同時に加えて扉を蹴っ飛ばして室内に侵入する。

侵入した後ライノが入ろうとした所をバトラが銃撃を入れて時間を稼ぎ、その間にオメガ11が窓を叩き割りながら飛び降り、バトラはバックステップで飛び、45口径の反動を利用して叩き割られた窓に飛び込む。

「よっしゃ!機体まで全力ダッシュだ!」

手と膝を着きながら綺麗に着地したバトラはオメガ11の言葉に領き全力でダッシュする。その速度が人間が出せる速度とは言い難いものだった。

機体が置いてあるハンガーに飛び込んだ二人は即座に愛機のキャノピーが開け放たれたままだったコックピットにジャンプで飛び込む。

慣れた動作で緊急発進の手順を行う。先に動き出したのはオメガ11のF-35だった。F-35が動き出そうとした瞬間にライノがハンガーの扉を開けるが閉められる直前だったキャノピーの隙間から二人の45口径の銃弾が撃ち込まれる。

F-35はそのまま、滑走路に向かうが、バトラはハンガーの中で

ある事をする事で即座に離陸する事を選択する。

前方に何も無い事と旅客機用のハンガーという事でハンガーの前も相当な空間が用意されている。バトラのSu-33はエンジン改造を受けていて、小型機程に無いにしろ、離陸可能距離が縮められている。バトラはこの距離ならハンガー内でエンジン始動を行えば行けると判断していた。

ライノが再度、ハンガーに入った瞬間にバトラのスホーイのエンジンから風が勢い良く吹き出される。ライノは咄嗟に屈んだ事で回避に成功する。

オメガ1も滑走路に行くまでの時間を惜しみ、誘導路で離陸した。お互いに離陸距離が短かった事と環境が整っていないくとも離陸を行えるだけの腕が有ったからこそできた事だった。

《とにかく、日本海へ逃げるぞ!》

《ラジャー》

二機は日本海へと逃げる。しかし、追手を直ぐにレーダーに捉えた。

《速い!!それに二機!一機は識別装置IFFに反応。ホーネットか》

《機体照合開始……もう一機は……マジか……Xタイプを確認。高性能機だ》

Xタイプは速度・火力・機動性全てを両立しているが何故か出現率が低い。各国の部隊がこれ一機で殲滅された事もある。尚、PMCのエース部隊はこれと交戦し圧勝している。

《Xタイプは俺が引き受ける。ホーネットを頼めるか?》

《任せて下さい》

後ろからホーネットが接近する。スホーイはこれに対して上昇を選択する。

ホーネットも加速してスホーイを追いかける。

ホーネットはミサイルの射程距離に捉えたとミサイルを発射する。

「こなくそ!!」

バトラもむぎむぎ墜とされる訳も無く、機体を捻るようにしながら同時にフレアを放出、降下して逃げる。

それを追いかけるホーネットを確認したバトラーは勝負に出る。

「3...2...1...」

スホーイがテールを斜め下に向けて失速させて、降下を始めた瞬間に推力を回復させてる。そして90度上に機首を向ける機動、コブラを行いホーネットの少し手前に機銃を向ける。

ホーネットも機首を90度上げてからロールして大きく右の位置に機体をずらし、ロールが終わると同時に機体を水平に戻す。

「

例外とアニマだけに許された10G越えの機動で避けられた。事に歯軋りするが、後ろを取れた事で結果良しとして追撃へ即座に移る。

「FOX2!」

右翼の一番端のミサイルが白煙を放出しながら蒼空へ躍り出る。

ホーネットはフレアを撒きながら上昇旋回を開始する。バトラーも視界にホーネットを捉えながら旋回する。

お互いに旋回しあう争いは唐突に終わりを告げる。

ホーネットが急に揚力を無くすように降下しながら縦に回転し、射程にスホーイを捉え機銃を発射する。

スホーイも急旋回して機銃をギリギリで回避するも、背中にべったりと張り付かれてしまう。

「チェック・シックス！FOX2」

後方へのミサイル誘導システムを作動させて後方に胴体のミサイル4発を後方に飛ばす。

ホーネットも急なミサイル攻撃に慌てる様に旋回する。

フレアを使っても無駄な距離である故にホーネットは縦横無尽に機体を動かして何とか逃げようとする。

その間にバトラーのスホーイがホーネットの後ろに喰いついた。

「FOX2!!」

左翼の翼端に担架されたミサイルを発射、さらにミサイルを増やされたホーネットはミサイルを武装放棄の要領で4発投下する。

ミサイルは接近するミサイルに反応して自爆しミサイルを撃墜す

るがバトラの追撃を振り切れる要因にはならなかったが黒煙に紛れてエアブレーキ全開で減速する事によりオーバーヘッドに成功する。

「しまったー！」

気付いた時にはホーネットからミサイルが発射された後だった。

バトラは反射的に操縦桿を押して、急降下に入る。

ミサイルは馬鹿正直にスホーイの後ろを追う。

(まだ……まだ……今だ!!)

海面ギリギリで機首を海面と水平にして急加速、海面にミサイルを突っ込ませて回避する。

その後ろをホーネットは追撃し、一瞬の内にホーネットが機銃を外す事が難しい距離にまで詰めてきていた。

ここまでか……バトラが最後の思った事は今まで共に過ごした仲間では無く……先立たれた一番機と四番機の笑顔だった。

そして、ホーネットの機銃から銃声が耳に響く………

《FOX4、オメガガーイーインジエクト!!》

事は無く、耳に響いたのはオメガガーイーの特攻と脱出の言葉だった。

「なっ!!オメガガーイーさん!!」

バトラの視界には燃え盛るライトニングIIがホーネットにかなり急な速度で突っ込む瞬間だった。

だが、オメガガーイーの決死とも言える特攻はホーネットHiMATに回避され、ライトニングIIは海へと没した。

だが、エネルギーを多く失う機動を低空で使ったホーネットは急いで加速し、速度を得ようとした瞬間に偶然に前を飛んでいたスホーイがコブラによるカウンターマニューバに入っている事に気付く。

ホーネットは機銃を発射するが致命打を与えられた手応えも無く、

後ろに回られた。

「FOX……クッソ!!」

バトラは後ろに回ると同時にミサイルを発射しようとボタンを押したがミサイルは発射されずにディスプレイにエラーの字が浮かび上がった。

その間にホーネットもカウンターマニューバで後ろに回るがバトラは迷う事なくエラーになったミサイルと他のミサイルをも海面に落とすが、ホーネットの機銃が放たれたのは同時だった。

機銃が装甲に当たる嫌な音の後で爆発音、後方では虹色のガラス細工のようになったホーネットが爆発で作り出された水柱に腹を押されたせいか、機首から海面に着けると水の抵抗を受けてバク転のように回転して、垂直尾翼・水平尾翼・腹の順で海面に突っ込み、速度と水の抵抗により自分の体をボロボロに力任せに破壊された。

《バトラー！バトラー！聞こえるか!?こちら航空管制機カノープスのバーフオードだ。聞こえていたら返事をしろ!》

ホーネット撃墜後にカノープスから通信が入った。

《ええ、聞こえます。お騒がせしました》

《まったく。3時間も行方をくらませやがって、燃料切れで日本海をバタフライしてると思ったぞ》

《ははは、オメガガーさんがこの辺りでやってると思うので回収班を呼んで下さい》

二人の会話を聞いて、誰かの息を吐く音が聞こえた頃に別の人物からの通信が入った。

《やっと、通信距離です。3時間もどうしてたんですか?てつきり、燃料切れで墜落していると思いきや、元気に十倍以上の敵とドックファイトですか?》

ファントムの皮肉げだが、何処か心配と安堵を感じさせる声が通信機から聞こえて、バトラは緊張をほぐした事で、ある事に気付く。

《は?ちよつと待て。十倍?3時間?どういうことだ》

《何を言っているのですか?ブラウラーの暴走で作戦は中止ですが戦闘は続いています。私達は那覇で他のPMCは米空母とケストレ

ルで補給を受けて、随時戦場に戻ってきてますよ》

その言葉を聞いて時計に目をやると確かに3時間しか経過して
なかった。なら、あそこで一晩過ごしたのはなんだ？

思案の海に沈みかけた所にバーフォード中佐の通信で我に帰る。

《敵航空編隊が接近中。かなりの数だ。撤退しろ》

《仲間を傷付けられて黙っていられるほど利口ではありませんよ？

私は》

フアントムのその言葉に通信機から陽気な声が聞こえた。

《その通りだぜ。バーフォード中佐！仲間がやられて帰るなんてで
きないよな？》

《また、チョッパ大尉の悪い癖です》

《まあ、今回は同意ね》

《そうだな。ブービー。命令をくれ》

視線をずらせば、日本側から五機編隊のF-14が一機がロールし
ながら位置に付き、デルタ編隊を作ったこっちに来ていた。

《そうですね。各機散開。交戦して下さい》

《アーチャー、了解》

《チョッパ、了解》

《ハートブレイクワン、了解》

《エッジ、了解》

各機が散開し敵に接近する。

《ブレイズ》《エッジ》《アーチャー》《チョッパ》《ハートブレイク
ワン》

《《エンゲージ！》》

交戦を宣言した瞬間に炎の花が咲いた。フアントムも一言言っ
てから航空機の群れに進む。その後ろを黄色いイーグルと赤いグリ
ペンも続く。

バトラも機体を向けようとした瞬間に女性の声が通信機から聞
こえてきた。

《あなたの機体に弾薬はあるの？》

この言葉に何も言えなくなるバトラ。

《あの編隊は私達に任せなさい。MOBIUS1エンゲージ》

単機でこちらに来たF-22が高速で編隊に突っ込むとたちまち炎の花が7輪も咲いた。

そして、バトラのスホーイの後ろにはA-10が二機飛んでいた。
……………

何も言わずにただ、後ろを飛ぶ二機。

《……………基地で待っている》

そう言うと二機はバンクをして戦場に飛んで行く。

《那覇基地まで飛んでくれ》

《了解》

カノープスの指示で機首を那覇基地に向ける。

だが、それは唐突に起こった。

滑走路に進入し着陸しようとして高度を下げて、上空10メートルという高さで突如、両方のエンジンから火を噴いた。

高度が低い事とエンジンが壊れる瞬間に時間差が合った事に加えて風の影響を喰らった機体は大きく右に傾き、滑走路に右翼から着陸する形になった。

機体はコンクリートと擦られて周りに不快な音と火花を散らし、機首が根本から折れてようやく止まった。

消防車と救急車が機体に張り付く。

「お、おい！大丈夫か！」

「だ……………だいじょうぶ……………機体が……………守って……………くれた……………よ」

この日、一人の男を守って、一羽の鶴が死んだ。だが、その鶴の周りの雰囲気は何処か誇らしく、そして、空に連れて行けなくなった事に悲しむ雰囲気も含んでいた。

作戦15 イヌワシの亡命

8月15日 ロシア 某所 未明

本社から敵エース級の撃墜の報酬と被撃墜されたことの保険から大金を受け取ったバトラはある機体をオークションで競り落とし、その受け取りにロシアまで飛んできていた。無論、旅客機である。

戦闘機のテストと練熟飛行も兼ねて帰りは戦闘機で帰るつもりだった。

「よう！ レオス、久しぶりだな。俺から機体を買うなんていつ振りだよ、おい！」

「ミーシャ、3年振りだな。だって、お前は軽戦闘機ばっかだもん」「悪かったな！ 利潤の高い軽戦闘機ばかりで!!」

バトラの皮肉に怒鳴り気味に返すミーシャ（本名 ミハイル）

「まあ、いいけどよ。とりあえず、武装がセットでその準備もあるからまだ、しばらく掛かる」

受け取りができるまでの4日間だけロシア観光をする事にしたバトラは3日目にゴリキー公園に来ていた。

「へえ〜。それなりに賑わっているな」

今日は平日の朝と昼の中間の時間という事で人は少ないが、やはりというべきかそれなりに人が集まっていた。

「ん〜」

目の前から来る2人組に目が奪われた。いや、性格に言うとその少女の見た目にだ。

ザクロのような赤い瞳にユリのような白い髪の毛と肌は初めて会った人物だが、初めて見る外見という訳でも無かった。

声を掛けることなくすれ違う。

すれ違って、暫くすると頭に鈍痛と共にある記憶が蘇った。

（そうか……）

初めて会った人物なのに初めて見る外見でない理由に今更ながらに気付く。

後ろを振り返るがあの2人組はもう、見えなかった。

(サーシャ……)

鈍痛が原因ではない涙を胸と目尻を抑えながら流した。

受け取りの日になり、突然、仕事の話がやってきた。

「レオス……少しいいか？」

「どうしたミーシャ」

そう聞くと視線を伏せて、言おうか言わまいか迷うミーシャに俺はしびれを切らした。

「何もなければ行くぞ」

タラップに足をつけるとミーシャが口を開いた。

「待ってくれ……お前がちゃんと説明しない作戦や仕事は命令がないとやらないことは知っている。だけど……この仕事を受けてくれないか？」

「……内容次第」

「……護衛任務だ」

そう話すミーシャに俺は溜め息を吐く。

「護衛任務なら良い、ただ何を何処まで何から護衛すれば良い」

「護衛するのは白いS u - 47を日本までだ。相手は……ロシア正規軍だ」

「……はあ!？」

亡命希望者かよ。いや、良くある事だけど。

「わかったよ。下積み時代にやったことあるから」

「ありがとう。報酬は全額キャツシユバックで良いか？」

「それで良いよ」

「書類は無い。できるだけ痕跡を残したくない」

相手が亡命者なら当然だな。

「わかった。場所は？」

「これだ」

それは飛行ルートが記された書類だった。

「ダー。行ってくる」

「よろしく、頼む」

夕方に飛び去り、俺は追い掛けている。

満月の光さえも遮る雲海の下をただひたすら。排気炎で闇夜を切り裂きながら。

雲海の上に出る。雲海に遮られていた満月の光が機体を照らし、暗闇に慣れていた目には痛い程に眩しくも太陽とは違い優しく照らす。

翼が風を切り裂く音とジェットエンジンの稼働音しか聞こえない。雲海は銀糸で編み込まれた絨毯の様にも見え、白い星々しか瞬かない空に自分以外の生命が無いのではないかと錯覚してしまう。

速度計の表示はとうの昔に音速を超えている。風で散らされる雲が月明かりを反射して雪の様に輝く。

視線のかなり先に星の光とは違う光を見つける。

戦闘機の排気炎だとすぐにわかった。数は6個。その内の先頭の1機が白く輝いている。

情報通りの機体を見つけて、安堵すると同時にさらに速度と高度を上げる。

白い機体を撃墜させてはいけない。

白い機体と2機の追撃の間をフレアとチャフを撒きながら急降下で通り過ぎる。

(特徴的な機首にあのサイズ、カナード翼は無し)

Su-35 フランカーEだな。結構な変態機動をしてくる。

雲海の中で水平飛行に移り、敵の後方に付く。

《貴様は誰だ!》

ロシア語の通信が届くが無視をして、機体を横向きにした状態で機

の間を高速で通り過ぎてSu-47の前に出て、バンクをする。

片方の1機が俺に向かってくるのを確認した俺はクルピットで相手の後ろに付く。

「撃墜できないっていうのも辛いな」

通信がオフになっているのを確認して呟く。

一応だが、30mm機関砲を載せているとはいえ、ミサイルは装填していない。あるとしたら、火器管制装置FCSの修正不足で使用できない特殊兵装が5つ。

唯一使えるのは翼下に付けたECMポッドによるジャミングくらいだろう。

FCSの調整くらいはしっかりとしてくれ。まあ、ロックオンでビビらせることはできるはずだ。

ロックオンされたフランカーEがブレイクで逃げる。深追いせずに追撃するもう片方の後ろに行こうとする。

向こうも後ろに付けられると判断するとミサイルロックオンをやめてブレイクする。

(これを日本の管轄まで続けるのか……)

集中力が持つか心配だ。

航空自衛隊小松基地ではスクランブル警報により、慌ただしく動いていた。

「まさか、北からザイが攻めてくるなんて……」

「ロシアの防衛ラインを超えられたなんて聞いていませんが……」

困惑を露わにしながらも瓜二つの少女は愛機に乗り込むと素早く準備を済ませていく。

夜の飛行場はただならぬ雰囲気アに包まれていた。

それもそうだろう。何故ならザイと思しきアンノウン所属不明機が普段の

進行ルートとは真逆の北から進行してきているのだ。

新型のザイ。瓜二つの少女……片宮 詩鞍と片宮 詩苑の2人は覚悟を決める。

新型との戦いは今までのデータが使えない。よって、頼りになるのは自分の腕のみなのだから。

視界の先で紅色のグリペンが滑走路に向かう。

《私達も行きましょう。敵だったら墜とす。それだけです》

《ええ、そうですね》

2人がA-110 サンダーボルトIIのエンジンに火を入れる。

ジェット燃料の焼ける独特な匂いを周りに振り撒き、機体が進めるだけの推力に達する。

《タワー、ALTAIR、タクシー》

《ラジャー、ALTAIR、タワー。ランウェイ24、クリアード・フォー・テイクオフ》

いつも通りのやり取りを経て、滑走路に乗る猪。

足を動かして、問題がない事を確認すると轟音との言える方向を上げながら、空へと突進する。

複雑な気流が機体を揺さぶるが問題無く、高度五千まで登る。

その高度まで行くと空を覆っていた雲の上に出るので、月明かりが空を照らしていた。

《こんな綺麗な夜空を仕事で飛ぶなんてね。遊覧飛行したいわね》

《プラネタリウムとは大違いですね》

キャノピーの上に広がる星空を見て眩く2人。

地上の光をも覆う厚い雲で遮られ、星は晴れた日の夜に見るよりも鮮明に見える。

《お二人さん。仕事が終わってからにして下さい》

冷ややかな声だが、怒っているというよりは呆れている声が通信機から、吐き出される。

その声に反応して急いでレーダーに意識を向ける。

《はあー。所属不明機ですが、先行していたF-15JはEPC Mの影響で見失ったようです。再アプローチを掛けているようです

が、私達が先に着きます》

《EPCM……やっぱりザイなのか》

不安と困惑を孕んだ慧の言葉に詩苑が答える。

《ステルス機でしょうね。でも、どうして今になって姿を現したのでしょうか?》

奇襲をするなら姿を隠したままなのが普通だが、普通から逸脱した敵の行動に理解が追いついていなかった。

《困でしょうか?》

《だとしたら、厄介ですね。アニマは那覇に1機と小松に1機です。多方向から攻められたら……》

《いた》

グリペンの通信に全員がこの話題を頭の隅に追いやる。

ザイとの戦闘は他ごとを考えながら出来る程、甘い相手ではない。

《おかしいですね? EPCMが消えています。接近中のアンノウンは普通の航空機です》

《見逃したのか?》

《そんな訳……》

《どうするのファントム?》

《とりあえず、防空識別圏から退去させて、それからEPCMの原因を探るべきかと》

《それもそうね。じゃあ、お願いするわ》

MS社所属の片宮姉妹が離れて、アンノウンの編隊側面に付く。

航空自衛隊の所属で無い2機が通告を行うのは御門違いだと考えた故だ。

目視距離に入って、2人は6機いた事に驚く。

レーダーでは5機いたはずだが、何故か目視距離には6機いたのだ。

それ以上に驚いたのは先頭を飛ぶ機体だった。他の機体に比べて明度だが段違いなのだ。

まるで自分自身が光っているように。

航空自衛隊所属のファントムとグリペンが通告を始めた瞬間に先

頭の発光している機体とレーダーに映らなかつた機体がスピードを上げ、ファントムとグリペンの近くを通り過ぎる。

ファントムは何も影響を受けなかつたが、グリペンは少し風に仰がれたのか、フラついていた。

2機のサンダーボルトは抜けた2機の追撃に回る。

抜けたアンノウン2機を追いかけて、後ろを飛ぶ、美しくも怪鳥の様なシルエットの機体も速度を上げる。

長い機首は鎌首をもたげる蛇の様なデザインで、それが圧迫感を与える。

グリペンがアンノウンの進路に立ち塞がる。

アンノウンは警告の無線が入っているに関わらず、パワーダイブで強引に抜ける。

グリペンが追撃に回ろうとした瞬間に逆落とし気味に現れたエメラルドグリーンの機体が行く手を阻む。

《フランカー、ロシア機ですか》

ファントムの声は愉しげだった。嗜虐的な響きが滲む声で告げる。

《ルックダウン能力の低さで抜かれるのは40年前の一度きりで十分です。丁度良いので汚名返上に付き合ってくださいませよ。二度目の函館はありませんよ》

言うや否や、計算から来る機動とは反対の乱暴な機動で1機の後ろについたファントムを振り切ろうと急旋回を行うフランカーにファントムは引き剥がされずにエンジンを食い千切ろうと追い掛ける。

その間に3機が抜けようとするが、挙動が遅れた1機がグリペンに取り付かれる。

それでも、残りの2機が先に進む。

《詩鞍は先に行つて、前の2機を！ 私は後ろの2機を》

そう言つて、操縦桿を動かそうとした瞬間に前を飛んでいたはずの機体が背面飛行のまま、猛スピードで近付いて来ているのに詩苑が気づき、慌てて、操縦桿を逆に引く。

背面飛行のまま通り過ぎた機体は片方のフランカーの真下に入った瞬間にアフターバーナーを行う。

腹にアフターバーナーの反動を喰らった機体が腹から打ち上げられたかの様にバランスを崩し、錐揉み回転をしながら高度を落とす。アフターバーナーをした張本人はバク転の容量で機体を回し、もう1機の方に機首を向ける。

急旋回で逃げるフランカーだが、引き剥がせないかと判断したフランカーのパイロットがカウンターマニューバを決断する。

速度が乗り始めた瞬間にコブラ機動で急制動を掛けて、アンノウンを追い抜かせ様とする。

だが、アンノウンはそのフランカーの右隣を同じく、コブラ機動で飛んでいた。

そこからさらにアンノウンは機体を操作して機体を横向きにした状態で機首を向ける。

まずいと判断したフランカーパイロットがクルピットに移行し逃げようとするが、アンノウンは螺旋を描く様にして後ろに付いてしまう。

《亡命を……希望します》

全周波数帯で高出力の通信が飛ばされる。繰り返される言葉の後に自衛隊からの通信が入る。

《あなた方の尋ね人は日本の領空に入りました。以降は我々航空自衛隊の管制下に置かれます。これ以上の追撃は侵略行為と見なしますが、その覚悟はおありですか?》

《ブリーチャー!!》

何処かのフランカーのパイロットが悪態をこぼしてすぐに全機が左右にバンクした後去って行く。

これでもう、終わりと思つた慧の耳にファントムの声が響く。

《そのデルタ翼機のアンノウんに告げます。貴方も亡命希望者ですか?》

《……………》

《聞こえていないのか、無視なのか……聞こえていたら、バンクをして下さい》

ファントムの言葉の後にバンクを行うアンノウン。

《どうしますか？ お父様》

《小松に連れて来い》

《了解しました。聞こえていましたね？ 小松までエスコートしますから、着いて来て下さい》

アンノウンがバンクで答えたのを見て、ファントムがエスコートに付く。

一路、小松基地に向かった。

眼下の小松空港は混乱に陥っている。

着陸が中断された旅客機が空港の周りを右往左往している。

無線も大混乱していて、何処もかしこも緊急事態を告げるアナウンスで満たされている。

よく見るとスクランブルしていたであろうF-15Jも飛んでいる。航続距離を考えるとそろそろ燃料切れっぽいのが、無線から給油機が飛び立ったとこのことで安心する。

滑走路に目を向けると白いS u r 47 ベルクトが着陸している。

『V V S ・ クリアー ・ トウー ・ ランド。ランウェイ24レフト』

管制塔から着陸許可を貰った俺は滑走路に着陸する為に徐々に高度を落として行く。

もうすぐ、着陸というところで機体が左右に大きくブレた。修正がギリギリの所で効き、無事に着陸できた。

そのまま基地の土地まで引つ張られるが、小銃を構えた隊員に囲まれた場所だった。

(まあ、当然か)

そう納得している俺の耳に出てくる様に色々な言語で語りかけてきている。

(言われなくても出るよ)

ヘルメットを取ってから、キャノピーを開ける。

開け切ってから立ち上がると銃を構える音と共に構えなされた。

「待って！ 待って！ MS社所属のバトラだ。通信機の不調でこ
うなってしまうただけだ」

本当はロシア軍にガン付けられたくないだけです。こう言ってお
けば仕方無いで済む。

なかなか、信じないので社員証を投げ込む。それを拾って、確認す
ると整備員がタラップを取り付ける。

「すみません。通信機が使えなくて」

「あはは。早く、離れた方がいいかと思えますよ」

「いや、あの機体のパイロットと話してくる」

そう言うのと俺は隊員の前を横切って、ベルクトの近くによる。

尾翼のハニカム模様を見て、ドーターだとわかった時は驚いたが今
はどうでも良い事として置いておく。

「おい！ その物騒な獲物を下せ！ いつまでも出てこれないぞ」

「その通りだ。お前たち下ろすんだ」

集団の中から肥満体型の男が出てくる。八代通だ。

八代通の言葉に隊員達が銃を下ろす。

「八代通、あいつの地位やなんかは保証するのか？」

「当たり前だ」

腕を組みながら話す八代通。

「わかった。俺が行くから、あんたは離れておけ」

「何故だ？」

「仕事であいつの護衛をしたんだ。俺の方が良いだろう」

そう言うのと『フン』と息を吐いてから集団の方に向かう八代通に背
を向けて機体に近づく。

「身の安全と地位は保証するそうさ。だから、出てきてくれないだ
ろうか？ それと貴官の名前を聞いておきたい」

しばらくの静寂の後に蒸気が装甲キャノピーから漏れ出す音が嫌
に響く。

「ほうっ」

キャノピーの内側から溜息が漏れた。

そして、パイロットがゆっくりと夜闇を背に立ち上がり、その真っ

白いシルエツトを浮かび上がらせる。

風が吹き、髪がその風を受け止めて膨れ上がる程に長い髪。

堀の深い顔立ちに瘦けた頬、簡単に折れてしまうのでは無いかと思う程に細い首。だが、俺が気になったのはそこではなかった。

灰色の服を着ているが、着ている人物は雪像かと思う程に彩りというものが無い。

肌も爪も髪も眉毛さえ白一色に染まっている。この世の物全てに神が色を与えらるというのであれば、それを忘れたのかと言いたい程に白い外見。目は長い睫毛の影が隠し見ることができない。

その異様極まりない風貌。禍々しくも神々しい、だが、引き込まれる様な美しさは雪の妖精という例え以外に思い付かない。

雲海の隙間から雪の妖精を夏の満月が照らす。

満月を背にゆつくりと雪の妖精がこちらを向いて、顔を上げる。

睫毛の影がなくなり、ザクロの様な綺麗な赤い色の愛らしさを含んだ大きな瞳が俺を捉えた。

(アルビノ……だと……)

アルビノのアニマは俺を感情が窺い知れない表情で見つめる。

「私は」

感情がわからない表情のまま、桃色の薄い唇が開いた。

夢幻な雰囲気を漂わせながら、純白のアニマは己の名前を告げる。

「ベルクト」

作戦16 イヌワシが来て5日後

「カノープス。空域に到着した。戦闘を開始する」

《了解だ。ANTARES02、交戦を許可する》

背面急降下でザイの5機編隊に突撃する。タイプはM型という事もあり、問題無いと判断された為に単機でのスクランブルだ。

「そら、1機いただきだー」

編隊の一番前のザイをすれ違いざまの一撃で撃墜する。

隊長機を失ったザイ達が右往左往している間にコブラ機動で機首を上は無理矢理向けて背面飛行で再突撃する。

「20mmはこれで弾切れだな」

左側二番目のザイを20mm機銃で撃墜後に右側のザイの後ろを取る。

ヨーをしながら、ミサイルを発射し、片方には30mm機銃を喰らわせてやる。

立て続けに4機も撃墜されたザイは最後の1機になってようやく、撤退の行動を起こすがミサイルに撃墜される。

「バーフォード、聞こえますか？ 全機撃墜しました。周囲に敵影はあるか？」

《こちら、バーフォード。周囲に敵影無し。今度こそ帰還してくれ》

「ラジャー。RTB」
これより帰投する

3回もの立て続けのスクランブルに増槽4個を搭載し、捨てずに交戦したおかげでなんとかなっていたが、流石に3連戦もすれば燃料は尽きるの、3戦目が終わった頃には増槽は全て、投棄され、主翼の燃料も帰還分が余裕を持ってある程度だった。

「全く、今日はザイのバーゲンセールの日か何かか？」

通信機が仕事をしていないのを確認して愚痴を漏らす。

ここ、5日間でスクランブルの数が増えている。

新しい愛機であるI^{イリュウシン}l-44 ウプイリもSu-33に搭載

していたAZJシステムとの連動調整が上手くいっていない為に出撃を止めている。一応の目処が立っている。

《バトラ、かなり後ろにザイを発見した。近くのBARBIE01は航続距離の問題で無理だ》

新手法よ。まあ、BARBIE01は軽戦闘機だから仕方無い。

《俺も、ミサイルが無いから無理だぞ》

《仕方無い。領空内での戦闘になるだろうが、アルタイル隊に応援を要請する》

それしか無いだろう。片宮姉妹は別の方面に行っているが、ここに近い。

低速のA-110である故に遅れが生じる。

(厚い皮膚より速い足だっけ?)

何処かの誰かが言った言葉を思い出す。

(爺さんに在庫があるか聞いてみるか)

中・重戦闘機が欲しいところだが、運良くあるかな?

心配事を抱きながらも片宮姉妹とバンクしながらすれ違った。

「疲れた〜」

スクランブルから帰って、小腹を満たした後にI-44の最終調整をしていた。

度重なるスクランブルでRF-4TB-AZJの方が整備が追いつかない状況により不調を訴え始めたのだ。

流石にこうなると慣れてない機体とか、そんな事を言える状況じゃ無い。

信頼性の高い片宮姉妹の方も心配になって来る。

「あいつらも、2機目を考えさせるか?」

爺さんに在庫があるか訊くにしても彼女達の意味もある。

中国上陸作戦の頃の不和は解消されたが、流石に今回も彼女達の意思の無視はまずい。

「その前にあっちな」

技本の施設に足を踏み入れた俺は係員に聞いて、八代通の居る場所を訊き、検査施設に向かっている。

騒々しいハンガーやエプロンと違い、不気味な位に静かでひんやりとした空気が包んでいる。

喧騒から切り離された入り組んだ通路を歩き、検査室まで進む。

検査室の白い扉に数回だけノックしてから入る。

室内は長机にパソコンやディスプレイ、何かの記録装置など様々な物が所狭しと並べられている。

「どうした。なんで、ここに来た」

壁の方で慧と八代通が何かを話していたのだろう。

「少し、気になってな。亡命理由を思い出せないと聞いているから。気になって仕方無い」

その返答に八代通が溜め息を吐く。

「ガチガチにプロテクトがかけられている。長期記憶はおろか、感覚記憶や短期記憶まで暗号化されている。これを作った奴はかなりの偏執狂だぞ。ちよつと異常なまでのセキュリティレベルだ」

そう言われて、八代通の視線の先に目をやる。

ガラスで仕切られた向こう側で人間ドックで使用される器具に似た機械に肌と髪の毛の白い少女が寝かされている。

色素の乏しい身体に目の赤い色だけが彼女に色彩を与えている。

「少し、良いか」

彼女を見ていると八代通に手招きされる。

それに答えて、部屋の隅に移動する。

「丁度良いから、お前にも訊くが、5日前の事を教えてくれ」

5日前……つまり、目の前で検査を受けている少女、ベルクトの亡命事件の事か。

俺はベルクトに視線を向ける。

色彩の乏しい彼女の皮膚だが、目の赤い色が宝石のように美しく輝

かせる要因となり一種の美しさを生んでいる。

「そうか、バトラの方はどうだ？」

「え？ あ、ああ……そうだな……」

どうやら長い間、見つめていたらしい。急いで思い出さなければ。

「そういえば……」

護衛中にロシア機の通信が聞こえていた。

「ロシア機の通信に少し、気になる事が」

「どんなだ？ できるだけ詳しく」

そう言われて、通信だけで無く、状況も思い出し。

「最初は2機の追撃でしたけど、途中からフランカーが2機も応援に来たんですよ。その時の通信に『早く撃墜しろ！ 他国に渡すな！

さもなければ、我々の祖国が世界の敵になるぞ！』と言っていました」

「他は？」

「後は『何故、逃す！ あいつは対ザイ戦の切り札だぞ！』とも」

「世界の敵？ アニマとドーターは対ザイ戦の切り札だ。だが、どうしてそこに世界の敵という言葉が来る？」

「わかりませんよ」

『結局は収穫無しか』と腕を組んで壁に寄り掛かる八代通。

その姿に情報の無さからの苛立ちを感じられる。

「ちよつと、休憩するか。おい、ベルクトをこつちに戻せ」

スタッフが彼女から検査機材を外して行く。全てが外された後に上体を起こした。

「何か思い出したら連絡をくれ」

「了解した」

そう答えた瞬間に脇の扉が開き、スタッフが先導されて、普段着に着替えたベルクトが出てきた。

「ッ!？」

ドクリと鼓動が跳ね上がった。

まじかで見るとやはり似ていた。公園で合ったあの2人組と自分が初めて持ったウイングマンに……

長い睫毛の下で輝くのは赤い宝石のような輝きを放つ瞳とそれを引

き立たせる白い肌と髪。ワンピースから伸びる手足は戦闘機の高Gに耐えられずに折れてしまうのではと心配になる程に細い。そんな手足も指先まで白い。

(やっぱり、似ている……)

手足はもう少ししつかりしていたと思うので似ていないが、それ以外の外見は瓜二つなのだ。

その外見がトリガーとなって思い出す。

MS社の軍人には数少ない未成年の兵士。それも少女で初めての年下の友人であり、僚機であり、部下だった少女を思い出してしまう。記憶の奥底にしまった筈の楽しく、輝かしく、残酷な記憶を……思い出させる。

「バトラ。彼女を2格に案内してくれないか？ 現場にはあらかじめ、連絡しておく」

八代通の言葉で我に帰る。

「えっと……2格ですか？ ええ、構いません。用事もあるのでですが、なんで俺なんですか？」

「慧君はこの後、スクランブル待機だ。今は交代寸前だがな」
そう言えばそうだった。

「そうか。なら、ついでにやりますよ」

2格は片宮姉妹のA-10とSu-33のスクラップが近くにある。使えるパーツの剥ぎ取りが終わってないから行こうと思つていた所だ。

「ロシア美少女とのデートに洒落込め」

ロシア美少女って……否定できる要素が無いよな。

八代通とスタッフが仕事を始めたので邪魔だろうという事で足早に去る事にした。

「第2格納庫だったな。ここからだ……こつちだ」

「はい、お願いします」

「似ているな……」

「はい？」

「気にするな」

廊下に硬い足音が響く。彼女と俺の間には静寂だけが包む。何を話すべきかすらわからない。

後ろに目をやれば、赤い双眸がこちらを射抜く。

「？」

小首を傾げる仕草さえも彼女を思い出させる。

俺は何も無いかの様に前を向きなおる。だが、動悸は激しいままで、勘付かれ無い様にしながら呼吸を整えて、意識しない様する……事は出来なかった。

「ん？ サイレン……スクランブルか……最近が多い」

屋外に出るとスクランブル警報が鳴っていた。

滑走路を山吹き色のF-15Jが滑走して飛び上がって行く。今回のインターセプターはイーグルの様だ。青い瞳は不機嫌を隠す事無く表して、金髪は怒りを示す様に揺らしながら機体に乗ら込むイーグルが容易に想像できた。

何せ、交代数分前のスクランブルなのだから、イーグルの性格を考えると間違つては無さそうだ。

「いつもは少ないんですか？」

ベルクトが顔を向けて聞いてくる。

「2日か3日に1回か2回位だが、ここ最近は毎日1回はあるし多い時は3回位ある。今日はこれで3回目だ」

夜に1回か2回はあるかもなど言いながら、2格への道に乗る。

ベルクトが小走りで俺の後ろを歩く。そんな仕草さえも彼女と瓜二つだった。

(どうして、思い出す……あれは仕方の無い事だった……俺の力不足の所為だ)

思い出すのはウイングマンが撃墜された瞬間、それを意識しない為に話を切り出す事にした。

「ロシアはスクランブルはこの位ありそうだな。連中の勢力圏のすぐ近くだろう？」

その言葉にベルクトの表情が曇った。

(しまった。なんて、デリカシーに欠ける事を……)

彼女に記憶は無いのだから行こうと答えられるわけが無いのだ。

「すまん。記憶が無いんだったな」

「それもありますけど、私には多分ですが、実戦経験が無いんです。ザイと戦った事はおろか遭遇した事ありません。ドクター側の情報を探ってもそれらしいものは見つかってませんでしたから、おそろくは」

「そう……」

何も言わない。亡命するという事はそれなりの事があるからだ。不用意に突っ込むべき所では無いだろう。

「変……ですよね」

その言葉に俺が振り向くと彼女は俺から距離が離れていた。おそらくだが、立ち止まっていたのだろう。

「アニメなのに戦った事も無ければ、過去の記憶も無い。亡命を希望しておいてその理由も説明が出来ないなんて……私があなた方の立場なら怒り出すと思います」

「記憶喪失……と言うよりは思い出せないんじゃないのか？ それか、思い出させないだけか」

記憶が消えて無くなるものじゃ無い。ただ、思い出せずに頭の奥底で眠るだけ。彼女はそれが全ての記憶だったという訳だ。

「何かの拍子に思い出すさ。何か有って自分が記憶を封印してるだけかもしれないしな」

それは俺だろう。だが、自分で記憶を封印したものは何かの拍子で簡単に解けるものだ。

「ただ、命令が……ありました」

「どんな」

「逃げろって。全てを捨てて何処までも飛び続けろって」

ベルクトが眉を寄せて、苦しそうに唇を開けている。心のドアを無理矢理こじ開けようとしている様に。

「無理するな。無理矢理は止めておけ。時間はたんまりとあるんだ。ゆっくり、機会に任せよう」

慌てて止める。そして、この空気をどうにかしようと思っ

す事にする。

「しっかし、大変な仕事だったんぜ？ FCSが不完全で完全マニュアル照準で、ロシア軍にガン付けられたく無いから撃墜や損害を出さずにSu-35と空戦するんだから」

そう言うのとベルクトが不可解な物を聞いたという様な表情になる。

「追いかけていたフランカーはSu-27ですよ？」

マジかよ……ロシア軍所属の奴が言うんだから間違い無いのだろう。故に言える言葉はただ、一つ。

「フランカーファミリーは分かりにくいのが多過ぎるんじゃない……！！」

小松基地に俺の叫び声が響き渡り、小松市内で買い出していたバーフォードからお小言を貰ったのは完全な蛇足だろう。

俺が叫んで直ぐに第2格納庫に到着した。

ついた頃には困惑の空気が流れつつも、作業を再開しようとする整備員の姿があった。

「作業中にすまない。八代通さんから連絡が来てると思うが、ベルクトのドーターを見せてくれ」

その言葉を聞いた班長が目を見開いた。

「おいおい、相変わらずの圧縮言語だな。本人が来るなんて聞いてないぜ」

あの野郎……相変わらずの圧縮言語か……

「あの……」

ベルクトが身体を強張らせて、こちらを伺っていた。

機体に触れていいのかわからない様子だった。

班長が遠慮せずに見ろと言うと安堵を露わにして一礼、機体に小走りで駆け寄る。

細く美しい指先がインテークの側面を撫でて、なまじり 眦を緩める。白く

長い髪が風に撫でられて浮き上がり、陽光を浴びた髪が幻想的とも言える白い光でキラキラと輝く。

その光景は巨竜に寄り添う北国の姫を思わせる。

「整備はできると思うけど、戦闘は可能ですか？」

実戦経験が無いとはいええ、アニメとドーター。世界情勢的に遊ばせておく余裕は無い。

特に今日の様なスクランブルが多いとなれば話は別だ。

「飛ばすはできるが、武装が無い」

「武装ならある」

俺の言葉に班長が目を見つめる。

「ウプイリの武装用に半分残して、半分を寄付しても良い。元々、Su-33はロシア機だし、ミサイルも機銃弾も東側規格の物を持ち込んでる筈だ。それに、中国の機体もこつちに逃げ込んでるじゃ無いんですか？」

「中国は東側の機体を運用しているし、Su-33はロシア機……調整無し、あるいは簡単な調整でいけるな……Su-33からハードポイントとかを貰っても良いか？」

元々は次の愛機の改修用に残したスクラップだが、ウプイリ自体が改造品だった事もあって、対サイ用の武装を載せるのが精一杯だった事もあって、特に断る理由は無い。

「構わない。使えるパーツは全部使ってくれ」

「ありがとう。だが、羽振りが良いな。金をせびると思っていたが」「危機的な状況だろ？ 戦力が増えるのが、何よりの利益になる」

この言葉に心の中で、本当にそうか？ と聞き返してくる自分がいた。だが、それに気付く事無く、班長が去って行く。

「班長！ 3格のメンテ、1機こちらで引き受けれますか？ あつちももう手一杯みたいで」

いや、無理だろ。ベルクトにサンダーボルトに自衛隊機……完全にキャパオーバーしてるぞ。

案の定、班長も無理と言っているがそんな場所に核弾頭が落ちる。

「私、手伝いましょうか？」

「あーあーあー……ベルクト……手伝うって、何を？」

「整備をです」

さも簡単に言うベルクトに遠慮の無い視線を浴びせる。

汚れの無い白い肌は美しいと言えるが、ベルクトの手伝える整備は力仕事だけという事を考えた時にその腕はとても頼りなく見えてしまうものだ。

「いや、あのな……お前じゃ無理だろ」

俺がそう言うのと整備員が同意し出す。

「あんたは自衛隊の機体じゃ無いしお客さんの様なものだし、ゆっくり休みな。もういいだろう。作業に戻らせてくれ。あとがつかえているんだ」

片手を上げた瞬間に工具の音が鳴り、喧騒が蘇る。それでも、ベルクトは所在が無さそうに佇み、彼らの背中を諦められない様子で眺めている。

そんなベルクトに俺は頭を搔いてから口を開く。

「班長！ スクラップからのパーツ取りだけど、こつちで勝手にやって良いか？」

「あ？ ああ、やっといてくれんだったら有難い」

Su-47を戦闘に参加させるかどうかは上次第だが、戦闘可能にしておいて損は無い。武装は有っても、それを付けるパーツが無ければ載せられない。

Su-33のスクラップ解体でパーツを仕入れるのは彼らの仕事らしいから、彼らの仕事を盗む感じになったが、仕事を仕入れた。後は簡単だ。

「ベルクト、手伝ってくれ」

何かしでかしそうなベルクトを俺が拘束すれば良い。取り敢えず、雑用でもさせておけばなんとかなるだろう。

「はいー」

仕事が貰えて嬉しそうに笑うベルクト。

(そこも似ているな……)

こいつが来てから、いつも頭にANTARES04の事が蘇る。

(サーシャじゃない……わかってるけど……思い出しちゃうな)
まるで、今まで思い出そうともしない俺を咎める様になんとも無い動作すらも思い出されていく。

(目の前の仕事に集中しよう)
スクラップまで、歩を進めた。

「やっと、終わった……」

予想はしていた。

「この天気で遮る物無しですからね」

そうなのだ。Su-33のスクラップはシートを被せて、遮る物が一切無い中で安置されている。

そんな上々で真夏の昼間に工具片手に解体作業である。

熱中症に成らなかつただけ奇跡だろう。現在はスポーツドリンクを片手に洗い場の隅で飲んでいる。時折吹く風が心地良い。

「むう」

短くうねるベルクトに反応して視線を向ける。

拳を肩に寄せて覗き込む様な姿勢を取っている。上手く洗えない事が気に入らないのか細い眉を寄せている。

(こんなところまで似てるな)

気に入らない事が起きた時のスネ方まで似ていると少し微笑ましく思いながら、彼女の状態を確認する。

黒く汚れた手足を靴とソックスを脱いで洗っている姿は凄く涼しげだが、肝心の汚れが落ちていない。

仕方無い事だが、こういつた機械汚れは研磨剤入りの洗剤じゃないと中々落ちない。

ハンガー脇にあるここの洗い場では洗剤すら存在していない。

「風呂だなこりゃ」

取り敢えず、ここの設備じゃ無理だと判断して水飛沫を頬に感じながら答える。

「それなりにすつきりしましたし、服はどのみちクリーニングですから」

貸した作業着を指差しながら喋る。

「髪とかまだ汚れ付いてるぞ」

「え？ ああ、本当ですね」

そう言うのとホースから水を直接かける。

(躊躇無しかよ)

深窓の令嬢という外見からは予想出来ない北国の森育ちという行動を見せる。

(あいつもその辺りアグレッシブだったな……)

女性オペレーターとの2人が結構、その辺りなんかやってた覚えがあつた気がする。

彼女が首を振って水滴を払い、蛇口を捻る。

「久しぶりに動けてよかったです。じつとしているとなんだか身体がなまってしまつて」

「それは良かった。それなら整備の時は声を掛けようか？ 基本的に専門的な整備以外は自分でやってるしな俺たちは」

その言葉にベルクトが首を傾げた。

「え？ 自衛隊の人じゃ無いんですか？」

「服が違うだろう。俺はMS社所属の民間軍事会社の社員だ。仕事でここ、小松基地に滞在している」

ベルクトがそう言われれば、服が違うと呟きながら納得する。

「えつと……バトラさんでしたっけ？」

「ああ、アンタレス02 TACネームバトラだ。本名は訳ありだな」

本名に事はよく言われるので、深くは詮索するなと言っておく。

「空では守っていたいただいてありがとうございます。おかげで無事に日本に辿り着きました」

「仕事だ。気にするな」

そう言うが、ベルクトは頭を下げる。

「まあ、受け取っておくよ。取り敢えず、戻ろう。そろそろ、検査の

時間じゃ無いか？」

「それもそうですね」

ベルクトが油まみれで帰ってきた事に八代通から取り調べを受けてから、アニマ達の事を考える。

(本当に同じ奴がいないな)

グリペンは物静かだが、唐突に何かを言い出す。ファントムは現実主義だがお茶目なところもある。イーグルは自信満々な性格と戦闘機の出自に似てるところもあるがそうじゃ無いところもある。

ベルクトも試験機というところで物静かな雰囲気だが、航空ショーで一躍有名になった。

その外見から結構な数のゲームや性能からPMCで金を持っているやつは乗り回している。

だが、おそらくベルクトのドーターは試験機だ。PMC向けに生産された物じゃ無い。

実は試作機とPMC向け量産機だと大きな違いがある。

PMC向けはS-32の主翼がSu-47になっていて居るだけのS-32なのだ。一部の部隊は三次元偏向ノズルのエンジンに置き換えている。

だが、ベルクトのドーターには板を載せていた痕跡が無いのだ。

どんなに上手く加工したとしても、あるものが無くなった時に無駄は生じる。その無駄が無い。まるで最初から無かった様に。

この事からあれは試作機の真正銘のSu-47だ。

(まあ、関係無いが)

量産型だろうと試作型だろうと俺には然程の問題も無い。

夕方に慧と交代して夜のスクランブル待機でハンガーの中に駐機されているウプイリのコックピット内で電子小説の投稿サイトを見ている。

「お！ 新作だ。読も読も」

【野良犬の咆哮】の新作が投稿されていたからタップした瞬間に携帯端末が圏外になる。

「あれ？ おかしくね？」

日本で圏外など滅多に起こる物じゃ無い。

「何が起きている……」

携帯端末をしまつて、格納庫の屋根を見る。その瞬間にスクランブル警報がなる。

この事を意識の外に追い出して、俺は仕事に赴いた。

作戦17 試験・訓練って大抵の場合は実戦試験になるよね

「急に圏外になる……ですか？」

「そうなんだよ。昨日いきなりな」

「聞いた事がありませんね」

小松基地の食堂で飯を食べながら昨日のいきなり圏外案件について、片宮姉妹に聞いてみる事にした。

「ですが、携帯のアンテナ基地がやられたなんて聞いてませんよ？」

「だからおかしいんだよ」

「それって、お化け電波の事じゃないか？」

突然の声に振り向くと慧が軽食を手に席の真ん前にいた。

「まあ、座れよ」

席に進めると慧が一言言ってから座る。

「で？ お化け電波って何だよ」

「さあ？ 俺も詳しくは知らないけど、都市伝説であの世からの通信とか、そうなってる間はお化けが出るとかどうとか？」

「はあー、よく聞くパターンだな」

そう言った事が好きな奴がMS社に居るから、ごくたまにそいつからこう言った話が仕入れられるが、テンプレとも言えるくらいに使い古された内容だった。

「あの世からの通信……お父様とお話ししたいですね……」

「あら？ 詩鞍も？」

そういえば、2人は父親をエジプトで亡くして、ネバダ砂漠で拾ったんだっけ？

2人の言葉に慧も何かを思い出す様な顔を作る。

このメンバーは俺もだが、大切な存在を亡くしているんだな。

まあ、今はそれ程に悲観するような段階は抜けたとはいえ、気持ちのいいものじゃない。

「しかし……あの世からね……仲間とは繋がりたいが、殺してきた

敵とは繋がりがたくないね」

向こうもそれが分かつてるとはいえ、中には金目当ての傭兵も居ただろう。動き的に未熟な奴も居たし、そういう奴から恨まれてそう
だ。

「バトラもそうなのか？」

意外という顔で訊いて来る慧にある意味で俺が驚いた。

「いや、民間軍事会社に入っていれば、仲間と死に別れるなんて日常茶飯事だぞ？ 俺も親しい奴、そうじゃ無い奴含めて数えきれないほど死に別れてる」

「やっぱり、会って話したいものか？」

その言葉に俺が水を一杯含んでから話す出し事にする。

「そりゃな……自分が不甲斐なければ生きていたかも知れない上官に生かしてやりたいと思つた部下、俺が着いていれば死ななかつたかも知れない上官が……俺をどう思っているのかは聞いてみたいよな」
そう話した瞬間に周りの空気が重く暗い物になる。

「まあ、そんな事ができる訳じゃ無いし、死者の想いなんて言葉は生者の押し付けに過ぎない訳だしね。それに思い出して悲しみにくれる段階はとうに過ぎてるから」

そう言つて瞬間にベルクトとサーシャの顔が思い浮かんだ。

ああ、確かに悲しんだが、今は普通になっている。これはベルクトからの共感覚に過ぎない。

何かしらの感情からなんてあり得ない。

「まあ、いいだろう。飯食つたら今日も1日の仕事を頑張つていこうか!!」

「今日は貴様は休みですよ!!」

聞き慣れた声でそう言われた瞬間に目の前が真っ黒になり、目に凄まじい激痛……

「イダダツダダダダツダ!! 目が! 目があーあー!!」

椅子から素振り落ちて、床を転げまわる。

誰かはわからんがこいつ! 生姜を顔にぶつけやがった!!

「お前の飛行時間を計算したら、会社の規定をオーバーしていた。

よって、お前は今日一日は休暇だ！」

バーフォードか!! こいつ、生姜を顔に叩きつければどうなるか知ってるはずだろうに！」

「何してくれんだよ！」

「それは飛行時間と生姜、どっちだ？」

「生姜に決まってるだろ！ アホンダラ!!」

とりあえず、この後に顔を洗ったが、痛みが引いたのはそれから30分後だった。

「バーフォードの野郎……何も生姜を叩きつけなくても……」

山葵ならいいのかと言われても、俺は首を横に振り回す。

そもそもの話で、刺激の強い物質を目に入れば凄まじい激痛に襲われるのだから恨みごと勘弁願いたい。

「予期せぬ休暇だし、RF—4TB—AZJの方も整備するか」

ここ最近のスクランブルで整備がちゃんとできなかつた方だし、仕方ないが、こう言う日に簡易点検で済ませている整備をちゃんとしておいてやりたい。

「おお！ バトラ、今日は待機だったけ？」

「いや、突然の休暇だ。だからRF—4TB—AZJの方をな」

「成る程、ああ、昼飯は12時前に行くと言わいぞ」

何が？ と訊く前に作業に戻ってしまった班長に訊きに行くのも失礼だし、面倒だからやめた。

(12時ね……)

面白いものが見れるなら大歓迎だ。昼飯は1時位を予定していたが、1時間早めるのも一興だろう。

作業終了後の11時半に食堂に赴く事にした。

自販機が並ぶエリアを抜けて、食堂の中に入る。

「あ、いらっしやいませ」

白い髪に白い肌、赤い瞳が目立つ少女、グリペンが白い調理着とエプロンを着て、労働に従事していた。

「……なあにこれえ〜？」

まあ、わかる。ウエイトレスのようなものだと言うのはわかる。わからないのはこれを勧めた奴の考えと脳細胞の出来だ。

ベルクトの様な美少女が給仕をしたら、士気も上がるだろう。だが、ベルクトって機密だった様な覚えがあるんだが、良いのか？

「なあ。なんで、ベルクトがウエイトレスみたいな事をしてるんだよ」

「うお!!」

慧がすぐ後ろに居た。視界を少し、下に向ければグリペンも一緒に居た。

「とりあえず、席に座ろうか。こんなところで突っ立てるのもなんだしな」

「席は窓際にどうぞ。食券は後で回収に行きますから」

とりあえず、窓際の席に三人で座る。

「Aセット3つですね。追加の注文はありますか？」

「注文は無いが、質問が。何故にここで労働してるんだ？」

ベルクトが肩をすぼめて語りだす。

「昨日の夜に八代通さんに整備の仕事を手伝いたいとお願いしたんですけど……」

そこで言葉を区切るか……オチが見えてきた。

「班長が偶然、居合わせていたみたいで、危なっかしいからやめてくれと言われて」

だと、思ったよ。

「で？ 給仕と……八代通だな」

これは確定ですわ。こんな事を言い出すのは八代通かマイケル軍

曹のどちらか、そして、ベルクトの状況説明だとそんな事を言い出せるタイミングにいたのは八代通のみ。

溜め息を吐くと視界を多く捉えらる様になって、あるものに気づく事ができた。

「あれはなんだ？」

Yシャツ姿の自衛官に一般人と思しき人たち。基地じゃ見慣れない組み合わせだ。

「広報課がやってるPR活動。民間の人を受け入れて、基地の仕事を紹介する。午前の部が11時から11時半でその後に体験喫食」
ははん。八代通はイベントとして、ベルクトに給仕をさせる。

民間には思い出の1ページとなり、ベルクトは欲求を満たせる。そして、このイベントに合わせるために12時前の指定。

なんて事はない事情だ。だが、1つだけ言いたいの。

(小松空港の方で一悶着あったらしいじゃねーか！ それを忘れたんじゃねーだろうな！ 八代通!!)

叫びかけたところをなんとか抑える。

ベルクトは配膳台の前に戻っていてたが、その背中が酷く頼りなく見えた俺は自然と立ち上がり、背後から話しかけていた。

「なんか、無理矢理に動いてないか？ 戦闘機パイロットとして、戦闘機があるのに戦えないなんて事がどれだけのものかわかるけど、戦えないのはお前の責任じゃないだろう？」

その言葉にベルクトが振り向き、儂げな微笑を見せる。

「バトラさんは優しいですね。でも、少し違うんです」

「違う？ それは一体……」

「最初は戦えなくて焦っているんだと思っていました。ですが、武器は有っても、それを積める状態じゃないと聞かされた時にああ、じゃあ仕方ないと飛べなくても、戦えないと思って同時にほっとしてしまたんです」

「……」

「私、ザイと戦うのが怖いんです」

「それは「いえ、わかります」……」

俺の言葉を遮って、話し出すベルクトの表情は自嘲と嫌悪感で暗くなっている様に思えた。

「心のそこに本能的な恐怖があるんです。アニマなのに、兵器なのに戦闘を嫌がっている。敵を怖がっている。最低だと思っっているでしょう？ 1人でじつとしてしていると自己嫌悪で窒息してしまいそうになるんです。だから、遮二無二動いているんです。もどかしさや責任感なんて上等なものじゃありません」

「……ベルクト……それは正常だと思う。俺だって昔は怖かったさ。でもな、今は恐怖を感じる事なんて殆ど無い。危機的状況を何度もぐり抜けてきたからな。だけど、それは……」

続けようとした所で通路から声が聞こえてきた。
時間的に考えるとイーグルとファントムの訓練が終わってしばらくした位だ。

となるとイーグルとファントムの2人だ。
どうやらファントムに負けたイーグルが食堂に行こうとするがファントムも同時に食堂に向かいイーグルがご機嫌斜めになっている。

そして、ファントムがイーグルの敗北でもう一度抉ってイーグルがキレるといついつも通りの光景だった。

「ファントム。イーグルをそんなに苛めるな面倒くさい事になるんだから」

そう言うとファントムが息を吐いて口を開いた。

「それもそうですね。本当に嫌われてしまったら悲しいですからね。今買われた食券の代金をお支払いしましょう。おいくらですか？」

その言葉にイーグルが信じられないという様な目になる。俺もそんな感じの目になっている。

謝罪だけならまだしもまさか、奢ると来たんだ。

「380円」

「わかりました。では……と、ああすみません。5000円札しかありませんから、お釣りを貰えますか？」

ん？ 札は5枚見えるが全部、5000円札なのか？

「えっと……4620円だね」

両手で計算してお金を取り出しイーグル。良かった4桁の数字の計算ができたか。

ファントムが小銭の620円を財布に入れて、何かに気付いた。

「1000円札がありました。ええっと……細かいのがちよつと増えてしまったので両替して貰えませんか？ 無理なら良いんですが」

「……別に良いよ。その位、ご馳走して貰うんだし」

「5000円札と1000円札、それに貴方が持っている4000円で10000円札に交換して貰えますか」

「えーっと……5+1+4だから、10だから……はい、10000円」

ファントムがお金を受け取って、微笑む。

「これで、採算は完了。仲直りです」

「待ちやがれ！」

こいつの神経に脱帽だ。まさか、高級傭兵の俺の前で金関係の不正を行うんだ。

ここがMS社だが、ここでこれを見逃したらMS社の高級傭兵として名が廢る。

「イーグル。財布にいくら入ってた？」

「15000円だよ？……あれえ？ なんで10000円しか入ってないよ。お昼ご飯奢って貰ったのに、どうして？」

うん。予想通りだ。

「最初の4620円はファントムの出した5000円に対してのお釣りだから、それを含めて10000円の両替をしちや駄目なんだよ。ファントムが10000円を出した時はもう620円を受け取った後だったから、その10000円は受け取るだけで済ませるのが正解だ」

「……イーグル、また騙された!？」

イーグルの頭でも、理解できたか。

「ファントムもなんで、こんな事をしたんだよ」

「学習しないイーグルが悪いんです。貴方が居なければ、笑い話が1つ増えたんですけどね。4桁の計算もできないポンコツ演算機現るって」

「ムツキー!!」

掴みかかろうとするイーグルを抑えてる。

食事するところで取っ組み合いの喧嘩は不味い。

そんな空間にベルクトが入って来る。

「あなたは……例の亡命機ですね。なんですか？ 見ず知らずのアニマでも不正を見過ごせないというところですか。ご立派な正義感ですが少々立場をわきまえられてはいかががでしょう。半端な理解で仲裁に入るのは危険な行為ですよ」

横目で確認すると後ろを向いたフアントムでフアントムの表情がわからないが、ベルクトが一步前に進んだ。

ベルクトが入った事に意識を割いてしまった俺の拘束を抜けようとさらにバタつくイーグルを押さえつける攻防を展開し直す。

「お金がないなら私が出しますから!」

……。

食堂中が無言の空気に包まれる。

「ご、50000円くらい差し上げますから。そんな事で自分を汚さないで下さい。どれだけ貧しくても心だけは豊かに保っているべきなんです!」

「ま、貧しい!? 私が?」

「いくら必要なんですか? 100000円ですか? 200000円ですか? なんだったら、私から八代通さんに頼んでも」

笑いのダムが決壊した様に笑ってしまう。

フアントムはほんのおふぎけのつもりだったが、ベルクトはなまじ本気の対応の所為で酷く喜劇的な光景になっていた。

「バトラさん……笑い過ぎです」

「すまん……プクク……耐えられない……フハハハハ」

ベルクトはキョトンとした表情で何がおかしいのか気付いていない。そんなところもサーシャに似ている。

失った時が戻ってきた様で嬉しくも、楽しい。だが、同時にベルクトはサーシャでは無いとわかってるのでそれが哀しくも、寂しい。「まあまあ、おふざけも過ぎると一番惨めになるのは自分だとわかっただろ?」

笑いながら話すとファントムが鼻をを鳴らす。

「言っつて下さいい!」

イーグルに押し付ける様に5000円札を渡す。

「それよりも、食事はいいんですか?」

グーと腹の音が鳴った。男だから、恥ずかしくは無いが女性に聞かれると少し来るものがある。

「全く、ご一緒しませんか?」

それは良いなと言おうと思った瞬間にサイレンが鳴った。

ガイドの自衛隊員が見学の民間人に落ち着いてと声を上げる。

「全く、レディーとのランチ位はゆっくり、楽しくしたいだな」

「あら、口が上手いですね。ですけど、何処に行こうとしてるんですか?」

「ハンガーだろ?」

「バーフォード中佐から言われていますが、貴方が飛ぼうとした時は殴つてでも止めろと言われてますので。休暇なのでしよう? それも会社の取り決めで休まなければならぬ。違いますか?」

畜生。バーフォード中佐め! 外堀を埋めてやがった!

ファントムが携帯端末をしまつて、イーグルに向き合う。

「ベクター270と330で二個編隊確認されている様です。接続水域上で叩き落とします。一緒に出ますよ!」

「言われなくても!」

鼻息荒くイーグルが駆け出す。俺にファントムが柔らかい笑みを浮かべて向き直る。

「明日は私たちが休ませて貰いますから、今日はゆっくりと英気を養つて下さい。疲労困憊で空に上がって撃墜されても困りますからね。では、ご機嫌よう」

コルセットスカートの裾を揺らせて去って行く。

そんな中でもベルクトは下唇を噛み、白く細い指がエプロンを掴む。

俺はどう声を掛けたら良いか分からなかった。ザイや戦闘機を落とす方を知っていても、悩みの落とし方は知らないのだ。

「わかりました。グリペン」

「わかった」

慧が食堂を出て行った。スクランブルの追加か。最近は多い。

そう思った瞬間に端末が震えた。

《すまない。自衛隊からの仕事だ。飛べる人間がお前しかない》
バーフォードからの連絡だった。

「すまない……謝る必要は無いな」

こいつ……休みを問答無用で奪っておいてそれは無いだろう。いや、飛びたかったけども。

「自衛隊がSu-47の改修が完了した。試験飛行の護衛とエスコートをお前に依頼した。動けるのがお前しかない」

Su-47に様々な部品が追加されている様には見えない。前進翼機はその構造上、主翼に武装が載せづらい。恐らく、胴体の格納式につけたのか。

「バトラのスホーイのパーツをあちこちに使った。ロシア製だし、同じスホーイ製だからバランスの問題は無いだろう」

戦力になるなら早急にしたいという事か。

「俺は構わないが、ベルクトはどうなんだ？」

飛ぶか飛ばないかは個人の意思だ。強要はできない。

「やれ……ます」

硬い表情でしかし、決意した者の目で宣告する。

「じゃあ、飛ぼう。気負うなよ。リラックスして行こう」

場所は日本海上空。

白く巨大な常識では考えられない形状の飛行機が青く巨大な常識的な形状の飛行機の後ろを追いかける様に飛んでいる。

〈〈こちらはMS社所属のカノープスだ。ALTAIRO1、BARBIE05。調子はどうだ?〉〉

〈〈こちらはALTAIRO1だ。本気の調子は良好。いつでも、どうぞ〉〉

〈〈BARBIE05です。機体に異常は確認できません〉〉

〈〈了解しました。今回のBARBIE05のオペレートを担当するマイケル・アリーナです。今回の試験は武装搭載状態での飛行試験と武装展開状態での飛行試験、並びに武装使用時の試験です〉〉

〈〈ALTAIRO1担当オペレーターのグレアムです。今回の試験の方法の説明をさせていただきます。飛行試験はバトラを追い掛けるだけですが、武装使用試験はこちらが操作する。UAVを撃ち落とすだけなので簡単ですよ〉〉

〈〈それよりも高く積み重ねた皿を運ぶ方がよっぽど難しいですよ〉〉

〈〈マイケル軍曹〉〉

〈〈はい。なんでしょう?〉〉

〈〈ここは敵の勢力圏近くだ。無駄話は程々に早く済ませよう〉〉

〈〈バトラの意見も正論だ。早い所、初めてしまおう。バトラは高度5000まで上昇〉〉

〈〈ヴォルコ〉〉

バーフォードの言葉を受けて、バトラの機体上昇する。

〈〈続いて、BARBIE05も上昇して下さい〉〉

〈〈りよ、了解です〉〉

ベルクトの機体もマイケルの言葉通りにバトラの後を追う様に上昇する。

〈〈異常は無いか?〉〉

〈〈大丈夫です。機体も私も特には〉〉

〈〈貴機の機体にはSu-47の以外の機体のパーツが組み込まれている。通常機やAZJ機なら問題無いだろうがドーター機はそうはいかないらしい。ほんの些細な事でもあつたら、隠さずに報告してくれ。バトラは高度3000まで急降下。ベルクトも後を追って急降下だ〉〉

バトラの機体を追って、ベルクトも急降下する。高度3000で、バトラがベルクトを2番機の位置に来る様に機体位置を調整する。

〈〈ベルクト。調子はどうだ？ 慣れないGに気分に変化はあるか？〉〉

〈〈ありがとうございます、バトラさん。大丈夫です〉〉

〈〈機体にも問題無いな。それでは武装展開状態で同様の軌道を行ってくれ。それが終わったら、機動試験だ〉〉

武装をウエポンベイから取り出した状態で上昇と降下を行い、武装をしまった状態で左右の旋回にプリントSにシャンドル、ハイジーヨーヨーを行う。

武装を出した状態でも同様の機動を行う。

〈〈試験を武装使用試験へ移行する。前方を飛ぶUAVをミサイルで撃墜するんだ〉〉

〈〈了解です〉〉

前方を飛ぶUAVに接近して、ロックオンする。

〈〈FOX2〉〉

Su-47の腹からミサイルが白い尾を引きながら飛んでいく。

そして、UAVにミサイルが命中する。

〈〈ナイススキル。次です〉〉

次のUAVが現れる。

〈〈今回のUAVは機動力が強化されている。QAAMを使い〉〉

〈〈わかりました〉〉

〈〈BARBIE05が兵装切り替え〉〉

胴体のウエポンベイからQAAMが出てくる。

〈〈BARBIE05、目標をロック〉〉

〈〈FOX2〉〉

Q A A Mが発射されて、U A Vを撃墜した。

〈〈3機のU A Vを出現させたが、撃墜するのは真ん中の機体だ〉〉

〈〈了解しました〉〉

3機のU A Vの真ん中のみをロックオンして、撃墜した。

それ程、動くのでは無いので簡単に終わった。

〈〈よし、必要なデータは手に入ったそれでは帰投する〉〉

〈〈バーフォード！ 左だ！〉〉

〈〈どうした。A L T A I R O 1……これは……9時の方向より未確認機の接近を確認した〉〉
〈〈バーフォード中佐！ これを!!〉〉
なんとだ
と……〉〉

バーフォードの息を飲んだ音が通信機から届いた。

〈〈E P C Mを確認した。ザイだ。自衛隊との契約に従いこれを撃墜する。A L T A I R O 1はこれを迎撃せよ〉〉

〈〈ヴィルコ〉〉

バトラが轉身して、正面からかち合う軌道を飛ぶ。

〈〈あの、私はどうすれば……〉〉

〈〈貴機はまだ、飛行訓練を行っていない。飛べるだけの新兵だ。自衛用にマスターアームをオンにして小松に帰投せよ〉〉

〈〈A L T A I R O 1がエンゲージと同時に1機を撃墜！ 続いて、2機を撃墜！ 凄い〉〉

マイケルの言葉にベルクトはバトラの消えた方向を見つめながら、恐怖と悔しさに唇を噛む事しかできなかった。

時は少々、遡る。

〈〈F O X 2〉〉

前方から迫る機体は5機。

1対5なら多い様に思えるがM型ザイならば、バトラが苦戦するよ
うな相手では無い。

〈インガンレンジ、ファイア〉

20mmの機銃掃射2秒をした直後にヨーをして、30mmの掃射を1秒加えて2機を撃墜する。

〈ナイスキル〉

グレアムの言葉に内心でガツツポーズをしつつ、残りの1機にロックオンしてミサイルを発射し撃墜するも、ザイは一直線にカノープスとベルクトの方に向かう。

「なんだこいつは……俺は眼中になしか？」

最後の1機をミサイルで撃墜した。

その直後に接近警告が鳴り響き、急降下を行う。

バトラの上空を1機のザイが飛んで行った。

「レーダーに反応せずにセンサーに反応!? ステルスか!? それにあの速度! すぐに追いつくぞー!」

〈どうしたバトラ。機体の高度が著しく下がったぞ〉

〈バーフォード! 新型だ! ステルス搭載の直線番長だ!〉

告げた瞬間には増槽を投棄して、アフターバーナー全開で追撃に入った。

〈へなんだと! クツソ! こちらのレーダーにも映らないのか!〉

〈BARBIE05は周辺の警戒を厳にしてください! あなたの目だけが頼りです!〉

マイケルが注意を勧告した瞬間にはザイは射程にベルクトを収めていた。

(クソ! 速すぎて、ロックオンできない!)

バトラの電子機器は自機の速さにロックオンが乱れていた。

〈BARBIE05! ブレイク!〉

ベルクトが慌てた様に旋回するも、ザイは機銃を発射した後だった。

ベルクトが目を閉じたまま操縦桿を倒すが、間に合わないというのはベルクト本人がわかっていた。

だが、一向に衝撃の痛みも来なかった為に目を開けると青い色の戦

闘機が黒煙を吐きながら、目の前を横切っていた。

〈バトラさん！〉

ベルクトが叫ぶが通信機からは応答が来なかった。

そして、ベルクトとバトラの上をミサイルに追いつけながら通りすぎるザイが2機の横で爆弾した。

バトラがベルクトの盾になる直前にミサイルを投下し、ミサイルの追尾機能を使って追尾させていたのが命中したのだ。

〈……ザイ……ト……か〉

途切れと雑音が混ざる通信がベルクトに届いた。だが、ベルクトはそれがバトラのものだとすぐに感付いて、通信機に声を送る。

〈私は無事です。でも……バトラさんが……〉

〈ザイ……ザイ……た……こ……み……くがザイ……お釈迦〉

〈送信機能に障害ありだな。その損傷では右翼が完全に動かないが他に問題は無いな〉

〈ザイ……ザイ……ザイ……〉

雑音しか聞こえなくなった通信機。

〈まあ、主翼はもげていないから問題無いだろう〉

その後はフラつく機体を制御して、無事に小松に降り着いたが暫くの間はF-4での飛行は不可能なレベルの損傷だった。

作戦18 イヌワシとサソリのデート

「そうか……分かった。すまないな……構わない。こっちのわがままだからな。何かあればまた、連絡する」

通信を切つて、溜め息を吐く。

今回の連絡は機体の購入なのだが、どうにも条件の合う機体が無かった。

出した条件は3つ。

- 1 重・中戦闘機である事。小型戦闘機は小回りが利きすぎて扱いづらい。
- 2 それなりの大型武装を載せられる事。いつかは火力が必要になる瞬間があるのでその為の条件。
- 3 直ぐに日本に持ち込める事。直ぐに必要な為にできるだけ必要な期間を少なくしたい。

この3つが条件だった。

爺さんのところでは全てがダメだった。

在庫が軽戦闘機しか無いという事だった。近年の対ザイ戦では少数で挑む事になる為に機動性へ搭載力、速度性へ航続力が求められ、中・重戦闘機が軒並み売り切れらしい。

「困ったな……」

「何がですか？ お兄様」

「うおう!! 驚かせるな」

背後から詩鞍に話しかけて驚いてしまった。

「いや、そろそろお前達も予備機がいるんじゃないか？ A-110

が不調気味だろ？」

その言葉に詩鞍が苦虫を噛み潰した様な顔になる。

信頼性の高いA-110でも、度重なるスクランブルに整備が行き届いて居らず、出撃不可という訳では無いが、性能低下の不具合があった。いい加減に大規模な整備をしたいが1日や2日で終わる整備では無い。それを考えると予備機が欲しい。

「ですが、お兄様に準備をさせるわけにも……」

詩鞍もそれがわかっているからこそ、詩苑と共に色々な戦闘機の特性を聞きに来た事もあった。

「軽戦闘機なら爺さんの所にあるらしいけど……乗れるのか？」

「う……どうしましょう……」

詩苑と詩鞍の2人は軽戦闘機は小回りが利きやすいらしく、機体がダンシングする。

その為にA-10が空戦で使われるのだが……

「要撃機体に乗れない事もないんだよな？」

「はい。JA37と訓練だけですがF-16には乗れます」

「うーん。自衛隊と組むなら軽戦闘機でも良いが……旋回性能が高すぎるか……」

「そうですが、詩苑も私もF-16が限界です」

「F-16は在庫無し。タイガーとシャークしかないのか……」

爺さんの在庫って本当に予想でみんな。

「まあ、俺からも探してみよう。あの人の所から買い付けるかもだけれど……」

「何か言いましたか？」

「いや、何も」

聞かれても困らんが改めて言う程でも無い。

「今日はお休みですか？」

「予定はな。本当かどうかはザイに聞いてくれ」

「会社の方針を曲げるわけにもいきませんしね。今日は羽を伸ばして下さい。私たちが何とかしますので」

「じゃあ、お願いしようかな。あ！」

「どうかしましたか？」

「定期的なAZJシステムのデータ渡して無かった」

アニマの調整にかなり使えるらしいから定期的に売ってくれと言われていたんだった。

「私達のはもう渡しましたが珍しいですね」

「ここ最近のスクランブルで忘れてたよ。USBに移してはあるから渡すだけ何だがな。行ってくるわ」

「行つてらっしゃいませ」
詩鞍に見送られながら、執務棟にダッシュで向かう事にした。

暗い廊下を渡り、検査室に赴く途中でベルクトと会った。

「検査か？ 記憶の方はどうだ」

「はい。ですが何も……」

「そうか。まあ、慌てる事はなからうさ」

「ありがとうございます。バトラさんはどうして、ここに？」

「データの受け渡し」

USBをプラグと揺らしながら見せる。

この光景を何度か見ているベルクトはそれだけで納得したのか頷くだけで答える。

それを見届けて、俺は検査室の扉を開ける。

「データの受け渡しに来たんだが、担当の人はいるかな？」

「あ、受け取っておきます。それとベルクトの検査ですが今日は中止です。八代通さんが急な出張で行えません」

白衣を来た研究員が申し訳無さそうにベルクトに頭を下げて、ベルクトがそれにぎこちない笑顔で気にしないで下さいと返す。

ベルクトもここまでの謝罪が来るとは思っていない様子だった。

「ベルクト。これからどうするつもりだ？ 今日の予定が全部パーだろ？」

「そうですね。どうしましょう……」

考え込むベルクトを見て研究員が口を開いた。

「でしたら、お二人で外出なんてどうですか？ ベルクト1人だけでしたら問題ですがバトラさんと一緒なら問題無いと思います。八代通さんからも構わないと言われてますし」

俺としても、別に構わない。最初から外に行くつもりだったし少し街巡りをベルクトとする程度だ。

八代通も外出での刺激が何かしらの効果が有るかもしれないと考

えたからだろう。

ベルクトの話題も今は沈静化しているし問題は無いだろう。

「どうする？　行くか？」

「えっと……バトラさんがよろしければ……」

「良いも何も、俺から誘ってるんだ。良いに決まってるだろう」
その言葉にベルクトが頷き返した。

「それじゃあ、送ります。あ、外出届は出しておいってください」

外出届を提出する時に基地を中心に半径5キロ圏内からでないことを条件に言い渡された俺たちは駅前の駐車場にトライクを止めた。

「さてと……行きたい所は？」

振り返れば車から降りたばかりのベルクトが目映る。

服装は京香軍曹がコーディネートした濃紺のマリンワンピースに
つば広の麦わら帽子を被っている。

あと、この格好を見て何も言わずに『よし、行くか』と言った瞬間
にマイケル軍曹とサラ軍曹から飛び蹴りを喰らった。

俺が何をしたっていうんだよ。

「えっと……そうですね……」

眩しそうに目を瞬かせている。

ロシアではそれほど、強い陽射しに当たったことが無いのだろう。

「じゃあ、ショッピングモールに行くか？」

地元に詳しい訳でも無いから無難な選択だと思う。それにアス
ファルトからの反射熱でベルクトの首筋や頬に大粒の汗が出来てい
る。

一部の人間は汗だらけの女性を見て興奮する奴もいるが、ベルクト
の場合は放って置いたら熱中症になりかねない。

陽射しと熱を遮るならショッピングモールだろう。俺の用事があ
とでも構わない。というか夕方ぐらいの方が良いだろう。

「そうですね。流石に外を歩きまわれる天候が無いでしょうし

……」

首筋の汗を鬱陶しそうに拭いながら答えるベルクトに少し大きな目の手提げカバンからハンドタオルを取り出して渡す。

「あ、ありがとうございます」

遠慮がちに受け取って、首筋の汗を拭う。何故かその行為に来るものがあるのはベルクトが美少女と言える外見で、さらに普通の女性なら隠す脇さえも隠さずに大胆に動かしている開放感からだろうか？

……って、暑さで脳がやられているな。私用の帽子を今日の内に買っておくか？

今回の予定の組み立てる俺にベルクトの声が届いた。

「あ、あの、そろそろ行きませんか？」

「あ、うん。そうだな」

自然と2人して、早歩きになりつつもショッピングモールに入る。

「少し涼しくなりましたね」

「この広い空間だから冷房は効いてないかもしれないけれど、陽射しと放射熱、熱風が無くなったから体感温度が下がっただけだろうな」

それでも、少し表情が和らいでいるから良かった。

時計を見れば、11時30分。早めの昼食なら丁度良い時間だろう。

「さてと、これからどうするかだな。早いけど昼食か、買い物でこの辺りをぶらつくか。どっちが良い？ ベルクトに合わせるぞ」

「えっと……先にバトラさんの予定からしませんか？ 私は特にこれと言った予定がありませんし」

「と、言ってもな……」

夕方の方が都合が良い場所だし、昼飯もそれほど腹が減ってる訳でも無い。

買い物からやるか。

「じゃあ、帽子が見たいんだ」

という訳で帽子屋に移動するが場所が判らずに地図と数分間の暇めっことを展開したのには目を瞑っておこう。

「うーん」

正直に言うとう帽子なんて遮ればそれで良いのだが、ファッションにも気を使えと女性陣から言われているのだが、自分には良く分からない。

そんな自分だから店員さんも困ってしまっている。

「あの……これなんてどうでしょう?」

そう言つて、ベルクトが黒い生地にワンポイントで金色の刺繍が入ったシンプルな形状の帽子を差し出してきた。

「どこにあつたのこれ?」

「あそこの棚の奥です」

あ、それは分からないわ。

「すみません。これ下さい」

「え、それで良いんですか?」

「俺も何が良いか分からなかったし、ベルクトが似合うと思ったならそれで構わないさ。困ったらあの2人に支援要請を出せば良い」

その言葉に苦笑いを浮かべる店員とベルクトを放つて、レジ係にお金を支払つて店の外に出た。

「時間は12時30分か……昼食でも行く?」

「そうですね。少し、お腹が空きました」

フードコートへ移動するもこの時間は人で賑わっている事を失念してはどうしようかと思つたが、ハンバーガー店が空いているという事でそこでお互いに好きな物を買つて、食べながら今後の予定を話す。

とりあえず、夕方まではここでめぼしい店を冷やかして、休憩にジュースバーに入り、色々なスムージーに目移りしながら注文して、シエアもした。

シエアは若干だが恥ずかしかつた。周りの目が微笑ましいのと凄いい恨みの籠つた目に囲まれた。

あと、緑色と桃色の髪の毛のペアを見つけたが、声をかける事も無いので気付いていない振りをした。

そしてまた、冷やかして、夕方になってある喫茶店による。

基地から4・7キロ離れた小さな喫茶店だが、雰囲気は良い。

中には客は一人もいないがマスター曰く、お前と同じような客と朝と昼で儲かっているらしい。夜はバーになるらしいが未成年の俺が来るのは数年先だ。

「ベルクト。恐らくだが、長い事戦うならこのマスターにはお世話になると思うからそのつもりでな」

ベルクトの返答を待たずして、扉を開けて中に入る。

そして、L字のカウンター席の奥側の端に座る。

「よく来たな。今回は何が欲しい？ 隣の少女は新しい部下か？」

「友軍かな？ だが、彼女じゃない。この紙に書いた条件で揃えられる機体は有るか？」

「……良いものが有る。これがスペックと画像だ」

そう言われて、ある紙をカウンターの下から渡される。

……成る程、不採用機か……パーツは……簡単に手に入る物が多い。

「これは貰っても？」

「構わない。それじゃあ、注文はお決まりかな？」

このやりとりについていけないベルクトが首を傾げている。

「何か飲んで行くか？」

「えっと……じゃあ、これを……」

「俺はカフェモカ」

2人でまったりお茶をするつもりがマスターの口車に乗せられてここで早めの夕食を取った。

「ああ、また来てくれ。それと、連絡は早めにな。売り切れちゃうかもな」

その言葉を効いて俺たちは店を出る。

「付き合わせて悪かったな。何処か行きたい所はあるか？ ほとんどが俺の予定だっただろう」

そう言うとベルクトが申し訳なきような顔をするが、すぐに何かを思いついたような顔をした。

「あの……海に行きたいです。良いでしょうか？」

「海か？ 良いぞ。掴まってる」

川沿いに移動して、海へと降りた。

空は赤い光が消えかけて、もうすぐ夜の闇が海の空を支配しようとしていた。

トライクから降りたベルクトが砂浜に歩を進める。

その後を追って、砂浜に降りる。

「夕陽を見るには遅かったな」

海へと沈み切る直前の太陽を見ながら呟く。

その言葉にベルクトが肩越しに振り返って、微笑みを浮かべる。

「いえ、星が見たくて我が儘を言いました」

「星か……」

海の方ではなくて、真上を見れば明るい星から瞬いていた。

もう少し待てば、街灯の無いこの辺りなら満天の星空を見れる筈だ。

星空を見るなんていつ振りだろうか？

気付けば、ベルクトも流木に腰掛けて星を見上げていた。

俺もベルクトの方に近寄り、間を開けて座り、もう一度星空を見上げる。

ゆったりとした時間が流れる。

お互いに喋りもせず空が星々に埋まっていく瞬間を見ていく。

海へと視線をずらせば、空の闇と海の闇が混じり合い何処か海で空なのか分からなくなっていた。

だが、波の音と浜辺近くでできる白波は変わらずにこの場に存在している。

波の音を耳で味わい、白波か飾る海と混じった星空を俺は静かに眺めていた。

「ベルクトって日本語でどう言う意味かご存知ですか？」

不意にベルクトからそんな言葉が紡ぎ出された。

視線を向ければ星空を背景に潮風に煽られる白い髪を気にすることなく、赤い瞳を向けるベルクトが映る。

それが儂い印象と同時にそれ以上の美しさを醸し出していた。

「イヌワシ……そうだろ？」

「よく、ご存知ですね。では、ロシアにある古いイヌワシの民話はご存知ですか？」

「え？」

その反応にグリペンが可愛らしく微笑む。心なしか皮膚が白く輝いている。

そして、ベルクトが語り出した。

出世を夢見て鷹匠の鷹として働いた鷹が故郷の仲間を狩り、悲嘆にくれたイヌワシは鷹匠の元を離れて、故郷に戻るがそこに仲間の姿は無く、残りの生涯を家族の捜索に当てたイヌワシがやがて衰弱するが神から光の翼を与えられたイヌワシは罪は業から解放されて空を駆け上がり、やがて星となり地上を照らす。

そんな話だった。

「……」

何も言えなかった。自分がこの話で何か言える人間では無いと思っただからだ。

「憧れませんか？ どれだけ過ちを犯しても最終的には許される。空を上り続けていけば、みんなを照らし出す光になれるだって。素敵な話だと思います」

そう話す目の前の少女がすうっと消えてしまいそうに思えた。輪郭が消えて、夜空に溶け込み、存在が朧になっていく。

「バ、バトラさん!？」

気が付いたら、彼女に抱きついていて。細い肩が一瞬だけ震えた。声にも聞き慣れた焦りが混じった声だった。

「あ、あの「すまない……」……バトラさん……?」

何をやっているんだろうな自分は……いきなり、肌を触るを超えて抱きつく。全身で無いにしろ、抱きつかれて驚かない、不安に襲われない訳が無い。

だが、何処か放っておくと消えてしまいそうなその姿と雰囲気にくうしないと後悔が残る……取り返しがつかなくなる……そう感じてしまった。

「あのさ……お前が来てくれた事に俺は感謝してるんだよ。忘れて

いたもの……いや、封印していた物を思い出した。覚えておかなきゃいけないものなのに無かった事にしようとしていた。お前が来てくれがおかげで気付いたことだけど……だから……何処にも行くな。居場所が無いと思うなら、俺が居場所を作る。居場所になることだつてしてやるだから……何処にも行くなよ」

「ありがとうございます。そう言ってもらえると救われます。ただ……」

「ただ？」

「そろそろ、離れてもらおうと」

「すまん！　すぐに離れる！」

何かに弾け飛ばされた様に離れる。

彼女の頬が赤く染まっている事に罪悪感を感じて、仕方無い。

「嫌だっただろ？　悪かった」

「いえ……」

「いい時間だし、帰るか……」

「……はい」

トライクに跨って基地に帰る途中の信号でベルクトが話しかける。

「終わってしまいましたね。本当の本当に今日と言う1日が」

「また、外出届を出せばいいさ。その時はまた、何処か連れて行つてやる」

「許可、貰えるでしょうか？」

不安そうな声で呟くベルクトに俺が口を開いた。

「じゃあ、いつかさ……空で星でも見ないか？　俺のRF-4TB

—AZJでも良いし、ベルクトのSu-47とランデブーしても良い。空を飛びながら星を見て、今日みたいに色々話すのも良いだろう」

「素敵ですね。本当、怖いくらいに幸せな未来」

そう話すベルクトの腕を昼間よりも強く感じているのは気の所為にして、小松基地へと帰った。

帰ったら、ベルクトと2人つきり出掛けた事を知った片宮姉妹から黒笑という30mmの掃射を喰らったが土産の甘い物と機体のスベック表で許して貰えた。

後ろで縛られてぐったりしているマイケル軍曹は絶対に許さない。

作戦19 スラツシュ

〈〈よし。訓練終了〉〉

〈〈ありがとうございます……もう1度良いですか？〉〉

〈〈駄目だ。俺は良いが5回連続もやってるし、自衛隊員の訓練も考えないといけない〉〉

〈〈わかりました〉〉

外出が終わってから、ベルクトの訓練に付き合う様に八代通から言われた俺はシミュレーターを使って、ベルクトと訓練していた。

あの飛行試験の後も時間が合えば訓練をお願いする様になった。

理由が、『早く、皆さんの役になれる様になりたい』だそうだがもうひとつの理由に恐怖心に勝つための様な気がするのだ。

横を歩くベルクトの口から言葉が紡がれる。

「私は強くなっているでしょうか……」

「飛ばすのはやっとなんだったのを今はミサイラーの様な動きだが、ミサイルを後ろから撃てる程度の働きは出来ている。大丈夫だ。ベルクトは強くなっている。自信を持って」

取り敢えずはベトナム戦争時のMiG戦闘機みたいな事はできる様になったが、ドックファイトは難しいかな？

ドックファイトの訓練もしているが、何処か恐怖心で萎縮している感じだ。

ベルクトを横目で見ながらこれからの訓練をどうするか迷っていると胸ポケットにしまっている携帯端末から振動を感じた。

「ん？ はい、もしもし……了解です。ベルクトも？ わかりました」

「あの？ 私もですか？」

「ああ、モニタールームに集合だ」

モニタールームに独飛のメンバーにMS社のメンバーが集まった。周りをオペレーターや技術スタッフが走り回っている。フアントムと慧の質問をまとめて考えると。

朝鮮半島から新型のザイが接近中で護衛もなく、低速で高高度を飛行するだけで進路と被った都市に直接攻撃の被害なしと、スクランブルソフトを無視してまで呼ぶ相手では無いと思うのだが。

「これの何処がこのメンバーを集める理由になる？」
攻撃能力の無いザイなら普通の戦闘機で迎撃できるはずだ。

「これを見ろ」

モニターに件のザイが映される。

形状は3本の灯台が付いたシャンドリアと言った感じだった。

灯台に当たる部分がローターの様に回転しているから、あれが揚力と推力を得ているのだろう。

ヘリコプターの様なタイプだ。

「見ての通り、制空型でも爆撃型でもない。成層圏付近を漂うだけの物理的には至極無害な存在だ。護衛機もないし爆弾・誘導兵器の発射能力も無い」

「何の問題がある？」

「そうですね。バトラさんの言う通り、こちらからちよつかいをかかけなければ無害なら放っておいても問題無いでしょう」

フアントムの言葉に八代通が鼻で笑った。

「物理的にはな。こいつは通常の数十倍レベルのEPCMを巻き散らしている」

その説明の後でバーフォード中佐が説明を入れる。

「EPCMの被害範囲に入った都市では軒並み通信設備や電子機器がブラックアウトした。出力的にも電磁パルス兵器と言った方が良さだろう。韓国の政治や経済の主要都市は外れているが、それ以外の都市の被害は現在調査中だ」

それを聞いて、頭を抱える。

「感覚障害が発生していたら、事故なんかで甚大な被害が発生するだろうな」

「お兄様の言う通りなら小松への侵攻は絶対に止めなければなりません」

「詩鞍の言う通りです。小松で感覚障害が起これば、どうなるかわかりません」

MS社の実働航空隊メンバーが反応するが、直ぐ動くには情報ももう少し欲しい。

具体的には、敵の性能だ。

「中佐。韓国空軍の動きはどうですか？」

「勿論、迎撃を行ったがEPCMの影響と小型戦闘機で航続距離の問題で発見に至らない。発見しても撃墜には至っていない」

「護衛も誘導兵器も無いんですね？ どうして、迎撃できないんですか？」

フアントムの言葉に八代通が答える。

「これを見て貰えばわかるはずだ」

そう言って、1個の動画を再生する。

韓国のF-5Eがザイに接近して、ミサイルをリリースするが目に見えない何かに弾頭部を切断され、あるミサイルは安定翼を失って見当違いの所に飛んで行く。

こんな物は見た事が無い。

「レーザーCIWS……」

「え？」

慧がフアントムの方を向いた。

それにフアントムが口角を歪めた。

「半導体レーザーを使った近接防御兵器です。威力・射程は大した事はありませんが、ミサイルを撃ち落とす位なら十分な装備です」

「それに加えて、EPCMの状況下……アニメとドーターのミサイルじゃなきや無理だな」

俺の言葉に片宮姉妹と慧が不思議と言いたげな顔をした。

「ハア………。いいか？ EPCMの中で動けるのはドーターとAZJ戦闘機だけだ。で、今回の相手は3基のレーザーCIWSを装備しているんだ。対EPCM防御を施したミサイルを4発以上を全

く同時に撃ち込む必要がある。これはAZJ戦闘機では無理だ」

「バトラさんの言う通り、同時発射はアニマでのデータリンクがなければ難しいでしょう」

フアントムの言葉に俺とカノープスメンバーが頷く。

「じゃあ、私達が集まった理由はなんですか？」

詩苑の言葉にバーフォード中佐が一步前に出た。

「今回はMS社航空隊は敵の新型に対しての目視警戒を増やす為の物だ。ベルクトの試験飛行にてステルス機能を持った新型が確認されたのは知っていると思う」

その言葉に全員が頷くが、ベルクトだけは手が震えていた。

「今回も出現が予想される。レーダーが効かない相手である事と攻撃の瞬間に現れた場合は撃墜される可能性が高い。その防止の為に護衛について貰う」

「了解です」

立ち上がって、敬礼を送って直ぐに慧が手を挙げた。

「ベルクトは戦えるんですか？」

「慧。今回はアニマとドーターが4組必要になる。ベルクトがミサイルを撃つ事が限界の新兵だろうと出してもらわなければ困る。作戦を練り直すには時間が無い」

「バイパーゼロは？」

その質問に八代通が答える。

「既にスクランブル済みだ。台湾沖で別のザイと交戦している」

「大丈夫です。私で良ければ是非参加させて下さい」

拳を握り締め、目を見据えて話すベルクト。
体が少し震えている。

「ベルクト」

慧が心配そうに話しかける。

「ご心配なく、バトラさんから訓練は着けて貰っているの」

「お前……」

慧の掠れ声が八代通とバーフォード中佐の手を打った音にかき消された。

「独飛、全力出撃だ。10分以内にハンガーに集合しろ」
「アルマイル隊、全力出撃。10分以内で出撃準備を終えろ」
「あの不細工なシャンデリアを海に叩き落としてやれ！」
変な所で息が合うんだな。うちの指揮官と八代通って……

4機の戦闘機がダイヤモンド編隊を組み、その編隊の少し後ろで3機の戦闘機がデルタ編隊で後を追うように蒼空を進む。

「こちら、カノープスのバーフォードだ。アルマイル隊全機、聞こえるか？」

2つの編隊の遙か後方の上空を飛ぶ空中管制機「カノープス」からの通信が入った。

「こちら、ALTAIR01。聞こえます」

「ALTAIR03、感度良好です」

「ALTAIR04も同じくです」

「よし。今回の任務はステルス機の警戒及び撃墜だ。ステルス機
の特性上長距離ミサイルは恐らくだが、ロック不可能だ。その為、赤
外線ミサイルを使用する近距離対空戦及び近接格闘戦が主となる。
ALTAIR03と04には厳しい戦いになると思う」

「わかりました」

「了解してます」

「ステルス機が相手の為にこちらの電子的な支援は期待しないで
くれ」

「了解です」

バトラの通信を最後に通信機からの通信が止まる。
バトラは秘匿回線をベルクトに繋げた。

「ベルクト。大丈夫か？」

「バトラさん……大丈夫です」

これを聞いたバトラが息を1回吐く。

〈〈声が平時の時とは違うぞ。怖いんだろ?〉〉

〈〈…:はい。こんな作戦の重要な場所に自分が居て、良いのかと思っ…:〉〉

恐らく、フアントム辺りからベルクトのミサイルを当てると言われたのだからと辺りを着けるバトラ。

〈〈気負うなよ。やる事は敵の射程外から同時にミサイルを撃つだけだ。アニマとドーターはデータリンクなんていう簡単な方法があるんだ。ミサイルを撃つて、当てて帰るだけ。シミュレーター訓練より簡単な内容だ〉〉

〈〈…:ありがとうございます。少し震えて肩の荷が降りました〉〉
安心したのか声が元に戻るベルクトにバトラはホッと息を吐く。

〈〈じゃあな。作戦終了後に話そう〉〉

〈〈はい〉〉

MS社のAZJ戦闘機が先に上昇する。

その後を追うように独飛のドーターが上昇する。

7機の機体の中で1番の上昇能力があるバトラの10044

ウプイリが上空警戒をいち早く行う。

「んっ。」

バトラが同じ位の高度を動くゴマの様な物を見つける。

〈〈バーフォード中佐。俺から3時の方向にレーダー反応はあるか?〉〉

〈〈なに? …:ないな…:T-50やF-22、35が飛んでるとは思えん…:接近してくれ〉〉

〈〈了解…:その必要が無くなった。向こうから来た。ザイのステルスタイプ! 数は5!〉〉

〈〈詩鞍! 援護!〉〉

〈〈詩苑! 救援!〉〉

サラと京香の指示で詩鞍と詩苑が同じ高度まで上昇する。

2機のA-110が到着した頃には10044とザイのステルスタイプは交戦距離に入っており、空戦を始めようとしていた。

〈〈バトラ、エンゲージ!〉〉

交戦直前に少しだけ上昇した事で速度を落としたが、高度を稼いバトトラが左旋回を開始する。

ザイは一直線に動いた事で5機編隊の右端の機体がバトトラの右斜め前方を横切る形となってしまふ。

〈ヘイン ガン レンジ ファイア〉

機首の横に格納された2艇の30m機関砲の餌食となった。

30m機関砲の弾はザイの右翼を切り裂き、ザイは揚力を失った方向に回転しながら高度を落としていく。

バトトラは撃墜を確認した瞬間に左旋回の角度を推力偏向ノズルを使い急になると右から2番目の機体の後ろに張り付こうとする。

ザイもバトトラの存在に気付いて、回避機動を取ろうとするがタイミング遅く、完全に後ろに張り付かれてしまふ。

ザイもただではやられまいと小刻みに機体を揺らしながら、上下左右と不規則な動きで照準から逃れようとする。

バトトラも機体を巧みに動かして照準に捉えようとする。

バトトラが照準にザイを収めた瞬間にザイが翼を海と垂直になる様に動かして、同じ様な格好になった別のザイとすれ違ふ。

「!? ……」

最初は驚いたバトトラだが、空戦の中を長い間、バトトラを生きさせた腕が無意識に動く。

機体がヨーで機体の向きを少し変えた同時に機関砲のトリガーを押し込み、機関砲が発射される。

30m機関砲をまともに受けたザイが尾翼が胴体の末端ごともぎ取られて、残った物は海の方角に見えない坂の様な物で滑る様に落ちていく。

「次は！」

首を振り回すバトトラが直ぐに取り逃がした敵機が後ろに回り込もうとする姿を見つける。

バトトラも即座に背中を見せ合う様な旋回で後ろに回り込ませ無様に残った2機が後ろに回り込もうとする。

多勢に無勢だが、10-44とザイの間を機関砲弾の曳光弾が遮

る。

〈お待たせしました〉

〈後ろの貰いますね〉

片宮姉妹が到着した事で3対3のフェアの関係になった。

〈遅い!〉

〈A-110なんですから、そんなこと言ってあげないでください〉
グレアムがバトラの愚痴に丁寧に答える。

その間もバトラとザイが巴戦の前哨戦である背後の取り合いを展開し続ける。

ザイが急な減速で均衡がザイに傾き、その瞬間にザイが人間には不可能な機動でバトラの背後についた。

「ツク」

バトラが振り切ろうと機体を上昇させる。

ザイもバトラを追いかけて上昇する。

だが、高度1万5千mを超えた時にザイが失速した。

比較的小型のザイだった為に大型戦闘機の10-44の高高度性能についていけずに失速したのだろう。

「貰った」

エンジンの推力と全てのエアブレーキを利用、垂直上昇からハンマーヘッドで横転し、ザイに機首を向けた。

バトラの視界の先では失った揚力を復活出来ずに背中を見せて、ゆっくりと落ちていくザイが映る。

〈ヘイン ガンレンジ……ファイア!〉

30mm機関砲がたった、1秒の射撃でザイは機体のほぼ全てがもぎ取られた様な損傷を残して、重力の鎖に引っ張られる様に海へと落ちていった。

〈ALTAIR01、敵機撃墜。流石です〉

グレアムが敵機の撃墜を賞賛するとバーフォードの通信が入る。

〈ALTAIR01、仕事ができた。今から説明する……〉

時間は遡り、ALTAIRの2機がバトラの敵機を請け負った所である。

ザイが急旋回で逃げようとするが、低速旋回で距離を放されても後ろに付き続けるA-110。

もう1機の方も急旋回をするが同じ方法で後ろに付かれている。

黒いA-110に追いかけられたザイがパワーダイブで速度を乗せて逃げ切ろうとする。

白いA-110に追われたザイは速度と推力の差で逃げ切ろうと上昇して、逃げようとする。

〈〈詩鞍〉〉

〈〈詩苑〉〉

この掛け声で何をするのか理解した2人のA-110が1秒に満たない機銃攻撃を開始した。

それを回避しようと舵を切ったザイ同士が衝突しかけるが、ザイはお互いに無茶な機動をする事で衝突を回避した。

だが、高度と速度を同時に逃がしてしまったザイを2機のA-110が逃すことはなく、アヴェンジャーガトリングの十字砲火を1秒喰らったザイが2機同時にバラバラにされる。

〈〈ALTAIR03、撃墜しました〉〉

〈〈ALTAIR04、撃墜しました〉〉

撃墜を確認した直後に通信を入れて、編隊飛行に移る。

〈〈ALTAIR01は高度1万1千を航行中です。貴方は高度を8千から9千まで上昇して周辺警戒を〉〉

〈〈ALTAIR04、貴女もよ〉〉

京香とサラの言葉に2人は素直に従った。

高度1万1千m上空にバトラとその愛機の姿があった。

仕事というのは偏西風の中に引きこもるザイを【EML】汎用レールガンユニットで引きずり出すというものだった。

最初はイーグルとF-15の機銃で追い出す作戦が立っていたが、バーフォードのEMLの方が成功率が高いという発言にファントムが乗ったのが始まりだ。

レールガン特有の弾速で風の壁を突き抜かせようという魂胆だが、バトラは内心では、乗り気では無かった。

「……レールガン……か」

右の上部ウエポンベイを見ながら呟く。

バトラにとって、レールガンというのはかなり、因縁深いものだが、そうは言っていられない。

バトラは上部ウエポンベイを解放した。

開けられたウエポンベイからEMLが展開され、折り畳まれた砲身が伸びる。

バトラのスピリに載せられたEMLは充電時間の延長と装填弾数を1基6発としてそれを単列クリップ式から並列クリップ式に変更した事で小型化と軽量化に成功した。

そのおかげでレール強度がより強いものに変えられた事で連続発射可能数が18発まで増えた。

〈カウント……5……4……3……2……1……〉

〈ALTAIRO1、スラッシュユ！〉

攻撃の際に生まれる高温と発光に気付かれて回避行動をされるが偏西風に煽られたザイが偏西風の防壁から偏西風によつて弾き出された。

守るものを失ったザイに4機の戦闘機からミサイルが発射された。
「……」

バトラのI-44の電子機器に異常が発生したが、AZJ装置が出力を増して、稼働。

即座に復旧する。

安心したバトラの耳に驚きの声が響いた。

〈BARBIE05が被弾！ BARBIE01も損傷！ ザイ

は健在です！>>

アリーナの叫びがバトラの耳に届いてからの行動は速かった。目だけでEMLの電力チャージを確認する。

(左は撃てる！)

それを確認した瞬間にHUDに移されたサークルの中にザイを収めた。

<<スラツシュ!!>>

左のEMLから弾が吐き出されて一直線に飛ぶ。その速度は重力と合わせ、音速を遥かに超えていた。

弾丸はザイに命中し両断した。

柱の様な形のザイは撃沈された船の様に機体をV字にしながら落ちていく。

そこにグリペンの機関砲弾が降り注ぎ、完全に破壊した。

<<ベルクト！ 応答しろ！ ベルクト！>>

バトラが無線に叫ぶが、届くのはノイズばかりだった。

機体の表示も自動操縦に切り替わっていることを示している。

<<落ち着け、ALTAIR01！ BARBIE05はBARBIE03が誘導する>>

バーフォードの言葉に落ち着きを取り戻したバトラが『すみません』と通信を入れる。

<<わかればいい。周辺警戒を厳にして、小松基地へと帰還する>>

<<ラジャー>>

<<了解です>>

<<わかりました>>

作戦20 イヌワシの公園

バトラの前を担架に乗せられたベルクトが通り過ぎて行く。
バトラはその光景を見慣れた事の様に見ていた。

「ん？」

バトラの視界の先で慧とフロントムが話し合っていた。

バトラは近付こうと歩みだした瞬間に慧が技本の執務棟へと走って行き、フロントムが後を追う様に走る。

「何があつた……!？」

何度も命の危機に瀕する時に味わった後ろの首筋を蜘蛛が這う様な感覚。

バトラは直感を信じて、執務棟へと走った。

(嫌な予感がする……)

今、ここで行かなければ後悔する。

バトラには直感でわかつていた。

執務棟に行ったが良いが、八代通も慧も席を外していて、ここだと言われた場所に赴くが、入って良い理由の様な物が浮かばない俺は扉を音も無く開けて、会話を盗み聞きする。

内容は八代通が何かのメリットと必然性がどうか言っている。

着くのが遅かった所為で何の事なのかさっぱり、わからない。

「ん？ どうしたグリペン、覗く様にして」

「慧を探していた。技本の人に聞いたらここだって。後、私だけじゃ無くてバトラも居る」

「いつの間にかいたし!？」

グリペンの登場に気付かない位に集中していた様だった。

その後も慧と八代通で会話するが前がわからない分だけ置き去りを喰らっている。

そして、慧が八代通だからこそ頼めると言うが、八代通も好きでべ

ルクトを廃棄する訳じゃ無いと言っている。

……ん？

「「廃棄？」」

グリペンの言葉と被ったが、気にするのはそこじゃ無い。

八代通が溜め息を吐いた。

「お人好しが集まると収集がつかなくなる、良い見本ですね。何故、こんなにもややこしくしてしまうのでしょうか」

「何でって、ベルクトは立派とは言えないが、それなりの戦力にはなっていると思ってる。それを捨てる理由がわからないんだが？」
いや、俺の場合は感情論も入っている。だが、戦力ダウンも事実。フアントムの言葉に俺が質問するとフアントムがあるデータを見せてきた。

「……何だこれは？」

「ハアアア。これはスクランブルのデータです。小松に集中し過ぎています。ここ一週間では22回ですよ」

「ヴァラヒア全盛期ではスクランブル対応は週に30回あったぞ。戦争中なら普通より少し少ない数値だ」

「それは比べる相手が異常なだけです」

「今回の戦争はドンパチしている相手が異常だろうが！」

フアントムと睨み合うがグリペンの言葉で終わりを告げた。

「ベルクトの記憶を回復させる方法は存在する。私と慧、もしくはベルクトと脳波パターンが似ているバトラなら可能」

「どうすればいい」

八代通と同時に詰め寄っていた。

ベルクトの記憶が今回の鍵なのは察しがつく。そこに俺が関係できるなら何でもやってやる。

「短時間でも良いから、ベルクトのEGG同期に私達かバトラを加えればいい。プロテクトは外側にしか効果を発揮しないから、内側からのアクセスには効果がない」

「根拠は」

「根拠」

グリペンが言葉を考えようとするが、俺が遮る。

「根拠なんてどうでもいい！ それはやったら、成功するんだな？」
「する」

「やるぞ！ 時間が無いんだろう？」

八代通に聞けば、珍しく狼狽している。

「だが、どっちが「俺がやる」……即答か」

「仲間が根拠も無く成功すると言った。それを成功させるのがエースの仕事だ。違うか？」

「いけるのか？」

最後の確認の様に八代通が訊く。

「やるよ。奇跡を起こすのがエースだ」

片眉が歪に持ち上がる。眼鏡の奥の瞳が鈍く輝く。

「いいだろう、バトラ、付き合ってやる。共にパンドラの箱を開こうではないか。何が出てきても後悔するなよ」

白い部屋の脇にさらに白い少女が居る。

周りよりも白い所為か、溶け込まずにぼんやりと浮き上がっている様だ。

「ベルクト」

白い少女の正面に身体を動かして、語りかける。

衛生棟から運ばれた故か車椅子に座り、包帯を巻いている。

包帯が赤くないから止まっているようだ。

「バトラさん……あまり余裕がないんですね？ 私の生存が許される時間が」

何かを悟った様な顔で告げるベルクト。

「奇跡でも、起きないとな。だが、奇跡は起こす。俺もエースだ。」

エースの条件に奇跡を起こすっていうのがあるんだ。必ず、起こす。起こさなきゃならない」

「バトラさん……」

「俺は……健気で素直で働き者で、仲間の為なら自分を厭わない。けど、戦う事に恐怖心がある。そんな、ベルクトっていう仲間の姿しか知らないんだよ。でも、仲間だからこそ救いたいんだ……」

目を閉じて、あの時の戦争を思い出す。

そして、目を開けてベルクトのルビーの様な瞳を見つめる。

「敵という人間を殺しても、俺は笑って、喜んで、人殺しを胸を張って自慢もした。戦争という狂気の中で正気が薄れていって、戦争の狂気に飲まれる事が俺の正気になっていた」

拳を握り閉まる。

「狂気に飲まれるのが楽しく感じる様になった。人間のままで居られなかった弱い化物になった。だけど……」

思い出したのは仲間は失いたくないって言う痩せ細った人間の心がまだ、あつた……その心の自己満足の為にお前の記憶を覗こうとしている。いいか?」

「構いません」

ベルクトが俺を真っ直ぐに見つめ返す。

「私も自分の正体を知りたいと思っていました。たとえどういう結果が出るにしろ、私はそれを受け入れます。後悔はしません。ただ」

「なんだ?」

「もし私が人間の敵だったら、バトラさんはどうしますか? MS社や自衛隊という組織がどう動くかでは無く、あなた個人がです」その質問に薄っすらと笑ってしまう。

「お前は人間の敵な訳がないと信じているが、もし敵だったら、お前は どうさせたい?」

「……星空の中で殺して下さい。1人の……戦闘機パイロット……として……」

「わかった。時間がないんだ、始めよう」

「はい」

私物を預けて、ベットに無造作に横たわると電極などが取り付けられて行く。

八代通が何かを言っているが良く聞き取れなかった。

「バトラさん。 幸運を祈ります godrick」

1人の研究員の言葉を最後に意識が暗転した。

目を覚ますと視界を白く濁った何かが覆っていた。

「うおー！」

手で払い退けて、同時にブレイクダンスの要領で回ってから立ち上がる。

(何してきたんだこゝへは……)

霧がかかった様にはつきりと思い出せず、頭を強めに叩くと思い出した。

「ベルクトの記憶をブロックするプロテクトの解除だ……何処だこゝは？」

白く濁った物は霧だと直ぐにわかった。異様に濃い霧だ。

腰からDA45Cリボルバーを抜き取る。

何かが動いた気配がして、素早く銃口を向けるが視界に入ったのは豪華な木馬が目立つメリーゴーランドだ。

「何処かで、見た光景だな……」

何処か最近で見た光景に近いと思いつつ、銃を構えつつレンガ造りの道をゆつくりと歩き出す。

こんな霧の中だ狙撃はサーモが無ければ難しいが、訓練された兵士がいればその限りではないだろう。

「看板……キリル文字か……」

茶色い立て看板に白いキリル文字が書かれている。

「マクシム・ゴーリキー記念文化と休息の記念公園……思い出した」

取引の受け渡し期間中は暇だったから近場の観光をしたんだ。
その時に何気無く訪れた場所。

「そして、ベルクトを始めてみた場所だな」

そんなことはどうでもいいから、プロテクトを解除してしまおう。

何かヒントがあるかも、探してみよう。

と思つて10分程、探してみたけども何も見つからない。

遊具や池と言つた物しか見つからず、不自然な物や不思議な物など
ありやしない。

「どうしたものか……」

そう思つて視線を上げて、歩き出したら、あるものが見えた。

「スペースシャトル……あれつてアメリカのじゃ無かつたか？」

とりあえず、何かがありそうだと思つた俺は近付こうとした瞬間に
『興味があるのかな』と呼びかけられ、咄嗟に銃口を向けた。

「誰だ！」

「その物騒な物を下ろしてくれるかな？ 別に敵じゃない」

トレンチコート姿の白人男性が手を上げていた。青年の様な顔付
きで銃口を見ているのに柔和な目を細めるだけだ。

「敵かどうかは俺が決める。敵じゃないと納得させてみせろ」

銃を両手で持ちながら告げるとトレンチコートの男が手を上げた
まま話す。

「困つたな……僕には君を納得させられる材料がない」

困つたと笑う男に目を細める。

「ここは何処に何があるか把握しているか？」

「それは勿論だ。ここは僕にとつても庭の様な物だしね」

「記憶の回復を阻害しているプロテクトを解除できる場所を教えて
くれ」

その言葉にまたもや困つた言つて笑う。

「それは、僕にはできないしできる人や物もないだろう」

「じゃあ、敵だな」

銃を構え直して、頭に銃口を向ける。

「それも、困る。というよりは僕は人間の残滓に過ぎない。外からの働きかけで行動が変わるなどありえない」

「じゃあ、邪魔者だな。消えて貰おうか」

再び、銃口を頭部へ移動させる。

「話を聞くという思考回路が無いのかい？」

「時間があればな。だが、今は無い。ベルクトが生きるか死ぬかの瀬戸際だ。お前の訳のわからない言動に付き合う余裕もつもりもないのでな」

その言葉に慌てだしたトレンチコートの男。

「どういう事だ？ 日本人は記憶喪失というだけで人を犯罪者扱いするのか？ 死刑台に送るのか」

その言葉の後に説明した。

その説明を聞きたびに『ありえない』と言いながら何かを考える素振りをする。

そして、空を仰ぎ見ながら『馬鹿な』と呟く。

「そんな筈はない……あり得ない……」

「あり得ないなんて事はあり得ません。それが実際に起きた以上はあり得る事態なんです。さつきも説明した通り、情報が欲しい。その情報はベルクトの記憶にしかない状況です。手段を選んでいる暇もありません」

沈黙と霧だけが空間を支配する。

トレンチコートの男の表情は霧と伏せられていて、確認ができない。

「何故、そこまでベルクトに肩入れするんだ。他国のアニメだろう。命を懸けてまで助ける義理はない筈だ。ロクな戦力にもなっていないのだから」

「ロクな戦力……当たり前です。新兵の頃からエース級の働きをされたら、俺たちエースやベテランが立つ瀬がないじゃないですか。それにMS社の軍人なら仲間を見捨てませんよ。それに……ベルクトとの約束を果たしていない」

その言葉に1歩ずつゆっくと近づく。

「君は彼女に居場所を作ってあげられるのか」

「多少の無茶を通せる武力と発言力があります」

「彼女は災厄なんかじゃない。ただ、与えられた役割が異常だっただけだ。僕はそれをなんとか変えようとした。待ち受ける破滅に抗おうとした。だけど、上手く行かなかつた。もし君達が彼女に救いを与えられるのなら、まだ見ぬ世界を示してあげられるのなら……」

そこから先を言おうとして、苦笑する。

「おかしいな。記憶の中の存在がオリジナルの方針を覆すなんて。映画の登場人物が予定外の台詞を喋り出すようなものだ」

その言葉に俺も笑顔で答えた。

「監督通りに動く役者は3流、良いアドリブ入れだして2流、監督に物申す様になって1流の役者らしい。あんたは1流の役者だよ。それに、ベルクトを本当の意味で助けてくれる人が現れるのもあんたの願いじゃないかな？」

「君の様な人にベルクトが会えて良かった。安心してここから立ち去れるよ。ありがとう、名も知らぬパイロットよ。君とベルクトの武運長久を祈っているよ」

男が言うと霧が晴れて行き、朝焼けの気持ちの良い朝日が霧を突き抜けて、どんどん強くなつて行く。

堪らず、視界を手で隠す様にする俺に男が告げる。

『彼女』に伝えてくれ。僕は何1つ後悔して居なかつた。君といった時間は黄金の様に光り輝いていたのだ。だから自分を責めずに、これからは自分の為だけに歩んで欲しいと。そう伝えてくれ」

あちら側で待っているから

優しい声と共に男の影が光に溶け込む様に消えて行く。

必ず、伝えます

そう言うのと徐々に視界の全てが光に飲まれて消えていく。

男の顔が少し笑った様に見えた……

目を開けると白い天井が視界一杯に映り込む。さっきまで、野外にいた筈なのだが……

「白い天井？ ……そうか……ベルクトのプロテクト解除……」

思い出した。ベルクトの廃棄をなんとかする為にベルクトとEG調整をしたんだっただけ。

何があった……男に会って、会話した。何をしたのかはたった一部としか思えない程のことしか覚えていない。

『彼女』とはベルクトの事だろう……そして、あの男はベルクトの隣を歩いていたあの男に違いない……

「随分と遅いお目覚めだな。色々、大変な事になってるぞ」

その言葉で俯き気味だった顔を上げると、大急ぎで走り回る白衣の男達。

「相当な緊急事態か？」

「ああ、ベルクトの記憶が戻った。そして今のこのあらましを確認したところだ。全く、とんでもない話だぞ。ロシア人共は頭がイカれてるとしか思えん」

「イワンが考える事だ。紅茶足りてない紳士よりはマシだ」

「今回は、紅茶足りてない紳士の方がマシだぞ。MS社のメンバー全員も読んだ。全員でどんな状況に俺たちが置かれているのか共有しておくぞ」

俺は即座に動き出した。

ベットから滑り降りる様に降りて、立ち上がる。

俺の勘はかなりやばい状況だと警鐘を鳴らす。

「腰抜かすぞ」

八代通が嘲笑う様に言った。

作戦21 3回目の悪夢

私の名はベルクト。Su-47のアニメです。

ロシアには他に2機のアニマが居ますが、私の出自は彼女達とは随分異なっています。

どういうことか？ と思いになったでしょう。

私は邀撃戦も護衛戦闘も侵攻戦も行わないドーター、戦闘機です。

意味がわかりませんよね？ 少し順序立てて説明します。

ザイ戦が始まってから数ヶ月後、ロシアの科学者達はとあるシミュレーションを行いました。実戦の撃墜対被撃墜比率をベースに、一体どれだけの戦力を用意すればザイを駆逐し、この戦争に勝利できるか。

結果は冗談じみたものでした。

ザイの戦力を最低限に見積もっても……仮に自衛隊と同数の300機としましょう。

その全滅には1万以上の作戦機、もしくは6000機以上のAZJ戦闘機か3000機以上のAZJ戦闘機と戦略級エースパイロットのペア、あるいは30機以上のドーターが必要です。

ロシアはこれに対して、1000機程度の戦闘機しか持っていないと言えはお判りでしょうか？

ロシアは戦力比だけで見れば、戦う前から既に敗れているのです。ですが、政治家や軍人は戦力の充足とは別の方法で戦争勝利への道を模索します。

そして辿り着いたのです。

彼らは旧ソ連時代に受け継いだ膨大な核戦力に目をつけました。政治的・倫理的にも使用不可能なこの兵器を対ザイ戦に使えないかと。

大量破壊兵器で空域ごと吹き飛ばしてしまえば、ザイの高機動性能もEPCMも関係無しに殲滅できるでしょう。

ですが、これにも問題があります。

ザイが核の危害半径に留まり続ける訳がありません。科学者達は

危害半径にどうやってザイを留めるか。興味はそこに移りました。

研究の結果からザイのEPCMには複数の役割がありました。

1つは皆さんご存知の電子・感覚妨害です。もう1つはザイ同士の通信・信号です。

詳細まではわかりませんが、このEPCMでザイは編隊の形成・散開・協調などを行います。

わかりましたか？

ザイのコアを使用したアニマとドクターならEPCMを発生させる事ができる。それを意図した形で発生させる事が出来れば、ザイを核の危害半径に収めるなど簡単な事なのです。

もう、お判りですよね。

私は敵を釣る為の餌、囿です。

ザイを核の危害半径まで誘い込み、私ごと破壊する計画。

科学者達はこの計画を「誘蛾灯」計画と呼びました。

では、何故に私は存在が隠されたのか。今までの話を聞けば1機のパトロールドクターでザイの戦力の大部分を破壊できる計画なのです。

八代通さんとバーフォードさん。バトラさんも気付いた様ですね。

この「誘蛾灯」ですが使い方を変えれば、ザイに他国を襲わせる事も簡単なのです。

天災を自分達が思った時に思った場所で起こせるとも言える物です。

万が一、他国に「誘蛾灯」が漏れば、同じ物を作った他国がやられる前にやれと言わんばかりに送り込む筈なのです。

そう、冷戦時代の核に焼かれる前に焼け。焼かれたら倍で焼けという様な核を核で洗う様な戦いが。

故に軍の装備リストからも削られて、いざ、使用すればザイ諸共核の炎の中です。

私というアニマは誰にも知られる事なく、研究終了を待っている筈でした。

ええ、その筈でした。ヤリツクと呼ばれる科学者に会うまでは。

私が物心つく頃には彼は隣に居て、右も左もわからない私に色々な

事を教えてくれました。

音楽・歴史・映画、海と空の間に存在する無数の出来事に着いて。
ヤリツクは言いました。

『君は希望なんだ』

『君から得られた技術を発展させれば、いつか僕達はザイと対話できるかもしれない。そうすればこんな【誘蛾灯】なんていう野蛮な計画は必要無くなる。彼らの思いと僕達の思いの折り合いのつくところを探ればいいんだからね』

明るい未来を語りながら、彼は私を外に連れ出してくれました。ごく稀に、本当に短い時間だけでしたけど施設以外のところを歩かせてくれたんです。

ですが、彼の立場が悪くなっていると気付いたのは随分後になってからでした。

計画の方針を変更しようとしたか、テストの遅延を試みたのか、上層部に異議を唱えたのか、あるいはその全てか。

真偽のしれない噂が増えると同時に彼との接触も減っていききました。

別のプロジェクトに移動してしまうかも、そんな事を思っていたある日の事です。

何の前触れも無く、ヤリツクが私の前に現れました。

別の検査を控えていた私とヤリツクが会う可能性はゼロ以下でした。それでも会った事に驚く私にヤリツクはただ、一言だけ『ついてくるんだ』と言つて、ドーターの格納庫まで連れ出しました。

言われるままにコクピットに乗り込んでダイレクトリンクを行った瞬間に何かの処置を受けました。

今ならわかります。記憶の封印措置とEPCMの無効化措置です。警報と足音が響く中でヤリツクは微笑みかけてきました。

『これで君はもう普通のアニマだ。【誘蛾灯】なんていう馬鹿な兵器はもう存在しない。S u u 4 7 - A N M ベルクトはただの戦闘機として生きていくんだ。そして、願わくば、いつか君の力を使ってザイと会話して欲しい。彼らは何を望んでいるのか聞き出して欲しい。』

いいね』

警備兵が銃を構えるのも構う事なく、強引にキャノピーを閉めま
す。

『さあ行け！ 飛行ルートとナイトは用意してある。君は自由だ』
その言葉が最後の言葉でした。機体搬送用のエレベーターに運ば
れながらエンジンが点火。全ての動翼がはためきます。

最後に見たのはネクタイをはためかせて笑いながら此方を仰ぐヤ
リックでした。

全てをやり遂げた様な満足しきった顔で。後ろから駆け寄る警備
兵の事を気にした様子も無く。

そして、私は意識を失いました。

気がつくと雲海の上をただひたすらに月明かりに照らされて、夜闇
を排気炎で切り裂きながら飛んでいました。

以前の記憶は無く、唯一亡命だけが私の目的になっていました。東
に進み、ロシアの領空から逃れる事。

その為に追つてを振り切る最中にバトラさんと会い、その後に独飛
の皆さんと出逢ったのです。

私の話は以上です。

長い話が終えると男達の嗚咽が響いた。

「いい……………はなじ……………でずね……………最後なんか……………」

「マイケル軍曹。涙拭いて下さい」

「グレアム軍曹が必要じゃないのか……………そのナプキン……………」

「バーフォード中佐……………いい歳した大人が泣かないで下さいよ
……………」

マイケル、グレアム、バーフォード、バトラが涙を流していた。

誘蛾灯計画までは怒りに震えていた4人だが、ヤリックの話を知り
ている間に涙腺が緩み、ラストの亡命を決行した覚悟と行動に同じ戦
う男としてかなりの共感を持ってしまった様だ。

特に愛する物を多く持つバーフォードが一番酷い泣き方をしている。

「ちよつと、泣かないで下さいよ。私達が耐えられなくなります」

「私だって、同じです……ヤリツクさんの想いがわからない人間じゃありません」

「男がこの程度で泣かないで下さいよ……こつちだって、泣きたくなるじゃないですか……」

「本当に馬鹿ばかりね。この中隊……私が言えないか……」

詩苑・詩鞍・京香・サラの順で男達に抗議するが、自分たちも涙を流しているので説得力など存在しない。

「室長！ 緊急事態です！ なんだこの状況!？」

「気にすんな！ 何があつた!？」

「此方です!？」

大急ぎと言わんばかりに一枚の書類を手渡す。

八代通は奪うように受け取る。

「……馬鹿な……こんなのがあるのか……」

八代通の顔に絶望とも取れる表情が浮かぶ。

「曇天の為に光学衛星は使えず、レーダー衛星のレーダーを突破する程のステルス性能に加えて、早期警戒衛星さえも狂わせるEPCM出力を発生しながら接近しています。今回の報告は近海を警備中だった海上保安庁の船からの目視発見によるものです!？」

「何があつた?？」

バーフォードが仕事モードに即座に切り替える。

八代通は震える手でバーフォードに書類を渡す。

書かれた文章は少ない。

詳細よりも伝える事が目的の書類だった。

「な!？」

内容にバーフォードも驚きを隠せない。

「詳しい情報がなくても、これは不味い……」

オペレーター陣も書類に目を通して行くが、その表情は驚愕と絶望に染まっていく。

片宮姉妹にもその種類が受け渡され同様な表情に染まっていく。そして、バトラが手を出す前に自衛隊アニメの手に書類が渡る。そのままファントムの手元に来るとファントムが書類を握り潰し様に握り、早口で『ベルクトを動かすか、処分するべき』と叫び、慧がそれに反抗する。

「そんな事を言ってられないんです！ このままのペースだとこのザイは3日で日本に上陸します。更に強力過ぎるEPCMで一般の戦闘機など使い物になりません！ どうするつもりですか！」

「ベルクトを廃棄したからって止められる訳じゃないだろう。もう動き出した以上は信号を止めても目的地は変えられないかもしれないだろう」

慧の言葉にファントムが視線を泳がせる。

「ですが、撃墜しないと日本が減びますよ！」
詩苑が叫ぶ。

「無茶です！ こんな物を墜とせる筈がありません！」

「だったら、私が移動すればいいだけの話です。武装無しでフリー飛行なら数千キロは飛べます。中国大陸に行つて、そこで撃墜されて全部終わりです。何も難しい話じゃありません」

「俺がお前らに着いて行けないんだよ！ そんな状況なんだよクソツタレ！」

手が緩んだファントムの隙について書類を奪い、読むバトラ。
「……」

無言のまま、無表情で書類を元の握られた状態に戻す。

「バーフォード。意見具申良いか？」
「……何だ？」

「ここにヴァアラヒア戦争とゴールデンアクス事件で巨大航空機の撃墜記録保持者が居るんだけど、忘れてないか？」

軽く凄い事を言うバトラだが、バトラの表情は何でこんなのに慌てているのか不思議で仕方無いという表情だった。

「「「あ」」」」

MS社のオペレーター陣が何かを思い出した様に口を開いた。

「今日以外にお前達が居て良かったと思う日が来ない事を祈りたいものだな」

八代通が腕を組んで話を始めた。

「巨大航空機撃墜のコースに頼ろうじゃないか」

日本の領域で3回目となる巨大航空機迎撃作戦が行われようとしていた。

作戦22 蠍の悲しき過去と作戦前夜

8月28日午前10時丁度に3機の航空機が降りてくる。

巨大な図体にレドームの4発機と同じ外見のかなり小型な機体。

否、小型の機体は一緒に飛ぶ機体が巨大過ぎる故の結果だった。

「デカイな……あんな空中管制機が有ったかな？」

目の前の滑走路に着陸する巨体。その直ぐ後を同種の戦闘機が2機、着陸する。

カノープスのパイロットが前日のベルクトの話の時に居なかったのは本社の工場からこの機体は受領する為だった。

何でも、EPCMをAZJシステムの応用で何とかする目処が着いたが装置が巨大化して既存のAWACSと言った電子戦機に載せられない、改造品を新たに作つたらしい。

小型機はA-10の2機が遂に悲鳴を上げた為に急ピッチで名古屋空港から飛んで来た2機だ。

F-3 震電Ⅱの対抗機として2機作られた。F-2X バイパーゼロ。

F-2Bの発展強化型としてF-16E/Fを元に開発された。

震電Ⅱと同じエンジンに変更した事で航続距離などの基本性能の上昇とFCK-1を参考に双発化を成功、推力も震電Ⅱに並んだ。

機体強度と推力の向上により、艦上戦闘機として運用を可能にし、陸上基地からなら対艦ミサイルを5発積んで出撃できるだけの推力と強度を持つ。

だが、発艦なら対艦ミサイル4発とF-3と同等で燃料タンクの巨大化によるガンファイトでの危険性増加。VTOL機能・ステルス性能無しで機動性にも劣る機体として、次期支援戦闘機に震電Ⅱが選ばれた。

機体生産額はこっちの報が安い。

今回、片宮達が載るのはそのレプリカだ。

性能はエンジン以外一緒か同等の物を積んでいる。エンジンは既存のエンジンの改造品で推力を同等に持って行っている。

「こんな巨体を扱える人が居るんですか？」

振り返れば、ファントムが新型の巨大空中警戒管制機を見ながら話しかける。

「旅客機の改造型かな？ 旅客機は専門外だ」

「ダツシユ8ですよ。総二階建て旅客機の燃料消費率が改善された機体です」

「成る程、まあ素体は何だろうと関係ない。俺たちの要求に応えられるかどうかだ」

視線を着いた機体に向けるとMS社のオペレーター陣とカノープスパイロットが集まり、機体の中に入っていく。

F-2Xでは持つて来たパイロットから話を聞く片宮姉妹がいた。

カラーリングがF-16の純正カラーの灰色の為に適当に選んだのだろう。

「それはそうと今回の目標に着いて、考えなくて良いんですか？」

情報がない無いなりに考えられる事があるんじゃないですか？」

「考えるというか、もう出来てる」

「お聞きしても？」

「ミサイルと機銃弾と爆弾を当てて撃墜する。それだけだ……弾を当ててる。それだけだ……」

ファントムが空を仰ぐ。この世の不条理を全て抱え込んだような表情だった。

「何も考えて無いじゃ無いですか」

「柔軟な思考を維持しつつ、臨機応変に対応せよ」

「もう良いです。行き当たりバッタリでどうにかしろということでしょう」

だって、巨体航空機って、何の情報もなしに挑ませられたからね。

正直、言うと今まで通りの対応しかできない。

「はあ……作戦空域の情報を確認してきます」

「謝ったり、了解を求めても火に油だろう？」

去ろうとするファントムの背中に投げかけるように問う。

「ええ、そうですね。勝手に外堀を埋められましたからね」

可能性を示唆しただけでああなったんだ。ああなったのはバーフォードと八代通の責任だ。

俺は関係無いと思うんだ。と言ったら、何されるかわからない。

「不愉快だと思うが、協力してくれてありがとう」

巨大航空機の撃墜を1人でやった事があるが、あれはエンジンのみに集中攻撃したからだからな。

ファントムのようなエースが協力してくれるのはありがたい。

ファントムは呆れたような顔になり、言葉を紡いだ。

「ただ不愉快という訳ではありませんよ、私も白馬のナイトには憧れますからね。願わくば、私が姫君の配役を賜った時も同じように振る舞って頂けることを」

敵次第だろと言う前に手を振りながら去って行った。

というか、第二次海鳥島攻略戦で騎士は演じてやった筈だろうに

……

俺も機体の整備と調子でも確認するか。

滑走路を見渡せる場所から機体を駐機してあるハンガーへと移動しする事にした。

ハンガーに移動したらベルクトが俺の機体のすぐそばに佇んでいた。

「どうした、ベルクト。俺の機体に何か用か？」

そう言う小さい肩と白く綺麗な髪が跳ね上がった。

「驚かささないで下さい」

「悪い悪い。で、何かあったのか？」

「いえ、F-2Aとさつきまでお話してたんですけど……」

床を見下ろすベルクト。

さつきまでそこにいたのか……

「何か嫌われる様な事したかな？ すまないな、楽しい時間を邪魔した様だ」

そう言うて去ろうとした所をベルクトが慌てて止める。

「いえ、決して嫌っている訳では無いそうです。ただ、恥ずかしい様で……」

恥ずかしいってお前……十代女子みたいな反応を……

「F-2Aって10年と少し前の開発だったけ？」

「そうですね。10年そこそこだと言っていました。それとコレはお土産さそうです。全員分は買ってこれなかったので秘密にしたい欲しいと」

そう言って渡されたビニール袋を受け取って中を確認する。

中には大量のブルーハワイ味のちんすこうが入っていた。

「……」

うっくん食欲減退色……

「機体カラーをイメージしてきたそうです……」

成る程ね。意図はわかった。でも……

これって口の水分持つてかれる奴だ。

貰った手前、食べないというのも失礼だろう。ブルーハワイ味は初めてだ。

「……パッサパッサしてるし、喉に残る甘さだな」

そう言った瞬間にベルクトが可愛らしくクスクスと笑い始めた。

「仲が良いんですね」

「そうかな？ 食べる？」

『遠慮します』と手のひらを向けて振るベルクト。

コレは苦めのお茶と併用して食べよう。

「あの、前のお話で言っていない事があるんです。私とヤリツクとの関係です」

「……公園で見たな……男女の関係だったのか？」

「そうですね。施設の外に出る度に距離を縮めていきました。あの施設でただ、1人の親しい男性。そうなるのも可笑しくありません」

わかるが気がするな……

たった、1人だけが良くしてくれれば特別な感情を抱いても仕方ないのだろう。

「去り際にいつも言うんです。眩しくて幸せに満ちた未来を……でも、希望を持たせておいて自分は退場しちゃうんですよ。戦闘を怖がったのだって危険から逃げる様にプログラムされていたからです

し」

『ひどくないですか?』と笑って話すベルクトに俺はおそらく、ヤリックであろう男の言葉を伝えた。

「私は……2人で生き残ってたのに……」

伝えるとポロポロと涙を流す。

細い指で一滴ずつ拭うベルクトにハンカチを差し出す。

「ありがとうございます……」

ハンカチを受け取って、何かを聞こうとするベルクト。

「何かあるのか?」

「……どうして、私に気を遣ってくれたのですか?」

そう言う事か……話しても良いだろうか……

いや、語った方が良いでしょう。

「そうだな。ヴァラヒア戦争であつた事なんだがな……」

ヴァラヒア戦争で大型電磁投射砲〔パラウール〕の破壊作戦が実施されたんだ。

その時の俺の所属する部隊に4番機の補充として1人のパイロットが編入された。

俺の初めてのウイングマンだった。

俺よりも年下でお前と同じ、白い髪と皮膚に紅い瞳の少女。名前をサーシャ・V・ヴァクーニアと言った。

俺たちの仕事は敵電磁投射砲への攻撃だった。

俺がF-16XLにサーシャはSu-25だった。

制空権は押さえ気味だったから戦闘機はそんなに飛んでいなかったんだが、電磁投射砲の対空射撃を回避しながらの接近になった。

大口径の電磁投射砲はその弾の付近にも航空機なら簡単に撃破できるだけの衝撃を作る程だったから回避は大変だった。

そして、何回目かの回避の後にパラウールを姿を目視で捉えた瞬間だった。

おそらく、最後の砲撃を回避できれば攻撃できるという所に来て電波妨害が発生して、それを破壊する間に砲撃がくる時間になった。

俺はパラウールに比較的近かったからパラウールの横をすり抜けて射線から一旦、逃げたんだ。

サーシャは距離があったが高度が高かったから降下して逃げ様とした瞬間に対空機銃の攻撃を喰らって、バランスと推力を失った所にパラウールの砲撃が直撃した。

サーシャは呻き声すらあげる暇無く、機体と共に消滅した。脳裏に浮かんだよ。

笑顔で呼びかけるサーシャんに拗ねたサーシャや訓練で負けてふくれっ面になるサーシャ。整備を手伝いがるサーシャに整備員からの頼まれごとを嫌な顔1つせずに請け負うサーシャ。

たった数週間の付き合いだったが色々なサーシャが脳裏に鮮明に浮かび上がったんだ。

わかっただろう。

お前にサーシャの影を重ねていたんだ。

お前をサーシャとして接した時もあったな。訓練や整備の時だけなんだが、サーシャが戻ってきた様な気がしたんだ。

死体が残らない死に方をしたのにな。

俺がサーシャをどう思っていたかだっけ？

どうなんだろうな？

俺は初めてのウイングマンとして色々と接し方を考えていた時期でそれ以外の見方や接し方をしていなかったかもな。

でも、サーシャはそうじゃなかった。

なんで、わかるかって？

簡単だよ。戦死してから部屋の整理をしていたら俺宛の手紙が出てきたんだ。

その手紙は今でも保管してある。

あいつは俺を長機のパイロットとしてと同時に1人の男として見

てくれていた。

もう少し、接し方を考えていけば、長く生きていけば気付いたかもしれないがな。

所詮はれば・にら・ならの i f の話だ。

後悔はしているし、無茶でも爆撃していたら助けられたかもしれないと考えた時もあったが、起きた事実として受け止めた。

もう、悲観はしていない。ただ、初めてのウイングマンであり、初めて男として好いてくれた女として忘れられない人になっている。話はここまでだ。聞いてくれてありがとう。

2人の間に長い沈黙が降りる。

「……片宮さん達の事はどう思っているんですか？」

「仲間。それ以上でもそれ以下でもない」

ベルクトの瞳を見て話すバトラにベルクトは何かを言おうとしたが、口を寸前で閉じる。

「では、貴方はこの戦争を生き残りたいですか？」

「当たり前だ。死にたがりでも、英雄願望がある訳でもない。生き残りたいから訓練するんだ」

バトラが何を言っているんだと不思議な感覚に囚われる。

「仲間と生き残りたいですか？」

「俺はそう思っているが、そうなるかは俺と仲間達の行動の結果次第だな。俺は運命というのを信じない主義だ。この世の事柄は全て結果でできながっていると考えているからだ」

立ち上がりながら話した内容にベルクトが悲しげな表情を浮かべる。

ベルクトにはバトラがさっきの話以上の悲しみを背負っているのだと思う事ができた。

「ベルクト。今回の相手は墜とす事と自衛で手一杯になる筈だ。自

分の身は自分で守れよ」

歩き出したバトラが立ち止まり、言葉を紡いだ。

「ああ、それと最後の生者の思いだ。死者の事を思うのも美しいが
生きている内の最後の願いや思い位は果たしてやりな」

それが最大の手向けになると、残して機体の方へ近づいていくバトラを、ベルクトは黙って見送る事しかできなかった。

(どう見ているか……か)

整備と火器管制を見直し終えたバトラがコクピットに座ったまま腕を頭の後ろで組み、考えていた。

(大切に思うだけで、仲間が救われる訳じゃない……逆に無くしてしまうものだ……)

大切な思った仲間から二度と会えない世界へ旅立って行ったバトラには難しい問題だった。

「詩苑に詩鞍……」

「呼びましたか?」

機首の下から聞こえた2人の声に慌てるバトラに両サイドにタラップが取り付けられた。

「どうかしましたか?」

「考えごとですか?」

相変わらず、鋭いと吐息を吐く。

「お前達は俺もどう見ている?」

「どう見てる……ですか?」

「どういう意味ですか?」

「直感で答えてくれ」

そう言う時詩苑も詩鞍も顔を赤くして俯く。

「……頼りで優しくして、でも厳しい所の兄の様な人です……」

「……ノリが良く、危なかしい事をする兄の様な人です……」

「ありがとうな。明日の作戦に備えてもう寝ろ」

そう言うと2人は降りて行き、自室へと戻って行くルートに着いた。

バトラはそれをコクピットの中から見送り、また、プログラムの確認を行った。

確認が終わるとコンソールの全ての電源を切り、コクピットから降りて、自室へと帰らずに開け放たれたままの機体が出て行く出入り口からそれを出る。

格納庫の外に出ると旅客機のエンジン音が一段と大きく感じつつ、バトラが旅客機が飛んでいく方向とは真逆の方向の空を見る。

見上げた先には薄い雲から月明かりが漏れ、月だけで見る月光とは違った幻想的な月光が視界に映る。

バトラは己の両腕を見ると、本人でも気付かない程の小さな震えが確認できた。

「畜生……怖がってる……」

巨大航空機、巨大兵器に自分の所属部隊員を多くやられたバトラにとって、無意識な恐怖があった。

バトラがへその部分で両手を打ち合わせる。

巨大ザイとの戦闘場所は日本海 大和堆上空

作戦開始日時は8月29日 明朝8時

戦闘開始予定時刻 10時

作戦名【亡霊成仏】

作戦23 亡霊成仏

小松基地 明朝7時。

基地のど真ん中に仮説の演説台が設営されて、その上に何時もの制服では無く、モスグリーンの一般隊員が着る服に身を包んだ小松基地司令の団 修が台に立つ。

「作業をしながらでも聞いてくれ」

団司令が拡声器で作戦開始前の最後の点検が終わりかけた基地に響かせる。

「我々は、幾度も無く国家存亡の危機に瀕してきた。だが、その度に神が我々に加護を与えて来た。元寇の神風、太平洋戦争の天皇のお言葉。だが、今回は神の加護は無い」

気が付けば全員が団司令の方向を向き、耳を傾け。ある者達は近づき集まって行く。

「何故ならば、神は我らに奇跡を起こせと言っているからだ。巨大航空機を墜とす。これは奇跡が起きなければ成し遂げる事は出来ないだろう」

団司令の言葉に顔を俯かせる者も居た。

「だが、私の眼の前にはこれだけのエースが集まっている。今日飛び立っていく者は我が航空機自衛隊が誇るエースだと私は信じている。エースとは奇跡を起こす者だ。これだけのエースが集まれば奇跡を起こすなど容易だろう」

俯けていた顔を上げるパイロット達。

「だが、必死と決死は違う。君達には必死の覚悟で必勝精神を持って今作戦に挑んで頂きたい」

全員の眼の色が変わった。

日本帝国軍と日本国自衛隊は違う。

生きて帰ってこそ、自衛隊の勝利なのだという団司令の思いはしっかりと伝わった。

「今作戦は全員の生還を持って、完全終了とする。最後に……今迄、負け続けた我々だが今日は我々の……」

拡声器から口を離して間を作る。

「今日が、我々の……反撃の狼煙を上げる日だ!!」

『『うおおおおおッ』』

叫び声を上げて、手を振り上げる者。

叫びながら、ガッツポーズを取る者。

必死の覚悟を決めた者が無言で最敬礼を送る者。

ヘルメットの紐を握り、頭上で回し者。

団司令が満足した表情で台から降りて行く。

「見事な演説でした。さつきまでとは士気が段違いです。そして、その恰好は……」

バトラが近寄り、声を掛けた。

団司令は笑いながらバトラに語り掛けた。

「見ての通り、飛ぶつもりだよ。ウイングマークを持っているから問題無い。それにヴァラヒア戦争で損失した戦闘機の補充はF-4で賄っていた分が終わった程度だ。つい最近まで動いていたF-4EJ改はついさつき届いた」

「本気なんですね」

「ああ、こんな年だが、現役パイロットだ。何、ベトナム戦争頃のF-4B位の事はできる」

そう言いながら、用意された対Gスーツを着て、ヘルメットを掴む。団司令は隊員に付き添われながら人混みへと消えて行く。

「……行くか」

そう呟いたバトラのホルスターにはトカレフが、手には赤いヘルメットが握られていた。

「何時もの青いヘルメットと拳銃じゃないな」

機体の検査をしていた整備員に声を掛けられたバトラ。

「ああ、今日は願掛けを込めてな」

「そうかい。詳しくは聞かねえ。整備はバッチリだ」
そう言うのとタラップが機体に取り付けられる。

「ADMは3基を機体の腹の大型ウエポンベイにしまつてある。EMLは上部ウエポンベイだ。ミサイルは主翼の反理め込み型に1

発せず。増設ハードポイントに4発ずつ。増槽が主翼に2個ずつだ。武装の追加と増槽で加速や上昇能力が低下、ステルス性も無くなっている」

「ステルス性は通常戦闘機と共同戦線だから問題無い。増設のミサイルも長距離ミサイルだろう?」

「ああ、そうだ。行つてこい!」

ハーネスの締め具合を確認されたからタラップを降りるとタラップが退かされて、車輪止めとミサイルの安全ピンが抜かれる。

安全ピンを抜いたことを教えるために掲げられた安全ピンが見えてから、ハンドサインでエンジンをかけると送ってからエンジンに火が灯された。

ゆつくりとした動作でハンガーから出ながら、主翼の端が伸ばされて行く。

管制官の指示の元に滑走路に進入するとその後ろからF-16に似た双発機が2機進入する。

滑走路の上でデルタ編隊を組む。

〈〈こちらは管制塔です。ANTARES02、ALTAIR03、04の離陸を許可します〉〉

その指示の後にエンジンから赤い炎、暫くして青い炎が噴き出す。

〈〈気負いすぎるな。相手がデカイだけだ〉〉

滑走を始める瞬間にそう残して、機体を滑走させるバトラ。

詩鞍と詩苑もその後ろを歩いて行くように滑走を始める。

〈〈アンタレス隊、アルtail隊が離陸。バービー隊、滑走路進入を許可する。続けて離陸せよ〉〉

その通信をバトラ達は浮き始める機体の中で聞いていた。

ある程度の高さまで上昇してランディングギアを格納して、右旋回を行う。

〈〈全機、離陸後は空中管制機の指示を受けろ。日本の存亡が掛かっている。繰り返す。日本の存亡が掛かっている〉〉

その通信を聞きながらバトラ達が先に上がった自衛隊と日本海に入る寸前に合流した。

〈〈こちらは空中管制機のカノープス。亡霊成仏に参加するMS社の戦闘機部隊の個別の指示に従って貰う〉〉

〈〈では、ANTARES02は僚機を欠いているので、臨時編成を行います。えっと……〉〉

グレアムが通信を繋げた後にレーダーを確認する。

〈〈居ました。BARBIE05はANTARES02の2番機について下さい〉〉

〈〈了解しました〉〉

ベルクトがバトラより高度の低い場所から現れ、右旋回をしながらバトラの後方に近づく。

〈〈この臨時編成中はBARBIE05をANTARES03とします〉〉

〈〈まだ、戦闘に不慣れですからバトラさんについて行きます〉〉

その通信にバンクで答えるバトラ。

〈〈ANTARES03の臨時担当オペレーターはマイケル・アリーナ軍曹です〉〉

〈〈臨時でオペレートするマイケル・アリーナです。巨大航空機戦ですか。楽しみですね〉〉

アリーナが気さくに話しかける。

〈〈アリーナ軍曹。遊びに行く訳じゃ無いんだぞ?〉〉

〈〈それはわかっています。少し位はリラックスしてもいいじゃないですか〉〉

〈〈アリーナ軍曹の言う通りだ。張り詰め過ぎるのも良くない。適度にたわらなければ簡単に糸は切れる物だ〉〉

この通信に各機から賛同の言葉が発信される。

バトラもそれはそうかと息を吐く。

航空自衛隊とMS社の連合部隊が日本海上空を航行している最中に海上自衛隊のほうしようの上を通るとほうしようから2機の戦闘機が合流した。

日本国が所有するたった2機のAZJ戦闘機のF-3 震電IIだ。

〈〈海上自衛隊所属の長瀬 佳よ。TACネームはEDGEよ〉〉

〈海上自衛隊所属の浅野 航だ。TACネームはASTERだ〉
海上自衛隊の2機は航空自衛隊の管制機の指揮下に組み込まれた。
新たな2機の機体を加えた一行は大和堆へと進む。

時刻は10時10分前だった。

〈レーダーに反応！ これは……大型の巡行ミサイルだ！〉

〈なんて、サイズだ！ 数は20！〉

〈サイズの問題で戦闘機としてロックオンできません〉

〈自衛隊機は長距離ミサイルでこの巡行ミサイルを撃墜しろ〉

周りを飛ぶ自衛隊のF-15・F-2B・F-3・F-4から長距離ミサイルが放たれ、遠方に巨大な炎の花を咲かせる。

だが、時間をおいて発射されたであろうミサイルが飛んでくる。

〈もう一度だ！〉

自衛隊の航空管制官の指示でもう一度発射される。

〈よし！ 前進〉

〈何かくるぞ。バーフォード中佐〉

戦闘を飛ぶバトラの目には向こうから飛んでくる黒い点が見えた。

〈ステルスタイプか……AZJ戦闘機とANTARES03はザイを避けて上昇しろ〉

〈バービー隊も上昇して避けて下さい。ステルスタイプのザイは他の部隊で対応します〉

ステルスタイプのa型ザイと自衛隊機が接敵した。

ミサイルが確認されていないステルスタイプだが、索敵レーダーに加えて、ミサイル関係が使えない為に苦戦しているが、未だに撃墜された航空機はなく、逆に1機だけいるF-4がザイを1機撃墜した。

〈バーフォード！スピリダスザイのEPCMを喰らった。AZJシステムが作動している〉

〈自衛隊機に被害が出るのも問題か……ZJAEシステムを起動する〉

バーフォードが何かのシステムを起動するとAZJシステムが機能を停止した。

〈なんだこれは？〉

「〈ザイジャミング・アサルトエリア・システムです。直接通信が可能な距離だけですが、E P C Mの電子機器被害だけを抑えられます。これでレベル3 Cまでなら十分な戦闘が可能です。それ以上でも、F—4 Bと同じ戦い方はできません〉」

バトラがグレアムの説明を聞いている間にも、敵機撃墜の報告が自衛隊管制機に届いていた。

「〈A Z Jシステムの感覚障害対応を確認しました〉」

一定以上の距離に接近したのかE P C Mのレベルが上昇した。

「〈敵機を発見しました〉」

浅野がザイ・スピリダスの姿を目視で発見した。

そして、同時に小型機の反応が自衛隊の方へと大量に飛んで行く。

「〈敵のパラサイトファイタータイプを確認。自衛隊に向かっていきます……ん？ これは……〉」

「〈韓国空軍機と台湾空軍機だと……何故、ここに？〉」

「〈韓国空軍の者だ。電子戦機型のザイ撃墜の恩を返しに来た〉」

「〈台湾空軍の者だ。司令官をぶん殴って来た。俺たちにも手伝わしろよ〉」

韓国空軍のF—5 Eに加えて、台湾空軍のF—16とF—CK—1が飛んで来ていた。

そして、自衛隊機と合流するとそのままザイを相手に空戦を繰り広げていた。

「〈思わぬ援軍が来たな。それと敵はレーザーC I W Sを4基。スピリダスの誘雷兵器が有った場所に確認された。さらにパラウールと思しき物もあるそうだ〉」

「〈手段はスピリダス戦と同じ方法で行います。まずは防御火器を破壊して、内部構造に直結している武装に攻撃をしやすいします〉」

京香からの通信に全機から了解の合図を送られる。

「〈敵がミサイルを発射しました。回避を！〉」

垂直に発射されたミサイルが白い煙を吐きながらバトラ達に迫る。バトラ・佳・航・イーグル・ベルクトは上昇して、それを追いか

て来たミサイルに機体を捻る様に動かして、ミサイルの追尾機能を振り切った。

ベルクトだけはフレアをばら撒く事でミサイルを受け流した。

降下組もフレアを個別に焚いてミサイルの回避をした。

全員がミサイルを回避すると増槽を放棄して、加速する。

巨大兵器戦では距離を取りすぎると飛んでくる武装が多いのとミサイルなどは速度が乗るので回避が難しくなる。

近距離を狩りを行うサメの様に動き続けるのがセオリーだとされている。

だが、近づかせまいとザイ・スピリダスもレーザーCIWSと機銃・高射砲を発射する。

レーザーCIWSは威力と距離が伸びたものの連射力を落ちており、回避も発射寸前に仰角以上の場所に移動してしまえば簡単に回避できる物だった。

〈〈もらった!!〉〉

真つ先にザイ・スピリダスを攻撃したのはイーグルのF-15Jだった。

20mm機銃で対空機銃を1基破壊した。

〈〈よし！ 次とっ！〉〉

隣の高射砲へと攻撃を開始する寸前に他の機銃の優先攻撃目標になった山吹色のF-15Jに機銃の弾丸が殺到する。

〈〈うわああ!?!〉〉

エルロンロールで射線を振り切り、ザイ・スピリダスの腹下に潜り込もうとする。

〈〈突っ込みすぎですよ〉〉

F-15Jを追う機銃に20mm機銃を発射するフロントムだが、フロントムにも他の機銃の攻撃で退避を余儀なくされるが1基破壊した。

〈〈硬いですね〉〉

ザイ・スピリダスが20mmを弾いていることを確認したフロントムが離れて行く。

離れるファントムに機銃と高射砲の攻撃が迫るが高射砲の攻撃は直上攻撃した航により破壊されるが、ミサイルに追われた航は一旦、攻撃を切り上げて退避に専念する。

〈もう一度！〉

F-15Jが腹の下を通り、ループしながら尻の方に抜けて攻撃しようとするが、2枚重ねの主翼の下の主翼に搭載された機銃の攻撃を浴びて、引き剥がされるが、ザイ・スピリダスの前方から佳が背面飛行をしながら機銃を発射して武装を破壊した。

ザイ・スピリダスもやられているだけではないと下の主翼裏側に乗せたパラサイトファイターを15機発進させる。

パラサイトファイターは主翼を広げると無尾翼化したF-117の様な機体だった。

パラサイトファイターが動き出した瞬間。

〈ドライブ〉

1-44の腹から12発ものマイクロミサイルが発射されて、12機を撃墜する。

〈ANTARES03、インガン・レンジ・ファイア〉

バトラが取り逃がしたザイをベルクトが機銃で撃墜するが2機は生き残り、ベルクトの後ろに付く。

しかし、後ろに付いた瞬間には黄色い線が2機のザイを炎の花に変えた。

〈ALTAIR03が撃墜〉

〈ALTAIR04も撃墜〉

F-2Xに搭載された20mm機銃2門による射撃だった。

2機のF-2Xは主翼と主翼の間を通り過ぎて行く。

すかさず機銃が2機のF-2Xを追うが、その瞬間にファントムとイーグルのミサイルが高射砲を挽ぎ、航と佳の機銃が左主翼の対空機銃を全て破壊して、左主翼から武装を奪った。

ベルクトが左主翼のレーザーCIWSにロックオンされるがコブラ機動で無理矢理にロックオン。ミサイルを叩き込み、発射を強制キャンセルさせた。

更にハッチが閉まり切る前にバトラのミサイルが左レーザーCIWSに突き刺さり、破壊した。

JAS39Dが遅れて戦闘空域に参加して、海面ギリギリから急上昇し、ザイ・スピリダスの上空へと踊り出る。

踊り出たグリペンに上部レーザーCIWSと高射砲に狙われるがF-2Aが対艦ミサイルをマニュアルで誘導して、レーザーCIWSを一撃で破壊して見せた。

高射砲は反転接近していた片宮姉妹の機銃とミサイルで破壊した。

〈敵の機銃、高射砲の無力化を確認した。だが、VLSとレーザーCIWS、バラウールが健在だ〉

〈へですが、黒煙が確認できます。ん？ 高熱源反応を確認！ 機体中央の後方です！〉

〈バラウールの位置に近い。後方に接近したのち、熱源に攻撃を加えろ〉

全機から了解の返事が来た瞬間にザイ・スピリダスが新たな兵装を展開する。

主翼後方に『バチバチ』という音を立てて、電気の球体の様な物が現れる。

〈あれはミサイルを無効化するデコイだ。デコイの効果範囲外かデコイよりも後ろの位置からミサイルを使用しろ〉

広い感覚で並べられたジャマーを右に左に、時には機体を横倒しにしてでもくぐり抜ける機体が有った。

〈ANTARES02がジャマーエリアを抜けて接近。ミサイル発射〉

I-44から吐き出されたミサイル2発が正確に発熱機構に命中にダメージを与えた。

機体中央から白煙が発生する

〈ANTARES02のミサイルが命中。ダメージを与えています〉

〈へだが、熱がなくなり、ミサイルが当てられない。周りのジャマーと対空火器を破壊しろ〉

バーフォードの通信の直後にレーザーCIWSがバトラに狙いを定める。

〈バトラさん!! FOX2!〉

〈FOX2です〉

〈当たって!!〉

レーザーCIWSを破壊するべく、Su-47・F-2X2機からミサイルが1発ずつ、計3発が飛んでいく。

3発のミサイルはCIWSに寸分の狂いも無く命中し爆発。黒煙を吐くと機能を停止する。

〈レーザーCIWSは右主翼の残り1基です〉

〈巨大航空機がミサイルを発射!なんて、数なの……〉

主翼に隠されたSAMが発射され、30発のミサイルが10機の戦闘機に3発ずつに分かれて追い立てる。

JAS39Dは右バンク込みの右急旋回とフレアで2発を欺き、1発はスロットルを絞ったのとカナード翼直立の急制動とストールで回避して見せた。

F-15Jは急上昇をしてから、静止した様な錯覚が起きる程に急制動をかけて頭から落下、ミサイルをすれ違いざまに躲した。

RF-4EJはフレアを蛇行旋回をしながら、ベストなタイミングで散布し、3発のフレアで3発のミサイルを捌いて見せた。

F-2AとF-32機は持ち前の低空侵入能力を生かして、海面に触れているのでは無いかと思う程の低空飛行で上から来るミサイルをF-2Aは急な上昇で海面へと突っ込まれる。

浅野機は命中する寸前にコブラ機動からの急上昇で水柱を作り、撃墜した。

長瀬機も主翼を海面に付けた状態で横向きのコブラ機動を行い、水に着いた主翼がブレーキの役目を担ったのか、異様な程小さな旋回半径でミサイルに回り込み、ミサイルはそのまま暫く進むと自爆した。

F-2Xの2機は追われた瞬間に2機が合流に動き出し、2機がクロスした瞬間にフレアを4発ずつ散布し、集まったフレアを戦闘機の排気炎だと勘違いしたミサイルが突入。近接自爆した最初のミサイ

ルに巻き込まれたミサイルが次々に爆発する。

Su-47はミサイルに追われながら降下、フレアも散布するが欺かれずにSu-47を追いかける。

その前方からIl-44が急接近する。

〈ベルクト！ 俺の合図で左右のどちらかに旋回しろ〉

〈わ、わかりました〉

ベルクトがデバイスを強く握る。

バトラも操縦桿を握りなおす。

〈今！〉

Su-47が右に大きく、素早く旋回した瞬間にバトラがコブラ機動と同時にスロットルを抑えてストール。

機首を上に向けたまま下に落下する。

Su-47とIl-44を追っていたミサイルが機首方向から追いかける。

〈スラツシュ〉

そういった瞬間に展開されていたEMLが1回だけ吠えて、ミサイルを全て撃墜した。

撃墜したのを確認してからSu-47の前方を飛ぶ。

〈行くぞ〉

たつた、一言だがベルクトには何故か安心できる言葉だった。

〈はい〉

Su-47とIl-44がスロットルを開く。

(この人と一緒なら勝てる)

スロットルを操作しながら、ベルクトはそう確信していた。

(また、この感じだ……)

バトラは首筋を蜘蛛が歩く感覚を感じ、行動を起こした。

ベルクトとバトラが離れてしまった距離を詰める頃には、他の機体は既に距離を詰めていたが、ジャマーの所為で思うような攻撃ができ

ていなかった。

ジャマーの近くを通るだけで電子機器に問題を起こす為に不用意な接近ができなかった。

〈前方から行くぞ〉

ジャマーは後ろにしか発生できないと判断したバトラが前方から接近し、ベルクトもそれに続く。

〈FOX2〉

〈FOX2〉

バトラとベルクトがミサイル発射のコールして、ミサイルが空に飛び立つ。

バトラさんミサイルは下の右主翼機銃を破壊。

ベルクトの放ったミサイルは高射砲を破壊した。

バトラとベルクトはそのまま2機編隊を組んだまま主翼の間を通り抜けていく。

〈チェック・シックス、FOX2〉

機体の後方ロックオン機能を使ってミサイルを後方に飛ばし、ジャマーを4個破壊した。

ザイ・スピリダスが反撃とSAMを発射するがベルクトはフレアを撒いてブレイクして躲すが、バトラは機体の下に潜り込み、それを追いかけたSAMがザイ・スピリダスに命中するが特にダメージを与えている様な印象が受けない。

主翼から残っていたパラサイトファイターを発進されるザイ・スピリダス。

〈マルチ・ロックオン……ドライブ!〉

24発のマイクロミサイルが腹から撃ち出され、それぞれの目標に飛んでいく。

だが、数の問題か10機が生き残る。

〈行くぞ、グリペン!〉

〈うん〉

グリペン・慧はパラサイトファイターの撃墜を選択。

F-2AとF-3もそれに加わる。

F-15Jはザイ・スピリダスへの攻撃に邪魔だと思つたら撃墜する様だが、それ以外は基本的にスルー。

RF-4EJはザイ・スピリダスへの対応に集中する。

Su-47はバトラの近くを飛んで、カバーに入るが2機のパラサイトファイターに追われて、カバーに入りきれないでいた。

バトラもザイに追われるながらザイ・スピリダスの腹下に逃げ込む、見上げるとザイ・スピリダスが中央のハッチを開けていた。

ザイを放出した場所だ。

「させるかよ!!」

バトラがコブラ機動を行い機体を上向きに変える。

ここで正規型が出ると不利になる。危険を承知で行動を起こした。

〈〈内部構造の剥き出しは危険だぜ? スラツシュ!〉〉

2回目のスラツシュ。

I-44に上部ウエポンベイに搭載されたEMLから1発だけ発射されるが、脆い内部構造に受け止められる筈が無く、格納庫をズタズタにされ、内部に格納されていたザイが誘爆を起こしていく。

誘導は止まらずに撃墜間近だった。

バトラはザイ・スピリダスの後ろを上昇しながら飛び去り、超えた所でハンマーヘッドを使ってパラサイトファイターと向き合う。

〈〈墜ちろ〉〉

30mm機銃をともに受けたパラサイトファイター達が粉々になっっていく。

バトラが首を回すと彼方此方でザイの七色に輝く破片と黒い煙に赤い炎が青い空を彩っていた。

〈〈まずい! ザイ・スピリダス健在! 高熱源反応を感知! パラウールです!〉〉

マイケルの叫びに我に帰る全員。

〈〈目標は……ANTARES03です! 発射まで、10秒!〉〉

全員がパラサイトファイターの撃墜を行っていた為に離れていた。さらに相手は電磁投射砲。

どうしようもできない。

誰もがそう思った。

〈ぬうおおおおおつ!!〉

バトラを除いて。

バトラは機体を加速させる。

ザイ・スピリダスのパラウールの正面に来る様にエアブレーキ全開で減速する。

機体の腹から空気のカッションに抑えられた様に減速したバトラがザイ・スピリダスと向き合う形になる。

〈あと、5秒！ 退避を！〉

〈スラッシュ!!〉

蜘蛛が歩く感覚に襲われた時にチャージを始めさせた右EMLから300パーセントチャージで発射された弾丸が50mの距離をあっと言う間に詰めて、パラウールの砲口へと突っ込んだ。

その数秒後に内側から球体の物資が突然生まれかけた様に機体中央部が盛り上がると内側から爆発を起こし、半分に折られる様な形で日本海へと主翼の65パーセントを残して墜ちていった。

〈ANTARES02の無事を確認しました〉

〈ANTARES03も無事ですよ!〉

〈敵巨大航空機の日本海への墜落も確認した。今回もよくやった、ANTARES02〉

MS社と独飛の戦闘機がE-747の周りを囲む様に編隊を組む。

〈今回は、撃墜に成功したが喜んではいられない。今回の事で相手には巨大な航空機を所持している事が判明した。いつか別の大型兵器に襲われるだろう。その時は今日の様に行くかどうか……いや、今の君達に言うことではないな。さあ、小松へ帰ろう〉

作戦24 白いイヌワシと青いサソリ

ザイ・スピリダス撃墜作戦【亡霊成仏】から1週間が過ぎた。

その後の事も被害報告を纏める自衛隊はその間、一部の機能が低下もしくは停止する事態となった。

その中でも最も被害が大きかったのは、スクランブルできる機体の減った事だ。

自衛隊には撃墜された機体は居なかったが、全ての機体が大なる小なりの損傷を受けていて、各地の整備工場が連日フル稼働中らしい。

さらにMS社の整備工作艦（簡単な輸送船と小型航空機、戦車位しか整備工作できない艦）が応援で横須賀に入港。

機体修復を行っている。

そんな状態だろうとザイは御構い無しに日本へと侵入してくるがベルクトの亡命時に比べるとかなり減っているどころか通常の状態にまで戻っている。

理由としては、ベルクトに施された死の光【誘蛾灯】が効果を示さなくなったからだ。

方法というとZJAEシステムを常時発動してベルクトの【誘蛾灯】を相殺しているからだ。不定期でも、【誘蛾灯】と思しきEPCMは観測されておらず、八代通が原因を探っている。

さて、色々と言ったがこれは日本にいる片宮姉妹からのメールだ。

俺が今どうしているかと言うとバーフォード中佐と男性オペレーターを乗せたE-130（ZJAE仕様機）を連れて、ベルクトと一緒にミッドウェー島にあるMS社の基地から自衛隊小松基地に向かっている。

ベルクトの解体が決定していて、小松に帰っても待っているのは解体だ。

政治家共が自分の命を危険に晒すとわかっているものを身近に置く筈が無い。政治家は大抵の場合、人一倍自分の事が可愛いと思っっている奴らだ。

そこで作戦終了後に小松で給油と簡単な整備をしてその日のうち

に太平洋へと向かう事にした。

途中でMS社の空中給油機に給油して貰いつつミッドウェー島のMS社基地に着陸。

1日かけて整備をして、アメリカ本土にある本社基地へと移動。そこで、ベルクトの採用が決まっている面接試験を受ける。

かなり真面目に答えたそうだが、担当官がベルクトの可愛さに狂喜乱舞して物理的セクハラをしようとする。パンダイブした所をSu-47好きの元スペツナズ隊員の4人がシステムで迎撃した。

俺は空中コンボをリアルで見たのは初めてだ。見事過ぎるコンボだった。

『会社全体の仲が良いんですね』

そう楽しそうな笑顔で俺に言うが俺はただ単純にノリが中・高生なだけだと思う。

ベルクトの入社は問題無く決まった。

問題はドーターに部隊のエンブレムがつけられなかった事だが、シールにしたら問題なかった。

塗装は白くなるがシールは装甲の外だからだろう。

だが、それで1週間もかかるはず無く、装甲をチタン合金の装甲に張り替えたから長引いてしまった。

その間、ベルクトがロシア機乗り込みに色々と迫られたり（主に男性陣）可愛がられたり（主に女性陣）近くでシステム大会やったり（大抵、元スペツナズ隊員が圧勝する）が起きたりして出発したのは昨日で昨日の内にミッドウェー島に到着した。

その間もE-130はついて来ている。

そして、小松までの帰り道は民間機が少ない事と夜間飛行訓練と合わせて夜帰りを予定している。

〈〈そういえば、バトラさんが私に言った事を覚えていますか？〉〉
〈〈何か言ったかな？〉〉

ベルクトの通信が入った。

何を言ったか覚えていないし前振れも無い。

〈〈『夜間飛行をしながら星でも見ないか？』って言ったじゃ無いで

すか」

「ああ、初外出の最後に言ったな」

「こうして、誰かと星を見ながら飛ぶなんて初めてです」
ベルクトが俺に近づく。

装甲キャノピーは閉まっているのでバックミラーで顔を確認できる。

「仕事帰りでいいのか？」

「戦闘機で夜間飛行なんて仕事かその帰りじゃないとできないじゃないですか」

変な所でロマンチストですねと笑うベルクトに居心地が悪くなつて目視索敵を行う。

「バトラがロマンチストな訳無いですね。土ボタルの光が青と緑に見えたんですから」

「やめーや！ 人間的な目と動物的な目を持つて話はやめーや！」

「青だったら人間的、緑だったら動物的、白く見えたらロマンチストらしいな」

「バトラは人間の皮を被った節足動物じゃないですかね？」

「おお、マイケル。お前E-130のどこに座っている？」

「やめろバトラ！ E-130の電子機器がどれだけ高いかわかってんのか？」

「私の命 E-130の電子機器ですか!？」

飛行メンバーの楽しいな会話にベルクトが笑う。

「本当に仲がいいんですね。生きていて良かったです」

「それは良かった」

笑う声が絶える事無く、太平洋を渡って小松に帰った。

小松に帰って、3日後に試したい事があると云って八代通に呼ばれたベルクトとバトラ。

「EGG同期の状態をお前を含めた状態で観測する事にする」

「なんで、そんな事を？」

検査台にベルクトとバトラが横たわる。

バトラが横たわったまま話す。

「昨日、お前が名古屋まで飛んだ時に誘蛾灯が確認された。だが、お前が帰ってきたら誘蛾灯の発生が止まった」

八代通のその言葉にバトラが驚いた。

「スクランブルは!？」

「ZJAEで無効化してる。だが、観測はされた。そこで俺は誘蛾灯が止められるのはグリペンの安定稼働と同じ理由ではと思った訳だが、ビンゴだ」

八代通が折れ線グラフと湾曲した線が重なったグラフを見せる。

「わかるか!」

「まあ、簡単に言う原因は分からないがお前が近くにいるとベルクトは通常のアニマだという事だ」

（君がベルクトの居場所になつてくれるかとか言ってたな……あいつが……）

バトラは内心でヤリツクにやってくれたなと思うが、ヤリツクの作業だという証拠が無い。

（ヤリツク。ありがとうございます）

バトラとベルクトにはヤリツクの作業だと何故か確証が持てた。

「これからも、よろしく願いますね。バトラさん」

「此方こそ、よろしく頼む」

握手をする2人の耳にスクランブルの警報が響く。

「スクランブルか……」

「すまんが出てくれ。ドーターが君たち以外のものは整備中だ。すぐに出られるには君たち2機だけだ」

「わかりました。一緒に上がりましょう。バトラさん」

検査室から飛び出て、廊下を走る2人を走りながら見たバーフォー

ドはサーシャとバトラが一緒に走っていると勘違いしてしまった。
そんな事をバーフォードが考えているなどつゆ知らずに戦闘機へと乗り込む。

2機編隊を組んで、日本海の方へと飛んで行く。

凍てつく北の大地を飛び立った白いイヌワシは極東の島国で青いサソリに助けられ、居場所を見つけた。

そして、白いイヌワシは青いサソリと共に守る為にその翼を翻し続けるだろう。

その命が尽きて、天をあまねく照らす星になるその瞬間まで……

作戦25 小松基地は平常稼働です

下は海の青、上は空の青に挟まれた幻想的な場所を思い思いに飛び人間がいた。

だが、本人はそんな幻想的な場所を飛ぶ事を楽しめる状況ではない。

すぐ横を虹色の光を孕んだ小さな物体がすぐ横を通り過ぎて、バトラの背中に嫌な汗がほんの少し浮き出る。

戦争を生き抜いたベテランでもすぐ横を弾丸が通り過ぎれば気がでないし、後ろをビツタリと張り付かれれば精神的に追い詰められる。

バトラがスロットルを少し開けて加速と同時に上昇する。

後ろを飛ぶザイと呼ばれる戦闘機も上昇する。

だが、上昇能力の差か、徐々に距離が詰められる。

(……………今！)

バトラが推力を一瞬だけ止めて、その間に推力偏向ノズルを上90度に向ける。

向いた瞬間にアフターバーナーをほんの少し少し使用した事で人間が壁を使ったバク転をした様な動きをする。

ザイは後ろに疲れると判断した瞬間にアフターバーナーを吹かして逃げ様とする。

「遅い」

一步遅かったようでバトラの指は操縦桿の兵装ボタンを押していた。

コクピットの斜め後ろに搭載されたキャノン砲から青白い光が一条発せられるとザイは機体胴体は中央からポツカリと穴を開けて、他の部分は圧力に耐えられなかった場所からもげていく。

最後にはザイは虹色の破片になって海に落下していった。

〈空自管制機、聞こえるか？ ザイの撃墜を確認した。RTB〉

〈了解です。ザイ5機の撃墜お疲れ様でした〉

「ふう〜。疲れるな……」

通信機が作動していない事を確認して独り言を漏らす。
いくらベテランでも1対5は疲れるものだ。

そんな愚痴をこぼすがパツと見では疲れているようには見えない。
敵のトップエース部隊4機を相手に大立ち回りをするよりかは楽だ。

因みにどうでも良い事だが、元々、バトラの出撃は今日も無かった。
なら、何故か？ 【誘蛾灯】が何かしらの理由で発生したのか？ それはない。

小松基地にもZJAEシステムが装備されているのでその心配はないならどんな理由なのか？

なんて事はない。タダの休暇交換だ。

慧とグリペンの休暇をバトラの休暇と交換して、ベルクトと一緒に本社に帰っていたのだ。

「あ」

バトラが間抜けな声を漏らした。

旅客機の離陸と被った為だ。

チラリと燃料計を見る。

「問題ないな」

小松基地を1周してからアプローチする間に小松基地にへばりつく様に待機していた写真家や戦闘機オタク・マニアに何枚も写真を撮られていたのをバトラは知らない。

「どうしたよ。これ」

基地に戻り、遅めの昼食をと思ったバトラの目の前に顔を青くして、背もたれに首を乗せて天井を見るベルクトと偏頭痛を我慢する様なファントムがいた。

「……いえ……頭痛と飛行機酔いが……」

「……ウツ……気持ち悪いです……」

か弱い声を発するファントムとベルクト。

(揺れの余韻か視界がシエイクされた。もしくはその両方か……)

バトラが食券の自販機を通り過ぎ、売店で紙パックのジュースを購入して、ストローをさして机の前に置く。

「二応、これを飲め。気分が楽になる」

そう言つて、渡したのは100パーセントのオレンジジュースだった。

柑橘系果物の汁は乗り物酔いを和らげる類の効果がある。

酔い止めの予防が効かなかつた時の対処で使える。

ベルクトとファントムは同時にオレンジジュースを飲み、暫くしてから口を開いた。

「ありがとうございます。気分が楽になりました……」

「少し、気分が良くなりました……感謝します」

顔はまだ、青いが声に生気が戻った。

バトラはそれを近くの席でうどんをすすりながら聞く。

気分が悪い奴の近くで匂いがきついだらう物を食べないというバトラの気遣いが感じられる。

「それは良かったが何があつた？ お前らが酔うなんて何があつたんだよ」

アニマは人間では不可能な機動を行える。つまり、そう言つた事で酔うような事はない筈なのだ。

「なんでもありません……他のドーターとダイレクトリンクしただけです……」

ベルクトがそう答えると納得したのか頷くバトラ。

Su-47のパーツを気にしていた船戸に理由を聞いていたバトラはドーターが他のアニマとの接続は難しい事を知っている。

AZJ戦闘機もAZJシステムの感覚障害防止機能は他のパイロットだと機能せず、下手をすると酔った様な感覚を与える事があるが、それと同じかとバトラは想像する。

「なんでまた不可能に近い事を？ 八代通が？」

少なくとも意味無くそんな事をする人間ではない事を知るバトラ

は疑問に思った事を漏らす、ファントムもわからないと言う。

(情報通のファントムが知らないとなると痕跡を電子的に残していないかそもそも残してないか、紙媒体の可能性もあるな)

証拠もきつかけも無い疑問や憶測を言う程に口が軽い訳では無いので別の疑問を聞く。

「別ドーターにリンクしたしたからなつたのはわかるが、何でなつたんだよ」

どのドーターでそこまでのダメージを負ったのかという好奇心に近いものだった。

「JASS39Dです……というか、それに乗って繋げた瞬間に先程の様な感じに……」

思い出したのか血色が薄くなり、綺麗な白い肌が青白くなる。肌が白い分だけ青さが酷い。

「前進翼とクロスカップルドデルタだからな……というか、カナード機と三翼機だから、思いつきり違う機体だな」

それならそうなるかと納得するバトラがファントムに視線を移す。

「Su-47です……」

こつちもこつちで表情が青い。

「前翼機……それは無茶があるわ……」

バトラもS-32になんの因果か乗った事があつたが、機体に振り回された覚えがある。

「というか、なんでそんな事をしたよ？」

「八代通さんに言われて……」

「お父様に繋げてみろと言われて」

「理由の説明無しかよ」

相変わらずの説明責任を果たしていない八代通に頭を抱えるバトラ。

「でも、何か有つたのは間違い無いよな……ドーター関係……」

「何処かのドーターを回収するのでしょうか？」

「それなら輸送機で運べば良いでしょう?」

3人が頭を捻るが答えは出ない。

「そういえば、グリペンと慧って何処に行つたんだ？」

この話題はやめようと口外に言うバトラにフロントムが乗つかる。

「さあ？　ただ、グリペンが相手ですからね。一般的なデートでは無いでしょう」

「そうですね。食べ歩きのような気がします」

ベルクトも乗っかり話題が完全に切り替わる。

「そもそも、一般的なデートって何よ？　俺はデートというものは無縁な生活送ってるからわからんだけけど？」

その言葉を聞いたフロントムが獐猛ではあるが蠱惑的な笑みを浮かべた。

それを見たバトラは微妙に離れるが、フロントムはそれ以上の接近をして密着とも言える距離まで詰める。

「それはいけません。今の環境は周りに女性の割合も多いですし女性の取り扱いを理解していないのは致命的です」

「……それもそうかな？」

フロントムの言葉に納得するバトラにフロントムがさらなる追い打ちをかける。

「それで、宜しかったらですが……私とデートしませんか？　女性の取り扱い方を実践形式で手取り足取り教えて差し上げますよ？」

同時に身体を摺り寄せるフロントムにバトラが顔を赤くして離れようとフロントムがさらに身体を摺り寄せて来る。

「はは、離れて下さいー」

突如としてフロントムとバトラの間に空間が生まれ、その空間にベルクトが素早く滑り込む。

「その……女性との付き合い方でしたら、私を実戦形式で細かく教えますから私と外出しませんか？　前のお礼もしたいですし」

『前の』と言われて思い出したのは記憶を失った時に外出した事だろうとあたりをつける。

「いや、お礼をして欲しくてした訳じゃ……」

なんと言えば良いか言葉を探すバトラにベルクトが先に話す。

「やっぱりそうですね。フロントムの方が可愛らしいですし、胸

を大きいですからね……貧相で可愛くもない私と外出したくないですよね……」

何故か自虐に走り出したベルクトに慌て始めるバトラ。

これを聞いたフロントムがベルクトに喧嘩腰で告げる。

「あら、ベルクトさんは男性を1人墜とすのに身体を使わないとダメなんですか？ 女性なら内面で戦うものですよ？」

（内面ならベルクトの圧勝だよ腹黒フロントム！）

「なに？ それを言ったらフロントムさんこそさつき、ひつついてたじゃないですか。人の事を言えませんよね？」

（フロントムも棚に上げてるじゃねーか!!）

ベルクトとフロントムが口喧嘩を始めてどうして良いかわからなくなつたバトラは開け放たれていた窓から飛び出していった。

「あれ？ バトラさんは何処でしょう？」

「そういえば、いませんね？」

2人が気付いたのは数分後のことだった。

「逃げたけど問題はないよな？」

「何がですか？ 兄様？」

「うおい！ いつの間に！」

ハンガー近くでこぼした独り言を偶然拾った片宮姉妹に追求されて驚きバトラ。

「いや、なんでもない。帰ってきたんだな」

「はい。専用コクピット改修が終わったのでつい先ほど」

本社工場でコクピットの改造を行ってきた片宮姉妹の2人。

彼女達の専用機は通常のコクピットとはかなり違う作りになっている。

まず、目に付くのが2本のサイドステイクタイプの操縦桿だ。

これは機体を縦に半分を別々に操縦が行える様になる。

こうする事で機体制御の精密さを引き上げている。

A-110の方もこれと同じ改造を施したことで大口徑の火砲を存分に使うことができる。

もう1つはベダルの様なものだ。

これはエンジンのスロットル操作に使われる。

左右別々でスロットル調整する事で機動性を引き上げられる。

A-110にも同様の改造が施されている。この機能のおかげで攻撃機であるA-110が重装備の戦闘機としての使用できる所以だ。

ただし、操作方法が2倍の数に増える事とタイミングがシビアなので現在は片宮姉妹以外は採用していない。

ただし、何かしらの理由で誰かが操縦しないといけない時は通常のサイドスティックタイプとしては操縦できるようになってる。

「それじゃあ、模擬戦でもするか？」

バトラがそういった瞬間にスクランブル警報がなった。

放送を聞くと中国からの接近という事でザイであると考えられるのと数が多い事でAZJ戦闘機での対応を求めるということだった。

「丁度良いので行きます。操作自体は問題ないので」

「わかった。でも、気をつけるよ」

「はい。行ってきます」

燃料給油と武装取り付けが済んだ機体に乗り込む片宮姉妹を敬礼で見送るバトラ。

その数時間後には無事の姿で2機が帰ってくる。

今日も小松基地は平常に機能していた。

第27話 相反す者

「わけわかんねえ」

慧が格納庫の中で漏らした声を耳ざとく拾った人物が振り返る。灰色だけが支配する格納庫の中、浮き上がるように白い髪と肌、何処か歪み、狂気や危険を孕んだ光をスピネルのようば赤い瞳に宿す少年だった。

「操縦技術で困っているのかな？」

はにかむように笑う姿は、何処か『近所に住む兄』のようだと慧は印象を持つ。

だが、無茶な事を言ったり、快樂主義者のような言動や行動、歴戦の戦士のような考え方、時折見せる悲観漂う姿に別の世界の住人に思えてしまうのも事実だった。

「本当にわけわかんねーよ」

「何がだ？」

「あんたの正体だよ」

呆れたように話し慧にわけがわからないと言われた少年も困ったような笑みを浮かべる。

その姿に慧は、大人で紳士的な男性と言う印象を持ってしまい、本当に何者なのかわからないと言うような顔になる。

「俺はMS社 M42飛行中隊 アンタレス隊 2番機 コードネームはアンタレス02兼M43飛行中隊 アルタイル隊 1番機 コードネームはアルタイル01のTACネーム、バトラだ。それ以上でも、それ以下でもないよ」

「相変わらず、わかんねーな。あんたの人なりがわからない」

「俺は、何時でも自分の素を見せているんだがな」

(どんな性格だよ……)

バトラの言葉に項垂れる慧。

「それより、座学やトレーニングは良いのか？ わからなければ、教えるし訓練も付き合っても構わないが……」

「そんな気分じゃねーよ」

「だろうな。何か新しい作戦で？」

その言葉に慧が目を見開いた。

何も言つて良いないのに言い当てられた事に若干の恐怖心を抱いた。

その行動にバトラは、啞然とした顔で口を開いた。

「まさか、当たるなんてな……」

カマをかけただけ、当てずっぽうだとわかると警戒心も恐怖心も無くなった慧がゆっくりと浮き上がり気味だった腰をパイプ椅子に戻す。

「あんまり、言いふらすなよ」

慧が釘を刺してから語り出す。

フランスの中尉が自衛隊のドクターの回収任務に民間人の参加に反対し、空母の撃沈を要請した話をした。

「恐らくは日仏間での交渉だから、俺たちに情報開示が行われるタ
イミングは作戦決行が決まった時だろうな。だが、それだけじゃない
だろう？」

心の内を見通すように目を細めたバトラが告げた言葉に慧がビク
リと身体を跳ねさせる。

わかりやすいと肩をすくめるバトラに慧はグリペンと出掛けた時
の話をする事にした。

「グリペンと出掛けた時の事を知ってるよな？」

「知らない。デートか？」

ニヤリとした笑みを浮かべるバトラに慧はしまったと冷や汗を流
す。

バトラはパイプ椅子の背もたれを抱えるように座り、正面から向き
合う形で陣取る事で逃がさないから、洗いざらい吐いてしまえと言
う場と空気を同時に作り出した。

慧は観念して、溜め息を吐いてから語り出した。

「人形に命をかけるのは間違っている……か……」

顔を上に向けて考えるバトラの顔が酷く冷ややかな物に見えてし
まった慧が、必死に自分の考えでは無いことを話すが、その様子が可

笑しかったのか、カラカラと言う擬音が似合う笑顔を見せる。

「大丈夫だって、もし、そうならグリペンと飛んでいないだろうか？」
その言葉にハツとした顔を浮かべる慧にバトラはクスリと笑みを浮かべるが、即座に真剣な顔付きになる。

「そいつの言う事は正しいな。アニマとドーターは兵器の括りでは、無人機だ。無人機を守る為に人間が死んでは、無人機という考え方に相反する。ぐうの音も出ない正論だな」

その言葉に慧が椅子から立ち上がりバトラに掴み掛かろうとするが、額にバトラの指を置かれて、立ち上がれなくなった。

「だが、正論ですか感情論を抑えられるとは限らないのが人間だ」

その言葉を聞いて、落ち着いたのか立ち上がるうとしなくなった慧を見て、バトラは指を退かした。

「もし、俺が件の人物と同じ思考回路だとして、ベルクトを本気で救おうとするか？ もし、そうなら宇宙にでもぶっ飛ばせと言う」

慧の反応を確認してから、語り出す。

「俺は、撃沈ではなく、回収を押そう。何故かって？ 戦力増強以外に何がある？ 俺たちは防衛戦でしか勝利を収めていない。防衛戦の勝利は戦術的に見れば勝利だが、戦略的に見れば敗北も一緒だ」
バトラの言葉に慧はわからないと言う表情を浮かべる。

「わからないか？ 攻めてきた敵に攻勢に出られる程の損害を与えれば完全勝利だ。だが、俺たちはどうだ？ 防衛しただけで攻勢に出られないどころか、2度の上陸作戦失敗で俺たちの戦力は少なくなっている状況下だ。戦術では勝ちを拾っているが、戦略では負け続けている。だからこそ、俺たちは貴重な戦力を捨てるという選択肢は出来るだけ捨てたい」

その言葉に慧が頭を抱える。

「混乱してるのか？ わかりやすく言えばサイコロだ。件の人物はサイコロの1を八代通は2を俺は5を見ている事だ。サイコロは見る角度で目が変わる。そういう事だ」

この言葉で慧は納得が行ったという顔になる。

100人いれば100通りの見方ができる。必ず何処かで食い違

う。ならば、食い違うからと行って排除したり、正す必要は無い。そいつはそいつ。俺は俺のやり方でやれば良い。

その安心感を手に入れた慧は何処か雰囲気が変わっていた。

「ありがとうな」

「気にするな。仲間だろう？　遠慮せずに話せばいい。俺も遠慮無く言つてやるから」

その言葉に慧が苦笑いを浮かべるとベルクトがいつの間やら現れた事に気付かなかつた。

「何を遠慮無くするんですか？」

「「おわ!」」

2人同時に驚く慧とバトラに令嬢のように笑うベルクト。

「ベルクトつてステルス機だったか？」

「な訳あるか。というか、これは深窓の令嬢か？　何処ぞの熟練老兵とは訳が違うな」

ベルクトの笑みを見て、別の人物を逆連想したバトラにベルクトが引きつった笑みを浮かべる。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴ』と言う擬音が聞こえそうな程のファントムが立っていた。

流石のこれにはバトラも目を揺らしながら、逃走しようとするがベルクトの身体を張って捕まえられる。

「離せ！　離せベルクト！」

「嫌です。自業自得です！　というか、捕まえないと私がどうにかなりそうです！」

「お前ならR-18Yで済む。だが、俺はR-18Gだ！」

「バトラさん」

ベルクトとの口論もファントムの鶴の一声で止まった。ファントムがゆっくりとバトラに近付き、腹の腰近くを抱えると同時に腰と膝を曲げて、バトラを後ろへと叩きつけた。

バトラは声を上げる暇も無く、白目を剥いて気絶した。

「失礼しますね。こんな少女を老兵なんて」

慧もベルクトも『いや、西側第3世代ジェットで現役貼ってる数少ない機体だろ』とは、口が裂けても言えなかった。

数少ないF―5も全てがF―16に変わった事で、F―4が最後だろうと言われている。

「クツソ。気絶した」

バトラが復活したが、フアントムの話題を振り返すつもりは無いためか黙って、メンバーに加わる。

「そういうえば、ベルクトとフアントムは新武装を載せたんだっけ？」

「あ、はい。誘蛾灯を改造したものだそうです」

「寄せ付けないタイプか？」

「それだと良いんですけどね。全然違う物ですよ」

ですが、とフアントムが含みのある笑みを浮かべる。

「紆余曲折あったとは言え、私達はここ数回の大きな作戦で敗退しています。そろそろ、人類の守護天使の役目を果たさないと本当に世界が終わってしまいかねません」

「フアントム？」

フアントムの緑色の髪が揺れる。

少女が振り向いた瞬間にドーターと彼女は緑の炎に包まれたように輝くようにバトラは見えた。

清冽な光が弾け、双発の怪鳥を背に両手を広げる。

「宴を始めましょう、皆さん。人の未来と繁栄を祝う祭典を。押し寄せる敵を供物に変え、祝福の炎を放ち、祭壇への道を切り開いて上げます。ですから、どうぞ前に進み続けて下さい。恐る事なく、自らの信念を貫いて下さい。魔法と熱狂の時間を共に」

「幸先やばそうだな」

バトラがベルクトの状態を見て、漏らす。

ベルクトは薄桃色の肌を青くしながら、横になっていた。

「ラファールって、機体の形状がお前と似てるんだろ？　なんで、こんなに苦戦するんだよ」

「まあ、仕方ないわな。グリペンとラファールって、デルタ翼にカナード翼と似てるが、大きく違うのがあるからな」

慧はわからないが、バトラには察しが付いているらしい。

「え？」

「お前な〜」

慧の反応に呆れを隠せないバトラが深い溜め息を吐いた。

「作戦の重要目標なんだから、予習くらいしろ」

「す、すまん」

「まあ、グリペンがこれだから、教えてやるよ。この際、詳しくなバトラがニヤリとした笑みを浮かべ、咳払いをしてから語り出す。

「グリペンとラファールの大きな違いはエンジンが単発で双発かの違いだ。機体形状がファントム、イーグル、ベルクトの中で一番近いからこの人選と言う訳だ」

「成る程な。でも、どうして双発に？ 推力不足か？」

「1発約5トンで、2発で約10トン。それでも、推力が不足気味。大人しくF404系を使えと言いたい。独自技術に拘るのがあの国の悪い所」

グリペンが復活して、フランスに文句を言う。

それにバトラが待ったをかける。

「フランスもF404系を使いたかっただろうが、こうなったのは深い訳がある」

「どんな訳だよ」

「長くなるが？」

「教えてくれ」

咳払いをしてから、説明を開始する。

まず、ラファールが生まれる理由は、戦争と言うよりも多用途戦闘機の更新だな。

この時に英国の次期戦闘機と要求が似ていたからタイフーンの開発計画にフランスが参加したんだが、問題が発生した。

それが、エンジンが双発になった理由だ。

何故かって？ 簡単だよ。共同開発はよく言えば、各国の最高の物

を取り入れられるが、悪く言えば、取り入れたい物を取り入れられないとも言える。

フランスがタイフーンの計画であるE C A計画にフランスのエンジンが選ばれない可能性が高かった。

選ばれなければ、フランス唯一のエンジンメーカーが倒産する可能性があったからだ。

自国でエンジンが作れないのは痛いからな。日本がそれだ。心神や震電のエンジンで日本はその苦境から脱せたが、フランスが一昔前の日本状態になる恐れがあった。

そう言う理由からF 4 0 4系は使えなかった。

フランス政府もやむをえない決断だったんだろうな。

こうして、バトラの講座は終了した。

その後の空気はお通夜状態だった。

「じゃあな。俺は仕事が残っているから」

そう言って、バトラは去って行った。

〈〈よし、一旦終わろう〉〉

〈〈ハア……ハア……ありが……ハア、ござい……ます〉〉

格闘戦の訓練を装甲キャノピーのモニターを利用して行ったが、心身共に疲労したのか、喘ぐようではあるが、綺麗な響きを持つベルクトの呼吸音にバトラは言い表せない興奮に似たものを感じていた。

S u - 4 7のкокピットからベルクトが出るのを手伝う内に汗で身体にへばりついた汗と髪が言い表せない蠱惑的な姿にベルクトを変えていた。

内心で燻り始めた感情を追い出してベルクトに肩を貸すバトラの前にスーツを着た女性が立っていた。

その目はベルクトに注がれ、冷たい目を向けていた。

バトラは一人で立てることを確認してから、少し離れた場所に置いてある飲み物を飲んで来るようにベルクトに行ってから女性に近づく。

「えつと？ ブーランジエ中尉でしたっけ？ 部下のベルクトが何か粗相でも？」

「そう言う訳ではない。ただ、君がアニメをどう見てるのか気になってな」

「アニメですか？ そうですね。ドーターの制御ユニットですかね」

「慧君とはかなり、違うようだが？」

ブーランジエは背が若干低いバトラを見下ろす形で見つめる。

「なら、どうして肩を貸した？ 訓練を共にする？」

「なら、貴方は同じ道具の……その腕時計を買ったら、そのまんまですか？」

「!？」

ブーランジエが目を見開いた。

「道具は手入れ訓練をしなければ簡単に壊殺されまれます。それが嫌だから、手入れ訓練をするんです。そして、大切な道具仲間だからこそ、助け合う。壊殺されてれて欲しく無いから。貴方にありますか？ 大切にしようと思う道具仲間が？」

「……道具は所詮、道具だ。その道具に見合った働きをしてくれれば良いんだ。笑ったり、話したりする必要はない。君はアレが好きか？」

ブーランジエが指差す先には、Iレ-44があった。

それを見たバトラが笑いながら、答える。

「その質問をMS社の現場傭兵にするんですか？ 相当な馬鹿か、俺たちを勉強していないのか、その両方かのどれかだな。フランスの情報仲を扱う部署としては致命的だ」

嘲笑うバトラにブーランジエが真面目に答えろと怒鳴ると笑いを堪えながら答える。

「好きですよ。だって、好きじゃ無いものに命を預けられませんかし、好きじゃ無いと機体も命を預けてくれませんか。俺たちは自分の命と技術仲を売り物にする。好きじゃ無いものに命を乗せられないだろ？ それに好きだから、命を乗せられるから、道具は答えてくれる

時がある」

ブルーランジエはバトラを訳がわからない物を見るような目を向けると去って行こうとした。

「あ、そうだ。最後に」

「なんだ？」

それをバトラは呼び止め、ブルーランジエは振り返る。

「俺が言ったのは、あくまでも、ロシアや他国のアニメ全般だ。ファントムやイーグル、グリペン、バイパーゼロ、そしてベルクトに抱く感情は別物だ」

「それはー」

話はこれで終わりだと言うようにブルーランジエの言葉を無視して、ベルクトへと小走りで駆け寄り、ベルクトがペットボトルから口を離して、キャップを閉めた瞬間、後ろから抱き付いていた。

ブルーランジエはそれを冷たさと不可解な物を見るような目で見ていた。

作戦28 シャルル・ド・ゴール潜入

インド洋上空。

6機の戦闘機と1機のテイルローター機が飛んでいた。

〈ALTAIR01からALTAIRの各機へ、ここからザイの勢力圏に侵入する。再度、安全装置を確認しろ〉

〈ALTAIR03了解です〉

〈ALTAIR04わかりました〉

即座に詩鞍・詩苑から返事が飛ぶが、ベルクトからの合図が来ない。

〈…ALTAIR02? 機器の不調か?〉

〈あ! すみません。ALTAIR02ウイルスコです〉

〈機器の不調じゃなければ良いが、出来るだけ早く返事くれるとありがたいな〉

〈ごめんなさい。バトラさん〉

ベルクトが心配させた事なのか声に抑揚が無くなるが、気にするなと笑い声混じりにバトラが通信を入れると元気を取り戻したように明るい声が響く。

〈BARBIE03から各機へ。空母を視認しました〉

〈ALTAIR01了解。ALTAIR隊各機へ、敵の侵攻が予測される。周辺警戒を厳にして飛行せよ〉

〈ALTAIR02から04了解しました〉

周辺警戒を始めた瞬間にフロントムがザイを発見する。

〈BARBIE02 エンゲージ!〉

イーグルが待つてましたと言わんばかりに敵機へと接近する。

それをベルクトが嗜めるように注意を発する。

〈1人で行かないで下さい!〉

ベルクトが機体を傾けた瞬間にバトラが叫んだ。

〈右から5機のN型お客様だ!〉

〈え!?〉

〈ベルクトさんは、イーグルさんの援護へ! 行きますよ詩鞍〉

〈ええ、詩苑〉

RF-4TPと2機のA-10が右側に機体を傾けて、旋回。ザイと向き合う形を取る。

<<ALTAIRO1>>

<<03>>

<<04>>

<<<<エンゲージ!!>>>>

三角形を描く様に並んだまま、螺旋を描く様に旋回しながら、接敵した。

ベルクトとイーグルは3機のザイを相手に格闘戦を繰り広げていた。

イーグルは経験と機体性能をフルに利用して2機のザイを抑えるが、ベルクトは機体性能が勝っていても、戦闘経験の無さから、1機を抑えるので精一杯だ。

イーグルが、パワーダイブでザイを引き剥がしにかかる。

ザイも逃すまいとパワーダイブで追いかけるが、推力に物を言わせたイーグルの急な上昇に着いていけずに追い越してしまう。

もう1機のザイがイーグルの後ろに辛うじてつく事が出来たが、ハンマーヘッドを行ったイーグルに背中を晒す事になり、20m機関砲を喰らったザイが、投げられた石がバウンドした時のような動き方をしながら、海へと落ちて行く。

ベルクトもザイの後ろに付いていたが、ミサイルのロックオンができない程に動き回られた所為で撃墜できずにいた。

ベルクトは焦りからか頬に汗が伝っている。

ザイの急旋回でロックオン可能な場所から瞬時に離脱された事に驚いた所為で反応が遅れて、ザイを視界からも逃してしまった。

急いで後ろを腰ごと曲げて、確認するとザイが間近に迫っていた。だが、攻撃の経験値は低くても、回避の経験値はバトラの訓練で培われていた。

(ザイは、バトラさん程じゃない！)

より強い存在と戦ってきた。それは自信に繋がり、無用な力をベルクトから抜かせた。

手始めに銃撃の回避を選んだベルクトは機体を横転させ、右斜め下に逃げる。

逃げた瞬間に銃撃が機体の腹を掠めそうになるが、気にせず飛行を続ける。

ザイが大急ぎで追いかけているのを確認したベルクトはわざと推力を落として、急激に距離を詰めさせた。

当然の接近にザイが減速を開始した瞬間に偏向ノズルをフルに活用して、ザイに背中を見せたまま横をすり抜けて、後ろに張り付く。

ザイは後ろに付かれたのがわかると加速してロックオン圏外に逃げようとするがベルクトはレーザー誘導ミサイルを発射して、撃墜する。

赤外線探知のロックオンが行える1500mからは退避できても、レーザー誘導を振り切れない一直線の行動故だった。

少し時間は遡り、空戦で5機が護衛から一旦離れた時間。

フリー状態のファントムが護衛を続けるが新手で3機ザイが現れるとファントムが迎撃に移る。

だが、その3機編隊がファントムを捕まえた瞬間にレーダーが探知できない高度を飛んでいたザイが猛スピードで護衛対象であるテルトローター機に接近する。

〈パラレル・マインズ〉

ファントムの通信が聞こえると同時にザイは動きを止めた。だが、ザイの変化がそれだけでなく、体色も七色のガラスのような色からエメラルドの様なカラーリングに変更される。

〈ファントム。味方になったザイに告げてくれ。敵味方識別装置^Iに反応しないから、俺の射線に入るなとな〉

〈わかりました。伝えておきます〉

〈上方に3機確認。ベルクト。ついて来い〉

〈了解です〉

ベルクトの機体がバンクした直後にバトラの機体がシャンデルを使い上昇する。

ベルクトの偏向ノズルを使って追いつがる。

だが、推力のおかげかベルクトは高度が揃う頃にはしつかりと2番機の位置に張り付いていた。

〈(エンジン推力上げられないかな?) ベルクト。先にミサイルを撃つて、攪乱させる。1番動きが鈍い奴に食い付け〉

〈了解です〉

〈いくぞ? FOX3〉

RF-4TP-AZJの翼下からレーザー誘導方式のミサイルが撃ち出された。

ミサイルはバトラの正確な誘導に従い、ザイへと急行していく、狙われたザイの2番機と思しき機体は反応できずにミサイルに破壊される。

ベルクトは反応が鈍かった機体の背部に回り、追いかけて展開する。

バトラはザイに後ろを取られるがコブラ機動を取ること即座に背後に回った。

レイルをザイに合わせて、トリガーを引こうとした瞬間にフアントムから通信が入った。

〈この後の作戦を考えて、引き?がすかマークした状態にして下さい〉

バトラが作戦を思い出して、ドックファイトをわざと続ける様に追いつく。

ザイが自分を無視して引き?がしに来た時は1秒にも満たない射撃で警告するを繰り返す。

そんなことを繰り返しているうちにテイルローター機は空母「シャルル・ド・ゴール」へと着艦していた。

テイルローター機からフランス兵とスーツ姿の女性が降り、暫く

してから少年とピンク髪の少女が降りる。

〈へそれじゃあ、作戦通りをお願いします〉

詩鞍の言葉を引き金にベルクトが周りのザイに対して、パラレルマインズを使用する。

ファントムのととは違い、内蔵型になっているベルクトのパラレルマインズは機首にある出っ張りが1つの2つに変わる程度の改修が施されていた。

〈制空権の確保を確認。テイルトローターを邪魔じゃない所にずらしてくれ〉

周りのザイが虹色の発光から真珠の様な輝く白色の発光に変化したのを確認すると着艦の為のアプローチに入った。

無防備になる瞬間を襲われない様に上空を厳重警戒する飛行機達に守られながらも、空母に着艦した。

(無事の着艦だな)

バトラはここ最近の着艦では必ず何かを壊していたが、今回はそんな事は無く、無事に終わった事に安堵し、冷や汗を拭う。

今回の作戦では空母内部に侵入し、目標の搜索・確保が目的だが、M社にも協力要請があったが、急な事で陸上戦力を呼べなかったという背景から、空中戦力の中でも、トップクラス(2位との差は歴然)の実力を誇るバトラに陸上戦力の代わりになることになった。

発着艦可能な機体で陸上戦闘可能という人材がバトラ以外に居なかったというのもある。

機体から降りるとフランス兵達が機体を邪魔にならない場所まで持っていく。

その間に護衛を務めていた有人戦闘機とドーター達は周囲を警戒飛行した後にバンクをしてから翼を翻した。

その中でSu-47とA-10だけは最後の最後に離脱していた。

「おーい、2機降りてくるぞー」

フランス兵の1人が空を示しながら叫ぶ。

緑と白のザイが感覚を開けて、空母に着艦しようとしていた。

翼の形状を変えて、水蒸気の粒を切り裂きながら、徐々に高度を上げ落としていく。

その侵入角度と速度にフランス兵が慌て始めるが、バトラはそれを涼しい目で見つめる。

着艦する瞬間に2機ともフワリと上昇して、風が徐々に弱り、ゆつくりと重力に従って下に降りた。

その機動は下からの強風に煽られ、徐々に風が弱る事で元に戻るスカートのような機動だった。

『ふう、緊張しましたあ』

緑のザイがタキシングしながらエンジン音を殺して行き、エンジン音が弱まると拡声機を通した様な響きで間延びした声が聞こえてきた。

その声を聞きながら、バトラは白いザイに意識を向ける。

白いザイはエンジンをとうに切っているのか駐機場所で静かにその心臓と翼を休めていた。

『はあく。ドキドキしました』

耳では無く、頭に響く様な声だが、不快な感じはしない不思議な声が聞こえた。

『皆さん無事そうで何よりです。私達は外との通信基地代わりですから、何か当たったら仰って下さい』

白いザイから語りかけた言葉と言うよりもザイが喋るという現象に度肝を抜かれている。

そんな状況でも、バトラは白いザイと緑のザイに近づいて、声をかける。

「2機とも本体？　の情報は引き継いでいるのか？」

『そうです。記憶と感情は継承してますよ。バトラさんも慧さんのこともちゃんと認識できてます』

『勿論ですよ。バトラさんの事はしっかりと認識できてます』

「なんと呼べば良い？」

分かれているとはいえ、完全なフロントムとベルクトという訳ではないと気付いているバトラは呼び分けは必要と判断していた。

『そうですね。12番目……トウエルブとお呼び下さい。親しみを込めてトウエルブちゃんでも可です』

『なら、シヤスチと呼んで下さい。意味はわかりますか?』

『ロシア語で6……だったかな?』

『ダー』

『スパスィーバー』

軽く頭を下げてから白いザイを見つめるバトラ。

敵として見た事は有っても、味方としてみるのは初めてだった。

バトラの目にザイは輪郭が朧げで本当にそこに存在するのか怪しく感じるが、機体の内側を万華鏡の様に移り変わる光の模様が存在感をアピールする不思議な機体だった。

「ツツ!?!」

バトラの頭に鈍痛が響き、骨と肉が歪に捻られるような不快な感覚が襲う。

『わああ!?! そんなに見ない方が良いですよ。中の次元が変な風に入り混じってますから、気をつけて下さい』

「言うのおせーよ……」

頭を振りながら答えるバトラと慧も同じく、頭痛に襲われたのかうずくまっていた。

慧が復活するとブーランジェを中心に部隊の再編成が行われ、3つの部隊の内に1つがザイの防衛を行い、残りの2班は生存者とドクターの搜索に割り当てられた。

「さてと、行くか……」

腰に吊るしたベレッタ92を点検するバトラにシヤスチが声を掛ける。

振り向くと白いザイが明滅していた。

『これを持って行って下さい』

機首が花が咲く様に割れ、その中央部に胚珠に似た丸い物体があった。

「なにこれ?」

中央部の丸い物体をもぎ取る。

胚珠の様な物体はもぎ取るとデコボコした宝石の塊の様にも見えた。

『コアです』

『ギャアー!』

『痛い! 痛くないけど痛い!』

確実に握った物体から声が聞こえたバトラはコアを取り落としてしまうが、バトラが反射でコアをリフティングの要領で蹴り上げて、掴む。

掴まれたコアがバトラの手の中で震える。

『き、気を付けて下さい! 割れたたらどうしてくれるですか!』

『お前こそな脈絡無く喋るんじゃないよ! え、コア!? 取外せるのか、そんなの!?!』

『まあ、サブコアが幾つかありますので、私の意識はそっちに残して置きました。なんと言えば良いのでしょうか……』

『メインコンピューターとサブコンピューターみたいな物か』

バトラのその言葉にベルクトが肯定する。

ベルクトのコアをジャケットの底が広いポケットに慎重に入れるとフランス兵に小走りで近づくとアサルトライフルを2丁持った兵士がバトラにアサルトライフルを渡す。

『バーフォード中佐から頼まれていたものだ』

フランス兵がフランス語で喋りながらアサルトライフルを渡す。

『ありがとう』

バトラが受け取りながら、フランス語でお礼を言ってから、銃をひっくり返したりしてまじまじと見る。

それを見たフランス兵が慌てた様子で銃の使い方を説明しようとした瞬間に安全装置を外し、コッキングレバーを動かして、薬室に初弾を装填してから、安全装置をもう1度掛ける。

『何か?』

『……F A I M A S 使えるのか?』

『実弾発射試験を手伝った位です。扱えると操作できるは別です』
笑顔で答えるバトラにフランス兵は苦笑いで答える。

そしてすぐに一同はブーランジェの指揮の元、艦内へと侵入する。艦橋の側面すぐ近くの為に人の気配が有りそうだが、誰一人として人の気配を感じられなかった。

また、空気にも妙な汚れや臭気がないことだった。こうも静かだと妙な汚れや臭気があった方が何があったのか想像しやすいのでこの状況だとかえって、ありがたいのだが、それが無い所為で気味悪さと不穏さが相まって、精神を削られる。

「アイランドの下から回ろう。環境設備が生きていれば、艦の状況を確認できるはずだ」

「非常灯は付いているが……機関は生きているのか？」

「機関は正常に動いています」

ポケット越しにシャスチが告げる。

「不幸中の幸いです。電力供給が不安定だと艦載機のエレベーターが使えない所でした」

「電源確保の仕事が無いのはありがたい」

慧のポケットから聞こえるトウエルブの声にバトラがF A | M A Sの安全装置を外しながら答える。

「行くぞ」

ブーランジェを戦闘にフランス兵2人で前衛・後衛を務め、バトラが両方を警戒する。

10分か15分位は無言で部屋を1つ1つ確認するが人1人見つけられなかった。

「人が居た気配すらないな。言うならば、空間ごと持って行かれたような……」

『少し、変な感じがします』

F A | M A Sを構えながら漏らしたバトラの言葉を聞いて、眩いたベルクトの言葉にバトラも頷く。

急なタラップを登ると狭い空間から広い空間に出た時に感じる特有の独特な感覚を味わいつつ航海艦橋に上がった。

「やっぱり、誰も居ないか……」

F A | M A Sの銃口を床に向けて、眩く。

「何か感じるか？」

『いえ……何も……いえ……』

言い淀むベルクトにポケットをバトラが叩いて、先を催促する。

「こんな状態だ。何かあるんだったら正直に答えてくれ」

そう言うのとポケットの中で何度か震えてから答えた。

『えつと……なんと言いますか……目に見えているのと、実際の空間が歪んでいる感じがして……』

そう言われたバトラが周りをもう一度見るが、何処かに歪みのような物は無く、至って普通に見ることができた。

「歪みらしいものも無いな……」

『認識できないんでしょうか……こう、パッチワークみたいに別の空間ですけど、違和感が無い……そんな感じですよ……なにかに近い感覚ですよ……』

何かを思い出そうとしているのか、ポケットの中で小刻みに揺れるシヤスチのコア。

『高出力のEPCMを浴びた時と似ています』

「成る程、違和感の理由に納得が行く……」

「ムツシュバトラ。その宝石で通信は可能か？」

ブルーランジェからの言葉にシヤスチのコアが肯定の言葉を述べると甲板の班員のカバーを頼む。

バトラ達は管制スペース・司令艦橋を訪れるも兵士も手掛かりもなかった。

まるで人が霧が晴れる様に消えていったとも言える綺麗な消え方にバトラは不解に思うが、手掛かりすら無く、原因がわからないなら考えても仕方ないとありのままの現象を深く考えずにありのまま受け入れる。

「慧。大丈夫か？ 凄い汗だぞ」

「え？」

そう言っつて、慧が襟首から手を入れると掌には汗がべっちよりと引っ付いて居た。

「大き過ぎる音や不快な音もそうだが、静か過ぎるのもストレスに

なる。頭の中で歌でも歌うと良い。少しはマシになるぞ」

「サ、サンキュー」

「ブーランジェ中尉。作戦が長引くのは精神衛生上よろしく無いと考える。調査を引き上げて、ハンガーでドーターを回収したらさっさとおさらばしよう」

バトラの意見にブーランジェは頷く。

そして、同時にバトラがポケットの光に気付く。

「慧。トウエルブのコアも見てください」

そう言いながら、シヤスチのコアをポケットから取り出した。

すると同時に手の上で突起が生えては引っこみを繰り返すと体長20cm程のデフォルメされたベルクトが手の上で宝石から変化した。

「実体化したな……」

「しちゃいましたね……」

フアントムの方も実体化しており、慧と何やら話している。

「へえ〜。重さもあるし、かなり精巧にできているな」

「きやあ〜!! 掴まないで下さい!」

服を掴んで持ち上げるバトラに抵抗するシヤスチがバトラの指から逃れた。それは同時に落下を意味していた。

「キヤアアアアアア!?!」

「おっと」

空中でシヤスチをキャッチしたバトラだが、掴んだ場所が悪くシヤスチの両足を掴み、逆さ吊りの状態になっていた。

そうなれば、コバルトブルーのセーラー風ワンピースに身を包んでいるシヤスチに重力が襲い掛かり、ワンピースは重力に無条件降伏の元に下に落ちる。

そうなれば、鋼鉄のスカートの部分下着に守られていた桃源郷がモロ見えになる訳である。

そして、それをみたフランス兵は拍手を1回、ピースサインをしてから、オツケーのハンドサインを行い、眉に揃えた指の親指をつける。

「パン、ツー、マル、ミエ」

別のフランス兵とバトラの声が重なった。

「「イエアア」」

3人で手を打ち合い、腕同時をガッツポーズで打ち合わせる。

「何をしている。早く行くぞ」

ブーランジエの中尉に3人の男はスゴスゴと肩を落としながら周囲を警戒しつつ、ついて行った。

シャスチはバトラをポケットの中から、顔だけを出して、涙目で睨んでいた。

作戦29 シャルル・ド・ゴールの生存者？

パールピンクの髪を追って、艦内通路を歩く一団。

暫くすると部屋中を電子機器で覆われた部屋の水密扉が半開きのまま放置されてた。

「この中だな」

誰よりも先に中に入るバトラは油断も隙もなくF A—M A Sを構える。

すると直ぐに計器の間にしやがみ込む少女「グリペン」と5歳か6歳くらいのモノトーンのレースワンピースにニットのガーディガンを合わせた服装に白い肌と黒髪が印象に残る姿の少女が計器が置かれた机の下で膝を抱えて震えていた。

グリペン越しに覗き込むように見ようとした瞬間にビクリと震えたと完全に縮こまってしまう。

F A—M A Sのようなゴツイ銃と軍服それも戦闘服の類を着た自分よりも身長が遥かに高い男から見下げされれば、誰だって怯えるだろう。

え？ 想像できない？ なら夜歩いていたら、路地から完全装備のゴツイ体型で黒人スキンヘッドの米海兵隊が現れた状況を想像してくれると黒髪の少女の気持ち的理解できるだろう。

バトラは肩を竦めながら、離れる。F A—M A Sが危ない持ち方になったが、そこはトカレフを使う熟練射手。暴発などというヘマはやらかさない。

「怖がらせたか」

そう言っつて、下がるバトラと入れ替わりでブルーランジェが少女に近寄る。

慧とブルーランジェが少女について、話し合っている間にバトラは手掛かりがないか探す。

「シヤスチ。何か感じるか？」

「いえ……ただ、さっきの少女ですが……何処か私達と似ているんですよ。雰囲気か？」

「は？」

シヤスチの言葉に首を傾げるバトラ。

「すみません。こんな曖昧な返答で、この部屋からはブリッジで感じた違和感はありません。廊下からはしますけど」

「そうか……」

思い直して手掛かりを探すバトラの目に一枚の紙を見つけた。

「なんだこれ？ 不自然に一枚だけ？」

周りに紙がないこの空間にこんな紙があるのは不自然に思った。

「何か書いてあるな」

C e s t y p e s s o n t v e n u s d u h a u t

そう綴られていた。

「……なんて書いてある？」

だが、バトラはフランス語は話す事は出来るが読みが出来なかった。

「私にも、見せて下さい」

シヤスチが覗き込むように字を読む。

「あいつらは上から来た……どういう意味でしょう？」

「空から……だが、無傷だし今更書く事でもないな」

2人して思案の海に潜るが、ブーランジエからの出発の合図を聞き、目をポケットにしまつて、廊下に戻った。

一行はブーランジエからの指示でメインデッキ経由で最終目的地であるハンガーに入る事になり、銃を向け、警戒しながら廊下を進む。

バトラは周りの人間が警戒をしているからか精神的な疲労が濃くなっている事に気付いた。

「どうしましょう。皆さんかなり疲弊しています」

「だが、どうしようもないだろう。ハンガーまでこれば、終わりが見えてくるからハンガーまでの辛抱だ」

シヤスチと小さな声で話しながら、急な階段を最後に降りる。

降りきった瞬間にシヤスチが航海艦橋で話した事をようやく理解できた。

「パッチワーク。言えているな……」

バトラの目の前に書かれたLEVEL3の文字。階段を降りた階は2階。つまり、1階を示すLEVEL1でなければおかしいのだ。

「(パッチワーク……今、思い出したぜ。別々の柄の布端を縫い合わせて一枚の布にする事だったか？ この空母は様々な空間がランダムに結びついている。正規の地図では目的地に辿り着くことは不可能だ)」

内心で脱出不可能な迷路に入れられていると認識した瞬間にこの情報を告げるべきではないと判断した。

「お前か」

軋るような声音が不意にバトラの耳を叩く。

「お前が何かやっているのか。どういうつもりだ」

ブーランジエの方にバトラが顔を向ける。

「私達を取り殺す気か」

狂気が吊り上がった目に宿ったまま、銃口を少女に睨みつかせるブーランジエを見て、バトラが行動を起こす前に慧が行動を起こした。

「中尉！」

引き金を引く瞬間に慧が横から飛び付き、銃口を逸らす。だが、引く瞬間だった為か、逸らした瞬間に銃口から銃弾が発射された。

「くそっ！ 本当に撃ちやがった！」

飛び散った壁材が慧の頬を叩く、突然の事にフランス語兵は動けな
いでいた。

「慧！」

「邪魔だ！ 退け！」

慧を心配して、近付こうとするグリペンを少女諸共、押し退かして
前に出た瞬間……

ゴッ

鈍い音がするとブーランジエは勢いに任せ倒れる所を慧が抱える。
バトラがF A — M A Sの銃床(というよりも弾倉)で打っ叩いたか
らだ。

「ちよー！ なんて叩いた!？」

「完全に錯乱状態だ。ブーランジエ中尉の性格上あり得ない事がここまで立て続けに起これば、発狂してもおかしくないだろう?」

FA—MASを持ち替えながら告げるバトラを見てから、顎に手を添えて思案し始める慧。

バトラもFA—MASの状態を確認しながら考える。

「(シヤスチやトウエルブを連れているのが原因か? いや、これはフランスの人選ミスだろう)」

バトラはザイは訳がわからない存在でありその勢力圏に身を置いた事のあるバトラは不可解な現象は有って当たり前と考えており、そんな場所に不可解な現象に弱い人間を持ってきたのがわからないというような顔をする。

ちらりとブーランジエの方を確認する。

頭が揺さぶられただけの為か血は流れていないが、ぐったりと気絶している。

「? 慧は?」

そこで慧がいない事に気付いたバトラがトウエルブとグリペンに問いかける。

「格納庫への道を確認してくると言って、あっちに」

トウエルブが指差し方向に舌打ちをする。

不可解な場所に1人で単独行動をするなど自殺行為だと言わんばかりに走り出した。

「きやあー!」

「ちよつと! バトラさんまで!」

シヤスチが落ちた事やトウエルブの静止も無視して、慧が行ったという方向に進んで行く。

無人の廊下を音を立てながら、時よりあるパイプや段差をジャンプで躲しながら進んで行く。

FA—MASが邪魔に思ったのか、FA—MASは背中に縦向きで吊るされている。

照明が凄まじい速さでバトラの上を通り過ぎていく。

「(艦内は意図していないか大きすぎない、改修を重ねなければ複雑

になりにくい。慧はこの道を通つ直ぐに行つた筈だ」

足を休める事なく動かしているとすぐに異常を感じ、足を止め、F
A—M—A—Sを構える。

「ここまで長かつたか？」

最初にタラップを降りた時は長く感じた通路。

人間は感覚で距離を測る時は時間や体力の消耗具合などから遠いか近いか考える。

読者諸君も子供頃は遠いと思つていた学校が大人になってから改めて行くと近くにあるように感じた事や、疲れるからと小学生では中々行かなかつたコンビニも高校生位になると金があれば行く距離になつたり、歳をとつてから近所のコンビニに行く距離が遠くなつたと思う時があると思う。

それは歩幅や体力が増減しかからである。

小学生に歩いて30分は酷だが、高校生に歩いて30分はそれ程ではない。

バトラ達も最初は警戒と疲労から遅くゆつくりと歩いてきたから遠く感じた訳であり、走つたらそれ程の時間を費やさない距離の筈なのだ。

バトラは冷静でゆつくりと歩いたからこそ遠く感じるとわかつていた。だからこそ、この距離の異常に気付いた。そして、同時に思い出した。似たような経験を最近していた事に。

「まるで、ベルクトのゴリキーパークだな」

あの時は実際のゴリキーパークとは違ふとわかつていたのとおかしくないという先入観もあつた為に余り気にしなかつたが、現実の時より異様に歩いたと思ひ出していた。

だが、冷静になり動悸が激しくなり、脳に警笛が鳴る。

『これ以上は危険だ』『今ならば、間に合う』『戻れ』本能が警告するが、頭を振る事でそれを文字通りに振り払う。

「慧が死んだらこの作戦は放棄ものだけ……」

バトラは内心で慧に文句を流す。

「お前はこの作戦の要だ。そんな思えが自分から危険に晒してど

うするつもりだ。悪いが作戦失敗で逃げ帰ったら、グリペンは海に沈むぞ)」

慧の死亡は同時に作戦失敗とグリペンの未帰還を生み出す。

グリペンは未だに慧と一緒にでなければ、長時間の活動は出来ず、この海域からの脱出は様々な理由で難しくなる。

否、グリペンの性格上ここに残ると言ってもおかしくない。

走るバトラが足を止めた。

目の前に存在しない筈の閉じられた水密扉が不自然に2つあったからだ。

まるで、ここから先に行かせないという様に。

「……戻るか」

来た道を振り返って走るバトラ。分かれ道を間違えれば一生慧とは出会えないと考えたからだ。

廊下を走り抜けるバトラのが急停止した。

「俺がここまで来るのに通った水密扉は全部開いていたし1枚しか無かった……何に何故……2枚の水密扉が目の前にあるんだ」

バトラの目の前には2枚の水密扉が鎮座していた。

バトラは別の道を行こうとしたが、さっきまで通路があった筈の場所は水密扉で閉じられ、そのハンドルは歪み、開けられなくされていた。

「そうかい……そのつもりかよ。いいじゃねーか。乗ってやるよ」

バトラが目には狂気を纏わせて、狂った笑い声を上げる。

狂った笑い声が艦内に響くが、バトラ以外にその声が届く事はないだろう。

「(右か左か……おそろくだが、両方ともそう大して変わらないものが来ると考えて良いだろう。俺だったら、両方選んでもアウトという様にする)」

すると水密扉が赤と白に変色する。

「!? ……落ち着け、色にも意味があったよな……思い出せ)」

色からあるものを想像しようとする。

「(赤は……生命の高揚……元気になりたい時や、ポジティブになり

たい時、気持ちを高ぶらせた時の色だったかな？ 白は光だったかな？ 純潔と清潔に潔癖、無邪気だったか？ 参考にならない」

何か不吉な意味を思い出せない良かったが、そんな物はバトラの頭には無かった。

「赤と白の役割的な所は？」

頭の中で情報を推理していき、何かを思いついたのか、覚悟を決めた目をする歩を進めると水密扉の片方に手を出して、ハンドルを回して、密着を解き、開ける。

陽光がバトラの目を突き刺し、バトラは咄嗟に目を閉じてしまう。

「(陽光だと？ 馬鹿な、そこまで空間を……)」

一種の戦慄を覚えながら目が慣れていくバトラ。

目が慣れるとさっきまでいた空間に似た色合いだが、床はコンクリート所為で壁と天井は金属製だが、何処か安っぽい。

そして、所々に木箱と安っぽいベンチにテーブルが存在する場所。だが、それ以上に存在感を示すのは灰色や黒色、白色や紺色と行った様々な色と形状の戦闘機達だった。

そんな空間をバトラは知っていた。知らなければおかしかった。

そして、ある人物を見つけたバトラはF A I M A Sを手から落とした。

「(何故だ)」

息が止まりかけるバトラ。

「(何故だ、何故だ、何故だ)」

バトラにはあり得ない空間だった。

ガツチャリとF A I M A Sが足元のコンクリートに落ちると赤色【RF-4TB ファントムII】の近くに居た女性が振り返り、手を振りながら駆け寄って来る。

「もう、どこに居たの？ レオス」

アンタレス01が居た。

作戦30 突風救出完了と新参入、そして……

靴音を響かせて、無警戒に近づくアンタレス01。

日本人女性によく見られる丸い体型だが、決して太っている訳ではない何処か痩せている。だが、スレンダーな身体とは違った大人の女性の色気を醸し出す丸み帯びた体型に括れる所は括れ、出るべき場所はどこでもかと主張する程大きい身体の女性だ。

髪は長く、何処かを結んでいる訳でも、飾りをつけている訳ではないが、かえってそれが女性の艶やかな黒髪を引き立たせたせ、瞳も黒曜石のように濃く綺麗な黒でなく、磨かれた黒雲母の様に淡くも美しい黒色の瞳。

肌は白い磁器の様に滑らかで白く、その顔に紅椿の様な赤い唇が浮世絵離れした美しさを醸し出す女性。

100人の男がすれ違えば100人は振り返る美女だ。

「もう、何処に行ってたの？ 探したよ？」

アンタレス01は怒っていると言うよりかは心配したと言う様な声で話す。

「(この人はお洒落なんかする人じゃなかったな)」

上下灰色の迷彩服に足首まで覆う黒皮のブーツと身体や雰囲気から醸し出される美しさを損なう服装だが、バトラにはそれが彼女だと、安心できた。

バトラは格納庫を見渡す。

白や灰、黒と行った単色にワンポイントと戦闘機によく見かけるカラーリングを施された大小様々な戦闘機が並べられている中で一際存在感を放つ赤いF-4が有った。

それを見つけたバトラは我が目を疑った。

「(赤いF-4!? と言うことはヴァラヒア戦争初期……)」

己の記憶を元にもう一度だけアンタレス01を見直す。

アンタレス01は小首を傾げる。

「(ここは……何処だ?)」

「え? (ここはMS社の戦闘機用第5格納庫よ? 何処か頭をぶつ

けた？」

その言葉にバトラはフラついた。

バトラが現在、使っている格納庫は第1格納庫で第5格納庫は入社直後でアンタレス隊が編成された直後からヴアラヒア戦争中盤まで使用していた格納庫だ。

「(俺は) フランスの空母に居た筈だ……」

「どうしたの？ 本当に大丈夫？」

アンタレス01にとっては訳がわからない事を話すバトラを心配したのか、近くのベンチに落としたFA—MASを持って、横にさせ、アンタレス01はバトラに膝枕する。

「未来奈さん……自分は……」

その安心からかバトラの口は自然とアンタレス01の本名とつい最近有った事を話す。

「なあに？」

未来奈は弟に話しかける姉の様に返事を返す。

「またさ……戦闘機パイロットととして、金を稼ぐ様になったんだ。敵を墜とし、殺して」

「ふうん。凄いね」

未来奈の手がバトラの髪を撫でる様に動かす。

「でも、私個人では賛成できないかな？」

「何故？」

「だって、私の機動でレーダー誘導や意識を切らさない人が居なくなるんだもの」

その言葉にバトラは赤い目を細める。

「ありがとう。でも、大局がそれを許さなかった」

「まるで、今やっているみたいない言い方。機体は何？」

額に手を置く未来奈にバトラは目を合わせて告げる。

「RF—4TB ファントムII」

「私の機体？ どういう事？」

未来奈は今、乗っている愛機にバトラが乗っていると聞き、不思議に思った。

「サンフランシスコ最終決戦前に機体を無くして、あんたから譲り受けたんだ」

「サンフランシスコ？ 最終決戦？ え？」

「そこであんたは……スレイマニに撃墜されて、KIA戦死したんだ」
その言葉に未来奈はバトラの頭を両手で抱く様にする。

「貴方が何を言っているのかわからないけど……私は今、ここに存在する。貴方の側に居るわ」

暖かな感触にバトラの気持ち崩れ、張り詰めた心が緩んで行く。
ぬるま湯に身体を沈めた様な気持ち良さにほどけた意識が安らぎ
と言う海に溶けて行く。

「(あれ？ 俺って、こんな無茶や無理をしてっただけ？ 戦争で仲間も友人も、尊敬すらも失った。でも、違った。失っていないこの気持ちの良い時間がある)」

バトラが少年兵として従事する間、バトラの心は荒み、張り詰め、ロボロになっていた。それを未来奈は優しさと愛情。そして、信頼を持ってバトラの心を癒した。

そんな自分に抱かれているその事実と暖かな雰囲気当てられたバトラの瞼がゆっくりと降りて行く。

『違いますよ』

一瞬の白い閃光が薄れゆく意識を覚醒させる。脊髄の奥でガソリンが爆発した感覚と共に筋肉が戦慄わななき双眸そうぼうが見開く。

同時に目に映ったのは漆黒の影法師。目鼻もない不定形の塊がバトラの顔を覗き込む様にしながら頭頂部と顎を持っている。

バトラは驚きよりも先に表情一つ変えずに右足を地面に置かれたFAIMASを踏み、FAIMASを宙に浮かせるとトリガーのあるグリップを持たない方の手で握るグリップを右手で掴むと同時にハンマーの要領で影法師の頭ををぶん殴る。

影法師が吹き飛び、頭から影法師の手とでも呼ぶべき物がなくなる
と同時にベンチから立ち上がりながらジエグリングの様にFAIMASを空中で回し、落ちてくるFAIMASを右手でトリガーのあるグリップを握り、セミオートに切り替え、左手でコッキングレバーを

動かして弾丸を装填し直す。

装填が終わると同時に右手一本だけでのセミオート射撃を倒れている影法師に放つ。

影法師は立ち上がるとする所を銃弾を受けるが何とか立ち上がる。

バトラは影法師が立ち上がる前に両手でF A—M A Sを保持し直し、立ち上がる瞬間にセミオートで射撃した弾丸が当たると同時にF A—M A Sの銃口の位置を影法師の頭に調整しフルオートに切り替え、影法師が完全に立ち上がると同時に銃口が輝き、鉛弾を発射する。バトラは銃口を滑らせる様に射撃をしながら動かし、人間でいう頭から心臓に当たると場所に撃ち込む。

やがて、銃からは残弾を撃ち切った時に出す『カチンカチン』という独特な音を発する。

『よく見てください。しっかりと認識して下さい。貴方自身と貴方が居るべき世界を』

その言葉が聞こえると同時に周囲が音もなく、シャルル・ド・ゴールの船室に変わっていた。

そして、足元にはデフォルメされたベルクト。目の前にはF A—M A Sの銃弾と銃床で無残な姿になった壁に備え付けるタイプの無線機が有った。

「ベルクト……」

「ベルクトと言えば、ベルクトですが、シヤスチと呼んでくれたほうが的確ですね」

「そうか……ありがとう」

シヤスチを掌に乗せながら礼を言うバトラに「なんですか？」と聞くシヤスチだが、バトラは「気にするな」と言う。

「貰える物は損しないなら貰っておけ。それとあの中尉は？」

「なら、貰っておきます。というか、人の事を心配できるんですか？ 敵の罠にはまった様な状態でしたよ？ うなされて、動いたと思ったら、大道芸みたいな動きして無線機を破壊するんですから」

痛いところを突かれて、言い淀むバトラにシヤスチは何が有ったか聞き、バトラは未来奈の事を伏せて、何が有ったのか覚えている限り

の事を話す。

シヤスチも2、3質問すると口を開いた。

「パッチワークって言いましたよね？　つまりは様々な空間に様々な空間が繋がっているんです。つまり、バトラさんが本社の格納庫で過去に飛んで行っても可笑しくないんです」

「成る程な。ブーランジェ中尉と合流するルートはわかるか？」

自分でもある程度予想がついていたため混乱すること無く、シヤスチの言う言葉を信じるバトラ。

「ヒドウンクレバスだらけの水河でできた迷宮を歩く様な物ですね。落ちれば摩訶不思議な領域に落ちて、脱出を諦めないといけないどころか、存在そのものが無くなりかねません」

「いい例えだな。となると船員は皆、クレバスに落ちて、救出困難だな。よし、救出や搜索は切り上げて、目的の物だけ貰ってトンスラするか」

それにはシヤスチも同意し、いぎ、フランス人メンバーと合流をと考えて、直ぐに足を止めた。

ヒドウンクレバス、つまりは雪で隠れた水河の深い隙間の事。そんな物が点在する場所で動き出す人間は居ない。

「何処にクレバスがあるかだな」

「現象が分かれば、対策は意外と簡単です。五感以外で場所を見れば良いのです。こんな感じに」

シヤスチが無線機の切れた配線に触れる。

それを見てバトラは大体の事に察しがついた。

「レスポンスのズレで空間のズレを把握するのか」

「色々、端折ったらそうですね。こっちはです。エスコートします」

3分の道のりの間に銃の受け渡しとシヤスチの一件で交流を持ったフランス兵2人と運良く合流したバトラ達はブーランジェと別れた場所に着くが、ブーランジェも少女の姿も無かった。

「何処に？」

「格納庫に行こう。最終目的地はそこだし、早くついたならこのメンバーでできるとここまで回収の準備をしておいても良いはずだ」

「そうだな」

「ああ、行こうか」

4人はシャスチの指示の元に格納庫へと向かい、最後のハッチを開けると別のハッチから格納庫に入ったブルーランジエ達と合流するが、他のフランス兵達の姿は無かった。

「再会の喜びは後だ。ドーター化されたラファールを探せ！」

バトラの言葉に全員が探し出すのが案外早くにそれらしい物を見つけた。

雨避け用のカバーを被せ、それをワイヤーにフックを付けたもので床に固定されているラファールの様なシルエットの小山。

「これだな」

急いで全員がカバーを外しにかかるが最も外さなければならぬフックが潰れ、外せない状況になっているのを慧が見つける。

「バトラ。フックが！」

「退いてろ！」

DA45Cリボルバーを構え、発砲する。

45ACP弾は歪んだフックを破壊してワイヤーを外せる様にする。

カバーが全て取られるとブルーランジエがアニメ用のコクピットに調整を開始する。

5分後にはグリペンと慧が乗れる状況になるが、ダイレクトリンクが繋がらないのか、ラファールが動き出す素振りを見せない。

「や……やられました」

シャスチの震えた声がバトラの耳に届く。

「何？」

「多分ですけど、ザイ達はラファールが欲しかったんです。理由はわかりませんが、手に入らない新兵器が敵の手に渡り、確実な脅威になる。そんな時にどうしますか？」

「俺なら破壊する……おいおい、まさか……」

「そのまさかです。ザイが攻撃を始めました」

その言葉を聞いたバトラの行動は早かった。

「グリペン！ 調整は甲板でやれ！ 他の人間はその手伝い！ シヤスチは甲板の機体経由で甲板にいるフランス兵に俺とラファールの発艦準備をする様に教えろ、それが終わり次第は撤収の準備をする様にもだぞ！」

有無言わさない雰囲気にはフランス兵達もブーランジエ達も動き出す。

バトラはシヤスチのエスコートを受けて、一足先に甲板に上がろうとする。

「この道を真っ直ぐです。それと甲板に出たら、私を機体に戻して下さい」

「了解した」

甲板に上がると人形の様だったシヤスチが花の胚の様なコア戻る。

そのコアを機首が花のように開いている白いザイに戻し、バトラはRF-4TP-AZJに飛び込むように乗り込む。

甲板のフランス兵達の手により、カタパルトに乗せられていたお陰で直ぐに発艦できるようになっていた。

「直ぐに出る！ 離れろ！」

機体の後ろにジェットエンジンの熱波を防ぐパネルがせり上がり、蒸気カタパルトが作動する。

フランス兵の1人が発進の合図である手を艦首の方向に向け、膝を曲げる動作をすると別のフランス兵がカタパルトの発射スイッチを押して、RF-4TP-AZJを発艦させる。

それに続いて、シヤスチがシャルル・ド・ゴールの左舷から右舷へ横腹を突っ切るように機体を動かし、右舷を過ぎると【零式艦上戦闘機】のように少し下に下がってから、高度を上げて行く。

バトラは旋回上昇で、高度を稼ぎながら機首をザイが飛んでくる方向に向ける。

〈海面ギリギリから自爆型ザイが多数接近。その護衛の制空型も確認できました〉

〈奴さんは相当、沈めたいらしいな〉

自爆型のザイにアクティブ・レーダー・ホーミングでミサイルを発

射したバトラ。

ミサイルは真つ直ぐに飛ぶ自爆型のザイに寸分狂わずに命中し、付近の海水を押し退けるほどの爆発を生んだ。

〈へうおつと!?!〉

〈へキヤア!?!〉

爆発の余波がかなり離れた場所を飛んでいたバトラとシヤスチにも届き、機体を小刻みに揺らす。

そして、立て続けに爆雷や機雷が爆発したように巨大な水柱が立つ。

〈へ不味いな。さっきの爆発で自爆型を海中にボツシュートされて、爆発した訳だけど……〉

〈へこの距離で対潜爆雷と同じ大きさ……機銃の距離だと海面に落ちかねませんね〉

自爆型ザイの炸薬の量に本気で引き気味のバトラとシヤスチ。だが、この事実と同時にミサイルでの撃墜は限界があり、機銃での撃墜が厳禁を意味していた。

〈へどうしましょう……〉

〈へ後で考えろ！ 制空型が来るぞ!〉

自爆型ザイのは全滅したが、護衛任務から制空任務に切り替わった、制空型ザイがシヤスチを除いたスライス制御ザイに阻まれるが、その数を前にベルクトのスライスザイもフロントムのスライスザイも抑えきれず、数機は甲板に出てきたラファールを狙う。

「させるか!」

機銃を制空型ザイに発射して撃墜する。

「(連射速度を落としてきて正解だったな)」

バトラはこの時の為に機銃の連射速度を落としてきていた。

連射速度を抑えれば、弾丸の消費速度も落ちるので結果的に継戦能力は高くなる。だが、良いことづくめではない。

航空機銃というのは命中力を連射で補っている所が強く連射速度低下は即座に命中率の低下に繋がる。

〈へバトラさん!?! 近すぎます!?!〉

シヤスチの警告がバトラ耳を叩く。

連射速度を落とした機銃をしっかりと当てる為にバトラはザイにギリギリまで接近し、性格にエンジンや主翼を腕いで行く。

その攻撃方法はさながら、戦闘機なるの居合斬りのような物だった。

〈へグリペン！ 早くしろ！ こっちの武装が持たなくなる！〉

そう言つて、10秒程たった後にラファールが黒く染まり、赤いハニカム模様が浮かび上がる。

〈へムツシユバトラ。飛び立つまで援護を頼めるか？〉

〈理由は陸上で聞くぞ。任せろ！〉

そう言つた直後にザイがラファールの発艦コースに被さるような飛行をする。

発艦前にヘッドオンで破壊するのか、衝突覚悟の発艦阻止か。

〈へやらせるかよ！〉

バトラが操縦桿を斜めに引き倒す。

機体は半分ロールして、急降下を始める。ザイとバトラのRF―4TP―AZJとの位置関係でミサイルもガンも届かないが、バトラは近接武器武器を持っていた。

〈へ折れろおおお！！〉

RF―4TP―AZJの主翼をザイの主翼に当てて、叩き折つただ。

その光景を見たブーランジェは声を出して驚き、グリペンと慧は久し振りに見たというような顔をみせる。

翼が折れたザイは錐揉み回転しながら艦首にぶつかり粉々にされる。

RF―4TP―AZJは粉々に碎け散るザイを背景に海水を押しつけながら低空飛行して離脱していく。

〈離陸後は直ぐに撤収しろ機銃くらいしか持ってないだろ？〉

〈へそうしたいのは山々だが、回収部隊の撤収まで時間を稼がねばならない〉

〈へ敵も撤収しないしな。無理はするなよ〉

もう1度高度を上げて、位置エネルギーを得始めるバトラ。

ラファールは回転して、機体を逆さにすると機銃を放ち、敵編隊を足止めすると同時に左バンクで機体を傾けて180度旋回、ザイを振り切る。ザイの後で飛来したミサイルはコブラとチャフ・フレアで凌ぎ、コブラ機動からそのままループして、振り切ったザイがもう1度後ろに着こうとした所を逆に後ろ着き、機銃を放ち撃破した。

トウエルブもラファールと合流するが、水平飛行した所をザイの攻撃が飛来して、トウエルブが撃墜される。

バトラの前方からもトウエルブを撃墜したザイと同じタイプのザイが突っ込んできていた。

バトラは慌てずにエルロンロールをしながら横移動をする機動で衝突を回避してから、左に機体を旋回させる。

ザイもバトラを追うように右に旋回させる。

Y字型で後ろに長くシャープで従来の制空型に比べて、翼の枚数が多い機体はバトラが初めて見るザイだった。

「新型か……旋回性能が強化されてる……」

だが、それだけで墜とされるようなバトラではない。

旋回半径の差で射撃の機会を与えてしまい、ザイは確実に仕留める気なのか、バトラに限界まで近づいてから機銃を発射するが、発射される一瞬前にバトラは機体を水平に戻すと同時に上昇。ザイが視界の端に移り始めた位でラダーをかけて、翼端を軸に90度ターンを行い、逃げる敵を視界に捉えると同時にミサイルを発射する。

ミサイルは逃げようと単純な旋回をし始めたばかりの敵機を貫き、バトラはミサイルを撃つと同時に上昇していたので破片の被害を受けずに済んだ。

ラファールも海面近くでザイを撃墜したのか少し離れた場所に円形の波が立っている。

〈第2波と第3波を補足、第2波はこちらでどうにかできる。FO X2〉

RF-4TP-AZJからミサイルが発射され、第2波の中央の自爆型ザイを撃破し、爆発の余波で第2波は2機にまで減った。

〈〈仕留め損ねた!? クツソ、どうする〉〉

〈〈バトラさん。提案が〉〉

通信機から慧の提案を聞いたバトラは笑みを浮かべた。

〈〈成る程、それなら火気はないから大丈夫そうだな。やるか〉〉

バトラが機体の高度を下げる。

自爆型ザイの後ろから接近する形で近き、並走すると翼の先で自爆型ザイの左右に長い直線翼を優しく掬い上げた。

姿勢が乱れたザイはフラフラと飛ぶが低空飛行していた所為か海面に翼が入り、頭から埋もれるように海面に入り、爆発した。

やったのは第2世界対戦時代にドイツの「V1ミサイル」を撃墜する際にイギリス空軍が使用した方法だ。

V1ミサイルの主翼に戦闘機の主翼を使って、体勢を乱れさせて墜落させるという原始的な方法だった。

だが、第3波の5機がシャルル・ド・ゴールに迫る。

スライス制御のザイもラファールもバトラも間に合わない位置。回収部隊のテイルローター機はプロペラが回り始めているが離陸にはもう少し時間がかかる。

自爆型ザイはポップアップをし、直上から襲いかかろうとする。

〈〈スラッシュ〉〉

刹那、上昇中の4つの弾体に青い筋が突き刺さり、遅れて最後の弾体が爆発する。

バトラが視線を青い筋が飛んできた方向に向けると一際目立つガンポットを搭載したA-10が2機飛んで来ていた。

〈〈BARBIE02、参上!〉〉

〈〈お待ちせしました。只今より復帰します〉〉

〈〈やっぱりF-2Xを持ってくるべきでしたね〉〉

〈〈初めての海外基地という事もあり、少し手こずりました〉〉

サンライトイエローのF-15JにブリリアントブラックとクリスタルホワイトのA-10AにエメラルドグリーンのRF-4EJが飛行していた。

〈〈バトラさん! 後ろ!〉〉

その通信と共にスノーホワイトのSu-47がバトラの後ろを飛んでいたザイを30m弾で破壊する。

その後は勢い付いたスライス達も加わり、制空権を確保した所でテイルローター機は水平飛行に移行して、撤退し、戦闘機達も手持ちのミサイルを斉射した後に撤退する。

安全圏に入った辺りでベルクトがバトラの横を、フロントムがラファールの横を飛び始める。

〈〈お疲れ様です、バトラさん。具合は大丈夫ですか？〉〉

〈〈ああ、問題無い。そつちはスライスはシャスチ以外墜ちてるだろう？〉〉

実際、回りを飛んでいるザイの殆どはエメラルドグリーンザイであり、スノーホワイトのザイは1機しかいない。

〈〈もう少し、鍛えないといけませんね。問題はありません。撃墜されたスライスは全部シャスチに集まっているので〉〉

〈〈お前の技量に依存なのか。そういえば、スライスを解いたザイはどうする？〉〉

〈〈逆方向に飛ばすプログラムを入れてから、正気に戻させます〉〉

〈〈なんなら撃墜しようか？ お前の標的機をさせてもいいだろう？〉〉

その発言にフロントムも乗っかる。

〈〈そうですね。スライスを全部戻せば、唯のザイですからね。標的機になって練度になって貰いましょう〉〉

その言葉の通りザイはベルクトの標的機となり、全機撃墜された。ベルクトはまだ、バトラと話したいのか秘匿回線を開く。

〈〈へえ。同行したのはシャスチなんですね。生き残ったのもバトラさんの近くを飛んでいたから……み、見たんですか？ バトラさん〉〉

〈〈へん？ ああーパウダーピンクのレース付きな。似合ってたぞ〉〉

ラッキースケベを隠すことなく話しバトラ。心情は隠しても意味が無いという開き直りの為についてその事褒めて羞恥心を刺激させ、威

圧感の排除が目的と言ったものである。後はバトラが見た物を見ていないという不誠実な人間では無いことからだ。

〈〈あれー？　なんでファントムもベルクトも顔赤いの？　EGGも凄いことになってるよ？　何処か被弾した？〉〉

〈〈してません！　勝手にモニターしないで下さい！〉〉

〈〈それは、ファントムさんも同じですよ!!〉〉

〈〈ムツシュ鳴谷もムツシュバトラも男性だからな。興味があるのは仕方ない。至極正常な反応だ〉〉

〈〈初実戦で一皮剥けましたねブルーランジェ中尉〉〉

〈〈詩鞍の言う通りね。声に棘や冷たさがなくなりました〉〉

〈〈ファントムもやられてたのか？　因みにどんな？〉〉

〈〈ギンガナムチエツクのレース付き。可愛かった〉〉

〈〈本人が聞いている所で話題に出すな鬼畜か!?!　いない所でもダメだけど!〉〉

軋るような音がした後にはバトラと慧に直接通信が届く。内容は奇しくも同じ内容だった。

〈〈責任取って下さいね〉〉

4日後。

八代通の招集にMS社の戦闘機パイロットとアニマ、慧が集められ、八代通は書類を片手に口を開いた。

「悪い知らせだ。中国沿岸にまたザイが集結しているようだ。連中がすぐに海を越えることは無いと思うが、何かあるかもしれないが、今までの事を考えると嚴重な警戒が必要だ」

部屋の空気が強張る。

「これを受けて、独飛の警戒ソフト・エリアを拡大見直させてもらった。具体的にはー」

「同時多方面攻撃を想定して、アラート待機体勢の増強とソフトを高密度化、それに伴うバックアップ体制の整備か？」

「バトラの言った通りだ」

「非現実的です」

フアントムは八代通とバトラの言葉に否定的だった。

「今の状態でも我々はギリギリの体制です。正直言えば、1機欠けたらかなり危険な状況になります」

「そんな状況で体制強化は土台無理だ。グリペンに至ってはアラーム待機をフルタイムでは入れられないぞ」

「やれと言われればやる。でもできないことをやると言うのは無責任や思考停止」

「航続距離の問題もある。長距離を飛ぶのは俺やベルクト、片宮姉妹のA-10位だ。武装を減らすのか？ 空中給油機を護衛すれば良いのか？」

「えー！ イーグル、ミサイル積めないのは嫌だよー！ 給油機とか守ってたらまともに戦えないし！」

「皆さん静かにして下さい。八代通さんが困っています」
騒がしくなる。会議室を詩苑が一声で制する。

「八代通さんは何も無計画にそんな事を言うとは思えません。戦力追加の目処が立ったからこそ、こんな事を言うのでは？」

「察しが良いな。今から、独飛に新しく合流するメンバーを紹介する。入ってくれ」

扉が開き、硬い靴音響かせて細身のシルエットが入ってくる。目を丸くする独飛メンバーの前で八代通は首を向けた。

「改めて紹介しよう。フランス海軍、ダツソー・アビアシオン、アビオン・ミュルティローレ、Rafale-ANMだ。本日より独飛のメンバーとして防空任務に就く。暫くなれない所も多いが皆、サポートしてやってくれ。頼んだぞ」

「え？ えええええ？」

理解が追いつかない慧にラファール（ブルーランジエ）は笑いを含んだ声で話しかける。

ビスクドールのような顔は優しく綻んでいる。

「え？ だって、中尉はフランスに帰るって」

「調整が終わり次第、と言っただろう？ 私はまだ1度しかドーターと同期を成功させていない、暫くは技本のサポートを受けつつ本国のスタッフ共々、運用ノウハウを蓄積させて貰うつもりだ。勿論、ただとは言わない。きっちり労働で対価を支払わせて貰う」

「対価」

「空を征き人類の脅威を倒す。我々、アニマの本分だ。言うまでもない」

ラファールは悪戯っぽい笑みを浮かべて、慧に数歩近寄る。

「という訳でムツシユ鳴谷、君には約束を果たして貰おう。次に会ったら人間らしい事を教えてくれると言ったな？ 手始めに基地での生活を手ほどきしてくれないか。人生の先輩、人類社会の先達として」

その言葉で周囲に視線を突き刺される慧は茹で上がったエビのように顔を赤くして、慌てふためき、その様子を全員から一步引いた位置でバトラは一昔前のアンタレス隊のようだと思いつつ、クスクスと笑っていた。

「(アンタレス01……いえ、未来奈さん。俺はまだ、そっちに行けません。だって……」

貴女みたいにかいつらを置いて行けませんし、貴方への土産がまだ足りないですから」

部下を置いていかない隊長。それが彼の思う最高の隊長。隊長として、貴女を超えると笑顔の裏で故人に話しかけるバトラが居る小松基地は平和を謳歌している。

作戦31 私に良い考えがある

「慧にアーケード版エースコンバットさせたら、結構強かった。こつちがF-4の使用を考え直すレベルだけど」

バトラが小松航空祭の後に慧とアーケード版エースコンバットをやった事を話し、その実力を賞賛する。

それを聞くベルクト・片宮姉妹は驚きの声を上げる。

小松基地の食堂の一角では和気藹々とした雰囲気で作られている。

「バトラ、ベルクト、詩苑、詩鞍。何も言わずにこれを見て、何も相談せずにこれを書け」

振り向くと神妙な顔付きで一枚のラバーファイルを差し出す。

ファイルに書かれた『PMCU-RS』という表紙を見て、バトラはまたかと溜め息を吐きながら受け取り、3人に見えない様に読んで行く。

内容は日系企業が所有する鉾山でF-15J戦闘機の破片が発見されるが、場所がモンゴルと言う事と鉾山の位置が対ザイ戦闘の最前線に近く、停止した発掘作業を再開する為には制空権の確保が必要である事のだが、ややこしい事に破片をロシアが欲しがっており、モンゴル政府としてはロシア政府の言葉を無視出来無いが、日本との繋がりも有ると鉾山が日系企業所有と言う事もあり、モンゴル政府はPMCに制空権の確保を各社民間軍事会社に依頼してきた。と言う物と細々とした事情が書かれていた。バトラは納得が行ったのかファイルを閉じ、隣の詩苑に渡す。

「拝見します」

そう言って、ファイルを読み、終われば詩鞍へ、詩鞍が終わればベルクトへと渡り、最後にバーフォードへと帰ってきた。

「わかってくれたか？」

「ああ」

「えっと……」「質問が……」「私も……」

バーフォードの言葉にバトラは全てを理解した様に話し、残りの3人はこの話を知って、どうしてそうまで神妙な顔付きになるのか理解

しきれていない様だった。

「お前ら……自分達の世界の事くらい勉強しろよ……」

呆れたと肩を竦めつつも、懐からメモ用紙とペンを取り出す。

なんだかんだ言いつつも教えてくれる辺りにバトラの優しさを感じずには居られない。

「いいか？俺たちPMCには使用機材で大きく3種類に分けられる。どんな分け方かはわかるか？」

メモに話した内容を一目でわかる様に大きく円を描きその中にPMCと描き、その円を3つに分ける。

描きながら返答を待つバトラだが、誰からもそれらしい事を言わない為に頭で伝える情報を足し、整理してから口を開ける。

「簡単に言うと同じ様と同じ様に西側と東側の機材を中心に運用しているのかで2つに分ける」

大きく書いた円のほぼ中央に点を描き、2本の斜線を加えて、分けた2つに西と東を書き入れる。

「3つ目が1番多い両陣営の機材を使う人間にコストを出させる陣営だな。MS社やザイ相手に協働攻略作戦を行ったPMCは殆どこれだな。ただ、「オーシア・ズ・ユーク」はその戦力の大半が艦載機で艦隊を運用する関係上どちらかと言えば西側に近い」

最後の空白に東西と書き入れ、西にOUを書き入れる。

「さて、ここで装備で分け方について理解して貰った所で今回の案件を加えてみよう」

メモの空いている空間に丸を描きそこに鉾山の文字を入れる。

「件の鉾山に破片があり、所在はモンゴルだ」

Ⅱを円に繋げ、Ⅱの先に新しく円を描き、モンゴルと書く。

「だが、鉾山は日本企業の物だ」

逆側に同じ様に円をⅡで繋げ、繋げた円に日本と書き入れる。

「そして、モンゴルとしては問題しか生まない破片は早い事取り除きたい。だがザイが邪魔。でも、自国の軍事力がザイから鉾山付近の制空権は取れない。そこでPMCに依頼して戦力を増やして鉾山付近の制空権を取る」

メモに制空権確保と書き加える。

「だが、PMCには報酬が入るがモンゴルにザイから制空権を取れる数・質の部隊を雇い入れる余裕は無い」

モンゴルから矢印を引き、報酬の字を囲んだ円に引いてから矢印の中央にバツ印を付ける。

「と、すれば破片で儲けるしか無いが更にここでややこしくなる」

メモに鉱山の円から矢印を出し破片を囲んだ円に繋げる。そして、その円に矢印を2つ付け、矢印の始まりに円を1つずつ書き、それぞれに日本・ロシアと書き足す。

「日本はF-15Jの破片だから欲しいのは当たり前、ロシアはなんでか知らないがF-15Jの破片が欲しい。モンゴルは破片を使って報酬を払うと同時に釣り銭を懐に入れるつもりでいる」

その話を聞いて、ベルクトが手を挙げた。

「それはつまり、他の民間軍事会社の人達は払われるかわからない報酬を目当てに仕事はやりたく無いって事ですか？」

「それもあるだろうな。特に私たちMS社はそうだ」

その質問にバーフォードが答える。

「それもあるが、それは俺たち東西の武装を使う側のPMCが持つ理由だろう。モンゴルに差し出す戦闘機は恐らく正規軍で言う2線級規模を少数だろう。だが、それでは制空権確保が無理なモンゴルは西側と東側に打電したが、面倒な事になる。ここでさっきの武装の話が出てくる」

「えつと……どういうことでしょうか？」

詩鞍が疑問を口にするバトラが今から話すと前置きしてから語り出した。

「理由は同じだ。万が一、制空権確保をしたとして、破片が自分達と逆側の陣営に渡された事を危惧しているんだよ」

「……なんとなくわかった気がします」

ベルクトが察しがついた様だが、片宮姉妹は未だに首を傾げている。

「西側と東側のPMCの良いところはそれぞれの陣営の武装なら安

く、比較的大量に手に入る所だ。ただし、両陣営に良い様に使い回される事もありうるがな。さてと、ここで問題だが、破片を逆側の陣営に売ったら、売られなかった側は自分達の陣営のPMCにこう来るんだよ。『どうして、敵が得をする様な事をしたんだ』ってな。それでは補給ルートでの補給が難しくなるなら良い方で、最悪は補給ルート寸断なんて事もあり得る。だからこそ、このPMCURSが出てくる」

「そもそも、このPMCURSってなんですか？」

ベルクトはPMCURSのファイルを始めしてみる為に首を傾げる。

「民間軍事会社連合回覧板を英訳して各単語の頭文字を繋げたただだ」

「……回覧板……民間軍事会社連合？」

「NATOの民間軍事会社版みたいな物だ。かなりの大規模作戦で質と量の両立が必要になった時はみんなでそれなりの部隊を出し合つて、協働攻略しましょうね。っていう繋がりだ。あとは面倒くさい政治が挟まった時はPMCUの参加会社で口裏合わせの為に各会社の意見を集めたりするやつだな。面倒くさいシステムはバーフォード中佐か軍曹ズに聞け。今回はモンゴルの依頼を受けるか受けないかを合わせようつてとこだな」

バトラの締めくくりに全員が理解と納得が行ったのか大きく頷く。

「俺は受けたく無いな。どっちにしる被害がでる」

「どうしてですか？」

詩苑の疑問にバトラが答える。

「俺は東西の機材を使つてる訳だが、ここで両方・片方の仲が悪くなつたら俺は予備機が予備機じゃ無くなるんだよ」

「成る程。私達は西側ですからね」

「私は生粋の東側です」

「な？ 戦力が37.5パーセント減だ。これは避けたい」

バトラのこの言葉で全員の意見は一致して、受けないという方針で固まるとバーフォードはこれを報告する為に姿を消した。

バーフォードの姿が無くなるとベルクトは胸を撫で下ろした。

「やっぱり、ロシア機……いや、古巣のロシア軍とはやり合いたくは無いか？」

「……そうですね。ザイはまだしも、人間やアニマとは戦いたくは無いです」

「俺もだよ。戦争以外で人間とは殺り合いたくは無いな」

カラカラと乾いた笑いを浮かべるバトラだが、片宮姉妹とベルクトには何処からかバトラの悲しさを薄っすらとだが感じとっていた。

「マジかよ……」

重たい雰囲気醸し出す空間の横で慧の絶望に満ちた声が聞こえて視線を向ける。

視線の先ではグリペンが安堵の表情を浮かべながら、箸に摘んだ唐揚げを取り下げる。

慧の元気の無さを心配して、唐揚げを渡そうとしたらしいがその箸が翼とエンジンを痛めた戦闘機の如く震えていた事にMS社の4人は黙っておく事を意思疎通無く、全会一致していた。

「暫く、様子を見るぞ」

バトラの小声に全員が頷く。

4人に気付く事無く、グリペンは無表情で慧の肩に身を寄せるが慧の指摘を受けて、笑顔を作るが慧はそれを止めて、頭を抱える。

その光景をバトラは声を殺して笑う。

「相変わらず、仲が良いな、君達は」

愉快そうな声に6人が顔を上げるとキャリアアウーマンを思わせるパンツスーツを着た、マネキンの様なプロポーションに黒髪という組み合わせの外国人が立っていた。

「中尉」

「ブー……じゃなかったな。ラファール、愉快そうな声を出してどうした？ 良い事でもあったのか？」

フランス軍の情報機関、対外治安総局^D所属のブーランジェ中尉^E、今はラファールのアニマとして自衛隊と協力関係にある人物だ。

シャルル・ド・ゴールからの一件以来、近付き難い印象は鳴りを潜

めており、今では簡単な世間話をする位には柔らかい雰囲気となっている。

「いや、君達の仲の良さが面白くてな。それとバトラは慣れ始めた様だな」

「TACネームと違って、なんとか慣れさせようとしている所だ。もう少し待ってろ」

「あ、そう言う考え方もあったのか」

ラファールからの言葉にバトラは苦笑いを浮かべながら答え、慧は良い事を教わったと笑顔になる。

慧はラファールを中尉やブルーランジェ中尉と未だによく呼び、その度にラファールは訂正を入れていたのだが、今の所は効果はない様だった。

「で？ 随分と憂鬱そうだったが？」

「わかるんですか？」

「DGSEの同僚が離婚の時に同じ顔をしていたよ。家も貯金も全部取られるとぼやいていた」

「そうとう搾り取られたな。真正正銘の鬼嫁だ。ここにも居たな。そうなりそうな奴が1人」

バトラの言葉に無言と無表情になる一同。思い当たる節がある様だ。

「で？ 学校か？」

なんとかかこの雰囲気を一蹴しようと話を振るバトラに慧は頷きながら、八代通から言われた南モンゴル奪還戦の事と学校が休みがちだという事を話すとバトラは訝しげに舌打ちする。

「モンゴルの野郎……」

表情は然程変わる事は無いが、確かに怒りを燃やすバトラだが、目の問題は別の為、即座に平静になる。

「学校な。手段の1つとして、個人的意見なしで言うなら、自衛隊の航空学校かMS社入社だな」

その言葉にラファールは考える目となり、口を開いた。

「君は今の生活を継続したいのか？」

「それは俺も思った」

「どういう事です？」

ラファールの黒檀色の瞳に見つめられた慧は鼓動が跳ねる。

「言葉通りだ。平和な日時、普通の学校生活、幼馴染との青春。どれも素晴らしいものだが、君の現状とは乖離しているだろう。方々に嘘をつきまくり、仮面を被りまくる事でようやく、体裁を整えている状況だ」

「はあ……」

「ラファールが言いたいのは、外ばかりを整えていて、内は全く異なる状態だ。いつその事、現状をぶちまけて周囲からの理解を得る方が良いかもしれないと言う事だな。俺も一言で言うならば、？偽りを重ねに重ねた日常は虚しくなるだけだ」

最後の一言は実感が込められた声で囁かれ、慧は瞑目して思考を整理する。

「確かに中尉……ラファールやバトラの言う通りかもしれませんが……でも、戻る場所がわかってないと時々ですが、何処かに流されてしまうような気がするんです……ザイと戦っていると自分がどんどん遠い所に行ってしまう気がして……現実感が無くなって来て、心が磨り減って、薄くなつていくように思えて。だから……だから……ここで生活は貴重なんです。当たり前前の日常が小松に待っている。元通りの、何時もの風景が広がっている。その確信が自分には必要な気がしてなら無いんです」

「確信」

「確信……ねえ」

慧の告白にラファールは真摯に、バトラは考えるように答える。

「軸って言っても良いかもしれませんが。俺と言う人間を繋ぎ止めてくれる楔、道標」

「成る程な」

「成る程ね」

ラファールはしかめ顔で頷き、バトラは苦痛に歪んだ顔で頷く。

「君には君のアイデンティティ・クライシスがあるとどう事か。で、

あるならば理解できる。己を失う恐怖は私にも馴染み深い物だからな。ここでの日常が君の精神安定剤の役割を担っているのなら、自分から投げ捨てるのはあり得ない」

「ええ」

慧は理解者に会えたと安堵する一方でラファールはバトラに向き直って、口を開く。

「何か言いたそうだな」

「何も言えなくなって、手持ち無沙汰になっただけです。精神安定剤としてこの日常があるならば、自分に使った対処法が使えない。いや、慧が使うつもりは無いのだろうか」

「因みにその方法って？」

慧が興味本意で聞こうし、バトラは『気を悪くするかもしれんぞ』と前置きを置いて、語りだす。

「簡単に言えば、今の日常との決別と新たな日常との出会いだな。今の日常を捨てて、新しい日常を普段の日常との捉えて生きて行く。例えば、幼馴染との学校生活と小松での生活と言う日常を捨てて、M社の社員達と戦場で基地で過ごす日々を日常として、生きて行くと言う方法だ。これなら変わらぬ日常と言う物が変わるだけで、変わらぬ日常は存在する。俺はこれを何回もしてきた。だからこそ……あの人までの狂いは無かった」

最後の一言は全員にも聞こえなかったが、慧は何処か納得が行っていないというよりも理解出来ないと言う様な表情を浮かべる。

「いつかわかるさ。だが、現実問題どうする？ 流石に時期が来たと言う奴だぞ？ これ以上は騙せなくなるだろうな」

実際の所、もう嘘を付いて片が付く、先延ばしにできる段階では無い事を知っている慧は机に突っ伏すが意外な所から救援が来た。

「嘘と言うのは小さく付くから露見するんだ。あり得ない程大きな嘘は逆に人から疑う気を失わせる」

「待て！ 余りにも大き過ぎると今後の慧の生活が悲惨な事になるぞ。大それた嘘は線引きが難しいぞ！」

「じゃあ、どうするつもりだ」

バトラがラファールの言おうとする所を急いで止めるが、ラファールの返しに少し考え込む。

「要は奇想天外だがあり得そうな事で、一般人から見れば大それた事にすれば良い訳だ。つまりは、今の慧のレベルでも可能な事で一般的な世界では大それた事であつ、慧の生活を脅かさない程度の大嘘と
言う条件さえあれば良いわけだろ？」

確認する様な口調に全員が頷く。

「私に良い考えがある」

そう言った瞬間、バトラの背に赤いコンボイの司令官のビジョンが見えた気がしたバトラ以外の全員は内心が一致した。

『これ、失敗フラグ』だと……

作戦32 モンゴル出兵

「しかし、まさかあんな方法を思いつくとはな」

モンゴル出兵を明後日に控えた日に慧の運命を決める日となった。その日のアラート待機にはラファールとバトラが担当する事となり、格納庫の一角でスクランブルが掛かるまでまったりするバトラにラファールが声をかける。

「まあな。彼奴にとつては一般人相手ならそうそう負けないだろうし、結果を低めにする設定なら確かめられてもある程度は怪しまれないだろう」

話の内容は慧の大嘘に関しての内容だった。

バトラの返答にラファールは眼鏡を指で押し上げてから口を開いた。

「ああ、そうだな。学校が怪しくなる程にやり込むし、小さい頃は機材さえあれば実際にやってたらしいからな飛行機の操縦はな」

何か含みのある言い方にバトラは溜息を吐いてから答える。

「エスコンのアーケードのエスコントロール設定は操作に限ればシミュレーターと殆ど変わらない性能だ。モノホンのシミュレーターと実機を操ってるんだからゲーム位出来るさ」

「だとしても、エスコンアーケードの世界大会ってどうなんだ？調べられたら、終わりだぞ？」

「安心しろよ。安心しろよ、ラファール。エスコンアーケードの世界大会は実際に行く話だ。そこに慧の名前をねじ込んだだけだ」

その言葉にラファールは呆れた様に肩を竦める。

「それはPMC主催のシミュレーションD A C Tだろうか？」

バトラの言う世界大会はP M C U参加企業によるバーチャル世界での各社に所属する部隊同士でのD A C Tを今回は撃墜機数によってポイントを付けて、その結果を元に順位をつけようと言う物だった。

実際に慧は3日前までエスコンのアーケードをプレイさせられていた。

「結果は100人中79位。ゲームの大会とは言え学生なんだし、この順位なら現実味を多いだろ？」

「2戦級部隊の個人戦とは言えそれだけの順位を手に入れたのか。まあ、一般人相手であれば負ける事は無い……か？」

「そこは相性と機体の性能次第かな？」

バトラの計画はこうだ。

まず、普段から定期的に行われているバーチャル世界での訓練に慧を特別参加させ、それをポイントに集計して世界大会とでっち上げる。学校に世界大会出場と言う報告を主催者サイドから学校に報告。会場はフランスだからそれまでの旅費と開催期間中の2週間は主催者側が負担するとして、慧に公休を出させると言う物だった。順位は予め出しているので問題は無い。

因みにゲームの大会に公休が出るのかと思うかもしれないが、実はこのゲームで金を稼ぐプロリーグがある為にぶっちゃけ就活にもなる。入賞すれば（慧だけに限り）プロダクション（PMC）にスカウトが来ると言う風に説明されており、書類には未来ある若者に将来の成功のチャンスを手掴ませて欲しいと言う言葉も添えてある。

「でも、ゲームの世界大会だぞ？ そんなので大丈夫なのか？」

「世界リーグが全世界に生中継されるレベルだし、視聴率も地面転がるボールを1度に22人で追いかけて回すスポーツリーグや18人で拳ほどのボールを飛ばし合うスポーツリーグのシーズンから外れてるとは言え、全世界で2倍以上の視聴率や？ 選手の手取りも1.5倍だし、認めるやろ？」

「……そんな大規模なのか。だが、やっぱり私の計画の方が……」

「アホか!? あいつに『啓蒙思想より考察するフランス革命史』って、あいつが入賞する何処ろか作成すらできん物をでっち上げるじゃ無い！ お前、啓蒙足りてる？ 啓蒙満ち足りてる？」

「お前、啓蒙の意味知らないだろ」

ラファールがそう言った瞬間にドアを蹴破る勢いで慧が現れる。だが、慧の周りには黒いオーラが満ち足りていた。

「あれ？ 殺意足りてる？ 満ち足りてる？」

「ああ。殺意足りてる。満ち足りてるよ」

その後はバトラの首を締めながら、無事公休が手に入った事と明華（慧の幼馴染）の監視無くしてゲーセンに入れなくなった事をバトラに報告する慧が居た。

緑の海の中にぽつんと現れる白い島。

白い染みの様に見える白い物体は徐々にその形をはつきりとさせ、縦に長い格子状の物体に変わる。周囲に人工物は無く、ただ数本の白い線が浮かぶ様に描かれている。

頭上には大粒の太陽が燦々と輝く光景は海そのものだ。しかし、ここは内陸国モンゴルだ。

目下に見える光景は全て枯葉色の大地と草原のみ、その中に佇む細やかなる文明の孤島があった。

場所は北緯47度44分35秒東経107度22分36秒。

モンゴルの空港、ナライフ空港だ

「あれで間違いなさそうだな」

ナライフ空港を見たバトラはMS社の航空歩兵用戦闘服の左太腿に付けられたゴムバンドに挟んだ地図を見ながら呟いた。

「へはい。そうですね」

隣を飛ぶSu-47のパイロット、ベルクトが通信を繋げる。

バトラは無事着いた頃への安堵から息を吐くが横目でSu-47を見て、出発前にバーフォードが言った言葉を思い出した。

『PMCUからの援軍も向こうサイドでの参加も無いがアニマ・ドクターを出現させる可能性が高い。そこで今回も自衛隊との協働攻略作戦となる。自衛隊からはグリペン・慧ペアとファントムが出る。こちらはバトラとベルクトを出す。ロシア絡みと有って懸念はあると思うが質と安全性を考えるとこの采配がベストだ。誘蛾灯はまだ消えていないし、ZJAEの整備中にザイが流れ込むかもしれないからな』

「確かに誘蛾灯はまだ消せてないしメンテナンスも有るから俺を動

かすならベルクトも動くのは判るが何も今回は連れてこなくても……」

MS社は自衛隊からの要望に応える形でのモンゴル出兵だが、ロシア側にPMCが参加する事は無いと判明した為にアニマ・ドーター対策に少数精鋭で挑む事にしたMS社上層部の命令に従い、Su-47とベルクト、Il-44とバトラの組み合わせで出兵した。

彼らは5時間に及ぶ飛行を八代通達を乗せた輸送機を護衛しながら日本海と中国を横断。モンゴルへと入った。

バトラが今までの事を思い出していると自分以外はもう着陸している事に気付いたバトラは機体を着陸コースへと持って行く。

その際にモンゴル軍の兵士達が初めて見る機体に驚いていた事を確認したバトラはさらに驚かしてやろうという悪戯心が芽生える。

「!? バトラさん！ 角度が急過ぎます!」

ベルクトからバトラの着陸角度が急過ぎる事に警告を発するがバトラは勿論の如く無視する。

バトラの機体は徐々に高度を下げて行く。このままでは車輪や軸に多大なダメージを加えるであろう高度だが、気にすること無く着陸を続行する。

バトラはある程度の高度になると全ての武装をウエポンベイから解放し空気抵抗を増やすと同時にエアブレーキを全開にして、一気に速度を殺すと同時に高度を下げ、接地の瞬間に武装をしまい、真下に向けたエンジンノズルから推力を少し吹かす事で簡単なホバリングを一瞬だけ生み出してから、真下にソフトに接地し、何事も無かったかのように機体を動かして、駐機する場所まで機体を動かす。

滑走路が開くと双発の輸送機「C-1」が着陸する。

機体を指示された場所に止め、機体から降りるとベルクトが乾いた笑みを浮かべた状態でバトラを見つめ、ファントムが笑っているが目が笑っていない笑顔を向けながら近付く。

「何か言いたそうだな。話だけは聞こうか」

「そうですね。なんであんな着陸を？ あんな着陸なのに機体にストレスをかけていないのは流石ですが」

「悪戯心？」

「私に聞かないで下さい」

「それもそうだな。じゃ、俺は予定があるからここで」

手を上げながら去ろうとするバトラにファントムが一息で懐に潜り込み担ごうとするが、バトラはそれを察知して即座にダッシュを行いファントムの腕の範囲から逃れる。

逃れたバトラは右足を軸に回転を行い、ファントムに向き合うと同時にレスリングのタックルでファントムを地面に押し倒すと素早く立ち上がり、怯んで動きが鈍いファントムを肩に担ぎ上げようとする。

ファントムはここからの動きを察し逃げようと身体を暴れさせるがバトラも逃すつもりは無いのか顎と腿を掴んで固定する。

ファントムはバトラに仰向けの状態になった時に固定されてしまい、バトラはエアプレインスピンを止めて、アルゼンチン式バックブリーカーに急遽の変更をしてファントムに掛ける。

ファントムはアルゼンチン式バックブリーカーを掛けられ声ならぬ悲鳴を上げるが流石はアニマという人では無いだけあり、何とか抵抗しようと拳をバトラの脇腹に入れる。

その拳は偶然にも脇腹にクリーンヒットし、バトラも短く悲鳴を挙げるが流石は民間軍事会社社員で陸上勤務に格闘戦の指南という仕事を任せられているだけあり、決して固定を緩めたりはしなかったが片膝は着いてしまう。

だが、ファントムが苦し紛れに放った抵抗とそれにギリギリで耐えてしまったバトラが合わさり、2人に不幸が訪れる。

アルゼンチン式バックブリーカーを掛けたまま片膝を着くという事はバトラに取っては身体が斜めになると言う事であり、ファントムに取っては背中向きに掛かっていた重力が斜めに掛かる訳でも有る。

そうなるとファントムの格好は何時もの清楚な印象を与える白いブラウスに紫に紺を混ぜた様な色合いの Corse ースカートである。

そう Cor ースカートである。スカートである。

スカートを履いた少女にアルゼンチン式バックブリーカーを掛け

た状態で片膝を着き、身体が斜めに向くとどうなるか？

答えは簡単である。重力さんがスカートを下に引つ張ると言う大仕事をしてくれるのである。

フアントムも重力さんのお仕事を受けて、スカートは斜め下、自身の頭の方向に垂れる訳である。となるとどうなるか？

「〇〇ツウオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「キヤアアアア!!」

簡単である。スカートの布1枚で作り上げられたベルリンの壁が崩壊し、男達は東ドイツ現から一時的とは言え、白に薄ピンクの小さなリボンと言う西ドイツ《桃源郷》へと足を踏み入れられるのだ。

ベルリン重カスカート捲リの壁崩壊により日本・モンゴル両国の男達はバトラと重力さんを狂喜乱舞で讃え、フアントムは痛みを忘れて、乙女のように悲鳴を挙げる。

型もヘツタクレも無いパンチがバトラの顎を適確に捉えるが無理な体勢と威力の少なさからバトラの固定を解除させる位の働きしかなかったがフアントムには充分過ぎる隙だった。

バトラが頭部へのダメージ回復の為に反射的に両膝を着く、その瞬間にフアントムはバトラの背中を足から着地できる動きで転がる様に降り、足が地面に着くと同時に回転しながら体勢を整え、同時に遠心力による破壊力の付与を行いながら並行して、スカートを両手で押え付けつつ、バトラの右側頭部へと右足によるタイキックを放つ。

フアントムの遠心力付きタイキックがバトラの右側頭部に突き刺さるとフアントムのスカートが重力にやられたのと同時に行動を起こしたベルクトの完璧過ぎるローリングソバットが喉仏に突き刺さるのは全くの同時であり、バトラの身体からは擬音表現を用いれば『メメタア』の表現が合うほどだった。

ベルクトとフアントムが離れるとバトラはモンゴルの大地に力無く倒れた。

「ど……どうしましょう……」

ベルクトが捨てられた子犬の様な目でフアントムに助けを請うが、

フアントムは至って冷静に対処する。

「脈は有りますから生きてますね。首も問題有りませんし、頭部と首への一撃によるただの気絶です。その内目を覚ましますから放っておきましょう」

「え……このままですか？」

「乙女にプロレス技を仕掛け、スカートすらも捲った今の彼に慈悲も容赦も温情も要りません」

言い切ったフアントムは去って行き、去って行くフアントムにベルクトは何とか言おうとするが、もしもフアントムが自分だったらと考えるとそれは当然と考えたベルクトはS u r 4 7のコクピットに仕舞ったまま常備してある亡命時の上着をバトラの身体に掛けてからフアントムの後を追った。

その後はベルクトの上着をクンカクンカしようとしたモンゴル軍人が近付き、上着を奪うのとバトラが気付くのは同時で、モンゴル軍人の変態的な笑顔とベルクトの亡命時の服を見たバトラは全てを察し、バク転で距離を詰めると同時に右手を軸にブレイクダンスの要領で回転して、モンゴル軍人の顎を蹴り、気絶させて未然に防いだバトラに声を掛ける人物が居た。

「遅れました。私は今回の任務で貴方方のサポートをするモンゴル方面派遣陸上部隊【ブレインレパード隊】隊長のカルーレ・ムーリネン大尉です」

「M 4 3 飛行中隊アンタレス隊2番機のバトラだ。宜しく頼む」
お互いに簡単な自己紹介を済ませる。

「他の方はもうホテル向かって居ます。直ぐに向かいましょう」

「ああ、ぶっ飛ばしてくれ」

「豹の名に偽り無しです」

2人は急いで車に向かう。

カルーレの車は2連装式のM 2 重機関銃を搭載したト○タのハーフトラックだった。

荷台の機銃席に薄灰色の陸戦用戦闘服とヘルメットを被った1人の女性が座っていた。

「紹介します。彼女は私の妹でアリシア・ムーリネン伍長です」

「そうか。私はM43飛行飛行中隊アンタレス隊所属の2番機。バトラだ。階級は大尉だが、畏まらなくていいぞ」

「あ、ありがとうございます。私はアリシア・ムーリネン伍長です。精一杯援護と護衛をさせて頂きマツシユ」

「……」

盛大に噛んだアリシアに男性2人は生暖かい目を送り、送られたアリシアは顔を赤くして俯くがバトラは気にしない体を装い、出発する様に促すと車に乗り込む。

道中でこの車の理由をカルーレが語った。

道の殆どが悪路である事と燃費や乗り心地や万が一の自衛の事を考えるとこの車が1番という考えでカルーレが自分の専用車を引っぱりだしてきたのだ。

それを聞いたバトラは納得し、カルーレは可能な限り強力な武装が積まれたハーフトラックはひび割れや浮き上がりの酷いアスファルトの道を可能な限り高速で移動する。

この悪路では先に行ったメンバーもそれなりの車に乗っている事を簡単に想像したバトラは隣に座るカルーレに声を掛ける。

「で、各社と各国の動きは如何だ？」

短い問い掛けだが形は違えど同業者であるカルーレは全てを察して語り始める。

「モンゴル政府と日本政府、ロシア政府以外は今回のこれに介入する気はさらさらな様ですね。まあ、利益が危険と対等じゃないですからね。各社も乗り気では無いですし、今回はVS人と言う事もあってAJZ戦闘機を運用する部隊しか雇っていないロシア政府からの干渉があるとすればアニメとドーターですね。PMCで潰し合う事はない筈です」

「そうか。それは上々だ」

「人は殺したく無い。ですか？」

その言葉にバトラはカルーレに向き直る。

「あ、いえ……決してそんなつもりじゃ……」

「いや、怒っていない。できる限り人間を殺したく無いが、そうなれば戸惑い無く撃つさ。ただ、ここに来た味方には人を殺させたく無いんだ」

「……理想で空を飛ぶ方が？」

「1人がそれだ。同じ敵が居るんだから、人間同士でいがみ合う事は無いと思っている。1人は人間を撃つことに忌避感があるだろうな。最後は必要とあらば撃つかもしれんがな」

「……見えましたよ」

話終わると同時に前から目的の街が見えて来た事を報告するカールに一旦、思考を停止して街を遠目から眺める。

だが、最悪の敵を想像するバトラの手は膝の上に畳んで置いたベルクトの服を軽く掴んでいる事に本人さえも気付かなかった。

作戦33 円卓での空戦と最悪との邂逅

モンゴル科学技術大学の駐車場でバトラはベルクト・自衛隊メンバーとの合流を果たした。

駐車場での合流となったのはバトラ達は大学内に入らず、周辺警戒を行っていたからだ。

ベルクトから八代通が研究に没頭し始めた事とご飯を食べようという事になり、在モンゴル日本大使館書記官の朝倉と簡単な自己紹介を行い、MS社陸上戦力部隊は狙撃班や車両待機での護衛を残し、去って行った。

慧と朝倉が何か話している間にバトラは街並み……街の地形を覚える様に視界を張り巡らせる。

ここでは陸上からの襲撃が考えられ逃げ道や攻撃ルートを予め知っておくのが自衛する上で重要である。相手はここを庭の様に駆け巡るので、闇雲に走るのは時に悪手になるのをバトラは知っている。

そんなバトラに敵が現れる。

「これはまた、インド並みに無秩序だな」

前方に平然と信号無視をする車達を前にバトラはクラウチングスタートの体勢をとる。

そして、車の流れが途切れた瞬間に一気に走り抜けようと走り出す。

背後で慧とベルクトが絶叫を上げているが、気にせず走るバトラに猛スピードで突っ込むトラックが現れる。

バトラは慌てずにトラックと自身の速度を計算し、ぶつかる前に渡り切るのは無理と判断して、身体がトラックと水平になる様に地面を滑りながら横になり、トラックの下でトラックをやり過ごし、乗用車が突っ込むでくる前に身体を丸太が転がる様に回して向こう岸へと渡った。

「やってみろ」

「出来ませんよー!」「出来るか!」

朝倉・フアントム・ベルクト・慧の4人から突っ込みを受けるがバトラは車が走る道路を挟んで叫ぶ。

「どうしてやる前から諦めるんだよ！ やれるかもしれないだろう！ やる前からやれないなんて決めつけるなよ！ もつと熱くなれよおおおおおおお!!」

この時の叫びは騒音がうるさすぎる車に遮られ、完全に聞き取れなかった対岸側のメンバーだが、体感温度が2度上がった事と背後に某元プロテニスプレイヤーにして炎の妖精が召喚されていたことから何を言ったかを感じ取れていた。

その後は朝倉の誘導の元無事に危なげなく渡り切った。

全くの余談だが、バトラはこの時かなりの汗をかいており、炎の妖精を召喚するには相当な体力や何かを使うのだろう。

炎の妖精を無意識に召喚してしまったバトラをスルーして朝倉の案内の元、目的であるモンゴル料理の店に着く。

しかし、店構えはロシア圈らしい角ばった作りだが、店内は汚くはないが小綺麗でもない。

「……朝倉さん。疑う訳ではないが大丈夫か？」

海外派遣を多く経験してきたバトラは当たりの店の条件を上手く見つけている。

当たりの店は少し値が張るが小綺麗以上の店内の店やチェーン店が当たり。少し冒険するが屋台ならお値段手頃で行ける。今回、朝倉が紹介した店は当たればでかいが外れはもつとでかい綺麗でも小綺麗でもない店だ。しかも、値段は観光地価格から少し低い位のお値段だ。

バトラは来て早々に博打は打ちたくはない為に朝倉に確認の為に視線を向ける。

「大丈夫です。ガイドブックにも載るお店ですし、私も食べました。観光客向けの味付けです。比較的」

「比較的って言いました？ 今」

「まあ、地元民向けと比べると言う意味です。抵抗があるなら他のもご紹介します。中華とか和食とか。どうします?」

「……他の店は予想だが、10分は掛かるだろう?」

バトラの問いかけに朝倉は頷く。

「すまんが却下だ。軽戦闘機は航続距離が少ないんだ」

そう言った瞬間にグリペンの腹から少女に似つかわしくない程の音がなる。

「どんな腹の虫を飼ってるんだよ。まあ、外れだったらファストフード店逃げ込めばいい。外れは早々引かない筈だ」

「ぶっちゃけそうした方が安全かもしれませんが、らしきも味わうならこの店です。因みにファストフードレストランはここから20分ですよ」

バトラと朝倉の言葉に頷くベルクトと自衛隊メンバー。海外派遣が最も多いバトラの口から保険が示された為に店内に入る。

席は40席と一般的で円卓と円卓の間は衝立で仕切られ、壁には格子状の模様は刻まれ、天井には円形のオブジェクトとそのオブジェクトを中心に放射状に伸びる梁が何となく遊牧民のテントを連想させ、おしゃれだが小綺麗でも汚くもない店内の為にバトラの不安は晴れない。

耳に響く民族色豊かなBGMがモンゴルに来た事を再度、認識させる。

「朝倉が思う難易度低めのおすすを幾つか頼む」

奥の席に着くなり、バトラが口を開き、全員が頷く。朝倉はメニューを開き、少し考えて3品を注文した。

暫くして料理が到着する。

小麦で作ったであろう生地のでかい揚げ物。

麺に油が固まっているのか少しテカっている料理で汁なし。

黄色と緑が混じった独特な色合いのスープに野菜と肉らしき物が入ったスープ。

この3品がトライアングルフォーメンションで置かれる。

バトラとベルクトは迷う事無く小麦の生地であろう物を上げた料

理に手を伸ばす。

バトラが真つ先に伸ばした料理がこれだった為にベルクトは2番機を務める故に得た1番機と動きを合わせるといふ技術を使い、2番手でバトラと同じ料理を手に入れる。

慧も遅れて同じ物を手に取り、3人は同時に齧り付く。

「……何でしょう……焼き餃子の皮を厚くした感じの皮ですね」

「中身は肉で肉汁が多いな」

「案外、さっぱりとした味付けだな」

「ホーシユールと言うこちらのファーストフードみたいなやつです。屋台などで手軽に買えますので日本人にも人気です。麺料理はツオイワン、スープはノゴートイシユル。要は焼きうどんと野菜スープですね。食感も見た目通りですね」

その話を聞きながら慧が野菜スープへと手を伸ばすが寸前の所でフアントムが連れ立っての食事に置いて、とある1品で腹の空き具合を多く占めてしまうが他人にその料理を渡さないというある種dr最強の一手である『KAKAKEKOMI』を発動し、慧からノゴートイシユルを手に入れる。

「おい」

「はい？」

だが、その程度で引つ込む慧ではない。『KAKAKEKOMI』を発動したフアントムに話術によるノゴートイシユル解放の交渉を即座に決断する。

「中身がわかった瞬間、食べ始めるのってズルく無いか？ 俺は一応、1品は挑戦してみたぞ」

「バトラさんが真つ先に手を伸ばした料理で且つ、3番手ではそれ程のリスクを被ったとは言い難い気がするのですが？」

フアントムの反撃に交渉材料が無くなったのか引き下がり、別の物を取り取ろうとしたが、ホーシユールは既に無くなり、ツオイワンも最後の1口がグリペンの胃に撃墜される所だった。

「……次行きましょう」

慧の玉砕交渉が3分にも満たない時間とは言え、料理を全員が目を

離れた瞬間には全ての料理がグリペンが食べるといふ怪奇現象染みた光景に朝倉は考えるのを止めて、新しい料理を頼む。

シウマイや小籠包に似た料理のポーズや肉入りのシチューと言つて良いであろうバンタンやボダータイ・ホラーガという肉入りの炒め飯などが並べられる。

朝倉が気を効かせたのか大盛りだったが、その内の6割は有翼獅子に飲み込まれ、残りの4割を亡霊・犬鷲・青蠍・民間人が均等に分けるという配分が出来上がる。

だが、食している者達がそんな有翼獅子優勢の状況を黙って見過ごしている訳では無い。ここにいる全員がパイロット。つまりは何方が強いかを決める瞬間に多く立ち会う人種。つまり、無意識の内に対抗心が出て来る物で有る。

全員の無言の圧力が円卓の上空で空中戦を演じ、掴む食器がTGT^{料理}に食らいつこうと素早く飛んで行くが別の食器がそれを遮り、別の食器がTGT^{料理}に喰い付こうとする。

全てのTGT^{料理}が消えるのと同時に朝倉が次の料理が来た事を伝える。自然と朝倉がAWACSの役目をしているが、こんな修羅場に飛んで行くつもりは朝倉にはない為には居ない様だ。

全員が片手で静止ながら置かれた皿から店員の手が離れると同時に食器というミサイルがTGT^{料理}に向けて飛んで行く。

「う」「ん……」「え……」「お」

慧・ファントム・ベルクト・バトラが1秒の何万分の1秒という時間差で出現したTGT^{料理}の具材を把握した。否、把握してしまつた。

出てきたのは肉塊。それだけならモンゴルの食文化は肉塊を好むというのを食べて来て分かつてきた4人には問題は無い。

だが、その肉塊が問題だった。

ココナッツを思わせる球体が4つ。それだけならまだいい。だが、そこに黒く変色した皮らしき物に骨としか言えない白い部分や球体の先端には形はかなり残した状態の草食動物の様な鼻と口と思しき部分が有つた。

「ヤギの……頭……モンゴルだから、塩茹でに……しただけだな。

「塩茹でのヤギの頭だ」

「名物ですよ」

バトラが何かを言い当て、朝倉が補足する。

「朝倉さんありがとう。ベルクト、海外派遣の醍醐味である名物を食すだ。今回初めてのお前の1番手という名誉をやろう」

「食べていいぞファントム」

バトラと慧が同時にアニメ2人に降る。

「ヤギの頭は勘弁して下さい。それなら2番機は私ですから1番機のバトラさんからどうぞ」

「いえいえ、慧さんこそお腹が空いてるんじゃないんですか。どうぞ、召し上がって下さい。名物というお話ですし」

ベルクトもファントムも同時に当たり障りなく勧める。

「陸上では平等だ。教官に階級が低い者に譲るのも部下達から信頼を得る上官の行いらしいしからな。その教えを実行するだけさ」

「いや、悪いよ。俺は別の料理で我慢するからさ。お前は遠慮すんなって、バトラも海外派遣の醍醐味だって言ってるんだしさ」

「その心遣いだけで胸が一杯です。感謝の気持ちも込めて是非、慧さんに名物一番槍の名誉と共に進呈させて下さい」

「私もバトラさんには信頼と感謝で胸が一杯ですから、海外派遣の醍醐味を私よりも速く味わって下さい。なので、これを贈呈しますね」

不毛過ぎる押し付け合い。もし、これがあるパイロットが見かければこう言うだろう。

『ジャン・ルイとPJの死亡フラグでどっちがやばい死亡フラグか言い争う位に不毛な争い』だと。

その不毛過ぎる押し付け合いの横から白く細い腕がヤギの頭を1つ掴むと無表情のまま、一切の抵抗無く白骨遺体へと変貌させて行く。

「」「」……………」

バトラ・ベルクト・ファントム・慧がグリペンを畏敬の視線を送る。送られたグリペンは何かを可笑しな物でもあったのか疑問に思いつく。

問するが、慧が答えた事に理解出来ないと可愛く小首を傾げた後に残りの頭も白骨化して行く。

「多分だが、このメンバーでサバイバルしたら、1番生き残るのはグリペンだな」

その言葉にフロントム・慧・ベルクトが頷く。

その光景に朝倉がくつくつと声を押し殺した笑いを浮かべる。

視線を受けていると気付いた朝倉は片手を上げながら『失礼』と謝る。

「まさか、こんなにも人間らしいやり取りを見せて貰えるとは思って無かった所為か、余りにも面白くて。いやはや、アニマと言うものについて少し認識を改めた方が良さそうですね」

「やはり、ロボットの様な心が無い、希薄な物を？」

「そうですね。技本が秘密主義何もありませんが、『制御ユニットを女の子にした』これだけ聞けば、『一体、何を言っているんだ?』と思いますよね。実際、さっきまでは得体の知れない物としてしてみましたから」

朝倉の言葉を聞きながら茶を啜っていたバトラが茶を置いて、語ります。

「まあ、俺も実物を見るまでは同じ感情が有った様な覚えはありませんよ。真つ当な感性ですね。私は彼女らを見て、俺たちと同じ出生や背後、過去に何か有るパイロットなのだと思うとアニマだどうだなんて関係無くなって、今じゃ俺たちと同じパイロットなのだとか心から思っ接してますよ」

ベルクトを横目に見ながら語るバトラにベルクトは恥ずかしげに手を足で挟み、身を縮める。

「そうですね。虫の居所が悪かったら喧嘩するし、お互いに譲れない所では意見がぶつかり合う。でも、それって人間にもある事でしよう?」

朝倉とバトラに目を向けながら話す慧にバトラは頷くだけで、朝倉は『確かに』と相槌を打つ。

「だから、俺もバトラと同じで同じ部隊の仲間として、接する。変な

遠慮は無しだけでも、気を遣う部分は気を遣う。当たり前前の所を当たり前にやろうって」

『な?』と同意を求めるとファントムは冷やややかな目線を慧に送る。

「気を遣って頂けましたっけ?」

「え?」

慧の呆気に取られた表情を見て顔を綻ばせていた朝倉が真剣な顔になって話す。

「普通の女の子が普通のメンタリテイを持っているのとなれば、よく恐怖に押しつぶされ無い物ですね。貴方も含めてですが。僕なら幾ら凄いや戦闘機に乗っていようとあんな大量の敵とやり合いたく無いですが。1対10とか1対20の空戦になったりするんですよ?」

「まあな。だが、俺としては1対10や20よりかは手練れとの1対1と言った少数精鋭の方が怖いかな」

「え? そうなのか?」

「慧。お前俺が怖いもの知らずでも思ったのか? 俺だって怖い物は有る。それどころか怖いモノが無いと言う事の方がパイロットとして不味い」

バトラの言葉にベルクトと慧が呆気に取られる。

バトラは茶で喉を潤してから語り始める。

「怖い。つまり、恐怖という感情は時に己の命を助ける助けになる。自分よりも遥かに強い相手だと悪寒や悪感を感じるだろう? 怖い物知らずという奴はそれが無くなる。いい事だという奴も居るが俺の場合は引き際見極めたり、逃げるといふ生存戦略を使えなくさせる物だと考えている。強い奴というのはその恐怖を我が物として完全に制御下に置ける奴や恐怖を感じながらも闘志にその恐怖を変えても尚、その恐怖を忘れない奴の事を言うのかもな」

その言葉にベルクトが口を開いた。

「じゃあ、バトラさんはどっちですか?」

バトラは手をベルクトに向けながら語る。

「強い人間は3つに分けられる。恐怖を我が物にできる奴、恐怖と

闘える奴、恐怖を忘れない奴。この3つだ。逆に弱い奴も3つに分けられる。恐怖に怯え続ける奴、恐怖を前に何も動けない奴、恐怖を忘れる奴だ。俺も弱い奴の3つ目だ」

「どうしてそれが弱い人に区切られるんですか？」

「恐怖を忘れる。それはつまり、恐怖から感じられなくする事と同意だ。言っただろ？ 恐怖を制御出来る奴が強いと感じ無くなれば制御も出来ない。だから、弱い。だから……死ぬんだ」

その言葉にベルクトは心配そうな視線をバトラに送るが、バトラは笑いながら話す。

「まあ、ロシア軍も前の紛争でエースを多く失っているし、アニメとドーターが来ない限り大丈夫じゃないかな？ ザイは手練れでも5機までは全然、対応できるし、大軍なら、『アレ』でベルクトとファントムが如何にかしてくれるだろうし」

「あー！」

「あ、あれですか？」

ベルクトが何かを思い出した様に、ファントムは丁度良いタイミングを見つけたばかりに話し始める。

「パラレル・マインズなら持ってきてませんよ」

「パラレル・マインズは今回、非搭載なんです」

「マジかよ」

慧が頭を抱えている間に慧にしか聞こえない音量で何かを言って慧が言い訳を始めた時にベルクトが補足を入れる。

「試作品の段階で全開運用した所為で現在はOオーバーHホール中で、予備も値段が高いそうで無いんだそうです」

「カーミラの装備があればなく。まあ、無い物ねだりしても意味が無い」

「それに、あれ使うとまた見られるじゃ無いですか」
小さく紡がれたベルクトの言葉にバトラが頭を捻る。

「は？ また？ 一体、なんだ……よ……」

文句を紡ごうとするバトラだが、何を言っているのか途中で理解してしまった。

それを思い出したバトラは初心な少年の様に顔を赤くする。

「待って！ あれは助けようとした時の事故だぞ！ やりたくてやった訳じゃない事をお前も知ってるだろ！」

「でも、見た事に変わりは無いじゃないですか？」

「ないな」

「開き直らないで下さい」

無言の圧力を掛けられるバトラだが、ベルクトの方から口を開かれ、圧力は消える。

「謝ってくれましたから、それ程、気にしてませんが、カーミラの武装ってなんですか？」

「ああ、カーミラって奴は俺のスピイリの同型機のバリエーションの1つで3号機の事なんだが、UAVの同時操作能力が有る機体だな。簡単に言うならば、スライスを自前で用意して、全部を自分一人で制御するパラレル・マインズ。より簡単に言うならパラレル・マインズの劣化版だな」

説明を終えた瞬間に朝倉が電話が来ている事を店員から聞き、立ち上がる。

慧は置いていかないでくれという様な顔をするが、止める訳にも行かない為かそのまま朝倉を見送る。

慧が深呼吸をして、ファントムからの抗議を受け入れる覚悟をした瞬間にバトラの首筋を大型の蜘蛛が這う様なハツキリとした不快感を味わうのと慧が冷気を感じ、首筋に匕首を突き付けられた感覚を味わうのはほぼ同時だった。

慧が肩越しに振り返り、硬直する。

テール脇にクロームオレンジ・アクアマリン・フレンチベージュに髪を輝かせる3人の少女が冷ややかな目付きで此方を見下ろしていた。

作戦34 動き出す最悪への歯車

先頭立つのは小柄な少女。袖無しブラウスにハイウエストのガウチヨパンツ。

体勢は足を肩幅に開き、両手はポケットに入れている。

外見は卵形の顔には不釣り合いな程大きな大きな目が印象的で一種の可愛らしいさを醸し出すが、揶揄する様に歪められた小さな唇が可愛らしいさを損なっている。

だが、ここに居るメンバー全員は気付く。『この少女を含めて、全員が人外の存在』だという事に。

その証拠に先頭の少女の髪は内側からクロームオレンジの光を放出している。

その隣の少女2人もそれぞれがアクアマリンとフレンチベージュの光を髪に孕んでいる。

アクアマリンの髪の少女はファー付きのジャケットを着込んだミリタリールックの服装でクールビューティーを絵に描いたような少女だ。その顔には眉毛がない事で何処か不気味な印象とミス터리アスな雰囲気醸し出し、美少女という文字通りの外見だが、気持ち悪さを感じる程の無表情が台無しにしている。

フレンチベージュの髪の少女は、エプロンドレスとメイドの様な格好に瞳を細くして微笑み、その表情と格好に可愛らしや愛おしさを人によつては与えるだろうが、その微笑みは不気味さや不信感を抱きかねない程に完璧だ。

3人の人影を前にして立ち上がり掛ける慧にクロームオレンジの少女が小さな首を傾げながら、手を挙げる。

「大人しく座ってな。こっちも丸腰で来てるわけじゃ無いんだ。やり合うつもりなら其方も大怪我する事になるぞ。ほら、その緑のも」

そう言われたファントムの琥珀色の瞳には激しい緊張に満たされている。

手にはフォークが握られ、腰を軽く浮かせているが、確実に立って

いる3人の少女とやり合うには体勢が不利にも程が有る。

バトラは3人の少女の正体に気付いた瞬間には左手でベルクトの太腿にばれない様に手を這わせる。

バトラの手に気付いたベルクトは羞恥心を感じる事は無く、その手の頼もしさと優しさから安堵と平静を受け取り、身体から意識しなければ分からない程の震えが治る。

「そんな顔をするなよ。同志の前で戦争をするつもりは無いんだ。これはただの挨拶だ。邪魔するぞ」

クロームオレンジの少女が隣の席を引き寄せると腰を掛けて、背中を背凭れに垂れかけて体勢のまま、足を組む。

クロームオレンジの少女を挟む様に立つ、同世代の2人の少女。

ファントムとバトラが警戒の色を強めた事で周りの空気が凍り付く様な感覚を周りに与えるがクロームオレンジの少女は興味深そうな顔をしながら視線を走らせる。

「髪の色を見る限りそっちがグリペン、そっちがファントムか。イーグルの姿が見えないな。まさかとは思うがそっちの兄さんの何方がイーグルって訳じゃ無いだろう。だが、1番不可解なのは……」

クロームオレンジの少女の目がある一点で止まり、それを合図にしたかのように他の少女もその一点に視線を向ける。

向けられた場所に居た人物――ベルクトは身を縮こませながら、太腿に置かれたバトラの手を強く握る。

ベルクトの握っているその手からは恐怖以上に救援とここに居たいと言う欲求がバトラに痛い程伝える。

「どうして、そこにベルクトが居るんだ？」

「余りに人の過去に踏み入るのは感心しないな。それに素性を訊ねる時は自分から名乗る。東西南北問わずの礼儀だと思っただが？」

その言葉を聞いたファントムが冷ややかな目をクロームオレンジの少女に向けたまま口を開いた。

「名乗って貰わずとも分かります。クロームオレンジとアクアマリンの固有色。ジュラーヴリクにラストチュカですね。ロシア航空

宇宙軍、第972親衛航空戦隊、アニマ飛行部隊、通称……バーバチカ」

「ロシア軍!？」

仮想敵のロシア軍の登場。しかも、現在最高戦力とも言えるアニマが直接乗り込んできた。

その事に慧は驚き席を立ち上がるが、バトラが慧の爪先を踏むことでそれ以上の行動を止める。

「慌てるな。ロシア軍が来る事は粗方の予想はしていた」

バトラがアニマ3人に、特にクロームオレンジのアニマ、ジュラーヴリクに視線を向ける。

視線を向けられたジュラーヴリクはフンと鼻を鳴らす。

「落ち着いているな。それとあたし達を知ってるなら話は早い。単刀直入に要件を言うぞ。あたし達はハンボグドの鉱山を確保する。邪魔するものはザイであろうと人間だろうと分け隔て無く排除するつもりだ。命が惜しければさっさと引き揚げるんだな。あたし達も極東でザイの処理をしてくれる連中を叩き落とすのは忍びない」

傲岸不遜。そんな言葉を絵に描いたような態度と言葉・声に全員が黙っているとジュラーヴリクは笑みを更に大きくして、更に言葉を紡ぎだす。

「問答無用で撃ち落としやっても良いが、こちらだけ相手の情報を持つてるのはフェアじゃないな。だから、わざわざ警告して来てやったんだ。感謝しろよ。これはあたし達、偉大なるロシアの慈悲だ」

「慈悲と来ましたか」

「慈悲、そう来たか」

ファントムとバトラが鼻で笑い飛ばす。

ベルクトが心配そうに手を出そうとするがそれよりも早く、ファントムとバトラの口から言葉が出て来る。

「帝政も共産主義も民主制も何一つ物に出来なかった失敗国家が偉そうに」

「正規軍の1、2流部隊の殆どにクーデターされた国家が随分と偉

く来たな」

「ああ？」

ジュラーヴリクが上体を揺らし、片肘を膝に置きながら身を乗り出す。

「口の利き方に気を付けろよ。あたしは基本的に寛大だが許せない物は幾つか有る。祖国への侮辱がその最たる物だ。もう一度言ったらその口にAKぶち込んで前歯をかち割るぞ。大人しく座ってな」

ジュラーヴリクは椅子を蹴飛ばしながら立ち上がるとフアントムとバトラの間に立ち、2人を見下ろす。

「生憎、頭ごなしに命令されると反発したくなる性質です。そうですね。腹が立つと言う事は思い当たる節が有るんですね。まあ、油の値段が下がっただけで国家経済が破綻する様な国ですから恥ずかしくなる気持ちはわかります」

「実際に起きた事実だ。クーデターで正規軍が使えず、国際社会への発言力低下、更にヴァラヒアと言ったテロリストの対処にPMCを頼り、PMCに救われ、忌み嫌うPMCが平和と秩序を取り戻した英雄になる。身から出た錆びだ」

その言葉に怒気が更に増すジュラーヴリク。

「アメリカに国中焼かれて去勢された腰巾着と薄汚い金でしか飯が食えない蛆虫が随分とご機嫌じゃないか。身の程が分からなくなっただか？」

この言葉にフアントムとバトラはまたも鼻で笑う。

「ご心配なく、貴方方よりは分を弁えていますよ。GDPの5パーセントを軍事予算に組み込む様な馬鹿な真似をしませんから」

「ザイからの国防に高性能蛆虫AZJ装備PMC部隊に頼っている所か教官もその高性能蛆虫だ。身の程を弁えるのは何方だろうか？」

フアントムがバトラの言葉の最中に音を立てぬ様にゆっくりと立ち上がり、小柄なジュラーヴリクを見下ろす形を作る。

「国力とプライドが噛み合っていない国は悲惨ですね。新興国並みの予算で世界の盟主を気取らなければいけない。勢い、恫喝と闇討ちがお家芸になる。今回も似た様な手段でしょうか？ まともになり

合う実力が無いから集団で脅しに掛けに来てる」

「脅しかどうか自分の身体で確かめて見るか？」

ファントムとジュラーヴリクの距離が大きく縮まる。空気がビリビリと震える様な感覚をこの場にいる全員が味わう中で、ジュラーヴリクの口から言葉が出される。

「そういうえば、ベルクトの件であたしの妹であるSuur35を追いかけ回したのはお前らだな。エメラルドグリーンのだーターに藍色のAJZ戦闘機。今回の事が無くても借りを返すつもりだったが……丁度良いな。ここで一戦交えるか？」

その言葉に同調する様に金属音と靴音が響くと3人の少女の殺気が増す。ラストチエカが1歩前に踏み出す。エプロンドレスの少女は笑顔のまま懐に手を伸ばす。

「そこまでのしておけよ。背後のお嬢様方？」

バトラの声が異様なまでに響く。

「!?!」

ジュラーヴリクの背後に立って居た少女が驚愕の色を少ないが表に出す。

ラストチユカは視線をズラすと首元にコンバットナイフが突き刺さる寸前で止められている。エプロンドレスの少女は視線の集点をズラすと自分に突きつけられたリボルバー拳銃の銃口が映る。

だが、2人の少女が驚いたのは武器が突き付けられた事では無く、警戒状態だったにも関わらず脅されるまで武器の存在が感じさせなかった事だった。

「アクアマリンのお嬢さんは腰から何も持たずに手を離して貰えるかな？ エプロンドレスのお嬢さんには懐から何も出さずに手だけ出して貰えるかな？」

静かな空気が出来上がるが、そこにバトラの溜息が溢れる。

「別に地上でやり合うのは俺としてはやぶさかでは無いが……君達は生粋のパイロットだろう？ 雌雄を決するなら空が良いはずだ。こんな場所で殺したくも殺されたくも無いだろう？」

「そうだけ。そもそも、アニマの役目はザイと戦う事だろう。戦闘

機が地上で肉弾戦始める所なんて見たく無いぜ」

「そうですね！ それにパイロットの本質は空に有り、傭兵は無益な殺生はしない。バトラさんの言葉ですよ！」

慧とベルクトの言葉にジュラーヴリクは何度か瞬きした後につつと噴き出して笑う。

「そうだな。わたし達の機体と脳みそは全て空で戦う為^{からだ}に有る。こんな狭苦しい所で取っ組み合いをする為じゃない。兄さんとベルクトはわかってるじゃないか」

「そうだな。今、ここでこいつらを血祭りに上げてても、何の直接的利益も見込めそうに無い。これ程までに無益な殺生は無い。それにパイロットなんだ。空で決するのが道義だな」

ラーストチュカがジュラーヴリクに耳打ちする。

「時間切れか。まあ良い。今日はあんたらとベルクトの顔を見に来たんだ。墜としちまったら顔も見れないし声も聞けないからな」

嘆息しながら、倒した椅子を戻す。

「目的は果たした。引き上げるぞ、ラーストチエカ、デイー・オー」
デイー・オーと呼ばれたエプロンドレスの少女がドレスの裾を翻しながらラジュラーヴリクの後に続く。ラーストチュカも後ろを歩くが何かを思い出した様にバトラに能面の様な無表情のまま近付く。

バトラは出したままだった銃を構えようとした所でラーストチュカが止まる。

「ジュラに武器を向けていたら、この場でお前を殺していた」

「最初から殺すつもりだったら、こんな事になっていないな」

その言葉を聞くとラーストチュカはジュラーヴリクの横に戻り、目を緩める。それは何処か王女を守る騎士の様な佇まいだった。

完全に店内から見えなくなるとバトラは銃をホルダーにしまうが、その撃鉄までは下ろさない。それは彼が地上んー戦場にいる事の証明だとカノープスのメンバーに教わっているベルクトは緊張した趣きでバトラの背後に近付き、バトラの背中に掌と胸を付ける。

「もう、大丈夫ですから」

「……安全圏は無くなった。どうなるか分からない。最悪を想定し

ておけ」

その後、朝倉が電話から戻るが微妙な雰囲気も相まって、誰も追加の注文はせずに店を出て行く。

これは動向が露見している状況下で同じ場所に長居する事を避けた為だ。

来た道を歩く途中で慧がバトラとファントムに話し掛ける。

「お前ら、ちよつと喧嘩っ早過ぎだろ。あのまま連中が襲い掛かってきたらどうするつもりだったんだ」

「どうにもなりませんよ」「どうにもならないよ」

ファントムとバトラが同時に答え、バトラはファントムに手を差し出し、発言権をファントムに譲る。

「騒ぎになる事を望んでいないのは彼女達の方です。此方から手出ささない限り暴力沙汰にはなりませんよ」

ファントムはバトラにアイコンタクトを送り、バトラが口を開いた。

「彼方さんも防衛力をPMCに頼っている間はPMCを敵に回したくないんだよ。特に俺たちみたいな所はな」

その言葉に慧は瞬きを繰り返す。

「え？ 何でわかるんだよ」

その言葉にファントムとバトラは呆れながら話す。

「考えてみて下さい。アニメですよ？ 軍の正式なアクションなら護衛に管理役含めてもつと大所帯で来ます。それが無いなら彼女達の独断、管理者の目を盗んでの行動と言う事です」

「ロシアの現状戦力はクーデターで低下している。主要都市の防衛に1流PMC。他は2、3軍の正規軍とそれ以上の数の2、3流PMC部隊だ。PMCとの敵対行動は己の身を滅ぼすだけ」

「何の為に来たんだ？ それに正規軍が有るから別に……」

「さあ？ 顔が見たかっただけというのは、案外その通りかもしれませんね。ともかく、命令違反なら事を露見したく無いのは彼女達の方です。故に幾ら威嚇しようと実力行使には至らない。そう判断しました」

「雇い主が防衛に雇っているPMCが敵対したく無いPMCと敵対したら、契約を切る恐れがある。PMC同士の潰し合いは不毛で彼らも生活がある以上は潰されたく無い。そこがテロリストとPMCの違いなんだよ」

「殴れないとわかっていたから好き勝手言ってたのか」

「ええ、まあ」「まあ、うん」

慧が何とも言えない表情をするとフロントムが少し微笑みながら話し始める。

「そんな顔をしないで下さい。別に個人的な好き嫌いでああいう態度を取った訳ではありませんよ。ロシアと言う国は相手が弱腰と見れば直ぐに嵩に掛かって攻めてきますからね。好戦的な位が丁度良いんです。舐められたら終わり、下に見られたら詰みと思って下さい」

「ヤクザの喧嘩かよ」

慧の突っ込みにバトラが笑みを浮かべる。

「的を得ているな。ロシアは弱腰、中国は勝っていると、韓国は自分の物差しから外れると高慢な態度に攻めてくるからな。一緒に仕事は理由が無い限りしたく無い物だ。話は変わるが、さっきの3人の名前と顔は一致したかな？」

「ん」「あ」

グリペンとベルクトが揃って首を傾げる。

「えっと……ジュラーヴリクとラーストチュカは見た事が有りますから知ってますが、最後の1人は初めてです」

「Suur27とMig29は分かった。でも、あと1人は不明。あんな固有色は見た事が無い」

「ですよね」

アニマにしか分からない事を話す3人にバトラと慧が揃って置き去りにされるが、慧が声を上げる。

「ちよ、ちよっと待ってくれ。Suur27とMig29? あいつらが? だって全然別の名前を言ってたぞ。Suur27はフランカー、Mig29はファルクラムだろ?」

「そいつはNATOが付けた共通認識させやすくする為のコードネームだ。ジュラーヴリクはSu-27に現場が使っている愛称。ラーストチュカはMiG-29の現場が付けた愛称だ。ロシア機に正式な愛称が付けられているケースは稀だ」

「……バトラさんが気になるのは、もう1人。エプロンドレスにフレンチベージュのアニマ……ディー・オーですね」

バトラがベルクトの言葉に頷く。

「ディー・オー何ていう愛称の機体はロシアに存在しません。キリル文字のДとОを繋げれば読みは同じですが……」

「意味はbeforeやuntilです。これは……」

「決して、愛称に使われる様な言葉じゃないな」

「何かのイニシャルってことは無いのか？」

「可能性はあります。ですが、既存機の名前をどう訳してもД・Оにはならないんです」

「ロシア機に愛称が無いのは多い。つまりは数字の部分をキリル文字にした際に出てきた文字と言うのはどうだ？」

バトラの言葉にファントムが花が咲いた様な笑顔を浮かべた。

「数字の読みをイニシャルにすれば思い当たる節が幾つかあります。Дはドヴァーツァチ、Оはアジーンの頭文字。だとすれば……ベルクト」

「ええ!?!」

突然の問答に驚くベルクトだが、直ぐに口を開く。

「21です」

「正解です」

「それじゃあ、21の製造番号や開発番号が付いている機体と言えるだけ言ってみよう!」

「えええ!?!」

ベルクトの回答にファントムが首肯するとバトラの無茶振りがベルクトに襲い掛かり、ベルクトは驚きながらも記憶の中を検索する。

「Su-21とYak-21、MiG-21がパッと浮かびましたね」

「戦闘爆撃機と第1世代ジェットをアニメ化する利点は無いな。となればM i g ー21だが、存在を隠す様な機体か？」

「確かにM i g ー21は旧東側陣営のベストセラー機生産機数は1万機を超えています。NATOコードネームフィッシュヘッド」

「フィッシュヘッド」

慧が何か懐かしく感じるかの様な声を漏らす。

「だが、M i g ー21は第二、改修型で第三世代だ。第三世代の強化型や第4世代以上が正規軍の主流だ。わざわざ、秘匿するか？ 最近出来たにしてもM i g ー21なら公開するだろうか？」

「もしかして、私みたいなの……」

何処か悔やむ様に話すベルクトにバトラが優しく語り掛ける。

「それも有り得るだろうが、露見した相手は日本。恐らくアメリカに情報を渡っていると考えて直ぐに生産するとは思えんがな。もつと別の物……ベルクト。ロシアじゃないと分からない様な機体で21と言う数字を使っている物は？」

「え？ えつと……Iー21くらいです」

「……なあにそおれー？」

バトラの間抜けた声にベルクトが噴きかけるがギリギリで堪え、フロントムは呆れながら答える。

「Iー21は戦術航空機先進航空複合体。Tー50 PAKFAの事です」

「頼む……アクーラは勘弁してくれ……あいつともPAKFAともやり合いたくねーよ」

何かを思い出した様に震えるバトラにベルクトが心配そうな表情を向ける。

「何か有ったんですね」

「ヴアラヒアとの最終決戦空域までの空域の制空権確保の帰路で単独飛行中に元正規軍エースパイロットが乗るステルス機というエンカウントバトルが発生したんだよ。それがPAKFAに機首転換訓練中のマルコフだったんだよ」

機種転換訓練中とは言え、屈指のエースパイロットと単独での交戦

と言う悪夢じみた事態に全員が押し黙る。

「良く、生きてられましたね」

「逃げに徹したのと仲間達が来てくれてな。1機の損害も出さずに逃げられたのは奇跡だったかもしれん。今、思い出すと2度と無いとわかっていても震えが止まらない」

そう話すバトラの言葉に慧・ベルクトの2人は恐怖を覚えるがファントムの咳払いを聞き、現実に戻ってくる。

「兎に角、P A K F Aだとすると戦略を立て直す必要がありますね。それにこちらの行動が筒抜けなら根本的に作戦も練り直さないと」

「なら早い所、八代通に連絡だな」

足を速めようとした一行に朝倉が話し掛ける。

「皆さん。合流場所を変更します。なんでも、大学に警察の手が入ったらしくて」

「はいはい。どうせありもしない事をでっち上げて、事情聴取からの逮捕だろう。割と良くある事さ。合流場所は？」

「ちよ!? 八代通さんの心配しなくて良いのか!？」

「どうせ、あのデブだ。何処からか逃げて、セーフティーハウスで飯食いながら俺らを待ってるんだよ。しかも、第一声が不遜な言葉付きでな。で、集合場所は？」

「中央街区のホテルです。我々はセーフハウス代わりに使っている所です。モンゴル政府も存在を掴んでいない筈です」

「安全性なら大使館だが、少し距離があるし監視の目も多い。そこに行くぞ！」

走り出す一行の中でベルクトはバトラに視線を向ける。

「バトラさん」

丸く透き通る赤色の宝石を思わせる瞳が不安で震える。

それを安心させる様にバトラは微笑みを浮かべる。

「安心しろ……安心しろよ、ベルクト。あのインテリデブが早々捕まってたまるか。多分ホテルで飯食ってるだろうさ」

「そうですね……そうに決まっています」

ベルクトが楽観的な態度と声を浮かべるが、掌に爪が食い込んでい

る事と何かを抑える様に走るベルクトを見たバトラにはそれは装いの物だと直ぐに気付くが何も言わずに何かを抑える様に走るベルクトを気遣い、少し速度を上げて走る。

だが、バトラは八代通の事より、あのアニマ3人とベルクトの方が心配だったが、誰にも気付かれぬ様にポーカーフェイスのままホテルへと走った。

作戦35 平和な安息と動き出した歯車

バトラ達はセーフハウス代わりにのホテルに着くと最上階のスイートルームの廊下を駆け抜け、八代通がいる筈だと言うスイートルームの扉を押し退ける様に開ける。

「おう、遅かったな。待ちくたびれたぞ。何処で道草食ってたんだ。飯の食い過ぎで動けなくなっているのかと思っただぞ」

八代通 フライドチキン
デブがデブの素を食っていた。しかも、道頓堀川にインジエクトされた爺さんが作るフライドチキンだった。しかも、足元には女性を侍らせて、足ツボマッサージを行わせている。捲り上げられたスラックスと生白い脛が間抜けな印象を与える。

この光景を1番に見たバトラのこめかみの部分から『ブチッ』と言う音を立てる。

心配していたのに呑気に飯を食いながら、マッサージを受けている事ではなく、自分達は食事に博打を打ったにも関わらず、デブがデブの素、しかもチェーン店と言う安碑を切っている事にだった。

「俺たちの勇気と円卓で空戦した労力を返せええ!!」
今にも八代通にライダーキックを食らわしかねない勢いのバトラをファントムとベルクトで抑えに掛かる。

少女兵2人が暴れる少年兵を取り押さえると言うコメディイ映画めいた光景を背後で行っている中で朝倉と慧は八代通に警察から逃れる為にこのホテルへ来た理由と料理店でロシアアニマ3人とエンカウントした事などを報告する。

その報告を受けた八代通は原因とやるべき事を指示し朝倉が即座に行動を開始する。

余談だが、八代通にマッサージしていた女性はファントムとベルクトがバトラの捕縛作業を開始するとはほぼ同時に部屋の退出を八代通が指示したために今、この部屋には居ない。

「ここは安全なんですかね？」ベルクト。そっち抑えなさい

「さあな、ただ現状では何処に居てもそんなに危険度は変わらんだろう。状況が分かるまではどっしり構えているさ」わかりました

「支払いは大使館持ち出そうだ。好きに頼んで良いぞ」
慧は受け取りながら嘆息する。
自分達は何をしに来たんだ？ と……

バトラ達が潜伏するセーフハウスと言っても何処かのスピードジャンキー達が潜伏する様な家でもシエルターでは無く、ただの会員制ホテルだ。

都市部に用途・持ち主不明のシエルターや家が有れば不振がられるが会員制ホテルだとかえって怪しまれる事が少ない。セーフハウスと言うのは隠さないが隠れていると言う矛盾をクリアできる建物が一番良いのだ。

その辺を考えると会員制ホテルと言うのは会員の一般客も泊まるので紛れ込み易く、警戒し易いので都合が良い。因みにバトラのような金の無い奴が潜伏する場所は若者の多いピンクのホテルやビーチ沿いのホテルや宿泊施設である。

さて、気絶したバトラだが目が沈む始める時に目を覚ました。

「う……ここは？」

「あ、起きましたか？ ここは潜伏するホテルの035室。バトラさんの部屋ですよ」

「……」

目を覚ましたバトラは不可解な物を見て、感じた所為か無表情になつた。

バトラの目には異様に近いベルクトの顔と後頭部には暖かくスベスベで柔らかい感触を味わっていた。

「膝枕？」

「はい。膝枕です」

ベルクトは正座した時にできる太腿と太腿の間にバトラの頭を置き、自身の腰と脛の間にはクッションを置く事で足の痺れ対策をしつかりと施したままバトラを膝枕した様だ。だが、手元にベルクトの膝枕と同じ高さの枕が置かれている辺り、フルタイムで膝枕をしていた

様では無い事をバトラは把握する。

「膝枕ありがとうな。他の奴は？」

「氣を利かせたのか別のお部屋に。大丈夫ですか？」

「ただの氣絶だ。どうという事は無い」

ベルクトから起き上がるバトラだが、その瞬間に何処か勿体なさ気な声を上げるベルクトだが、バトラは首を傾げるだけだ。

バトラ自身膝枕を片宮姉妹にした事があるが結構、辛かった思い出がある為にベルクトの感覚がバトラには理解できずにいた。

「喉が渴いたな。何か有ったかな？」

そう言いながら冷蔵庫に近づくバトラだが、ベルクトから何も無いと言われるとどうしようか悩み始める。

バックパックは火器と共に持つてきてはいるがバックパックの中身は出来るだけ非常時以外は使いたく無いのがバトラの心情だ。

バトラはホルスターとベルトが一体化したオリジナルベルトを拾い、ズボンに巻き付け、カッターシャツの上からMS社の都市部での潜入や平時、休憩時間中の外出に適した私服風隊服の上着に袖を通し、ファスナーを首元まで閉めて、ファスナーを隠す様につけられた布をマグネットボタンで閉める。

私服風隊服を着たバトラの今の格好は落ち着いた薄いモスグリーン色の固めの布で作られ、裾には底・蓋付きのポケットに1列に7個付けられたマグネットボタンが特徴のコートを一番上のボタン以外は付けた状態で着用している。ズボンも底に蓋付きのポケットが幾つか付いており、実用性を求めたら無骨さが増したミリタリールックと云う印象を見る者に与える格好だ。

バトラはコートの前サイドに作られた他人から見えづらい様に作られたスリットに手を入れて、抜き撃ちに問題が無いか確認すると財布と部屋の鍵をコートの裾にポケットに入れる。

「何方に行かれるんですか？」

あつと言う間に身嗜みを整えたバトラにベルクトが一足遅れて声を掛ける。

「下の売店で飲み物を買に行くんだ。一緒に行くか？」

「その……」一緒したいのですが……」

バトラは口籠るベルクトの服装を見て、何が言いたいのか察した。

ベルクトの服装はMS社の飛行服であり、街に繰り出すには慣れていない者だったら、少し恥ずかしい格好だ。

バトラの様な実用性を求めた故の無骨さがあるミリタリールックならまだしも、完璧な軍服であるこれで外出するのはベルクトの感性からは恥ずかしい。しかし、着替えようにもバトラを待たせたく無いと言う思いから着替えたいとは言い出せないベルクトにバトラは肩をすくめる。

「着替えたいだろ？ 別に待つのは苦じゃ無い性格だからゆっくり着替えて来い。エレベーター前で待つ」

バトラがそう言うのとベルクトは花が咲いた様な笑みを浮かべて、小走りで自分の部屋へと戻る。

バトラは笑みを浮かべると財布に金が有るか確認して部屋を出る。

エレベーター前で待つ事10分。ベルクトが着替え終えてたのか小走りで近付いて来る音にバトラはもたれ掛かっていた壁から背中を離す。

「あの……似合いますか？」

「……」

ベルクトの服装に言葉を失うバトラ。

ベルクトの格好は紺色が混じった落ち着いた黒色の生地で作られた胸元が見える袖無しタイプの軍服ワンピースで、飾りの要素はシンプルに燻金の縁取りのみでボタンもダブルボタンを細い彩色性の高いロープで止めるタイプだ。防寒用に短めで薄く暗い紫色のポンチヨを羽織っている。

下のスカートの部分はワンピースの上部と同じ生地で作られたスカートにレース生地のポンチヨと同じ紫色の一回り長いスカートが膝上数cmの長さの一枚のスカートに見える様な作りだ。

露出は胸元の谷間の始まりまでで、暗い色合いの服の為かベルクトの白い肌と髪、赤い瞳が良く映えている。

その美しくも可愛らしい格好をしたベルクトに言葉を失うバトラ。「やっぱり……似合いませんか？」

不安げなベルクトの声にバトラが大慌てで褒めようとするが言葉が浮かばず、直球に『見惚れてた』という言葉を紡いだバトラにベルクトは顔を赤くする。

初々しい反応をする2人だが、見る者が見れば可愛さと美しさを高水準で纏めるこの服を選んだ人間のセンスの高さを伺える出来栄えだが、驚くべきはベルクトのコーディネートだけでバトラとベルクトが2人揃った時のコーディネートテーマが直ぐに思い浮かべられる事だろう。

バトラの服は実用性を追い求めた上での無骨さがあるがそれが一種の格好良さを産む出し、ベルクトの服は華やかさは無いが気品と可愛らしさ、美しさを醸し出す。

2人揃うと貴族出の女性士官候補生を連れて街に繰り出す、現場での叩き上げ兵士の様な構図を連想させる。

2人は無言でエレベーターに乗り込み売店へと赴く。

その道中で他の客から『お似合い』や『綺麗』『可愛い』などの声を聞くとベルクトは更に顔を俯かせ、バトラはベルクトの手を引いて売店に逃げ込む様に入る。

「それじゃ……適当になんか探そう」

「そ、そうですね」

手を繋いでいた事に今更ながら気付いた2人は気恥ずかしそうに話しながら手を離し、バトラもベルクトも確実に売店を物色する。

バトラは自分が飲む飲み物の他にアルコール度数の高いウォッカやテツキーラと言った酒類を買って行く。

モンゴルでは18歳から酒が買えるが、バトラはギリギリ18歳と言う事で買う事が出来る。更に買い物籠に洗剤と卵を入れる。

ベルクトも合流すると飲み物の他に色々入っている事に疑問に思いつつも菓子類などを入れていく。

会計を済ませて、部屋に戻ったバトラは早速、購入した酒類を開ける。

「お酒飲むんですか!？」

「戦闘区域で酒飲む馬鹿が居るか! 火炎瓶作るんだよ」

バトラの突っ込みを聞いた言葉を聞いて、胸を撫で下ろすベルクトだが、突っ込みの後に聞いた言葉を思い出して声を上げた。

「火炎瓶つて、どういう事ですか!？」

「手榴弾より足止め効果が高いんだ。本当ならガソリンなんかが良いが、アルコール度数高めの酒に洗剤と卵なんかでも充分行ける」

案外、誰も気付かないが知識がある物が見れば、今のご時世では危険物は身近にゴロゴロ転がっている。

火炎瓶も発火剤があればそれを強化する添加剤は沢山ある。

今回は売店の品揃えの問題で布に火をつける必要のない火炎瓶やより強力な対戦車火炎瓶の作成はできなかった。

「できたな」

「本当に作ったんですね……」

ベルクトに作り方を教えながらやった為に進行が遅くなってしま以外は暗くなっていた。

ベルクトが精神的に疲れた顔でバトラの部屋を出ようとした時、バトラがベルクトを呼び止める。

「そう言えば、売店の近くになんかアクセサリー関係の店があった気がするんだが、一緒に行かないか?」

それを言うとベルクトは笑顔で頷き、ロビーへと戻り、件の店の前に行く。慧とグリペンが居た。

グリペンの視線の先にはチャイナドレスに似ているがゆつたりとしたデザインで、腰の帯が和服の様な雰囲気を感じさせるモンゴルの民族衣装だった。

「……なんか、お前がこれ着てるのが想像できないな」

「確かにな」

突然の声に慧が振り向く。

「バトラさん達も売店に?」

「ああ、ついさっきな」

「入れ違いだったか」

「何見てるんだ？」

バトラの疑問に指を指すだけで答えると慧にベルクトが反応を示した。

「可愛い」

「こう言うの好きなのか？ 普段の服装とは大分イメージが違うけど」

「女の子なら可愛い物が嫌いな人は余りいません!!」

強く主張するベルクトの声を聞きながら、慧が何かを見つけた。

「なんて、読むんだ？」

「Feel free to try this on……直訳なら試着可能だな。試着してみるか？」

「そんな、お金ありませんよ」「そんな経済的余裕はない。財政的に不可能」

「フリーだから、無料だぞ？」

「じゃあ、お願いします」「OK、じゃあ」

バトラが店員に英語で話し始めると女性店員はにこやかに了承して、グリペンとベルクトを試着室へと連れて行く。

他人に着付けを手伝ってもらうのは初めてなのか、前後左右に回転したりと優雅さとはかけ離れたステップをカーテンの隙間から踏んでいる事が見えるのと、『お……お……』と戸惑う様なグリペンの声から男性陣にもグリペンが他人の手伝いを受けながら着付けを行うのが不慣れな事が直ぐに判別が出来た。

それでも、衣摺れの音とするので着替えは出来ている様だ。

それに対して、ベルクトはと言うと着方がわからない事から来るであろう戸惑う音がするがグリペンの様な右往左往する事は無く、しっかりと着付けられていた。というのも、女性オペレーター陣に休日に着せ替え人形の如く試着され、着付けも手伝って貰う事が多かった為に何処か小慣れている感じだが、それを男性陣が知らない為にグリペンよりは他人の手伝いに慣れている感じだと自己完結した。

「ぐお」

「きゃ」

「なんかすごい声でしたぞ……」

「帯でもキツくされたんだろう」

ハラハラする慧に冷めた対応を見せるバトラと全く違う反応の2人の前でベルクトの試着室のカーテンが開き、ベルクトが一步一步踏み締める様に出てくる。

グリペンの試着室のカーテンも一足遅れて開き、グリペンがフラつきながら出てくる。

2人ともホテルの白んだ照明を浴びて、絹の生地が煌めいている。

「う……わっ」

「……ほおう」

慧とバトラは大輪の花が咲いた様に空気が華やいだのを感じた。

金糸の刺繍が、帽子につけられた宝石が、長い飾り房が鮮やかに周りの空気を彩る。

前に流された髪が緊張からか光をいつもより少し多く孕んでいる様にも見える。

愛らしい。それが慧とバトラが思った第一印象だった。ベルクトとグリペンが同時に人形の様な顔を上げる。グリペンが喘ぐように唇を開けた。

「重い」

「知ってた」

グリペンの第一声にフラついていた事からかなりの重量がある事を見抜いていたバトラはグリペンの第一声を予想していた為に来た突っ込みだった。

慧はグリペンの第一声にがっくりと来て、ベルクトは困った様な苦笑を浮かべる。

それでも、慧はグリペンの姿に見惚れる。慧が見惚れている間にベルクトが一步だけバトラに近付く。

ベルクトは袖を軽く摘み、手を少し曲げる程度に横へ伸ばす。

「に……似合ってますか?」

「そうだな……」

まじまじと見つめるバトラにベルクトは恥ずかしさを覚え、腕を少

し閉じてしまおうが、気にせずに見つめるバトラ。

元々が作り物めいた容姿のベルクトである。非日常的な装いをしたとしても全く迫力負けするどころか装いが更にベルクトを際立たせる結果となる。

「うん。可愛いな。写真良い?」

「え!? 少し恥ずかしいですが、構いませんよ」

聞くや否や、バトラが懐から携帯を取り出して、アプリを起動。ベルクトの写真を撮る準備を済ませて構える。

直球的な賛辞と写真を撮りたいと言うバトラの要望に嬉し恥ずかしいと言う様な表情を浮かべるベルクトの写真を撮ると同時にカノープスメンバーに送るバトラ。

サラと京香がこの写真を確認した瞬間に小松基地の全窓ガラスが揺れるほどの黄色い悲鳴を上げるがそれをバトラとベルクトが知る由は無いだろう。

小松基地の喜劇とも悲劇とも言える現状を知らない店員はバトラと慧に『良くお似合いです』、『可愛い彼女さんにプレゼント、如何ですか?』と打診し、2人の要望から値札を見せると慧が啞然とし、バトラは『マジかよ……』と呟いた。

慧には持ち金の数十倍の価格で被りを振るが、バトラにはMS社の補給課で買う20m弾ワンダースより少し安めの値段だが、服が重いと云った理由から携行に問題ありとして購入は辞めた方が良いと判断した。

それをベルクトに伝えたとベルクトも了承した。

だが、バトラも試着だけしてサヨナラすると言うのは気が引けるのかアクセサリー売り場に目を通す。

そこである物にバトラの目が止まる。

「石は……なら、丁度いいな」

バトラは手の空いている店員を呼び、ある4つのアクセサリーを選んで、シルバーのチェーンを手に取り、店員にこれをネックレスにしてくれと頼むと店員は何か気付いたのか笑顔で了承し、店の奥へと消えた。

「何か買うんですか？」

「土産も兼ねてお守りにな。ベルクトの分も買ったから」
そう言うのとベルクトが笑顔を浮かべる。

「ありがとうございます」

何時もの憂いや遠慮がある笑みでは無く、嬉しからくる自然な笑みを見せたベルクトに鼓動が一瞬だけ高鳴ったバトラだが、それを鼻で笑い飛ばして、唇を動かす。

「仲間に置いてけぼりにされるのはもう嫌なんだな。縋れるなら石でも藁でも、神でも縋ってやる」

「……………着替えてきますね」

ベルクトが何かを喋ったが、上手く聞き取れなかったバトラが聞き返そうとするが、それよりも早く試着室に入ってしまった、タイミングを逃したバトラは腕を組んで何と言ったか考える。

その近くで慧が複雑な感情を相手に面白い表情を浮かべているが、バトラがそれに気付く事は無かった。

だが、近づく人影には気付いたのか振り向くと同時にコートのスリットに手を入れ、何時でも抜き撃ちが出来る状態にしておく。

「あー、待った待った。心配しなくてもあたし1人だ。喧嘩するつもりもややこしい議論をするつもりも無い。だから、落ち着いてくれ、ロビーで流血、殺人沙汰は迷惑だろう」

「(それって、迷惑とかそんなレベルじゃねーぞ)」

両手を見える位置で開いたまま話すジュラーヴリクの言葉に慧は喉の所で辛うじて止める。

バトラも相手の意思を感じ取ったのかスリットから手を出す。

「何しに来た？」

直ぐにスリットに手をつ突っ込める位置と角度で手を止めるバトラが要件を伺う。

「リラックスしてくれと言った所で無理だよな。昼間の行動を見て、信用してくれと言った所で意味が無さそうだし、ここで話そう。要件は2つ。まずは昼間の事だ。悪かったな、感情的になっちゃまって」

そう言つて深々と頭を下げるジュラーヴリクにバトラも慧も面食らうとバトラも慌てたように昼間の事を謝罪する。落ち着いて考えると古傷を抉っている様な物だと何処かで感じていた様だ。

「あんな態度を取るつもりじゃ無かったんだ。もうちよつと紳士的に接するつもりだったんだけど、ムカつく奴がいたからさ」

そう言つて、横目でバトラを見るジュラーヴリクにファントムのと込みでもう一度頭を下げるバトラ。

「そんな事を言う為になんかわざわざ来たのか？」

慧の問い掛けにジュラーヴリクは眉を寄せる。

「重要だろ。ロシアのアニメが、相手の食卓をぶち壊して何も気にしない不法者だと思われたく無いからな。例え敵だとしても非は非として認める。それはあたし達の流儀だ」

「正規軍では難儀な性格じゃないか？ 誇り高い激情家で独自の正義感を持っている。軍で疎んでいる奴が1人や2人居るんじゃないか？」

「まあな」

バトラの言葉に肯定すると妙な沈黙が数秒降りるが、バトラの方からそれを破る。

「1つ目はわかった。2つ目は……予想が付くがな」

「ベルクトの話を知りたい。日本で何が有つて、日本側に着いたのかを。元々は昼間、あんたらに会いに行つたのもこの件だったんだ。MS社も日本もあいつの扱いで腑に落ちない点が多いからな。あんたら、あいつをどうするつもりだったんだ」

「どうって」「なんとと言えば良いかな」

慧は目の前のベルクトを可哀想に思ったが故。バトラはベルクトを過去の僚機を務めたパイロットを重ねた故に助けた。

だが、それはその場の複雑な感情からの行動であり、それを説明するととなると、簡単に出来る様な物では無い。

「しらばくれんなよ。ベルクトの能力は知ってるだろう。あいつを上手く使えば周辺諸国はおろか、アメリカやあたし達の祖国、ロシアだって圧倒できる代物だ。なのにあんたらはあいつの為に超大型ザ

イに挑んで勝利した。訳わかんねーよ」

「そこに巨大航空機が来たから」

実際その通りである。あくまでもあの時の相手が巨大航空機であり、それを落とさねければならない状況に陥り、それを撃墜した。そうとしか言えない状況なのである。

「面白い事を言うなお兄さん」

「実際、その通りだ。ベルクトからクソ忌々しい灯を消す為にあいつが邪魔だったただけだ」

「はあ？」

露骨に顔を顰めるジュラーヴリク。

「何で【誘蛾灯】の機能を取っ払うんだ？ あいつはそれ用に作られたアニマなんだぞ」

「仲間を犠牲にしたく無かった。それだけだよ」

死んだ仲間と外見や性格が似ていたと言う事は伏せた状態で事の顛末を話す。

出会う切っ掛けから出会ってからの経緯。ベルクトの記憶の復旧に八代通の計画や決断、バトラの行動。そして、ベルクトが囷以外の生き方を探していた事と囷以外の生き方をMS社で見つけた事も。それを告げられたジュラーヴリクは喘ぐ様に息を吐くと問い掛ける。

「ただの戦闘機パイロットとして扱う為の行動だった。ベルクトを」

「ああ」

「仲間を助ける。ただそれだけの為に」

「そうだ。それ以外に何がある？」

決して臆せず胸を張るバトラ。

ジュラーヴリクは神妙に宙の一点を見つめて、沈黙する。大きく息を吸った後に口を開いた。

「あいつとは……ノヴォシビルスクの航空機工場で会ったのが最初だった。あたしもラーストチュカもゴテゴテ飾り立てられて壇上に立っていたら見えたんだ。真っ白な、この世の汚れを全て洗い流した

様なアニマが舞台の袖でひっそりと立ちながらこつちを見ていた」

「……」

ジュラーヴリクの言葉に黙したまま聞くバトラ。

「その目は光に憧れていた。それだけが記憶に残っている。あいつが何を考えていたのか、何を思っていたのか、結局分からずじまいだった。が……そうか。あいつはあんたらの所に居場所が出来たんだな」

ジュラーヴリクはふっと視線を落とした。

「祖国の守護者としてあんた達の行動は全く理解出来ない。使える者は全て使い、国家を守るのがあたし達の使命だ。ベルクトを殺す事で100万のザイが倒せるなら絶対にそうするべきだと思う」

ジュラーヴリクの言葉に慧が何か言おうとするがバトラが片手で制してから、語り始めた。

「気を悪くするかもしれないが言わせてもらう」

クツションを敷いてからさらに口を開く。

「俺たちにとつてはあんたらの考え方は分からない。俺たちは与えられた依頼と大義名分を持って、利益を生むのが使命だ。その為に神と手を切り、悪魔の手を取った。だがな、仲間を自分達から見捨てるど畜生になったつもりは無い。例え、世界で1人の仲間の為にそうじゃ無い奴の血が自分達の下に何万ガロン流れようが知った事でない」

その言葉にジュラーヴリクは

「狂ってるな。確かにあんたらの少数の為に大数を捨てる考えは分からない。だが、狂ってまであいつを思ってくれる奴が居るならあんたらの所にいた方が幸せかなもな」

「意外だな。祖国の為に連れ戻すと言うと思っていたのだが……」

「ここにロシア軍のアニマとして来たならそうするかも知れない。だがな、今回はSuur27-ANM-ジュラーヴリク、あいつの姉貴分として来たんだ。あんなアニマでもあたし達の妹だ。使い捨ての爆弾にされた何て聞きたく無いし、何の生き甲斐の幸せも無く戦っている、戦っていたなんてもつと聞きたく無いからな」

「ジュラーヴリク」

予想外過ぎる言葉に慧もバトラも反応出来ずに居ると背後からグリペンとベルクトの声が同時に響く。

ベルクトもグリペンもジュラーヴリクを見ると交互に視線を向ける。

ジュラーヴリクはベルクトを見ると微笑み、語り掛けた。

「幸せそうで何よりだ。見捨てるなよ。この狂ったパイロットをな」

そう言うのと踵を返して、去ろうとするが、何かを思い出したのか振り返る。

「3つ。情報提供してやるよ。ウランバートルの主要街区にはロシア製交通管制システムが導入されているがこいつはモードを弄れば人間も撮影し続けられる。さらにモンゴルの親露派は採掘会社のモグラを潰しに掛かった事に気付いて、多少手荒な方法でも片を付けるつもりで動いている。あんたらにウランバートルを向けられると行方が分からなくなるからな」

その情報にバトラは疑問と驚愕に染まった表情を浮かべるとジュラーヴリクは獰猛な笑みを浮かべる。

「戦闘機同士の戦いで地上の話がゴチャゴチャ絡んでくるのが鬱陶しいだけだ。あたし達は真正面からでもあんた達を打ち倒せる。政治や謀略の助け何て必要無い」

そして、ジュラーヴリクはベルクトに視線を向ける。

「ベルクトの事に感謝してるからな。だから、これで貸し借りは無しだ。次に空で会った時は容赦無く撃ち落とす。2度目の慈悲は無いからな。そいつを良く覚えておけ」

バトラは『情報の提供に感謝する』と言いながら敬礼を送るとジュラーヴリクは手を振りながら去り、その背中を徐々に小さくさせる。その小さくなる背中にベルクトが話しかける。

「あの……」

「何だ？」

「情報はありますがどうもごめいます。でも、私達も仕事でここに來てる

んです……仕事の邪魔をするなら……」

それ以上の事を言おうか躊躇うベルクトだが、息を大きく数と目付きを鋭くして……

「仕事の邪魔するなら……MS社の社員として、貴女方を……誇るべき戦闘機パイロットとして墜とします！」

言い切った。

「そうか。なら、どうなっても恨みっこ無しだな」

笑顔でそう言うの外に広がる夜の闇に消えて行った。

「良く言ったな、ベルクト。もつと褒めてやりたいが時間が無い。俺の部屋の荷物を取って来てくれ。俺はファントムの部屋を見る。慧とグリペンは八代通の部屋を見てくれ。時間が無いぞ。行動開始！」

バトラの手拍子を合図に全員が行動を起こした。

敵は直ぐそこにまで迫ろうといていた。残された時間は少ない。

作戦36 陸の戦場

バトラはスイートルームが集中する階に着くと同時に音を立てぬ様に走り出し、フロントム部屋に着くとバトラはベルクトから移動中に預かった部屋のカードキーを差し込み、鍵を開ける。

鍵が開いた扉を蹴開ける様に開けて、部屋の中に入ると同時に拳銃を抜きながら叫び、部屋に侵入者が居ないか視線を巡らせる中でバトラの耳が奥の部屋を発信源とする音を聞いた。

「奥か！」

奥の扉に身体の向きを変えながら、銃の持ち方を変える。

手の中で素早く銃を回して、合唱状の手で持てる様にした。【High】と呼ばれる持ち方だ。さらにその状態を維持したまま、身体を横に向けながら肘を曲げることで銃を目線の高さで保持する。【Extended】という構え方だ。

銃を構えたまま、奥の部屋へと通じる扉をタツクルに近い体勢で開けて、中へと侵入する。

「フロントム！ 無事か！」

バトラが銃を構えた先に緑髪の少女が居た。髪や肌から水滴を伝わらせながら今まさに浴室から出てきたのだ。白く艶やかな肩が、腰のラインが水滴を乗せながらもほんのりと上気していた。

視線が合う。

銃を【High】と【Extended】で構える少年と文字通り一糸纏わぬ水も滴るいい女もとい少女がなんとも言えない沈黙と水滴が床に落ちる音を聞きながら固まる。

「バトラさん」

沈黙を破ったのはフロントムの氷の様に冷ややかな声だった。

「無事そうだな」

銃を目線の高さから胸の高さに来る様に動かしながらバトラが咳く。

「わざとやっていますか？」

「直ぐに出るからごゆっくり」

速攻で扉の外に出たバトラは壁に寄り掛かると八代通が隣の部屋から出てきた。慧とグリペンも一緒だ。そして、一足遅れで荷物を持ったベルクトも来た。

「何をしている？」

「遺言考えてます」

「穏やかじゃ無いですね」

「と言うかと何が有った？」

八代通からの質問にバトラが答えると朝倉と慧が次いで口を開く。

「バトラが浴室に入った。まだ、フアントムが入ってる状態で」

「結果と目的が混合で聞こえか無い風に言うのやめてくれません」

グリペンの言葉にバトラが反論する。

「お前な。あいつはオススメしないで。ベットで平然と寝首を掻いて来るタイプだからな」

「そう言う話をご希望ですか？」

「グリペンやベルクト、片宮姉妹は兎も角としてそれともアレか？お前はいつ刺されるか分からないスリルをスパイスとして楽しむタイプか？ まだ、イーグルの方があと腐れが無いぞ」

「そう言う話をご希望と見た。片宮姉妹だと必然的に3Pで死ぬるし性じゃ無いです。ベルクトは一方的に乱れさせたいですね。グリペンはロリ過ぎる。イーグルのあの性格は罪悪感がヤヴァイ。フアントムはゆっくり、まったりやりたいですね」

「オブラートに包んで下さい！」

「そんな会話をすんな！ ベルクト真っ赤だぞ！」

朝倉と慧の突っ込みを受けるバトラは勢い良く開かれた扉に壁とサンドイッチされる。

その時に声にならない悲鳴を挙げるが甲高い声過ぎて、誰も聞けなかった。

「これは私の憤りを解決する場だと思っていんですか？ それとも男達の下賤な話を聞いて、さらに憤る場ですか？ それとも忍耐と引き換えに怨恨の利息をつける場ですか？」

何時ものコルセットスカートとブラウスと言う清楚感の有る格好

だ。

「取り敢えず、済まなかった。それと情状酌量の余地を見極める場だろうが……証人が死んだから無理だな」

「AED!!」

朝倉がバトラのバックパックからAEDを取り出して擦り付けて充電。押し付けると一瞬だけバトラが跳ね、何事も無かった様に立ち上がった。

「えつと……取り敢えずは情報共有だな」

バトラの口から親露派の動向と監視システムといったジュラーヴリクから授かった情報を話す。

「畏……という可能性は無いんですか?」

「その可能性は少ないと思っっている」

フアントムの異議をバトラは速攻で否定する。

「何故、そう言えるんですか?」

「奴が戦闘機乗りだからさ」

バトラの返答にため息を漏らすフアントム。

「具体性に欠けますね。そんなので、納得するとも?」

「だろうな。結論から言えば、ジュラーヴリクの利害と親露派の利害が一致してないって所だな」

「どう言う事ですか?」

「わからないか?ジュラーヴリクは俺たちを空で殺したいが、親露派は事が大きくなる前に俺たちを排除したいから陸で殺そうとする。それに奴の性格上、陸の事を空に持ち込みたく無いし、持ち込んでほしく無いんだよ。これが原因で俺たちの戦力が少なくなつて、負けた。少なくなつたから自分達が勝てたとか考えたく無い。お互いに全力でやり合つて勝ちたい奴だ。それに何時でも戦力を投入できる状態で奇襲をせずに警告して来る意味がわからないな」

バトラの最後の言葉を聞いて、フアントムが納得した。

「確かにこのタイミングで警告するのはこちらにしかメリットが無いですね」

「だろうな。そうじゃ無ければ、俺たちは今頃は銃口に囲まれてい

ただろうな。と言う訳で朝倉書記官。脱出の手段は？」

「まさかと思うが、各個で交戦して脱出経路を確保せよ。なんて言わないだろうな」

バトラがそう言った瞬間に無線機に通信が入る。

「へバトラ!! 聞こえるか! ノゴン・ハスだ! ネオナチ気取りの民族主義のクソ団体が完全武装でお前らを迎えに行っている。かなりの数のマイクロバスに満載で向かっている。数台は抑えたが、何分自衛戦闘で使える火器がM^{マシンピストル} Pくらいだ。R^交・O^{戦規}・E^則が適用されればマシなんだがな!」

カルーレの声がAKとMPの発射音に混じりながら聞こえてくる。

今回は街中で自衛戦闘と言う事で強力な火器が使えないがR・O・Eが満たされれば十分な火器が使えるのだ。

「かなりの敵が接近している。直ぐに移動するぞ」

バトラがそう言いながら、窓を覗くとマイクロバスの後部ドアから完全装備の兵士達が降りて行くのが見えた。

バトラは大きく舌打ちするとベルクトからバックパックと武器を引っ手繰る様に掴み、背負う。

「敵が直ぐそこまで来ている。直ぐに移動だ。朝倉さん」

「地下フロア経由で隣のビルの駐車場に全く大使館と関係の無いナンバーの車を予備で用意してあります。それでガチユールト辺りでモンゴル政府にコンタクトします。時間が経てば、此方が有利になる筈です」

「戦闘は避ければそうだな。ベルクト、薬室に弾丸を入れて、安全装置を入れておけ、そして何時でも外す覚悟をしろ」

そう言うのと銃口がデカくなったMP5のコッキングレバーを動かして、薬室に弾丸を入れて、安全装置を掛ける。これで安全装置を外すだけで直ぐに撃てる状態だ。

「貨物搬送用のエレベーターを使いましょう。こっちです」

朝倉の誘導の元、バックヤードを通り、貨物搬送用のエレベーターへと向かう。

バトラは敵がいつ来ても交戦できる様に銃をグループの背後に向

けながらバック歩きで行動する。

バトラが銃を構えながら貨物搬送用のエレベーターに乗ると朝倉はキーを差し込むコードを打ち込むとB1以外のランプが消えて、直通モードへと変わる。

ドアが開くとバトラが先に1人で降りて安全を確認する。

銃を様々な方角に向けるも何も無い事を確認すると近場の車を弾除けにしてから手を前から後ろに動かして『来い』と言う意味のハンドシグナルを送る。

それを見た残りのメンバーはフアントムとベルクトのハンドシグナルの通訳を受けながら、バトラが指さした安全な場所に安全な人数で隠れる。

朝倉の指示する場所をバトラが素早く安全を確認しながら進む。バトラが安全を確認する間はベルクトがトカレフ（輸出仕様）を使って背後からの攻撃を警戒する。

そうしながらも隣のビルに移動して、駐車場に入る。

コンクリート打ちっ放しの駐車場は静かで様々な車が止まっているが殆どが日本の車だった。

スロープの上からは光が漏れている。

「まだ、敵は来てない様だな」

「待つて下さい」

フアントムの言葉を聞くと同時にバトラも何かを感じ取ったのか銃を片手で保持してハンド左手を握り耳の高さまで運ぶ『止まれ』のハンドサインだ。

「フアントムは目を細めながらコンクリートの奥を見据え、バトラはアイアンサイト越しにコンクリートの奥を睨み付ける。

「誰か居るな」

「誰か居ます」

お互いに確認する様な声音でバトラとフアントムが呟くと車の陰から1人の女性が出てきた。

ブラウスの肩からは怪我をしているのか服が赤くなる程の出血と重りが付けられた様に片脚を引きずりながらバトラ達の前に現れる。

「な」

「え」

女性の顔を見た瞬間に慧とベルクトが驚きから声を上げる。

女性の顔の半分は無残にも腫れ上がりついていた。それを見た慧とベルクトは駆け寄ろうとする。

「行くなー!」

八代通からの警告に慧とベルクトは足を止めて、『なぜ?』と聞くために振り返ると同時に八代通は凶相と言っていい程の表情を浮かべているのを見ると言葉を失った。

「撒き餌って奴だ。近付くなよ、殺されるぞ」

バトラの静かだけでも何かを孕んだ声にバトラと慧がバトラの方を向こうとすると銃声が1発響くと女性は安堵の表情を浮かべたまま、床に沈んで行く。

女性が車の陰から銃により撃たれたのだ。

女性の死体が床に倒れた音を合図にしてか、暗がりから武装集団が現れると、バトラが同時に叫ぶ。

「ぼうっとするな! 動け! 逃げろ!」

八代通に引かれてつんのめりそうになりながらも柱の陰に困惑の表情を上げたまま隠れる。遅れてその柱にバトラに背中を押されたグリペンも入ってくる。

ベルクトはバトラと共に隣の柱へと隠れる。

「何故、殺されたんですか?」

ベルクトは嘘だと言ってくれと言う様な表情でバトラに聞く。

バトラは柱から顔を覗かせながら答える。

「拷問をされて、ここを吐かされた挙句の果てに俺たちを一網打尽にする為に傷付いた身体のまま引きずり出された。そして、俺たちが寄らなかったから用済みとして殺された。まあ、俺たちが寄っても俺たち諸共殺されるから結果は1人で死ぬかみんなで死ぬかの差だな」

「そんな……そんな淡々と答えないで下さいー!」

ベルクトが怒りと哀しみに肩を震わせながら叫ぶ。

それをバトラは冷めた目で見つめる。

「陸地の戦場では独自の正義以外に価値は無い。陸地の戦場って奴は人間社会の本質が色濃く出る場所だ。道徳も倫理もそこに無い。ほぼ純粹なリアリズムが支配する。自分や仲間以外の命に価値は無く、捕虜は弾除けにして、子供に地雷原を歩かせる。そんな事が平然とやられ、許される世界だ。道徳や倫理、モラルなんて陸地の戦場では一切の必要は無い」

「そんな……………」

バトラが柱から銃と顔を覗かせて引き金を引く。

3回程の小さな爆炎が闇を照らすと同時に1人の人間の灯火が消えた。

少し離れた柱からも炎が上がると1人の人間がもんどり打って、崩れ落ちる。そこにバトラが1発だけ銃弾を叩き込み、永遠に動けなくさせる。

朝倉が『後退』を身振り手振りで教えるとバトラはOKサインを送るとベルクトに八代通について行く様に伝える。

ベルクトは頷くと何故か動けないでいたグリペンの手を引いて、八代通を追いかける。

バトラは朝倉に頭の上に拳を持って行くサインを送り、柱に身体を隠しながら柱に身体を密着させて、体重を柱に預けて撃つ『依託射撃』で銃を撃つ。

朝倉に先に後退しろと身振り手振りで指示すると朝倉は1回だけ発砲するとジリジリと後退を始める。

バトラはここをカバーする為に残り、近づく敵から発砲する。今回は逃亡や脱出が目的の為に隠れている奴を無理して撃つ必要は無いからだ。

依託射撃と膝立ちで撃つ膝撃ちを多用しながら隙ができた瞬間に朝倉の位置までダツシユする事で追い付く。

そこまで統制されていないのかりロードタイミングが被る奴がいる事と弾切れまで撃ってからロードする事。さらに銃の扱いに慣れきっていないのかりロードの速度もMS社や正規軍に比べると遅い為にできた方法だ。

バトラも弾が薬室に1発残っている状態で空の弾倉をリリースすると同時に弾が入った弾倉で弾き飛ばす。これはリロード前に弾倉を振ったり、叩いたりした方が良いと言われおり、弾倉を抜くのと新しい弾倉に衝撃や刺激を同時に与える為に行うバトラの行動だった。弾倉がしつかりと入るのを身体に染み込ませた感覚で把握するとそのまま銃を構えて、引き金を絞る様にして動かし、弾を撃つ。自動式の銃なので薬室に弾があればボルトを引かずとも発射できる。

バトラが射撃を開始すると同時に朝倉もジリジリと後退を始める。朝倉がある程度後退すると柱の奥からエンジン音が響き、レンジローバーが接近して来る。

後部ドアは開け放たれ、フロントムが半身を乗り出して叫ぶ。

「乗って下さい！ 慧さん、朝倉書記官！ バトラさんもです」

スピードを緩めたレンジローバーに慧と朝倉が飛び乗り、バトラも飛び乗るがベルクトとグリペンが乗っていない事に気付き、首を動かせば、銃声に少し覚えているのかバトラが退避するタイミングにバトラの半分の距離を動いていたとしか言えない位置に2人を見つける。

「クッソ!」

バトラは素早くバックパックから瓶を取り出すとライターで瓶の口から垂れ下がっている布に火を付けて放り投げる。

瓶は縦に回転しながら放物線を描き、地面に落ちると一瞬で着火。辺りを火炎地獄へと変える。

それと同時にバトラは車から降りるとグリペンとベルクトの背中を押して車へと急がせる。

「!? 乗れ!」

首筋に蜘蛛が走る感覚を感じるとベルクトとグリペンを突き飛ばし、自分は柱の方へと転がり込む。

転がり込んだと同時にさっきまで3人のいた場所にグレネードが着弾する。

「クッソ！ グレネード兵かよ!」

別の通用口から同じ武装組織と思われる人間達が出てくる。火炎

の目眩しも無い為に普通に撃つてくる。

さらに別のグレネードランチャーを持った武装兵がグレネードランチャーを構えているのをバトラは見つけ、叫んだ。

「先に行け！ 後で会おう！」

それを聞き届けた八代通はベルクトとグリペンが乗ったのを確認すると急アクセルで車を走らせるのと紙袋が開け放たれていた後部ドアから車内に飛び込んで来たのは同時だった。

そしてそれがバトラが言っていたお守りである事をベルクトは瞬時に理解するとベルクトは後部ドアから飛び降りようとする。

「いけません！」

それをフアントムが必死に押さえ込む。

離して下さい！ バトラさんが！」

「貴方が行った所で足手纏いになるだけです！ 貴方はバトラさんを死なせたいんですか！ それとも一緒に死にたいんですか！」

それを聞いたベルクトは冷静になり外に視線を向けるとバトラがグレネードランチャーを持った兵士を発射の寸前に射殺するのが見えた。

「バトラさん！」

ベルクトの叫び声は車の排気音とグレネードの爆発に掻き消される。だが、爆死した他のグレネードランチャーを持った兵士のグレネードが屋根を撃ち、屋根の一部が倒壊する。

ベルクトが最後に見たバトラは崩れる屋根を背に火がついた瓶を通用口に向けて投げ、サムズアップを送るバトラだった。

作戦37 絶望の後には希望がある

レンジローバーの後部座席の隅にベルクトは縮こまっていた。

冷静になってここに居る事の方がバトラの精神的にも身体的にも助けになると分かっているが、彼処にバトラ1人で置いてきた事にやはり納得が出来ていなかった。

そして頭の中でバトラを失うと言う恐怖が湧き上がってくると全身の細胞が悲鳴を上げてのたうち回る感覚を同時に感じ始める。

「嫌です。嫌です、嫌です、嫌です」

ベルクトの脳裏に撃たれた女性の映像が鮮明に蘇り、バトラも同じ様に悲鳴を上げてずに撃たれるか、グレネードの炎に苦しみながら死んで行く光景を連想する。

可能であるならば今直ぐにでもこの車を飛び降りて助けに行きたい。だが、今の自分の実力では助けるどころか足手纏いになる。それを理解しているからこそ動けず、自身の地上にいる間の非力さに恨み、絶望していた。

「大丈夫ですよ。彼ならこんな事で死にませんよ」

座席に座りながら首だけ動かしてベルクトに話し掛けるフロントムの声にベルクトは首を上げる。

「あの人は敵の勢力圏から歩いて脱出した事が有るそうです。街1つ抜け出すくらいは大丈夫ですよ。だから、また会った時にそのプレゼントを彼から渡して貰いなさい」

「……そうですね」

ベルクトがフロントムに笑ってみせる。そこには恨みや絶望の感情は無く、心配だが彼を信用も信頼もしていると言う感情しか無かった。

「それと彼を殴る準備をしておきましょう」

「どうしてですか?」

「こんな美少女を2人を心配させたんです。それ相応の応酬は有ってもいいんじゃないんですか?」

その言葉にベルクトは何処から突っ込めば良いのか分からず、苦笑

いを浮かべるだけだった。

瓶が割れる音が闇に響けば、忽ち赤い炎が人を燃やししながら闇を照らす。

闇には反響する男達の悲鳴と銃声しか聞こえない。

銃声が鳴れば1人、また1人と倒れ、燃える仲間を駆け寄せた奴から銃弾に倒れて行く。燃える人間は助けに来た仲間が目の前で死んで行くのを見て助からないと絶望し、燃える体の熱さと痛み、喉が焼かれて叫べ無くなった物から憎悪を持ちながら息絶えていく。

バトラは背中を柱に預けながら崩れた屋根に視線を巡らせる。

崩れた屋根の残骸から石と鉄がぶつかり合う音が聞こえる。恐らく後数回もすればこの壁は崩れ、挟撃を受ける事となる。それは同時に遮蔽物が無くなる状況になると言う事でもある。

バトラは敵の誘爆と火炎瓶のおかげでかなりの数の敵が死んで行ったが予断は許されない状況だ。

バトラは空の弾倉を外し最後の弾倉を入れる。

ここまで無駄弾無しで撃つて来たが、2ウェーブを乗り切るにはかなり難しい状況だった。

バトラは一旦、遮蔽物を変える。

敵もバトラが移動した事に気付き、移動を開始するが染み付いた行動からか無意識に密集形態を作ってしまう。

バトラもそこを見過ぐす程、甘くは無い。密集した場所に取り外し、幾つかの切れ込みを入れた車の燃料タンクを放り投げ。さらに火がついた布も投げ込む。

燃料タンクのガソリンに引火した炎は爆発的に燃焼し、兵士達を火炙りの刑に処して行く。だが、それと同時に崩れた屋根の壁をぶち破ってポロポロになったマイクロバスが現れる。

マイクロバスの後部ドアからは壁の向こう側に居た兵士達が次々に降りて行く。

「(クソ……ここは俺の死に場所かな?)」

降りてくる兵士達に鹵獲したAKで撃ち殺して行くが数が多すぎる故に対処しきれない雰囲気も出てきていた。

それでも必死の抵抗をみせるバトラを神は見捨てる事はしなかった。

八代通達が走り去ったスロープから車が走って来る音が聞こえ、その車はスロープの中に走りこんでくる。

そして、アクセルを強めたのか急加速すると車はマイクロバスを後ろから前へと押し出そうとする。

マイクロバスを遮蔽物にしていた兵士達の半分は上手く横に飛び退く事で車を避けたが、残りの半分やマイクロバスから降りようとしていた兵士達は突っ込んで来た車とマイクロバスに挟まれて圧死。車内で生き残った兵士達は予想を超える馬力で押す車の速度に脱出速度が追い付かず、誰一人として脱出出来ずに壁と車に挟まれて死亡した。

車と壁に挟まれてホイールベース(前輪軸と後輪軸の間の距離)が1mも無い改造がされたマイクロバスからは夥しい量の赤い液体が溢れる。ここが明るければ死んでいった人間達の肉片も視界に入るだろうが火炎瓶やガソリンの燃える炎しか無く、炎の近く以外は薄暗いので確認出来ない。

だが、襲撃者達の不幸はこれで終わりでは無い。

スロープからはさらに3台のハーフトラックが入ってくると左右の2台からは12.5mm機関銃の弾丸が吐き出され、真ん中の1台からは2連装に改造された12.5mm機関銃が発射される。

12.5mmと言う対人を使うには大き過ぎる銃弾を浴びた兵士達は身体が無残な事になりながら即死して行く。その車から逃れようと奥に逃げた兵士達は最初に突っ込んで来た車の上部につけられた砲塔に搭載された物と車体側面に搭載された物を含めて5門の7.62mm機銃の掃射を受けて倒れて行く。

バトラは遮蔽物から身を乗り出す事は無かった為に無事だが足元にそれなりに大きさの穴が空いている事は見なかった事にした。

地下駐車場が残酷な光景に変わる切るとバトラは遮蔽物から出る。入ってきた車にはMに雷が乗っているようなロゴが書かれている。

「良かった。無事だったんですね」

運転席からカルーレが顔を出し、防盾に覆われた機銃席からはアリスアが顔を出す。

「すいません。車両と武器を取りに行つてたら遅れました」

「来てくれたから良い。それより状況は？」

助手席に乗り込みながらバトラが叫ぶ様に聞く。

「ブラボーが残りの方々と合流。護衛をしながら外に向かつてます。ただ、敵はこっちに来ると思います。貴方一人だと言う情報が向こうも持っているので貴方を消しに来るはずですよ」

「だろいな。武器は有るか？」

「後部座席をM249があります」

バトラが身を捻りM249が入つていそうな箱を開けて取り出すとそれをドアの固定具に固定して固定機銃を仮設する。カルーレはその間に車体を反転させて最短ルートでウランバートルから出るルートに車体を向ける。

スロープを出た車両達は機銃1基を載せたハーフトラックが左右を固め、カルーレの車が先頭を、その後ろを6輪型のピラーニヤが走る。

このピラーニヤはMS社の独自モデルで主武装を25mmから20mmに兵員輸送スペースを機銃席に改造した物だ。こう言った場所での戦闘に有利な改造となっている。

暫く走ると塞ぐ様にさつき潰したマイクロバスと同じ様な雰囲気醸し出すマイクロバスが現れる。

ただ、さつきと違うのは帆船時代の戦艦の様にライフルの銃口が窓から飛び出している所だろう。

マイクロバスは並走する事でライフルの攻撃をモロに与えようとするがMS社の4両は同時にブレーキを踏み、マイクロバスの後ろと

言う最大火力が出せる場所に陣取る。

「撃て」

カルーレがヘッドセットに短く指示を送ると12・5mm4門と20mm機関砲がマイクロバスの後部に殺到する。

特に20mm弾はオーバースペックなのか車体がえげつない壊れ方をして中に乗っていた人間は地面に落ちた銀杏めいた事になっているであろう事が容易に想像できた。

「やり過ぎじゃね？」

バトラがカルーレに口を出す。

「R・O・Eを満たさせた向こうが悪いんです」

「確かに護衛目標が襲われた場合は武器使用自由だがな……」

それでも非装甲の車両に20mmはやり過ぎだと言わざるを得ないという様な顔をするバトラだが、そんな顔もある物を見て、一瞬で凍り付いた。

「!? カルーレ！ 背後から無反動砲搭載のワゴンだ！ 数は3！」

「大盤振る舞いもいい所だな！」

カルーレがドリフト気味で右折、ピラーニヤはそのまま真っ直ぐ進み車体の側面をみせる。その左側を走っていたハーフトラックはそのままカルーレを追い、右を走行していた車は一旦回転して後ろを向くと12・5mm機銃を発砲してから同じ道を走っていった。

ハーフトラックが退いて、射線が通った瞬間に20mm機関砲と2門の7・62mm機銃が弾丸を吐き出し、3台の内2台を破壊してから後を追う様に走って行く。

なんとか破壊を免れたワゴンも1台だけ存在したが搭乗員のみが天に召されてしまった為に追う事も連絡も入れられなかった。

「少し、遠回りになりますよ」

予期せぬタイミングで右折した為に最短ルートから逸れてしまったのと最短ルートはここが庭も当然な敵からしたら検問や待ち伏せなど容易であると判断しているカルーレは1番難しいが1番安全と言えるであろう策を取った。

それは行き当たりバッタリでルートを選び、外を抜けると言う方法だった。

道に迷う可能性があるこの方法だが、カルーレ達もどの道がどの道に繋がっているかはしっかりと把握している為に問題は無い。

だが、敵はバトラの行動をまじかで見ているかのように襲い掛かってくる。

「やっぱり監視システムが働いているか……」

「なんですか、それ？」

20mm機関銃に破壊された新手の車を通り過ぎながらカルーレが口を開く。

バトラはジユラーヴリクから貰った情報をカルーレに伝える。

「まずいですね。降りても追い掛けてくるんでしょう？」

〈隊長！ 前の建物の屋根！〉

カルーレが対策を考えようとした瞬間に車に搭載された無線機から仲間の兵士の声が発せられる。

バトラとカルーレが言われた場所に目を向けるとそこにはRPG7を持った兵士が陣取っていた。

「RPG!!」

バトラとカルーレが叫ぶと同時に全車が行動を開始する。

カルーレは車を加速させ、左右の車はそれぞれ前進と後退。ピラーニヤは後退する事でRPGを避けようとする。

だがRPGは撃った兵士も練度が低かったのか回避行動を起こさなくても外れる場所に着弾する。

RPGが着弾すると同時に20mm機関砲がRPGを持った兵士を天へと送るが後方の家からも異様なカーブを描いたRPGが飛来し、右側のハーフトラックを吹き飛ばした。

「そこかー」

RPGは撃った瞬間の後方爆炎は凄まじいの一言で、自身の居場所を晒してしまう程だ。それを知っているピラーニヤの増設された銃座に座る側面ガンナーはRPGとバックブラストを視認するとそこに機銃の銃口を向けて連射する。

曳光弾がスポットの代わりとなり、場所を把握した他の銃手達もその場所に弾丸を叩き込む。

窓から長い棒の様な物が落ちると銃手達は微笑みを浮かべる。

自分達の安全が一先ずだが、手に入った安堵からの微笑みだった。

〈行くぞ！〉

カルーレの叫びが通信機から聞こえるとやられた仲間の車輛の脇を通りに前進する。

脇を通る際に全員が残骸に向けて敬礼をしていた。

「このまま外まで突つ切ります！」

車は車の間を通り向けながら街の外まで走らせようとするが、ノゴ・ハスの追撃を浴びながらもこれ以上の人的損害を出す事はなく街の出入口が目に着くと同時に嬉しく無いものまで見つけた。

「ロードブロックか！」

「しかも、RPG付きだ！」

バトラが叫ぶと同時に火炎瓶を投合する。

作った土囊を超えて飛来した火炎瓶に慌てたRPGを持つ兵士達は銃口を大きく逸らしながら弾を発射したが、発射された弾はカーブを描きながらバトラ達の車へと3発飛来する。

全員が避けられないと判断すると車を一斉に放棄して、路地裏や壁に隠れて遮蔽物を手に入れる。

遮蔽物に身を隠す間は燃える火炎に気を逸らしていたおかげで1発も撃たれる事無く全員が遮蔽物を手に入れる事が出来た。

だが、問題が発生する。

「カルーレ！ どうするよ！」

「困りましたね。貧弱過ぎます」

ロードブロックをしているのは土囊とマイクロバスを組み合わせたものだ。携帯式対戦車装備でも有れば話は別だが、そんな物を今は持ち合わせていない。

そして、絶望は群れをなしてやって来るのが相場である。

「まずい！ 後方からマイクロバス！」

「左右にも展開された！」

敵の増援とあつと言う間に包囲されようとしていた事に気付くが自分達の火力ではここを突破するのは難しいと誰もが判断していた。そして、囲んだ兵士達が何かを叫ぶと引き金を引き、銃弾を発射して来る。

MS社の陸戦兵も応戦を開始するが圧倒的な火力差に押され、思う様な反撃が出来ず、1人、また1人とその凶弾に撃たれる。

バトラも直撃こそしていないが腕や足を擦り、切り傷の様な傷が出来ていたり、直撃でも擦りでも無い微妙な当たり具合をした弾丸に脇腹が撃たれたりとしていたが脇腹が少し痛む位に感じる程に興奮状態に陥っていた。

だが、絶望がバトラ達を襲う。

銃から爆発した音では無く、何かかが空振る気の抜けた音が発せられたのだ。

「弾切れ!? カルーレ! 予備弾薬はあるか!」

「こつちも自決用の1発だけだ!」

「ごめんなさい。私もです」

カルーレもアリシアも撃ち尽くし降り、他の兵士達は既に息絶えていた。

やられた兵士達から弾薬を貰うにしても距離が開き過ぎているのと弾幕が絶え間無く飛んで来ているので、とてもじゃないが取りには行ける距離では無い。

反撃が飛んで来なくなった事で弾切れを予期した武装兵達は徐々に包囲を狭めて行く。

そして遂に路地を挟む様に大通りで密集隊形を作りながら最後の接近を試みようとした瞬間にバトラがナイフを投合。

吸い込まれる様に眉間に突き刺さり倒れた仲間を唾然として眺める兵士達。

眉間にナイフが突き刺さった兵士が地面に倒れる音と空からの轟音を聞いたのはほぼ同時だった。

兵士達が上空を見上げると三角形の様な翼を持ち、翼と胴体下には気持ちが悪くなる程の爆弾をぶら下げた緑色の大型戦闘機が接近し

ていた。

これが絶望の終わりを告げた。そして、絶望の後には希望があり、希望の後に絶望が来るのが相場だ。

流石の彼らもあれはやばいと本能で感じたのか逃げ出そうとするが蛇に睨まれたカエルの様に動けないでいた兵士達に躓き、邪魔される様に逃げられなかった兵士達に爆弾が投下される。

黒い殺意の塊は地面に着弾すると同時に爆ぜて、兵士達を天高く舞い上がらせるが爆心地に近かった者は五体満足とは行かず、爆発で腕げた者や遠心力や叩きつけられた衝撃で更に腕げたりと酷いと言う言葉では言い表せない様な事になっていた。

それを立て続けに何回も起きれば大量にいた筈の兵士達はその大部分を失い、バラバラに逃げ出して行く。

だが、絶望を1度味わったなら絶望は群れを成して襲いかかる物だ。

路地へと逃げ者は警察官に取り押さえられるだけで済んだが、大通りやマイクロバスで逃げた者は恐怖と絶望を味わう事となった。

近くの車やマイクロバスで逃亡した者達は戦闘機が去って行くのを見て安堵した瞬間に爆音を聞き、視界がメチャクチャに揺さぶられる。

そして、マイクロバスが飛んでいると理解した瞬間に地面に叩きつけられる衝撃と音を感じてから首をゆっくりと動かして周りを確認すると一瞬にしてその顔は恐怖と絶望に塗り尽くされた。

100mmクラスの砲塔に戦車と見間違える程の凶体、そして6輪の車輪。

プレインレパード隊で10両しか持たない最高戦力。「チェンタウ口戦闘偵察車」だった。

そして、ウランバートルの各地で周りへの被害など度外視にした52口径105mmライフル砲の発射音が響くたびに爆発と何かが落ちる音、そして悲鳴がウランバートルを駆け巡った。

10両全ての狩りが行われている間にバトラ達はピラーニヤの兵員輸送スペースを医療設備に変えた救急戦闘装甲車とも言える車内

で処理を受けながら八代通達との合流を果たすべく移動を開始した。
バトラは車内で身体に刺さりかけていた銃弾を抜くために麻酔が
投与されて眠りに付くのと半獣半人の化け物の狩りが終了するのは
同時だった。

バトラが目を覚まして最初に見たのはゼラニウム・アイビー・ライ
ラックの造花で作られたフラワーアレンジメントとミモザアカシア
の造花が入った花瓶だった。

「(なんで、ミモザアカシアだけ?)」

視線を走らせれば白色と若草色がツートンに塗られた清潔感を感
じさせる壁だった。

他に視線を動かせば調度品の類が無い簡素な部屋に自分は横たわ
り、毛布が掛けられている事を確認すると慌てた様子も無く、病室と
言う事と病室に叩き込んだ原因人物の心当たりの多さに溜息を吐い
た。

「あ。起きたんですね。おはようございます」

アリシアが溜息を吐いた音に気が付いて見下ろす様な形でバトラ
を見ながら声をかける。

バトラは上半身をゆっくりと起こそうとするとアリシアは慌てた
様子でバトラの肩に手を付けて、母親が病気の子供をベットに寝かし
つける様に優しくベットに戻す。

「まだ、寝ていて下さい。致命傷こそ有りませんでした。致命傷数
歩手前の傷は幾つかあったんですから」

「あ、ああ……アリシア伍長の言う通りにするさ」

流石のバトラも優しく扱われれば反抗もしずらく、大人しくベット
に戻る事にする。

だが、アリシアは別の点で驚いた様な顔をする。

「私の事がわかるんですね。でも、どうして私の名前を？ 普通は
この時に名前を呼ぶ人は少ないんですが」

「病院送りで目を覚まし度になり合いがわかりますかって聞かれたからな。知り合いが近くにいた時はその人間の名前を呼ぶ様にしてるんだ」

「そうですか。焦点は定まっていますし、瞳孔も正常。応答が出来るレベルで意識レベルも有り」と

「衛生兵の心当たりが？」

「はい。元は看護師になりたかったのです」

「ちゃんとした看護の勉強したらナイチンゲールだな」

照れ笑いを浮かべるアリシアにバトラは軽口を叩く。

アリシアはナイチンゲール程の人間では無いと否定しながらも目に見えて安堵の表情を浮かべる。

「2日間と半分寝てたので心配だったので問題無さそうですね」

その言葉を聞いたバトラが自身の傷と身体の状態を客観的に考えると3日間近くも寝るのは可笑しいと判断してアリシアに訳を問う。問われたアリシアは何と言えば良いのか目を彼方此方に動かさず。

「えっと……その……」

バトラはアリシアが落ち着くまで待つかと考えて、フラワーアレンジメントに目を向ける。

スタンダードに丸く盛られた花達を見て花言葉を思い出した。

ゼラニウムは『真の友情』『尊敬』『信賴』など、アイビーは『友情』『永遠の愛』『不滅』『結婚』『誠実』など、ライラックは『友情』『思ひ出』『謙虚』『誇り』などだ。

どれもこれも生死の境を彷徨う人間に送る花言葉とは少し言い難い。またアイビーの5分の3は関係が無い。

「どれもこれも、生きて帰って来い的な意味じゃ無いな」

つまりは死ぬ様な事では無いが心配しないと行けない事案があった事と言い淀むアリシアからある結論に至ったバトラは壁に向けていた顔を未だに右往左往するアリシアに笑顔を浮かべながら向き直る。

「まさかと思うが……麻酔の濃度か量を間違えたか？」

「……」

アリシアから頬を伝い、床に落ちるレベルで冷や汗を流し始めたのを見て、確信に変わったバトラだがこのまま放置していたら鉛中毒になってもおかしく無いのも把握していた。

バトラは怒っては居ないと前置きしてから、処置した衛生兵に『今度から気を付ける様に伝えてくれ』と話すとアリシアは笑顔でそれを了承した。

アリシアは連絡と伝言を伝えると言って部屋から出ると入れ替わる様に八代通が入って来る。

「八代通か。此処は何処だ？ 今後の方針は？」

「まず、聞くのはそこか。普通ならどうなったかだろうか？」

「俺は助かった。それまでの経緯は今回は気にしない。聞きたくも無い外交話が飛ぶんだらう？」

皮肉な笑みを浮かべながら話すバトラに八代通はお見通しかと笑居ながら近くの丸椅子に座り、MS社のロゴが入った封筒を1枚、バトラに手渡す。

「これは？」

「本社から今回の事の顛末や経緯が書かれて居るそうだ……ああ、同様の内容だと言う書類を見させて貰った」

蠟印で閉じられた封筒の中身を話す八代通にバトラが疑いの目線を送ると慌てて理由を話す八代通に安堵の息を吐きつつ、八代通に話を催促する。

「取り敢えず、今後の方針だったな。単刀直入に言うと俺達はハンボクドに行き、此処を抑える」

それを聞くとバトラは上半身を起こして、八代通の目を見る。

「何故、ハンボクドを抑える必要がある？ あんたが抑えろと言い、報酬を出すなら抑えるが今回ばかりは話は別だ。ロシアのアニマが来たんだ。たかが、少し変わったF-15の残骸だ。捨て置いても問題は無い筈。なのに何故、そうなったのか。俺がわかる様に筈、完結に言ってくれ無いか？」

MS社の部隊は報酬さえ貰えるなら何でも請け負う民間軍事会社

では無い。その依頼を出す理由を説明出来なければその依頼を請け負う事はしない民間軍事会社だ。

今回は何故、千年前のF-15の残骸を回収する為の制空権確保と護衛が依頼として来たが、ロシアのアニメ部隊と正面切ってやり合い、獲得する程の価値がある物なのかバトラには理解出来ずにいた。

「もし、これが正体不明の戦闘機ならばまだ、納得出来る」

「そうだな……少し長くなるぞ」

八代通は理由を語り始める。

「ベルクトのデータを解析している時に見つけた物があつたんだ。そうだな……簡単に言うとな神の行動を解析すると言う奴だったな」

その言葉にバトラが鼻で笑う。

「神がこの世界の全てをコントロールしているの？」

「知らんよ。だが、ロシア人達はこの世界は大いなる者の意思で出上がっていると。まあ、俺は真には受けて無いがな、そう言う考えもあるのか程度だ。だが、ロシア人のこの考え方が重要になる」

バトラは何度か頷き、口を開いた。

「その神とやらは時空を捻じ曲げる位はやれる筈。千年前にF-15を持って行く位は余裕と？　そして、神とやらの手掛かりにF-15の残骸が欲しい？　くだらん。あくまでも手に入るのは残骸だ。神の技術なんかがわかるとは思えん」

「まあ、俺たちはそうだが、神を信じてこんな事をする国だ。千年前のイーグル何ていうオーパーツが来たらそれは欲しがらう。それこそ最高戦力とも言えるアニメ部隊を導入してでもな」

「お前は神を信じているのか？　そうじゃ無いだろう。なら、何故に欲しがらう？」

「俺だって、時代錯誤なだけの残骸ならくれてもやつても良かったんだがな。此処からが1番の理由だがあの残骸は俺たち【技術】の設計で出来ている。いや、しようとしている物だ」

八代通の言葉にバトラが呆れた様な表情を浮かべる。

「つまりは自分達が作ろうとしていた奴の完成品が千年前の遺産で出てきた。その理由を知ら無いと今後のアクションが取れないとで

も言いたいのか？」

「その通りだ。自分達の所行が希望か絶望に繋がっているのかわからんと俺たちは次にどう動くべきかわからないだろう？ だからこそ、俺たちはハンボクドに行き、残りの残骸を回収しなければならぬ」

決意に満ちた八代通の声を聞いて、バトラは笑いは始める。笑い始めたバトラに八代通は目を丸くする。

「いや、神は存在するが一部の神以外の意思や行動はこの世界に介入しないと考えている俺に神の意思や行動はこの世界に介入しているからそれを確かめに行くと言う話は笑い話みたいに思ってしまうだけなんだ。いいぜ、付き合っただけ。ただし、報酬はそれなりに貰うのとこれだけは理解して置いてくれ」

バトラはそれを見上げてから、八代通に向き直る。

「この世界は俺たちの行動で全てが決まる。希望か絶望か存続か破壊かは、やった後の結果と時代が決める」

作戦38 陸地で交わる思い

八代通の方針と理由を話した後、ここにナライフ空港近くの病院である事が話され、情報収集と処理、細かな所での方針策定と事務関係でやらなければならぬ事が多い為に此処でもう1日滞在する事を八代通が話すとバトラはそれを了承した所でベルクトが病室へと飛び込んで来た。

「バトラさん!!」

「ベルクト。病院ではお静かにな」

バトラが慈愛に満ちた微笑みを送りながら人差し指を自身の唇につけるとベルクトは蚊の鳴く様な声で謝罪を述べる。

「俺は居ない方が良いだろうな」

八代通は2人きりにする為に病室から出て行く。

八代通が病室から出て行った音が鳴り止むと沈黙が2人の間に降り、何方共に口を噤んでいる。

「……あの、襲ってきた人達ですが……」

「殆どが射殺されて、一部が逮捕されたか？」

「……はい」

何処か泣きそうなベルクトに懐かしい物を見る様な目を向けたまま、ベルクトに手招きを送る。

招かれたベルクトはゆっくりとバトラに近付くと右手で後頭部を抑えられ、左手を腰に添えられると布団越しに膝枕に移行させられる。

「残酷で、無残で、醜悪な物に遭遇したな。あれが陸戦で数ある人間の心の1つなんだ。雄々しい空戦とは大きく違うだろう」

バトラは優しい手つきでベルクトの側頭部の髪を指が引つかからない様に注意しながら櫛で梳く様な撫で方をする。

ベルクトの視界にはバトラの着る病院着しか見えないがベルクトには怒ってはおらず微笑んでいるとベルクトは分かっているのか、身をバトラに委ねている。

「陸戦がどんな物だったのか。人の心の1つを見た事を思い出し

てなら忘れて構わない。だがな……」

バトラはベルクトを仰向けに変わる様に動かして、ベルクトの瞳を見据える。

「体感と経験、知識と言う点では忘れるな」

バトラが告げると今日の襲撃を思い出したのかベルクトがバトラの腹に縫り付く。

「如何した!? 如何したんだ! ベルクト!」

縫り付いてきた事に若干の驚きを見せるバトラだが、服が濡れている事に気付いて平静を取り戻した。

「なんで、泣いてるんだよ」

「……もう……もう、会えないと思ってました。バトラさんがこんな事でやられる筈が無い。そう思っていました……けど、けど……」

ベルクトの流れる涙が多くなって行く。

「フアントムさんの援護が遅かったら、死んでいたかもしれないとカルーレさんから言われて……いつか、いつか本当に2度と会えなくなると思ったら……怖くて……恐ろしくて……だからお願いです」

ベルクトは身体を起こし、バトラに顔を向ける。

「お願いです。私を置いて行かないで下さい」

「ベルクト……」

ベルクトの懇願にバトラはベットに座ったまま、ベルクトに抱擁で返答する。

身体を締め付ける程の抱擁にベルクトの顔が苦痛でほんの少し歪むがバトラはそれに気付く事は無く、さらに少しずつ強めて行く。

何分かした位にベルクトから痛みを訴える様な声が漏れるとバトラは締めすぎた事に気付き、抱擁を解いた。

「あー……その……なんだ……星でも見に行くか?」

申し訳無さそうな笑みを浮かべながら話すバトラにベルクトは恥ずかしさと嬉しさを混ぜ回せた笑みを浮かべながら了承した。

バトラとベルクトは病院着から隊服に着替え、病院の暗い廊下を歩いて外に出ると星がよく見える暗い場所として、病院とは逆方向の草原へと歩を進める。

病院の明かりが分からなくなり、病院の周りに植えられた木々を向けるとそこは海と勘違いしてしまう程に深い闇で覆われた草原に出る。

これ以上離れると病院に戻るのが難しいと判断したバトラは病院を囲む木々が目に分かる範囲内で足を止めて空を見上げる。それに引かれてベルクトも空を見上げ、感嘆から声を出すもののバトラは至って平然と空を見上げる。

「綺麗ですね。バトラさん」

さつきまで泣いていた所為か、今だに目が赤いベルクトだったが華やかな笑みを浮かべてバトラ前に出て、ターンをしながらバトラの方を見る。

「綺麗だが、やっぱり天体観測には高度1万mが1番だな」

バトラは見上げていた顔をベルクトの方に向けるとはにかみ、頭を掻く。

「ロマンがわからないですね。でも、バトラさんらしいですね」

ベルクトはバトラのそんな言葉に笑う。

「だが、草原で星を見る時の楽しみ方は知ってるぞ。受け売りなんだがな」

そう言うとバトラは飛び込む様に草原に仰向けで倒れ込む。

少し盛り上がった地面が絶妙な角度で、闇に閉ざされた草原と黒い背景に宝石を散りばめた様な星空が視界全体に映る。

ベルクトもバトラを見習ってかそのすぐ隣に横になる。

空気が澄んでいる為か星の瞬きが強く、今までの空とは別の何かだと勘違いしてしまう程に神秘的で幻想的な空間が視界の上を覆い、視界の下は月明かりに淡く照らされているが溶け込む様な黒い草原が広がり、寝転がっている自分達が何処か異空間に飲み込まれてしまうのでは無いだろうかと思ってしまう、一種の恐怖心を覚えかねないがやはり神秘的で幻想的な光景でもあった。

ベルクトはその恐怖心を紛らわせようと腕を動かすとバトラの手に触れ、バトラの腕を握る。バトラもベルクトに握られた事に気付き、星を見ていた視線をベルクトへと移す。

遠過ぎ無いが近過ぎないと言う絶妙的と言える距離で2人は同時に口を開いた。

「なんか、異世界に行きそうですね」

「なんか、冥府に行きかねないよな」

2人して似たような感想に2人が笑う。

「此処にお前がいて、今この瞬間に触れ合っている。だから、俺は死んでいない。それと俺が居るのに異世界は無いだろう?」

「そうですね。異世界だったら、此処にバトラさんが居て、こうして触れ合っている。異世界な訳が無いですよ」

今度は慈しみ様な笑みを浮かべる2人の頭上で何か近づく気配を感じ、視線をそこにずらすと髪が淡いエメラルドグリーンの光を放つ少女が近付いて来た。

「ファントムか? 如何したんだ?」

「ああ、バトラさんですか。いえ、グリペンの携帯にお父様からEGの調整を掛けると電話を掛けていたんですが、一向に出ないので私が様子を見に行ったら……」

「部屋にグリペンの電話があつたんですね。でも、本人が病院に居ないから探しに来たと?」

ベルクトの言葉に肯定の意味で頷くファントムだが、バトラが周りを立って見渡すと一角だけパールピンクの淡い光に照らされた場所に近づく1人の人影を見つける。

「慧君とグリペンを見つけた。だが、雰囲気的に面白そうだ」

バトラは姿勢を低くしながら、音を立てずに2人の声が届くであろう位置に近づく。

ファントムも面白そうに口角を上げると携帯をサイレントモードにしてから同じ様にバトラの横に陣取る。

ベルクトも何をしているのか気になった為にバトラと同じ様に息を殺してバトラの隣に着く。

3人が見え辛い様に地面にうつ伏せになり、バトラがベルクトの頭に上着を重ね髪の毛を遮り、ファントムにはサイズ調整を施した帽子を被せ、自身には草を千切って乗せる事で白髪を隠す。

周りが無音という事もあり、2人の話声は3人にも充分に聞こえた。

『星、見てた』

『(此処に来て、星を見る以外、何があるんでしょう?)』

『一緒に見て良いか?』

『(何か甘い展開になりそうですね)』

『うん』

『(中々、面白くなって来たじゃない!)』

グリペンと慧のやり取りに2人が聞こえない音量でベルクト・ファントム・バトラの順で話し合うバトラ・ベルクト・ファントムの3人。慧とグリペンはお互いに肩を並べて空を見上げる。1人の少年と1人の愛らしくも美しきを持つ少女が満天の星空の下で肩を寄せ合う光景は写真家が居れば、写真に収めずには居られない程の絵になっていた。

『グリペン』

『ん?』

『お前が生きてて良かった』

『うん。慧も』

『(なんか、有ったのか?)』

『(ああ、バトラさんは知らなかったですね)』

『グリペンは逃走中に銃弾が額を掠めた影響で気絶したんです)』
ベルクトとファントムの説明で慧が如何なった容易に想像が付いたバトラは呆れた様な笑みを浮かべる。

頭部の怪我と言うのは傷の深さは大きさに反して、酷く見えやすい。これは頭部に毛細血管が多く有り、出血量が多いからだ。それに加えて、銃弾が掠めた衝撃は容易に脳震盪を起こす。頭部からの出血に加えて、反応が無く、頭部の傷は銃弾が原因と有れば死んだと誤認しても何ら可笑しくは無いだろう。

『(結構、取り乱しただろ?)』

『ええ、殺してやるって叫んで飛び降り様としましたよ』

『(私とベルクトで必死に止めましたがね)』

慧の行動になんとも言えない感情に飲まれるバトラだが、グリペンの声を聞く為に耳を澄ませる。

『ハルカもアサクラもナライフに居る整備の人達も、皆が無事で良かった。……本当は他の人も死んで欲しく無かったけど』

『他の人?』

『駐車場で撃たれた女の人とMS社の人達、あと私達を追いかけて来た人達』

『お前』

『(異常な程、博愛主義だな。戦場に博愛主義を持ち込むと早死にするのが相場だが……わかっていないだろうな)』

バトラが冷たい目でグリペンを見つめる。

『グリペン、お前さ、なんで俺のそばに居てくれるんだ。意識障害の対策ならメンテや戦闘の時だけ一緒に居れば良いだろ。でも、お前はずっと俺の側に居てくれた』

慧の言葉にグリペンは黙したまま聞き入れる。

『それだけじゃ無い。弱気になつたら叱りつけて、挫けそうになつたら励まして、此処まで導いてくれた。如何してそこまでしてくれるんだ』

『(面白くなって来ましたよ。奥様方)』

『(ちよつと、黙って下さい)』

バトラのおふぎけを一撃の元で瞬殺したベルクトとフロントム。瞬殺されたバトラは芝生に顔を押し付ける。

『分からない。慧と一緒に居なければならぬのは事実。私の凄く深い所にある指針。それは最初から決まっていた。だからあなたを直ぐに認識出来た。鳴谷慧と共にある事と人間を守り抜く事の2つは私にとっては本能に近い概念。である以上何1つ迷う事は無かった』

この言葉に3人は言葉を失う。

『でも……』

『でも?』

『最近少し変になってきている』

グリペンの長い髪が横顔を覆う。

『慧の側に居ると胸がドキドキして、息が苦しくなって、凄く切ない気分になってくる。楽しければ楽しい程そう。正しい事をしている筈なのにどんどん不安になって来て、辛くて、悲しくて、寂しくて』
『グリペン?』

グリペンが月明かりに照らされながら、震える小動物が光に進む様にゆっくりと慧に近付いて行き、ガーディガンの袖を掴む。

『慧、怖い』

『(最高にポジショニングだ)』

『(今、いい所なんです。黙って下さい)』

『(良い所です。今は黙っていて下さい)』

続けるように顔を近付けるグリペンにバトラが呟くとベルクトとフアントムからのチョップが頭頂部へ全く同時に着弾する。

『慧と離れたくない。ずっと一緒に居たい』

『(告白キター)』

『(黙って)』

またもチョップが同じ場所に着弾するバトラ。

『俺も一緒だよ。もし、置いて行っただのがグリペンだったら、俺は車から飛び降りてでもお前の側に居た。もし、同じ様な事が有れば何度でも助けに行く。分かっているだろ』

『分かっている。分かっているけど。でも』

グリペンの瞳に涙が溜まり始めると慧の指が伸び、涙を拭う。視線も絡め合い、そつと肩も押さえられる。

密着しているが絶妙な距離を保つ唇と唇。押さえられた肩は引き剥がすにも抱き寄せるにも最高な位置を確保している。見つめられる女性はぼうとした様子で男性を見つめる。

雰囲気的に此処から先に行くのも申し分無し。だが、引き離すのも、このまま会話をするのも可笑しな距離と空気が出来上がっている。

『慧』

囁き声が静かな草原と星空に響く。グリペンはギュツと慧の二の

腕を握り、身体と顔を一層近付ける。

『慧、私』

慧の理性は崩壊して、覚悟を決め、グリペんに近づくべく手に力を込めた時だった。

「甘さにドーン」

手を顔の前でクロスした状態で慧へとジャンプをしながら突撃するバトラ。

その顔は黒い喪服を着たセールスマンの様な笑顔だった。

突撃された慧は草原を3回程転がると直ぐに立ち上がり、振り返る。

「何するんだよ!!」

「時間切れだよバカヤロウ！ コノヤロウ！」

バトラの後ろにフアントムとベルクトが現れる。

フアントムは何処か呆れた様な表情でグリペンの携帯をヒラヒラとかざし、ベルクトは申し訳なさからか苦笑いを浮かべている。

「グリペン。さつきから携帯にE G G調整をするから来いと言う催促の電話が鳴りっぱなしなんです」

「これでも、10回は無視したんですよ」

「てな訳で、時間切れ。グリペンはささっと行く。駆け足！」

そう言われたグリペンは携帯を受け取ると駆け足で病院へと走って行った。

「まあ、邪魔した本人が言うのもなんだが、別に邪魔したくて邪魔した訳じゃない。邪魔しないといけなかったから遊んだだけだ」

「とっと押し倒してしまえば良いのに。2人して散々、私の事を弄んでおいて、本当に大事な子にはキス1つ出来ないんですか。業腹ですわね」

「お、お前らなあ」

笑いながら話すバトラとフアントムの言い分に慧が顔を赤くするがそれをフアントムが真顔を浮かべて、人差し指1本で制する。

「ハンボクドへの移動日が決まりました。明日の夜明けだそうで

す」

「え」

「と言う事は24時間と少し後か。漸く航空歩兵の本領だな」

慧は定まった目標に鼻息を荒くし、バトラは両手を打ち付ける。共に気合は充分だった。

「既に発掘用の重機は現地に向かっています。制空権の確保と拠点構築を同時に行います」

「速攻かけて、有利な状態を作り、ロシアに先制を取る。という訳だな」

「速攻をかけて、取るものは取って、日本でゆっくりと解析すると言う訳ですか」

フロントムの言葉にバトラとベルクトが口を開き。解散しようと言う流れに自然になるタイミングでバトラが口を開いた。

「丁度良いタイミングだ。慧だけ残ってくれ」

そう言われた慧は首を傾げ、フロントムとベルクトが疑問を話そうとするがそれを眼光だけでねじ伏せるバトラ。

2人は後で聞かせて貰うと言う空気を出すと病院へと戻って行く。

「慧。お前は俺達の今の関係がずっと続くと思っているか？」

「は？ どういう意味だよ」

「言葉通りの意味だ。俺達は傭兵だ。何か有れば離叛したりする事もある。昨日同じ釜の飯を食べた仲間が今日的になったなんて事もあり得るんだ」

その言葉に慧の目が見開く。

「そんなことって……」

「あり得るんだ。俺は1回それを味わっている。だが、1番多い別れは死別だ。俺達航空歩兵の命は菓子の包み紙より軽い。墜とされれば炎と爆発に飲み込まれて、二度会えなくなり、記憶の中だけの存在になるんだ。集まって馬鹿やれなくなるかもしれない。それを認識してるか？」

「でも、それは……」

今までも同じだと慧が言えば、成長した子に向ける様な笑みを浮か

べて話し始める。

「その通りかだ。だがな、俺達のタイムリミットを教えるタイマーは壊れたタイマーだ。急にゼロになる事もある。今、この瞬間に狙撃されて死ぬかもしれない」

「辞めろよ。そういう事言うの……テロリストに追われてナイーブになってるのか？」

それを言うとバトラは面白いから笑ったと言う笑顔を浮かべる。

「そんな事でナイーブになるものか。だがな、永遠に続く物は存在しない。いつか誰かがこの世から消え去り、皆居なくなる時が来る。だから、後悔の無いように行動しろ」

バトルが慧の肩に手を置くと行き違い、病院へと戻る為に歩く。

「そうだ。恋愛事でたった1つ出来るアドバイスをしておこう。グリペンが好きだと確信できたならその気持ちを直ぐに言葉に変え、態度で示し、行動をしろ。手遅れになってから気付くなよ。……俺みたいにな」

何処か憂いのある顔を作ると病院へと歩を進める。

その哀しき過去を匂わせる顔と哀しき過去を背負った背中に慧は何も言えず、見送るだけだった。

作戦39 史上初との邂逅

青く澄み切った空が永遠に続く草原は地上からはわかりづらかったが空から見ると起伏が意外にも豊かだった事に見る者を驚かせる。前を見れば黒々とした山が縦横に走っている。谷間には米粒程にしか見えない集落や道路、湖沼が見える。さらには地面がある標高が高いからだろうか雲と陸の間が近くにも感じられると言う知らない者や慣れない者にはある種で不思議な空を4機の戦闘機が編隊を組みながら飛行していた。

〈風が余り無くて助かってるだろ。山や谷に起伏のある陸で結構気流が不安定になりやすいからな〉

藍色に塗装された戦闘機のコクピットに座る男、バトラが後ろを振り返りながら話す。

〈はい。私が言うのもアレですが、安定性は良く無いので〉

振り返った先にいた白く翼が前を向いている奇怪な形をした戦闘機に乗るパイロット、ベルクトが恥ずかしそうな声で呟く。

〈Su-47は俺のIl-44と違って、安定性を捨てて、機動性を得ると言う新しいアプローチで高機動を得ているからな。仕方無いさ〉

ベルクトの乗る戦闘機はSu-47。Su-47は前進翼と言う前を向いた主翼で飛ぶ変わった形の戦闘機だ。

前進翼は安定性を欠くがその安定感のなさを逆手に取って機動性の強化と同時に速度性に長けている。

〈あれ？ バトラさんの機体はデルタ翼ですけど、安定性が悪いって聞いた事がありますけど……〉

〈ああ。それはな……〉

バトラのIl-44はデルタ翼と言う超音速飛行に長けた翼の形をしており、安定性は良かった。だが、バトラはこの機体に様々な改造を行った事で重量バランスが崩壊を起こした。それでも、安定性向上の改造を行った事でエースパイロットとは行かないがベテラン向けの戦闘機になってしまった。

その説明を聞いたベルクトは呆れたような達観したような溜息を零した。

吐かれた張本人は自身の隣を飛ぶ紅色に塗られたJAS39Dを見る。その機動は板に付き始めているが何処か迷いのある飛び方だと思つたバトラは秘匿回線を繋げる。

〈〈慧。聞こえるか？ これは個人向けの秘匿回線だ。返す時は俺だけに返せ〉〉

そう言うとJAS39Dのパイロットを務める少年。慧は回線を弄り直してから口を開ける。

〈〈ああ。聞こえる。どうしたんだ？〉〉

〈〈昨晚、言つた事を考えていたのかも知れないが、今は仕事で空だ。陸の事を持ってきていると……墜ちるぞ〉〉

最後の一言だけが異様に冷たく聞こえた慧は喉を鳴らしながら自身の唾を飲み込む。

〈〈まあ、言いたいのは陸の事は陸で考えろ。空に來たなら空の事だけ考えると長生き出来るぞ〉〉

優しくそれだけ話すと回線を切り、慧の返答をシャットアウトしたのを確認してからもう一度口を開いた。

「まあ、空に関わっている時点で長命は諦めた方が良いがな……」
その呟きは誰にも聞こえず、狭いコクピットの中に響くだけだった。

バトラは通信回線を全機に繋げる。

〈〈ANTARES02より各機。聞こえるか？〉〉

〈〈此方、BARBIE03。聞こえます〉〉

〈〈ANTARES04感度良好です〉〉

バトラはファントムとベルクトからの応答は聞くが、慧やグリペンからの応答が無い事に呆れもう1度、通信機に話し掛ける。

〈〈BARBIE01。聞こえるか？ 聞こえていたら応答をしろ〉〉

〈〈あ……BARBIE01聞こえるぜ〉〉

慌てたような慧の声に少しだけ頬が上がるバトラ。

〈確認の応答はグリペンでも良いからしてくれ。通信機はデリケートだからな。直ぐ壊れる時がある〉

〈す、すまん〉

〈さて、そろそろザイの警戒ライン。端的に言えばザイの制空権と此方の制空権の交わる場所だ。日本海に比べれば弱体らしいが油断は厳禁だ。ここ、大陸はザイの本拠地だ。いっどだけの敵が来るか分からんからな。ロシア機の事もあり得る。〉

バトラの前半の言葉はいつ攻撃されてもおかしく無い事を意味し、後半は不測の事態があり得るからよく考えて動けと言う意味合いの言葉を紡ぐ。

その言葉にフアントムは分かっていると聞いたげな声で、ベルクトは真剣な声で応答する。慧とベルクトは気を張り詰めているのか応答が無い。

バトラは応答が無い事に一抹の心配をしつつ前方に視線をずらす。それと同時に通信機から声が出て来る。

〈聞こえるか？ 八代通だ。もう1度作戦を確認するぞ。バービー隊とアンタレス隊は鉾山南方に進出、敵迎撃機を排除しながら哨戒ラインを叩く。同時に地上部隊が進撃、リーダー監視網の構築と対空兵器を設置、空港の整備を実施。ピケットラインが出来れば籠城の準備は完了だ。その後は適度にローテーションしながらスクランブル待機を行う。時間が経てばモンゴル軍の戦力も増強されるだろうしな〉

〈哨戒ラインって何ですか？〉

〈貴様……〉

慧の発言にバトラから静かな怒りを感じられる声が通信機から発せられる。これには慧もマズいと感じたのか声になら無い声が響く。

〈仕事は仕事でちゃんと切り替えてくれ。じゃないと……いや、良いだらう。八代通、俺から説明するがああ画像を出してくれ〉

そう言うとディスプレイにシャボン玉の様に虹色に輝く透明な球体を虹色に輝く透明なポールが幾つも繋げた分子モデルの様な物体が映し出される。

「これは対空監視用プラットフォーム。わかりやすく言えばリーダーを載せた気球だな。かなりのサイズだがゴムの様な物で不活性ガスを閉じ込めて浮いている。自律飛行する能力は無いが恒常的に直径数百キロを監視している。こいつを落とさ無いとこっちの動きは筒抜けだ」

「へじゃあ、それを落とせば。こっちの動きは分からなくなるんだよな」

「へそうなるな。そして、そこに俺達の監視網を敷けば、ザイ達を捉えられる」

「へなんか、質問あるか？ 無いなら両隊共に交戦許可だ」

八代通の言葉に自衛隊は『コピー』の号令を出す。ファントムがスロットルを操作して加速すれば、慧もスロットルを操作して加速する。

「へ張り切ってるな……ラジャー、ANTARES02」

「へ02」

バトラも機体を加速させて、敵機との距離を詰める。

ベルクトも隊長機の号令と同じ場合はそのまま数字だけ宣言すれば同じ内容扱いと言うMS社の簡易宣言を告げて、バトラから離れないように加速させる。

「へBARBIE03、エンゲージ」

「へマスターアームオン！ BARBIE01、エンゲージ！」

ファントムは静かに、慧は何処か興奮を感じられる声で交戦を宣言する。

「(ミサイルで先制しても良いけど……勿体無いし、ロシアの事を考えるとな……)」

バトラはバービー隊の宣言を聞きながら、敵機を見つめて思索する。

バトラの中で判断できたのか、一旦、機体を上昇させながら右に旋回を行い、バービー隊がザイと接触した地点からずれた場所からプラットフォームへと接近しようとする。

だが、少数のザイが別ルートで接近を試みるバトラに気付き、迎撃

を行うべくヘッドオンで接近する。

バトラは機首を下げる事なく、機体が腹這いのまま高度を数mだけ下げる。

ザイは予想外の行動に軌道修正が間に合わず、バトラの頭上を越える様なルートを飛ぶ。バトラは頭上を通る寸前にコブラ機動で機首を上に向けられる。

ザイが機首の上を通り過ぎようとした瞬間には機首の両横に装備されたシャッター付き30mm機関砲から弾丸が1発ずつ吐き出される。バトラは機体を水平に戻す時にコブラ機動で垂直に向いた状態からクルピットと言う機体を後ろ向きに回転される機動をしながらさらに高度を下げる。

すると、高度を下げる前の場所を起点に上向きに銀線が走った。ザイの機銃が通る時に出来る物だ。

バトラはコブラ機動と言う被弾面積が増える機動を行った時点で狙われる事は分かっていたので高度を下げる事でザイの攻撃を躲すと同時に攻撃し易いポジションに機体を動かした。

バトラのH ^{ヘッド・アップ・ディスプレイ} U Dには先程、攻撃を加えた上昇中のザイが映る。

バトラは素早くコクピット中央に配置されている操縦桿に付けられた機関砲のトリガーを引く。

トリガーに連動して動いた左右の機関砲にそれぞれ存在する撃鉄が1回だけ動くと銃口から1発だけ発射される。

発射された30mmの弾丸は1発はザイの右翼を中央からヘシ折り、1発は機首部分に穴を開け、内側から千切れる様に機首が落下する。

これはバトラのGSh-30-1機関砲(9A1-4071K)に装填された弾丸が30mmの爆発による加害よりも破片による加害を重視した炸裂弾だからだ。

先に頭上を越えたザイがバトラの背後に回ろうと急旋回を行った瞬間にエンジン部から爆発が発生し、ザイはコマの様に回転しながら落下して行った。

最初に着弾した弾丸が2発とも不発弾でエンジン部にダメージを与えたが撃墜する程では無かった。だが、損傷は与えており、その損傷がエンジンを加速させる際の負荷に耐えられず崩壊、ザイの燃料に引火してエンジン部が爆発、墜落したのだ。

「見つけた」

バトラはザイの撃墜を確認すると首を回して、プラットフォームを探し、見つけるとプラットフォームへと接近する。

バトラを迎撃しようとしたザイはベルクトに阻まれ、無理に突破したザイはベルクトの機関砲を喰らって黒煙を上げる。

その間にバトラはザイのプラットフォームの攻撃範囲に収めるが、引き金を引く事はなく、そのまま横を通り過ぎる。

横を通り過ぎられたプラットフォームは空気が抜ける様な音を出しながら高度を下げて行き、地面と激突すると不活性ガスを使用して浮いているとは思えない程の爆発を起こした。

バトラはその爆発と使用した武装が対阻塞気球ワイヤーカッターを強化・改良を施した対阻塞気球カッターである。

これは気球その物を切れる様に切れ味と剛性を引き上げたカッターでそれなりの速度やパワーがあれば計装甲車の装甲を切断できる程である。

そして、カッターである以上は火の気など皆無である。それでも地面に落ちた際の爆発はカッターでは到底ありえない。それでも、バトラの脳内にはこの爆発を証明出来る仮説を立てれる程の知識はあった。

へへ気を付けろ！ 中に入ってるのは不活性ガスなんて生易しい奴じゃない！ 水素ガスに準ずる物質である可能性が高い！>>

水素ガスは第1次世界大戦でドイツ軍が飛行船に使用していたので有名だ。

欠点は可燃性と爆発性が高く、被弾に弱かった事だろう。そして、水素はごく少量でもかなりの着火率と爆発を生む。

地面に落下した際に生じるほんの少しの火花で爆発を起こす程である。

〈へえ？〉

主翼の根元に増設されたカバーから武装を吐き出したベルクトが間抜けな声を上げるのと目の前のプラットフォームに吐き出した武装が突き刺さるのは同時だった。

ほんの少しの間を置いてプラットフォームは大爆発を起こし、破片はベルクトへと襲い掛かる。

ベルクトは咄嗟に機体を下に傾ける事で異物吸入を防ぐが、飛び散った破片が装甲キャノピーや機体の上面を叩き、ガンガンと嫌な音を立てるのを冷や汗を流しながら聞く。

〈ランケン・ダーツを使う時は距離と位置、タイミングを考えようか……〉

バトラが対阻塞気球カッターと言うプラットフォーム専用の武器を翼端のハードポイントに搭載してきた様にベルクトも空力を考えて、カバーで覆ったランケン・ダーツ発射機を持って来ていた。

ランケン・ダーツは第1次世界大戦に対飛行船用に開発されたランケン・ダートをも今の技術力を使って改良した武器である。

ランケン・ダーツは閉じ込めた高圧圧縮空気を吐き出させて発射機から発射、ある程度離れたら固形燃料を燃やして加速し音速を超えさせて、目標の装甲などを貫通した所で信管が作動して中の爆薬を爆発させて撃破すると言う物だ。

サイズが小さく、軽量なものもあり、大量携行が可能かつ、それなりの高度から発射すれば30mm機関砲以上の対地攻撃能力もあり、その気になれば機銃の代わりも務められる武器だ。

〈へそうですね……〉

今回は爆発し易い敵という事も有って効果は抜群だが、危険性が高い為に使用タイミングを考えねばならないだろう。

ベルクトも撃墜の原因と死因が武装の不適切使用による誘爆や異物吸入と言う内容を殉職書類には書かれたく無い為にバトラの言葉には素直に頷く。

〈仕事を再開するぞ〉

ごく少数だった護衛兼迎撃のザイはファントムの手により全機が

撃ち落とされている所為でプラットフォーム以外のザイがこの空域には存在しない事を確認すると機体を加速させる。

ベルクトは機首をプラットフォームに向けると距離が離れている場所からランケン・ダーツを発射、命中したプラットフォームが大爆発を越すとバトラはその爆炎を突っ切り、もう1つ向こうのプラットフォームに肉薄、右翼端のカッターで切断しする。

プラットフォームが2機撃墜されると流石のプラットフォームもただやられる訳には行かないと自衛用の火器と思われる小型の誘導ミサイルを各所から発射される。

だが、バトラの特殊兵装である全方位多目的ミサイルシステムADMMの機動性と威力重視の小型ミサイルとは違い、速度と携行性を意識した小型ミサイルではバトラを捉える事が出来ず、バレルロール・エルロンロール・バンクなどの基本的な機動だけで回避され、1つ、また1つと気球の部分が切断されて、地面へと落下して行く。

他のプラットフォームもなんとかしようと思えば自衛火器を開くが発射寸前に無茶な機動で攻撃を加えるJAS39Dやランケン・ダーツに破壊される。

「へへ。無茶し過ぎだ。強引さも大切だが、場所と状況、相手を考えろ」

RF-4EJとI-44がJAS39Dの背後に回るとバトラが嗜める様な声で通信を入れる。

「へへ。悪い。でも、レーダーサイトって幾つも有るんだろ？ 早めに潰さないとか不味いかなって。ほら、ファントムが速攻とか言ってたし」
「へへ。速攻と無謀は違います。だいたい慧さん。今自分がどれだけの弾を使った分かっていますか？ バーバチカが出て来た時に残弾ゼロとか笑えませんか」

「へへ。そうさ。今回は作戦遂行中に別勢力の敵が現れる事が予想されているからな。帰還時に弾を余らせる位の気持ちで弾薬を使用しろ」

今のJAS39Dのハードポイントにはミサイルが4発ぶら下がっているだけだった。

〈〈やっぱり……来るかな〉〉

〈〈間違い無く、来るだろうな〉〉

〈〈来るでしょうね。間違い無く〉〉

〈〈やっぱり……ですか〉〉

Su-47が付近を飛行してきた所でバトラとファントムが動き、編隊を組み直す。

〈〈4機もの戦闘機を同時に動かす以上は遠からず露見するからな。それにハンボグドとウランバートルの間は直線距離で500km。戦闘機なら30分以内に到達する距離だ。戦闘が始まってから行動しても、十二分に間に合う〉〉

〈〈戦闘は避けられない……ですか……〉〉

何処か悲しげな声で告げるベルクトにバトラが口を開こうとした瞬間に慧の言葉が被さる。

〈〈勝てるのか?〉〉

〈〈8割5分から互角と言った所ですね〉〉

〈〈え?〉〉

ファントムの言葉に間拔けな声を出す慧にバトラが訳の説明を行う。

〈〈一言で言えば、部隊を構成する機体の平均世代差って奴だな〉〉

〈〈ん? 世代差? 平均? どう言う事だ? それと互角って?〉〉

〈〈なんとなくですが慧さんが言いたい事はわかります。機数的には此方が多いですが、世代的な所を見るとほぼ互角なんですよ〉〉

ファントムの説明で互角と言う評価の理由は分かった慧だが、それ以外の所がわからないと困惑の声を通信機に投げ掛ける。

通信機からバトラの溜息が流れるとバトラが『よく聞け』と前置きをしてから語り出す。

〈〈戦闘機や戦車には世代と言う評価基準というか要求仕様の違いだな。戦争がその時代で戦術が変わる様に戦車や戦闘機も時代のニーズに応じて変わって行く。ここまでは良いな?〉〉

〈〈つまりは、その時代の最新に変わって行くって事か?〉〉

〈〈それでいい。ここからが重要だ。今の所だと第6世代までが定義として出来ているが、第6世代は結構曖昧だったりするから第5世代まで話すぞ〉〉

バトラが息継ぎを行い、口を開く。

〈〈第1世代。こいつはレシプロ戦闘機からジェット戦闘機へと主流が変わる時に出来た奴でジェット噴流で亜音速飛行が出来る機体の事だ。次に第2世代だが第3世代と曖昧な所があつてアメリカと日本で分け方が異なるが日本式が1番しっくりするから日本式で説明するぞ。第2世代は音速飛行が可能で索敵なんかに使うレーダーが搭載された機体だな。第3世代は第2世代に電波ホーミングミサイルの運用能力とマルチロールに加えて夜間戦闘能力を持っている機体だ。第4世代はターボジェットエンジンからアフターバーナー搭載ターボファンエンジンに換装された機体で第3世代以上のマルチロール能力と電子機器が強化された機体だ。第5世代は高度な火器管制システムとステルス機能、音速巡航スーパークルーズが可能な機体と言った所だな。ここまで質問は？〉〉

バトラが一通りの説明を終えて、息継ぎも兼ねて質問タイムを設ける。

〈〈グリペンやベルクト、バトラのスパイリって何世代なんだ？〉〉

その質問にバトラは考えてから口を開いた。

〈〈グリペンはステルス機能は無いが第4世代にするには電子機器が高性能と言う事で第4・5世代。ベルクトもこれだな。スパイリは武装によつては第6世代で、第5世代の条件は満たしているから第5・5世代が妥当かな？〉〉

〈〈因みに私は第3世代ですね。今の独飛の戦力を世代で表すと約5・8世代。それに対してバーバチカはSu-27M-ANMジュラーヴリクが第4・5世代。MiG-29SMT-ANMLーストチエカが第3世代。ディーオーがMiG-21だと第2世代で約3・2世代。ただディーオーがベルクトの言うI-21、つまりT-50だとすると第5世代で約4・2世代です。これでも約1・6世代上回っていますね〉〉

〈うーん〉

バトラの説明を聞いた後にお互いの戦力評価を聞いた慧から微妙な声がる。

〈なんですか。その微妙な声は？〉

〈本当にそれだけで勝てるのか？〉

〈無理だな。機体性能だけで勝てるなケラーマン教官のあのF-4Eはなんだ？〉

〈知りませんよ。というか、第5.5世代とかおかしく無いですか？第6世代の定義が出来上がっていないのに？〉

〈第6世代の定義って出来上がっているだろう。少なくともヴァラヒア事変の後には出来上がっている筈だが？〉

〈え？〉

〈え！〉

どうにもファントムとバトラで認識の違いがあると分かったバトラは第6世代の定義について語る。

〈第6世代っていうのはあらゆる物を破壊しうるであろう強力な兵装だったり、無人機の管制・運用設備を持っていたりとかかなり特殊な機能や武装を持つ機体の事だな。スプイリと兄機あにきの2号機は前者で兄機の1号機と姉機あねきのカーミラは後者だ〉

〈あれ？ ってことは、パラレルマインズを装備したら……第6世代って事ですか？〉

〈ドーターやAJZ戦闘機ってだけで第6世代だと思いが。まあ、聞いてのとおりかなり曖昧だから、第5世代の追加要素に強力な武装か特殊な機能を持つ機体とするのが主流だな。〉

ファントムは第6世代のコンセプトが第5世代機と余りにもかけ離れている事に驚きつつも話の話題を戻す

〈まあ、1世代違えば戦力の次元がまったく異なるのは空戦の世界です。第2世代機が幾ら束になっても第3世代機の機体には太刀打ちできません〉

〈ただし、例外的存在と言うか事象もあるのが空戦の世界だ。世の中には第2世代のF-104で第4世代のF-15を撃墜したり、第

3世代機のF-4Eで米軍のF-22の5機編隊をカモった人が居るからな。結局はパイロット次第だ。だから、互角だ」

「やめて下さい。自衛隊の名手は兎も角、PMCの超人を出さないでくれませんか？ 私の中の常識が崩壊します」

「常識は囚われる為では無く、ぶっ壊す為にある」

「人間の常識を壊してしまった人達はちよつと……」

「人間の常識をぶっ壊すのはル〇デル閣下とOMEGA1のパイセンだけで充分過ぎるわ！」

「そうですね。逸般人には、普通ですよ」

「あれ？ あのファントムさん……イントネーションに致命的な過ちがある気がするのですが……」

「取り敢えず、MiG-21の場合は私が。MiG-29は慧さんとベルクトが、Su-27はバトラさんが抑える。T-50の場合はバトラさんが抑えて、MiG-29を私が。Su-27は慧さん。ベルクトは遊撃です。これで良いですね」

「無視かよ……まあ、作戦に異論はない。T-50なら任せろ。エースのT-50との交戦経験はある」

他のメンバーも同様に理解を示した所でバトラのレーダーに反応が現れる。

「レーダーにアンノウンが2機。EGGを感知。ANTARES 03にデータ照合を要求」

バトラがベルクトに感知したEGGパターンを送ると即座にベルクトからの返信が届いた。

「このEGGパターンはドーターですね。ですが、2機だけという事は……」

「鮫と同類だな。ファントム、手筈通りだ」

バトラはレーダーに映らない3機目を半ば確信していた。

ロシア軍が最高戦力であるドーター部隊を物資不足でも無いのに整備不良を出すとは考えられなかった。故に最悪のパターンであるT-50出現を考えた。

もし、この場にベルクトが居なければMiG-21の出現を予想

し、2機との交戦と油断してしまっただろう。

〈分かつていますよ。ザイの掃除は後回しです。先にロシアの穴熊を片付けますよ。タクティカル・リンク。ターゲット・インディケーション〉

各機の戦術マップの情報が更新され、接近中の光点にアルファベツトと脅威レベルが付けられる。

先を進む光点にEN01・Su-27M-ANM・脅威レベル：中と表示され、その後ろの光点にEN02・MiG-29SMT-ANM・脅威レベル：低と示され、マップの端にとってつけたようにEN03・T-50-ANM・脅威レベル：高と表示される。

〈よお兄さん、馬鹿どもの包囲は抜けられたようだな。無事で何よりだ〉

〈そりやどうも、その節はお世話になりました〉

尊大で人を食った様な口調のハスキーな声は、1度聴けばそう簡単には忘れられない。そんな声にバトラは飄々とした声で答える。

〈あたしのアドバイスは役に立っただろう？ できればもう1つの注意も真摯に受け止めて欲しかったがな。命が惜しければさっさと引き揚げる。――警告した筈だぜ？〉

〈確かに受けました。でも、私はMS社の社員です。やるべき事があつてここに居ます。ですが……私は、貴女達を〉

〈おっと、悪いが妹分でも話し合いの余地はもう無い。言っただろう？ 2度目の慈悲は無いと。残念だよ。こんな形で妹分とその恩人を失う事になるなんて〉

〈そんな！ 私は……〉

〈ベルクト。言っただろう？〉

ベルクトの悲痛な叫びをバトラの冷たい声が遮る。

〈俺達はいつ、どこで、誰が敵になるかも分からない世界に居る。昨日は笑いながら同じ飯を食った奴が明日は戦場で敵同士で向かい合う瞬間があると。あれは敵だ。割り切れ。じゃないと……死ぬぞ？ お前〉

〈あんたは殺る気みたいだな〉

バトラの言葉にベルクトは何も言えず、ジュラーヴリクはクスリと笑う。その瞬間に電波越しに繋がっていたお互いの空気が変わる。刃の如き殺気がお互いの吐息に籠る。

〈〈蹂躪してやるよ〉〉

〈〈出来るものなら〉〉

ハンボグド上空で実戦に於いては史上初のアニマ対アニマの空戦とPMCの戦術級パイロット対国家が持つ最高戦力であるドーターとの空戦が勃発した。

作戦40 愚者の戦い

貴方の知る最善を成せ。

も

し貴方がランナーであれば走れ、

鐘であれば鳴れ。

—————イグナス・バースタイン—————

〈各機ブレイク!!〉

バトラのこの言葉でグリペンは急旋回をしながら、チャフとフレアを放出。ファントムは機体を45度傾けて上昇する事で自身のチャフとフレアを温存すると同時に高度を稼ぐ。ベルクトはJAS39Dの近くを飛行する様に機体を動かし、フレアとチャフをワンショットだけ放出し、フレアとチャフの壁を厚くする。バトラはブレイクの宣言と同時にシヤンデルを2回行い、3機から離れた場所に移動すると同時に速度を高度に交換する。

ベルクトとグリペンの時いたチャフとフレアに2機の何方かが放ったミスイルは飲み込まれ、フレアとチャフに騙され爆発するがミスイルの爆風を押しよける様にアクアマリンとクロームオレンジの双発・双垂直尾翼の戦闘機が飛翔する。

クロームオレンジの戦闘機には主翼とコクピットの間にかナード翼まで取り付けられているのを見ると機動性を意識した機体だとい

うのは見る者が見れば、分かるだろう。

2機が駆け抜けた所で空気の振動がベルクトとグリペンの機体に押し寄せる。

〈〈速い!〉〉

〈〈慧さん、ドックファイトに付き合わないで下さい! 相手の方が機動性は上です、深追いすると喰われますよ〉〉

〈〈そんな事言っても!〉〉

慧の焦燥に駆られた声が響く中でアクアマリンとクロームオレンジの戦闘機が長く伸びる飛行機雲を太陽の下で2つに分けると大きくターンを描きながら、慧の方へと戻って来る。2機の美しい機動に感嘆する慧の機体を目掛けて、2機の戦闘機から機関砲の弾丸が吐き出される。

〈〈どうするんだよ〉〉

慧は機体を翻しながら、焦った様に話し掛ける。

〈〈ベルクト。お前の機体が1番の機動性を誇り、練度はフロントムが最高だ。お前達2人が勢子をやって、グリペンのロックオン範囲に誘導。^{オフポアサイト}非砲口照準で狙い撃て。グリペンで勝っているのは誘導能力だけだ〉〉

〈〈デイー・オーの姿が見えないけど〉〉

〈〈T-50はステルス機だ。目視索敵を行っているが見つからない。乱入するにしてもステルスのままなら索敵レーダーは使えない。使えば俺達に見つかるからな。兎に角、お前らとベルクトは数の有利が取れている間に各機撃破しろ。情けや容赦を少しでも加えたら……死ぬぞ?〉〉

〈〈……了解〉〉

〈〈了解……です〉〉

余りにも冷たい過ぎるバトラの声に慧とグリペンは寒気を感じながらも行動を開始する。

ベルクトとフロントムがラストチエカとジュラーヴリクに接近し、ラストチエカもジュラーヴリクもベルクトとフロントムの接近に気付いてお互いをガンの射程内に収めれば、双方共にアニメが操る

ドーター特有の鋭角な機動で背後の取り合いを始める。

慧も空戦への参加を戸惑っている様な機動で飛行し、アンブツシユポイント^{待伏せ}まで移動する。

ファントムもベルクトも気取られない様に注意しながらラーストチエカとジュラーヴリクをアンブツシユポイントまで誘導する。

「ロックオン」

JAS39Dの機内でグリペンの声が響く。右手側の全周ディスプレイの遙か遠方に映し出されたジュラーヴリクにロックオン完了を示す赤いターゲットコンテナが重なっている。

慧はウエポンリリースボタンに指を乗せ掛けながら自問した。

「(ジュラーヴリクを本当に敵だと思っているのか?)」

慧の脳裏に警告をしてくれたジュラーヴリクの姿が蘇ると同時に

『情けや容赦を少しでも加えたら……死ぬぞ?』

バトラの冷た過ぎる声も蘇る。

「……FOX2」

悲しみを孕んだ弱々しい声で攻撃宣言を行い、慧の中で1番弱い力でウエポンリリースボタンを押し込んだ。

それでも、機体はどんなに弱々しく発された主人の命令でも、いつも通りに従い、翼下から長柄の飛翔体が飛んで行く。白煙を吐きながら、ジュラーヴリクへと猛スピードで飛んで行く。

ジュラーヴリクは回避可能な間合いでも、飛んで来る飛翔体に気付いていないのか回避機動らしい機動を取らない。

当たる。そう確信した慧の目に180度回転し頭を垂れたミサイルが爆発する光景が見えた。

「な……」

息を呑む慧の目の前でジュラーヴリクはそのクロームオレンジの翼を翻す。

その翼には一切の細かな傷さえも見られない。

グリペンが『もう1度』と呟くとターゲットコンテナがジュラーヴリクに再度重なり、赤く染まる。

慧も機体をバンクさせてウエポンリリースボタンを今度はいつも

通りの強さで押し込む。

発射されたミサイルは緩曲線を描いて飛んで行くが、敵に突き刺さるどころか、被害すらも及ぼせない距離で爆発する。

「慧さん、割り込みを受けています。彼女達、グリペンと同じ波のEGGをぶつけて、誘導波を上書きして迷走させているんです」

「そんな事が出来るのか？」

「理論上は可能です。事前にEGGパターンを押さえたいれば、グリペンがラファールを操縦しようとした時と同じ様な方法でミサイルの誘導捜査出来ます」

フロントムの通信が終わると同時にフロントムとベルクトの放ったミサイルが命中し合い、空に赤と黒の花が咲く。

それを見たフロントムの口から舌打ちが漏れる。

「完璧に押さえられていますね。機関砲で仕留めない」と

「ちよつと待てよ！ 彼奴らのミサイルは当たるんだろ？ なのに俺達はガンで戦うのか？ 無茶だろ！」

「バトラさんはミサイルが意味を成さないミサイル搭載の敵機相手にガンだけで挑み、撃墜しています。やれますよ」

フロントムの言葉が終わると同時にロックオンアラートが響き、ミサイルの接近を知らせる。その数2発。

慧は奥歯を食いしばって操縦桿を倒すが逃げた先で別のレーダー信号に捕まってしまう。逃げる方向を誤った様だった。

「ジュラを撃つたな、イポーシユカ。地獄に落ちろ。犯した罪の重さに震えて死ぬ」

ラストチエカの呪詛の様な言葉を聞き、背筋が寒くなる慧。あらゆる回避手段が意味を成さない距離でアクアマリンの装甲キャノピーが睨みつける。

「(やられる)」

慧はそう確信し、目を瞑った刹那。

「慧さん」

慧の耳に聞き慣れた優しさを感じさせる声に目を開くとアクアマリンの敵機に緑色の雨が降り注ぐ光景を見た。

アクアマリンの機体は被弾を防ぐ為に機体を翻すと同時に慧への攻撃チャンス捨てた。

緑色の雨が降った方向に慧が視線を向ければ、ジュラーヴリクと空戦を繰り広げていた筈のベルクトが陽光をその巨大な機影で遮りながら急降下していた。

〈ベルクト！〉

〈これで……〉

慧の呼び掛けに答えないのか、答える暇が無いのか慧にはわからないが、ベルクトのSu-47に搭載された2門の30mm機銃から弾丸が吐き出される。

機体の少し上を狙って吐き出された弾丸はラストチエカの回避行動により、1発も当たる事は無かった。

そして、ラストチエカも黙って撃たれるだけの相手でも無く、機体を翻して、ベルクトへと反撃に移る。

「似てますね」

その機動はバトラが訓練で見せる反撃への機動に似ており、ベルクトは自分でもわからない程に落ち着いて、機体を操作する。

ラストチエカの突進の速度を見定めて、機体を急加速、さっきまでとは違う速度でお互いの距離が縮まった事にラストチエカは反応が遅れ、攻撃チャンスを不意にしてしまう。

ベルクトはラストチエカが驚きで固まっている間にコブラ機動で頭をその場で上に向けるとスロットルを更に解放して急上昇を行う。

ラストチエカはベルクトの下をSu-47のエンジンノズルを睨みながら通り過ぎようとした所でベルクトは推力偏向ノズルを利用して、機体を背中倒して倒れさせる。

この行動にラストチエカは当初の目的だった旋回は被弾面積を広げると判断して取り止め、加速による距離稼ぎに移行する。

それでも、ベルクトの機関砲に晒される事には変わり無く、数発発射されるが運良く1発も当たらずに距離を稼ぐ事は出来た。

〈逃しました〉

〈〈突出し過ぎないで下さい。カバー出来なくなりますよ〉〉

ベルクトが『わかっています』と返答しながら、機体を水平に戻すのと、左翼側の空が揺らめき、波打つのは同時だった。

〈〈ベルクト！〉〉

突如として何も無かった筈の空間から機関砲弾が放たれた。激しい光の粒がフロントムの機体に降り注ぎ、尾翼を食い破る。機体からは黒煙を吐き、破片を中空にばら撒く。

〈〈何!?!〉〉

〈〈まさか!?!〉〉

ベルクトとバトラの叫び声が重なると同時に鋭い風切り音が重なる。ぬるりと大気の色に塗られたマントを脱ぎ捨てる様にバトラのIel-44やベルクトのSu-47と同等のサイズを誇る戦闘機が現れる。

その機体はストレーキと一体化した主翼が女雛のようなシルエットを作り出していた。

方向舵の垂直尾翼は根元から動くタイプに加え、菱形の機首に扁平な胴体とコンパクトに設計されたキャノピー。わかるものが見れば、これはステルス性を意識した設計である事は直ぐに分かる。

不明なステルス機は双発のエンジンを吹かすと急上昇し、空に溶け込む様に消えた。

〈〈EGGも検知できない。目標を完全にロスト〉〉

〈〈予想を超えてきたな〉〉

苦汁を舐めた後の様な声でバトラが呟く。

〈〈ステルスでレーダーの目には捉えられず、光学迷彩で目視でも捉えられない。厄介な物を搭載するなイワン共は〉〉

〈〈どうするんだよ！ EGGも捉えられない！ 機械的なレーダーもステルスで意味が無いんだろ！〉〉

〈〈落ち着け。ステルスと光学迷彩で姿を電子的にも物理的にも消してくるか……反則級の技術だ。一方的に殲り殺しに会うだろうなこれは。流星は第5世代機〉〉

バトラの言葉が終わると同時に頭上から突如として短距離ミサイ

ルが慧の機体に向けて降ってくる。

慧は奥歯を噛み締めながら、パワーダイブをしながらのフレア放出で難を逃れる。

〈〈デイー・オーの洗礼はどうだい？ 兄さん達〉〉

ジュラーヴリクが嗤いながら、心底愉快だと感じられるリズムに乗せて嗜虐的な声音が通信機から聞こえる。

〈〈レーダーステルス、スーパークルーズ、AESA、EGGをシールドしているからお前らアニメでも簡単には見つけられないぞ。固有色は玉虫色イリテッセンス、そう、こいつは対ザイ戦では無く対アニメ戦に特化した機体さ！〉〉

ラストチエカとジュラーヴリクはバトラを除いたメンバーを力任せに包み様にして飛行する。バトラも救援に行きたいが2機で生み出す巧みな包囲網に自分から入れれば罅り殺しに会う事は分かっているので助けに行きたくても助けに行けない状況になっていた。

バトラは苦虫を一変に10匹は噛み潰した様な顔をしてこの状況を打破する術を探す。

ロシア側はエースクラスの敵2機にステルスに光学迷彩搭載の戦闘機1機の3機編成。日本側は4機で数的有利はあるが内1機は舵とエンジンをやられている。

更に見えない敵機と言うプレッシャーでバトラも思う様に動けないでいる。あらぬ方向を向いていても、何処を狙っているにはおろか、何処に居るのかさえ分からない敵は遮蔽物の無い空では想像以上の足枷を嵌める。

そこに居るだけで行動を制限させる。

それは実力者であればある程、効果が高いタイプであり、何も知らない・分らない未熟者であれば動けるが、経験や知識を積んだ実力者には以下に危険かわかってしまう為に行動を移せない。

簡単に言ってしまうえば、デイー・オーの存在によりバトラが封殺されておろ、3対3の状況を作られ、1機は奇襲し放題というかなりのハンデ戦を強いられている状況だ。

その状況下でも慧は包囲網を抜ける為に速度を上げる。

慧の駆るグリペンが突出した瞬間に右翼方面の空間が一部分だけ揺らぎ、揺らぎから30m機関砲の弾丸が飛び出す。

弾丸はグリペンの右翼を撃ち抜くが撃墜には至らない。

機体を左にバンクし、敵影を求める様に動かすがその瞬間にラーストチエカに背後を付かれ掛けているのに気付く。ベルクトも援護に向かおうとするがジュラーヴリクに背後を取られてしまい、援護に行けないどころか逃げるので手一杯と言う様子だった。

〈〈撤退しよう。今の状態じゃ危険だ。撤退して体勢を整えよう〉〉

バトラも的を絞らせない様に不規則に機体を動かしながら、撤退を推奨する。

〈〈でも、フアントムが舵とエンジンがやられてる〉〉

〈〈私と慧さんと敵を抑えます。バトラさんはフアントムさんの護衛とエスコートをお願いします〉〉

〈〈……武運を祈る〉〉

バトラが少し考える様に口を噤んだが直ぐに口を開けて、行動に移り始める。だが、その瞬間にグリペンとベルクトがガツクンと揺れると戦場から離れる様な軌道に乗り始める。

〈〈フアントム！ 何をしている！ コントロールを戻せ！〉〉

バトラは誰が何をしているのか即座に把握した瞬間に叫ぶ。

その叫びにフアントムはふつと笑う。

〈〈半人前2人が殿を務めるなんてお笑い草です。余計な事は考えないでとつとと退避して下さい。ここは私が引き受けますので、バトラさんは2機を守ってあげて下さい〉〉

これを聞いたバトラにはフアントムが何をしようとしているのかを即座に理解した。

フアントムは自分を犠牲にバトラと言う戦力を保険に掛けて、3機を生き残らせようとした。4機で残っても蹂躪されて全滅する位なら1機を確実に犠牲にする代わりに3機の生存率を限界まで高めることで被害の最小限化を図った。

そして、犠牲になるべき機体は負傷により満足な空戦を行えないフアントム自身だった。

〈何をしようとしてるのかわかってるのか！ お前の価値観と行動理念はなんだ！ 人類の救済だろ！ なら、生き残りべきはお前の筈だろ！〉

バトラはファントムがやろうとしている事を理解するとインカムに叫んだ。

〈ふざけるなよ！ 何時ものお前だったら、俺たちを弾除けにバトラと逃げる筈だろ！ 悲劇のヒロイン気取ってる場合じゃ無いだろ！〉

慧もバトラの叫びを聞いて、ファントムがしようとしている事を把握したのか同じ様に叫ぶ。

〈確かに〉

だが、ファントムから帰って来た声は酷く穏やかな物だった。何か憑き物が落ちたかの様な雰囲気纏ったうふつと小さく笑う声が聞こえた。

〈本来なら慧さんの言う通り、バトラさんと逃避行をする所なんでしょうか……如何してですかね？ 人類を救うには私では無く、貴方方だと思っんですよ〉

〈ファントム、遺言は受け取らねーぞ！〉

〈失敗だらけの人生でしたが、最後の最後に楽しい時を過ごさせて貰いました。礼を言いますよ、慧さん、バトラさん、どうぞ息災で言い終えると同時に生き残ったエンジンを吹かして、ロシア機へと突貫するファントムの機体に左右から迫るロシア機が機関砲を発射する。〉

右からはラーストチエカが、左からはジュラーヴリクの機関砲弾が降り注ぎ、主翼に増設された垂直安定板とエアインテークを粉碎し、空対空ミサイルが発射された。

空対空ミサイルは余所見をする事無くエメラルドグリーン^{エメラルドグリーン}の亡霊を粉碎しようと飛翔する。

〈まず1機！〉

響くジュラーヴリクの哄笑^{こっしょう}を受けながら空対空ミサイルが亡霊が飛翔する。

〈へまだ、お前との約束を果たした記憶は無いぞ！〉
バトラの怒声と共に機体から青白い光が1回だけ発せられ、ファントムに飛来していたミサイルを全てを撃墜して見せた。

青白い光の正体はバトラが上部ウェポンベイに搭載していたEMLの砲撃。EMLの口径数とは辻褃が合わない程のインパクト範囲を利用して全てのミサイルにダメージを与え、破壊していた。

バトラはファントムの通路を塞ぐ様にファントムの前を飛ぶ。

〈へいつの間に!?!〉

ジュラーヴリクが驚きの声を上げる。

慧の通信が入ってから一足先に撤退通路の確保に動いていたバトラがファントムにミサイルが発射された後で行動を起こしたとしても遅過ぎる。

ならば、いつ行動したのか？

簡単である。ファントムが機銃の射線に入った瞬間には機体を上に120度回転させて、上昇。ラストチエカとジュラーヴリクの上を取り、抜き撃ちの様に発射の寸前でウェポンベイからEMLを展開して発射したのだ。

ステルスを持つバトラのウプイリはレーダーに感知されないのとファントムに意識を向け過ぎたジュラーヴリク・ラストチエカ・ディーオーはバトラの接近につききまで気付けなかったのだ。

〈へここは俺が引き受ける〉

〈へ待って下さい！ 貴方は後の事を考えれば、生き残るべき人なんですよ！〉

ファントムの抗議にバトラは怒気を含んだ声で怒鳴り付ける。

〈へそんな状態で殿を務めてもどの程度持つと思つてやがる！ どうせ直ぐに追い付かれる！ なら、俺が最初から殿をして、3機で撤

退した方が数は多い！>>

ファントムの状況では碌な退避行動も取れないので1分も時間稼ぎするのは難しいだろう。被害の最小限化を図るのであればバトラ1機が残った方が3機での撤退は可能性が高い。

ファントムも自身の状況を把握しているが譲れない物があるのか引き下がろうとしないファントムにバトラは強硬手段として、主翼でファントムの主翼を押し上げて、バランスを崩させる。

垂直安定板や各種の翼が損傷した状態ではコントロールを掴むのが精一杯で、コントロールを取り戻した時は高度的な所で戦闘空域から離れていた。

ファントムがコントロール不能により錐揉みをしながら落ちて行くのとジュラーヴリクとラーストチエカがミサイルの照準をバトラに合わせ、発射するのは同時だった。

<<バトラさん！ 今行きます！>>

ベルクトの通信を聞きながら、バトラは機体を風で舞う木の葉の様に動かして、ミサイルを躲すと通信を入れる。

<<今のお前では力不足だ。足手纏いにしかならない。撤退しろ>>

<<でも！ー！>>

<<聞こえなかったのか？ 俺は撤退しろと言ったのだ。これは命令だ>>

<<……>>

反転し掛けていたベルクトが元の撤退進路に戻り、離れて行く。

それをレーダーで確認するとジュラーヴリクとラーストチエカはロシア軍から警戒する様に言われている為に周りを旋回しながら包囲網を作っていた。

ラーストチエカもジュラーヴリクも本能で分かっていた。

ファントムに追撃を掛ければ火の玉になるのは自分達の方だと。だから、今は目の前の敵に集中する。

<<良いのかい？ 私達3人にたった1機で挑むなんて無謀にも程があるぜ？>>

<<ああ、無謀だな。正直言つて、恐怖で足が遊んでるよ>>

見下した様なジュラーヴリクの声にバトラは震える足を見る。

〈へだがな〉

着け直した酸素マスクの下でニヤリと笑みを浮かべる。脳裏に思
い浮かぶのは無茶や無謀を押し通して来たヴァラヒア事変とゴール
デンアックス計画事件の作戦達だ。

バトラはバトラはHUDの台とディスプレイや各種メーターが付
けられたパネルの隙間にテープで固定しただけのある機械のスイツ
チを付けた。

〈俺は恐怖を忘れる方法を知る、愚かな弱者だ〉

タラララ タラララ タラララ

〈へは？〉

意味が分からないと声を上げたジュラーヴリクの耳に音楽が聞こ
え始める。

そして、目の前を飛ぶ戦闘機のキャノピーに装甲が装着され、セン
サースリットには黒い光が灯り、機体が真上を向いて急上昇を行う。

〈へクソ！ 逃がすか！〉

タラララ タラララ タラララ

ジュラーヴリクは垂直上昇をするバトラを追い掛けて、上昇する。
その間もジュラーヴリクの通信教からは音楽が鳴り響く。

ラストチエカがジュラーヴリクを追って行動を起こした瞬間に
バトラの機体から流れる音楽が間奏を終える。

私は生き残りを賭けて戦い続け強さを研ぎ澄ます

バトラの機体が背中倒しに倒れる様にして自由落下を始める。

エンジン出力を0にしている為に赤外線ミサイルを放とうとした
ジュラーヴリクはロックオンが切れてしまう。更に後ろを追ってい
たラストチエカにもバトラの機体がのし掛かる様に落ちて来る様
に見えてしまい、硬直してしまう。

如何に訓練した兵士と言えども、慣れない・初めての事には反応が
遅れるのは良くあることである。

生死を分かつ瞬間にそれは発揮されるだろう

背中から回転して落ちる瞬間に腹部ウェポンベイからミサイルラ

ンチャーを露出させ、マルチロックオンを持ってラーストチエカとジユラーヴリクにロックオンを行い、終了と同時にマイクロミサイルを発射する。

〈〈クソ！〉〉

〈〈ジユラ！〉〉

見慣れない兵器に面食らいながらもアニマとドーターが使える高機動を生かして回避しようとするが発射されたミサイルは8発。それが4発各機に向かうだけでなく、回避経路を潰す様に飛来するがジユラーヴリクもラーストチエカも巧みに回避する。

戦友の命を守る為に俺達は戦い続ける

その出力0の時を狙ってデイー・オーが襲い掛かるがその瞬間にはバトラの機体のエンジンに出力は戻った後であり、其処に居るのが分かっていたかの様に紙一重の回避をする。

背中合わせのままオーバーシュートしてしまったデイー・オーにバトラの機関砲は無慈悲に炎を吐いた。

その弾丸はデイー・オーの1部に命中し、白煙を吐き出させる。さらに腹部ウエポンベイから4発、マイクロミサイルが吐き出させる。

赤外線を探知して追尾するマイクロミサイルに流石のデイー・オーも回避を余儀無くされる。

もつともつと高く飛び立て！

デイー・オーに4発中、3発は躲されるが内1発が近接自爆で爆発したが元々、携行性と追尾性を優先したミサイルの為に直撃か複数の自爆でなければ撃墜が難しいマイクロミサイルである。たった、1発の自爆では損傷を与えるのも難しい。

実際、デイー・オーに光学迷彩を使えなくさせるには愚か、自己診断プログラムにも引掛かる損傷を与えるにも値しなかった。

戦いは始まった。全てを賭けて空へ羽ばたく

4機は格闘戦で失い過ぎた高度を稼ぐ為に上昇を行う。その時にバトラのセンサースリットが黒から黄色に変色する。

そして、バトラはジユラーヴリクにヘッドオンで接近する。

降参は無しだ。最後の瞬間まで戦い続ける

〈上等だ！ 相手になつてやる！〉

これにジュラーヴリクはガンで返礼しようと機首を動かすが、狙いが定まった瞬間にバトラはJの字を描く様に方向転換を行い、ヘッドオンから逃げて行く。

これにジュラーヴリクは面食らい、動きが鈍るがラーストチエカが追い掛ける。

〈逃げさない〉

俺たちは心も熱くなる戦場に居る

だが、ジュラーヴリクに追い掛けられるバトラだが、バトラは特に気にしていないのか目に見えない何かを追いかける様に複雑な機動で飛び続ける。

俺たちは今戦場へ大きく羽ばたいて行く

〈如何して、デイー・オーの位置が分かるんだよ！〉

ラーストチエカは自分へのヘッドオンはデイー・オーを奇襲ポイントに誘導する為のブラフだと今更になつて気が付いた。だが、時既に遅く、バトラは完全にジュラーヴリクもラーストチエカも位置を把握出来ないデイー・オーを捕捉していた。

そのバトラはラーストチエカとジュラーヴリクを無視して一番厄介な存在であるデイー・オーの撃墜に動く、ラーストチエカがデイー・オーの援護に入ろうとしているがデイー・オーとバトラの速度差に素体となったMig-29が付いてこれず、援護に成り切つて居なかった。だが、デイー・オーは速度を落としてラーストチエカの援護を受け様にも相手はカウンターマニューバにカウンターファイアで戦争を潜り抜けたカウンターキルタイプのエースパイロット。そんな相手に速度を落とすのは自殺行為でしか無い。

デイー・オーは引きががす事を諦めて、側面を取る動きを行い、バトラもそれに応える。

ここは戦場。俺たちは螺旋を描きながら高く飛ぶ

側面を取ろうとお互いに旋回を行い空に螺旋を描いて行く。デイー・オーも原因はわからないがバレているならと開き直つたのか飛行機雲を残す様な急制動を賭けて側面に回ろうとするが、バトラは

すかさずカウンターマニユーバを掛けるがデュー・オーをいち早くそれを察して離脱を選ぶ。

だが、カウンターマニユーバという諸刃の剣を得意とするバトラが一枚上手だった。

バトラはデュー・オーがカウンターマニユーバをする事を察した上で離脱を選択すると予想し、腹の下を通ろうとした瞬間にマイクロミサイルの発射ユニットが顔を覗かせていた。

〈?!〉

『誘われた』そう判断すると同時にデュー・オーはフレアを放出し、ミサイルの回避を試みる。

ミサイルはデュー・オーの狙い通り、フレアへと飛んで行く。安堵からかデュー・オーは通信機にも拾われない位の息を吐く。

そうだ。今こそ決定的瞬間

だが、エースと言うのは1手先を見ずに相手の1手を読み、そこから同時に2手、3手を同時に打つ存在を言う。

生命力が燃え上がる此処は規則なんか通用しない

マイクロミサイルはフレアに引っ張られる様に動くのとスピイリのセンサーラインが黒くなるのは同時であり、マイクロミサイルはフレアを無視してデュー・オーへと迫った。

バトラはデュー・オーが自分がカウンターマニユーバを行えば、離脱すると読んだ上で1手目に離脱ルートを無理しなければ腹の下を通る様に機体を動かし、2手目にマイクロミサイルの発射だが、これをフレアで回避すると思っていたバトラは3手目に視線捕捉・視線誘導システムを起動していた。

これはヘルメットに装着された装置がパイロットの眼球中央の動きを見て目標を捕捉すると同時にミサイルなどの誘導弾を誘導するシステムである。

これはレーザー誘導方針の改良版で機首では無く目線でレーザー誘導方針のミサイルを誘導できるシステムであり、チャフやフレアなどの防御装置・装備を無効化しながら目標に迫る。

だが、デュー・オーもロシア軍の誇る特殊戦力の中の特殊戦力であ

る。不測の事態にも的確に最善手を打つ。

デー・オーはミサイルを投棄するとマイクロミサイルが飛来するのと合わせて遠隔自爆させる事でマイクロミサイルの撃墜を試みる。アニメの演算能力を持つてすれば背後から一直線に飛来するミサイルを撃墜するなど容易い事である。

此処は戦場仮初めの重力から解き放たれた場所

そう、真つ直ぐにに飛来するミサイルならばだ。

上には上が居るのが世界の常識である。

バトラは4手目にマイクロミサイルの迎撃を予期して予防策としてミサイルに遅延推進を使用した発射した8発の内4発は発射と同時に推進させるが残るの4発は発射から2・3秒後に噴進する様に設定していた。

スタートが遅れれば、ゴールも遅れる。遅いのが速いのに混じり、速いのにタイミングを合わせれば遅いのを取り逃がすのは必然。

残りの4発は爆風を突き破りながらデー・オーへと牙を剥く。

デー・オーも何とかしようと思つたが機体に無茶を強要して回避を試みるが飛来する破片とマイクロミサイルの超近接自爆に機体を大きく損傷し、機体の各所から黒煙を吐き始める。

〈〈デー・オー!〉〉

〈〈こいつだけは!〉〉

ラーストエカが逃げ遅れたフロントムの背後に迫ろうとする。

グリペンとベルクトが護衛の為に動き始めるがバトラが圧倒していた事もあり、心の何処かで油断をしてしまつていたのか行動を起すのが少し遅れてしまう。

俺達は戦友の命を守る

デー・オーに痛手を与えた返しの刃で機体を反転させて背面飛行に移るとそのままの状態上部ウエポンベイのEMLを展開と同時に発射する。

放たれた砲弾は十分な速度は無かつた為に速度も遅く、インパクト範囲も狭かつたが右水平尾翼の全てと右垂直尾翼の7割、右主翼のエルロン全てを破壊するには充分だった。

〈やりやがったな！〉

そして、強く勇敢なる命を守る為に

ジュラーヴリクが怒りに身を任せて背後から接近してしまう。上層部から奴の背後を飛ぶのは極力避けろと言われたのにだ。そして、ミスを重ねる。確実な撃破の為にミサイルがあるにも関わらずガンでの撃墜を選択してしまう。

その選択はバトラに伝家の宝刀であるカウンターマニューバを抜かせる事になった。

バトラは機体を背面飛行の状態で機首の先端を起点に尾翼の部分のみを偏向ノズルを利用して斜め下に向けると同時に推力を低下させると同時に吸気の一部を専用の小型タービンを利用して逆噴射、エアブレーキも全開にして斜め下向きを保ったまま降下する。

〈……は!?!〉

ジュラーヴリクが己の悪手に気付くが遅く、バトラの30mm機関砲が引き撃ちで発射される。

だが、戦闘機の引き撃ちはまず命中しない。

ジュラーヴリクはHIMATを使いバトラの側面からガンを放とうとする。

俺達は戦場で戦う

30mmの砲弾が爆発した様な音が空に響くとジュラーヴリクの装甲キャノピーに対阻塞気球用カタパーが突き刺さっていた。

バトラは更に機体の左右を反転させてもう一度爆発音を発すると今度はSu-27の右エンジンのエアインテークの中に入り、異物混入からの爆発でジュラーヴリクは片肺を失った。

〈ジュラ！ 撤退だ！ 損害が大き過ぎる！〉

〈ありえない、ありえない。栄光あるバーバチカが撤退なんて！〉

〈命令違反の前にこれ以上続ければ全滅しかない！ パクファ、EW起動！ スモーク・オン！〉

アクアマリンの機体が煙幕を吐き出すと同時に痛手を負った筈のパクファからも全ての残弾を撃ち放つ。バトラはそれを100パーセントチャージのEMLで煙幕ごと吹き飛ばしミサイルを放とうと

するが、度重なる無茶や破片で全ての発射機が損傷。発射出来ないで居た。

その間にパクファも追加でスモークを焚いて2機の姿を消すとEMLを計画してか3機は散開しながら去って行った。

バトラはEMLでの追撃を考えたがチャージ不足で有効射程外。ガンの追撃では燃料が持たないと判断して帰投のルートに機体を動かす。

バトラは間奏を奏でる音楽プレイヤーの電源を切った。

「はは……」

コクピットに虚しい笑い声が生まれる。

バトラは操縦桿を震える足で挟むとパイロットグローブを震える手を使い脱ぐ。

「震えてやがる……手汗も脂汗も酷いな……」

1分30秒にも満たない空戦だったがバトラ本人には相当な疲労と恐怖心を抱えていた。

恐らくだが恐怖心を忘れる方法を会得して居なければバトラは帰らぬ人になっていただろう。

無論、この方法は諸刃の剣であるが故にバトラは余り使いたがらず、使わないで済む状態に持つて行こうとする。

〈バトラさん！〉

その通信と共にバトラの視界に白く美しい巨大な戦闘機が映る。

〈良かった……本当に……良かったです……〉

嗚咽混じりのベルクトの声がバトラに安心感と一時の平穏が来たのを認識させる。

そして、嗚咽が無意識に発せられる。

〈帰りましょう。私達の基地に4機、5人で一緒に……〉

バトラはベルクトに自身の声を聞かれまいとバンクで答え、前を飛ぶグリペンとファントムに合流。エンジンを低速の低燃費モードに切り替え、今回の作戦の拠点となる仮説飛行場へと飛んだ。

ベルクトの声を聞いた時に震えと汗が止まった事にバトラは気付いてはいなかった。

作戦41 認められない物と認められる物

今回のモンゴル派遣の拠点となる仮設飛行場は砂漠の只中にある。元々は鉱山で産出した鉱物や機材の輸送に使う予定だった滑走路を利用して仮設飛行場としている。

この飛行場にグリペン・ベルクト・バトラ・ファントムの順番で着陸する。

バトラはエプロンに機体を駐機させるとキャノピーを開けて、久しぶりの風に髪と服を柵引かせる。

乾いた風を肌に受けていると汗と震えが止まっている事にようやく、バトラは自覚する。

「(今日も……死ななかつた……)」

自身の両手を見詰めながら、グーパーと手を動かす。

その行動の最中に自身の心の何処かで死にたかつたのでは無いかと言う憶測が顔を覗かせるが、自分は死にたがりでは無いと自己暗示を掛けながら、首を振って自己暗示ごとと忘れる。

バトラは周囲を見渡して、緊急車両が取り囲むファントムの機体を見つけ、歩み寄る。

バトラは機体の側で項垂れる様な体勢のおかっぱ髪の少女に近寄る。

近づかれた少女、ファントムはバトラが2 m程の距離に近づいた時に気付き、顔を上げた。

「バトラさん……」

「(こいつもこんな顔をするんだな……)」

バトラはファントムの不安と恐怖で揺れる琥珀色の瞳を見た。

「(こいつも少女に変わりは無いんだったな)」

経験豊富で現実主義者、それでいて冷静沈着でいようとする所から大人な女性と言う雰囲気を中心に与えるが、変な所でムキなる事もある。うっかりをする事もあり、クールに成りきれない所も存在する。そして何よりもバトラの目の前で恐怖と不安で震える目が彼女が1人の少女なのだとして強く認識させる。

バトラと比べると小柄なファントムにバトラは膝を地面に付けて、ファントムの頬をパイロットグローブを脱いだ手で挟む様にして持つと顔を上げさせる。

「大丈夫か？ アニマとドクターはダイレクトリンク中は機体のダメージがアニマに返って来るとベルクトに聞いたが、何処か怪我は？ 異常は？ 具合が悪いとかあるか？」

その問い掛けにファントムは頬をほんのり赤くしながらも応答をする。

「そんな冷たい手で言われても安心できませんよ。私は大丈夫です」

さつきまで冷や汗やら脂汗やらで体温を下げていた手は他人には冷えていると感じるには充分な程だった。

それを聞いたバトラは右手を顔から離す。

「ッ　　~~~~ウ!？」

「そんなセリフが吐けるなら問題無さそうだな」

バトラは本気のデコピンをファントムの眉間に撃ち込んだ。

ファントムはデコピンの領域を超えた痛みと突然の痛みに悶絶する。

「いいか。誰かの身代わりになって己を投げ出せるのは名誉も栄誉も有り、尊く、美しい行動だ。だがな……」

バトラがファントムの襟を掴み、強引に立たせる。

「残された奴の辛さとー！ 絶望が！ どれだけの物かお前は想像した事があるか!!! 大切な仲間の犠牲で生き長らえると云う苦しみと！ 重責を！ 想像した事はあるのか……」

叫びながらもその腕の力は抜けて行き、声も弱まって行く。

そして、遂には腕を襟から手を放し、ファントムの両肩に両手を乗せて、膝を付く。

「頼むから、自分を犠牲に仲間を生かそうなんて考え無いでくれ……仲間のために死ぬしかないなんて諦めないでくれ……仲間と生きる道を捨てようなんてしないでくれ……頼む……頼むから……」

「……バトラさん……」

フロントムがバトラの頭を抱く。

「……ッ……皆を置いて行かないでくれ……置いて行かれる苦しみも痛みも絶望も後悔も今の仲間に味合わせたく無いんだ……機体を捨てても、生還する事を第一にしてくれ……」

「……バトラさん……貴方に言われるまで気付きませんでした。ごめんなさい……許してくれますか?」

謝罪と許しを請うフロントムにグリペンはこの世の終わりの様な顔をして、何かを言おうとするが雰囲気を読んだ慧が寸前で口を押さえ、阻止する。

「わかってくれれば良い。残す奴は残された奴の事を考え無い奴が多いからな」

「ドーターが壊されたら、私も死ぬ事に代わりは無いのですが」

「なんか言ったか?」

「いえ……何も。それより、後ろをどうにかしないとイケませんね。手伝って下さい」

「後ろ?」

バトラは後ろに振り返ろうとするが、フロントムの無い様で有ると分かる位の胸と腕で頭だけが抱かれているところで漸く気づき、それと同時に絶望と憤怒と羞恥が混じった混沌とした表情を浮かべるベルクトを認識した。

「えっと……これはだな……その……なんだ?」

「バトラさんが泣き付いて来たので少し抱いただけですよ?」

助けを求めてフロントムと目を合わせたバトラにフロントムは澄まし顔でとんでもない爆弾を投下する。

これにバトラは一瞬だけ絶望した様な表情を浮かべるが直ぐに火消しに動く。だが、暴走する乙女の行動力と速度は常識の範疇を超える。

「もう、泣き止んでるじゃないですか! 直ぐに放して下さい!」

「放したら、放さなくなるでしょう? それに……ねえ?」

意味ありげな表情と言葉にベルクトの行動は加速しバトラをフロントムから引き剥がそうとする。

それにフアントムは対抗して身体をバトラの頭に密着させて、引き剥がされない様に抱擁を強くする。

因みに2人の美少女から取り合いをされると言う状況は世の男達からしたら妬ましい状況だ。

「(痛い痛い痛い痛い！ 首が痛いって！ 苦しい苦しい苦しい苦しい苦しいって、息が出来ない！)」

やられている本人は頭だけがちりとホールドされている状況から力任せに引きはがされようとしており首にダメージは行き、胸で行きは出来ないという悲惨な状況となっており、同時に口も抑えられているので抗議も出来ないという絶望的状況だった。

周りに人間は嫉妬からか救う気も無ければ、あの2人の間に飛び込む勇氣も無く、事の顛末を見届ける形を形成していた。

そんな力オスと化した場所に白衣を着た肥満体の男がやって来る。

「おい！ 男の取り合いはそこまでだ」

「そんな取り合いなんて……」「そうですよ。はしたない」

「ハア……ハア……(どの口がほぎきやがる！)」

八代通の言葉にベルクトとフアントムが同時に反論するが被害者(野次馬からは絶対に言いたく無い)とも言えるバトラは酸素を身体に吸気しながら心で突っ込む。

「まあ、良い。緊急事態だ」

「何が有ったんですか？」

慧が八代通の尋常じゃ無い様子に疑問を持つ。八代通は咳払いで場を更に緊張した場面に変える。

バトラも息を荒げ、地面に倒れながらも視線だけは八代通に向ける。そして、八代通の口から衝撃の言葉が発せられた。

「イーグルが機能停止した」

イーグルの機能停止の第一報を受けてから後日、パイロットメンバーがプレハブの一室に集められた。

何故、集まったのか？ それは日本から届いたイーグルの詳しい状況を聞くためだ。

モンゴルと日本とは距離がありすぎる故にちゃんとした情報が届くの時間が掛かる為にこうして、後日に集まり全員で情報を共有しトラブルシューティングに必要な情報を集める為でも有る。

パイロットのメンバーは渡されたレポートに目を通して、思い思いに口を開く。

「外傷は特に無く、突然倒れた。これが眠っている最中じゃ無かったのは上々だな」

レポートをから目を放して円卓に座るメンバーに目配せをしながらバトラが早々に口火を切った。

「それにE G G 反応まで消失しているにも関わらずコアは無事。E G G の消失が碎かれる意外にあるんでしようか？」

「ウィルスを打ち込むにも日本のイーグルにどう打ち込むのか？ って言われたらおしまいです」

「コアが機能を停止していて、植物状態……直ぐに死ぬ訳では無いがいつ死んでも可笑しくないか……」

フアントムの発言にベルクト・慧の順番で頭を捻る。

仲間内で問題を再確認し合っても、一向に原因らしい原因が思い付かない。

「そんなのじゃない」

「ああ？」

グリペンが顔を上げてポツリと呟く。その言葉に八代通は眉を寄せ、しかめっ面でグリペンを睨む。

そんな八代通をバトラがウイルスを懸念しても検査結果と兎に角何か案が出る事が大事だと言つて八代通を落ち着かせる。

「で？ グリペンは何が原因と？」

「重複排除」

「(あ、これ。専門用語だ)」

淡々と答えた内容にバトラは頭を抱える。

グリペンはそんな物知るかと言明を始める。

「1つの機種に適合できるドーター1体のみ。F-115JがドーターとなるにはF-115CやF-115Dのドーターが存在してはならない。その原則が適用されただけ」

「つまりはJ型と似たり寄ったりなドーターがあるからドーターとしての本質が崩壊しようとしているんだな。だが、他の機体？ どっかの国がF-115のドーターを開発したのか？」

バトラは八代通に向き直ると八代通は頭を振る。

「そんな話は聞いていないが、心当たりならあるな。ウランバートルにある残骸はドーターにする様な改修がされていた」

「ちよ、ちよつと待てよ！ じゃあひよつとして、この鉱山に埋まっているF-115って」

その後続く言葉を予想し全員が頷く。

「ドーターなのか？」

10月9日の午前11時。バトラは機体の秘匿回線を利用してバーフォード達と連絡をしていた。

そもそも何でこの時間と日付なのかを説明すると単純に盗聴と通信可能距離の問題である。

バーフォード達の乗機、E-747は電子機器の多様化と追加搭載に加えて各種機材の近代化により、空中管制機と早期警戒機の両方を

こなせる様になると契約の中で日本海から東シナ海においての管制と給油に加えて、監視と警戒を行う。空中早期警戒管制給油機として、日本に運用されていた。

今回のバトラの任務はベルクトを連れて、機能停止を起こしたイーグルを乗せた輸送機とそのドーターを乗せた輸送機の護衛任務である。

作戦を簡単に説明すると日本海横断を片宮姉妹機に護衛を受けながらバーフォード達が乗るEー767に空中給油パックを搭載して同伴。

中国の沿岸部辺りでバトラの機体に給油を行い、輸送機2機の護衛を引き継ぎ、仮設飛行場までエスコートと護衛を受け持つ。

そして、現在はカノープスから給油を受けながら、イーグルの機能停止による帰国予定の遅れ等を報告していた。

〈〈…という訳だ〉〉

〈〈成る程、技研からの報告は聞いていたが、これがドーターの重複排除による弊害か〉〉

〈〈流石にこれは八代通も予想外だったらしい。他に其方から此方に報告はあるか？〉〉

〈〈ああ。ファントムの機体損傷を聞いてな。お前のFー4も一緒に持って来た。NFIだけか？ を載せても問題無いだろう〉〉

〈〈あ、ああ。了解した。報告と給油完了。護衛任務を開始する〉〉

〈〈カノープス了解〉〉

バトラの機体が給油を終えて離脱すると編隊を組んで近くを飛んでいたベルクトと輸送機2機の編隊に加わる。

〈〈これより、ハンボグドの仮設飛行場までのエスコート及び護衛を開始する。各機、警戒を厳にせよ。ここは腐ってもザイのお膝元だ〉〉

その言葉に各機から了解の返答が届くが、ザイは索敵レーダーに引っ掛かる事も無く、帰りの護衛を同じ様に終わり、スクランブル待機も何事も無く終わる。

ザイからの攻撃は小松の方が多いくらいであり、ザイの攻撃は監視用プラットフォーム破壊を行う時の護衛ザイを相手にする小規模な

戦闘だけで終わって行く。

帰りの護衛任務を終えたバトラはエプロンに木箱を3つ並べて、それを椅子と机代わりに護衛任務中に鉢山から発掘されたF-15と今後の行動についてファントムから報告を受けていた。

「まあ、F-15がDJ型でアニマが慧達の様な人間と共に飛んでいるタイプで、イーグルを助けるには慧とグリペンがDJのNFIを通して、シャルル・ド・ゴールみたいな場所に行く」と

「色々、省いてますが、そんな感じですね」

「……それはまあ、良いとして……やっぱり、1番気になるのはグリペンの意味深な発言だな」

バトラは木箱に乗せた缶コーヒーに手を付けるのを見て、ファントムも喉を潤す。

「時折、あいつが的を得た、俺たちの見ていない観点と言うよりかは俺たちが持つていない情報から答えを出している様に見える時は有ったがな。今回の事は言い逃れ出来ないな」

「バトラさんはどう思っているんですか？ 今回のグリペンの発言を」

「どう……ねえ……」

バトラは考えを整理する為にコーヒーをほんの少々飲む。

「グリペンの性格では人を騙すなんて出来ないだろうな。だが、奴の提示する事とそれに至った情報がわからない、重要な部分もわからない。有り体に言えば、なんとなくだ。それでは信用も信頼もし辛い。兎に角、先は見えないと言うのが問題だな。まあ、色々、行っただがイーグルを助けに行くのが慧とグリペンなら2人の判断に委ねる。俺には直接的に関わることじゃ無いしな」

「……淡白と言うか、冷たいと言うか、突き放しているのか尊重しているのかわかりませんね」

溜息を吐いてからファントムも木箱に置いたミネラルウォーターに口を付ける。

フロントムの言葉にバトラは頭を搔く。

「他人事だからじゃ無いかな？」

「この前のあの時とは全く別人ですね。偽物ですか？」

フロントムが木箱にペットボトルを置いたのを見計らって、バトラが口を開く。

「お前、あの時の下着の中央にビーズっぽい物付いてなかったか？」

シンプルな物より、飾り気のある方が好きなのか？　　と言うか結構

胸あつたんだな。普段着だと着痩せするタイプか？」

「……」

フロントムの白い肌が羞恥から一瞬にして赤く染まる。

「……ッ……」

「うっおい！」

「エッチ！」

「ほっと！」

「スケベ！」

「よっと！」

「ムツツリ！」

「あつぶね！」

「変態！」

「はい！」

フロントムが軽い叫びを上げながらペットボトルを本気で投合するがバトラに難無くキャッチされそれを掌で回転させながら木箱に戻せばフロントムがまた、文句を言いながら投げ、難無くキャッチされると言う変わったキャッチボールならぬキャッチボトルをする。

5回程繰り返し返せばフロントムも落ち着いたらしく、浮かせていた腰を木箱に乗せる。

「偽物だと思うか？」

「私をこうも弄ぶのは貴方が慧さんだけですな」

「信じて貰えた様で何よりだ」

興奮からか息が荒く、胸を両手で守りながら、半身になるが羞恥が残っているのか未だに顔が赤いままのフロントムが半目で睨みなが

ら答える。

「皮肉って言葉を知ってますか？」

「そうすると魅力に感じる男が居るって知ってる？」

その言葉を聞いた瞬間にファントムが自分の座っていた木箱を両手で掴み、放り投げる。

流石のバトラも木箱は無理と判断して緊急回避で木箱が降って来る範囲から逃れる。

「殺す気か!？」

「殺される様な事を言うからです！」

お互いに最もである。

「悪かったから、許してくれ」

「……まあ、良いでしょう。パーツを融通して貰いましたし、これでチャラです」

「それは良い買い物をしたもんだ」

取り敢えず、木箱のセツティングを戻して席に着く。

「ファントム、お前もどう思う」

「グリペンのことですか？ それなら……」

「いや、今のこの状況だ。さつき、身体を動かして思ったんだが、出来すぎている。まるで人以上の何かがこの状況に持って行っている。そんな気がするんだよ」

バトラの真剣な顔付きを見て、ファントムも水を飲む事で意識を切り替える。

「確かにラファールの回収にはベルクトの誘蛾灯が必要でしたでしょうし、その場所に行くにはAZJシステムも必要だった。確かに出来すぎてます。こんな事は考えたくありませんがお父様が神によりこの世界がコントロールされていると仰いましたね。正しくそうだと考えられます。私達は神の作った人生ゲームの駒なのでしょう。私達に自由意志は無く、定められたゴールに淡々と向かうだけ……すいません。馬鹿馬鹿しい話でしたね」

そう言って、水を飲むファントムにバトラが怒りを含んだ表情で静かな笑い声を上げる。

「神が存在する。それは認めよう。俺達は駒。それも認めよう。俺達の道は神が定めた物。それも認めよう。神に賽を投げさせる……それだけは断じて認めない。神に投げられた賽で決められた結果や犠牲など絶対に認めない。賽は自分で投げる物だ」

それを聞いたファントムは微笑を浮かべる。

「(そうですね。バトラさんはそういう人でした。何かに行く先を決めつけられても、自分で道を決めれるなら決めつけられた事を破壊して、進む先を自分で決めてしまう人ですよね)」

何処かスツキリした顔付きになったファントムが木箱の上にある物を見つけた。

「そう言えば、この紙袋はなんですか?」

「ああ、渡そうと思っていたんだ」

そう言うとバトラは紙袋に手をつ込み、緑色の石が使われたネツクレスを取りだす。

「これは……」

「デールだ。モンゴルの民族衣装に使われるボタンなんだが、それにチェーンをつけてネツクレスにした奴だ。石はクリソプレーズで、強運と勝利をもたらすとされている。まあ、お守りだな」

ファントムは受け取ったネツクレスを付けて、微笑む。

「女の子へのプレゼントにネツクレスなのはまあ、良いとして」

「ネツクレスは不味かったか?」

「アクセサリーその物にも色々な意味があるんですよ。でも、石の意味が強運と勝利なんて余りロマンチックとは言えませんよ」

「俺達の世界は運と勝利があつての命だろ?」

『違いありません』と言いながら2人で軽く笑い合う。

「後は誰に上げるつもりですか? どうせ、バトラさんの事です。他の方にもあげるのでしょうか?」

少し棘のある言い方にバトラは『なんでそんな言い方を』と文句を言いながらも答える。

「ああ、片宮姉妹とベルクトで4つだな」

「慧さんやグリペンにはあげないんですね」

「慧はベルクトに手袋を渡してたからな。そこに俺がプレゼントと言うのは雰囲気壊しかねないだろ？」

バトラの返答にファントムがキョトンとした顔の後でクスクスと笑い始める。

バトラは拗ねた様に『俺だって、空気は読める』言いながらそっぽを向く。

そんなバトラをファントムは拗ねた幼馴染に向ける様な笑みを浮かべていたが何の前振りも無く、キツと顔を引き締める。

「バトラさん……少し、真剣な話があるんです」

ファントムの今までに聞いた事の無い声にバトラは面食らうが直ぐに仕事の時に見せる顔を浮かべる。

「バトラさん……今日の事が有ってから、改めて思ったんです。私達の関係は永遠の物では無いと」

ファントムの言葉にバトラは視線を背ける事無く、正面から受け止める。

「バトラさん、貴方は残された者の辛さを、重責を知っています。ですが、残さないで下さい、先に逝かないで下さいとは言いません。ですがせめて残された者の哀しみが辛さが、絶望が責任が軽くなる様にして下さい。そして、何よりも貴方に未練が無い様に最善を尽くして下さい」

それが私のお願いですーと彼女は言って、立ち去って行った。

作戦42 タリズマン……漸く

斜陽に横顔を赤く染められながら、バトラは滑走路脇に立っていた。本当ならベルクトを探し、買ったお守りを渡す筈だったのだが、ファントムからの願いに自分なりのケジメを付けるのが先と考え、考え事をする何時もの癖で滑走路脇に立ち、外の光の肌を受けながら、風に服と髪をはためかせていた。

「未練が無い様に……か……」

風に消される程の音量で夕日に赤く染められた空を見上げながら、呟くバトラは自分がやっていない事を考え始める。

「(強いて言えば、前世で遣り残した事だが、現実的に無理だと踏ん切りは付いている。今世では……)」

そう思ってから髪を掻き上げて、頭を振り、顔を真上に向けて呟く。

「あるが……やれないよな……」

「何がやれないんですか？」

突然の声にバトラは目を見開き、声のした方向に顔を向ける。

そこにはキョトンとした顔を浮かべるベルクトが風に流れる揉み上げの髪を左手で押さえながら、バトラを見つめていた。

「……ベルクトか……何でも無い」

「何でも無い訳無いですよね」

そう言い残して滑走路脇から去ろうとするバトラにベルクトはバトラの手首を掴んで呼び止める。

「……何でもねえよ」

ぶつきらぼうに答えるバトラにベルクトは正面から見つめて反論をした。

「何でも無いなら泣く必要無いじゃないんですか」

「(俺が泣いてる……)!?」

ベルクトに指摘されて、始めて泣いていると自覚したバトラは手で拭うと栓が抜けた様に涙が目尻から流れる。

バトラが泣くまいと思えば思う程に涙はより多く流れる。

「は？ 何でだよ……何で、涙が流れる……何も悲しい事も何も無

バトラは己の弱さを嘆き、怒り、憎む泣き声が弱まるとベルクトの背中に震え、力の入らない腕で縋り付いて、今までに死に別れたアンタレス隊メンバーの名前と謝罪を泣きながら吐き出し。それは溜め込んだ水を放出するダムの様だった。

溜め込んだ物全てを吐き出し、落ち着きを見せたバトラにベルクトは抱擁を解かず、優しく語り掛ける。

「今まで、どれだけの物を溜め込んでたんですか……少しは仲間に頼って下さい。確かに私も詩苑さんも詩鞍さんも貴方や貴方の仲間だった人に比べれば頼りないかもしれませんが。けど、貴方にこうして胸を貸して、溜め込んだ物を受け止める位は私でも出来るんです」

ベルクトはより一層、抱擁を強くして、優しい声で訴える。

「貴方の心が壊れるのは見たくはありません。私は貴方の吐き出す為の的でも構いません。ですから、溜め込まないで下さい、吐き出して下さい。それ位、みんな許してくれる筈です。許さないと言われたなら、私は許しますから……」

「う……あ……あ……あ……り……か……と……う……：……ベルクト……」

バトラはベルクトの胸でもう一度だけ泣いた。悲しみや謝罪でも、苦しみや怒り、憎しみでも無く、歓喜と感謝から泣いた。

それはバトラの今世と前世の人生を合わせても、初めて味わう感情だった。

数分もすればバトラの心情も落ち着き、泣き疲れる程幼稚でも無いが、心情の劇的変化は精神の疲れを誘発し、それは身体的疲労をも誘発する。

バトラはベルクトに連れ立たれて、ファントムからの報告を聞いていた木箱にどちらからという訳でも無く、それが当然と言わんばかりに自然な流れで背中合わせに座った。

「……」

「……」

だが、2人に会話は無い。

「ありがとうな……その……聞いてくれて、貸してくれて、何より受け止めてくれて」

「どういたして。この位しか出来ませんけど」

突然の言葉に肩越しに振り返れば、気恥ずかしさからか少し斜めを向いたまま、耳まで赤くしたバトラの横顔を見る事が出来たベルクトは笑顔を浮かべて、上を向いたまま答える。ベルクトの浮かべる笑顔は幸せに溢れていた。

「……そつか……でも、それだけでも有り難い。何も学ばず、何も準備出来ずに副隊長、事実上の隊長になったからかな？ 弱い姿は見せられないって思ったのか、少し無理してた……いや、無理はしてないかな？ 溜め込んだ物の吐き方がわからなかったただけかもな」

弱々しく笑うバトラにベルクトは後頭部をバトラの後頭部に触れさせる。

「そんな弱気になら無いで下さい。何時ものバトラさんの方が皆さん落ち着きますから、それに吐き方はわかったじゃ無いですか」

「そうだな。多用はできがな」

「そうやって、気を遣ったらまた、溜め込みますよ?」

『そうだな』と笑うバトラにベルクトは安心感を得ていた。ベルクトには今のバトラが重い何かを落とした時の様な解放感と憑き物が取れた清々しさを感じていたからだ。

「あの……バトラさん……」

「どうした?」

今なら伝えられる。そう確信したベルクトは行動に移そうとした。

「実は、私……いえ、辞めときます」

「どうしたんだよ。気になるじゃ無いか」

「忘れて下さい。何か、違う気がするんです」

「……」

だが、移せなかった。今のこのタイミングで行動に移せば、自分が卑怯者の様な気がしたのと、バトラから教わった敬意を払うべき敵に対する礼儀に反すると思ったからだ。

ベルクトの言い表せぬ感情が籠った言葉にバトラは無言の優しい笑みを浮かべるとこれ以上の詮索はしなかった。

それがベルクトには嬉しく感じた。

「ありがとうございます。もつとちゃんとした時に話すべき事だと思いますから。その時まで待って頂けますか？」

「わかった。その時まで待とう」

「ありがとうございます」

バトラはベルクトの手に自身の手を重ねる。

「ベルクト」

呼び掛けた後にバトラは手を乗せたまま、ベルクトの背中に背中を密着させる。

「バトラさん……何を？」

「その時は来ないかもしれない」

「……はい」

「だから、これを渡す」

そう言うとポケットから白い石のデールをペンダントトップにしたネックレスを取り出す。

「これは……？」

「お守りだよ」

ベルクトは嬉しそうに笑うと頬を赤くしながら、バトラに上目で見つめる。

「付けてくれますか？」

その姿にバトラも赤みが引いて来た顔に赤みが戻ってくるのを自覚するが、直ぐに平静を装う。

「構わない。髪を上げてくれ」

バトラに言われるがまま、ベルクトは細く白い両腕で白く美しい髪を軽く持ち上げる。それにより、髪で隠されていた細く白い首筋をバトラに晒す。

バトラは向き直り、ネックレスを持ったままサイドから腕を通してベルクトの前に持って行き、肩越しにチェーンを見ながら接合部を外して、1本のチェーンにすると首筋の裏で接合部を繋ぎ、輪に戻した。

「暖かいです」

「手で温めたからな」

「そう言う意味じゃ無いんですよ……ありがとうございます」

ジト目でバトラを睨むベルクトだが、氣遣ってくれた事には素直な感謝を告げる。

そこからは嫌では無い沈黙が2人を支配するが、ペンダントトップにされたデールを見て、ベルクトが口を開いた。

「意味はなんですか？ バトラさんの事ですからね。意味があるんですよね？」

その言葉にバトラはお手上げだとジエスチャーをすると口を開いた。

「それはムーンストーンというパワーストーンなんだが、旅や航海に安全が守られ、無事に帰ってくるお守りとしてと、家族や親しい友人の危険を知らせ、危険から守ってくれるお守りとして使われるな。他には邪気払いや魔除け、道に困った時に迷いを取り去って、正しい選択へと導いてくれるお守りだとされている」

「そう言う意味ですか。私が旅出撃しても邪気や魔は払い、正しい選択を持って、話せる時が来るまで家基地に帰って来るように……ですか」

そう話すベルクトが何処か悲しげな顔を浮かべている事に疑問に思うバトラにベルクトは肩越しに微笑みを向ける。

「ですけど、その家に貴方が居ないと……その旅で貴方が帰って来なかったら意味が無いんですよ……」

ベルクトの言葉はバトラをハッと思わせた。

「すまん……残された奴の事は良く知ってる筈なのにな……」

「変な所で抜けているですよね」バトラさんは

笑いながらバトラに向き直り、肩に頭を乗せるベルクト。自然ともたれ掛かる体勢になった事で軽く慌てるバトラにベルクトは『このまま居させてください』とお願ひすれば、バトラは何事でも無いと考えたのか落ち着き、黙って肩に頭を乗せさせる。

ベルクトは幸せに満ちた表情を浮かべ、バトラもリラックスしているのか心なしか蕩けた表情を作る。

まったりと落ち着く空気が2人を包むが、身体を支えていた手を上に伸ばし、身体を伸ばしたバトラが沈黙を破る。

「落ち着いた所でまだ、やらなきやならん事が多い。1つづつ片付けるか」

ベルクトもバトラの伸びに合わせて頭を肩から退かす。バトラは自由になった肩を回すのを見て、ベルクトは申し訳なさそうな顔を浮かべるがバトラは何でも無いと笑いながらベルクトの頭を梳く様な撫で方で撫でる。

気持ち良さそうな笑みを浮かべるベルクトがバトラの手が退けられると少し残念そうな表情を作るが、直ぐに軽く伸びをする。

「休憩はここままですね。さあ、片付けて行きましょう！」

バトラを先導する様に歩くベルクトにバトラは笑みを浮かべる。

「置いてくよ」

そう言っつて、早足でベルクトの後を追いかけたバトラの足取りは幾分か軽かった。

「で？ 何で来た？」

「あのじゃじゃ馬娘を助ける為だよ」

八代通とファントムのドーター修理が間に合わなくなった際の様子を合わせるバトラと八代通の前に立った慧が何を變な事を言うんだと言わんばかりの表情で言い放った言葉にバトラが頭を抱え、謝罪をする。

「いや、すまない。言葉足らずだったな。どうして、そんな状態で来たんだ？」

「だな。どうして君らは手を繋ぎ、指を絡めている。俺はてっきりイーグルのサルページについて話しに来たんだと思ったんだが、違ったか？」

バトラの言葉に八代通も同調する。

事実、2人の前で慧と共に来たグリペンは慧と恋人がする様な繋ぎ方で手を繋いでいたからだ。

バトラは呆れる様な感服する様ななんとも言えない雰囲気を出しながら、口を開く。

「お前ら、ここがどんな場所で、どんな時期で、どんな事をするのか分かっていてそうしてるのか？」

「わかってるけど……」

「じゃあ、惚け話をするなら他所でやってくれ」

バトラが慧に颯めつ面を隠す事なく見せつけ、手で払い退ける様なジェスチャーを送る。

「別にそんなつもりじゃ……」

「素直に言えよ。青春の病ってやつに冒されたたんだろう。ったく、この非常時に」

「そう行つたか。クレイモアの道を通るDMとは恐れ入る。ったく、尊敬するよ」

呆れた顔で腑抜けた音の拍手を送るバトラに慧は『どういう事だよ』と冷や汗を流す。

バトラがこんな事を言うとは強ち冗談でも比喻表現でも無い正真正銘、言葉通り、文字通りの意味に聞こえて来るのだ。

「バトラの言おうとしている事の深い事は分かんねーけどさ。こいつを疑う位なら世界と心中した方がマシに思えるんです。八代通さんだって、言つてたじゃ無いですか。『どんな絶望的な状況でも、1つ位は切れない絆がある』って」

慧はバトラの言葉の意味を理解し切れていないが、バトラの言おうとしている事の雰囲気は理解できた。それを理解した上で、グリペンの手を握り、パールピンクの頭を見下ろしながら決然とした口調で言い放つ。

「その切れない絆って奴が、グリペンへの信頼か？ その信頼は地獄から出られる蜘蛛の糸だでしょう。だが、それが途中で切れる様な胡散臭い物だとしたら、お前は どうする？」

「だとしても、登ります。自分が信じたたった1本の絆です。それが切れても後悔も恨みもしません。登らなければ地獄に残り続けるだけです。俺は自殺なんて選ぶ気はありません」

バトラがその信頼を裏切られらかもしれないと言う事を話すが、慧の目が一切、変わら無かった。

「糸を登らなければそもそもそんな事にならないだろう?」

「だとしたら、地獄に留まり続けるだけです。抜け出す努力も工夫もする事なく。それが八代通 遙って人の生き方ですか?」

八代通は苛立ちと舌打ちを隠す事なく出しながら、『そういう所はフアントムそつくりだぞ』とブツブツと文句をひとしきり言い切ると、『お前と』言いながら、今度はグリペンに視線を合わせる。

「本当にこんな男で良いのか?死ぬ程苦労させられるぞ。思い込んだら最後、崖まで突っ走って一直線に落ちて行くタイプだぞ」

「ハルカと一緒に。だから、別に驚くことは無い。慣れた感じ」

グリペンの思いもよらぬ返答に虚を突かれて、なんとも言えない表情になった八代通にバトラが『1本取られたな』とおちよくる。

八代通はバトラを目だけを向けて睨みがバトラはどこ吹く風と受け流す。

八代通は天を仰ぎ、低い罵しり声を上げる。

「俺は娘を作らん方が良いな。多分、男が挨拶に来たらぶん殴つてる」

「婚期が遅れそうだ」

バトラの言葉に片眉を持ち上げて、もう一度睨み八代通だが、バトラはそれを無視して続ける。

「話は聞いているが、本当に良いのか? お前達が受け持とうしているミッシヨンは人命救助や人質救出に近い。敵の本拠地に2人だけで乗り込む。こちらからの支援も通信も何も無い状況でだ。何が起こるかもわからない。そんな場所に2人だけで行く。その覚悟があるか? 絶対に成功させて帰ってくるという覚悟があるか?」

バトラの確認に慧とグリペンは同時に無言で頷く。

それを見たバトラは何も言わずに八代通に振り返る。

「覚悟は本物だ。後はあんたの決断と行動次第だ。どうする？ 今ならコアを壊して何が起こるかわからないがリカバリーはし易い手段が残っているが……」

「ついて来い」

八代通はバトラの言葉を遮る。3人は八代通の後をついて行き、2機のF-15の前にたつた。

片方は主翼と尾翼が無いだけで状態は綺麗な機体。片方は完全に焦げて錆びてしまったスクラップ状態の機体。

その2機はケーブルで繋がられ、発電機が2機の周りで低く唸り声を上げている。

慧とグリペンはスクラップと化したF-15の座席に普段と同じ位置で座る。

スタッフがグリペンから離れたのを見計らってバトラがグリペンに話しかける。

「グリペン。お前はあいつの元を絶対に離れるな、離れたら後悔するぞ。お前があいつの事を思っているなら必ず2人で戻って来い。良いな？」

「わかってる」

グリペンのいつもと変わらない感情が分かりにくい表情で応答すれば、バトラは安堵したかの様に息を吐く。

「それだけだ。良いか、念押しするが、お前か慧だけじゃ意味が無いんだ。2人居て初めて戦力になる。それがわかってるなら2人で生還しろ。グットラック^{幸運を祈る}」

念押しと言っておきながら、グリペンの返答を聞かずに床に飛び降りるバトラにグリペンが変な物を見たと言う様に首を傾げる。

慧とグリペンの2人は大勢の人間に見送られながら、異次元とも言える世界……アンフィジカルレイヤーへと旅立った。

作戦43 空を飛ぶ権利と資格

「俺は世界を……救わない」

慧の紡いだ言葉に少し離れた位置に座っていたバトラも他のメンバー同様に眉を潜める。

赤いモンゴルの西日が覆うエプロンの中でグリペンが長い睫毛を伏せながら嘆息をする。

「貴方がそれを言うのは7回目」

グリペンの乾き切った声を聞いてバトラの脳内が混乱する。少なくとも此処までの付き合いで世界を救うとは聞いても世界を救わないなんて意味の言葉もバトラは聞いていないのだ。

グリペンには言っているとも思えたがそんな筈は無いとバトラが頭の中で否定するとグリペンに口が動く。

「ドーターを占拠して『地球殻』に行けないよう破壊する』と言い出したのが2回、部屋に籠城してサボタージュを宣言したのが3回、私ごと第3国に亡命して戦線を離脱しかけたのが1回」

バトラの脳内がいよいよわからなくなってくる。

少なくとも慧がグリペンの言った様な事をすれば騒ぎになるがそんな事をしていないのは確かだ。つまり、バトラの脳が理解出来るのは、今の2人は周りを置いてけぼりに出来る次元で会話をしていると言う事だ。

そして、グリペンが慧にだけ聞こえる声で何かを告げたのは口の動きでバトラが察すると慧がストレッチャーに手を突く。そして直ぐに立ち上がるうとするが生まれたての馬の様に途中からドサリと倒れるがにじりよってグリペンに必死の形相を向けている。

そして慧は何かに縋る様に幾つも何かをグリペンに投げるがグリペンは無表情のまま、台本を読み上げる大根役者の様に何かを告げると慧は突然にやめると叫びながら走り去って行く。

「慧さんー」「おい、鳴谷君！」「慧さん！」

慧を呼ぶ声に本人は無視して去って行くとバトラが無言で追うとするファントムを制して1人で走り始める。

慧は採掘場の筋交いに指を這わせて地面にプレハブの壁をつたう様に崩れ落ちる所だった。

「やっぱりか……」

バトラの影が慧の頭に被さる。

慧は緩慢とした動作で顔を上に上げると手を伸ばしただけで焼き尽くし、消し炭に変えそうな程にグロテスクな赤で真っ赤に焼けただけ南モンゴルの空に浮かび上がる様にバトラの白髪と白い肌に青い目が浮かぶ。

その顔にはやはりと言わんばかりに呆れた表情だ。

「何もかもを焼き尽くしそうな空だが、実際には熱を奪う空だ」

バトラが斜めを上を見上げながら告げる。

バトラの言う通り禍々しい程に焼けた空だが、気温は夕陽が吸い取っているのでは無いかと時計の針が動く度に気温は下がり、世界を凍てつかせる様だった。

「静かな場所だよな。何があった？」

今日の作業は何も無いのか静まり返った採掘場と飛行場が静寂を生み出し、砂埃だけが寂しげに舞っている。

それが慧には粘性のうねりを帯び、精神を襲い、身体が重く、頭は怠く感じていると耳に優しく問い掛けるバトラの声が聞こえる。

「しゃべるのも辛いかな？ 実際にお前は息が止まっていた。知っているか？ 息が止まるって事はそれだけで生命の危機に瀕する。そんな状態の後で全力ダッシュ。そりゃそうなって当たり前だ。担いでやるから戻って診断を……」

受けると言う前に慧の自暴自棄に陥った者や狂気に飲まれた人間がする様な笑い声を上げる。

「(まづい!?)」

ヴァラヒヤ事変でこうなった仲間は何回か見た経験からバトラの脳内で警笛が鳴らされる。

こうなったパイロットは盛大に足を引っ張るか直ぐに死ぬ。

「どっちだ!?! こいつはどっちだ!?!」

自暴自棄や狂気に陥った奴では対処は変わる。バトラは無意識に

摺り足で後ろに下がると腰に下げた銃に指を掛ける。

目の前の奴に無条件に襲い掛かる時があつた経験から初弾を外して脅す覚悟をするバトラの前で顔を地面に向けた慧の口が動く。

「なあ、知ってるか？俺たちがやって来た事は結局共食いなんだぜ？」

何を話しているとバトラの中で警戒心が増して行く。

「千年先に滅亡するか今滅亡するかの違いだけで必死にもがいてる。もの凄いや量の資源と命を消費して、何の救いにもならない戦いを繰り返しているんだ」

慧の顔がゆっくりと上へ上がる。その顔は狂気にも自暴自棄にも陥っていない。強いて言えば、絶望と無気力に埋め尽くされ、翡翠の様な目は苔が増え過ぎた水の様な緑色をしている。

「そんな濁った目をしていたか？俺の知るお前の目は空に憧れて、必死に戦う者が持つ澄んで強い目だった。今のお前は……無様だ」

怒りが孕んだ声に慧は乾いた笑みを漏らすだけだ。

「バトラは……戦うのか？」

「当然だ」

「全部……何もかも無駄なんだよ」

「何？」

「何もかも無駄なんだよ！」

バトラを心の闇で塗りたくるかの様に告げるとバトラは見下す様な目を向ける。

「言っている意味がわからん」

「ザイを倒しても倒さなくても結果は同じ。だったらスパって終わらせた方がいい」

「何を考えている……それは……」

敗北主義者のそれだ。そんな言葉を吐き出そうとする前に慧はこのまま世界が減ぶに任されれば良いと告げる。

「言葉通りだよ。無意味な抵抗は止めて、ザイに全面降伏しようって言うてるんだ！」

「ッ!! 貴様！世界の全てを知ったつもりか!!」

バトラが慧の襟を掴んで立たせると鬼の形相で叫ぶ。

「ふざけるな！ 貴様程度の人間にそんな事を言う権利も資格も無い！ そんなお前が！ 今までの犠牲は！ 戦いは全て無駄だと言うつもりかああああ!!」

「何も守れちやいないんだよ。そして守るべき価値も無い」

弱々しい語る言葉にバトラの腕の筋肉がきつく稼働する。

「あいつが、グリペンが苦しみ続ける続けるだけの世界はなくなっちまえばいい」

それを聞いた瞬間にバトラが反射的に動く。

「ふざけるんのも大概にしろよ！」

慧の襟を掴む腕に力を込めて力任せに地面に引き倒す。

「守る為に飛ぶと決めたお前が、今更に守る価値も無いなんて言う資格は無いんだよ！」

バトラが落ち着かせる様に大きく息を吐くと鬼の形相はなくなり、今度はゴミを見る様な目を慧に向ける。

「お前ならあの領域まで一緒に行けると思っていた……俺の買い被り過ぎだった様だ……ただのガキに……いや、ガキに失礼だ。貴様に空を飛ぶ資格も権利も無くなった。敗北主義者が空を飛ぶな。空が穢れてしまう」

そうとだけ告げるとバトラは慧を放って何処かに歩き去る。

バトラは上を見上げながら思い出す。初めて傭兵として空を飛び始める時に無理だと前席のパイロットに呟いた時に前席のパイロットは笑っている様な口調で話した。

『無理だつて？ 空の戦士が戦う前から諦めるならゆる手段は試したのか？ 敗北主義者は空を飛べないし飛ぶ資格は無い』

「(そうですね。貴方のその言葉があるから今もその資格がある……)」

バトラが慧の言葉を思い出す。

『あいつが、グリペンが苦しみ続ける続けるだけの世界はなくなっちまえばいい』

「(違うだろう？ その状況を脱する為に立ち止まったら何も変わら

ない。未来を変えられるのは人間だけだ。何も行動しなければ、何も変わらない)」

何か変えたい物が有るのなら考えて行動を起こすべきだが慧はそれを無意味・無駄と言って思考停止・行動停止をしまっている。そんな奴が空を飛ぶなどバトラには許せなかった。

バトラは慧が戦力外だと言う印象をバーフォードだけに伝えた。八代通に報告しなかったのはバトラの言う権利は資格と言うのは飛ぶ者にしかわからない独善的とも言える者だからだ。

「それは八代通を理解するだろうが、一応、私からも話しておこう」
お互いに話は終わりだと言わんばかりに頷くと受話器になる。しかも、本社からの緊急電がある時に指揮官クラスにだけ伝える事がある時にだけ鳴る青い受話器、通称名で青電だ。

バーフォードが素早く取り出すと顔を仰天に変えてバトラに目線だけを向けながら何かを話す。バトラにはわからないがアラビア語だ。話せる人間が少ない言葉であるが故に万が一聞かれても何とも言い訳が効きやすい。

青い受話器を戻したバーフォードがバトラに顔を向ける。

「お前はベンベキュラと言う基地を知っているか？」

「英国空軍の基地がある島だったな。確かA J Z戦闘機の配備とドーターがトライアルしてる基地だっけか？」

「そうだ。そこが今日の未明。甚大な被害を受けた」

ベンベキュラ基地は慌ただしかった。と言うのは些か語弊がある。

こう書くと全ての基地が慌しく見えるだろうが実際に慌ただしいのは英国唯一のA J Z戦闘機部隊。グローリアス・ハリアーズの機体と人員だけだった。

「リリウムさん！ 本当に出るんですか！」

正規の命令がありませんよと発進の準備をしながら叫ぶとリリウムと呼ばれたブロンドの髪に美しい水色の瞳を持った美少女と美女の間程の人物はヘルメットを被りながら叫ぶ。

「タイフーンがザイだって言うのよ！ レーダーにも肉眼でも映らない相手だけど空に出ればこっちのものよ！」

整備兵は叫ぶ姿に珍しいと思いながらも発進の準備を終えて、格納庫から出ると一足以上も早く発進の準備を終えた他のハリアーズが既に機体の全てを格納庫から出していた。

〈遅いわよ！〉

隊長機と思しき機体が叫ぶとリリウムは通信機ですみませんと答えながら滑走路に進入すると4機は揃って離陸を開始する。

武装は対空ミサイルに対空用にチューンされた20mmガンポッドだ。

4機は独断先行とも言える様子で離陸すると管制塔から降りて来る様に命令をするが4機は揃って無視をして基地上空で旋回飛行を続けるとリリウムが空から落下するドラム缶の様な物を見つけるとペガサスエンジンを稼働させてその場で機首上げを敢行し、対空ミサイルを発射後ロックオンで放つ。

ミサイルは自由落下するだけのドラム缶に命中すると空中にラフレシアの如く巨大な炎と黒煙の花を咲かせると爆風と爆炎が基地と上空にいたハリアーズ達を襲う。

リリウムも爆炎と爆風に煽られて機体の制御が出来ずにコクピット内で叫ぶだけだったが途端に何か折れてもげる様な音が聞こえる。

そして、今度はドラム缶に詰められて回されている様な感覚を受けてから身体に静止感が戻る。

「早く出ないと！」

取れたキャノピーから機体の外に出ると急いで機体から離れる。燃料や弾薬の引火で爆発で死にたくは無い。だが、機体は運が良いのか火を出しておらず爆発する様子は無かったが戻る気になれなかった。リリウムが基地の方に首を向ける。

「何なのこれは……」

そこには地獄のキノコと言いたくなる様な黒いキノコが基地上空に生えていた。

作戦44 繰り返される悪夢

「ブリーフィングを開始する」

バーフォードの言葉で部屋に暗闇が支配し、プロジェクターにベンベキュラの画像が現れる。

ベンベキュラの上空に突如として現れたドラム缶にミサイルが飛び込み大爆発を起こし、上空に黒いキノコ雲を作り上げるとプロジェクターからの動画再生が止まる。

「核ですか？」

バトラの言葉にバーフォードは首を振る。

「放射能の反応は検出していない」

バーフォードの言葉に部屋の中が騒然とする。

画像に出て来た爆発となると核爆発以外に考えられない。だが、核兵器にある放射能が無い。バトラの脳内である出来事が思い浮かぶ。

「トリニイティか！」

トリニイティ。ヴァラヒア事変と呼応するように始まった反政府組織や新ロシア連邦と名乗るクーデター軍が使った通常爆弾の破壊力を遥かに越える爆弾だ。

「巡行ミサイルに載せられる量でもちよつとした核兵器にはなった爆弾だ。それを相当巨大なドラム缶に詰めれば……」

核爆弾に匹敵する破壊力になる。その言葉をバーフォードは首元で止めて、別の言葉を吐く。

「目標はロケット推進で高度100キロを水切りの様に飛び、この爆弾を落とす極超音速・高高度爆撃機だ」

バーフォードの言葉に隣に座っていたベルクトが小声で水切りについて聞くとバトラは簡単な解説を投げると八代通が言葉を引き継ぐ。

「ダイナミック・ソアリングと言う飛行法だな。ほとんどエネルギーを失わずに目標上空に到達して爆弾を投下出来る」

「ちよつと待って！ 高度100キロ？ 10キロじゃなくて？」

イーグルが目を剥いて立ち上がる。

今の所でも戦闘機の限界上昇は20キロだ。100キロとなると飛行を考えないロケットなどだ。突破は出来ても帰還や飛行を考えない。

「100キロとなると成層圏の上、熱圏の領域だな。飛行機が到達するのは当然先か不可能な領域だな」

「だからこそそのアンチポードボマーです。まあ、ザイも手を変え品を変えて攻めて来るものです」

「あれかー。あの珍妙な爆撃機共か……」

バトラの脳裏にシルバーフォーゲルやダイナソアの画像が蘇る。

アンチポードボマー。簡単に言うとな成層圏や対流圏に爆撃機を飛ばして遠くの敵を爆撃しようとしたら大変だよ。じゃあ、宇宙から落とそうと言う奴である。

計画の全てが何らかの理由で達成はしていないが机上の空論では出来る事になっている。

「弾道ミサイルに劣る物を何故に彼等が実装した？」

ザイが行っている爆撃は人間から言わせて貰えば効率が悪い。その為に弾道ミサイルにその座を持っていかれる。その理由は弾道ミサイルに比べ実際の利点の無さだ。

まず、爆撃機なので帰路の装備があるのでペイロードが減る。高高度の爆撃機なので精密爆撃など見込めず。進路変更をすれば速度が落ちるので迎撃ミサイルにとっては涎が出る程の的になる。

「ですが、EPCMがそこに加われば厄介極まりないですよ」

ファントムの琥珀色の瞳が鋭くなる。

「ドーターが到達出来ない高度から自由に接近し、念入りな観測で誘導能力の低さを補う」

「そして、今の人類に奴を捉える迎撃システムはおろか、観測システムは無い」

「結果的にですが、地球上のあらゆる場所にあの爆弾を落とせる。最悪の一言です。現実的な対処法が思いつきません」

ファントムとバトラの言葉に八代通は仏頂面をしながら告げる。

「9割方その通りだが、全ての可能性を検討した訳じゃない。そんな

状況で両手を挙げて降参するのは流石に性急だろう」

八代通がPCを操作した事で画像が地球の立体図に切り替わり、日本周辺とその上空がアップされると彼我のユニットがプロットされる。

「根本対策は絶賛検討中だ。だが、時間も無いので出来る事を1つずつ片付ける。まずは早期警戒管制機^Aや海上配備型Xバンドレーダー^Bを前進配備して、ピケットを構築する」

バーフォードが説明を受け継ぐ。

「これで高度50キロから160キロ付近を集中的に走査する。無論、これで敵の位置が正確にわかる訳では無いが、異常は感知できる。先の爆撃では何も異常が無いままに爆撃されたからな」

そして、八代通の操作で各地から白い線が何本も伸びる。

「本土に近付いて来たらありったけの迎撃ミサイルで弾幕を張って爆撃を妨害する」

「BMDの応用だ。適当な弾が無い以上は妨害程度に総額数千億を宇宙に飛ばす」

バーフォードの言葉に部屋が静まり返るがバーフォードが続ける。「当面の対応は先ほど話した通りだ。だが、バービー隊とアルタイル隊に加えて、アンタレス隊はレーダー・ピケット前進に合わせて大陸のザイから圧力を受けるだろうから露払いをして貰いたい。無論ながら露払いに出るからと言ってスクランブル待機から離れないので了承しておく様にな」

話はもう終わりだとバーフォードが告げるとラファールが立ち上がり、眦に力を込めながら告げる。

「タフな状況だとは理解している。モンゴル遠征のインターバルも無く、ミッションに入って貰うのは本当に申し訳ない。ただ、今回の件は私も全力で対応するつもりだ。2機分、いや3機分の働きを」

期待して貰っていい。そう告げる前にバトラが手を翳してラファールのその先を止める。

「ラファール。俺たちはチームだ。誰か1人がより多くの負担を被る事があるがそれは本当にどうしようも無くなつた時だ。それにベン

ベキュラには俺の教え子が4人も居たんだ。そいつらの無念も晴らしてやりたい」

ラファールの様子を見て、ベンベキュラでトライアルを受けていたタイフーンのドーターがどんな存在だったか察していた。バトラもそれなりの思い入れがある人物が今回のザイに苦汁を舐めさせられているのは知っており、今回のザイに対する思い入れは普通よりも多い。

バトラも一緒だと表情でラファールに語っているとイーグルも今回だつて余裕だと能天気な告げ、ファントムが毒づくといーグルを八代通が押し止める。

一見していつも通りの独飛だがいつもと今は決定的な差がある事をバトラとバーフォードは分かっていた。

「俺は乗りませんよ」

淡々と慧が告げる。

それを聞いた八代通とグリペンは表情を強張らせ、ファントムと片宮姉妹は凍りつく。ラファールとオペレーター達はと言う事だと虚を突かれた顔をし、ベルクトはどうするべきか首をあちらこちらに向けている。バトラとバーフォードだけはやはりかと言う様な顔をする。

「ムツシュ鳴谷？ すまないが、今のはどう言う意味だ？」

怒気を隠さない形相で慧にラファールが問い掛ける。

「言葉通りです。俺はもうグリペンには乗りません。そう決めたくて今です」

そうとだけ告げた慧が八代通に向き直る。

「流れでついてきましたけど、俺の考えは変わっていません。今後一切、技本のミツシヨンには関わらないつもりです。最低限の調整には参加しますが、ドーターには近づきません。それを言いたくて今まで残っていました」

八代通が感情の無い目を慧に向ける。

「こうしている間にも日本の何処かにあの爆弾が落ちるかもしれないんだぞ」

「はい」

「それでも何もしない気か？」

「しません」

「結果、救えた筈の人命が大量に失われてもか」

「はい」

ラファールが歯噛みをしながら慧に近付こうとするがフロントムが手で遮ると慧に近付き、針の様な視線を突き刺す。

「貴方が人間を無価値と断じるならそれで構いません。貴方が何を言おうと反論はしません。今の我々では同じ目線で話せませんからですから、これだけは宣言します」

黙る慧にフロントムが宣言する。

「私はあなた方に価値があると行動で示します。迫る厄災を打ち払い続けます。慧さんが希望を取り戻した時にちゃんと守るべきものが残されているように」

それだけですと告げながらコルセットスカートを翻すと無造作にイーグルの肩を押して、渋るイーグルを部屋から連れ出す。ラファールもバトラから顎で行くぞと示されて慧を一瞬だけ何うと嘆息をしてから部屋を出て行き、片宮姉妹とベルクトはバトラに手について来いと指示されて後ろ髪を引かれる様に出て行く。

オペレーター達は行くぞと指示を投げながら引き上げ様とするバーフォードの後を追う様に去って行く。八代通も頭を掻きながら引き上げて行く。

「何も言わないんですか……」

詩苑がバトラに弱々しい声で投げる。

彼女の知るバトラはあんな仲間がいれば隣で寄り添い、励ますか説得をする人物だったからだ。

「空を飛ぶにも資格と権利がある。彼をそれを放棄した。そんな奴に掛ける言葉は無い」

話は終わりだと言わんばかりに前を向き、背中は何も語り掛けるなと雰囲気語る。

バーフォードはそれを見て、サーシャを失った時のバトラと今のバ

トラを重ねていた。

第45話 束草沖空戦

「I-44は出せねーぞ」

格納庫へと赴いたバトラが機付員から告げられた言葉を聞いて固まる。

「モンゴル遠征でも無理がエンジンに来ている。特に発電系にな。正常に作動しているのが不思議な位だ」

I-44はその武装に多くの電気を使う為に発電系統に多大な負荷を与える。しかも、中の電装系も賄うとなるとその負担は計り知れないものとなる。

「機付員としてこんな機体には乗せられない」

機付員はその機体を維持する大切なクルーだ。そしてこのクルーはパイロットの命を預かっている。PMCでは整備させて貰っている立場だが、パイロットは整備できない自分に変わって整備して貰い、己の命を預ける人間だ。そして、預けられた側も預かった者としての最低限度の事もある。

引き下がらないバトラに機付員はRF-4TB-AZJを親指で示す。

「あつちは万全だ。あつちを使ってくれ」

そう言っただけ示されたのは胴体中央の増槽を除くと全てのハードポイントに対空ミサイルが装着されている。

今回のバトラの仕事は電子戦機としての活動を行うファントムの護衛だ。

拡大する戦線に手元にあるAJZ戦闘機とドーターを全機迎撃に回せないとして情報戦に長けたファントムを使ってEPCMを排除して通常戦力でもそれなりに戦える戦力とした上でドーターとAJZ戦闘機のどちらかは援護に回ることと戦力強化を図る。

「こんな気分で乗るのはいつぶりだ？」

自虐気味無い笑みを酸素マスクの中で浮かべながら発進のプロセスを1つずつ丁寧に片付けていると首筋を蜘蛛が這う様な感覚を感じて、うなじに手をやると心なしかエンジン音がいつもと違う様な感

じを受け取る。

真剣さを戻した顔で念の為に自己診断プログラムを作動させるが異常は無い。他のパイロットからもエンジン音が可笑しいと言う報告は出ない。

「こんな無茶をやるんだ同然だ」

バトラはこの作戦の要となるファントムを護衛するたった1機の戦力だ。

グリペンが使用不可能になった事で護衛機が自分1機になってしまいナイーブになっているのかと自己完結すると装甲化キャノピーを下ろして格納庫から出ると滑走路に移動する。

自分の後ろにファントムが来ているのをバックミラーで確認すると機体を空へと飛び立たせる。

作戦のフェーズ1は敵迎撃の撃退を対空陣地の整備完了まで行う。フェーズ2は検知されたザイを対して救援・迎撃を行う。フェーズ3で目標の迎撃だ。

全ての行程がタフ過ぎる作戦だがやるしか無い。そう言い聞かせたバトラが日本海上空の束草沖を東100キロ地点に進入するとレーダーに巨大なIFF反応が示される。

バトラが左バンクをしながら海面に現れた反応を肉眼で確認する。

海面には差し渡し100メートルはある6本足の怪物が現れていた。背中には全高が数十メートルはある白い球体に小さな球体を複数個背負っている。

「あれがSBXか……いつ見ても船とは言い難い形状だ」

海上移動基地なのだから当然だと聞こえている人間が居れば突っ込むだろうが此処には誰もおらず、通信も繋がっていないので誰からの返信も来ない。

「やっぱり、予想はしていたが、船足は遅いか……」

SBXはそれ用に開発された船体では無く、石油採掘用のリグを原型にしている。軍艦並みの船足も装甲も望む物ではない。しかも、自衛用火器も搭載されていないので敵中に残されれば巨大な標的だ。

バトラが空中警戒に戻ると通信が入る。

〈一BARBIE&MScompany Apple car, bandits bearing zero one five st rongly jammed〉《バービー隊、MS社、此方アップルカー、敵機接近中。方位015、距離45 高レベルのジャミングを検出》

韓国空軍のAWACSからの通信にバトラはラジャーとだけ告げて敵機襲来に備えてファントムの側を飛ぶ。

普通なら此処で一言か二言おちやらけた言葉を投げる所だがファントムにそれを聞く余裕もバトラにもそれを言う余裕は無い。

ファントムとバトラが編隊を見下ろせる位置に移動するとファントムは編隊のデーターリンクに介入してEPCM処理を行う。

この間はファントム自身は火器管制はおろか機体制御すらもままならない。

事実、敵の増援が来た瞬間に不規則に震えている。

今のファントムに自衛用機関砲すらも錘にしかなっていない。

そんなファントムにザイが2機も迫る。

〈ANTARES02エンゲージ！〉

ヘッドオンで機関砲を放って1機を撃墜。もう1機はバトラを無視してファントムに迫る。

動けない・弱い奴から潰すのは戦いの常套手段。バトラもそれがわかっていのか後部レーダーでロックしたザイに短距離高機動ミサイルを放つ。

ミサイルは放たれて直ぐに後方に頭を向けてファントムにロックオンしようとしていたザイを食い破り、撃墜する。

〈2機撃墜！〉

護衛戦闘機が敵機を撃墜した所でファントムの負担が軽くなる。バトラの頬に汗が流れる。

その後も迫るザイの迎撃機達。

5機のザイは4機がバトラの足止め、1機がファントムの撃墜に移る。

「行かせるか！」

カウンターマニューバで抜け様とするザイをミサイルで撃墜すると同時にエンジン動力をカットして自由落下を行う。

ザイから放たれたミサイルは熱源を失った事であらぬ方向に飛んで行き、急な自由落下でザイはバトラをオーバーシュートして前に出してしまう。

バトラは前に出た瞬間にエンジンを発動させて垂直を得ると同時に発射後ロックオンでミサイルを4発発射。肉眼の動きで別々の機体に別々のミサイルを追尾させる。

3機はHiMATで回避しようと試みるがそれよりも早くミサイルが突き刺さり撃墜されるが残りの1機が回避に成功する。だが、回避した先には垂直を回復したバトラが待ち構えており、機銃で撃墜される。

1日だけで6機撃墜。エースパイロットと呼ばれるパイロットとしての実力を遺憾無く発揮してファントムを守るバトラを警戒したのかザイがバトラに標的を変えて挑んで来る。

最初の1機はヘッドオンの機銃の撃ち合いで撃破すると迫る2機目はバレルロールでヘッドオンを回避してから背後へのミサイル発射で撃破する。

横合いから殴り付ける様に迫るザイの砲撃をエルロンロールで回避してから左バンクをしながらの旋回で追い掛けながらロックし高機動ミサイルで撃墜する。下方から上がってくる敵機にはコブラ機動で射線から逃れると垂直に飛んで終われる形を作るがその隙を突いたつもりでファントムに迫るべく垂直上昇するザイに機首を向ける。

横から放たれた機銃にガラス細工の各所から炎を噴き出しながら空中に破片をばら撒く鈍重なザイの背中をバトラは追われながらすれ違おうと撃たれたザイが推力を失い、背中向きに倒れた際にバトラを追うのに夢中になっていたザイの上に乗っかり、尾翼を奪う。

尾翼を失ったザイは駒の様に回転をしながら落下して行くのをバックミラーで確認したバトラがファントムに意識を向けるとファ

ントムがエンジン出力を上げながらパワーダイブを敢行している所だった。

「どう言う事だ！」

此処でバトラがリーダーに視線を移すと防御陣形が乱れており、その隙を突いたザイが1機。S B Xに迫ろうとしていた。味方機で迎撃できる位置に居たのは自分だが、自分はザイに追われており行けないと判断したフアントムが自分で迎撃しようとしたのだろう。

バトラもパワーダイブをしながら通信を繋げるが通信機から最近では聞いて居なかったE P C Mに妨害された時の不協和音が大音量で聞こえて来る。

フアントムも時を同じくしてE P C Mの影響で脳に焼けた鉄串を突っ込まれた様な感覚を味わっていた。それはコンマ数秒だったが空戦はこのコンマ数秒が運命を分かち戦いだ。

進路に割り込んだ形で躍り出たフアントムはヘッドオンの形で向き合っており、あのコンマ数秒でザイは相対的に食われた距離により目と鼻の先にまで迫っていた。

ザイとフアントムが同時に機銃を放つと一步遅れてバトラもザイに機銃を放つ。

2機から放たれた弾丸の1発が命中してからは傷付いた獲物に群がるピラニアの様に弾丸がザイに飛び込んでガラス細工の機影がバラバラに刻まれる。だが、ザイの弾丸もフアントムのエアインテークに飛び込んでいたのか左のエンジンが爆発音を発すると同時に機体がグワリと嫌な揺れ方をする。

フアントムが必死に機体制御をしようとしている間にフアントムの遠い背後でザイが爆発音に消える。フアントムも機体を制御下に置けたのかどつと肩から力を抜けるのを感じる。

危機的状况はギリギリで潜り抜けられた。命綱が千切れそうな所で何とか繋ぎとめられた。

データリンクを掌握して状況を把握・認識して、防御陣形をの再構築をしなければと脳内で素早く判断したフアントムに隣を並走するかの様に飛ぶバトラが通信を入れる。

〈片肺でそんな武装をしているんだ。飛べるはずが無い！ 撤退しろ！〉

〈へですが！〉

自分がやらずに誰がやるのかと言おうとしたファントムだが、グレアムからバーフォードが撤退しろと言っていると告げるとファントムは渋々と言った様子で基地の方向に機首をゆっくりと向ける。

〈バトラさんはBARBIE03をエスコートしろだそうですね〉

そう告げるとグレアムは別の指揮をしているのかそれ以上は構わないと言う様に慌しく早口で別の部隊に指示を送っている。

どうやらZJAEシステムが作動する範囲内に戦力を集めて此処の判断で動ける様にするつもりなのだろう。

間違った行動をした時に指揮官が指示をすれば良い。代わりに抜かれればリカバーできない諸刃の剣だが、AJZ戦闘機とドーターが子守の必要が無くなったからか生き生きと動き始める。

イーグルに至っては前進してザイの迎撃に行こうとしてはマイケルから離れすぎだと注意が飛ばされる。

片宮姉妹のF-3Xも動きに鋭さが増して撃墜数を積み上げて行く。ベルクトもラファールと共同して穴が空いた場所に対して、誰よりも率先して穴埋めに奔走している。

2機が基地の方向へ撤退しているとベルクトから慌て気味の通信が入る。

〈嘘！ バトラさん！ そっちに3機抜けました！〉

〈わかつている！〉

バトラがファントムのエスコートから外れて迎撃に出る為に反転するとザイが胴体と翼の付け根に持っていたジェットエンジンを作動させて急加速を始める。

バトラの耳にパルスジェットエンジンの様な恐怖を煽る音が聞こえるが冷静に兵装士官としての経験からミサイルは背中を通り過ぎると判断すると手動自爆で破片とワイヤーを舞い散らせる。

飛び散った破片は通り過ぎようとした機体に突き刺さり、ワイヤーは機体を切断する。それでも少し遅れて作動させた機体はバトラの

脇を通ってファントムに迫る。

「FOX2！」

だが、後部のレーダーが取らえた情報をもとにミサイルを放とうとするがミサイルの噴射装置に異常があったのかハードポイントからリリースされて直ぐに噴射装置から爆炎が止まり、水中へと没してしまふ。

「クッソー！」

バトラが宙返りで機首を向けると同時にファントムを巻き込みかねない事を承知の上で機関砲を放つ。

機関砲はファントムのすぐギリギリに小さな水柱を作ると同時にザイを海へと沈める。

バトラは翼端で海を切りながらバレルロールで高度を生むとファントムに背中合わせで被さる様に飛行する。

〈危ないですね〉

ファントムが背中合わせに飛ぶバトラに微笑みながら通信を入れた直後にバトラの鉄翼を貫いた爆炎の光がファントムの琥珀色の瞳をも貫いた。

作戦46 我儘の代償

乗用車が遅くも早くもない速度で小松の街を走る。ステアリングを握っているのはバレリーナの様な痩身を黒衣で包んだ女性だ。そして、助手席には少しくすんだ白の肌を持つ白人男性が座っている。2人のその表情は感情が読み取れない物で会話は無い。

フロントウィンドウには当たった雨と屋根から流れる水が合わさって、薄く広い滝の様に流れる。

ドアウィンドウにはこの悪天候を憂う様にしな垂れた街路樹が映っている。

乗用車は一軒の家の前に止まるとステアリングを握っていた女性はエンジンを切る事なく家の呼び鈴を鳴らし、男性もその横で待つ。

外は雨だが傘を差さずに家主が出て来るのを待っている為か女性の前下がりのボブからは直ぐに水滴が流れ始め、それを気にしていないのか濡れた眼鏡の奥で黒い瞳をまたたかせる。

男性も肌を伝って来る水を感じているが拭う様な事はせずにと待っている。その顔には何かの決意の様な物が車に乗っていた時とは違って漂わせている。

そして、玄関の扉が開けられると開けた少女が小さく悲鳴を上げる。その悲鳴を聞きつけたのか一瞬の間を置いて、女性が待っていた人物が廊下の奥に現れる。

「ラファール?」

「ムツシュウ鳴谷」

どうして此処に居るんだという様に疑問に満ちた鳴谷の声とラファールのしわがれ声が雨の中に虚しく響く。

「電話が繋がらないので直接来た」

「何か……あつたんですか?」

「ありましたよ」

「グレアムさん?」

ラファールと鳴谷の言葉の後にグレアムが口を開いた。

下手な受け答えをすればこの場で殺すとも言いたげな目で告げ

る。

「ファントムと……バトラが墜ちました」

集中治療室^{1c}は奇妙な静寂で満ちている。と言えるのは窓の向こうで治療を受けている2人を見ている無関係者だけだ。

IUCの中では医療スタッフが矢継ぎ早に大声で指示を出し合っている。だが、治療に参加が出来ない無関係な人間には分厚いガラスで中の喧騒が遮られている為に無声映画を見ている様な感覚に襲われている。

IUCの中央に置かれた簡易ベットには人形のように整った顔立ちの男女が1人ずつ寝かされて薄手のシーツを掛けられている。手足に繋がれた幾つものチューブとコードと女性には赤い染みがついた包帯とガーゼが男性から取り出される金属光を放つ破片が抜けられて、抜けられた場所と破片に赤い液体が流れる光景が寝かされているのが生き物なのだと否応無く思い知らされる。

左にはRF-4EJ-ANM。独飛最強の権謀術数主義者にして空戦の女王はその長い睫毛をピタリと閉じて目元に幽かな影を落とすとして、美しかったエメラルドグリーンの輝きは今は生氣と共に失せている。

右にはアンタレス02。MS社の最高戦力の一翼を担う空戦の王者は白い髪とは正反対の黒い睫毛を閉じて目元に影を作り出し、右足の太腿からはガーゼからは赤い血がシートに滴り落ちて赤く染めている。

詩苑と詩鞍は手摺を握り潰しかねない程に強く握り、ベルクトは窓の手前で祈る様に手を組んでいる。

「2人の容体は？」

ラファールが着くなりバーフォードに縋るような声で問う。

壁にもたれかかっていたバーフォードは壁から背中を離すと首を

振る。

「ファントムはいつEGGが止まっても可笑しく無く、バトラもいつ死んでも不思議では無いらしい」

バーフォードの答えに慧がふらりと数歩下がる。

「なんで……こんな、事に……」

その言葉に詩鞍が涙目に怒りを滲ませて慧の襟首を掴んで叫ぶ。

「貴方が逃げたからよ！ 貴方がグリペンに乗って戦ってくれれば！

こんな事にはならなかった！」

詩苑とベルクトは詩鞍を慧から引き剥がすと詩鞍は納得がいかないと2人に怒鳴り散らすと詩苑のビンタが詩鞍の頬に放たれる。

パチンと心地良い音が響くと静寂が訪れる。

「私だって……私だって慧さんの事を憎んでいます！ それは殺したい程に！ でも、慧さんに怒鳴ろうと殺そうとお兄様が帰ってくる訳じゃないです！」

ベルクトは荒い息をする2人を抱き寄せる。その瞳からは大粒の涙が流れて床を濡らす。

「私の口から説明するわ」

遅れて入ってきた京香が撃墜される瞬間を辛そうな表情で慧に語り始める。

事の顛末の始めは管制装置をつけた状態でファントムがザイにドックファイトを挑んだ事が原因のエンジン損傷だった。

バトラはファントムのエスコートと護衛について戦域からの離脱をしようとしていると追撃をして来た新型のザイ3機を撃墜してから直ぐにレーダーが上空からパワーダイブを敢行する機体を見つめる。

ロックオンをしても放つミサイルが無い状況ではガンで撃墜をするしか無いが機首向けが間に合わない判断するとバレルロールをしながらファントムよりも上の高度を取り、ザイの砲撃からファントムを守る為に機体の腹を使って盾になった。だが、ザイの砲弾は貫通力に富んだ弾丸でバトラの機体の主翼を貫通した砲弾がファントムの機体の各所にも突き刺さってしまう。

〈バトラさん！〉

悲痛なファントムの声が通信機からバトラの耳に届く。

バトラは答える余力が無いのかファントムの前で水平飛行に移るが機体の各所から白煙や黒煙が細く出ており、機体も大小のふらつきが目立ち、いつ海面に吸い込まれても可笑しく無い。

〈だい……じよう、ぶ……〉

血を吐く様な音を通信機が拾い、それを聞いたファントムが悲痛な声で呼びかける。

バトラはファントムの声を聞きながら朦朧とする頭と視界で自身の状態を黙したまま確認する。

ザイの機関砲がコクピット付近に着弾した際に装甲の内側が剥離してパイロットに襲い掛かる。

身体に突き刺さる装甲キャノピーの内側の装甲。咄嗟に首を振った事で躲せた頭部へと迫っていた破片。

深刻なのは右足の太腿だ。一際大きな破片が突き刺さり、右足は太腿から流れ出た血により赤く染め上げられている。左足には被弾で吹き出した油圧系部品の油が噴水のように吹き出して左足がその油を被る。しかも、細かな破片が上半身に命中していた事もあって血液量不足から身体を震え、朦朧とする意識と視界の中で必死に機体を水平にしていた。

バトラが死に掛けた声で現状報告をすると意識が乱れたファントムは更にバランスを悪くする。

「まずいー」

ラファールが素早く機体制御をダイレクトリンクで奪うと管制装置を投棄してバランスを整えさせて事無きで終えるが深刻なのはバトラの方だった。

遂にはふらつきが大きくなりもう直ぐハードポイントが海に触れると言う所まで下がる。

これにはベルクトがダイレクトリンクで操縦権を奪い、ハードポイントが水面に触れた瞬間に機首を上げられた事で墜落を免れる。

「元々はロシア機を相手にした時のダメージが癒えていない状況での出撃です。戦力不足なのだから多少の不具合で戦線離脱は出来ないしこの仕事ができるのは自分だけだからと」

京香の後にグレアムが続けて語り始める。

「バトラはアンタレス隊唯一の第1期メンバーにして、ヴァラヒア事変、ゴールデンアクス事件を戦い抜いたアンタレス隊唯一の生き残り。その分だけ仲間を失った瞬間を見て来ました。護衛任務は苦手らしいですが、その姿勢はMS社でも1、2を争う物です」

グレアムが息を整えて慧に告げる。

「本当はこんな事を言いたく無いですし、大人として言って良い物では無いですが言わせて貰います。貴方の我儘で命の灯火が2つも消えようとしているんです」

暗に状況を打破したいならグリペンに乗って戦えとグレアムは告げていると慧は感じ取る。応対を間違えれば比喻でもなんでも無く殺される。

今の慧がしている選択肢が間違っていると此処に居る全員が、物言わず横たわるフロントムとバトラの身体も告げている。

「俺は……乗りません」

だが、慧の考えは変わらない。

結果が一緒なのだ。それを慧は望まない。

結局は遅いか早いか。全てを流れに任せると告げた慧の顔に拳が叩き込まれて文字通り慧の身体が吹き飛ぶ。

殴った姿勢で残心を取るのはマイケルだ。

楽天家で豪快な彼が珍しく涙を流しながら怒っている。

「お前は！ お前は！ お前は！ どうして恵まれていないと気付かない！ 何も出来ない私よりも守りたい物を守る力があるのに！ 如何してそんな選択が出来るんですか！ お前は大切な人が何も出来ない場所で死ぬのがどんな気持ちか想像も出来ないのか！」

再び殴ろうとするマイケルをバーフォードが力強く腕を掴んで止める。マイケルは腕の痛みで我に返り、弱々しく2人に謝る。

「いい。私1人で出る」

やがて、グリペンが無表情のまま告げるとその表情のまま慧の存在を必要無いと言い切り、ベルクトが戦闘力の事を問いただせば、自動操縦プログラムと併用すればギリギリではあるが必要最低限は確保できると断言する。

それは1人でも戦うという宣言。それは慧にとっては許せない言動だった。

慧は無理だと告げるがグリペンは今出来る最善をこなすのは当然だと告げて慧の言葉を一蹴する。

「わかったよ」

何か諦めたような声で慧が告げる。

「じゃあ、俺はもう小松の街を出て行く。限界まで離れてEGGロツクの発動を早めてやる。そうすればお前は飛べなくなるだろう」

グリペンが息を飲む。それを見た慧が歪んだ笑みを向ける。

「EGGロツクは距離と時間に比例して強くなるんだよな？　つまりはいつもの調整と逆の手順を踏めば、あつという間に機能を停止させられる。戦闘どころか離陸させままならなくなるかもな」

グリペンの眉が震え、次いで急角度に吊り上がる。奥歯がぎりつと食いしぼる音が嫌に響く。

「……慧が私の選択を気に入らない事も目指すべき場所が違うのもよくわかってる。でも」

初めてだろう強烈な怒気が瞳に宿る。

「邪魔するのはおかしい！　人の選択肢を潰すのは全然思いやりじゃない！　ただのわがまま！　間違っている！」

「な」

固まる慧。

「慧の馬鹿！　石頭！　分からず屋！」

今までのグリペンからは予想出来ない剣幕に慧は怒りを増やした顔でつかみかかりかけた瞬間に鋭いサイレンの音が降り注ぎ、ICU

の中も慌しくなる。

「例のザイか！」

バーフォードの言葉で全員が頷き合った。

作戦47 絶望に抗う勇氣

〈来たぞアンタレス隊、奴ら。まだこんなに戦力を持っていたのか〉
AWACSのカノープスに乗るバーフォードが呟く。

AWACSの前には赤いSu-37と赤いF-4、そして灰色のF-16が飛んでいる。

そんな5機にMig-29を中心とした部隊が襲い掛かる。

彼等はゴールデンアクス計画と言う計画の為に雇われたヴァラヒアと言うテロリストの残党と傭兵達だ。

目の前の敵を睨んでいると下から突き上げる様に機銃が放たれる。

〈回避！〉

バーフォードの指示で全機が散開して射線から逃れると何処の国にも無い形をした戦闘機が4機。編隊を維持したまま垂直に上昇する。

〈なんだ、あの機体は……!?!〉

長い首にコクピットと一体化したカナードに細い胴体。そして竜の羽を思わせる後退翼に2基のエンジン。それはエンテ型と呼ばれる戦闘機に見られる特徴を持っていた。

〈はっ〉

何か狂気と歓喜を感じさせる笑い声が通信機から響く。

〈もう1度戦う事が出来るとはな、アンタレス!〉

〈スレイマニ……。なのか?〉

その言葉に赤い機体に乗る2人が目を見開く。

スレイマニ。

ヴァラヒアとの戦闘で赤い機体に乗る2人と当時の仲間2人を裏切って敵に部隊の部下共々裏切った男。だが、彼等は核ミサイルの発射を試みたヴァラヒアの企みを阻止する為に核ミサイルサイロの制空権争奪戦で全機撃墜された筈の部隊と人間達でもある。

そんな彼等が何処の戦闘機とも知れない機体に乗って再び現れた。

〈ヴェイルコラク遊撃隊、最後の戦いだ。アンタレスを落とし、我々の最強の証明する〉

機体がゆつくりとバンクをして、赤いSu-37に向かう。

〈アンタレス1はヴィルコラク遊撃隊を迎撃！ 残りはゴールドデンアクス部隊と交戦しろ！〉

〈了解です〉

〈02コピー〉

〈03続きます〉〈04コピー〉

4機が1機と3機に分かれる。

3機を連れた赤いF-4のパイロットは心配そうな表情で赤いSu-37を見送るが直ぐに前を向いて真剣な表情になると同時にヘルメットのバイザーを下す。

〈アンタレス02から04へ。今はサンフランシスコへの被害を食い止める事が最優先だ〉

耳を傾けながらアンタレス02と呼ばれた少年は索敵範囲を拡大させる。

〈既に敵艦隊はゴールドンゲートブリッジを超えて、湾内へと侵攻している〉

HUDに映るマップに赤い円が浮かぶ。

〈敵の予想侵攻ポイントをHUDに表示した。街が攻撃される前に他の部隊と共同して撃破してくれ〉

バーフォードの通信が入ると同時に背後からMig-25の12機編隊が通り過ぎ、ミサイルを放つと同時に急加速、ガンを放つが撃墜は出来ずにそのまま通り過ぎてしまう。

Mig-29は反転しようと機体を翻した瞬間に後から来たミサイルに撃破される。

ミサイルよりも速く飛べる機体性能を生かした戦いだった。

その後F-14の部隊がアンタレス02の上を飛び越えて上昇するとフェニックスミサイルが1発だけ放たれる。

そのミサイルは真っ直ぐに飛び空中の1点で爆発すると赤い炎の花を咲かせる。

その花が咲いた場所には敵のB-2爆撃機が居たがアンタレス02には知る術は無い。

そしてゴールデンゲートブリッジに敵のイージス艦が近付きつつあったが、1隻のイージス艦に対して4発の対艦ミサイルが海面ギリギリの高度で迫る。

MS社に所属するF/A-18から放たれた対艦ミサイルだ。

〈此方で対応する。エアカバーを〉

F/A-18の言葉にアンタレス02が代表して答えると機首を上に向けて高度を取る事でエアカバーの姿勢を作る。装備も空襲を予定していた所為か対空ミサイルしか持って来ていない。

〈沖合に再び敵の艦船出現。都市部への侵攻を止めろ〉

最初に接近していた5隻のイージス艦が撃沈されるが撃沈に動いていたホーネットの部隊に永久的に埋まる事の無い欠員が生まれる。

〈聞こえたら応答してくれ〉

回線に突如として通信が入る。

〈聞こえるかね。マーティネス社。此方はオーシア・ズ・ユーク所属の空母。ケストレル艦長のニコラス・A・アンダーセンだ〉

オーシア・ズ・ユークからの通信が届く間にも跳ね上げる様な機動で機首を起こしたアンタレス02の機銃により、ゴールデンアクス計画部隊のB-2が被弾。

エンジンが2基とも止まった事で徐々に高度を落として海へと水没する。

〈此方マーティネス・セキュリティ社。M42飛行中隊の指揮官、バーフォードだ〉

〈我が艦はこれより貴隊らと共同でゴールデンアクス計画軍との交戦を開始する。それと遅れてしまつて申し訳無いな。そして、更新が出来て光栄だよ、バーフォード中佐〉

〈いや、私は旧友に『手紙』を書いただけだ。貴隊の救援に感謝する〉
お互いに大がつく程のベテラン同士。言葉は短いがお互いに伝えたい事は誤解なく伝わっている。

〈アンタレス。ケストレルが支援してくれる。ケストレルの迎撃を掻い潜った目標の撃破に集中しろ。敵爆撃機の増援を確認。接近している〉

そんな通信が入ると同時に艦船の反応がアンタレス02にカノープスに爆撃機の反応が出る。

艦船には補給を済ませたばかりのF/A-18の部隊が対艦ミサイルを叩き込むべく低空で接近。

アンタレス02はアンタレス03と04に爆撃機の迎撃に向かわせて、自分は別方向から接近していた戦闘機部隊に向き直る。

最初に接敵したのは隊長機なのだろう。F-35だ。

アンタレス03と04の迎撃の為か背中を向けている状態で飛行しておりアンタレス02はチャンスとばかりにQAAAMを発射する。

QAAAMは普通のミサイルでは出来ない機動を描きながら飛翔し、F-35のエンジンを食い破る。

これに僚機のMig-29の部隊、4機が慌てた様に翼を翻すが数々の作戦を生き抜いたアンタレス02にとっては撃墜してくれと言っているのと同義。

近場の1機に近付くと必ず命中弾が出ると言う距離で機関砲を発射。主翼をへし折ると別の機体に即座に向き直り、SAAMを発射。撃墜を確認するよりも速くにヘッドオンをした機体に機銃を放って撃墜すると同時にミサイルが爆発し、爆炎からはMig-29だった破片はこぼれ落ちる。

残った2機の内1機が逃げる仲間を援護する為か旋回するとアンタレス02はわざと機銃の距離で背後につかせると同時にミサイルをリリースしながらコブラ機動でオーバーシュートさせると腹にリリースしたミサイルが誘導されて、腹から破壊される。

残った1機は逃亡を図っていたが、偏差射撃で放たれた弾丸が命中。コクピットのある機首の部分が胴体から折れる様に離れて行く。

付近に敵影が無い事を確認してから索敵範囲を広げる為にレーダーを操作するとアンタレス01が立て続けにヴィルコラク遊撃隊の3機を撃墜。最後の1機とドックファイトに入っていた。

援護に入ろうとするもあまりにも高度な戦いに邪魔するだけだと即座に飛び込める高度と位置を周回する。

何時でも飛び込めるぞと精神的攻撃で少しでも援護をしようとした結果だが、残った機体のパイロット。スレイマニには効果が無いのかその動きのキレが鈍る事は無い。

スレイマニが最後のミサイルを放つがアンタレス01は急旋回で回避すると同時にスレイマニの背後に回り最後のミサイルを放つが変態的な機動でミサイルを躲す。

そこからさらに木の葉が風に煽られる様な動きでアンタレス01を翻弄しながら戦うがアンタレス01も食いついており、何方が勝つても可笑しくない。

スレイマニが加速して一旦距離を取るがアンタレス01が高度を上げる。

そしてお互いに近づくが向こうが速く攻撃すると判断して回避行動をお互いにとつてしまい、巴戦に発展する。

まるで衛生機動を描く様に長い空戦が行われるがスレイマニが距離をとつた事でカバーが遅れたアンタレス01が至近距離にまで食い付かれる。

その後はアンタレス01が不利な状況で空戦が繰り広げられるが徐々にアンタレス01が追い返して行くとついにヘッドオンの状況に戻る。

〈お前の価値を食つてやる！〉

スレイマニの狂気に満ちた声と共に機銃が放たれる。アンタレス01も機銃を放つが直ぐに機銃の弾が尽きたのか放てなくなり、エアインテークに弾丸が飛び込んだ事でエンジンが爆発してアンタレス01が撃墜される。

〈そんな……アンタレスが……〉

マイケルの悲痛な叫びが聞こえると同時にスレイマニは狂気を孕んだ声で最強になった事と勝利の余韻に浸っているとスレイマニの左腿が文字通り弾け飛ぶ。

アンタレス02がバイザーを上げて、涙を流しながらパワーダイブをしながら機銃を放ち、その弾丸の数発がコクピットのガラスを突き破り、スレイマニに直撃。

20mm以上の弾丸を生身で食らったスレイマニはコクピットの中で弾け飛んでコクピットを赤色に染める。
それを見たアンタレス02の視界は暗転した。

「俺はどうしたいんだ？」

小松にある自室で避難用の荷物を纏めながら慧が1人零す。

民間人扱いとなつている慧はザイの襲撃を自然災害と偽つての避難で小松を離れる為に荷物を纏めているがその頭の中では学校の物資を屋上に運んだ時に明華から言われた言葉がフラッシュバックする。

『何気なく繰り返している日常の中にも新しい発見があるんだなあって。そう思ったらちよつと感慨深くなつちやつて。新鮮な気分になつたと言うか』

「俺は……俺はどうしたい……」

古びた自室で静かに誰にも聞こえないだろう音量で呟く慧。

「(行動次第で未来は変わる……今の俺の選択が、行動はどうなる……)」

頭で仮定を立てながら進めれば現代文明の終焉しか無いだろう。じゃあ、グリペンと飛べば無限ループが継続する。

慧の頭で未だに残っている前のループの記憶を辿っていく。いつの時代のいつの世界の自分がどんな選択と行動をしたかを、そしてその結果を思い出して行く。

「(選択肢は無限にある。ただ、それを選べない、気付かないだけなんだ……)」

思い出す度にそんな感情が強くなっていく慧だがやはり暗礁に乗り上げる。

「落ち着け……」

慧はまず、何をすべきかでは無く、何をしたいかに思考回路をシ

フトする。

「グリペンと一緒に居たい……あいつと次の時代を歩んでいきたい。勿論だがザイとの共存など真つ平だ。あのガラス細工の害虫には綺麗さっぱり消え失せて貰う。過去への放逐じゃなくて、存在自体の抹消」

やりたい事は止めなく口から漏れ出る。

そしてそれは完全無欠にして最強無敵のハッピーエンド。しかし、それは見方を変えただけ。現実的な物を認識した瞬間に結果は変わらないのだと思い知らされる。

0だった可能性が1に変わったただけでその1が何によって生まれるのかわかっていない。

うなだれながら慧は避難の準備を進める。

「そうだよ……自分如きが……」

自分よりもあらゆる面で優れた人物達が導き出した答え以上の物を出せる筈がない。黙々と避難の準備を進める慧の耳に何か落ちた音が響く。

それは工具のドライバーだと認識した瞬間に押し入れの荷物が雪崩の様にぶちまけられ何の技術も構えもしていなかった慧には止められず、半数が部屋に溢れる。

「ああ、クソ！」

イラつきながら声を漏らして荷物を拾っているとアルファベットに漢字交じりのタイトル。そして大文字で刻まれたCHNの国籍表示。

それは中国自家用操縦士の学科試験問題集。しかし、それは今の慧には文字以上の存在であり、複雑な存在になっている。

呑気に読んでいる状況では無いが慧の手はゆっくりとページを捲り、付箋と書き込み、そして嫌になるくらいのバツマーク。中にはトルクの反作用の問題すら間違えているのを見て、過去の自分にコツも含めて教えてやりたいと思っているとふと母の言葉達が蘇る。

その中の言葉が強く蘇る。

『何回でも、何十回でも、何百回でも。諦めさえしなければ、いつか必

ず目的地にたどり着けるんだから』

慧の息が止まりかけて、冊子が手から落ちて荷物に混ざると同時に弾みで指を打ち付けるが慧はそれが気にならない位にとある事実を見つけた衝撃が身体を満たしていた。

「そうだよ……俺は10回、20回と失敗を重ねたガキだ……」

絶望に抗う勇気を見つけたのか慧は小松基地に消え掛けていた情熱を燃やしながら走り出していた。

作戦48 第2次小松防衛戦開始

「これより、独立飛行隊並びにM42、M43飛行中隊は稼働可能機体全てがスクランブル待機に入る。」

小松基地が1つのダイナモになったのかと思う程の人の声や機体のエンジン音に包まれる中でバーフォードが口を開いた。

戦闘機搭乗メンバーがホワイトボードを注視する。

「色々と言いたい事や憂いる所があるだろうが敵は我々の事情など知った事では無いと攻めて来る」

バーフォードが息を吐くと状況の説明が始める。

「ファントムとバトラが必死の覚悟で設営したピケットリーダー群の1つが敵の降下を捉えた」

この報告で全員の顔に真剣さが増す。あの2人が血で切り開いた道だ。

「直ぐに反応が消えたが小松への攻撃が近づいているのは確かだ。我々は高度7万を限界ラインとして、ここを超えた場合は即出撃し、迎撃。攻撃予測時間だが今から22時間以内と言うのが妥当だ。その間はコクピット待機を基本とする。我々AWACS部隊も機内待機だ。辛いと思うだろうが、あの2人はもつと辛いだろう」

生死の境を未だに彷徨っている2人がいるのだ。22時間のコクピット待機を辛いなどと言える立場では無い。全員が頷くとグレアムが続く。

「管制と索敵は我々AWACS部隊が引き受けます。作戦の大まかな変更はありませんがミサイル発射のパイロットをラファールから鳴谷慧に変更します。ラファールは制空戦に参加して下さい。予備戦力は無しです」

「グレアムの言う通りだ。まずは敵の捕捉を第一段階とし、終了次第BARBIE01はズーム上昇で成層圏に到達して、ミサイルを放つ。たった2行程の作戦だが、チャンスは1回こっきりの大博打だ。他の機体は直掩を行い、成功の援護だ」

バーフォードがホワイトボードに立って地図に円を描く。

「これが限界だが敵の出現予想エリアだ」

日本海・黄海・東シナ海と広大な面積にラファールが反論仕掛けるがバーフォードが先に手で制する。

「核攻撃で爆撃機が未だに一翼を担い続けるのも自由に飛び回れるが故にカバー範囲が広がることもある。相手が飛行機である以上は広大な予想範囲になる。それでも賭けに出て小さくした位だ。ただ、警報が出たらスクランブル。航路は直ぐに我々から指示する」

バーフォードの言葉にラファールは頷いて席に座るとグリペンからザイの迎撃に関して聞かれると京香が答える。

「それに関しては空自の203と302から6機ずつとMS社からM61飛行中隊ラサルハグエの6機に……凶鳥フツケバインが参加します」

最後の追加人員を聞いてオペレーター人が立ち上がる。

凶鳥フツケバイン。

高齢で第一線からは退いた男だが、その腕は今尚健在。今回は自分の教え子であるバトラの重傷を聞いて操縦桿を握り決意をした。

「因みにだがこれ以上の増援は見込めない。状況は古風に言ってしまうと右翼を押され、中央は崩れかけている。撤退は不可能と言うべきか？」

「ムツシユバーフォード。状況は最高、これより反撃するが抜けている。それにフォツシユ翁は陸軍で航空戦に彼ほど無理解だった者はいない」

それを引き合いに出すのは間違っている。とでも言いたげならファールだったがニヤリと笑う。

「もとより引き退る気は毛頭無い。敵との戦力比が10分の1なら10倍の働きで補うだけだ。前回の二の舞は舞わないと誓おう」

ラファール目に鋭さが増して慧を見る。他の者も同様でこれが無事に終わったら説教が待っているから覚えているよとでも言いたげな言葉に慧が身震いをしているとバーフォードが全員を見渡して告げる。

「状況は最悪に近いだろう。我らがエースが2人。絶対安静の状況

で、成功率は3分の1の作戦に従事するのだ。しかし、鳴谷君は勇気を取り戻してくれた。ならば、次は我々が見せる番だろう。鳴谷君の勇気を無駄にするような飛行はするなよ」

全員が力強く了解と告げて、それぞれの機体に向おうとするとイーグルが慧の背中に頭突きを食らわして出て行き、呆気に取られる慧の後頭部をラファールが叩くと手を振りながら出て行く。今度は不思議そうな顔をしている慧の前に片宮の2人が現れると左右の頬にビシッタを喰らわされる。

流星のこれには慧も痛みから声を上げるが今度は背中にMS社の女性オペレーターからモミジを喰らい背筋を伸ばした瞬間にベルクトの白く細い足が慧の脛を蹴る。

慧は脛を抑えながら倒れると倒れた慧に今度は男性オペレーターが1発つつ肩に蹴りを入れて行く。

最後にバーフォードが立たせると頭を撫でるように叩くと出て行った。

へアンノウン！ エリア・チャリー2、進路100。作戦開始。全機スタンバイ！>>

静寂が立ち込める基地に突如としてサイレンと通信が響くと翼を下ろしていた鉄鳥達が目を覚ました様にその叫び声を上げる。

最初に動き出したがF-15J、続けてF-35、そして機体の後部の一部分だけを赤く塗ったF-14と続き、MiG-21bisが滑走路へと躍り出ると山吹色のF-15Jから空へと飛び立って行く。

誘導路が手空きになると格納庫からは黒と白のA-10が対空兵装満載で出てきて、別の格納庫からはオニクスブラックのラファールMとスノーホワイトのSu-47が現れる。

最後に紅のJAS39Dが現れるが腹に巨大なミサイルに主翼に

はブースターと異形と言える姿をしていた。

全ての機体が飛び立った後にF-4EJ改がひっそりと離陸する。全機が空に上がるとAWACS・警戒機部隊を指揮するカノーパスから迎撃予想位置が示される。

「聞こって……」

グリペンが声を漏らす。

そこは中国大陸の沿岸部。どう見繕っても敵勢力圏であり、大陸防衛の任に就いているザイからのインターセプトを受ける場所。

Su-47の機体がベルクトの恐怖に反応したのか小刻みに揺れると初めての回線で通信が入る。

〈君がベルクトだね〉

優しそうな声にベルクトが首を回すと隣には海灰色の海軍迷彩に似たカラーリングが施されたMiG-21bisが並ぶ様に飛行していた。

〈怖がる事は無い。空と言うものは元来として孤独な物だが君には頼りになる仲間がいる。怖がる事はないだよ〉

〈フツケバイン。申し訳無いが彼女は空を飛び始めて日が浅い。どうか彼女の長機になってくれないか?〉

〈了解だ、カノーパス。聞こえたね嬢ちゃん。私の後ろについて離れるんじゃないよ〉

〈わかりました〉

通信を終えると同時に敵の反応がレーダーに現れる。

敵は真つ直ぐにAWACSと警戒機に飛び込んで来る。カノーパスがEPCMを無効化した空間を作ると各機がその中で空戦を始める。

空戦をするには狭過ぎる範囲だが、護衛をするには広大な戦場はかえって敵を有利にする場合もある。

フツケバインは機体を翻すとグリペンもそれに続くが、フツケバインの操るMiG-21bisはMiG-21とは思えない機動で動き、最初の1機を撃墜すると同時にベルクトに左の敵の排除を願い、ベルクトも返事と共に空対空ミサイルで撃墜する。

〈おお、やるね。それじゃあ、久しぶりに戦闘機動を試して見るか。付いてくるんだよ〉

〈はい！〉

〈よい返事だ〉

フツケバインが大きく右に旋回するとグリペンもそれに続くがフツケバインの鋭い機動にグリペンの技量では大幅な差がある機体性能で助けられているにも関わらずついて行くのすらやつの状態だった。

「すごい……なんて技量なんですか……」

フツケバインはそんな状態にも関わらず機銃を放ち、ザイに命中させるが致命傷になっておらずベルクトが少しの無茶をしてトドメを機銃で刺すが離れたベルクトに別のザイが迫る。

〈何をしていますか！〉

詩苑の言葉と同時に放たれた30mm弾がガラス細工を粉碎する。

〈すみません……〉

〈まずは私についてくる事を考えるんだ。気持ちを楽しんできてきつと出来る。バトラ君の僚機だろう？〉

〈はい〉

コースに戻ったベルクトを確認したフツケバインがバレルロールにエルロンロールを混ぜた機動で低空から殴り掛かるように飛ぶザイに機銃を放って撃墜する。ベルクトも歪な形になりながらも必死にフツケバインについて行く。

そんなベルクトの上空を2機のザイが編隊を組んだまま通り過ぎ、背後に回る。

〈後ろに敵機が！〉

〈集中力を保つんだ。クールにね〉

フツケバインがループを描く様に上昇するとベルクトもそれに続き、ベルクトを追っている2機のザイもベルクトの後を追って旋回上昇を開始するが後ろを飛んでいたザイが頂点に達したフツケバインがハンマーヘッドで機首を向けられた事でロックオンされ、ミサイルで撃墜される。

そして、急旋回でザイとの巴戦を始めたフツケバインに追いつこうとベルクトもハンマーヘッドを使うと通信が入る。

〈そのままループだ〉

意味がわからなかったがGに耐えながらループを再開するとレーダーの端にフツケバインに追われたザイが現れ、このまま行くと自分に当たると思ったがループで速度が低下した事でザイが目の前を通り過ぎる機動となり、フツケバインもその瞬間には機動を少しずらしてベルクトの銃撃を受けない位置に機体をズラしていた。

ベルクトは意味を察して機銃のトリガーを作動させてザイを撃墜する。

〈へそう、その調子だ。上手いぞ〉

その後も迫る機体をベルクトが何とかついて行けると言う機動で動き、時にはベルクトにも撃墜させる動きを見せるフツケバイン。

「なんて、操縦なの……人間とは思えません」

〈へおいおい、買いかぶり過ぎだよ〉

それを見た詩鞍が零した言葉が通信機から聞こえたのかフツケバインが笑う様な声で通信を入れてくる。

止めなく迫るザイがいる中でもこんな余裕を見せるフツケバインにベルクトが戦慄しているとレーダーから味方の警戒機の反応が消失する。

〈へ海面に敵機！〉

〈へ何ですかアレは！〉

詩苑の言葉に詩鞍が見た物は翼端を切り落とした旅客機の様なザイだった。

〈へエクランプラン!? 内海でしか運用出来ない筈じゃ！〉

エクランプラン。細かいところは端折るが簡単に言ってしまうと翼と地面の間に空気のクッションを作り、その上をエンジンの推力を使って移動する船舶並みの搭載量に飛行機並みの速度を出すと言う兵器だ。

現実世界では機体強度の軟弱さからの事故や整備維持に問題が多いなどで採用されていないが、ザイにとっては強度さえどうにかでき

れば運用可能な兵器だ。

そんな兵器が海面すれすれを飛びながら警戒機にミサイルを放っていた。

〈ALTAIR02と03はエクラノプランを撃破しろ。残りは直掩をつづける！〉

バーフォードが素早く対地攻撃が上手い2機を迎撃に向かわせる。だが、エクラノプランの到着から間を置いて別のザイが出現し迎撃戦が加速して行く。

そして遂に味方戦闘機部隊からも損害が出始めると防空網の穴が空いたのかJAS39Dに3機のザイが迫る。

それにはパイロットである慧も気付いていたが作戦の性格上既に移動は出来ない状況になっている。それでも上昇を続けるとラファールが横殴りの機銃で2機を撃墜し、離れる最後の敵機にミサイルを放って墜とすと間髪入れずにその翼を翻して別のザイに襲い掛かる。

足りない分は自分で補う。そう言っていたラファールが有言実行の働きをしているが制空戦に多くを割いているとわかったのかザイはエクラノプランを増援で送り込んだ事で状況は悪化。

電子戦機達に迫るミサイルを何とか撃墜したフツケバインとベルクトだが撃ち漏らしたミサイルがカノープスの右端のエンジンをギリギリで破壊し、別の電子戦機が2機ほど撃墜される。

作戦に必要な電子戦機は5機分。カノープスが2機分の働きをするとは言えどもリソースはカノープス含めて6機。ギリギリの状況ではあるが作戦は大詰めで黒くボヤけているが遙か彼方を飛ぶ目標のザイがマークされ、主翼のブースターが起動した。

作戦49 第2次小松防衛戦終結

「レオス」

暗い空間に一瞬にして光が差すと周りには青い空に白いエーデルワイスが咲き誇る花畑に立ったアンタレス01こと未来奈が立っていた。

そしてレオスと呼ばれたバトラは花畑に横たわっていた。

「俺は……死んだのか？」

「ううん。正確には死に掛けているかな？」

そう言っただけ微笑む未来奈にバトラが全てを察した。

彼女は死んでいる。それはもう死体が無いとか理由が無くとも認めなくてはいけなかった。心で理解してしまったから。

バトラは涙を流しながら声を殺して泣いていると未来奈が言葉を紡ぐ。

「あなたは直ぐに復讐を果たしてしまった。復讐に囚われた者や駆られた者は復讐を果たせば虚しさにだけ苛まれる。そして、徐々に、確実に腐って行くのが常だった。けど、あなたは違った」

バトラに複数の影が重なる。それは今までにアンタレス隊として共に戦ってきた仲間達だった。

「バトラさん。貴方が腐らなかつたのは気付いたからじゃないですか？」

サーシャの言葉を聞いて涙を拭い声をした方向を見るとベルクトに似た顔をした少女が微笑みながらしゃがんでバトラの顔を覗いていた。

「無くした物」

「奪われた物」

「そして、失われた物ばかりを見ていたけど、気付く事が出来た」

「残された物がある事に」

バトラの言葉に仲間達が笑顔で頷くとサーシャと未来奈がバトラに手を伸ばす。

「まだ、ここに来るには早過ぎる。戻りなさいバトラ特務大尉」

「長く待たせて下さいね、バトラ特務准尉。武運を祈ります」

2人の手をとって立ち上がったバトラの目に病的なまでに白い天井が映る。

「バトラさん」

声をした方向に向けば痛々しい姿で顔をだけを向けるファントムがバトラの目に映る。

「……飛べるか?」

「無理です」

ファントムの短い応答に意味を察したバトラが言葉を紡ぐ。

「俺が操縦するから電子関係を」

「負傷した老兵に酷な事を言いますね」

そう言いながら2人がベットから足を下ろすと刺さっている点滴や電極を取り外して駆け出す。

止血をしていない為に針が刺さっていた場所からは止めなく血が滲み出るがそんな事は無視して近くに置いてあった普段から来ている服を2人は素早く着込み、格納庫へと出て来る。

負傷から復帰したばかりの2人を止めようとする地上クルーが居たが船戸から飛ばしてやれと無言で地上クルーの肩を引っ張るとバトラに対Gスーツを投げ渡すとこれに乗れと指を差される。

それをバトラは感慨深そうに眺めるが直ぐに首を振って追い出すと地上クルー達から離れて、ファントムと並んでコクピットへと向かう。その行動に何処か懐かしさを感じているとファントムが口を開いた。

「後で報酬を貰いますよ?」

「わかってるよ」

パイロットと言う人間は飛行機に飛ばして貰っている人間を指し、ファントムはアニマだ。そしてアニマは戦闘機と同義である。そんな彼女が報酬を求めるのであれば、バトラと言うパイロットはそれを払う必要がある。

「何でもしてやるよ。買い物に付き合えとか……」

何かを言い淀みながらタラップを登り、複座型ではパイロットが乗

る前席にコクピットに座り、フロントムが後席に座るとバトラの口が言葉を紡ぐ。

「肌を重ねるでも」

コクピットに装甲キャノピーが閉じ始めると同時に意味を理解したフロントムの顔が真っ赤に染まる。だが、それをバトラに気付かれる事なく装甲キャノピーが閉じ、暗闇に支配される中で補助動力の稼働音がゆっくりと響きエンジンの17枚のタービンが回り、格納庫に遠吠えの様な音を響かせながら全天モニターが起動する。

「だが、命はくれてやるつもりはない」

貴様も命を貰うつもりは無いだろうと振り向き、見上げるバトラにフロントムは妖艶な笑みを浮かべるだけで答えた。

慧の視界が突如としてモニターの電源が切れる様な音と共に真っ暗になる。普通ならこれで驚き、慌てふためくだろうが、暗転する一瞬前に聞こえた電子戦機の墜落を告げる通信がグリペンに必要な最低限のリソースを提供出来なくなった故の事だとわかる。

目標のザイが自分達の存在を危険視してデコイを散布し、グリペンが必死の覚悟でタイフーンの置き土産を使って、本物を洗い出そうとしていたが電子戦機が墜落。必要最低限のリソースを下回った事でただ飛ぶだけのミサイル発射台と化したJAS39Dにザイを撃墜出来る能力は無い。

ミサイルは発射しただけではただの噴進弾。一直線に飛ぶのさえ怪しい鉄塊となる。

「此処までできてー」

慧がイラつきを隠す事なくキャノピーを叩くとボオオンと不気味な音を立てながらディスプレイが復旧。続けてインジケーターが復旧し、全天モニターに照準と黒い靄の様なザイが数個、順番に浮かび上がる。

慧が首を振ると左隣に居るはずの無い人物しか駆れない筈の機体が存在した。

跳ね上がった外翼に逆さにしたYの様な尾翼に長く伸びた機首。そしてボディの所々が内側から輝く発光するエメラルド色の光に浮かび上がる様に存在を誇示する藍色のパーツ。

F-4だが、こんな機体カラーリングは見た事が無い。

へまったく、世話の焼ける人達ですね。たかだが爆撃機を1機墜とすのに何をそんなに大騒ぎしているんですか。おちおち養生もしていられませんかよ

通信と同時にデータリンクが勝手に再開される。電子戦機隊とJAS39Dの間に新たなユニットが現れる。敵味方識別コードは味方を示し、データリンクでも味方の識別コードを出している。

データリンクではBARBIE03を表示する。

へファントム!? お前、大丈夫だったのか

慧の通信にファントムが溜息を零す。

へ大丈夫な訳無いでしょう。満身創痍に疲労困憊を併発しているのどこかの鬼畜パイロットが無理矢理に飛ばすんです。まあ、自分1人では満足に飛ばす事は愚か普通に飛ぶ事さえ困難な状況ですよ。しかも、試験中の早期警戒モジュールまでぶっつけ本番で載せられて、故障機と負傷兵に対する扱いとは到底思えませんよ

鬼畜パイロットと言う言葉で敵味方識別コードを見る。其処に記された字を見て、慧の頬が緩む。記憶の中にある失敗したどの時代にも居なかった正しく希望の光の1つがそこに居た。

ANTARES02。

完全無欠にして最強無敵のハッピーエンドに行く為に必要な欠けではないけないピースの1つ。

へおかえり、希望か勇気を取り戻したみたいだな。言いたい事は色々もあるがそれは後にしよう。今はただ、この戦場を駆け抜けるのみ!

ファントムと早期警戒モジュールの救援によりリソースを取り戻したグリペンが迎撃の為に必要な情報をかき集めては解析し、デコイ

を弾いて本物を割り当てて行く。

〈敵進路アップデート、投弾アプローチに入っている。阻止限界点まで残り7秒〉

〈各機の位置のズレの修正は？ 観測誤差が出るぞ？ 発射するミサイルの速度と敵の速度は？〉

〈…：各種情報を整理、追加、再計算…：完了。データ抽出、照準情報に同期完了、経路修正・ターゲット最終選定〉

〈敵機捕捉！ いっけえええ!!〉

慧が押したりリリースボタンから送られた信号により1t近くある凶器が虚空に放たれる。

重力の鎖から逃れる為だけのエンジンを火を噴きながら上昇し、1段目のブースターが切り離されると更に加速して重力の鎖を1本、また1本と振り解いて行く。

そして最後には外周スラスターで軌道を修正しながら敵進路に突っ込む。

敵も回避する為に蛇行する。もしも放たれた凶器が従来の直撃しなければ意味の無い物だったら良かったのだろうが放たれた凶器は未だに実験中の代物で敵の直撃直前に抱えた炸薬を爆発させて、中に仕込んでいたダングステンペレットを目標正面にぶち撒ける。

拳1つ分はあるダングステンペレットはその重さと保持する運動エネルギーによりまずは左翼を食い破り、腹部の耐熱シールドを続けて破壊。さらに垂直安定板と舵を粉碎し、安定を失うと残ったペレットが胴体に直撃して、捻じ切れる様に胴体が切断される。そして、それは爆弾倉にも到達し、内部にあつた爆弾にすら被害を与え誘爆させる。

指先ほどの爆炎を確認すると遅れて音と衝撃波が襲うがJAS39DとニコイチされたF-4を少し揺らす程度だった。

F-4が制御された動きで降下を開始するがJAS39Dは力を失った様に降下するが直ぐに機体を水平に戻す。

〈作戦は成功した！ 全機帰投せよ！ 繰り返す！ 作戦は成功！ 全機帰投せよ!〉

カノーパスから通信が入るが大陸の至近とあつてかザイの迎撃はまだ多くあり、直ぐに帰投できる訳では無く、慌ててA J Z化された戦闘機隊とドーター達が退路の確保に移るがその行動は杞憂に終わる。

〈まさか、もう終わっていたか〉

〈E P C Mで通信出来なかったのが痛いな〉

〈でも、帰投する彼らの退路を確保しなきゃ〉

I F Fに味方として反応するF—4 E J改が両翼を青く塗ったF—15に片翼だけが赤いF—15に通常カラーのF—14の3機を連れて現れる。

〈退路は我々が確保する。君達は帰投しなさい〉

小松の基地司令が乗るF—4 E J改からの通信を受けて全機が日本に機首を向けて全力で飛ぶ。

その遙かの高い高度で飛ぶJ A S 39 DとF—4は可能な限りの速度で日本に向けて飛んでいた。

〈休んで下さいな〉

ファントムが優しく慧に呼び掛ける。

〈機体の制御は此方で受け持ちます。ご心配無く、燃料計算も完璧にやっておきますよ。目が覚めた時には……〈尋問室だ〉

ファントムの通信にバトラが割り込む。

〈と言うのは冗談でランウェイだ。それにグリペン辛いんじゃないのか？ 兵装士官といえどもハードな仕事だったんだ知恵熱でも出しているんじゃないか？〉

バトラの言葉を聞いて慧が後ろを向くとグリペンはグツタリと熱にやられた様にシートに腰掛けています。

〈慧さんが思っている以上にその子は頑張っていたんですよ？ しばらく休ませてあげても罰は当たらないでしょう。むしろ突然の機能停止を避ける為にも、早めに機体制御を預けていただいた方がよろしいかと〉

ファントムの言葉の後にバトラの声が続く。

〈お前も休め。この後に説教が待っているんだ。たつぷりと英気を

養って長時間の説教波状攻撃に耐える準備をしておけ」

カノープスの5人にMS社のパイロット4人にアニマの4人の13人の説教が待っていると思うとドツと疲れたのか慧はファントムとバトラの言葉に甘えると告げて眠り始める。

通信機から寝息が聞こえるとバトラは回線を切ると操縦桿を握り直し口ずさむ。

「とにかく勝った。ま……家に帰ろう。愛機の炎をぶち撒けながら……俺達のやり方こそが強さの証だ。いつまでも、ずっと続く強さの証だ……」

「バトラさん」

慧にとつての地獄の初日の担当をしたバトラとファントムの2人が基地から少し離れた場所で待ち合わせをしていた。

2人とも脅威の回復力を見せたのか出撃は無茶だが遠出くらいは無茶でもなんでも無いくらいには回復していた。

慧の地獄が2日目に突入しているがそんな事は関係無いと邪魔しそうな片宮姉妹が今日の担当と言う事もあつてかこの日の内にあの時の無茶の契約を果たそうと言う事で2人は買い物へと出掛ける事になっていた。

10月と言う事で少し肌寒くなり、長袖が必要になる時期だ。

バトラはミリタリー系を思わせるデザインをした黒い薄手の上着に紺色の綿パンを合わせたラフな格好だ。胸ポケットには銀色の懐中時計が収まり、チエーンが飾り紐の様に肩に伸びている。

それに対してファントムは何時ものそんなに変わらない格好のまま来ている。強いて変化を探せば少し袖が伸びているくらいだろうか。

「……(あの……サラ曹長? 何時もの格好なんですが?)」

ファントムとのお出かけを察したサラが京香と共にバトラの格好

を私服風制服から私服のコーデに無理矢理に変えさせた訳だが、その説得にフアントムはしつかりとおしやれをして来ると言っており、まずは褒めろと言われていたがこれは無理があると心で叫ぶ。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでも。それよりも何処に行くんだ？」

「そうですね。冬物の服でも」

バトラとフアントムは2人だってショッピングモールへと歩み始めるが少し話したいからとフアントムの希望で徒歩で向かう。

「聞きました。私のドーターは貴方の機体を使ったニコイチ機体だと」

「らしいな。そのまま好きに使ってくれ。残った機体からも欲しいパーツがあれば持っていけ。もう必要無いものだ」

最後の言葉にフアントムが目を見開く。

バトラにとっての戦闘機とは商売道具で要らないと言う事は無いだろう。つまりはもう飛ばないと言う意味なのかと勘ぐったフアントムだが、バトラがそれを否定する。

「あれは元々はお古だな。1番機が戻って来た時に返すつもりで使っていたんだ。そんな機体なのにお前の盾にした。そして共喰いされたのに怒りが湧かなかった。それにな……1番機はもうこの世にいない。そして、お前に使われるならあいつも本望だろうさ」

フアントムがそうですかと納得した様に頷くと目的地へと着いており、フアントムとバトラは冬物の服を選んでは試着をしたりするがウィンドウショッピングのつもりなのか買う事はせずに色々な店を見て回るだけで特にこれといった物を買う事はせず。バトラの奢りで食事をしたりと過ごして、時刻は夕方を指していた。

「そうだ。ちよつと付き合っつて貰えるか？」

バトラが帰り道に買い物思い付いた様に帰路から外れてそれなりに大きな花屋へと寄り道をするると直ぐに帰って来る。

「一体何を？」

帰ってきたバトラの手には小さな紙切れが数枚だけと花屋から出て来たと言うには身軽だ。バトラは少し恥ずかしそうにしながら言

い淀み、海に行きたいと告げるとファントムは首を傾げるが付いて行くと言って、2人は砂浜にやって来た。

10月の海と言う事で薄手の格好をしたファントムが身体を一瞬だけ震わせるとバトラの上着が掛けられる。

「ありがとうございます」

「俺も少し考慮が欠けていたな」

そう言いながら上着のポケットに入れていたアンタレス隊のエンブレムが描かれた紙を取り出して、紙飛行機を作ると花屋で買った押し花を挟み、ライターで火を付けた後に素早く投げる。

紙飛行機は上手く投げられた事と潮風に乗って海へと飛んで行き、海上で完全に燃え尽きた灰が風に卷かれながら上空へと消えて行く。

「撃墜されて眠っていた時にな、夢を見たんだ。変えたくても変えられない過去の戦いと死んだ仲間が天国みたいな場所で待っていた夢だ」

それを聞いた瞬間にファントムがバトラに1歩近付くと同時にバトラがファントムの方に振り返る。その顔は哀しさと後悔に泣きながら、安堵と歓喜が混ざった笑みを浮かべる泣き笑いを浮かべていた。

「亡くなった人を想うのは美德だが、囚われてはいけない……聞きも言った覚えもあるが私は囚われていた様だ。でも……」

涙を振るい、ファントムに花が咲いた様な笑みを浮かべる。その笑顔には今までの様な憂いや哀愁を感じさせない純粹な笑み。

「それも昨日で終わり。残されたモノに向き合って失くしたモノを想い続けよう。囚われるのは……もう無しだ。さつきのはその為の儀式の様な物だ」

それを聞いた瞬間にファントムが微笑み、一緒に帰りましょうと言いながら、手を出す。

バトラは恥ずかしそうにはにかみながらファントムの手を取ると風が強く吹き、ファントムやバトラだけで無く、小松基地で外に出ていたベルクトさえも髪を抑える様な体勢になる。

『彼をお願いします』

風と共に何処から聞こえた聞いた事の無い女性の声にファントムとバトラが首を振る中で屋内で慧を尋問している詩苑と詩鞍は懐かしい声を聞いて、慧に気付かれない様に薄っすらと笑い、心で了解しましたと返答した。

海では風が拭き終わると同時にファントムがバトラに問い掛ける。

「なんの花だったんですか？」

「アサガオにオドントグロツサム、ガーベラとシオンにフウセンカズラ、そして……」

バトラの顔がサンフランシスコの方角に向けられる。

「あの人が……未来奈さんが一番好きだった……エーデルワイス」

アサガオの花言葉は儂い恋・固い絆・愛情。

オドントグロツサムの花言葉は特別な存在。

ガーベラの花言葉は希望・常に前進。

シオンの花言葉は君を忘れない。

フウセンカズラの花言葉は一緒に飛びたい。

そして、エーデルワイスの花言葉は勇気と……

大切な思い出。

作戦50 小松防衛戦から一ヶ月

ビロードの水面とそれ彩る白波が何とも言えない光景を生み出し、風が水飛沫を飛ばすと太陽が心得たと言わんばかりに陽光を投げて輝かせることで何とも幻想的な光景を生み出す。

〈ANTARES02は俺に続いて上昇!!〉

そんな幻想的な空間を音速に近い速度で駆け抜けるのはエイを鋭角にした形に海に溶け込む様な紺碧色の鉄の飛翔体。そして、その後ろに続くのはこの世のどの生物にも例えられない形状の汚れや黒などと言う物とは無縁だと思わせる程に純白な飛翔体だった。

そんな飛翔体が首を擡げると同時に背部から吹き出す超高温の空気に当てられた海水は一部が蒸発し、大部分は小さな水柱となった。生み出された2本の水柱が2つの飛翔体を投げ飛ばしたかの様に海面から引き剥がす。

そして飛翔体が浮かび上がり、鋭い切っ先が向く先には虹色に光る飛翔体が4機、悠然と飛んでいた。

この飛翔体はザイと呼ばれる存在でその名の意味は天災。どんな人類の叡智が結集しようともどうする事も出来ず、銃撃を与えればどうにかなると分かっている、その銃撃が当たらない為に振り下ろす害を天災と同じ様に受け入れるしか無かった忌々しき存在だった。

虹色の飛翔体、ザイは今日も獲物が来たかと舌舐めずりをするかの様にMの字を象った様な翼を翻す。

「スプラッシュダウン」

事は無く、まるで突如として現れた純白の飛翔体に驚く様に右往左往する様に翼を動かすと撃墜されたザイの一番近くを飛んでいたザイがやられた仲間の仇を討ってやると言わんばかりに機首を翻した瞬間の自分の身体に30mサイズの異物が突き刺さったのを感じた瞬間に身体から炎が吹き出し、持っていた爆弾に誘爆したのか木っ端微塵になると空に炎の花を咲かせる。

この段階になってザイは漸く空に浮かび上がる様に純白の飛翔体より目立つ紺碧の飛翔体と言う存在に気付く。

今までザイは見下ろす形で背景は紺碧色の海。そこに紺碧色の飛翔体が居れば見つけるのは困難だが、仲間1機の犠牲と共に高度を上げた飛翔体はザイにとっては見上げる形となり、背景は透き通る様な水色の空へと変わる。

これにより紺碧色と言う保護色を失った事で確認した2機のザイは紺碧色の飛翔体に狙いを定めて追撃に入るが、それを確認した紺碧色の飛翔体に乗る人物。バトラは勝ったと言わんばかりに頬を釣り上げた。

〈へそこです！〉

雲の中から飛び出した純白の飛翔体を駆るANTARES02とベルクトが追い継ぎするザイの1機を撃破する。

視覚からもレーダーからも消えていた事を仲間の撃墜で悟ったもう片方のザイがベルクトの機体を追い掛けようとした瞬間に機首が銃弾により砕ける様に折れた事で海面へと乱回転しながら墜ちて行く。

バトラはベルクトの横を飛ぶと右手を掲げてガッツポーズをする。別のザイを見つけたのか翼を翻して飛んで行く。

ベルクトもそれを見て雲の中を突っ切る様に飛ぶルートでバトラの後を追う。

次のザイは2機編成だったらしく、突き上げる様な軌道で迫るバトラの機体をレーダーにも視覚でも掴み損ねたのか、初撃で1機を撃墜される。

バトラの操る機体の名はIell-44 AJZ ウプイリ。

ロシアの空母に乗せる予定だったステルス艦載機だった機体を改造された特殊機だ。

高い性能を誇ると同時にピーキーな性能でもある為に個人主義が大きい民間軍事会社などの環境でないと輝けなかった機体だ。

そんなステルス戦闘機に塗装と言う視覚的なステルスも掛けた事で低空からの攻撃には高い隠密性を誇る機体となった。更に一部の状況を除いた無線・電波封止によりステルス性を強化している。

無論ながら無線・電波封止していてもベルクトの駆るSu-47

ANM ベルクトはステルス戦闘機では無い為に超低空から高高度に上がれば当然ながら見つかる。

事実としてザイはバトラよりもベルクトの存在に気付いている。

「奴さん散発的に機体を寄越しているな」

ザイの対応は突如として味方の勢力圏に敵は転移して来た、もしくは奇襲を仕掛けられた際に組織的な迎撃が出来ないと言う状況だった。

事実として朝鮮半島近海に進出したバトラ達は徹底した超低空飛行と無線・電波封止によりザイに対して奇襲を掛けていた。

それは戦争では基本でこそある戦術だが、ザイと言う超常の存在が相手であるが故に出来なかった戦術。だが、それが実行出来る状況となった事でやらない事は無いと実行していた。

新たに目視でザイを2機を確認したバトラが頷いた。

「蹴散らすぞ」

口を動かすと同時にこの作戦の為に作ったオリジナルの手信号を送って簡単な意思疎通を済ませる。

普通ならドーターや対ザイ用に改造された戦闘機は装甲キャノピーを持つ為に意思疎通出来ず、装甲キャノピーを開ければただの間はザイのEPCMにより五感に多大な障害を受ける事になるがごく僅かならば問題は無い為に手信号を送る時だけキャノピーを開いて、終われば直ぐに閉じて戦闘態勢に移行させる。

バトラの機体の装甲キャノピーは車の窓などに使われる引き上げ式に頂点で接続される形である為に出来た方法だった。

翼端灯の光信号も案に出たが、光信号が読めるのがバトラとファントムしかパイロット内では居なかったので見送られた。

首を搔つ切る様な仕草に上を指した動作にベルクトも手を振ってOKのサインを送る。

互いにパイロットと言う目のいい存在なので多少の細かい動きは視認できる。

今のバトラとベルクトならこれだけでそれなりの連携は出来る。手信号のみでの連絡しか出来ない状況でも連携を取れる様にする為

に無線を使わずに仮想でも訓練を積んだからだ。

まずはベルクトが雲から飛び出して機銃を浴びせようとするがレーザーで気付いていたザイは既に回避機動を取っていた事もあって空振りに終わるが回避した先にはレーザー誘導式ミサイルを2発も立て続けに発射したバトラの機体の正面と言うキルゾーンだった。

ザイはHiMATと言う人間の限界を超えるGを与える機動で回避を試みるがMiMATが終わった瞬間を狙ったバトラの巧みなミサイル誘導技術により敢え無く撃墜された。

「次は」

何処だと呟く声はキャノピー越しにも聞こえた爆発音と全天周カメラからもたらされた映像に浮かぶ黒いキノコ雲が2つ連なる様に立ち上がっていた。

〈〈FOBの破壊を確認しました〉〉

〈〈よし!! 長居は無用! 三十六計逃げるに如かず!〉〉

その通信と共にバトラはキノコ雲の立ち上る方向に機首を向けて飛ぶと前方から飛行機雲を引きながら2機の白と黒のA-10Aサンダーボルト2が逃げる様に近付いて来る。

〈〈待って下さい! 私達はA-10Aなんですよ!!〉〉

〈〈A-10と他の機体では速力の差があり過ぎます!!〉〉

散発的に現れるザイをバトラとベルクトが排除しながら朝鮮半島近海から脱出し、自軍勢力圏へと逃げ帰ると自分達の編隊と並んで巨大な4発輸送機、C-17 グローブマスターを守る様な編隊を組みながら合流したのは彗・グリペンが操る真紅のJAS39D-ANMグリペンとファントムが操る翡翠色のRF-4EJTP-ANMファントム3とイーグルの操る山吹色のF-15J-ANMイーグルの4機だった。

この2つの部隊が行ったのは今までやりたくても様々な問題から出来なかったザイのFOBに対する直接打撃だ。

過去に米軍と協力して朝鮮半島に進出してザイを倒すと言う作戦は行なったが、大勢で朝鮮半島に押し寄せれば当然ながら組織的な迎撃を受ける。ならば少数精鋭ならという話が出るが今度は防御力の

高い基地を破壊するには火力不足に陥る。

〈C―17は勿論だが、A―10Aの搭載能力も圧巻だな〉

ならば強力な爆弾を運べる輸送機か攻撃機を護衛して叩き落せば良い。

正規軍は輸送機にGBU―43/Bと言う通常爆弾最強を搭載して投下、PMCはテロリストから鹵獲できたトリニティと言う巡航ミサイルにも搭載可能な高性能固形爆弾を使用する。

前者は単縦な高性能爆薬故に巨大かつ重量がある。後者は一回り大きな巡航ミサイル程だが、火薬の比重は重く基地破壊するには投下型で対艦ミサイル4発以上5発未満、巡航ミサイルなら対艦ミサイル5発分と重く、空力の関係で胴体中央にしか載せられない。かと言って通常の機体では重量に耐えられない。

独飛のドーターでも空力と強度の問題で載せられなかったはMS社はエンジンさえ強化すれば片宮姉妹のA―10Aに搭載可能である事がわかり、エンジンを交換して投資している。それでも威力不足故に完全破壊には2発を要する。

無論ながら破壊出来る武器があらうと命中しなければ意味がない。が、その問題も解決済だった。

〈よし！今日は2つも破壊出来た！グリペンの記憶に感謝だな〉

大軍も駄目、少数も駄目と言う雁字搦めだった日本だが、一月前にグリペンの前世とも言える記憶を思い出すと言うブレイクスルーにより敵の行動や戦術がわかったのだ。

グリペンは何度も時間遡行を行なってザイを過去へ過去へ送り、数千年単位で解放される時限式封印を己の命と引き換えにザイへ掛け続けていた存在だった。

そしてザイが現れる度にグリペンも蘇っていた。今回の対ザイ戦では今までの延命治療では無く、根本的な解決の為に動き始めた時代でもあり、様々な不確定要素も多く、グリペンはこの世界は今までとは何処か違う異世界では無いかと言い始めたのはバトラの記憶に新しい。

テストで言うカンニングに近い事が出来たお陰で準備が出来次第
解決可能な物から実行に移していた。

〈〈そうですね……〉〉

何処か不満気なフロントムからの通信にバトラが首を傾げながら
聞き返した瞬間にフロントムの怒号が響いた。

〈何だ？ じゃないですよ！ 何ですかこの機体は！ 低速での機
動性が化け物ですよ!!〉

フロントムのドーターだが、とある作戦で大きな損傷を受けたフ
ントムとバトラのRF-4をニコイチした機体となっていた。

今まではRF-4EJに機動性と対サイ用の電子系に絞った改造
を施されただけだった。

見た目はRF-4EJの機動性強化の為に尾翼の3枚は形状変更
を行い、舵面を強化。垂直尾翼の上端と根元、後方レーダーは強化さ
れた電子機器を詰めた事で原型機よりも肥大化。更に機首も原型機
に比べれば変更点があり、電子機器の強化で延長されたコーンに装甲
キヤノピーから生えた様な板状のセンサーユニットが目立つ。

主翼形状は然程の変化が無かったが、悪化したバランスを取る為に
主翼の折り畳み機構を作動させたフロントムの過去を鑑みて垂直安
定板が追加され、エンジンも大幅に強化されたものを搭載すると同時
にノズル周りには他のドーターにも使用されているチューリップ状
のフェアリングを追加した事で推力偏向を起こして高機動を実現し
ている。

此処までが大規模改修を受ける前のRF-4EJ ANM フ
ントムIIの姿で、此処からバトラのRF-4TP-AZJ フアント
ムIIとニコイチした事で大規模改修を受けたフロントムのRF-4
EJTP-ANM フアントムIIIの姿を解説しよう。

スタビレーターウィングレットを肥大化させた以外は特に変更
点は無いが、主翼はウィングレットの追加に垂直安定板を稼働型に変
更と同時に肥大化させる事で機動性を大幅に強化し、主翼そのもの
強化すると同時に胴体下部も強化した事で対艦ミサイルを主翼に4
発、胴体に1発が積める様にもなった。

胴体とエアインタークによって作られた上部の凹凸部にはバトラのRF-4から授かった空力重視の小型コンフォーマル・フォーエール・タンクかバトラのRF-4から剥ぎ取った電子機器を収めたユニットを追加搭載を可能にした事で継戦能力が作戦能力の強化に成功。

機首も更に延長して電子機器の追加搭載に加えて30mm機関砲の搭載を諦めた代わりに側面部にわずかな曲線を描いた装甲で空洞を作られたバトラのF-4の機首を混ぜた事で20mm機関砲の傾向弾数増加に成功。

機首部のエアインタークはバトラのRF-4の物に交換した事でミサイルを2発を追加搭載可能にし、胴体下部にもバトラのRF-4にとつてはオプション装備だったコンフォーマル・フォーエル・タンクを標準装備に変えた事でミサイル携行数を4発から8発に変更と同時に航続距離の増加に成功し、エアインターク側面にはカナード翼を追加した事で機動性などが向上した。

外見的に大きく変わった事で八代通からはRF-4EJ-ANMにF-462-12200号機を足してコンフォーマル・フォーエル・タンクを上下左右に足した感じだと告げられた。

そして、まだこれに主翼根元ならコンフォーマル・フォーエル・タンクなら追加可能な余力を残しているのだから驚きだ。

と言うのもバトラの中では壊れなければ長距離索敵攻撃が行える戦闘偵察攻撃機にする予定だったのだから航続距離に限ればまだ増やせる余力はある。

まあ、MS社の魔改造技術の裏打ちがあつてのこそその余力だ。

へへでも、役に立つだろ？ 俺と未来奈さんのF-4はへへ

へへそうですね。ちゃんと愛されていた。と言うのはダイレクトリニックした瞬間にわかりましたよへへ

そして、RF-4TP-AJZ ファントムIIはRF-4TP-AZJ ファントムIIと混じった事でそれなり以上の航続距離を有すると同時に高火力を実現した電子戦闘偵察攻撃機へと昇華しており、ファントムIIの皮を被った別のファントムと言う意味で名前がRF

―4EJTP―ANM フアントムⅢとなっている。

〈でも私がい切れなかったら意味が無いんですよ?〉

のだが、乗っているフアントムがアニメと言う特殊な存在であるにも関わらず、バトラのカウンターマニューバ優先の改造をした機体の設計思想やパーツを足した事で高G状況や低速での機動性が大幅に向上した事でフアントム自身がついて来れていなかった。

と言うのもアニメとは元となった戦闘機を擬人化させた存在とも言える訳で、アニメの限界はドーターの限界なのだが、低速での機動性と言う点ではフアントムの元となった機体RF―4EJにバトラのRF―4TPを組み合わせた事で限界突破をしまっていたと言うのが現状である。

バトラがカウンターマニューバを得意とするパイロット故に低速での機動性は生命線とも言える故に致し方ないのだが、バトラ本人もフアントムからこの文句を聞くまで機体の限界を超えた性能だったとは知らなかった、と言うよりも出来ているから限界内なのだと勝手に思い込んでいた。

〈一ヶ月過ぎても慣れないか……難儀だな〉

〈他人事みたいに……〉

〈だって他人事だから〉

〈……〉

バトラの通信機からブチツと音を発して通信が切れた瞬間にバトラの首筋に蜘蛛が這う様な感触を受けた。その瞬間にバトラのIbel―44の計基盤がロックオン警告を警告音と共に表示する。

〈うおい!!〉

完全に真横に居たバトラだが、バトラのRF―4TPには視界と反応して動くオフボアサイトの機能が搭載されており、フアントムのRF―4EJには無かった機能故に一部をアニメ用に改造し直して搭載された事で真横にいる敵にもロックオン出来る様になっていた。

バトラはコブラ機動でフアントムのロックオンを振り切ると同じくオフボアサイト機能を利用してフアントムにロックオンし返すがフアントムも機体性能のお陰でキレが増したカウンターマニューバ

で振り切るとバトラもその動きに合わせてカウンターマニュアルを繰り出す。

〈BARBIE03、ANTARES01！ 喧嘩はするならシミュレーターでやれ！ 燃料の無駄だ！〉

バーフォードから叱責された事で互いに機動をやめて編隊に戻ると2人同時に謝るとバーフォードは分かればいいと通信を切る。

「戦術的勝利は納めているが……」

「戦略的勝利は無しです」

バーフォードが背もたれにもたれ掛かってAWACSの天井を見ながら呟いた言葉にグレアムが答える。

確かにFOBを潰す事は戦術的に間違いでは無く、正解の行動なのは間違いと言えるが戦略的に間違いを人類規模で行なっている以上はこの戦争を終結させるには決定力不足は否めない。

「いつに」

なれば戦争は終わるのだろうか。と言う言葉は飲み込んだ。

今はグリペンの記憶と言う起死回生の一手となり得るジョーカーを手に入れたのだ。

「この戦争がポーカーである事を祈るだけだな」

ジョーカーはゲーム次第で最強の手になれば、最悪のカードにもなり得るカードだ。

「兎に角今は」

愛する者の為にも対処療法にしかない自分達の行為でも起死回生の一手を実行するまでは耐えるしかないとバーフォードは決意を新たにした。

指揮官が最初に潰れる訳にはいかないだろうと言う責任感すらも滲ませて。

作戦51 予備機選定と恋する乙女

「うーん」

小松基地のMS社に与えられた一角でバトラが項垂れていた。

彼の前には様々な角度で取られた数々の戦闘機達の写真が散らばっており、ゴミ箱にはそれ以上の数の戦闘機の写真が突っ込まれていた。

「まだ迷っているんですか？」

そう言つて1枚の写真をベルクトが無造作に選んで掴む。

「Mig-21ですか」

ベルクトが意外そうであると同時に懐かしそうにその写真を見つめる。

ベルクトはMig-21bisを使用する凶鳥フツケバインの僚機を勤めた事があり、その経験があったからか発展途上だったベルクトの機動はこの1ヶ月で鋭さが増し、正式にアンタレス隊の2番機に着任している。

無論ながら2番機就任には片宮姉妹からの直談判が有ったがバーフォードとバトラ本人が1番機であるバトラの近くに置いておかなければまだ不安が残るレベルであるからだと説明すると片宮姉妹はベルクトを案ずる気持ち半分とベルクトよりも信頼されていると言ふ思い半分で素直に引き下がった。

「ベルクトか……」

項垂れていた顔を起こしてバトラがベルクトを見つめる。

それは何処か過去を思い出す様な目だったが、ベルクトとしては想い人に見つめられていると思つたのか、薄っすらと赤くして恥ずかしかる様に目を逸らして身体を左右に小刻みに揺らす。

バトラは肌が雪の様に白いので赤が異様に浮き上がって見えるベルクトの顔とその仕草を見て、かつての僚機だったサーシャの事を連想してしまう。

バトラがベルクトを2番機に指定したのは実力不足もあるが簡単に言うとうとサーシャに対する謝罪の気持ち、後ろめたい気持ちとでも言

うべきだろう感情もあつたからだつた。

アンタレス隊の復活と1番機への着任はバトラなりの過去の清算や区切り、ケジメの様な物だが、何処かで自分の行いに対する自分に対する慰めの様な物でもあり、サーシャと外見的にも内面的にも似たベルクトを誰よりも側に置くと言う事はその自慰行為の1つでもあつた。

「意外です」

「意外？」

ベルクトが写真をバトラに返しながら告げた言葉にバトラも意外な言葉に疑問と驚愕を混ぜた表情で聞き返すとベルクトが頷いてから言葉を紡いだ。

「てつきり新型機か特別機、特殊機や特注機ばかり買うのかと」

決してバトラが搭乗機を買う場合は他人から見ればゲテモノやヘンタイと言われ、良い言い方をすれば癖が強い機体ばかりだが、新人時代は至って普通の機体だった訳だが、偶然にも特殊な機体に乗った時にアンタレス隊最初の1番機である未来奈が特殊な機体の方がバトラの才能に会うと気付いた事で特殊な機体に改造した未来奈の後部座席に座らせ続けた経験からか、通常機よりも特殊機の方がバトラが乗りこなせる。

それがわかつている戦闘機ディーラー達は倉庫で埃を被っている癖のある機体を事あるごとに勧めてくる。

それが大抵の場合は不採用を喰らって開発費だけでも回収しようとPMCに流された新型機や検証や実験で作られた機体を解体する金もつたないから売り出された特別機や特殊機。PMCエースの為に製造された機体のレプリカなどでベルクトが誤解するには充分な事実関係が出来ている。

「よく誤解されるんだよ」

と、バトラが頭を掻きながら愚痴る。

バトラは気に入った機体や好きな機体に乗るタイプだ。故に普通の機体も乗る時は乗る。

今はベルクトのS u | 47の中に僅かに残るS u | 33のパーツ

は中々外に出ない正規品パーツが贅沢に使われていたと言う点以外は至って普通のSu-33のAJZ戦闘機だった。

「まあ、その誤解も一部は当たっているが……な」

ベルクトの取ったMiG-21も好きだから写真に資料を要求した訳だが、このMiG-21bisの資料を見てクソ嵌められたと頭を抱えた記憶がバトラにあった。

ベルクトもそんな資料を見て表情が凍り付いた。

「搭載エンジンがAL-31って空中分解起こしませんか？」

「機体強度は改良済み。それよりも搭載エンジンの備考を読んでみる」

此処だよとバトラが資料の一部を叩くとまたもやベルクトの表情が凍り付いた。

そこには新型小型固形燃料使用型ロケットエンジン2基搭載の文字があり、嘘だと言って下さいと言わんばかりにバトラに目を向けると真後ろの写真がバトラは見せる。

その写真にはエンジンを挟む様に小さな穴が2つあった。

「MiG-21bisじゃなくて、MiG-21bis Ye-50 bisですよね？」

「そう思った。レーダーも搭載武装も現行の物でその為に各種サイズや形状が変わっているからMiG-22だな」

「MiG-21から23ですからね。確かにそうとも言えますけど……単発大型戦闘機のサイズですよ」

「3発複合機だな」

乗りませんよね。とベルクトが心配そうな顔で告げるとバトラはベルクトのデコを叩きながらロケット戦闘機なんて言う危険な物は払い下げだと告げる。

「また新しい機体ですか」

そしてバトラの元に詩苑が現れると1枚の写真を見て懐かしそうでありながら嫌な事を思い出した様な表情を浮かべる。

「F-14ですか。懐かしいですね。詩鞍と乗ろうとしてあまりの機動性に目を回しましたね……あれから高機動機には乗りたく無いで

す」

「F―14は大型重戦闘機だからそこまで無い……ああ、2人ともキヤパが少なかつたな」

兄様にはわからないでしょうけどと言う台詞と共に詩鞍が現れるとバトラが何をしに來たと問えば、マイケルが機体選びでバトラが困っているから嘲笑いに行けと言われたと告げる詩鞍。

「携帯くれ」

バトラの言葉にベルクトがつい最近になって契約したスマートフォンを渡すとバトラは礼を言ってからマイケルに電話を掛ける。

〈ベルクトですか？ なんですか？〉

〈オオエヲコロス〉

マイケルが小松市内でえ？ みたいな顔をしているがバトラは電話を切ってベルクトに返すと詩鞍がある写真を見つける。

「Suの……なんででしょう？」

写真は現行のスホーイ社製の機体だった。スホーイ社の機体は形状で見極めるのは難しい。

「37だよ。強度以外は弄ってないらしい」

「そうですか……でも、今の戦況でSu―37は……」

大型戦闘機のSu―37は継戦能力や搭載力は大きい機体であると同時に最も扱い易い機体ではあるが、ザイとの空戦を考えると性能不足が否めない機体だった。

詩鞍がそれを言おうか言わないか迷っているとバトラは把握していると云って詩鞍から写真をつまみ取るとゴミ箱へと捨てる。

「？ 見た事のない機体ですね。YF―23？」

のっぺりとした機体にデルタ翼を改造した様な翼に斜めに建てられた尾翼が垂直尾翼と水平尾翼を兼務する特殊な形状は一度見れば早々に忘れるものではない印象を与える。

「F―22の競合機だな。F―22は何処にも卸さなかつた時期はこつちが出回ったよ。今は普通にエンジンやら何やらを変えた輸出モデルの改造品がPMCでザイを叩き落としまくってるよ」

F―22のロールアウト後に判明した高性能ぶりに大手PMCは

自社のエースパイロット用に求めたが、性能が漏れる事を懸念した米国は売却を断ったが、ヴァラヒアやゴールデンアックス事件以降はPMCの戦力が正規軍の一部に食い込まれるを得なかったがそれだけの信用と規模を持つPMCは依頼を受けると足元を見たのかF-22の購入を打診し、米国も粘りに粘って輸出仕様のモンキーモデルで手を打って貰った経緯があるが、金と技術力のあるPMCにそんなモンキーモデルを送れば改造されるのは目に見えており、中には米国がF-22の強化の為に仕様の細かい所の提出を求める程の物が転がっている事もある。

特にエースを抱える程の一部のPMC、特にメビウス隊の隊長と異能生命体以外のメビウス隊員の駆るF-22メビウス隊仕様機は再三に渡って要求される程であるが、送られて来るのはメビウス隊異能生命体仕様機である。

「それもいい機体なんだが、弾が載せられないんだ」

YF-23は試験機段階ではウエポンベイが設けられておらず、選考落ちしてからPMC向けに設計し直した急造品に近い機体で、F-22よりも高出力だが、ミサイルなどの搭載能力に難がある機体だった。そうなれば、もっと魅力的な機体も存在する。

「YF-23を選ぶならこっちを選ぶな」

そう言うて見せたのはF-3B 震電Ⅱだった。

F-3BはSTOVL機能を持った艦載機だが、バトラは垂直離陸や対空機能は魅力に感じるが、最高速度や航続距離に不安と不満があった。

これは日本国政府のバトラの部隊を離したくないと言う思惑があるからこそその話でA型は手に入るのかと資料を渡した政府高官が一瞬だけ気まずそうな雰囲気をした後に自分にはわからないと言った過去があつてからバトラの中で失望感が渦巻いた。

と言うのもA型は航空自衛隊が運用予定の機体でF-3のモデルの中で最も空中性能が高い機体となっている。

日本としては万が一でも敵対して使われる事を考えると航空自衛隊が有利に働くB型に乗って欲しいと言う思惑を感じ取り、最悪はこ

れ程度の認識にバトラは留めている。

「バトラさん。少し宜しいでしょうか？」

「？ なんだ？」

フアントムに呼ばれたバトラは3人に断りを入れてから席を立つて廊下に立っていたフアントムに近づく。

断りを入れられた3人はバトラとのコミュニケーションを取られた事に恨めしそうな視線をバトラの背中越しに送り付けるがフアントムは真剣な眼差しでバトラに付いてきて欲しいと身振りで示すとバトラは心当たりがあるのかついて行く。

「突然に申し訳無いですね。新しい機体で迷っているのは重々承知ですが、どうしてもお尋ねしたい事がありました」

人気のない場所に連れて来られたバトラだが、フアントムのいつにない真剣な言葉に無意識に地上のシナプスから空中のシナプスに切り替わる。

「カザフスタンの飛行機損失事故についてか？」

バトラの言葉にフアントムは話が早いと満足げに頷く。

「クラッキングハッキングだな。最近では八代通が忙しそうと言うか落ち着きが無い、働き詰めだとバーフォードが言っていたが」

「カザフスタンの件で何か聞いていますか？」

フアントムの発言にバトラは首を振る。

「いや、俺は一兵曹だからこう言う問題の情報はそうそう貰えない。ただ、報道されない内容を少し教わる程だ」

バトラはMS社のエースであるが、情報面に関してはそこまで優遇されていない。

無論ながら隊長という人を率いる立場であるが故に余程の内容で無ければ得られるがこんな事があるから注意しろ程度だ。

「では、何処まで知っていますか」

「そこまでだ」

今回の事件はカザフスタンの一部空域を飛ぶ航空機が消息を絶っている事と墜落と断じるにはトラブル報告や緊急事態を伝える通信も無い状況に残骸すら無いからカザフスタン近辺を飛ぶ場合は充分

に注意する事とカザフスタンに派遣された部隊は一時的だが、飛行を中止しろと言う上層部の命令がある程度だった。

「やはり、隠している様子は？」

「バーフォードなら何か知っているだろうが……通信を掛けた時は多分、情報部も掴み切れていないという雰囲気を感じられたな」

フアントムは思った様な収穫がなかった事に表情を暗くする。

「今回のコレは多分だが、ザイが関わっていると思う。出なきや、航空機が消えるなんてありえない」

「それはわかっています。ですが、グリペンはこんな事は無かったと」それを言われるとますます不安になるバトラと自分で言った言葉で自分が不安になるフアントムだが、バトラがフアントムの頭に手を置く。

「何があるか考えるのは上役の仕事。何があるかわかって対策を考えるのは俺やお前の居る中間職の仕事。中間職のやりたい事をやらせるのも上役の仕事。そしてやるべき事が定まったら成功させるのが俺たち現場職の仕事だ。深く考え過ぎるなよ」

フアントムはその言葉に軽率過ぎると漏らす、訳がわからない状況であらうとわからないならただあるがままに受け入れるバトラの考え方に少しだけ不安が紛れるのをフアントムは感じ取った。

「(貴方が少し考えているようで考えていない、考えていないようで考えているからこそ私が考え過ぎるんですよ?)」

話は終わったなら後継機選定に戻ると言って歩き去るバトラの背にフアントムはわかっているんですか? と説いたげな視線を送る。

相棒役は互いに同じであるのが良いと言う人物もいるが、互いにない場所や正反対な場所があった方が良いというのがフアントムの考え方だ。

「御自分ではわかっていないと思いますが、貴方は私にとっても必要な存在なんです? わかっているんでしょうか?」

互いに互いを埋め合い、同じ所は2倍以上に発揮する。それがロツテであり、バディでもある。

フアントムはバトラと互いに翼を並べて飛び戦い、肩を並べて戦っ

たからこそ新たに芽生えた……否、強くなった感情。

無論ながら全人類を守ると言う存在意義を捨てた訳では無い。だが、守った人類の中にバトラと言う存在がいて欲しい。それも自分の隣で、出来る事なら自分の前で。

一月前に彼を自分の機体に乗せた時から強くなったこの感情をフロントムはカザフスタンの一件の不安から遠ざける為に愛しく思う事にする。

ベルクトは誰が好きになるとそれ以外は考えられなくなって安心するとは言っていた事を思い出して1人でベルクトの言葉に納得する。

「出来る事なら……少し我儘を言えるなら……」

予備機なんて用意せずに自分に乗って欲しい。そんな事を思うが口には出さない。

バトラが予備機を用意すると言う事は自分達にとってもプラスになる。

詩苑や詩鞍、ベルクトよりもバトラ争奪戦でリードしたいと言う下心もあるが、自分以上に自分の機体を操れるパイロットが乗ってくると言うのは戦闘機でもあるフロントムからすれば心強いの一言だ。

彼の機体を混ぜた機体を使っているからこそわかった彼の腕の良さに頼もしさを覚え、同時にそんな機体を使っているからこそ思ってしまう。

彼を近くに感じる感覚と生声で話せない事と目に見えない場所に居られるというギャップによる違和感を……

「もう一度……私に乗って欲しい……」

「丁度良かった」

人差し指を唇に付けて無意識に紡いだ言葉の内容を理解したのは、いつの間にやら戻って来ていたバトラの声を聞いた直後だった。

ブリキ製の玩具の様に首を声をした方向に向けたフロントムにバトラが忘れていたのを申し訳なさそうに頭を伏せながら二の句を紡いだ。

「ベトナムまで乗せてくれ。操縦はするから」

沈黙は肯定と受け取ったのかバトラは顔を伏せていた事でファントムの異常に気付かずにはいると残すとベトナムへ飛ぶ為の準備をしていないのか小走りで行く。

ファントムはまさかの本人に聞かれてしまった事に気付いて、顔を真っ赤にしながら口を酸欠の金魚の如くパクパクと開閉させていただけで、乗せてくれと言葉を聞いておらず、格納庫で自分の機体の前席にバトラが乗っていた事に気付くが時間がない為に何も言わずに逃げる様に後席に座る結果となってしまう。

恋する乙女特有の症状を発症させた少女を装甲キャノピーコックピットと言う密室に閉じ込めたファントムⅡはバトラに操縦桿を握られて小松基地から飛びたった。

作戦52 ベトナムへ

「何を拗ねている」

通信機からは八代通が未成年だらけのベトナム行きメンバーだとわかっているのに、ベトナムの簡易的な歴史と食べ物に合う酒の話をしているのを横目にバトラが後席が見えるバックミラーに目を向けながら、後席に座るファントムに声を掛ける。

「知りません！ 話しかけないで下さい。次に話し掛けたら前席だけベイルアウトしますよ」

バトラはファントムの拗ねた一言を聞いて『おお、怖い怖い』とおくびにも思っていない言葉を吐きながら視線を前へ向ける。

ファントムは拗ねて右横の景色を見てから、現在地と目的地のベトナムまでの距離を調べる。

後席用のディスプレイにはベトナムの地形が映り、もう既に近海の中頃まで来ている事を知った瞬間。

「ベイルアウトさせてもバトラさんなら辿りつけそうですね」

「マジヤメテ!!」

実際にバトラもこの距離からなら何のトラブルが無ければ辿り着ける距離だと思ったからこそ本気で辞めて欲しくなり、機体を小刻みに左右に揺らす。

バトラはここまでファントムを拗ねらせたのも、ファントムが何気無しに聞いた乗せてくれと言う理由が、ベトナムに予備機候補達が駐機しているので試乗して選び、そのままそこで買うつもりだからだ。

無論ながら購入すれば小松までの輸送費が掛かるがこのご時世だと海運ではザイに沈められかならず、可能な限りの陸運も朝鮮半島が陥落まじかであればベトナムから海運した場合と危険度は変わらない。

だったら、自分が操縦して戻った方が良いと言う考えだった。

ただしAJZでもドーターでも無いので逃げるしか出来ない。故に護衛と称してベルクトとファントム、グリペンが同行するベトナム行きは渡りに舟だった。

「全く、私は都合のいい足ですか」

フロントムの拗ねた様な言葉に苦笑いしか浮かべられないバトラだが、なにかを思いついたのか、フロントムに聞かれる事を知った上でベルクトにプライベート回線を送る。

〈何でしょう？〉

〈ベルクト。すまんがフロントムに通信して低速機動の講習を受けるか聞いてくれないか？〉

まさかの通信にベルクトは内心ではご自分で言えばいいじゃないですかと思いつつも通信をアニマ間のデータリンクを使って繋げる。

〈聴こえていますよ！〉

フロントムからは苛立ちげな声で返されしまったベルクトが通信先でひゅつと声を上げるとフロントムは通信を切つて、前のバトラに話し掛ける。

「この程度であいこだと思わないで下さいね！」

「わかってるよ」

「ええ、わかってくれないと困ります！ 早くこの機体を使い来なさいといけないんですからね！」

バトラはフロントムの言葉を聞きながら通信で一次先行する事を告げてから機体を加速させるとスロットルを絞ると同時にエアブレーキを展開して減速。

最も機動性が高くなる速度域になった瞬間を狙ったコブラ機動と言うにはそこまで上げない機首上げで機体全体を使った空中停止にも思える機動。

無論ながらこれくらいはフロントムでも出来る機動だが、その先に行くのが歴戦のパイロットたるバトラの機動だ。

機体が空中で静止したと錯覚した瞬間には偏向ノズルを操作、腹を基点に機体を回して横向きに向けるとスロットルを操作を行う事で回し蹴りを放つ様な軌跡を描いて360度ターンを繰り返した。

「っ！ なんて機動を！」

初っ端から始まった無茶な機動にフロントムは耐えながらも必死にその体感を覚えようと脳細胞をフル回転させる。

アニメのダイレクトリンクによる操縦は言っちゃしまえば想像で動かすと言って良い物で頭の中にビジョンを完成させた上で、機体限界を超えない限りの機動ならば直ぐに出来る。

バトラはRF-4EJTP-ANM ファントムⅢの限界に近い機動を行うと続けてコブラ機動からのハンマーヘッド、そしてコブラ機動からスロットル操作とカウンターマニューバを披露する。

その後は機体限界を見切ったバトラによるイメージで作り上げた敵機を追うイメージトレーニングを実機で行う様な機動を披露するとそれを見ていたグリペンが呟く。

「あんな低速度である機動性は可笑しい。変態」
「スゲー」

抑揚の無い声で紡がれた言葉に慧も絶句する。

確かにバトラの機体特性を付与したファントムのRF-4EJTPは低速機動性が飛躍的に上がったが、偏向ノズルの多機能化と高性能化、動翼面の増加と強化と合わせり、その機動性は第一次世界大戦の機動性の悪い複葉戦闘機並みと言う今のジェット戦闘機ならおおよそ考えられない機動性を披露していた。

「？ 中のファントム大丈夫か？」

複葉戦闘機の機動性を知らない慧だが、流石にあの機動がF-4と言う機種種の限界を超えている事だけはわかった。

アニメが戦闘機そのものと言うならそれを超える機動をすると言う事はファントムの限界を超えるとと言う事であり、流石の慧も心配にもなる。

「多分だけど、バトラのRF-4を混ぜているから大丈夫……だと思っ」

嫌な間があったが、一通りの機動を終えたバトラとファントムの乗るRF-4EJTPが隊列に戻った瞬間にベトナムの陸地が見える。

インドシナ半島の汀、北緯十一度五十九分東経百九度十三分、小松から飛行機の速度で6時間の距離にあるベトナム社会主義共和国カインホア省カムラン国際空港。

カムラン国際空港に普段の機体とはかけ離れた機体が3機も降り

て来ようと特に慌てた様子はなかった。と言うのもカムラン国際空港の出で立ちとベトナム政府のしたたかさあってこそその出来事だった。

ベトナム戦争時は米軍の基地で冷戦ではソビエト政府が使用した敷地を殆どそのまま使っているカムラン国際空港は今だに冷戦の残りが至る所に残り、ベトナム政府の各国軍隊を平等に受け入れると言う外交スタンスにより、大なり小なり軍用機が少なくない数が訪れる。

対ザイ戦争があつてからはPMCにとつてはベトナムと言う国は西側・東側製造の機体を関係無く受け取れる数少ない場所であると同時に制約少なく寄港出来る場所となり、各社がベトナム防衛の為に二線・三線級ではあるが数多くの部隊を自社の物資防衛を建前に部隊を常在させている。

そしてバトラの所属するMS社も部隊を置いているが、バトラが此処に来たのは予備機体の購入以外にも、カザフスタンの一件で各国が話し合う為の会談場所がベトナムであり、実働部隊同士の顔合わせも兼ねていた。

「此処から車移動だが……着替えの時間は？」

「ある訳ないでしょう」

グレアムの言葉にバトラはだろろうなと返す。

実は一向の行く手に気流の乱れが現れた事で否応無く避けた所為で時間を余計に食っていた関係で会談相手との時間が迫っていた。具体的にはフライト直後の着替えをする時間もギリギリな時間だった。

「車移動でも構いませんが、着替えのスペースくらい準備してくださいませんか。6時間のフライトの見返りが公開ストリップではあまりにも報われません」

異様な量の汗で濡れた髪を後ろに流しながら、眉根を寄せる苛立たしい表情の八代通に歩み寄るファントムだが、八代通がバンドだから車で着替えると言つて車のキーを投げ渡して直ぐにある方向を指差す。

「なにが」

フロントムの言葉が止まった。

2人の視界には汗で脱げなかったであろうマイケルの服を掴んで天に掲げるバトラと自慢に両膝と両肘を付いて悔しがるマイケルが居た。

何故にこんな光景が出来上がっているか簡単に説明しよう。

着替えないと不味い？

会談なんだからせめて清潔な身嗜みしてください。

着替えるか（バトラ・マイケル野郎2人による公開ストリップ）

バトラが汗で脱げないとか言ってマイケルに脱ぐのを手伝って貰う。

バトラ、脱げない様に首を上げるイタズラする。

笑いながら謝るバトラにマイケルも仕返しで同じ事をする。

バトラはパワーで服を剥ぎ取る。

野郎2人の上半身が衆目の目に晒される↑イマココ

因みに周りの整備員達はグレアムの公開ストリップと言う言葉に血走った目をしていたが野郎2人の鍛えられた腹筋を見えた瞬間に萎えたのか作業に戻っていた。だが、バトラの戦闘機パイロットでありながら多少の陸戦能力を得る為の訓練で付与された筋肉が程よく付いた身体に度重なる戦闘で少しづつ負傷した後が増えた事で僅かに傷跡が刻まれたバトラの肉体はフロントムの思考を停止させるだけの羞恥心を与え、その隣で汗で張り付いた髪を風に当てて少しは乾かそうとしていたベルクトの顔が瞬く間に真っ赤に染める程の効果はあった。

「行きますよ、グリペン」

フロントムがベルクトの首根っこを掴むと同時にグリペンの背中を押して車に着替える為に慌てた様子で乗り込む。

「クリティカルな外交だな」

「そうですね」

グレアムは自分の脳内辞典でクリティカルな外交について引きながら、八代通の言葉に生返事で返答するとある事に気付く。

「運転手は？」

「俺が運転する。安心しろ、ユーラシア大陸は昔に散々運転した」

辿り着けるかどうかとグレアムが心配していたが、荒い運転出会ったが時間通りに会談場所となるホテルへと辿り着く事に成功するが、バトラが荒い運転で少し車酔いになっており、フロントムがモングルでこれ以上に荒い運転の車に乗ったでしょうと突っ込み、ベルクトはバトラの背中をさすって少しは気を紛らわせようと甲斐甲斐しい態度を見せていた。

モングルのあれは戦闘中でアドレナリンが分泌されていたからこそでバトラ自身は車は少し弱い。

それでも揺れない地面を少し歩くだけで気分は戻ったらしく、周りの景色を物珍しそうに見ていた。

一行を挟むように生えるヤシの木のアプローチの先には南国風のレセプションが建てられ、ビーチを背景に小規模で有るがヴィラが立ち並び、ヴィラにはプライベートプールにビーチベット、ハンモックとリゾート施設のそれだった。

一向は会談場所だと言うヴィラへと辿り着く。

周りは煉瓦造りの塀に囲まれてたった一つの抜け戸口が唯一の出入り口であり、部屋は海側は全面ガラス張り内装や調度品はオーシャンビューを損なわない様に潇洒な物で固められているが、肝心の会談相手が居なかった。

「場所と時間は此処であってるのか？」

「合ってる。先方もこっちに向かっているらしい。気長に待とう」

そう言われた一向は思い思いの場所に座り、バトラとマイケルはバーカウンターを漁り始める。

航空機の乾燥した空気と汗で喉が渴いて仕方がないらしく、アルコールの分解に余計な水分を使う酒には見向きもせず、ソフトドリンクの類を物色をしている。

2人が漸くソフトドリンクの類と栓抜きを見つけて開けると同時に扉からノックの音が響く。

それに2人は急いで一口だけでも潤すとパツと開けたばかりのドリンクを隠すようにしまう。

「なっ!?!」

そして、入つて来た存在に気付くと同時に叫び声上がり、バトラはバーカウンターを飛び越えて、立ち上がったファントムの前に立つてファントムを制し、ベルクトはソファアールから立ち上がると同時にバトラの側により、ファントムの隣に並ぶ。

入ってきた側にも動きはあり、クロームオレンジの髪を持つ少女を庇うかの様にアクアマリンの髪を持つ少女が立つ塞がる。

「バーバチカ」

遅れてグレアムがヒップホルスターのグロック17をマイケルがレッグホルダーに吊るしたM9に手を掛け、バトラもシヨルダーホルスターに入れたUSPに手を触れる。

「落ち着け。予定通りの来客だ」

なつとファントムから溢れた声と共にMS社のメンバーは銃から手を離すと同時に顔のパーツは悉くが大きい作りだが、体全体は細く小さい異相なロシアの将校用の軍服に身を包んだ軍人の登場にファントムとベルクトが固まる。

「バトラさん。ニキータ・カジンスキー、バーバチカの副官です。一度だけお会いした事があります。と言ってもロールアウトの祭典の時だけです……」

ファントムからアイスピックを奪い取り、アイスバケットに投げ入れた事で鳴った金属音にグレアムが乗っかり、会談を始めましょうと言うと、互いに言いたい事を置いておき、社交辞令の様な言葉の応酬の後に会談から始まった。

バトラは首筋を蜘蛛が這う様な感触を受けて、異様な程に嫌な予感

を感じつつ警戒を怠る事はせずに会談に耳を傾ける。

作戦53 残された者達は……

会談を行う上で相手を持ち上げる様な言葉を交わした後にやはりとでも言うべき問題が発生する。

「聞いてねえぞ、中佐！ なんの悪ふざけだこれは!？」

この場に集まった。そうなれば、今回の問題で共闘する事になる事は馬鹿でない限りはわかる。

ガジンスキーは眉一つ動かす事なく、ジュラーヴリクの問いに答える。

「本当ですよ。既に上同士の交渉で決まった事です。あなた方が異議を唱えられる問題ではありません」

カジンスキーの言葉にジュラーヴリクは怒りを覚えたのか近くに置いてあつた籠型の屑入れを蹴り飛ばす。

中には何も入っていないのか屑入れはタイル製の床と当たって心地良い音が鳴るが、それを塗り替えるかの如くジュラーヴリクの怒号が響いた。

「こいつらは祖国の敵だ！ あたし達、バーバチカの誇りに傷を付けてやがった！ そんな連中と仲良しこよしで手を繋げってか！」

「それは此方の台詞ですよ」

琥珀色の瞳に殺意を押し殺しながらゆるりと進み出る。

独飛とバーバチカはモンゴルで一戦を交えている。

結果は独飛側はフアントムの大破に近い中破を負って撤退、バーバチカ側は3機全てが戦闘に支障をきたすレベルの損傷をバトラー人に負わされた故に撤退。

フアントムとジュラーヴリクの性格を考えると因縁浅からぬ関係になるには充分過ぎる過去だった。

「鉛玉を撃ち込まれた屈辱はまだ消えていません。一緒に飛べと言うなら、それは同じだけの砲弾を叩き込んだ後です。あの忌々しい八枚羽を半分くらいネジ切ってやらないと」

「なんだとこら」

互いに磁石でも持っているのか、全く同時に距離を詰めるフアント

ムとジュラーヴリクの間に黒の石突が割って入る。

「静粛に。少しはそのバトラさんの様に振舞っては如何ですか？」

カジンスキーが顎で示した先にはバトラが無表情で立っていた。

「バトラさん。バーバチカとの共闘に何も思う事がないなんて言わないですよ？」

フアントムの問いにバトラの目が見開いた。

「確かに。ただ、俺たち請負兵士はたまに別の戦場では敵同士だったが、別の戦場に行ったら味方でしたとかあるからね。お互いに生きてるならノーカウントが常だ」

金や政治など様々な要素で敵にも味方にもなるのが民間軍事会社の社員だ。誇りだ、因縁だなんて気にしていたら仕事なんて出来ない。と呆れた様にバトラが話す。

無論ながらバトラも敵だった奴に対して何も感じない訳ではない。

「今は上が味方だと言うなら共闘はするさ。ただし裏切った瞬間には迷いなく引き金を引く」

敵が味方になる分には何も言わないが、味方が敵になった時はその場で殺す。

ヴアラヒア事変でライジェル隊と言う裏切り者を出してしまった経験からバトラが隊長を務めるアルタイル・アンタレス隊では裏切り者はその場で殺す事を推奨すると同時に義務としている。

万が一にも逃した場合空の果てまでも追いかけて必ず殺す事を是としている。

これは正規手順以外は許さずのアルタイル・アンタレス隊の法度である。

「ツ」

外交問題など知った事ではない。

仲間になるなら門は開け放つが、一度入れれば二度と開ける事は無い。どちらかが死ぬか目的を果たすまで居てもらおうと言わんばかりのバトラの気迫にバーバチカの誰かが息を漏らす。

「祖国の利益を語るならあなたのプライドを満たす事ではなく、国民の被害を止める事だと言う事だと認識を改めなさい。そしてRF—

4EJ—ANMの目的は人類の救済の筈です。此処で同士討ちが合理的な判断ですか？」

ガジンスキーの言葉にジューラーヴリクは渋々、ファントムは内心でバーバチカが居なくてもPMCエースの方々が居ればどうにかなりそうだなと思いつながら口に出すと背後で微笑んで右の拳を左手で包んでいるバトラに何をされるかわかったものじゃないのでこれ以上は喋るつもりは無いと言わんばかりに奥へと下がる。

兵士のゴタゴタを後回しにして、カジンスキー・八代通を中心にした政治の話が始まるとMS社のメンバーはどうする事も出来ない。ただ、成り行きを見守るが、ベルクトを除いたメンバーはアイコンタクトで何かを話している事に誰も気付かなかった。

日本のほぼ中心地に位置する石川県。その中の小松市に、小松空港と小松基地が存在する。

が、基地の方では少しではあるが普段とは違う光景が繰り広げられていた。

1つの格納庫が防塵と目隠しを兼ねた布で覆われているのだ。

近頃はザイと言う獲物を吸い続けた吸血獣は主がいない間に疲労が溜まった身体を整備士と言う医師であり、整体師でもある存在にその身の全てを預けていた。

空では騎手であるパイロットにその身を預ける強力な存在だが、覗かれない様に黒いシートに覆われた格納庫の中という陸地の上でその鋼鉄の身体を開かれ、内臓となる内部パーツを1つ1つ取り出されて洗浄の後に点検、必要であれば交換などとオーバーホールをされている今の姿は随分と情けない姿だ。

「ベルクトは確かに新人で目に見える場所に置いておきたいというのはわかります……が、ですね」

詩苑は格納庫でバトラに置いていかれたバトラのIl—44を見ながら呟く。

ベトナム行きを知らされた詩苑は直ぐに立候補をしたが、それなり

に腕の立つ事とザイの本拠地は中国大陸のある方角であり、最前線の一部となつている小松基地の防空能力を下げる訳にはいかない故にある程度の実力を持つ詩苑は姉妹揃つて小松基地でザイに備えていた。

「兄様は釣つた魚に餌をあげないタイプではありません。ただ、少し気に掛け過ぎです……」

不満ですと告げながら詩鞍が自分の踵を自分の座っている空のコンテナに当てる。

フライトシユーズとコンテナに当たつた音は小さかつたが、非破壊検査をする作業員から静かにしてくれと白い目を向けられる。

バトラの整備員達はバトラが経費削減と信頼関係構築の為に半分は新人を起用しており、熟練が居なくなつてからも自分達が熟練になつたと言う自負と仕事が少ない新人時代に仕事を流してくれたバトラへの信用や信頼に加えて友情の様な者を抱いている整備士達だ。

それ故かバトラの機体を弄る時は他の機体以上に真剣そのもので、渡される報酬以上は当然でバトラが追加報酬を払わせる気にさせる仕事を心掛けている。だが、追加報酬を受け取らない。

そんな誇り高い仕事を邪魔しない様に2人は格納庫を出て行くこうした瞬間にスクランブルの警報が鳴つた瞬間に2人は女性とは思えない走り方と速度で格納庫を飛び出し、燃料補給と簡易点検を終えたばかりの機体に駆け寄り、機体の下で待機していたMS社の社員から対Gスーツとヘルメットを受け取ると素早く着込んでコクピットへ乗り込む。

「こんな時に……」

バトラが居ない。

それは同時にエースの不在を意味する。

詩苑は知らず知らずの内にエースであるバトラの存在に依存に近い信頼や信用を抱いていた事に気付くが、首を振って素早く離陸前のチェックを終えると滑走路へと機体を滑らせる。

「お兄様が居ないのに3回目ですよ！」

機体が詩苑よりも遠かつた詩鞍は遅れてコクピットに乗り込むと

キヤノピーが降りてくるのを見ながら無意識で呟いた言葉でMS社の上層部は理由が無ければエースと呼ばれる人員を定期的に抜いて再編成を繰り返している理由を悟る。

エースのいる部隊は自然とそのエースを中心にしたチームワークを作ってしまう。無論ながらそれは悪い事では無いが、万が一にもエースが脱落すれば一瞬で誤解する。

海鳥島で世話になったデネブ隊や爆撃を得意とする部隊の1つであるベガ隊などはその特殊性からエースの引き抜きは無いが、特殊性の無い部隊はエースを定期的に抜いて臨時編成を行う場合がある。

簡単に言うならば、エース不在時の訓練の為だが、この間は大幅な戦力減を引き抜いたエースのみの部隊で補う。

アンタレス隊の場合はバトラの精神状態や元一般人の少女が捕虜となり、そこからの緊急登用だった片宮姉妹の経緯からバトラが心の拠り所と言う理由でエース引き抜きを行っていない。しかも現在では唯一のドーター・アニマ運用部隊故に余計に引き抜けない。

今の片宮姉妹はバトラ不在時の作戦に若干な違和感や不慣れがあった。

それはバトラが居たからこそ出来たような高難易度作戦に従事して来たからこそ芽生えてしまった甘えの様な物だった。

〈先に行くぞ〉

そして小松防衛の為に残っていたサンライトイエローのF-115 J-ANM イーグルが離陸した後にオニクスブラックのボディを持つラファールM-ANMに乗るブルーランジェから詩鞍の前を横切るタイミングで通信が入る。

詩鞍も不安を叩き出すかの様に頬を叩いた後にヘルメットを被つて、滑走路へと機体を向ける。

今回はスクランブルだが、空中で待機していたカノープスからEPCMを観測されたと言う通報があった事からザイだと判断された。

今の小松ではザイと判明した場合はサイレンの種類を変えて直ぐに伝達出来るシステムに変更されている。

「完全な物ではありませんが……」

詩鞍は自分の乗る機体の後部を見て眩く。

F-16。と言うよりもF-CK-1の背中にコンフォーマル・フューエル・タンクを足し、主翼付け根からより大型化したLERXを追加改造を施したF-2Xと言う自衛隊でF次期支援機の座をF-3 震電IIと争ったレプリカだ。

中低安定性と航続距離に絞った強化を施した片宮姉妹のF-2XCとなり、こう言った防空戦などの局地戦にて制空戦闘機としてよく離陸する。

最近ではA-10の方が作戦に向く為に格納庫でニートしていたF-2XCだが、バトラが居ない間は変にザイを刺激しない様に防空戦のみを行う判断が下され、最近の片宮姉妹はF-2XCに搭乗する回数が増えている。

それでも元はA-10乗りで空対地戦が本業だった片宮姉妹は制空專業のこの機体をまだ扱い切れて居ない状況での出撃だった。

離陸した詩鞍は先が上がっていた3機と合流するとダイヤモンド編隊を組む。

ダイヤモンド編隊は4機の機体が菱形を描く様に組む編隊だ。

先頭にオニクスブラックのラファールM-ANMを操るブルーランジェが飛び、その後ろに片宮姉妹の操る白黒のF-2XCが並び、その後ろを大型戦闘機であるアニマであるイーグルの操るF-15J-ANM イーグルが並ぶ。

小型機の後ろに小型機と呼べるサイズの機体が並び、最後尾にF-15J程の大型機が並んだその編隊は大型機であるF-15Jを護衛する小型・中型機の群れに見える。

編隊を組んで石川県の陸地を抜けて日本海に入って暫くするとレーダーが20機ものザイを捕まえるとレーダーが機体の識別を開始して、結果を教える。

〈アロータイプ!!〉

詩苑が叫んだ。

PMCではザイを形状や戦い方で細く識別している。

こう言った識別をしておいた方が戦術組立や戦術選択を咄嗟に変

え易いのと教練が行い易くなるからだ。

今回のアロータイプと識別されたザイはHiMATを使用するタイプであるが、僻地の基地を襲撃された際に多くが目撃されているザイだ。

特徴としてはジョット化したD0335を後退翼など高速機に見られる仕様に変更した様な外観で僻地の基地襲撃が多い事から航続距離と武装搭載力が多い事が判明しているが、それよりも恐ろしい報告が上がっている。

〈各機、ミサイルを発射後にブレイク!!〉

故にブレンジエは早急に片付けるつもりで指示を出すと、片宮姉妹は特に不満は無く声と行動で答え、イーグルは格闘戦がしたいのか不満を投げながらもしつかりとミサイルを発射する。

それぞれの機体からはそれぞれのパイロットの指示に従い、ラファールMからはミーンティアミサイルが、F-15Jからは99式空対空誘導弾が、F-2XCからはAIM-120が発射された。

発射方式の違いからか全機が同時にブレイクしなかったが、ザイの方からもミサイルを発射されるがF-2XCに設けられた増槽も吊るせるハードポイントの4つの内の2つには今回の防空戦の為にEPCMP対策から派生した対ザイ用ミサイル専用のECCMPを搭載しており、ザイのミサイルは全てがあらぬ方向に飛んで行くか自爆する。

だが、4機で8発しか撃てなかったのか12機が8機の僚機を失いながらも格闘戦を仕掛ける。だが、格闘戦ならば出番だと言わんばかりにイーグルが機体を素早く操って、ザイの背後に付いた瞬間にブレンジエが注意を飛ばした。

〈—Es·p·ce dIdiot! Tenir la distance! 馬鹿!! 距離を離せ!!〉

イーグルが通信でえ? と漏らした瞬間にはミサイルがリリースされており、直撃したザイは戦闘機とは思えない規模の爆発を起す。

〈うわわ! 何これ!!〉

ギリギリで破片の直撃を避けられたイーグルだが、機体には破片が命中したのか大小の凹みが見えた。

エアインテークに破片が飛び込む事が無かったのは奇跡に近いだろう。

〈資料を読んでないのか！ アロー型は戦闘爆撃機だ！〉

〈アロータイプは腹に大容量の爆弾を隠しているんです！〉

〈格闘戦で撃墜するなら距離を考えて下さい〉

立て続けに3人から叱責が飛ぶ。

アロー型の恐ろしさはその搭載能力を持ちながら、ある程度の格闘性能を有する程のエンジンパワーの存在だ。無論ながらそれだけではない。

元々は地上攻撃用なのかミサイル搭載数こそ少ないが別の武装が豊富に載せられている。

〈BARBIE02回避を！〉

京香の言葉にイーグルが機体を翻すとさつきまで居た場所を異様に太い火線が通り過ぎる。

そうこれもアロー型が恐ろしいと言う報告を上げる理由だ。

〈50mm砲搭載仕様ですか……〉

機首に集中配備した機銃の火力性能の高さだ。

今回のアロー型は機体形状から機首中央に長い砲身を持った50mm砲を囲う様に20mm機銃を載せた機体だ。

戦闘爆撃機と言う思想で設計されていると判断されたアロー型は戦闘機で言えば、第1世代・第2世代の戦闘機の戦闘方法を第3世代並みの性能で行う機体と言う物である。

簡単に言えば、音速で飛びながらレーダーで探知を行うと同時にミサイルを放って、音速でガンファイトを行うと言う機体である。しかも、機銃は対空戦だけで無く対地戦でも一定以上の効果を持つ事をアメリカ軍などが証明している。

「回られたー」

そして最後のガンファイターと呼ばれた第2世代機は当然ながら格闘戦の性能が高い。

アロー型が恐れられるのはこの格闘性能を持って、二線・三線級の戦力が防衛する僻地の基地を襲撃する事だ。

格闘戦はもろに操縦者の腕が現れる戦いであり、その腕が未熟な部隊が守る場所にエースを送り付ける様なザイの戦術は功を奏し、欧州方面での対ザイ戦では僅かながらであるが物資にダメージが入っている。

そんなアロー型に後ろを取られた詩苑だが、相手は小松基地防衛を担い、同時に日本防衛の一翼を背負う一線級が相手だという事をアロー型のザイは失念していた。

「ですがー！」

詩苑が減速しながら行うバレルロールを披露。

ザイは急減速と一瞬だが視界から消える様な鋭い機動についてこれなかったのか、詩苑の機体を追い越してしまう。

「そこですー!!」

詩苑は機体が逆さに向いたままだが、構わずガンのトリガーを引いてアロー型のザイに20m砲弾を一斉射分叩き込む。

ザイは腹に抱えた爆弾と燃料に引火したのか大爆発を起こすが、詩苑の機体はそのまま失速させる事で重力に任せて降下させた事で破片の被害から逃げられた。しかし、失速して落下するという事は空気の抵抗を機動力とする飛行機にとっては身動きが取れない状況でもある今の詩苑は大きな隙を敵に晒す事になる。

「やっぱり来た……」

詩苑の目の前で失速した詩苑を墜とせる時に落とすと言わんばかりにザイが迫るが、そのザイは別の機関砲の弾丸に撃たれて爆発四散する。

〈早く復帰して!〉

まるで指し示した様に攻撃したのは詩鞍のF-2XCだった。

こうもベストタイミングに助けに来たのもこの失速が2人にとっては計算された物だったからだ。

〈わかってるわよ〉

詩苑が失速すれば無理しなくていい位置なら大抵の場合は撃墜の

チャンスだと言わんばかりに敵は喰らい付く。だが、それが見え透いた罠で詩鞍が既に喰い付けばいつでも撃墜出来る準備を整えていた。そんな状態だった詩苑と詩鞍だが、ザイは気付かずに2人の狩場に飛び込んでしまい、その代償は自身の爆発四散とその代償は大き過ぎた。だが、この方法はバトラの様な隙を隙としないだけの安全を確保させられる友軍が居てこそ出来る方法だが、そのバトラの代わりに務めるのが……

〈これで5機目!!〉

サンライトイエローの塗装に包んだF-15Jを操るイーグルだ。

アロー型の高い格闘性能を物ともしないドーター仕様で改造されたF-15Jを見事に操って一方的に狩り続け、先程までのポカは何処へやったのか圧倒的な戦果を上げている。

戦い方もバトラの様に有利な位置から一方的に攻撃を加えるかわざと背後に付かせてからカウンターマニューバでのキルと言う様な戦い方では無く、鷲の名に恥じない様な有利不利関係無く勇猛果敢に攻めて攻めて攻め続ける戦い方だ。

〈もう少し後方に気を使い！〉

だが、ファントムとバトラからは腕や感は良いが何処か抜けている、詰めが甘いと言われる通り背後に付かれる瞬間もあり、その度にブーランジェがフォローに走っている。

ブーランジェも何かしらの場合で穴が空いた場合に穴埋めを買って出る事が多い故に最後発のドーターとアニメでありながら、経験の質を見れば、イーグルやグリペンのそれと変わらない。

「負けられませんね」

バトラが海外に足を運べるのも帰るべき基地を守るだけの戦力があるからこそと言うのをヴァラヒア事変終盤からの付き合いである片宮姉妹達は知っている。

残されたと言う事は帰るべき小松基地を守るだけの實力があるとバトラが信じているからこそその行い。

2人はその信頼に応えんと愛機の翼を翻す。

前を詩鞍が飛び、その後ろに詩苑が付くロツテを組み直すとザイは

20機中11機を墜とされながらも数の優位を生かした4機1組で片宮姉妹のロツテに挑む。

〈〈詩苑!〉〉〈〈詩鞍!〉〉

互いの名前を呼んだだけだが、それだけの2人の間で次の機動が決まった。

2人は左右に分かれると言うわざわざロツテを組んだ意味が無い行為をする。そんな2人にザイは2機づつに分かれて追撃を開始する。

2人はそれぞれに後ろからの機銃を回避すべく回避機動を取り続けるとザイもムキになったと言うべきか、20mm砲の銃撃の勢いを増やしていく。

〈〈FOX2!〉〉〈〈FOX2!〉〉

2機のF-2XCから短距離ミサイルが2発づつ放たれる。

ザイは背後へ回ってくるミサイルだと判断すると同時にブレイクで逃げようとするがミサイルはまるで火器管制を重視したアニメの誘導を受けたミサイルに如く追尾してザイを爆発四散させる。

アンタレス隊に籍を置くには未だに力不足な一面もある片宮姉妹だが、この2人がロツテを組んだ際の実力は他社の有名エースを相手に張り合えるだけの實力を持つ。

〈〈そこ!〉〉

無論ながら単独でもそれなりの實力は持っている。

そして2機のザイを撃墜した詩苑が目の前を横切ったイーグルを追うザイ2機の内1機を機銃で撃墜するとループを描く様に上昇するがわざと失速させて背中から落ちる様な機動でザイの下に回り込む。

〈〈FOX2!!〉〉

背面を向いたまま発射されたミサイルがザイの腹を殴り付ける様に近接自爆を行うと腹に抱えたままの爆弾に引火させて大爆発を起こさせる。

そして、またも失速した詩苑にザイが迫るが、詩鞍は別のザイに追われており、イーグルもブーランジェも今回のコレにはカバー出来ない

い状況。

ザイはここぞとばかりに迫ったが、気付いた頃には詩苑のF―2XCに背後を付かれていた。

コレはF―2XCが支援機と言う自衛隊のF―2B支援機が元になつており、このF―2Bを低空を低速・高速でも高い機動性を維持できるマルチロール機として枯れた技術を大部分に開発された機体。そんなF―2XCをより安定性とエンジン載せ換えによる搭載重量の強化を行った副産物で失速状態からの回復や低速での機動性が強化された。

そのおかげでわざと失速して敵を釣った上で友軍に狩らせる。もしくは完全に付かれる前に背後に回ると言うバトラとは違ったカウンターマニユーバを使う。

ザイはすかさず急降下で逃げるが、下はF―2XCの支援機として作られた故に優秀なルックダウン性能を存分に活かせる領域に自ら逃げた様な物で、詩苑もコレを逃がす程に甘い人間では無い。

搭載力強化により増えた対空ミサイルの餌食となり、ザイは火の玉へと変わった。

先程の背面飛行からの撃墜もこの優れたルックダウン機能を使つた変則的対空技術だが、自分の身は自分で守れなければ死ぬが良いがこの世界のPMC攻撃機乗り。故にこの技術はPMC攻撃機乗りならば、必須技術とも言つて良い技術だった。

〈中尉は右に！〉

互いに2機のザイに追われた詩苑と詩鞍だが、詩鞍と詩苑はまずは散開して二手に分かれた後に単独で逃げ回るが相手が自分達に夢中になったタイミングでハートを描く様な機動で動き、互いに互いを追うザイを正面からロックオンしてミサイルを誘導して、互いに互いをつかりと当てた詩苑と詩鞍。しかも、ロックオンの情報はあくまでも自機の後方警戒用レーダーからのデータリンクからだった事もあり、ザイは後方にUターンして迫って来ると判断しての回避機動を取らせた事も2人の戦術があつたからこそ成せた技だった。

ザイを2機撃墜した詩鞍はそのまま降下して、ルックダウン性能の

高さを知るブーランジエが海面スレスレまで逃げる事で助けを求めている事を察して通信を入れた。

ブーランジエはその通信に即座に答えるとザイの方から詩鞍の火線に飛び込んでしまい、予期せぬ仲間の爆発にロツテを組んでいたザイも飛び散った破片に巻き込まれた挙句にエアインテークから破片が侵入した事でエンジンが壊れたのか低空だった事もあって直ぐに頭から海面に飛び込んで機体を真つ二つに追って水没した。

〈逃す訳無いじゃん!!〉

不利と悟ったザイが中国大陸方面へと撤退するがイーグルが素早く追撃した事で小松襲撃のアロー型ザイ20機全機撃墜の戦果を持って4機の戦闘機が小松基地に帰投した。

作戦54 新たな翼との対面

連絡が付いたMS社の現地部隊から車が手配されたバトラとベルクトに乗り込んで飛行場を目指していた。

「……………」

ベルクトは静かに何かを考え込んだ様子でベトナムの流れる景色を車窓から見ていた。

今回のロシア側、特にバーバチカとの顔合わせは成功とも失敗とも言えない結末だった。

バーバチカのジュラーヴリクから語られたのはアルタイの空にいつかのシャルル・ド・ゴールで起きたアンフィジカルレイヤーが空間単位で発生しており、そこに意図せずに入射したバーバチカはバーバチカ3機目のディー・オーの自己犠牲でジュラーヴリク、ラーストチエカだけが脱出に成功し、ディー・オーは魔の空域とも言えるあの場所に取り残ってしまった事だった。

ジュラーヴリクはディー・オーを取り戻す為にもう一回飛び込むと公言した。

異常な経験をしたせいかわ窩と頬に深い影が落ち、橙色の髪は色艶を失ってこそいたが、その目の中には確かにギラギラと光る光があり、生気を失った顔と相まってバトラも一瞬ではあるが気に当てられ掛けた。

「……………気に病み過ぎるなよ」

バトラの言葉にベルクトは『え?』と顔をバトラの方に向ける。

バトラはそんなベルクトに溜息を吐いた。

ベルクトも特殊な任務を帯びていたと言えどもロシア生まれであり、ジュラーヴリクとは少なからずロシアの頃から関係があり、献身的であると共に優しい性格でもあるために今回のディー・オーMIAの話は心に蟠りを作るに充分過ぎた。

「ま、気に病んでも良いが空に出たら忘れるか気にしないでくれればいい」

空戦ではそう言った感情は己の足を引き、最悪は自分の命を失って

しまう事になる。

ベルクトはバトラのそんな意味を含んだ言葉に自分を心配してくれていると察して、微笑むと頷いて見せる。

普段ならまだ心配されていると俯くベルクトだが、今の心情でその言葉は愛しく思ってしまうベルクトだが、バトラの顔はベルクトから隣に座る人物に向いていた。

「幽香。お前はヴィラで寝ていても良かったんだぞ?」

それですか。と溜息を吐くのは幽香と呼ばれた少女。普段はフアントムと呼ばれる少女だった。

「なんで夫婦の同衾を見守らなければいけないんですか」

「あー……そうだな。可能な限りは2人つきりにさせてやろう」

ザイとの戦争では前線基地を破壊するなど好転はした状況だが、タイムリミットまでの時間を伸ばしただけで人類と言う存在に残された時間は多くはない。

で、あるならば小さくも深い傷跡を2つ持つバトラで無くても、恋人と過ごす目の前の時間を大切に欲しいと思いつながら、バトラは徐々に懐から社員手帳を取り出すと挟んでいた写真を見つめる。

「歴代アンタレス隊ですか……」

「ああ。最初は俺を含めて5人。それが最終的には4人となり、その後は俺1人……は、最近だな」

そう言ってベルクトに視線を走らせると車窓から斜め上に広がる夕陽の空を見上げ、日本に残して来た片宮姉妹の顔を思い出すとフアントムから言葉を投げ掛けられる。

「貴方も時間は多くはありません。目の前の出来事を大切して下さい」

そう言って、ごく自然な動きでバトラの肩を抱き付く。

まるで自分に構ってください、自分を見て下さいと言わんばかりのフアントムが行なったこの行動にベルクトは口をパクパクと動かして固まってしまう。

バトラもバトラで頭が混乱しており、困惑と羞恥で表情が訳の分からない形で顔と身体が固まっている。

それを確認したファントムは助手席と運転席に軽武装なMS社の社員を忘れて腕だけで無く、身体も摺り寄せるとベルクトの目と口が更に広がる。

「きゃあ!!」

そんなベルクトを見て助手席の社員がハンドルを大きく切って慣性の力を使ってベルクトをバトラの方向の投げて抱き着かせる。

抱き着いたベルクトは顔を真っ赤にして固まってしまいが助手席の脇から見えたサムズアップを見る。

「……………」

恋したのが多くの女性を魅了する人物だった故に少しは強かさを知ったベルクトはこれをチャンスと考えてファントムからバトラを取り返すかの様に身体を密着させる。

それから10分もの間を2人に抱きつかれたまま車に揺られて空港に着いた車はバトラとその恋人候補2人を下ろして去っていった。

「やあ。どうしたんだい?」

「嫌な。10分程だが記憶が無いんだ」

そんなバトラに薄つらとした笑いを浮かべながら話しかけるのはスーツを着た銀髪に青い目の若い男が立っていた。

「それは大変だ。若年性アルツハイマーだ」

「いいから商品を見せてくれ。キャスパー・ヘクマティアル」

バトラは前に立つ男の名前であるキャスパー・ヘクマティアル。様々な物を運び売るHCLI社の社長にして、海運の巨人と称されるフロイド・ヘクマティアルの実子の1人で極東と西アジア担当の兵器運搬部門の一翼を担う人物である。

そして彼はバトラが今回で購入を考えている機体を持つデイラーであり、同時にこのベトナムに配備されている機体の約3割を売り渡し、整備・維持用の部品に至っては5割を握る男でもある。

PMC、果てはPMCの連合軍とも言えるPMCのグループ、PMU内ではベトナムはHCLI社の金庫の1つとも言われている。

「で? その綺麗な可愛らしいお嬢さん達は誰かな?」

バトラの背後に立っていたファントムとベルクトを見たキャス

パーが語り掛けると彼女達よりも早くバトラが語り掛ける。

「ああ、こいつの紹介も兼ねていたんだった。カーシャ、紹介しよう。HCL I社のキャスパー・ヘクマティアル氏だ。日本で仕事している間は世話になるだろう、と言うより世話されろ」

そう言うてベルクトを手招いたバトラ。

ベルクトは以前に武器弾薬の補給は日本や技本はしないと聞いた際にバトラやバーフォードからは爺さんと呼ばれる人から買うと聞いており、別の武器商人が出て来た事に驚いていた。

「嬉しい事を言うてくれるね。バトラ君は。そっちのお嬢さんは？」

「新しい私の兵装操作員ですが、武器弾薬は俺が調達する決まりです。で、彼女との商談は暫くなしです」

私の兵装操作員。正規軍で言えば兵装システム士官であるが、フロントムは私の兵装操作員と言う言葉に顔を赤くしながら、モジモジと身体を揺すっているのをベルクトは嫉妬と殺意が滲んだ目で見ていた。

「それよりも早く商談に入ろう。前にも連絡したと思うが、フライトは可能なんだろうな？」

後ろの修羅場は気にしないの？　と言う言葉をキャスパーは飲み込む事にした。と言うよりも、言ったら言ったで何か起きかねないと嫌な予感を感じて判断したからだ。

「準備は出来ているよ。ただ、実弾搭載だから注意してくれよ」

そう言うてHCL Iと書かれた見るからに新造の格納庫に通されるところには2機の戦闘機が自分の主人となり得るだろうパイロットを待っていた。

「右の機体がF/A-27。F/A-18E/Fを置き換える為に開発されたが、維持費が嵩むからと不採用になった機体だね」

F/A-27。

マクドネル・ダグラス社がF/A-18の後継機として開発した機体だが、置き換える機体よりも大型でランニングコストが嵩む構造にした所為か不採用になってPMCに販路を求めた機体だ。

カナード翼に可変機構に取り付けられた後退翼に上下2枚ずつ、X

の字をズラした様に搭載された計4枚の斜めに傾けた尾翼。

X字に近い形状で構成された尾翼と主翼は後退翼状態の所為か槍や矢を思わせる鋭角な印象を放ち、同時に尾翼も全てが寝かされた様に平たい印象も与える。

ハードポイントはF-14を思わせるレイアウトに加えてエアインテークにも近年のSuシリーズに見られう様に2つつつ搭載されている。

「正規軍モデルにはステルスがあつたんだけど、PMCに卸すとなると費用のかかるステルスは捨てた方が販路は開ける。ただ、胴体はウエポンベイだからステルスカバーを使えばステルス機として使えるよ」

キヤスパーの話を聞きながらバトラはグルリとF/A-27を見る。回る。

機体後部には方向舵に相当する動翼が無い故に機体後部の双発エンジンに水平方向への推力偏向が可能なパドル式の2次元ベクタードノズルが組み合わさることでヨーを可能にした構造だった。

「低速では格闘戦向き、高速では一撃離脱向きの機体だ。そして対地攻撃も出来る。こう聞くとボムキャットの発展版と言える機体だね」
「所々に猫の血が見えるからわかる。もう片方は？」

前進翼の主翼形状に恐ろしい程に太いエンジンを使っていたのだろうが、それよりも細いエンジンに変えたのがわかる不自然に取り敢えず機能的なパーツで埋めましたとでも言えるエンジン周りのレイアウトが目立つ一般的な機体に見られる雰囲気。機体後部に対して前部はハチドリの前部を参考にしたかのような形状。機体前部は近未来的なデザインと誰が見ても違和感が仕事するが、何処かマッチしていると言う不思議な機体がバトラの目の前に鎮座していた。

「ああ、これねこれは彼等から聞かせて貰いなよ」

そう言つて声を掛けると奥の部屋、整備士の休憩室だろう場所から2人の男が現れた。

その2人にバトラは見覚えがあつた。

「サイファーさんにピクシーさん!!」

PMCUB Cが所有する最大戦力、ガラム隊の2人だっ

ウステイオ・ベルカ・カンパニー

た。

始まりはパラウル攻略戦の前段階、パラウルの有効射程距離ギリギリまでの制空権確保とパラウル攻撃隊道中と帰りの直掩のみだったのだが、バトラは始めての長機だった事と、MS社も大きくなかった故か先輩パイロットは事務や作戦会議などで暇が無く、訓練や勉強に付き合ってくれない状況下でこの2人は色々長機としてのアレやコレの世話を焼いてくれた恩人でもある。

そして彼等2人のバイパスがあるからこそ小松にインディゴ隊を呼べた経緯もある。

「しかし、どうして此処に？」

ベトナムよりもよりザイとの前線に近い基地に配属されている筈の2人の登場にバトラは驚かずには居られなかった。

そんなバトラの言葉に2人は少し恥ずかしそうにしながらも訳を話し始めた。

「実は此奴は俺たちが持ち込んだ機体なんだが、少し値段交渉が長引いてな」

「？ 資料は暫定価格ですか？」

「安くなる」

ピクシーの言葉にバトラが汗をたらりと一筋流すとサイファーはバトラが言わんとする事を悟ったのか口を開くとバトラが続けた。

「何があったんですか？」

「俺たちの会社の規定を知っているか？」

その言葉にファントムとベルクトはそんな事を知っている筈が無いだろうと思うが、バトラが何かを思い出した様に声を上げた事で2人の行動が止まった。

「事故機は使用禁止でしたっけ？」

実はUBCではケラーマンと言うパイロットが事故機を修復した機体で飛び、その際の欠陥が原因で数ヶ月ほど病院送りにされており、その一件からUBCでは新規習得機体は未事故機体である事を義務化した。

そしてその事かと確認したバトラに少し空気気味だったキャスパーがそうだと語るとこの機体の経緯を話し始める。

「実はこの機体は2人の機体が事故を起こして真つ二つになった2機を組み合わせたニコイチ機体だね。格納庫の肥やしにするにも金が掛かるから売りたいらしくて此処に持ち込んだ」

「ほら、MS社は自己責任でどんな機体にも乗れるだろ？」

「……零戦でザイを撃墜した人が居たような……」

現役パイロットでは無く、予備役パイロットが展示飛行や曲芸飛行などで使うレシプロ機なのだが、武装も施しているのでその気になれば戦闘は可能な機体だ。

そんな機体でもMS社は自費で購入するならどんな機体でも所持できると言う搭乗機に対しては緩い会社だ。

と言うのも、MS社はUBCと違い、規模で言えば大企業に近い中企業だ。人員の数が少ないから厳しすぎると機体を失った社員の現場復帰が絶望的、又は大幅な遅れが生じ、その間の生産力が落ちてしまう。

そして、MS社の企業があるからこそ、今回の様な事故機の買い手があり、他の企業にも何かしらの益がある。

今回のガラム隊も残骸として売るよりもニコイチにして事故機として売った方が益があり、こんな機体でも買い手が居る事を知っていたからの行動だ。

「なあ、もう少し高く出来ねーか？」

「事故機でこの価格出すんだ。満足して欲しいね」

「せめて原価の25パーセントは回収させてくれ！」

そしてガラム隊の2人からすれば全く使っていなかった機体だが、早々に事故で失ってしまった事で新しい機体の調達ないし予備機の整備費の為に原価25パーセントは回収したいのかいまだにキャスパーと商談中だったのだ。

まあ、2人がこの機体の経緯を黙って売ろうとしたのが問題なのだが、キャスパー以上に問題視する人物が此処に居た。

「事故機なんていけません！」

「何があるかわかりません！」

フアントムとベルクトだ。

確かに事故機、それもニコイチとなれば何が起きるかわかった物では無い。

バトラとしても事故機と言う出自に思うところが無い訳では無いが、幸いな事に2機の数値などの数値スペックは全くの同等ならば、重要になるにはフィーリングとなり、それを確かめるには乗るしか無い。

キヤスパーも戦闘機の改修キットは何回も売っているが戦闘機自体はヴァラヒア事変からの取り扱いだが、これでもやり手と言えるだけのブローカーでもあるので戦闘機の真つ当な売り方なら熟知しており、2機とも飛行証明は既に取得済みでパイロットさえ揃えばいつでも離陸可能だった。

「2人の意見だが、今回は無視だ」

そう言ったバトラにフアントムとベルクトは考え直す様に言い寄るも、当の本人はそれを無視しながらキヤスパーの手よりマニュアルを受け取っていた。

作戦55 急襲

ゴツとベトナムの空を高速で移動する金属の塊が2つ存在した。

片方は陽光を弾く、この世の汚れなど知らないと言わんばかりに美しいパールホワイトの装甲で覆われたSu-47。

そのSu-47の後ろに無機質で最低限の防腐目的に所有者のいないテスト機であるが故か安っぽい白に翼の前方の淵のみを赤いライン付けしただけの塗装の機体、F/A-27だった。

〈アアー。聞こえるかな?〉

〈感度は良好です〉

〈ロシア機に慣れたせいか米国製の操作が覚束ない……〉

バトラが不満を漏らす。

バトラの乗機は途中から値段的に優れたロシア系に偏っていた事から電子系が完全にロシア寄りになっており、昔は多く使っていた欧米風の電子系が直ぐに扱えきれていなかった。だが、身体が覚えているのか数回使えば最低限に絞れば満足に動かせる様になっていた。

〈軽いテストは出来たね?〉

地上設備からキャスパーの声が飛ぶと軽い模擬戦をしてもいいと告げた瞬間にF/A-27に搭載された物をPMCに売る為に換装された旧式のリーダーが2機の戦闘機を捉えた。

〈居たあ!! 遭遇しちゃった!!〉

〈やつと来やがったか。偉そうに強いなんて言われて、マジで強いのかよ?〉

まるで宇宙最強の狩人を見つけた様な叫び声をあげながら、灰系三色のスプリッター迷彩に主翼の両脇と下部が黄色いカラーリングが特徴なSu-37が現れ、その横を飛ぶ機体を見たベルクトが叫んだ。

〈なんですか! あの機体は!!〉

それも無理はないだろう。何故ならSu-37に追隨するのは正面は正しく、レシプロエンジンをジェットエンジンに載せ替えたグラマンF7Fを赤く塗装した様な機体が飛んでいたからだ。

へフレียมフライさんだな。P M Cレイブン・アンド・リンクスに所属するパイロットだ。使用機体はジャンクのF7Fをジェット化してジェット向きになる様に各所に変更と強化を入れた機体だ」

バトラからの解説を聞き、納得すると模擬戦の為にベルクトは離脱するとバトラを挟む様に2機の戦闘機がすれ違う。

「エースの名は譲って貰うぜ、ガキが！」

旧式レシプロ機をジェット化した戦闘機とは思えない機動で反転したフレียมフライが真っ直ぐに接近するとバトラはマニュアルでは可能と書かれていたエンジンパドルにカナード、主翼、尾翼全てを使った回頭とでも言える技術を使って機首を反転させる。

反転した瞬間に機体は空中で静止した様に見えたが直ぐにエンジンの推力により前進してフレียมフライとヘッドオンに挑む。

フレียมフライの機体はレーダーなどの電子部品を追加した故に機銃スペースを圧迫し、機首下部に突起を設ける事で20mmのリヴォルバーカノンを2門搭載しているのに対して今のバトラの機体は機首中央に20mmの多銃身砲を1基のみである。

またもに撃ち合えば撃ち負けるのはバトラの方だ。

2機は互いに模擬戦の為に1発も放っていない。

と言うのも今回の模擬戦では、レーザーなどを利用したシステムを使って撃墜されたかどうかの判定が下され、その被害によって搭載されたコンピュータが結果を表示するシステムで戦っている。

「フレียมフライ、スプラッシュ」

ヘッドオンの時にバトラは機首を右に振ってから横滑りさせていた事で被害は無かったが、フレียมフライは真っ直ぐに突っ込む度胸勝負しており、バトラの機銃を回避行動無しで受けると言う判定を下された。

基地の司令部から通信は届くとフレียมフライは怨嗟の声を上げながら低空に退避して基地への道に付く。

フレียมフライのディスプレイには両主翼のエンジン脱落に、機首がミンチにされたと言う判定を下していた。

撤退するフレียมフライ見送っていたバトラの背後にSu-37

が忍び寄る。

バトラがそれに気付いたのは完全に張り付かれる直前だった。

「油断した!」

撃墜直後はエースでも油断してしまう場合がある。

それをしない為に索敵行動などがあるが今回は機体の挙動確認と被害状況の確認をしていた事で疎かになっており、張り付かれる結果になっていた。

「ジャン・ルイのくせにやる……」

バトラをパワーダイブで逃げるがジャン・ルイの駆るSu-37も追い掛ける。

海面ギリギリまで逃げたバトラは機体をバンクさせて海面を横切るように旋回させるとSu-37もバンクをしながら旋回させて追い掛ける。

バトラはココだと感じてバレルロールを披露してオーバーシュートを試みるが、ジャン・ルイはコブラ機動を行い、逆に機銃攻撃を放ってくる。

バトラの視界に胴体上部に機銃弾が命中した事を示すメッセージが警告音と共に示されるも、コンピュータは機体にトラブルは無いと判断したのか機体制御に制約は掛けなかった。

バトラは減速を行い機動力を高める。F/A-27も減速に合わせ主翼と尾翼が動き、それを見たジャン・ルイも減速してオーバーシュートしないようにするが旋回半径で負けたSu-37が自然とF/A-27を追い越してしまう。

「やっちゃった!」

急いで上昇したジャン・ルイだが、既にバトラは緩上昇をしており、上昇の為に機首上げして背中を晒したSu-37を縦になぐ様に機銃を発射していた。

その事に気付いたのかスロットルを開きながら急旋回を行うもエルロンを損傷したと言う判定が下されたのか、右主翼のエルロンが下がり気味になり、バランスを大きく崩した。

それを逃す様なバトラでは無い。

機首を振って機銃の銃口を向けると指切りで連続した機銃攻撃を放つ。

HUDには機銃の弾道が表示されおり、連続して着弾する様になった。

このダメージでさらに運動性能が低下したのか動きが緩慢となり、機体の高度状態からコンピュータが危険だと察したのか海面ギリギリでオートパイロットが作動して、一瞬ではあるが対ザイ用の機体として最低限以上の改造が施された機体だからこそできる10G超えの機動で機体を海面から逃がしたが、逃げた場所でバトラの機体からフルオートで全弾を叩き込まれた。

突然の10Gを超える機動にフラフラと上体を振りながらもジャン・ルイは鬼じやないか文句を告げる。

バトラはそれに悪かつと謝った瞬間、通信機から怒号が響いた。

〈実弾積んでたよな！ 今すぐ戻れ！ ザイだ!!〉

ジャン・ルイは『は？』と何を言っているのかわからない様子だったが、バトラは即座にレーダーを確認する。

旧式が否めない機材だが、確かに空港近くを不規則に飛ぶ光点と少し離れた場所に浮かぶ多数の光点が見えた。

ジャン・ルイもようやく状況を掴んだのか少し乱暴にスロットルを操作して飛び去って行くと、バトラも急ごうとスロットルレバーを握り直した瞬間。

〈AJZ戦闘機ではないんですよ？〉

ベルクトに警告をされると同時に追い抜かされる。

エルロンロールをしながら飛び去るベルクトのパールホワイトのボディから吐き出されるAL-31Fシリーズ3の炎が頼もしく見える。

元はバトラのSu-33に使われた強化と改造を施したAL-31Fシリーズ3は初めての大破で片肺を失ったベルクトのSu-47に2基とも移植され、今ではベルクトが独自に強化と改良、交換を行ってSu-47の巨体を空へと飛ばしている。

「久し振りの光景だな。仲間に前を飛ばせるのは」

隊長、そして対地から対空要員に変わった事で仲間の前を飛ぶ光景が久し振りに感じるバトラ。

それは自分は偉くも、強くも、役割も変化した事を示す経験。

「少し……こわいな」

戦う技術はあるのに戦う力が無い、今の状況がバトラには恐怖に感じられた。

バトラをそんな感情を打ち消そうとしたのか、機首を空港とは違う方向に向けた。

「こんなにも……」

緊急離陸した機体と既に飛び込んだザイトで既に空戦が発生しており、空港上空と近辺では空に網を張るかの様に飛行機雲が入り組んでいた。

その光景を見ながら、ベルクトはバトラの前に出た事を後悔していた。

自分の前に隊長機は無く、後ろに味方機の姿も無い。後ろも前も開けた視界にベルクトは並々ならぬ恐怖と不安を覚えた瞬間に、脳裏にある人物の言葉が蘇った。

『集中力を保つんだ。クールにね』

ベルクトは静かに『そうでしたね』と此処に居ないフツケバインに話し掛ける様に呟くと椅子に座り直し、目を閉じて一度だけ大きくゆっくりとした深呼吸をして目を開くと同時にミサイルの射程範囲に敵機を捕捉した。

敵はM型と制空型にしては珍しくないザイだったが、所々にN型が混じっている。それに対して上空に飛び上がった人類側の戦力はF-4 ファントムIIやF-8 クルセイダーと言った旧式大型機に混じって、F-18 ホーネットやA-4M スカイホークIIやMiG-21、所によってはJ35 ドラケンにダツソー ミラーージュIIIなどの旧式小型戦闘機の姿は多く見える中でF-14 トムキャットと言った高性能な機体が一層目立つ。

旧式ばかりの戦場に一抹の不安を抱きつつも、兵装選択を行った事で胴体に設けられたウェポンベイが開き、可動式のハードポイントがせり出して、4発の中距離空対空ミサイルとウェポンベイの扉に付けられた2つの短距離空対空ミサイルが姿を現わす。

〈ANTARES02、エンゲージ！ FOX2！〉

1発の中距離空対空ミサイルが胴体から離れ、白い発射煙を吐きながら戦闘機を凌ぐ速度で飛翔する。

遅れて戦場に到着したベルクトの放ったミサイルはザイの不意を取ったらしく、狙われたN型のザイが碌な回避行動も取れずに爆散する。

N型1機の撃墜はベルクトの予想を超える戦果を生み出す。

〈N型が撃墜された！〉

〈誰だ撃墜したのは！〉

M型やアロー型はまだしも、高機動を誇るN型に苦汁を飲まされていたベトナムの各PMC部隊は、ベルクトがN型の1機を倒した事で士気が上がった。

〈ANTARES02です。N型は請け負います！ 他をお願いします！〉

〈了解。行けるぞ！ ダイブして接近〉

〈コピー。エンゲージ！！〉

真っ先に動いた部隊が現れた事で各部隊も時間差はあれど、機体を翻す。

あるF-4のみで構成された部隊は4機で固まった動いてザイに對抗する。

〈シーカーオープン。FOX2、FOX2〉

ザイとF-4が同時にミサイルを放つ。

M型のザイが放ったミサイルはレーダー誘導を必要とするミサイルだったらしく、回避行動が満足に取れずに撃墜される。

〈グツキル！ グツキル！ グツキル！〉

〈O4、エンゲージ！ シーカーオープン！〉

M型の背後に付いたF-4の部隊の4番機だが、M型はエアブレイ

キを発動させたのか急減速を行い、4番機の背後に回る。

〈後ろだ！ ブレイクしろ！〉

〈ブレイク！ ブレイク！〉

隊長機のF-4から叫ばれて回避行動を行なったが、既にザイはミサイルを4発も放っていた。

必中距離内で撃たれたミサイルを回避する事はF-4の様な高機動とは言えない機体では難しかったらしく、螺旋を描くように飛来したミサイルの最初の一撃が近接自爆で速度を奪い、立て続けに飛来した2発目がエンジンを完全に奪い、3発目の爆風で煽られて動きを止めた所に4発目が燃料タンクに直撃して木っ端微塵にされる。

〈よくも！〉

3番機のF-4が4番機を撃墜したザイを機銃で沈め、索敵の為に旋回をした瞬間にベルクトだけでは対処しきれなかったN型のザイに機銃で撃墜されてしまう。

〈ブレイク！ ブレイク！〉

別の場所ではF-8が4発のミサイルに追われており、何とかフレアで捌いてこそいたが、1発が抜けてエンジンを破壊した事で推力とバランスを失ったF-8が錐揉み回転をしながら落下するとM型のザイがF-8が生み出した黒煙を突き破って現れた。

〈仇を！〉

そして、撃墜したF-8の僚機に20mm弾を4門から喰らわされて木っ端微塵にされ、その破片をエンジンから吹き出された炎で吹き飛ばしながらF-18が現れる。

〈シーカーオープン。FOX2、FOX2！〉

主翼に吊り下げられた4発が連続して発射される。

F-18から狙われたM型のザイはエルロンロールをしながら不規則に動く事で回避を試みる。

実際にセンサーは主翼の端に反応して3発が近接自爆で爆発するが被害を与えられ無かったが、エルロンロールと旋回で失った速度が原因で騙し切れなかったミサイルが直撃して撃墜される。

〈グツキル！ グツキル！ うわあああ！！〉

撃墜した事で驚きと嬉しさを混ぜて叫んだパイロットだが、別のザイから機銃で撃たれたのか主翼とエンジンから火を吹き出し、フォーエルカットが間に合わずにパイロットごと機体が爆発四散する。

その爆煙を躲す様にダイブしたアロー型3機から低空を飛んでいたJ35にミサイルが1発つつ放たれる。

〈ブレイク！ ブレイク！〉

エルロンロールをしながらフレアを撒いた事で1発は防いだが、残りの2発に追われるJ35。

そして1発が背面で自爆した事で機体性能が下がった瞬間にトドメと言わんばかりに2発目が再び背面で爆発した事で機体が出火する。

〈ドーラ6、フォーエルカットだ！ 消化しろ！〉

5番機のJ35が叫ぶ目の前で爆発するJ 35。

言葉を失った5番機の前を3機のアロー型が空港を目指して飛行する。

〈させるかよ！ 仇は討つ！〉

別々にロックオンしてミサイルを2発放って2機を同時に撃墜し、仲間が撃墜された事で急上昇したアロー型に同じく急上昇を掛けながら機銃を放って撃墜する。

〈アロー7！〉

〈空港をこれ以上攻撃されたらまずいぞ！〉

〈逃すか！ モーター点火！〉

海面ギリギリを飛行する爆装アロー型7機を見つけたMig-21が3機で構成された部隊は距離と速度から搭載されたロケットモーターを作動して背後から追い掛ける。

専用エンジンを使っている為に継戦力に問題は無いが速度が速過ぎる故に一時的に戦域を離脱せざるを得ない為に使いたくない方法だが、空港の滑走路を失えば、みんな仲良く海水浴である。

〈後ろからミサイル！〉

そんなMig-21に別のザイが放ったミサイルが接近する。

既に追撃体勢を整えており、自分の速度の関係上下手に旋回すれば

空気抵抗で空中分解しかねないMig-21のパイロット達は攻めて撃墜される前に撃墜してやるとシーカーをオープンにした瞬間にミサイルアラートが消え、アラートが鳴り止んだ直後に自分達の左斜め上が赤く瞬いた。

Mig-21のパイロットが何が起きたのだと首を回した瞬間にミサイルにバラバラにされたF-14とベイルアウトに失敗して吹き飛んだキャノピーに頭を打ち付け、首が曲がらない方向に曲がったパイロットだった。

〈無駄にはしないぞ!〉

自分達の前を横切ってミサイルを引きつけたF-14のパイロットに敬礼を送ると同時にシーカーがザイを捉える。

〈FOX2!〉

ミサイルが放たれる。

アロー型のザイも高速で迫る3機に気付いて回避行動を取ろうとするが爆装が重かったのか、回避機動は鈍重の一言で対ザイ用に既存のミサイルを改造した間に合わせのミサイルでも命中し、各機からグツキルと賞賛の音が飛ぶ。

〈ANTARES02が!〉

そんな中で誰かの通信が響き、誰もが青空に飲み込まれない美しい白を吐き出す機体を探すと全員が直ぐに見つけた。

〈まずいぞ! あれは!〉

N型ザイ3機に追い回される白い鷲がいた。

エルロンロールやバレルロール、スプリットSなどの機動を使いながら、頻繁なスロットル操作で耐えながらも振り切ろうとするが前進翼の欠点である高速域での安定性欠如が如実に出てしまい、速度が出し切れないでいた。

「振り切れない……」

ベルクトが後ろをミラーで確認して呟く。

ベルクトのSu-47は高機動を誇るドーターだが、元々の役割は核爆弾の被害範囲に留める為の囷であり、そんな機体にお金をかける必要は無いという判断か操縦系統とキャノピー以外は殆ど原型機に

近かった。

MS社に鞘替えしてからは戦闘機として運用する事から改造がされたが、大破した時は自衛隊預かりだった事もあってエンジンなどの僅かな部分しか弄れず、機体形状にまで手が出せたのは本社に顔を見せた時のみでその時も大規模な改修は出来ず、殆どが形状変更を行ったパーツへの交換のみで済む物が殆どだった。

「もう少し大きければ……」

ベルクトがカナード翼に足された僅かなウイングレットを見て内心で呟く。

安定性向上の改修は殆どが僅かなウイングレットの追加のみで済まざるをえなかった。

そもそもな話で今回の様な問題が浮き彫りになったのはこれが初めてだった。

アンタレス隊の運用ではベルクトは片宮姉妹の直掩でそこまで速度が必要としておらず、エンジン性能は持て余し気味だったのだが、今回の様な援護を受けられない状態での空戦となつて初めて元々の機体性能以上の速度を出した故に発覚した弱点でもあった。

「(真つ直ぐに飛ばす分には問題はありません……ただ……)」

最高速に近い速度での旋回時に安定性が悪くなる。

その安定性の悪さで機動のキレを欠いており、振り切れそうで振り切れないでいた。

「ウプイリがこんな挙動ならバトラさんの腕つて……」

へっブレイクしろ！ ミサイルだ！

ベルクトがその通信で考え事をしていた事を自覚する。

後方から白煙を吐きながら極彩色に輝くミサイルの3発が複雑な螺旋を描きながら迫る。ベルクトは機体を必死に翻した瞬間にミサイルが自爆するには遠い距離で立て続けに3発が爆発した。

「二体 へっレフトターン!! FOX2!!」

言葉を遮って聞こえたバトラの声に従って機体を翻すとそれを追う様N型のザイが追い掛けるが、バトラの機体から放たれたミサイルがN型のザイに直撃する。

〈間髪でしたね〉

こんな事は幾らバトラでも人間であるバトラに出来る事ではないと思っただベルクトの疑問を答えるかの様にファントムから通信が入った事でベルクトの頭の中で全ての謎が解けた。

今回の空戦にファントムは参加出来なかった。と言うのも長距離クルーズの所為で整備中だったファントムの乗機であるRF-4E JTP-ANMは襲撃直前に発生した地震の影響で格納庫が半壊し、機体は無事でも出庫が出来ない状況に陥っていた。

空港上空をなんとか離陸出来たバーバチカの2機と擘・グリペンの即席チームと居合わせつつも補給作業が満帆では無かったPMC部隊の機転で潜り抜けながら、ファントムの機体は何とか格納庫の外に引っ張り出していった。しかし、肝心の滑走路が途中から海面を滑る様に現れた水上機に改造されたであろうアロー型ザイの37mm砲で穴ボコにされてしまい、離陸出来るのが不整地に強い機体か短距離離陸性能の高い機体のみと言う状況だった。

カタパルトの無い場所では長い滑走距離を要求されるF-4型には離陸が難しく離陸を断念していたのだが、バトラとファントムが同時に思いついた。

『データリンクでファントムが捕捉・誘導を行うミサイルをバトラのF/A-27から放つ』

これによりミサイルキャリアーとしてバトラが起動した。今まで援護が出来なかったのは単純にデータリンクに戸惑った事とファントムの装備が完全手作業で手間取ったからだだった。

〈バトラさん！ 背後に敵機！ 数は3！ アロータイプ！〉
ファントムのレーダーがバトラの存在に気付いたザイの存在を捉えると同時にファントムが叫んだ。

バトラもそれに気付くとスロットルを開いて加速するがM型も追いつく。

速度差で振り切ろうとしたバトラだが、ザイにロックオンされてしまい、ミサイルが3発も放たれる。

「舐めるな！」

アフターバーナー全開で垂直上昇を行う。3発のミサイルは狂う事なく追い掛けるが、バトラは余裕がある内に急減速させる事で翼を開かせて機動性を引き上げた瞬間に二次元パドルを巧みに操作して機体の向きを210度もその場で変えながらフレアを放出するとフルスロットルでパワーダイブを敢行。

これに対して遅れて発射された2発は追尾を続行したが、1発がフレアを誤認して自爆した。

「そのままついて来い！」

バトラが軽いEPCMを気力で吹き飛ばそうとしているのかミサイルに叫びながら海へとパワーダイブを続け、海面ギリギリで水平飛行に移る。ミサイルは1発は急降下の速度について来れなかったのか海に飛び込んだが1発が未だに追い続ける。

〈〈ベイルアウトを！〉〉

ベルクトが叫んだ瞬間にバトラがコブラ機動で海水を跳ね上げてミサイルにぶつける。

相当量の海水を浴びたミサイルは海水を機体と誤認して自爆、その頃にはバトラはコブラ機動から復帰しており、アフターバーナーを炊いて離脱していた。

〈〈前方と後方から先程のアロー型！それがラストです！〉〉

前方から来たアロー型に対してミサイルを放つとファントムが即座に前方の1機を捉えて撃墜し、バトラがその残骸を躲すと同時にコブラ機動を行うがアロー型ザイはそれを知っていたと言わんばかりにバトラを挟む様にコブラ機動を行っていた。

「っ!? だああああ!!」

バトラが珍しく叫ぶと同時にパドルを操作して機体を無理矢理に横にドリフトスピンをさせる様に向けさせて片方を機銃で撃墜するがミサイルも機銃も弾切れを起こす。

〈〈補給は！〉〉

〈〈終えている！〉〉

〈〈空港中心を基点に4時方向から突っ込んで来て下さい！〉〉

〈〈ヴェイルコ！ 1発で仕留めろよ！ ファントム！〉〉

アフターバーナーを焚いて空港へ角度を調整して接近すると空港から4発のミサイルが撃ち上げられたのか白煙が4本も上がり、バトラの後方を追い掛けるザイに迫り、寸分狂わず同時着弾でザイを木っ端微塵にするが死に際にミサイルを放っていた。

〈そのまま！〉

ファントムの指示にバトラはアフターバーナーを焚き続ける事で返答し、音速の2倍に近い速度で空港上空をパスした瞬間に空港の地面ギリギリを僅かに浮遊する戦闘機からミサイルが放たれ、ファントムの制御を受けてミサイルとミサイルがぶつかりあった。

〈助かった。貴官の名と所属を聞きたい〉

バトラは空港を囲む様に旋回しながら浮遊する戦闘機に問い掛ける。

浮遊する戦闘機のパイロットもバトラが自分を中心に回っている事に気付いて返答する。

〈此方はアクアビット社航空私兵部隊所属のXFA-33 フェンリア。コールサインはAQUABIT60、TACネームは無い〉
〈フェンリア!! つい最近のイギリス軍機じゃねーか!〉

バトラを助けた機体はかなり特徴的だった。

翼形状はカナードと翼端部に下反角の付いた主翼に浅い角度の上向き斜め水平尾翼で構成された、所謂スリーサーフェイス機だった。

垂直尾翼は存在しない事から左右2基のエンジンに装備された水平方向に可動する2次元ベクターノズルによってヨーイングを行う事も容易に想像できるが、より目を引くのはサイズ違いに搭載される3基のエンジンだ。左右2つは同じサイズだが、中央の最も小さいエンジンが下方90度前後まで排気偏向がされており、これによりVTOLをしていた。

これこそが英国が作り上げた高性能変態戦闘機と名高いXFA-33 フェンリルのPMC向け機体。XFA-33 フェンリアだ。

対ザイ戦を前提にした機体と言う事もあり、通常キャノピーを装甲化した際に出来る無茶な改造故の違和感が無い、最初から装甲キャノピー設計の機体だ。

〈そんな高い機体をへあ、アクアビット社はこれの開発元なんです〉
バトラも一瞬だけ引かれ、フェンリアの価格でフェンリルを購入しないかと英国から打診を受けていたが、その後の改造費を考えて見送った機体でもあった。

〈燃料残量の少ない機体から着陸しろ。出来ない機体は別の空港に行け。空中給油機を手配している〉

航空管制官からの指示を受けて大型機達は最寄りの空港への着陸を諦めて別の空港に行く為の給油を受ける為に編隊を組む。

編隊飛行は戦術的行動であるが攻撃や防御だけで無く、燃料消費を抑える為の行動でもある。

給油機の到着まで少し時間がある為に少しでも燃料を消費を抑える目的もあった。

〈ベルクト。最後尾に着くぞ〉

〈え？ あ、そうですね〉

バトラとベルクトは編隊最後尾に着く。

ベルクトは一瞬だけバトラの言いたい事がわからなかったが、同じ機体同士で編隊を組む部隊を見て察した。

この部隊は殆どが2線級戦力であり、機種も可能な限りで統一している。故に別機種同士での編隊飛行と言う地味に難しい技術を得ていない。故に別機種同士で編隊を組む事に慣れたバトラとベルクトが他に合わせられる位置に着いていた。

〈身体は大丈夫ですか？ ついでに機体も〉

〈ああ。被弾はしてないよ。ハアツー〉

バトラが盛大に溜息を吐いた事にベルクトが気になって問い掛けると自信を失ったバトラの声が通信機から吐き出された。

〈カウンターマニニューバが読まれてた……〉

〈可変翼ですから〉 〈何を当然の事を？〉

可変翼は通常の機動戦には強いがカウンターマニニューバなどの特殊機動戦では不利に働く事が多い。

マニュアル制御すれば良い具合に使えるのだが、マニュアル制御にするとともに飛べなくなる可能性もある。

ベルクトとファントムの口撃にバトラがガツクリとヘルメットとキャノピーをぶつけた音が響く。

〈…：ガラム隊の機体にしよう〉

それを聞いたベルクトが装甲キャノピーで見えない事をいいことに盛大なガツツポーズを決め、ファントムが悔しそうにパネルを叩いた。

ベルクトからすればお揃いの固定翼の前進翼機。ファントムからすればベルクトにバトラとお揃いと言うアドバンテージを取られたからだ。バトラからすれば整備費の掛かる可変翼機は相性が悪ければわざわざ選ぶ理由が無い。

〈それよりも少し離れた海上に岩が浮いていた。何か起きる事は間違いない。陸に降りたら身体を休めろ。最後の休みかもしれないぞ？〉

その言葉にベルクトは何を言っているんだとキョトンとして後方を見ると確かに薄っすらとだが、空中に浮遊する岩の群れが存在する光景を見て可愛らしい悲鳴を上げた。

作戦56 急襲を凌いで……

フリゲート艦の垂直発射装置^sから火の矢が撃ち出される。艦対空ミサイルのそれだった。

放たれたミサイルは炎と共に白い煙を吐き出しながら向きを変えて、重力のある地球の中にも関わらず、浮いている岩石群へ飛んで行く。

フリゲート艦のミサイルが岩石に突き刺さる直前には戦場に到着した戦闘機群の主翼や胴体に下げられたミサイルがリリースされる。

ミサイル群は青空を背景に白い尾を引きながら真っ直ぐに岩石群へと向かい、フリゲート艦のミサイルに次いで戦闘機の空対空ミサイルが岩石群に突き刺さる。

宙に浮かぶ岩石の一部は砕け散り、一部は大きさを小さくするが、砕け散った分の岩石と同量の質量を持っているだろう岩石が空間の揺らぎの中から現れる。

第2波、第3波と同じ事を行うが結果は変わらない。

「弾薬の無駄」

「金の無駄」

「燃料の無駄」

それを大型のタブレットPCの画面越しに見ていた男3人が漏らす。

最初に口を開いたのはサイファーと呼ばれるエースパイロットで次いで声を出したのはサイファアの唯一無二の相棒であるピクシー、そしてこの2人から新しい機体についてのノウハウを学びながら機種転換訓練を終えたばかりなのか薄っすらと汗を流しているバトラだった。

「この後の被害を知っていますか？」

そんな男達に声を掛ける1人の少女。

独立飛行隊が抱えるアニメの1人、ファントムだった。

「出現したザイの2機編隊にフリゲート2隻が撃沈寸前の大破、2機の戦闘機と1機のAJZ戦闘機が撃墜されました。幸いにもパイ

ロットは無事だそうです。それでもA J Z戦闘機が居たからこその損害です」

「それでも酷いな」

「辺境に出現したのが痛い」

フロントムの言葉にサイファーは漏れ出てしまったと言う風に声を発したのとピクシーが全員に見える様にタブレットを傾け、地図アプリとPMU経緯で流れた動画ファイルを見せる。

似たよ様な浮遊岩石群は二線級戦力が中心の後方や辺境基地ばかりに出現した事を示す赤点とその赤点をタップするとその場所に基地の画像が再生され、突然の天変地異と奇襲で対応が遅れた部隊が映し出され、同時に飛び立つどころか地上で破壊される戦闘機や、パイロットが乗り込む間も無く格納庫ごと破壊される機体、僅かに飛び立てた機体もなんとか奮戦するが撃破される画像が流れ、再生した場所では前線に比較的近かった事からか前線から急行した一線級部隊により撃墜されるザイが映った。

「これで幸いなのはザイを運べるゲートが少数派な事です。ニュージーランドやグリーンランドなどのゲートは怪奇現象だけで済んでいます」

「それは良かった……と言うべきでしょうか？」

フロントムの言葉を聞いたベルクトが零した言葉にバトラが軽く頭を小突く。

「良い訳あるか！ この事が原因で俺が大変な事に成りかねないんだぞ！」

「タイミングが良すぎるが故にタイミングが悪すぎたな」

「PJ曰くあの手の彼奴らは放って置いたらやばいらしい」

此処で思い出して欲しいのは今回のベトナム訪問の理由だ。ザイのワープゲート出現によりてんやわんやしているが目的はロシア側の現場戦力との顔合わせで所要時間は1日程だった筈だったのだが、ベトナムで朝を迎えてしまった。

ベルクトと同じヴィラで一夜を過ごしたと言う他人から見れば喜ばしい状態であるが、バトラにとっては死刑執行へのカードにもなり

兼ねない状態でだ。

「バレたら殺されかねないですね(まあ、多分ですが一夜限りですが2人の部屋に監禁で済まされるでしょうけど)」

「(それは監禁だけで済まされない状況です)」

「(!? 直接脳内に!!)」

ベルクトが自分が原因にも関わらずそんな事を呟くとファントムが謎原理でテレパシーでベルクトだけに突っ込む。

小松にいるアンタレス隊のあの2人に今回の事が知れば殺される事は無いだろうが、バトラの身は五体満足では済まされない事は確かだ。

「本社と八代通にベトナム政府を黙らせて貰わないと動けない」

バトラが生春巻きを口に放り込む直前に呟いて話を変える。臭い物には蓋をしろと言う訳では無いが、予測可能回避不可な案件はその時まで忘れる事が1番だ。

ベルクトもバトラの言葉に込められた表の意味。小松防衛に早急に戻らなければならぬと言う事に関しては同意しており、フォーを飲み込みながら領き、ファントムも口や動作にはしないが同意しながら紅茶を口に付ける。

ここで遅まきながらにベトナムに滞在している理由を話そう。

最初は西側諸国と東側諸国に分かれている国同士の面会故に都合の良い場所としてベトナムを選んだ。そこにザイがワープゲートを繋げて強襲し、量産型A J Zを駆るPMC部隊が応戦した。しかしながら結果は強襲に加えて練度不足と機材の性能不足が露呈。

これによりベトナム政府は価格の安いPMC部隊での防衛に不信感を抱き、せめてより強い部隊の派遣が決定するまで独飛のファントムとグリペンを手放すまいと八代通と交渉。MS社も八代通の護衛と小町防衛に派遣しているアンタレス隊を金の払えないベトナム政府では無く、金の払える日本政府の任地に返さなければならぬ為に交渉している。

そして八代通が戻れない以上は否応無く護衛である独飛とアンタレス隊は足止めを喰う事になる。

そして同時にバトラのアレやコレやソレが危険な状態となるのだが、そんな事は関係ないと言わんばかりに慧の口が開いた。

「あの……サイファーさんとピクシーさんはどう思いますか？」

慧の言葉に呼ばれた2人は首を傾げる動作をするとファントムが補足説明を行う。

「慧さんの引っ掛かりは何故に今頃になってこんな事をしたのかと言う意味ですね。確かに慧さんがザイの総司令なら一も二もなく今回の様な戦術を取るからですね」

ファントムの言葉にサイファーが答える。

「俺はソルジャーエースじゃないからな。何とも言えないが……俺が思うに使わなかったのでは無く、使えなかったと言う意見だな。物資とか技術面とか？ 相棒は？」

「俺か？ 俺は使いたくないだな。核と同じだ。有効な手段であるが、使うにはあまりにも課題が多いから使わなかったと言う感じだな。これしか無い状況になったのか？」

バトラが2人の話を聞いてファントムに振るとファントムも答える。

「虚心に事実だけを考察すれば別の景色が見えてくる筈です。結論ありきで考えるからおかしな事になるんですよ」

「では、我らが参謀はどうお考えかな？」

バトラの言葉にファントムが紅茶で喉を潤すと意見が被るのは癪ですがと前置きを置いてから語り始める。

「私もピクシーさんと同じ使わなかったと言う意見です。空間を捻じ曲げる訳ですから、因果律を破るのと同義です。厄介なパラドックスは当然ながら起こるでしょう。そうでないにしてもこれだけの空間異常です。地球環境への影響は計り知れないでしょう？」

「つまりはこんなハイリスクハイリターンは差し迫った状況でないと使わないと？」

バトラの言葉にファントムが無言で頷く。

独飛とMS社はこれまで多くのザイが建築した前線基地を最低限以下の偵察行動で破壊して来た。と言うのもグリペンが持っていた、

思い出したのは今までの時間遡行で手に入れて来たザイの行動パターンだ。

ザイとしては相手が知り得ない筈の情報を持って奇襲を行って来た訳であり、今までに無い程にザイ側も圧迫されていると言うのが八代通やバーフォードを始めとする上層部は判断しており、今回の一件はある意味では今のザイが圧迫を受けている証拠でもある。

逆に言えば自分達の切り札に賞味期限があると言う訳でありそれに気付いた慧が立ち上がり掛けるが、バトラとフアントムがわかっている手で制する。

サイファーとピクシーはグリペンの思い出した情報を知らない人間だ。この情報も上層部の判断で公開する事になっており、不用意な情報公開は漏洩とみなすと言われていた。

昨夜にわかった事だが、グリペンと慧はロシア機から協力を得る為にこの情報を漏らしてしまっているが、致し方なしとして簡単な説教で済ませている。

「？ ん？ んんん……」

「どうかしたのか？」

バトラが唸りだした事に慧が心配そうに話し掛ける。

「なあ。敵さんは圧迫を受けてるんだよな？」

「そうですね」

フアントムが答えるとバトラは更に続けた。

「これは起死回生の手なんだよな」

「そう考えて良いと思います」

人類側の戦力は現在の一面に集中出来る状況故に何とかなっていると云っても良い状況だ。そんな中に二面目が出来れば忽ち人類側は存亡の危機に立たされる訳だが、バトラの懸念は別の場所であり、それを確かめる為にベルクトが声を掛けたのを良い事に問い掛ける。

「お前がワープゲート作るなら何処に作る？」

「それは……首都や主要な基地の周辺……」

「そこまで言っただけベルクトが気付いた。」

「こんな場所や海上じゃ無くて都市部に開いた方が絶対に効率的で

す。どうしてこんな場所に」

「それがわかれば……ファントム、どうした？」

ベルクトの軽い気持ちで出て来た言葉にファントムが息を呑む音が嫌に響くという程に大きかった所為かバトラが問い掛けるとバトラの手の中にあつたタブレットを奪うと世界地図のアプリを開くと何かをブツブツと零しながら操作する。

操作が終わるとファントムが顔を上げる。ファントムの頬は紅潮した状態に加えて目がギラついた輝きを放っており、バトラは何かあると悟ると携帯端末を懐から取り出す。

相手の表情や言葉からある程度は察せなければ兵装士官など務まらない。

「南極上空に飛ばせる偵察機はありますか！」

「ミッドウェー基地の無人偵察機を飛ばす様にバーフォードに連絡する」

〈貴様も無茶を言うようになったな〉

ブリーフィングルームにバーフォードの声が響くとプレゼンクターの画像が変わる。

晴天の空に白い大地。その間に幾つもの不規則な黒い点が不規則に並んでいる。

〈バトラとファントムの言う通りだな。南極上空に謎の浮遊群はあつた。だが、なぜわかつた？〉

〈知りませんよ。ただ、ファントムの要請ですから。無駄は無いだろうと信じてます〉

南極上空。そんな場所に浮遊岩石群が現れるとは予想していなかったバーフォードと八代通は驚きを隠せずにした。

〈だが、グツジョブと言うべきだろうな。普通の手順でしたら一

月は掛かっていた。戦果分の支払いで事実上の30パーセント負担だな」

無人偵察機と言えども直ぐに飛ばせる訳では無い。故にバトラはバーフォード経由でMS社の無人偵察機隊に依頼を出すと言う形で動かした事で大幅な時短に成功する。ただしここ最近の出費によりバトラの通帳から1番端の桁が消えた。それでも30パーセント負担だが、それでも8がギリギリで9に戻った程度だ。

金の話で盛り上がるMS社だが、ファントムの咳払いで雰囲気は元に戻る。

「プラトニックソリッドですよ」

ファントムの言葉でベルクトと八代通が察するとベルクトが分かりやすくする為にプレジエクターに繋がったPCを操作して画面を編集する。

すると地球を正十二面体がすっぽりと覆ってしまう。

これを見るとバトラも察して見せる。

「成る程な。確かにこれが分かれば未発見のゲートも割り出せる。この配置は言うならば……接着剤か」

バトラの言葉に慧が首を傾げるとバトラが適当な紙に点を2つ描く。

「こいつの最短ルートは？」

「簡単な問題だよな。点と点をくつつけるだけだ」

「正解だな。だが、こうやって丸めてくつつけた点だが手を離すと……」

慧の回答を聞いた後に紙を丸めて点と点を繋げたバトラだが、バトラの手が離れた瞬間に紙は元の平面に戻ってしまう。

「テープやノリが必要だが、何かをくつつけるなら磁石でも事足りるよな？」

わかるかとバトラが問い掛けた瞬間に慧でも言わんとする事がわかったと表情に浮かべるとバトラは頷いてから答える。

「ゲート1つ1つが磁石みたもので互いが互いに引っ張りあってゲートを維持している。そして空間を繋げる以上は相応のストレスがか

かる。だからハニカム構造にしてストレスを逃がし易くしているんだ。逆に言えば、何処か1つが崩壊すれば全部崩壊する」

〈「そうだな。で？ あのゲートの破壊方法は？」〉

バトラの言葉に通信機からバーフォードの声が聞こえるとバトラが大きく息を吐く。

「知る訳ねーだろが！」

〈「威張るな!!」〉

バトラの言葉にグリペン以外が突っ込み、フアントムに至っては頭をスリッパで叩き、ベルクトは脛に的確すぎる蹴りを放っており、バトラは頭と脚のダメージでのたうち回る。

「ちよっと思ひ出した……関係無いかもしれないけど……」

グリペンの言葉に慧が話してみると告げるとグリペンは遠慮気に話し始める。

「アンフィジカルレイヤーを下れば瞬間移動が出来るって話を聞いた事がある」

「それはどんな話ですか？」

「一旦だけドレイヤーを下ってから上がれば見かけ上の距離を0にできるって話」

見かけ上の距離をゼロに出来る。これは実際のシャルル・ド・ゴールの中で経験した者も居るので驚く話で無いが、グリペンが更に話を続けると現在の状況とピッタリ過ぎる情報が次々に吐き出された事で通信機の向こう側のバーフォードとバトラ（未だに痛みでのたうち回っている）以外から非難が混ざった目線を投げられる。

目線のそれに気付いたグリペンは慌てて首を振ると運用は出来ないと云う情報を吐き出した事で慧が喰い付くとベルクトは更なる情報で、アンフィジカルレイヤーは一定以上の階層に下がるか一定時間以上滞在すると物質は分解されて概念そのものへと変わってしまう。

つまりはザイで無ければアンフィジカルレイヤーは浅い階層か短時間しか居られない為に短距離ワープしか出来ず、そうなれば出入り口となるゲートも大量に作る必要がある。

さらに面白い情報としては正多面体を使って応力を逃がし易くし

ても相当なエネルギーを供給しながら制御する為の重心となる場所がどうしても必要となると同時にその重心はとても脆く、崩壊すれば全てを道ずれに崩壊すると言う爆弾でもあると言う情報が紡ぎ出された。

「バツキャロー!!」

そしてグリペンが重心の情報を出し終えた瞬間に復活したバトラが後ろからグリペンにドロップキックを喰らわせ吹っ飛ばし、ファントムとバトラの追撃で触れる程度のキックをリンチよろしく喰らう。「お前……なんでそんな事が出てこないんだよ！ 似た状況に情報ならヒットするだろうが！」

「バトラさんの言う通りですよ。どんなインデキシングをしているんです、あり得ないでしょう！」

流星に不味いと

「しかもこのポンコツはしれっと弱点も知っちゃってるじゃないですか！」

「ファントム、やめてやってくれ！ なんでも知ってる感じだけどこいつはポンコツなんだよ」

ファントムの突っ込みに慧が羽交い締めにしながら突っ込みに突っ込みで返す。

「お前の彼女だろ、早くなんとかしろよ！」

「このポンコツ具合はどうしようもありませんよ！」

バトラを羽交い締めにして引き剥がすベルクトが突っ込みを入ると八代通がベルクトからの情報は殆どが八代通は自分の姪に当たる人物からの情報とあつてか、懐疑的な意見を放つがバーフォードの誰からの情報か確認の為に救出されたグリペンに問い掛ける。

「？ 元はハルカ叔父さんの理論だつて言つてた。ついでに馬鹿みたいな意見ばかり出してくるから度し難いって」

ついでに出てきた愚痴の内容にそれを聞き出す片棒を担いでしまったバーフォードがクライアントである八代通の機嫌を損ねたか冷や汗を流しているが、八代通は自分の案なのかと自分の事ながら頭を抱えていた。

「荒唐無稽なプランであります、少なくとも現状の中では最も現実かつ唯一の手段でしょう」

「だが、どうするつもりだ？ 深層のアンフィジカルレイヤーはザイだけが移動出来る領域だろう？」

アンフィジカルレイヤーに物質を叩き込めばたちまち概念に戻されてしまう為になんの対策も無しに突っ込めば漏れ無く犬死が待っている。それに問題はそこだけでは無い。

「航続距離は大丈夫なんでしょうか？ 私やバトラさん、ファントムの機体なら間に合うかもしれませんが、グリペンの航続距離では……」

そう航続距離的な問題だった。だが、ファントムはそれも加味しての発言だと胸を張る。

「アンフィジカルレイヤーにある時空の歪みを経由すれば距離を短縮出来ます。感知の方法は既に経験済みです。侵入については……お父様が既に作っている筈では？」

ファントムからのキラーパスに八代通がなんで知ってんだよと愚痴を零しながらではあるがいつもの不敵なペースを取り戻した。

「パクファ救出用の案だったんだが、色々あったもんだから捨て置いたんだが、今の情報があれば充分に検証の土台に乗せられる」

何をするつもりだとバトラが警戒する前で八代通はパイロットとアニメ達の顔を巡らせるとバトラとベルクトとファントムが並び立っている場所に顔が来た瞬間に不敵で不気味な笑みを口角を持ち上げて作る。

「アレをな、もう一度使ってみようってな」

八代通のその発言に視線を向けられた3人が不安そうに眉を震わせる。

作戦57 アンタレス隊の真価

ベトナム政府を黙らせる事に成功した事で小松の地へと戻って来たバトラ御一行だが、直ぐにでもゲート破壊作戦の為の準備が行われており、久々の帰郷を味わう暇など何処にも無かった。そんな中でベルクトとファントムは目の前に鎮座する物体を見て心の底からウンザリした感情が漏れ出し、顔を染めていた。

油圧ジャッキに載せられたそのブツは円錐形の物体に大振りなアンテナと鰭を広げた様な熱帯魚の様な形をしたそれ。

そしてソレはベルクトとファントムに大小様々な黒歴史や戦果を裏表関わらずに残して記録よりも記憶に存在を刻み付けたブツ。

E G G 分割投影機ことパラレル・マインズだった。

これにファントムは二度と使うかと己の心に誓っている所為か顔に怒りに近い感情が現れており、ベルクトはファントムの様な怒りよりも険悪感を露わにしている。

「げっ！」

そしてベルクトを所用で呼びに来たバトラがパラレル・マインズを見てか半歩だけ後退する。

そしてベルクトはバトラが無意識に漏らした言葉で本人の接近に気付いたのか、バツと音が立てそうな程の速度で振り返るとバトラもなんと言っていていいかわからないと言う様な戸惑いの表情を浮かべていた。

コレの所為で彼もファントムとベルクト同様に大なり小なり、裏表で大変だったのだ。

主に直属の部下の女性3人の関係で。

互いに声にならない声や尻切れトンボにも程がある言葉が並び、伝えたい事が有るが伝えられる状況で無いと言う事で意味がなくなっている言葉が羅列されては風に晒されるバトラとベルクト。

「ああー！ もう！ 何をしているんですか！ バトラさんはささつと要件をおつしやつて下さい！ 進みません！」

こんな状況に巻き込まれたファントムは溜まった物ではないと叫

んで先を促すと八代通とMS社の技師達がベルクト混ぜた調整が要るから呼んで来いと言われたと伝えるとベルクトは此れは幸いと言わんばかりに一言だけ述べると小走りで行く。

「全く……初心な童貞君じゃないでしょうに」

フアントムもだが、ラファール救出戦でバトラはベルクトの下着を見てしまい、ベルクトは事故でバトラに下着を見せてしまっている。それが今更ながらに恥ずかしくなった故の現象だったのだが、改めて無意識に思い出した場合の羞恥心と言うのは何かと大きい。

「残念な事にまだ童貞だよクソツタレめ！ 悪いか！」

「いえ、悪くはないです（童貞なんですな……）」

フアントムの言葉に話題を変換したいバトラはキレ気味に叫ぶ。それにフアントムは内心で何人か食べているか食べられているか思ったのか内心で驚きながらも経験からか参謀職として情報を漏らさない様に努めたのか表に出す事は無かった。

「で、今更ですが」

「何に使うのか、か？ まあ、確実にアンフィジカルレイヤーへの防衛策だろうな」

「それはわかります。ですが、どうやって守るのかですよ」

フアントムの声を出した瞬間に答え合わせの時間だと言ったバーフォードの手がフアントムの両肩を強く押さえる。

まさかの衝撃にフアントムはバランスを崩して身体を大きく揺らすとバーフォードに文句を言わんとするが、上官で有ると同時に歯向かえない立場の人間に。さらに加えてバーフォードもそこまで強くしたつもりは無かったが不意打ちでダメージが大きくなった事を察して謝った事もあり、強く出し切れなかった。

「ブリーフィングルームに行くぞ」

バーフォードに連れられてブリーフィングルームへと赴いたバトラに少し懐かしい声が鼓膜を揺らす。

「おかえりなさいませ。お兄様」

「お帰りをお待ちしてしました」

詩鞍と詩苑だった。2人は椅子から立ち上がると恭しく頭を下げ

た事でバトラは歯痒さに似た感情を抱くがそれを察せなかつた2人は久々に見るバトラの顔に綻ばせた瞬間にベルクトが額に汗で前髪を付けて現れる。

格納庫での調整を終えた後に小走りであつたからだだが、バトラの出張に同行していた彼女に対して居残り組だった詩鞍と詩苑は恨めしそうな目で睨みつける。

「よし。全員来たな」

そんな彼女達だがバーフォードが話を進めようとした為に席に着き、何時もの様にバーフォードが司会を務める。

「此処に居るメンバーが今回の作戦に参加して貰うメンバーだ」

ブリーフィングルームに集まったのは独飛からはグリペン・と慧のペアとファントムが参加。MS社からはアンタレス隊全員が参加する。だが、アンタレス隊は今回の作戦の性格上少し特殊な参加の仕方をする事になっている。

その作戦なのだが、ベトナム組は作戦の内容をなんとなく察して居るが居残り組である片宮姉妹とカノープス搭乗員の一部はイマイチわかっていない為にバーフォードが作戦の概要を説明する為にPCを操作してプロジェクターに地球の画像を移す。

「北極海に現れたゲートから進行してゲートを維持している核を吹き飛ばす」

作戦内容を一言で示したバーフォードの声に連動した様に終点は北極海へと移されると詳しい内容を話すと言って北極海に浮かぶ岩石群を指示棒で叩く。

「現在、ザイは各地に我等がゲートと呼ぶ物を作っている。これはグリペンが言うにはアンフィジカルレイヤーを利用した転送装置らしい」

バーフォードの声に合わせて各地の岩石群の画像が次々に現れる。「コレが本格稼働すれば我々は背後を突かれてゲームオーバーだ。そんな事は許されない」

「ですがゲートの破壊は不可能だとされた筈です」

バーフォードの言葉に詩苑が手を挙げて発言する。

ゲートが発生した付近の各国は独自にゲート破壊を目的とした襲撃を行なっているが、岩石群の岩石を破壊しただけでは後で補充されるだけと言う結論に至っており、現状ではゲート破壊は不可能だと位置付けており、そう言う意味でバーフォードは肯定の意味を含めて頷く。

「ああ。従来の考え方、つまりはあの岩石群の破壊では不可能だ。だが、グリペンの証言とファントム計算による破壊は可能だと言うことが判明した」

詳しく解説すると言って岩石群に飛び込む様にカメラが動いたのかのように画像が変わる。

「このゲートの中はアンフィジカルレイヤーが広がっている。色々があるが物質が分解される空間だ。この空間の中にこのゲートを繋ぎ止める楔のような役割を担うコアがある。まあ、少しばかり特殊なザイだとも思ってくれ」

「どうやって破壊するんですか？ 物質が分解されるって事は突入すら出来ない筈です」

詩鞍が拳手しての発言を聞いてバーフォードが画像をパラレル・マインズの画像に変える。

「知っていると思うがコレはアニマの意識をスライスと言う物に変えてザイを友軍機に変える装置だが、今回はコレを友軍機にぶつけてアンフィジカルレイヤーからの鎧とする」

スライスは物質が概念に限りなく近い物でアンフィジカルレイヤーから完全に守ってくれるか通常の物体よりも耐えられる可能性が高い。つまりは氷が溶けるならそれよりも溶けにくい物質でコーティングしてしまおうと言う事だ。

「突入の方法はわかりました。核の破壊はどの様に？」

「八代通氏が言うには戦術核1発で余裕がある位らしい」

「その核はどこから？」

ファントムとベルクトの言葉にバーフォードが話を続ける。

「核はロシアから提供される。そして今回の作戦はロシア正規軍所属の第972親衛航空戦隊アニマ飛行部隊、通称名バーバチカとの協働

攻略作戦となる」

此処までで質問は有るかと告げたバーフォードのスライスを使った防衛が大丈夫なのか慧が気にしてか質問する。

「スライスはアニメの一部分だったな。彼女を心配しているのか？」

バーフォードの揶揄いに慧は顔を隠して否定しようとする。バーフォードが質問に答える。この辺りは大人なバーフォードに一日の長がある様だ。

「スライスの消滅に関してだが……細かな点は省くが、全く問題は無い事が確認されている」

これはシミュレーションでの計算故にぶっつけ本番より多少マシン程度の話なのだがバーフォードはあえてそこは話さない。現場に赴く人間に変な不安を抱かせればそれが原因で死にかねないからだ。

「今作戦に関して機体に特殊な改造の必要は？」

「もうしている。元々は複座型もある片宮姉妹のXF-3の潰した後部座席、それとお前の機体の余剰スペースにザイのコアを押し込んだ」

その言葉の慧が大丈夫なのかと心配そうになると技術的な面だからとバーフォードが八代通に目配せすると八代通がこれに答える。

「別にコアで制御する訳じゃない。あくまでもスライスを定着させる為だけの物だ」

「それとスライスはベルクトの物を使うから安心してくれ」

バーフォードからの補足にフロントムからの質問が飛ぶ。

「そこまでのスライスを分けられるんですか？」

「フロントムほど電子系が強い訳で無いが、Su-47は余裕があるドクター。それにこう言ったらダメかもしれんが……アニメとしての性能にも余裕がある」

バーフォードの発言に担当オペレーターであるマイケルとバトラが複雑な心境になったのか顔を伏せ、言った張本人でもあるバーフォードも顔を歪める。

「気にしていません」

そんな3人にベルクトは微笑む。

「私が人間だったら、アンタレス隊には居れませんでした」

普通の人間なら如何に才能があろうともMS社がアンタレス隊に期待するのは『情報不足な状況下での作戦行動に即座にして臨機応変に対応出来る部隊』と言うもののだが、これは満足なブリーフィングや打ち合わせ、擦り合わせが出来ない状況下でもその場でパイロットの技量を持って作戦を成功させる為の部隊とも言い換える事が出来るだろう。

成功率を単なる技量で増やすことは、非合理的で有るが、不測の事態が予測可能回避不可の状況で行われる高難易度作戦では技量で成功率を上げるのは支離滅裂に思えるが念入りなブリーフィングが出来ない状況なら逆に合理的に成功率を上げられる。

MS社が選定する精鋭部隊は高難易度作戦を困難な状況下でも技量を持って成功させられるだろう部隊と言う名目で選定され、その精鋭部隊の1つにアンタレス隊の名を記しているのはこう言った今回の様な情報不足の高難易度作戦の際に選定しやすい為で有る。

そしてベルクトがアンタレス隊に入りにしたのはアニメやドクターの運用する上で都合が良かったと言う意味も有るが、それと同じだけの理由としてアンタレス隊の存在意義を損ねない程度の技量がドクターのダイレクトリンクによる操縦ならそれだけの手腕は有ると言う点も含まれている。

無論ながら経験不足故に遅れを取るがそこはシミュレーションでも補えるし、今は戦争中故に生き残れば否応無く経験は積む為にそこまで危険視されていなかった。

つまりはアニメだからこそアンタレス隊に在籍出来ている訳であり、ベルクトとしてはアニメとしての性能が求められるならそれに全力で答える所存であり、頼られるなら本望だと心から告げたベルクトに暗い表情をして3人は杞憂だったかと安堵の笑みを浮かべて頷く。「ベルクトにはバトラの機体とダイレクトリンクを行い演算能力を稼いでいる。これで4機にスライスを纏わせても十分なスライスを確保出来る」

だが、それはバトラ機体が無事で有るからこそその事でもあり、スラ

イスの数から作戦が一定時間経過するまで、具体的にはスライスを一定数消耗するまで被弾が許されないと云う枷をバトラに付ける訳だが、バトラはバーフォードから枷をつけられても大丈夫だと告げる。

「自信満々ですね」

「ウチの部下なら俺1人くらいは守りとうしてくれさ」

フロントムの茶々に流し目で片宮姉妹とベルクトを見るバトラが答えると見られた3人は力強く頷く。

「それと特殊な改造を施した機体はXF―3と新機体のADF―03だ。各員が間違った機体に乗らない様に。他は……よし、具体的な行動の説明に入るぞ。突入班はアンタレス隊の4人と4機、独飛の3人と2機、バーバチカのフランカーとファルクラムの2人だ」

メンバーを改めての紹介でバーバチカの面子を見たベルクトとフロントム、バトラの目付きに鋭さが宿る。

「全機はスライスを纏わせた状態でゲートに突入。ザイ防衛隊を掻い潜って核に接近した後核弾頭を発射してこれを破壊する」

具体的と言いながらそこまで細かくないどころかぶつ切りも良いところなバーフォードの言葉だが、これで良いとバトラは内心で頷く。

こんなぶつ切りなブリーフィングしか出来ない状況から行われる作戦で無ければ、アンタレス隊の真価は測れないのだから。

作戦58 ゲート破壊作戦始動!!

「もう2日ですよ」

ノヴォシビルスクの航空機工場。

広大な土地を持つと同時にエンジンサイズの関係か大型になりやすいロシアの航空機に合わせ作られたかの様に巨大な航空機工場にMS社が誇る精鋭部隊、アンタレス隊の面々が自分達の乗機を見張る様に格納庫に集まっていた。

そんな中でベルクトがロシアアンティイーを飲むバトラに話し掛ける。

「慌てるな。俺達がどうこう言ってどうなる」

のんびりとしているバトラだが、状況は切迫している。

バトラ達が現地到着前にロシア軍が泣け無しの正規軍を導入してゲートに2発の核弾頭を撃ち込んでいた。だが、核弾頭はゲート突入直前に落下、爆発しなかった事が判明した。

原因はザイ特有のアンフィジカルレイヤーであるのだが、ロシアは大きな間違いを犯していた。

「アップローチから……作戦に協力できないとか……」

「爆発したとしてもゲートは破壊できませんけどね」

ロシア人の多さに批判を途中で辞めた詩鞍に対して詩苑は棘のある声で告げる。

ゲートの破壊はアンフィジカルレイヤーの先にある核を破壊しなければならぬ訳だが、ロシア軍の作戦では表層で核爆発するのでどうあがいても破壊できない。

無論ながらそれは言葉を選びながらロシア側に抗議したが、ロシア側は作戦への協力を無かった事にしようとする。それを八代通は向こうの言い分に理解しながらも自分達の言い分を押し通して3日の時間を稼いだ。

「八代通に任せておけばいいだろう」

余裕綽々なバトラにこの3日で八代通はどうするつもりかと思つた詩鞍と詩苑だが、そこはバトラとの経験と思想で差に出た。

バトラは降って湧いて出た時間を急拵えの装備だった各種新装備

を調整する時間に当てた。意外にも追加調整は1日で済んでしまい、今日の朝には万全な状態で済ませてしまっていた。

作戦前に時間は降って湧けば作戦の為に調整や整備に入って備える。

そして3日で作戦を練り直すなんて出来ないと思う2人に対してバトラは八代通ならやれるだろうと何処かで根拠も無く思っていた。と言うのも八代通への信頼があるからこそだ。

「ま、頭脳労働。餅は餅屋だ」

なんてものは無く、頭を使う仕事はそれを生業とする奴に任せておこうと言う心情である。

ベルクトは餅は餅屋の意味を支給された携帯端末で検索して八代通を信頼しているからの言葉では無い事を悟ったのか、苦笑いを浮かべたと同時にこれはバトラだと言う謎の安心感を抱いた。

「今すぐにブリーフィングルームに集合だそうです」

詩苑が携帯端末に届いたメールを読み上げた瞬間にベルクト以外の雰囲気急変した。

「よし、集まったな。時間がない手短に行くぞ」

八代通が航空兵全員が集まったブリーフィングルームに入るなり、挨拶もそこそこで作戦内容の変更点のみを告げる。

まずは使用機材の変更が告げられた。

小松ではフロントムを筆頭にグリペン・慧の独飛メンバーに加えてロシアからは現在稼働可能なバーバチカの機材の全て、そしてMS社からはアンタレス隊の全力出撃だったが、ここに緊急で改修したAn-225を加えた上で核爆弾から100tのTNT爆薬を使用した巨大な通常爆弾を投下する作戦に変更される。

これに伴ってベルクトが保護膜として展開するスライスを片宮姉妹のみに変更して処理能力のブースト不要にした上で空いたブース

ト用の容量はフロントムに献上した上でフロントムがバトラの保護を行うと同時にAn―225の保護も行った上でゲートへと突入する事となる。

これによりフロントムとベルクトは大至急でセッティングの変更を行う事になり、格納庫へと移動した訳だが……

「これなら10分もあれば完璧ですね」

場所はバトラの機体に取り込んで今回の為に仮設したダイレクトリンク用コクピットブロック、わかりやすく言えばドーター用コクピットに収まったフロントムが中のプログラムを見て眩くとベルクトは2日で仕上げた自分との差と同時にバトラを守る仕事を取られた2つのストレスで静かにイラついていたベルクトが綺麗な笑顔を浮かべたまま握り拳を握る。

「なんか……性格変わったな」

それを遠巻きに見ていたバトラが自称転んだ怪我の応急処置を終えた慧に眩く、ベルクトの性格が変わった事は分かってもなぜ変わったかわからないのに加えてなんでイラついているのかもわかっていない様子のバトラに慧は何も答えずに溜息だけを吐く。

そんな中でも作戦開始時間は刻一刻と迫り、遂にコクピットへと全てのパイロット達が滑り込み、エンジン始動を行った事で格納庫に様々なエンジンが奏でる轟音が支配する。

〈アンタレス隊は滑走路へ進入を開始して下さい〉

バーバチカから離陸し、独飛の2機が滑走路に並び始めたタイミングでアンタレス隊の4機も格納庫からゆっくりと進み出ると滑走路へと向かう。

バトラの機体を先頭を進み出るとその斜め後ろに詩苑と詩鞍が付き、少し遅れた挙動でその後ろにベルクトが張り付く。

〈お先に〉

バトラに通信を入れたフロントムが通信を終えると同時に滑走路を爆音を吐き出しながら滑り、空へとその巨体を浮かべる。

グリペンは空中での衝突を避ける為かわざと滑走のタイミングをズラしてから滑走して空中へと浮かぶ。

〈滑走路への進入を許可します〉

管制官からの指示を聞いたアンタレス隊の4機は編隊を維持したまま滑走路へと進入すると、機体をゆっくりと地面で動かす事が限界だったエンジンに対して本格的にフューエルを叩き付ける。

エンジンは充分な量のフューエルを受けたからか今迄以上の爆音と共に青い火炎を噴き出すが、バトラの機体だけが異様な程に青い。

「アレが戦利品で作成されたマツハ3・0級エンジンの試作品……」

その炎を真後ろから見るとベルクトが複雑な心境で見守る。

バトラのエンジンはマツハ3・0を比較的低燃費で実現する為に作成された試製エンジンを搭載している。

速度を出すには軽量化も上げられるが手っ取り早いのはエンジンの出力強化なのだが、今の技術力では燃費やエンジン本体やパーツの様々な面での耐久度的に難しかったのだが、ザイの登場によりパーツ耐久度の問題が解消され、バトラの機体に試験的に搭載された。

技術革新などが起きた訳ではない。イタリアのとある科学者がとある技術者と共にノリと勢いと狂気に陥り、ザイの残骸でパーツを作成すると言う愚行を行った事で完成したエンジンだ。

「マツハ3なんて出せませんけど……」

ベルクトが頭を振って雑念を取り払うとスロットルを上げて、誰よりも遅れて滑走を始める。

バトラの機体だが、エンジンはマツハ3を充分よりも少し不足する程度の燃費で叩き出すが、流星にボディまでザイの残骸で作る事は出来ず、更にマツハ3での巡航は機体形状の問題も相まってマツハ2・8から2・9が限度、手綱を握るなら2・5から2・6が限界の機体だ。

ただし、小型化には成功したので武装と航続距離の強化が行われている。

これはバトラの速度よりも継戦能力を重視する思考とも一致している。

3つの部隊はそれぞれの部隊に分かれて編隊を組んで作戦空域の

方角に機首を向ける。

編隊は2・4・2の編隊で些か変則的だった。

これはバーバチカ、独飛からの連合部隊結成に対する難色を示した故に組まれた編成で、バーバチカの後ろにMS社、その後ろに独飛が飛び、今回の作戦の要であるAn-225はMS社の編成の中央を飛んで護衛しながらザイのワープゲート内に侵入して中枢のコアに100tのTNT爆薬をお届けして破壊する作戦である。

「来たな」

暫くは個人間での通信が入っていた連合部隊だが、MS社の面々は初めての未知な敵勢力圏への侵入と言う大仕事に適度な緊張感を維持する為に互いに一言を発して無かったが、無線機とリーダーに流れる砂嵐にザイの勢力圏に入った事を否応無く自覚させられる。

〈もうすぐゲート外縁です。シールドオンまで20秒〉

〈特殊兵装を起動する〉

ファントムからの通信が入ったのを認識したバトラがコンソールを弄って、背部に背負う様に担がせた尖った形状のコンテナを起動させるとファントムからは起動の確認とデータリンクが行われた事を報告するメッセージがバトラに届く。

バトラはそのメッセージを読むと自然と操縦桿を握り直すのとキャノピー裏のモニターにザイのゲートを示す岩石群が映し出される。

幸いにも護衛機はロシア正規軍の単独行動のお陰で無くなっていた。

その事にバトラは癪に思いつつも感謝すると同時にファントムから残り10秒のカウントダウンが行われ、バトラはAN-225が通れるだろう隙間にエスコートをしながら、ゲートの岩石群を潜り抜けた瞬間にゲートの内側、ザイの世界へと侵入する。

そして異常な世界へ入ってしまった事を認識したのは人間の五感では無く、機械だった。

〈計器異常!!〉

〈落ち着いて!〉

遅れて侵入した詩苑に詩鞍が嗜める。

実際に全ての機体のディスプレイに映し出された高度と速度計はあり得ない数値を示し続け、戦術マップはGPS情報が無くなったからか痙攣する様にブレると同時にノイズが走る度に徐々に欠けて行く。

そんな異常状態だが、キャノピーディスプレイには気味が悪くなる程に快晴な青空が浮かぶが足元には大地は愚か海原も無い。真正正銘、文字通りの空の中に放り出されていた。

あるべき物が無い異常な景色に加えて身体にも痛みや目眩、頭痛や何かが腐れ落ちるとでも言える感覚にバトラの視線が外からコクピット内の自分の脚に向けると既に半分がゆっくりと水の中で溶ける角砂糖の様に無くなっていた。

〈!! ファントム!!〉

ファントムは命を危機を感じた人間だけが出せる声で聞こえたバトラの言葉を聞いて素早くパラレル・マインズを起動させてバトラの機体に纏わせる。

バトラの機体が薄いエメラルドグリーン之光に包まれると溶けていた足が即座に元に戻る。

バトラは感覚を確かめる様にペダルを踏んでいるとファントムからの通信が届く。

〈背部の Airborne Warning and Control System, Pod A W A C S P はしつかりと作動しています〉

A W A C S P、簡単に言うならば、戦闘機を簡易的なA W A C Sにする為のポッドとでも言うべき代物である。サイズと搭載方法の関係で今はバトラにしか使用出来ない逸品だが、今回の作戦では有り余る処理能力をファントムのスライスの数を増やす為の支援用コンピュータの様な運用をしている。

これのおかげで輸送機に追加のスライスを纏わせた上にバトラの防壁も展開出来た。

ベルクトの場合は元々に性能では2機が限界だった故にバトラが浮いてしまう。ファントムに処理能力をバトラ用に割ると中枢まで

のエスコートが難しくなる為にベルクトに使用する事になったが輸送機が増えた事でファントムに使った方が効率が良いという結果となり今回はファントムの為に使用している。

〈エスコートお願いしますね〉

更にエスコートに必要な情報も元来のAWACSの能力を使う事で軽い負担で行える為にファントムとしてもAn-225に回せる処理能力が増えるなどこれが無ければ今回の作戦にベルクト以外のアンタレス隊が参加する事は不可能だっただろう。

〈各機のマップ情報を更新！ ノーズダイブ、ナウ！〉

緑色に光るバトラの機体の前を橙色に輝く機体が飛び、それを追う様に水色の機体が飛び、その2機の後ろに続くバトラを追う様に緑色に輝く巨大機と白色に輝く戦闘機が飛び込み、少し遅れて白い戦闘機が飛び、その後には続くのは逆落として降下する緑色の戦闘機と紅色の戦闘機だった。

作戦59 核を目指してフィヨルドの入り江

〈エンゲージ!!〉

ゲートへの突入したバトラだが、ゲート出入り口付近から少し離れただけで直ぐにゲート内に潜んだザイからのインターセプトを受けていた。

バトラはAn-225を目指すザイに気付いて、カジキマグロの吻を思わせる機首を向けると同時に交戦を知らせる符丁を叫ぶ。

インターセプトに上がったのは未知のザイだった。

装甲は白い筋が入った水色の結晶体に白い装甲を所々に張った外見は今まで通りだが、形状は鳥と航空機を混ぜた様な形状だった。

機首の様な物の代わりに何か嘴を思わせるパーツから鳥で言う首に当たるだろう場所から伸びた首無し胴体に鳥と航空機の翼が混じった様な翼に尾羽に似た形状のパーツからジェットエンジンの噴炎を吐き出している。

〈初めてのタイプ!? 油断するなよ!〉

初見のザイは機銃でバトラを牽制すると真っ先にAn-225を撃ち墜としたいのか尾羽を真下に直角で向けるとヘリのように直角に急上昇してバトラを無視しようとする。

〈FOX2!!〉

だが、バトラは真上に逃げたザイに対して驚きながらも染み付いた動きでAWACSPを支える強化支柱に敷設されたレールに載せられたミサイルを撃ち出さんとする。

ローレンツ力で前方に動かされたレールに挟まれたパレットが急停止するとその慣性力でミサイルが前方へと凄まじい速度で発射された1秒後にロケットエンジンが点火、素早く音速の壁を突破するとザイに土手っ腹に命中する。

普通のミサイルなら真上に逃げた敵を追って当てるなど出来ないがミサイルにも3全周に向けられる偏向ノズルを搭載される様になった事でアニマの制御なしでもほぼ直角に近い軌道で追える様になった。だが、レーダーのロックオン機能が落ち着いていない。しか

し今回のミサイルはレーダー誘導では無く、昔ながらのレーザー誘導方式で誘導されるミサイルだ。

そしてバトラの機体だが、キャノピーに搭載された蜘蛛の複眼の様に配置された丸いパーツはレーザー誘導空対空ミサイルを下方以外ならばオフボアサイト機能の応用で視界にさえ納めれば誘導出来る様になっている。

レーダーではなくレーザー誘導故に誘導出来たミサイルはザイの隙を突いていたらしく見事に撃墜した。

〈スプラッシュワン！〉

〈グツキル！〉

バトラの敵機撃墜の符丁に対ザイ戦用に度重なる改造を受けて原型機とは違ったシルエットになったSu-47-ANM ベルクトを駆る、アニマのベルクトが賞賛を送ると同時にバトラが撃墜したのと同じタイプのザイの背後に張り付く。

「取ったー」

ベルクトが機銃のトリガーを引こうとした瞬間にザイの尾羽が直角で上向きへと変わる。

これにより推力が真後ろから真上に変わった事でザイは下方に垂直移動を行い、ベルクトが通り過ぎたタイミングを狙って逆再生するかのように元の高度に戻り、逆さを向いたベルクトの機体と正面から向き合った。

〈FOX2!!〉

ベルクトの主翼に吊るされた短距離ミサイルが炎を吹き出しながらザイに正面からぶつかり合い、空に赤い花を一瞬で咲かせると同時に機体は逆さから復帰すると同時に背後を向く。

赤い花が散ると同時に吐き出された種子の様にザイの残骸が虚空に落ちて行くとベルクトは直ぐに機体を残骸から飛びさせせる。この一連の動作がされたのは僅か数秒だった。

背後を取られた筈のベルクトがどうしてヘッドオンに持ち込めたのか？ 答えは意外と簡単だ。

まずは、ベルクトがオーバーシュートしてザイに背後を突かれてし

まう。普通なら此処でブレイクして逃げの一手だが、ベルクトの所属する隊の隊長であり、長機でもあるのは世にも珍しいカウンターマニューバの達人だ。

そんな彼から訓練を受ければ否応無くカウンターマニューバを喰らうと同時に学ぶ。

ベルクトは背後を突かれたと察すると同時に機体をクルビットと言うその場で宙返りする技で背後に機首を向けてミサイルを発射、後はアニメ特有の超誘導でミサイルを命中させる。

この間は直進しか出来ないベルクト。その隙がわかっているのかわかっていないのかを置いておき、同じ外見のザイがベルクトに迫る。

〈〈〈イン・ガン・レンジ〉〉〉

だが、ベルクトは回避行動を取らない。否、取れなかった。

〈〈〈ファイア!!〉〉〉

即座に十字砲火がベルクトの主翼を掠める様に一瞬だけであるが通過したからだ。

ベルクトの上でザイが爆発すると同時に破片から逃れる様にベルクトは加速、その後ろをまたも挟み掠める様に白く輝く黒と白の戦闘機が交差しながら行き違い、それを追う様に鳥の様なザイが1機つつ追い掛ける。

〈〈詩苑!〉〉 〈〈詩鞍!!〉〉

互いの名を同時に呼ぶ黒と白の戦闘機のパイロット。

2機は互いが交差する様に急速上昇を行う。その軌跡を描く2本の飛行機雲は互いに絡み合い、白い1本の鎖の様になりながら天空を目指す。

ザイもそんな2機を追い掛けて上昇する。

それが姉妹の仕掛けた罠とも知れず……

〈〈ナウ!〉〉 〈〈リリース!〉〉

互いに交差し合った瞬間に主翼の端に載せたミサイルをリリース。ミサイルはほぼ真横と錯覚する様なカーブを描いて背後から迫っていたザイに突き刺さり撃墜する。

詩苑と詩鞍が行ったもはや急速上昇をしながらサッチウエーブを
すると言う物だ。

サッチウエーブは元々は対零戦用に構築された戦術だが、その動き
は言ってしまうえば僚機が背後を飛ぶ機体を僚機の前方へ誘導して、僚
機が背後を取り易くする為の動きとシンプルで使い手と装備、使い方
の次第では現代でも十分に通用する技術だ。

2人はサッチウエーブでレーダー誘導可能な場所にザイを誘導し
た上でほぼ真横に曲がれる程に高機動なミサイルを使用して同時に
撃墜する……それを音速に限りなく近い速度で行うにはそれ相応以
上の訓練と何よりも交差する機体性能とパイロットをよく知ってい
なければ出来ない芸当だ。

バトラは部隊の僚機がしつかりと異常な空間でも戦えている事に
安堵しながら索敵を行った瞬間にJ A S 3 9 D | A N M グリペン
からの通信が届く。

〈敵機！ 何処から！〉

〈言う前に動け！〉

バトラの機体の背面からミサイルが放たれ、グリペンから遠く離れ
た場所で撃墜され、更に至近距離にザイが空間から生み出された様に
現れる。

完全に不意を突かれたJ A S 3 9 D | A N M グリペンのパイ
ロットである慧が反応出来ないでいると、ザイが突如として爆発す
る。

〈視界だけに頼るな、と申した筈ですが？〉

そう厳しい声で言いながらファントムが薄緑に発光するR F | 4
E J T P | A N M ファントムIIIを飛び去らせる。

〈この辺りの空間は滅茶苦茶ですね〉

〈ベルクトの言う通りです。いつでもパッチワークの境から敵が出
て来ると思ってください。なので所定のルート以外と踏破済みの空域
も危険だと思ってください〉

ファントムの警告にバトラは主翼のミサイルリリースボタンを押
しながら『それってこの空域全てじゃねーか!!』とツツコミを入れる

よりも前に慧と片宮姉妹から『いやいやいや』と抗議の声が入れられる。

〈何を言っているんですか。電波と熱源情報の差異を読み解けば大体の位置は求めますよ?〉

〈複数の情報を精査した上で計器の情報を読み解くだけですよ?〉

〈できるか! そんなもん!〉 〈人間の脳をなんだと思っ
ているんですか!〉 〈そんな事はお兄様以外に出来ませんよ!〉 〈でき
る訳ねーだろ!? 俺をなんだと!? 背後!!〉

まるでバトラが空間の境から現れる機体を感じ取ったかのように空
間からザイが現れると同時にスロットルを最大にするがエンジンの
余剰範囲に敷設されたスペースシャトル用の耐熱パネルを流用して
作成された逆噴射用パーツを利用して急減速、失速して頭を上に向け
たまま、滑り台を滑る様に降下。

ザイが行き過ぎる瞬間に機銃を放って撃墜するとパネルを元に戻
し、ロケットスタートしたかの様に機体は速度を取り戻して飛行状態
に戻ると同時に『できてるじゃねーか!』とそうツツコミを喰らう。

〈は?〉

これにバトラは若干だがキレ気味の声で返す。

〈装甲越しに殺気と存在感を感じただけだ。アニマと一緒にすんな
!〉

このバトラの抗議には全員一致で『クソ超人』である。

〈そんな事よりも奥に進むぞ。此処からはフィヨルドの入り江めい
ているから気を付けろ〉

水先案内人も務めるバトラの機体から最新のマップ情報を見た慧
が絶句するがバーバチカの2機とフロントム、An-225もアンタ
レス隊の3機も何も言わずについて行く光景に慧も操縦桿を握り直
して喰らい付く。

ザイも先には行かせまいと迎撃に出るが、空間の境に意図的にミサ
イルを撃って、あらぬ方向からぶつけるバーバチカの変態的攻撃法で
粉碎される。

別の空間から現れたザイは、直感と五感で察したバトラが予め発射

していたミサイルの自己誘導で1機が撃墜され、別の機体にはオフボアサイトに発射後ロックオン機能を合わせたミサイルの一撃で撃墜された上に目の前から現れたザイに至っては空中をドリフトする様な機動で機銃を回避された上で放たれたノールック射撃で破壊されると言うバトラの変態的機動法で血祭りに上げられる。

それに狙われなかったザイはアンタレス隊の3機と独飛の2機による特筆する事のない些か常識的な迎撃で残骸へと変えられた。

そして一団は青空から夕焼けの空に変わったアンフィジカルレイヤーに到達するとポツンと現れた黒い点が高速で広がる様に周囲を闇に変え、全機のコクピットにスライスの急激な減退が警告としてけたたましく響く。

〈フアントム！ 帰還限界の時間！〉

〈じゅ、いいえ。5分です！〉

ザイからの迎撃も無くなった事でゲートを核と共に取り残されたT-50の捜索もしていると一団の頭上を黒い靄を靡かせた飛行物体が通り過ぎる。

〈ぎっけんなよ！〉

バトラがいち早くスロットルを開けて接敵する。

黒い靄を引き連れた飛行物体は一撃離脱をしたいのかバトラから逃げの一手を選ぶ。バトラはこれ幸いと一団から引き剥がそうと追い掛けるも敵も一定以上は引き剥がされまいと向きを変える。完全に時間稼ぎの動きにバトラの目に焦りが浮かぶ。

僅か5分の間核を見つけて爆撃だけはしたい。だが、敵機が居てはそちらにも警戒しなくてはならず、核の捜索に支障を来たす。しかし、ザイからすればそれでだけ良い。

「(使えるか？ いや、此処はギャンブル！)」

バトラの機首の少し後ろに設けられた膨らみが顎の様に稼働すると何かの砲口が露出する。

これに合わせてバトラのコクピットを覆うディスプレイも連動して変形する。

バトラが更に補助アプリを起動して画面にレタイクルをメインに

で翼を翻し、An-225も軽くなった身体をその異常な程の推力に物を言わせてゲートの中を突っ切る。

ゲートの中にTNT100t分の爆発が起き、ゲートの核を破壊すると同時に小さな核爆発と聞いたくなるような爆発がついでと言わんばかりにゲート内を蹂躞する。

最後尾近くを飛ぶ、慧の視界が後ろから迫る光に飲み込まれてホワイトアウトした。

作戦60 越えるべき壁

夜空には街の明かりに負けずに輝く幾つもの星が瞬く時間に露天で駐機されたカノープスの機内でバーフォードがPCを前に英語で報告書を作成していた。

内容は今回の作戦での事だった。

暫くはカタカタとキーボードが叩く音だけが響き、とある動画ファイルを添付して、しっかりと再生出来る事を確認する為に再生した。

〈〈全機無事か!!〉〉

ゲートを抜け出て地面がある事を確認すると同時にバトラが通信機に叫ぶ。

バトラが駆るサファイアブルーの機体はこれと言った損傷は外見、中身共になく五体満足で飛行を行っている。

〈〈ANTARES02、無事です!〉〉

保護膜として展開していたスライスは全てが分解されていたが、陽光を弾くスノーホワイトが眩しいSuur47 ANM ベルクトが少し後ろにズレた位置を飛ぶ。

〈〈ANTARES03も健在です〉〉

〈〈04、コピーです〉〉

そしてそのベルクトと斜めになる様に並んで飛ぶのは片宮姉妹が操るパールホワイトとパールブラックのF-2X-AJZ ヴァイパーゼロ改だ。

〈〈良かった。全機が無事ですな〉〉

ベルクトとは逆隣にエメラルドグリーンに輝いたRF-4EJT P-ANM ファントムⅢが並ぶとその後ろを付いて来る様に少し離れた場所にファントムのスライスで操られたAn-225が飛行

し、その側を真紅のJAS39D—ANM　グリペンが飛行する。

〈無事だったか！青蠍に白黒姉妹にベルクト、お兄さんにピンク色も！〉

彼方からクロームオレンジのSu—27M—ANM　ジュラーヴリクに引き連れられたアクアマリンのMiG—29SMT—ANM　ラーストチュカにイリデッセンスに輝くSu—57—ANM　パクファが近付いて編隊を組んだまま飛行する。

近付いた瞬間にジュラーヴリクが仕事が遅いと文句を垂れ流し終えた瞬間にファントムからはバトラ達の事を心配しっぱなしで迎えに行くとなつたと愚痴られて、ジュラーヴリクの声が裏返り抗議するとAn—225を操作していたファントムのスライス、トゥエルブはジュラーヴリクと本体のファントムがそっくりだと称するとデューオーも似ていると同意した事で微笑ましい問題で一悶着が発生する。

〈誰も欠けてない……〉

〈ああ、完全勝利だ〉

そんな時にベルクトは周りを見渡す。

日露含めて10機。1機の脱落が無い少し歪な編隊が帰るべき基地に機首を向けた瞬間にそれは発生する。

〈ANTARES01、作戦しゅツ!?　高熱源反応複数!!　急速接近中!〉

バトラのAWACPが急速で接近する物体を捉えたとOFFにしていたマスターアームをONに素早く切り替える。

この情報をデーターリンクで受け取ったアンタレス隊の面々とファントムが即座に対応する。

〈包围と数!〉

ファントムから叫ばれる様に要求された情報にバトラも兵装士官として鍛えた情報処理処理能力で即座に答える。

〈ゲートの合った場所から飛んで来る!　数は4!!〉

〈はっ!　たかが4機だろ!〉

そう言つて翼を翻そうとするジュラーヴリクに残りの2機が付い

て行こうとするが。

〈デイーオーを連れて撤退、簡易整備と補給を受けて来い〉

それをバトラが拒否する。

ジュラーヴリクも文句を言いたかったが、デイーオーはゲート内での無茶が祟ったのか機体が万全な状態とは言えなかった。

〈すまん。だが、直ぐに戻って来る！〉

ジュラーヴリクがそう言い残すとバーバチカが飛び去って行く。バトラはトウエルブに通信を入れる。

〈あの4機だが、ヤバい。一足先に帰れ〉

〈でしようね。先に戻っています。くれぐれも死んでまで墜とそうとしないで下さい。1番を悲しませる様な事をしたら許しませんからね〉

〈生きて帰ってこそその英雄だ〉

いやに真面目なトウエルブにバトラは真面目な声で答えるとならいいんですと言い残してAn-225が飛び去る。

〈各機、〈02は問題有りません〉 〈03から04も同様です〉

〈ミサイルの残弾が少ない以外は問題無いです〉……了解した。接敵まで1分！〉

高度有利を取ろうとファントムと慧が上昇、アンタレス隊も編隊を整えながら旋回上昇を行い、高度有利を取る。

〈ボギー、カバーをキャストオフした。反応増大。ボギーコンタクトまで20秒〉

高速で上昇する4機の機影。その姿はアクアマリンの白い筋が入った結晶体に何かの模様を彷彿させる白い装甲が施されたザイだった。

〈ブレイク!!〉

予想を上回る速度に全機が安全を優先して回避に専念する。

新手のザイも機銃弾を1秒放つだけでそのまま上昇するが、ファントムとバトラは回避と同時にザイが上昇で通り過ぎたタイミングでLOAL機能を使用して、投下したミサイルを誘導して体勢を整えながら攻撃を行っていた。

余りにも速い攻撃に反応が遅れたザイの1機にミサイルが突き刺さり、揚力生む翼は千切れ、推力を生むエンジン部は脱落して、見るも無残な姿に変わった胴体は重力の鎖に縛られたのかゆっくりと回転しながら落下する。

〈はあ!?〉

だが、ファントムが放ったミサイルは上昇機動から素早く垂直移動された事で躲されたが、ファントムの誘導でミサイルは再度のアプローチを掛けたが、今度は機体後部を基点に一回転すると言う馬鹿げた機動で回避し、ハンマーヘッドの要領で機体の向きを変えてミサイルを放ち、追従する様に他の3機もミサイルを放って来る。

〈ブレイク!!〉

人類側は蜘蛛の子を散らす様に散開して回避するが、機動が遅れた詩苑とファントムが2発のミサイルにロックオンされた。

詩苑は機体をフル加速で上昇させたタイミングでエンジンのフューエル供給を切って熱源を無く直前に更にダイブを仕掛け、同時にフレアとチャフを放出する。

ミサイルは2発とも熱源探知だったのかフレアに吸い込まれてあらぬ方向に飛んで行き、自爆する。

〈ベルクト!〉

ファントムはミサイル回避の為にパワーダイブをしながらベルクトに自分が動いて欲しい行動をアニメ特有の通信方式でHUDに送り付ける。

〈ちよつ、お前……〉

慧の文句をファントムは無視する。と言うよりもそんな事に反応する為の処理能力を機体制御にファントムは割り振った。

ミサイルは角度が悪く。ドーター化された機体にアニメが操縦したとしても元がRF-4EJのドーターではいくらファントムでは無理がある。

「(やってみせます!)」

そう、これがRF-4EJのドーターならばの話だ。

ファントムの機体はバトラの機体を混ぜて改修と修理を行った機

体で低速域での機動性はその機体の意志とも言えるアニメである
フロントムですら追い付けない程の性能を有する。

つまりは機体の限界性能を超えた機体と言う事をフロントムは信
じてエアブレーキを展開して急減速させてバレルロールを繰り返す
が1発はロストさせるがもう1発が迫る。

〈〈今！〉〉

フロントムがHiMAT機動の応用で機体の後部を横滑りさせる
様に動かし、カナード翼で機体を無理矢理に捻った事で機体に悲鳴を
上げさせる相当な無茶をさせて機体を後ろ向きに変える。

そこに意図せずとしてヘッドオン飛び込んでしまった新型ザイが
飛び込む。

これによりフロントムは初めて敵の姿を完全に捉える事に成功す
る。

敵は白い筋の入った水色の水晶体に白い装甲だが、白い装甲は細長
く伸びた胴体の先、コクピットの様に配置され、コクピットアーマー
を挟む様に噛み合わさった小さな牙を思わせる様に細く並んだ装甲
が斜めに2本、そして機体後部は全翼機を思わせる程に大きく、白い
装甲はアーチを作る様に大きな牙を噛み合わせた様なラインが1本
だけが走る。

〈インガンレンジ、フルファイア！〉

機首下部に備え付けられた20mmガトリング砲とカナード翼取
り付け位置を膨らませて搭載した30mm機関砲が同時に火を噴く。

ザイも操縦席を思わせる白い装甲を挟む様に配置された機銃を放
つ。

互いに機銃を躲す為かフロントムは更に降下、ザイは上昇を行う。
だが、それを待っていたと言わんばかりにグリペンが背面を突いてい
た。

フロントムはヘッドオンに持ち込み、敵を上昇させるつもりで機銃
を放っていた。

「貫った!!」「取った！」

ザイはJAS-39Dが放った27mm弾を機首の先を基点に機

体後部を回して鉄棒競技の様な動きで躲し、そして回転しながらバツクすると言うとんでもない機動で背後を取る。

「慧ー！」

「わかつてるー！」

ミサイルにロックオンされていると言う電子機器からの情報を貰って下降でシーカーから逃れようとする慧にファントムからの賞賛の音が聞こえる。

〈FOX2〉

ファントムの落ち着いた声と共に放たれたミサイルはザイの背後にJを逆さにした機動で2発が取り付いた。

ザイはコブラ機動から側転する様な機動で1発を回避、次に迫るミサイルは横風に煽られた木の葉の様な機動で回避して見せる。

〈FOX2!!〉

回避したタイミングで慧が放ったグリペン誘導のミサイル2発が迫る。

横つ腹を見せ切っていたザイだが、機体後部を跳ね上げる様な機動中にエルロンロールを加えて機体の投射面積を少なくして1発は避けるが、それを見越したグリペン誘導にのミサイルは1発が真後ろから迫る。

ザイは垂直移動で背中側に動いて回避してみせるが先に回避したミサイルが戻って来た事で背中側にミサイルを喰らった事で錐揉み状態へとなってしまう。

〈慧さん！〉 〈ああ!!〉

此処で決める。そう覚悟した2機からの十字砲火に晒されたザイが翼に抱えていたミサイルの誘爆とエンジンの爆発で木っ端微塵になつて地面へと落下する。

〈他の2機は！〉 〈1機捉えました〉

レーダー上ではIFF反応のある3機が1機のザイを追い掛け回していた。

〈FOX2！〉

ベルクトの放ったミサイルは機体を一回転させながら後方に下が

るクルビットと言う機動で躲され、更に背後を向いた瞬間にミサイルがリリースされ、後方を飛んでいた詩鞍へと迫る。

〈フレア放出!!〉

詩苑の言葉に反射で詩鞍はパワーダイブをしながらフレアを放出、詩苑も上昇しながらフレアを放出する。

ザイのミサイルは2機分のフレアに惑わされてその場で自爆してしまう。

〈コレなら!!〉

詩苑の機体から連続して4発のミサイルが放たれる。

ザイは1発目をコブラ機動で回避、2発目は戻った勢いそのまま腹側から一回転して回避すると続けて飛来した3発目は捻れたバレルロールにエルロンロールを加えた動きで回避されてしまう。4発目は間髪入れないコブラ機動で回避する。

〈逃がしません!!〉

回避機動の度に速度を失っているザイに弱点を見出したベルクトが胴体腹側に設けられた格納型のハードポイントから4発のミサイルを迫り出させると立て続けに放つ。

ザイも側転移動で1発目を回避、続く2発目も同じ様に回避するが3発目と4発目は挟み込む様な機動で迫った事で1発目を機銃で迎撃するとその爆風に乗っかる様にフワリと舞い上がりながらフレアを放出した事で3・4発目も躲される。

〈当たって!!〉

詩鞍からも最後のミサイルが放たれる。

1発目は腹側への垂直移動で躲され、2発目は側転運動で右に躲され、左から迫った3発目はバレルロールにエルロンロールの半回転を混ぜた動きで躲され、4発目はクルビット機動でミサイルの背後に回られてしまい、不発に終わる。

〈今!!〉

だが、攻撃はコレで終わらなかった。ベルクトが自身の危険と引き換えに超誘導で誘導した先程の4発がザイを挟み込む様に飛来し、回避機動を取られる前に指向性爆薬を爆発させて破片を浴びせる。

〈やっつた!〉

ベルクトが黒煙の花を見つめていると高速でザイが迫る。

倒したと油断したベルクトは反応が遅れてしまう。

やられると目を瞑ったベルクトだが、ベルクトの鼓膜を揺らしたのは機体が機銃に引き裂かれる音では無く……

〈〈インガンレンジ・ファイア!!〉〉

頼れる姉妹2人の機銃発射の符丁。

2機から放たれた20mm機銃4門分の弾丸はザイの頭の前から機体下部を通り過ぎるまで横薙ぎに撃たれた事でザイが2つに割かれ、ベルクトの機体を挟む様に通り過ぎると1つの爆発で破片とバラバラになった胴体が重力に引かれて落下する。

〈お兄様は!〉 〈バトラさんは!〉 〈居ない!? まさか!〉

敵機撃墜を確認して自分達の長機を確認する3人の側にエメラルドグリーンの機体とが近付く。

〈私たちよりもバトラさんですか? 気持ちはわかりますが〉

そう言うフロントムの隣を真紅の機体が並ぶ。

〈こんな悠長にしているのかよ! 早く助けに……〉

マツハ2を超える速度で大きく旋回するザイを同じ速度で追い掛けるバトラ。

その機首に埋め込まれたTLSは確かに射程範囲に収めてこそいるが加害範囲に押し込めないでおり、ザイも変な機動を行えばTLSで焼かれると知っているのか被弾面積を広げたり、速度を失う様な機動を行わない。

無言で有るが高度な読み合いをする2機を見ながらフロントムが呟く。

〈速度を奪わせない旋回……アレに横槍入れられるならどうぞ入れて下さい〉

いや、無理だろうと思う慧にグリペンが語り掛ける。

〈アレじゃ無くても無理。バトラが通信を切ってる〉

その言葉に慧が肩越しに振り返って目を見開くと直ぐに遙か遠くでザイを追うバトラに目を向ける。

バトラが通信を切る。それは即ち、今のバトラは目の前の敵を墜とす為他に意識を向ける事を辞める程に本気の戦いをしていと言う何よりの証拠だった。

現にバトラのкокピットでは音楽が流れていた。

それはバトラが恐怖心を忘れる為に行う愚かな行為。だが、同時にバトラを無意識かつ潜在的に縛る枷を外す行為でも有る。

ザイは今のバトラに落とされる筈は無いと確信しているのか高速で有るが単純な機動で飛んでいるがバトラは武装のトリガーを引いたりはずせず、機体下部に設けられたT L S装置が格納される。コレにより空気抵抗が減った機体が加速する。

ザイは機体をバンクさせて背後を取ろうとするが同時にバトラも機体を大きく傾けて旋回するが、ガンの射線から逃げられてしまうが、エアブレーキの作動と同時にT L Sを露出させる事で空気抵抗を増やしながら減速して機動性を一時的に高めながらも、緩めていたスロットルを全開にする。

減速した事でガンの射線に無理矢理に入れられたザイは放たれた20 m m弾を避けられず、背中に何発か当たってしまうとそれから逃れるように斜め上昇を行うが、バトラは増やした機動性が仇となり反応が遅れるがエアブレーキとT L Sを格納した事で一気に速度を上げた機体の馬力とトルクに物を言わせたパワーアップで追い縋る。

ザイはクルピット機動で回りながらバックしたかの様に動いて背後に回り、バトラはカウンターマニューバにコブラ機動で機銃を放つが寸前でジヤム弾詰まりをディスプレイが訴え、即座に機首を戻して加速する。だが、ザイの加速力も同等のもので追い掛けながら機首に設けられた2門の機銃を放ってくる。

バトラはバレルロールにエルロンロールからの旋回や不規則な回避行動で機銃を避ける。だが、その間にもミサイルのロックオンアラートが喧しく鳴らしながらкокピットを赤く光らせる。

バトラはそんな空間にも背後を飛ぶザイに何か懐かしさを感じていた。

細長い胴体が突き刺さったエイの様な主翼とエンジン部、そしてV

字の垂直尾翼。何よりも牙を思わせる装甲はある部隊の特徴でもあった。

「ヴイルコラク……」

ザイからミサイルが6発のミサイルが集中砲火で放たれた。バトラの意識がノンタイムで切り替わる。

1発を90度バンクをしながらの旋回にフレアをばら撒いて回避するが5発が接近。2発目をパワーダイブでシーカー範囲から逃れるが距離のあった4発が迫る。続く3発目と4発目は円を描く様な機動で回避するが4発目が帰ってきて1発のみの回避となる。

「くそッ！」

悪態を吐きながらクルビットを行い、機首が真後ろを向いた瞬間にアフターバーナーをON。推力に物を言わせてザイに接近すると同時に泣け無しのミサイルをヘッドオンで放つ。

バトラを追い掛けるミサイルは2発が追尾を続け、バトラの放った最後の2発はGなど考えないごくバレルロールからの無理矢理なループ機動と言う機動で2発とも躲される。

バトラのコブラ機動からまたも推力任せの上昇で巻き上げた海水で1発を迎撃、遅れた2発はバレルロールをしながら吐き出したフレアで防ぐ。

ミサイルが各所で爆発を起こして青空を焼き尽くす。

バトラは前を飛ぶザイに空に来たなら撃ち墜とすと言わんばかりに殺意を改めながらレテイクル越しに睨む。

そしてザイはバトラのミサイルから無理矢理に逃げた所為か背後に付かれ直されている事に気付いたのか、フラフラと機体を揺らして揺さぶりながら微笑にラダーで横にズレると言う回避行動を起こすが、バトラは引き金を引かずにジッと耐え、必中にして必殺の距離まで耐える。

〈〈取りましたね〉〉

〈〈バトラさんの状況です〉〉

バトラの狙っている事を悟ったベルクトとフロントムが短く会話する。

「この魂は譲れない」

ある意味ではこのザイは自分達、MS社……正確にはM42飛行中隊が生み出してしまった化け物達。

もう一度、落とさなければならぬ。だからこそこの空戦にバトラは己が魂を賭ける事に躊躇は無かった。

「それはお前の機体じゃない……」

初めて追い越したいと思ったパイロット達4人の背中がレティクル越しに薄っすらと映る。それはMS社の兵士としての魂を与えた4人のパイロットの背。だが、此れは幻覚だとバトラは即座に理解する。

同時に己の心で鎌首を擡げた存在も。

「この心は俺だけのもの」

全てが終わった後に生き方を示してくれた4人反面教師と言う勝手が過ぎる恩を感じた4人のパイロット。その中でもこのザイの機動はそのリーダーの機動と全くの瓜二つだった。

故に芽生えた恩人の静かな眠りを妨げる様なザイの行為に対する怒りや憎しみ。

「無駄だー」

そして何よりも自分の初恋の相手であり、最後まで自分の長機だった未来奈を墜としたエースに対する心からの情景と、此奴を墜として未来奈を超えたいと思う欲望、何よりも此奴を墜としたいと言う殺意。

それがザイの仕掛けたブラフを見抜いた。

ザイは背中を右に倒して右旋回すると思わせて本当はジェットノズルの向きを変えて左に並行移動したが、バトラは機首を平行移動すると同時に左に振っていた。

「掴んだー」

レティクルに飛び行った敵を掴み取ったと確信するのと全く同時にTLSからレーザーが噴き出すが、ザイはレーザーのチャージ中に素早く機体を平行にした後に水蒸気の尾を流星の残光の様に引き連れながら真下に移動、そのままコブラ機動で機首を上げたまま失速で

下がりながら機銃を放つ。

「逃すか!!」

だが、その動きはリーダーが捉えていた。

逆コブラ機動で機首を下に向けると同時に推力偏向ノズルと動翼、エアブレーキを巧みに利用してすり鉢状のドームを腹滑りさせる様な動きで機銃を躲しながら、機銃の代わりにTLSを細かく連射する。

レーザーの攻撃は苛烈の一言で、幾度となく海面を叩き水面の海水を即座に蒸発させて水蒸気の結界を作り出すが、連射の速射重視だった事で威力が下がった事もあり、数発は被弾したザイだが戦闘に支障は無かった。

「吹っ飛ばせ! バトラ!!」

水蒸気の中から白い煙を吐きながら現れたザイを追うバトラのサファイアブルーの機体を見た慧が聞こえないとわかっていながらも叫ぶ。

それに呼応したのかバトラの機体を作る飛行機雲の軌跡に鋭さが増し、ザイはカウンターマニューバを仕掛けるタイミングを探ろうとするが、バトラは機動だけでそれを許さない。

バトラの殺意はその瞳に宿る。今のバトラをパイロットが見たならば、全ての敵を打ち砕けるだけの雰囲気を感じていると誰もが答えるだろう。

「俺の為に落ちてくれ、この時代のエースは俺なんです」

亡き誰かに呟いたバトラがTLSを放とうとしたタイミングで機銃の弾詰まりが直った事をディスプレイが伝える。此れが隙になったのかザイが素早くバトラの背後に回った。

此れには慧が息を吐いたが……

〈あああなつたお兄様は止められないですよ〉

〈えええ、誰も……あれは死の運命そのもの〉

詩鞍と詩苑の声。

「視えてる! その翼を寄越せ!!」

その声に答えたのかバトラの機体は後ろに回られた瞬間には既に

カウンターマニユーバを行っており、ザイが機銃を放って止めた頃は背後に着き直していた。

まるで未来を知っているかの様な動きにベルクトの口が自然と動く。

〈この勝利は必然……〉

〈斯く、あれかし……〉

ベルクトの祈るような言葉にファントムの継るような声が続ぎ、バトラの20m機銃が確かな殺意を込めて発射される。

対してザイは高度が欲しいのか背中から垂直に上昇してある程度の高度を得ると素早く機首をコブラ機動の様に起こしてフルスロットルで逃げる。だが、ただ逃げるだけで無く、奔流に飲まれる木屑の様に不規則に動きながら機体後部に付けられた12.7mm機銃2門を牽制兼迎撃で発射する。

「そんな怯え弾に!!」

だが、バトラに向けて放った奇襲の一撃は掠りもしなかった。

バトラは奔流に流される木片ををまるで奔流の上から撃ち下ろす様にTLSを放って撃墜しようとする。しかし、後部機銃は360度回せるのかバトラの動きを追随して放ってくるがバトラは奔流よりお激しい激流に乗っていると言わんばかりに機銃の対応力を置き去りにしながら隙あればTLSを放って来る。

ザイが賭けに出た。

一定以上の高度まで上昇し、尚且つバトラの速度が乗ったタイミングで奔流から吐き出されて勢いを無くした木片の様に空中で静止して自由落下を始めたザイをバトラが追い抜かしてしまう。

「ッ!!」

ザイは素早くエンジンに再び火を入れて、機首を上に向けてバトラを捉えるとコクピットの装甲が陽光で輝いた。それは捕えたぞ、お前は既に俺の手の内にいると叫んでいる様で、ザイはバトラが受けた印象を裏切らず、ザイは胴体に隠していた今までのどのザイのミサイルよりも細身のミサイルを露出させる。

ミサイルもミサイルでお前を逃さない、と陽光を弾く事で伝え、口

ケットモーターの炎は撃墜の準備は整ったと言わんばかりに噴き出した。

バトラの行動は速かった。このザイを自分が墜とさばければ他の仲間は全員が撃墜される。それ程の相手だと認識すると、仲間を守るという隊長としての使命感がバトラの身体を即座に動かし、ハンマーヘッドで頭の向きを真下に変えて、ミサイルを照射のT L Sで破壊し同時に攻撃するがその一撃はエルロンロールをしながらの横移動で躲される。

「隙―」

今度はバトラの本能が攻撃を緩めるなどバトラに命令する。バトラはその命令に従ってスロットを開けて加速、未だにエルロンロールをしている敵の横つ腹から機銃を放つ。

ザイは機体を攻撃から逃がす為に巨大な炎で青空を焦がしながらバク転の様に機体を逃し、機体を安定させて距離を取ろうとするが、バトラは飛ぶ暇も当てないと言わんばかりに追撃する。

「バトラがイニシアチブを握った」

グリペンが空戦を見上げながら呟く。

バトラがザイの逃げ場を潰し、何とかT L Sか機銃で仕留めようとするがザイも加害範囲に入っても入り続けられない様に巧みに機体を動かして逃げながら、何とか振り切るか背後に回ろうと増減速や左右への旋回、空中戦闘機動を繰り返すも、バトラも逃さず、回さずで動き回る為に空には2機の戦闘機が描く4本の飛行機雲で命の取り合いの光景を美しく、壮大に描いていた。

流れを完全に掌握し続けるバトラとバトラから逃れようとするザイが描いた飛行機雲の絵は空に未だに憧れる慧と慧とあんな中でも戦える様になりたいと、グリペンには幾つ物激戦を繰り広げたのすら憧憬の感情を抱かせる。

ファントムはあの空間を自分の機体で描いてくれなかったバトラに対して怫然とした感情を抱き、操縦桿を強く握る。

詩鞍・詩苑はあの場所に入れない自分達の実力に激憤し、拳をハンマーの様に振るって計器盤を2人揃って強く叩き付ける。

そして、ベルクトはあんな光景を作り上げるバトラに自分もあんなりたいと思うと同時に尊敬の感情を抱かせる。

様々な反応だが、総じて言えるのは惹き付けられている事。そして見る者を惹き付け、心を掴む機動はエース・オブ・エースと呼ばれる者全員が持つ素質だ。逆に幾ら敵を墜とそうとも心を掴めない機動しか出来ない者は何処まで行ってもエースというだけだ。

「今度こそ……」

慎重に、且つ悟られないように機銃とT L Sで敵を誘導するバトラ。

「掴んだ！」

だが、寸前に膨らんだ殺意を感じたのかザイがパワーダイブを敢行するが、バトラもダイブ程度で逃げられると思うなど言う自分の言葉を自身で行ったパワーダイブのGに負けて発する事は出来なかったが、鬼気迫りながらおい、放たれた機銃とT L Sの連続射撃が殺意を隠そうともせずに物語る。

いつの間にかカットされたエンジンリミッターによりT追加生産された電力がT L Sユニットに送られ、A W A C S Pに送っていた電力さえもT L Sユニットに送り込んでまで放たれるT L Sの連射とそれに合わせて指切りで放たれる機銃は正しく暴狂という言葉が当て嵌まる。だが、ザイも負けていない。

最後の賭けだと覚悟を匂わせる鋭い機動でバトラの背後を突き、バトラがカウンターマニューバをしようとするコブラ機動からコクピットを軸に横向きに回転し、遠心力に負けて横に放り投げられるが、偏向ノズルエンジンである程度はねじ伏せる事でエルロンロールを行わせ、コブラ機動を終えたバトラの機体に横合いから機銃を放つ。

無茶な機動から放った弾丸は動翼こそ外したが垂直尾翼に穴を開け、背中A W A C S Pを破壊する。

この攻撃にザイも諦めていないと察したバトラは雲の中に突っ込むがザイも怖気付く事無く雲の中に飛び込むとバトラの首筋を蜘蛛が這うような感覚に襲われた。

やられると思ったバトラだが、あの機体を駆っていたパイロット達のリーダーがバトラに教えた言葉が蘇る。

『強者になれば諦めることなど許されない。最後までひたすらに勝利をおいもとめろ』

その言葉が蘇ったバトラは迷う事なく背中のAWACPを投棄する。ザイは機銃が絶対に当たると思ったタイミングで風に任せて飛んで来たAWACPを迎撃か回避か迷い、木の葉が風に迷うな機動で無茶して躲す事を選択する。

ザイが雲の中を突っ切るとザイはバトラの機体を見失っていたが、頭上を影が遮った事で直ぐにバトラの存在に気付いた。

バトラはザイの真上にいた。直上急降下の構図で機銃とTLSを確かに向けていた。

ザイは即座に加速、機銃は胴体とエンジンの間に数個の穴を開け、レーザーがエンジンの間をすり抜けた事で被害を与えられず、ザイはループ機動で背後に回ろうとするがバトラもそれはさせないと機首を上あげた瞬間に下部銃座に晒され、回避機動を余儀無くされ、流れをザイに取られてしまう。

バトラは諦めていなかった。今もひたすらに勝利を求めて脳が回転し続けた事で導き出した答えをバトラはノータイプで戸惑う事無く実行する。

背後に付き纏われ、攻撃しようとしたその瞬間にパワーダイブ、更にエルロンロールをしながら残りのフレアを全て撒きながら、逆バーストモードとエアブレーキを掛けてオーバーシュートさせる。

〈フレアの使い方が無茶苦茶です！〉

革命的であるが同時に破滅的なフレアの使用法。だが、真実はバトラが敵の背後を取った。

ザイは緩いループを描きながら急速に上昇、バトラもそれを追い掛けると後部機銃が放たれる。

最初の一撃を浮き上がる様な機動で回避、二撃目と三撃目はエルロンロールをしながら僅かに横にズレて回避、四撃目は落ち込む様な機動で回避、五撃目はザイ自身が外してしまう。

「うおおおらー!!」

機銃が放たれる。これによりザイは回避を取るがその時にまたも木の葉が舞う様な機動で回避した事で互いに背中を向けながらの旋回戦へと移行する。だが、旋回半径はバトラの方が優れた事で背後を取る。

ザイは真下に降下しながら後部機銃を放つも捻りながら迫るバトラを捉えられずに弾丸は空を切る。

高度を失いたくないザイはある程度の所で機首上げを行った事でバトラもそれに追従、飛行機雲は互いに編み込む様な線を描くが、その隙間はあまりに狭い。

バトラは大きく膨れる機動を取るとザイは減速し、背後に回ろうとするがバトラは加速で慣性を増やすとエンジンパワーを絞りながらハンマーヘッドで減速した事で空中に投げ出された様な機動を作り、ザイを射線に飛び込ませる。

対してザイは垂直移動で対抗し下方へ逃れる。

「!!!?!」

下方へ逃れたザイにバトラの機体はまたも革命的動くを見せた事でバトラ以外のパイロット達の目がひん剥かれる。

最初に片方のエンジンのみを逆バーストモードにしながらパワーダウン、足して片方はフルスロットル。これにより反トルクが発生、機体がスピルし始めるが、ここで逆バーストモードを行っていたプレートの方が畳まれ、スロットルはフルスロットルにされた事で機体が横滑りを始める。

そして減速により落下していたバトラの機体は下方に逃れたザイと同高度まで落ち、ザイを中心に横向きに回りながら機銃を放つ。

「此処で!!」

機銃の弾が尽きた。だが、ザイにはトドメを刺し切れていない。ザイも必死の機動で落下しながらも機首をバトラの方に向ける。TL Sは横Gが大き過ぎて安全装置が作動して開かない。

ザイは攻撃出来ないバトラに勝ったと確信し機銃を放ち、着弾の寸前にバトラの機体が垂直に下がった。しかもヘッドショットで撃つ

たせいか傾斜装甲のようになった装甲が銃弾を弾くというオマケ付きだ。

ザイが急いで機首を90度下に向けるとエアブレーキを格納しながらチャージ済みのTLSを開いたバトラの機体と向き合った。

ザイは撃ち合いでは無く、離脱を選んだ。だが、此処でザイのエンジンが止まった。

最後のバトラが放った機銃の一撃で燃料タンクが破損して漏れ出ており、更に90度移動は相当な燃料を使っており、知らぬ間に燃料切れを起こしていた。

ザイの放った曳光弾とバトラのTLSから放たれた赤いビームが行き違い、銃弾はバトラの機体に命中し、辺りに炎と黒煙を撒き散らし、レーザーはザイを串刺しに天へと昇って行く。

〈バトラさん!!〉 〈バトラ!!〉 〈ANTARES01!!〉
〈お兄様!!〉 〈オニイサマアアア!!〉 〈そんな……〉

爆発をまじかで見えたバービー隊とアンタレス隊が叫び、ようやく戦場に着いたバーバチカもその光景を遠目に見て絶句した。

直ぐに叫び声は止み、残されたアンタレス隊の嗚咽だけが通信機から流れるバービー隊とバーバチカ。

だが、直ぐにデューオーが気付いた。嗚咽に紛れて音楽の前奏が聞こえる事に。

そして、それが全員に気付かれて直ぐに黒煙を突き破って、TLSを露出させる口の様なパーツを開けて、そこから黒煙を吐き出してこそ居るがしっかりと飛んでいるバトラが現れる。

その光景に全員が安堵を表情を浮かべながら口々に通信を送るが、返事を送らないバトラを不審がったファントムとベルクトが内部カメラにアクセスするとシートベルトでシートに押し付けられたバトラが映る。まるで力がこもっておらず、現在はオートパイロットで飛んでいる状態だった。

〈嘘ですよね! 気絶してます!〉

〈へ! アイハブコントロール!!〉

ファントムの言葉で現実を認識したベルクトがすかさずもしもの

為に作っていた専用通路からバトラの機体をハッキングしてシステムを奪うとベルクト操縦で帰るべき基地へと帰投した。

「無事に帰れて何よりだったな」

動画の再生が出来る事を確認したバーフォードだが、バトラに対して心配させるなや無茶をするなど愚痴りながら書き忘れた一文を書き足すと本部へと送信し、眠気からか報告書の下書きを映しているタブレットに気付かず、椅子に深く座り眠りに落ちてしまうが自動OFFでタブレットの画面は黒く変わったがタブレットはこんなワードを映していた。

『今作戦で最後に遭遇したザイは形状こそGAF101ヴィルコラクに酷似しているがその性能は強化されており、遭遇したパイロット達はこの個体をファフニールと呼称し識別する。更に未だ未登録だったバトラの新機体の名をADF101 バルムンクとする』

作戦61 イかれた伝統芸能

ノヴォシビルスク中心部の国立オペラ・バレエ劇場を望むホテル内のホールとも言える場所。

重厚なマホガニーの壁材に金色の柱で高級感を演出し、ふかふかとした感触の真っ赤な絨毯に光を落とすウエディングケーキを逆さにした様なシャンデリアがTHE パーティー会場感を演出する。

ホールを歩く人物も正装をピシツとした隙の無い着こなしだった。そんな場所に場違いな奴が居た。

「似合わない……」

剣襟のシャツに蝶ネクタイ、肩章付きの濃青色のジャケットと中々に仰々しい出で立ちだが、それを着るのは十代半ばの少年である鳴谷慧。だが、サイズも肩幅や袖丈など所々がサイズが大きいのもあつてか滑稽さしか無い格好でもあつた。

文字通りの意味で服に着られている。のだが……

「慧、似合っている」

見る者が見れば、そんな事も言う。のだが……襟ぐりが余った故に蝶ネクタイがズレているのに加えて、ジャケットもブカブカ、スカートに至っては地面を掃くかの様に垂れ下がっている。

完全に着られているとかそんな状況じゃない。それでもこれを着なくてはならなかったのは慧の相棒であるグリペンだった。

「そりゃ、お前よりはな」

2人が今着るのは航空自衛隊第二種礼装と呼ばれる式典や外交の場で多く見られる特殊で特別な制服だ。が、そんな特殊で特別な物をお子様サイズで作る筈が無い。故に2人は服に着られるサイズの物を無理に着ている。

「まったく、俺たちに合う自衛隊の礼装なんてないのに……」

慧はコレを着ると言った人物の顔を思い出しながら、グリペンを手招きで呼び寄せて、グリペンのウエストの上げてからベルトで締め直して、最悪でも床に擦らない様にしてやる慧に声を掛ける人物が居た。

「何とかその……お気の毒ですね」

声を掛けたのは慣れない雰囲気、と言うよりも久々な雰囲気故に見知った人物に声を掛けたは良いのだが、声を掛けた人物の状況に何も用が無い状態ですべき行動で無かったなと自覚して、自虐的な苦笑いを浮かべたる詩鞍だった。

「ああ、その通り……だ……よ……」

慧が固まった。と言うよりも詩鞍の格好に見惚れていた。

上半身は白の生地、三角形の模様を合わせて花に見せた黒色の模様、下半身には群青色の生地、白と黒の矢羽根模様が入った袴。

それをキツチリと礼儀作法を破らない様に着たザ・日本人の御令嬢な顔立ちに慧の反応を察してた柔らかな微笑む詩鞍の格好は正しく服を着こなしている。

「心も腕もお兄様クラスになってから出直して下さい。まあ、なつても即座に断りですが」

見惚れた慧の背後から投げられた言葉に振り向いた慧はまたも見惚れて固まる。

上半身は黒の生地、三角形の模様を合わせて花に見せた白色の模様、下半身には群青色の生地、白と黒の矢羽根模様が入った袴。コレを詩鞍同様にキツチリと着こなした上にはほほ瓜二つな外見は詩苑だ。

好みの色が真逆であるが故に服装も真逆だが、やはり仲のいい双子の姉妹なのか、自分の服に相手のパーソナルカラーを使いつつも想い人のパーソナルカラーを同じ面積だけ使っている。

そんな和装に身を包む2人に慧はやはり姉妹なのと2人の性格に納得すると同時に勝手に内心で慧は頷く。

「服に着せられていますね。まあ、慧さんには丁度良いでしょう」

そう言っつてシャンパングラスに注がれたジンジャーエールに口を付けるのは独飛の参謀官にして現実主義者、隙あらばパイロットを奪いに掛かるRF-4EJ-ANM ファントムIIのアニメ、ファントムだった。

「お前……」

ファントムの言い方に慧が口を開こうとするが直ぐにその口が開

いたまま閉じる事が放棄した。何故ならファントムの格好は今のグリペンが着る女性用航空自衛隊第二種礼装なのだが、そのサイズはまさにピッタリの一言だった。

「ああ、コレですか？ 団司令とMS社のファントムライダー達から連名で送られたレプリカですよ。微妙に生地が違うんですけど」

見た目は全く一緒に、肩章などの官給品にしか存在しないものなどは恐らくは正規品から剥いだ物を使っている。違いに気付くとすれば、正規品を多く来た現職隊員が正規品を触った事がある者だけだろう。

「そんなの着ていいんですか？」

「お二人よりはマシです」

詩鞍の言葉に流し目で慧とグリペンを見ながらファントムが告げると見られた2人が目に見えてうっと身体をビクつかせる。

「それに各国のお偉い方も私達を見に来ています。そんな不恰好を全員がする訳には行きません」

この式典はゲート破壊作戦の祝勝会でもあるが、同時にアニマの博覧会の様な側面と共に外交の場でもある。綺麗に飾り立てる事も立派な外交手段である。

「そう考えると民間企業のMS社が羨ましいですね」

恨めしげな視線を片宮姉妹にファントムは投げる。

全員が礼装とも言うべき服装に身を包んでいるのも、各国の要人が参加するゲート破壊作戦の祝勝会の様な物であるからだが、MS社は会社規模で厳密に設定しているのは敵味方の識別と言う意図もある戦闘服のみ。故にこう言った式典では各自で用意した私服を着用する。無論ながら一般常識として礼装と呼ばれる物を着用する。

「報告書も出来てますし、私達は私達で楽しみましょう。」

片宮姉妹は小難しい話はバーフォードの様な佐官の仕事だと割り切った上で、既に専用回線を使って報告書を書き上げた一行は気兼ねなく祝勝会としてこのパーティーを楽しむつもりでは無い。

華やかに自分を飾り立てられる口実が此処にある。ならば、これを機にバトラにアップローチを掛ける気満々の片宮姉妹の意図にファン

トムも当然の権利の如く気付いている。故にファントムも規定の範囲内で飾り立てて挑むつもりだった、のだが、肝心のバトラの姿が無かった。

「？ MS社って一応設定はしてるってさっき……」

慧が今更ながらに片宮姉妹の格好と着替え中にバトラから聞いた『MS社も正装や礼装を知らない少年・少女兵用に一応は設定している』という言葉に矛盾がある事に気付いた。

これはバトラが嘘を言ったのでは無く、厳密に決めていないだけでスーツやドレスなどで美的センス壊滅的な奴やそもその話でこの様な場所とは無縁だった社員への会社側からの可能な限りでの温情なのだが、そのデザインが完全にアレである。

男性デザインは学ランとスーツを足して2で割った様なデザインの服に社ロゴと部隊章のパッチを縫い付けたデザインと手抜き感が満載だ。

対して女性デザインは胸元から鳩尾まで開いた様なデザインに腹部には飾りのダブルボタンを繋げる短いベルトを取り入れた長袖の上着。それにくっつく様にスカートが腰から膝上までと膝下が少し青を強くしてツートンカラーにした上でボタンを細い銀のチェーンで繋げて止める構造で丈が足首までである上着をしっかりと羽織る。

胸元が開いているデザインだが、チェーンで繋げた位置が良いのか、下品さが長めの上着を着る軍服風ワンピースである。完全に女性用デザインの作成費で男性用デザイン費が搾り取られている。

「彼処ですが、他人の振りを」

詩苑の言葉にファントムが指で示された方向に顔を向けるとその意味を理解した。

「明日も勤務だろうが!!」

そう言つて、いつぞやの作戦で協力したM i g - 3 1のみで編成されたデネブ隊のパイロットに対して、私物の英国の受章式兼パーティーで着た軍服風スーツと言う服に身を包んだバトラがバックドロップを掛けていた。しかも、コレが最後なのか手を離された人物を除けば既に7人がMS社の男性用正装に身を包んだ男が倒れている。

「流石に私達も止められないわ」

デネブ隊所属で服装はMS社の軍服風ワンピースの制服を着込んだ8人のデネブ隊女性パイロット達もコレには苦笑이었다。

「流石にシャンパンを全員で24本、短時間で空にしてたらね」

1人頭3本の計算である。この8人は普段からワイルドターキーやウオツカと言った辛口でアルコール度数の高い酒を愛飲し、一番好きなアルコール飲料がMig-29かMig-31の冷却用アルコールとか言う化け物である。シャンパン程度で酔う奴らでは無いが、酔わないだけで体内のアルコール量は半端ない事になる。

故に飲酒飛行は頂けないからと1本を開けた隙に忠告したバトラなのだが、要人(元パイロット)と話込んだ1時間で更に1人づつ2本も開けた故にキレたバトラの怒りのバックドロップが炸裂した。

「いや、だとしてもよ。此処で、やる?」

デネブ隊の女性パイロットの言葉も最もである。

流石にプロの人間として褒められた行為で無いが、パーティー会場で勝つてを知った相手であろうと暴力沙汰は宜しくない。だが、バトラにそんなことは関係無い。

命令で参加せざるを得ないが、本音は出来るなら早く帰りたい。ならば、暴力沙汰でも起こして追い出される方がずっと楽で早いと判断している故にバトラの自制心が仕事を放棄する。

「そう言えば、ベルクト……」

詩苑の疑問を呈する言葉にファントムがジンジャーエールの入ったシャンパングラスの優雅に傾ける事で喉を潤すとその喉から言葉を吐き出した。

「ああ、それならゲート脱出時にパクファに纏わせるスライスなんです。ベルクトから貰ったスライスを使っただけです」

「? そんな暇ありましたっけ?」

意外な言葉に詩苑の言葉が飛ぶとファントムは元々からベルクトから一枚余分に譲渡されていた事を話す。

T-50、Su-57とSu-47は同じスホーイ設計局の機体。前者は別の場所で製造されるが生みの親は同じ。しかも、初飛行など

を考えればベルクトの方が姉、アニマ・ドーター基準でもベルクトの方が早い事もあつてか姉として妹を助けたと言う思いがあり、予め用意していたスライスの予備をフアントム経由でパクファに渡していた。

それを聞いた詩鞍が口を開いた。

「その影響で体調不良ですか……いいお姉さんですね。まあ、考慮はしません」

その言葉にフアントムは半分は同意する。

話を聞けば妹思いの良い姉なのだが、バトラ争奪戦は恋の戦争。恋の戦争においてはあらゆる行為が正当化されるとは誰に談だったか。それが不可抗力だったとしても戦線に参加出来ない者を気にかける事は無いし、戦線に参加していても気に掛けない。

恋に恋する事を辞めた恋する乙女はミィティアミサイルでも撃墜は出来ない。

全くの余談だが、片宮姉妹にとってはどっちが姉か妹は重要ではない。2人の人生はバトラに助けられ、後ろを飛ぶと決めた日が始まりであり、それより前の人生は無い物扱いだからだ。

「そうですね……そろそろ止めませんか？ デネブ隊の隊長にバトラさんがローリングクレイドルを始めました」

「それは死人が出かねない奴ですよ！」

止めに入ろうとするが流石に片宮姉妹の火力では止められない。そう判断したフアントムが行動を起こす。

「仕方ないですね。此処は日本の伝統芸能で……ビール瓶は、無いみたいですね」

フアントムが代わりに握ったのはシャンパンの空き瓶だった。それを見た、ロシアのアニマ、ジュラーヴリクが何をしているんだと問い質した瞬間にフアントムは満開の笑みを浮かべて振り向き、上品な会釈を行うとゆっくりとバトラの方へ歩き始める。

「知らないんですか？ 日本ではムカつく奴の頭をビール瓶で殴ると言う伝統芸能があるんです」

そしてバトラが背後の存在に気付いて振り返った瞬間にフアント

ムが何の躊躇いもなくシャンパン瓶を振り下ろし、バトラを沈黙させる。

「イかれた伝統芸能だな!!」

ジュラーヴリクの内心でこんな伝統芸能がある国に自分の末の妹を送らなければならないのかと頭を抱えた。

作戦62 コマツ・エマージエンジン

石川県小松市航空自衛隊小松基地。

ここに懐かしさすら感じられる轟音が響き渡る。が……その中に異音が混ざっている事に自衛隊の整備士達がお通夜の様な雰囲気蔓延し始める。

そんな空気を余所に着陸した戦闘機達は早々に一本しか無い滑走路から慌てた様に退避して、此処までの作戦行動で家主が減った格納庫へと格納されて行く。だが、地上クルーの視線は久し振りに見る見慣れた機体では無く、フレンチベージュのノツペリとしたステルス機に共通する印象を放つ機体。

「T-50……いや、Su-57か」

ここ最近に配属されたMS社の整備員が声を漏らした瞬間に一気に喧騒がMS社の社員の間を駆け巡る。

「バトラは大丈夫なのか!!」「発狂したら!」「大丈夫だ! ビール瓶は用意済みだ!!」「殴って止めるしかないってどういうこと!!」

のだが、MS社側はバトラがSu-57にトラウマ持ちなのを思い出して狂気に近い別の何か蔓延していた。空でも陸でも強い奴が発狂した時の被害は凄まじい事を彼等が否応なく本能に刻みつけられる。

MS社サイドが阿鼻叫喚になっているのを尻目に流石は国家公務を受け持つ国家公務員と言うべきか、自衛隊側はSu-57のドクターに検査用ケーブルをSu-57と共に来たロシア人整備員と共に差し込む事で外部入力を使ったキャノピー開閉を行う。

「……え」

蒸気を吐き出しながら開けられた装甲キャノピーの中を見た整備員の1人がそんな馬鹿なと思う様な声を上げる。

装甲キャノピーの中。その中に収まっていなければならぬ存在はそこに無く、何も無い空間を小松の冬を思わせる微風が虚しく行き過ぎて行くだけだった。

此処で突然で申し訳無いが、9月6日は何があつただらうか？

この日付を聞いて何か閃いた方はいらるだろう。そうベレンコ中尉亡命事件があつた日だ。別名だとMi g-25事件だ。え？ 他にも何かあるだろう？ 知らんな。

この事件の問題性と言うか重要なのは、当時は脅威でしか無かつた機体が鋼鉄のカーテンを飛び越えて来た。と言う事では無く、どうやって日本に接近したのか、そしてその時に自衛隊が何をしてどうなつたかだ。

最初の方は端折るが、Mi g-25は低空で日本に接近する。当然ながら自衛隊は領空侵犯でスクランブルする訳であるが、当時の技術力では航空機用レーダーも地上レーダーも高高度の敵には強いのだが、低空の敵には弱かつた。

低空に対する敵に対する能力をルックダウン能力と言う。ベルクトが亡命して来た時にファントムがルックダウン能力の低さで抜かれたと言うセリフを吐いていたのを覚えていらっしゃるか？ この事件の所為でF-4のルックダウン能力の低さが露見、さらに日本の防空網がガバガバだった事、ロシアも暗号などの面で変更を余儀無くされた。

軍事的に見ればロシアはご自慢の戦闘機を丸裸同然にされ、日本も主力戦闘機と地上レーダーのポンコツさ、防空網のガバガバ具合が露呈した。

そのポンコツの血が濃いファントム曰く、その後の後処理がまあ酷かつたと言う一言で片付けている。

逆に言えば、件の犯人とも言えるベレンコ中尉が意外にも従順で逃げなかつた事で事務的な、外交的な後処理に専念出来たとも言える。

そして何故にこんな事を書いたのか？ 簡単である。Su-57のアニマが姿を消して基地内をウロついている。正確にはウロついている可能性が高い。

「そつちは居たか!!」「捕まえた後に叫んでる!」「1万ルーブル!!」「目撃情報も無し!」「まずい! 信用と信頼に関わる!!」

自衛隊の整備班にロシアのアニマ・ドクターの飛行隊であるバーバチカの整備員、そして捕まえたら1万ルーブルの報酬で駆り出された、と言うよりも志願したMS社のメカニック達である。

その喧騒はもしも亡命事件当時に函館空港で勤務していた者がいればそれと同じくらいの喧騒だと。だが、此処にそんなレアな人材は居ない。

「うん？」

そしてこの捜索に参加していたバトラから懐かしい相手から電子メールが届く。

「？ マスター？」

片宮姉妹の機体を買付けたマスターからだった。

件名は何故にコイツが？ である。文字らしい文字は件名だけでバトラは電子メールを開いてその内容を見た瞬間に走り出した。

メールにはフレンチベージュの髪にエプロンドレスを来た少女が写っていた。

バトラはその画像から駅前のショッピングモールだと判断すると駐車場に止めている自分のトライクに乗り込んで小松の街へと繰り出して行く。

「人を隠すには人の中……骨が折れるぞ」

ショッピングモールに到着したバトラだが、ショッピングモール内を早歩きで歩きながらSu-57のアニマの姿を探す訳だが、人が多い中で一人だけを見つけるのは難しい。

固有名もイマイチわからない状況では迷子で呼び出せない。あつても呼び出せないが……八方塞がりのバトラの携帯にベルクトからメールと共にいくつかのネットの書き込みが送信されて来た。

「うん？」

メールの中にはショッピングモール内の帽子屋の画像にハンバークショップ、さらにスムージーショップの中でフレンチベージュの髪

にエプロンドレスの少女を見たという画像。そしてベルクトのメールには各画像の時間が書かれていたが、時刻を考えると既にシヨッピングモールから姿を消した後である事はバトラも予想が出来た。

「取り敢えず……ん？」

携帯の映像を切りかけた所で何かを思い出しかけた時に小松基地の技本の施設に入院中とも言うべきベルクトから電話が掛かる。

〈〈気付きましたか？〉〉

〈〈!!〉〉

ベルクトの電話にバトラが全てを思い出したと息を小さく、短く吐く。

〈〈デートルート〉〉

バトラは直ぐに電話を切ると駐車場に戻ると戦闘機のデイナーでもある喫茶店に舵を切り、可能な限り最速で到着するとマスターと同じ日本で働く同業者が何人かがそこに居た。

「……フレンチベージュの彼女なら俺たちに驚いたと思ったら消えたんだが……」

「詳しくは聞かないで下さい！ ありがとうございます!!」

颯爽と去っていくバトラに客の1人が出入り口を指を指すとマスターは一言。

「気にするな！」

「え？ でも……」

「気にしたら死ぬぞ」

殺されるの間違いなのではと思いつつも口を噤んだ客に対して、法定速度ギリ突破で爆走するバトラは恐らく最後に行った海にいたろうとトライクを走らせる。

「懐かしいな……」

なんて事は無い海辺の砂場。だが、バトラとベルクトにとっては思い出の場所でもある。

バトラは駐車場にトライクを止めると早歩きで砂浜に出ると目的の人物を直ぐに見つける。

思い出の場所、しかも冬場に近い時期の場所に不釣り合いなエプロ

ンドレスを風になびかせたフレンチベージュの少女が茫漠とした空と海を見つめている。

そこにバトラが近付くとフレンチベージュの少女、パクファが振り向くとバトラはここまで来た原因を優しく吐き出したロシア語で聞いたですとパクファは記憶で見た事のない景色が何故か理解出来たので見て回り見たくなつた事、その記憶障害とも言うべ物の原因と今回の脱柵騒動の原因がベルクトのスライスである事を察すると頭を抱えるバトラにパクファは更なる言葉をロシア語で吐いた。

それは『お姉様は此処で幸せに過ごしているんですね。ロシアにいたら考えられなかった』という言葉だった。

確かにベルクトは死を定められていた世界から生きる残り、生き抜くことを認められる世界に身を置く事が出来た。そしてその世界で穏やかで暖かくも騒がしく楽しい記憶を積み重ねている。何よりもただ想い焦がれるだけの物の次にそれを競い合える戦友と同じ存在を得た。

パクファはそんな世界もあるのだと少し驚いていた。そして持たない妹が持っている姉に抱く様な可愛らしい嫉妬を抱いている事をこの言葉からバトラは察すると空を見上げる。

冬空に近くなる小松の空は雲に覆われていて星を見る事が出来なかった。

それがわかったバトラはパクファの腕を引いて歩き始めると駐車場に向かい、トライクの後部座席に座る様にロシア語で語る。

それを見たパクファはベルクトの記憶で何をしたのかがわかったのか、そつと後部座席に座るとバトラの差し出したヘルメットを被るとバトラも前席に乗ってエンジンを掛けるとヘルメットを被ってアクセルを回す。

パクファはバトラの背中に抱き着くと楽しそうな笑みを浮かべた。それをバトラが知る事は無かったが……

全くの余談だが、パクファ確保の報酬はバトラが総取りした事に文句は言われなかったが、パクファが楽しそうな笑みを浮かべてバトラの背中に抱き付いて帰って来た事で整備員達から。

『また美少女を背中に抱き着かせやがって！ ゆゝるゝざゝん！！』

と叫ばれながら叩く程度ではあるがリンチを受けた。無論ながら労災申請をしても喧嘩扱いされた事で降りなかった。

作戦63 KOMATSU COMBAT NO
Justice

無事にパクファを回収出来た後に徹夜でパクファのスライスの問題を検索した八代通一同。

MS社のメンバーはベルクト以外のパクファの内容には信頼関係の維持を理由に触れず、ベルクトにも今回の件に限ってのみ本社側から報告義務を特例で解除した。

そして大まかに括れば一般兵でもあるバトラはと言うと、パクファのお目付け役を押し付けられていた。

と言うのも、連れ戻した一件からパクファがバトラに懐いたからなのだが、周りの談では、年の離れた兄に寄り付く妹、甘い兄に甘える妹と言う物である。それでもバトラは現金な所があるのか懐かれると色々世話焼いてしまい、周りの人間も面白がる。(一部はバトラ恋人合戦の賭けに負けない為の工作のつもり)

教えた物をピックアップすると、

瓶全般を使った人の頭の殴り方。(一升瓶での叩き合いが勃発した為に衛生科から苦情が来た後に平謝りからみんなでめちやくちや掃除した)

殺人料理の作り方。(無駄に苦い奴と無駄に塩分高い奴と無駄にカロリー高い奴。MS社の社員が1名ほど衛生科に連れて行かれた。みんなで平謝りした)

一般的な日本の家庭料理。(肉じゃがでジャガイモの皮を剥ぐ際にパクファがジャガイモを一刀両断した事で前途多難な工程になる事を全員が覚悟した)

日本の方言。(沖縄弁を教えようとしたが周りに却下されて九州弁を教えようとしたらパクファから京都弁を希望されたので京都に住んでいた経験のあるMS社の社員を捕まえて講習させた)

トンカツにつけるなら、青じそドレッシングがジャスティス、おでんはダシも良いが卵は味噌がジャスティス。(小松基地の食堂がガチ

の戦場が変わった為に衛生科が全力で止めた)

壊した物の直し方。(電子機器以外なら割と瞬間接着剤でどうにかなる)

などである。

余談だが、これらは全て鳴谷慧が学校などで目を離しざるを得ない間に教え込んだ事である。無論ながらロシアのバーバチカに帰ったから文句を言われる事は間違い無しであるが、バトラの脳内議会ではその文句は鳴谷慧に向く事になっている。

そんなこんなで今日は鳴谷慧が基地内にスクランブル待機要員として滞在しているので、教習(変態化改修)を取りやめたバトラはパクファを連れて六番格納庫に来ていた。

ここには普段であれば、小松基地所属の機体が収まっている場所なのだろうが、未だに對してザイ戦闘で少なからず出ってしまった損害を未だに回復していないのか家主不在の格納庫だ。

此処にはモンゴルから持ち帰った千年前のF-15Jのスクラップが置かれている。

これをバトラが研究所に持ち込まないのか興味本位で八代通に聞いた際に何処の研究所もリソースが無いと一蹴されたと言われた事で恐らくだが近い内にデカイ仕事が来るだろうとバトラは予見しているが、今の目の前を歩くエプロンドレスのフレンチベージュの少女の相手だと意識を切り替えて、格納庫の中へと入ると視界にはパーツ取り用のドナーにもなれないスクラップが転がっていた。

「スクラップしかないぞ?」

そんな場所についたバトラが後ろのパクファに話し掛ける。

バトラがパクファを連れて来たのは、こう言う興味が強い人間を軟禁や下手な事をするのと逆に問題が起きると説得するも、それを一蹴したロシア人達は未パクファを人形や機械の様に扱い、問題を起こさない予防装置としてロシア人がパクファに麻酔を投与して事でパクファが暴走、小松基地の電子装置がハッキングを受けてしまった。

もう少しで一大事だったが、割とこんな事を受けるMS社が育成したシステムエンジニア達が電子的にも物理的にも行つたハッキング

対策で大事にがならず、同時に色覚ステルスで逃げたパクファもMS社が事前に持ち込んでいたサーモゴーグルやサーモスコープで直ぐに見つかった。

この一件でバトラの意見具申に渋々ながら頷いたロシア人にパクファの御守りを押し付けられたバトラはある程度の自由を貰って、パクファを連れている。

「で？　なんでここにいる？」

そして、この場所にエメラルドグリーンに髪を輝かせるフロントムと片宮姉妹の2人が先客として此処に来ていた。

「フロントムが気になるから」と「私はその付き添いです。オーパーツが気になったのもありますが」

MS社の3人の話し声に気付いたフロントムの髪から輝きが失せるといい所に来ましたと告げて、パクファを呼び寄せる。それにバトラが通訳は要るかと思うと、フロントムの口から日本語訛りのロシア語で要らないと返って来る。

フロントムの口からロシア語が飛び出た事に驚いた瞬間に片宮姉妹の両手がバトラの両肩を叩く。

それに振り返ると、いい笑顔なのだが、どこか笑っていない雰囲気。の2人が視界に映る。

「俺が何かした……か？」

「何を怯えているんですか？」「別に脅そうとか考えてませんよ」

そう言う話す姉妹の2人だが、バトラ自身はそれを信用できない。と言うかこうなった2人の危険性に対しては肌を濡らす冷や汗と悪感が裏切った事は無い。

こうなった時は逃走するバトラなのだが、今回はパクファの事もあって逃げる訳にはいかない。そしてこんな状況だからこそ姉妹は動いたとも言えるだろう。

「パクファさんを後ろに乗せて、楽しかったでしょうね」

「背中に抱き着かれて、さぞいい気分でしたでしょうね」

あ、これは嫉妬してますね。

バトラの脳内議会は全会一致でこの答えを出した。のだが、その対

応策は何処からも何も出なかった。

こう言う場合の対処は慣れていないし、これが敵性の人間であったならば、殴るか蹴るか沈めるか墜とすか殺すか潰すかのどれかで解決してきたバトラにとつては対処のマニュアルもノウハウも無い。

そんなバトラに弁明を要求されたバトラは正直に吐く道を選んだ。

「何というか……持っている姉に嫉妬や羨望をする妹に見えてない……」

妹分を2人も持っているバトラ、そして前世の一般人時代はこう言った妹系キャラに対しては滅法弱かった事もあつてかついつい手を焼いてしまうし、出来る事なら協力してあげたい。だが、それだと2人は納得しない。

詰め寄せられたバトラが徐々に摺り足で後退を続ける。これではいずれば八方塞がりだと思つていたバトラの肩にファントムの手が置かれた事でバトラが振り返つた瞬間。

「は」

バトラは、目の前が薄暗くなり、その中心に薄緑の何かがある不思議な空間を見た事で発した言葉の直後に側頭部に突き刺さるファントムの踵により床に倒れる。

「まったく……やっぱり、甘えたり、遠慮げだったりする子が……」

どうやらパクファを含んだ何かの話し合いが終わつた様だが、バトラに対する用事は終わつておらず、そのタイミングでバトラの妹っぽいキャラだからと言う理由を聞いた事で回し蹴りで放つた踵でバトラ沈めるたファントムは誰にも聞こえない声で文句を垂れ流す。

そんなファントムの文句が聞こえないパクファは倒れたバトラの頭をチョンチョンと叩くが、その程度で起こるはずもなく、片宮姉妹は下着を見られる事を厭わずに回し蹴りを喰らわしたファントムに若干な戦慄を覚えていた。

何故なら、下着を見せても構わないと言う意志をファントムから感じ取つたからだ。貴方の為なら全てを見せてもいいとも取れるし、深くまで考えれば、それだけの献身が出来るとも取れる意志表示。なのだが、それにバトラが気付けない。

制裁もあるだろうが、それを真正面から見せられないファントムと言う構造が出てきているからなのだが。

もう少し彼女は素直になるべきだろう。無論ながらそれでバトラを墜とせるとは限らないが。

それでも、今よりは一步踏み込んだ関係にはなれるかもしれない。

「取り敢えずは」「起こしましょうか」

パクファが突っつくだけでは反応しないバトラの背中を2人が同時に踏みつけるとバトラが絶叫を上げながら海老反りになると痛いを連呼しながら格納庫の中を駆け回る。

「お前ら！ ヒールで踏むな！！ 変格持つてるけど、変態じゃねーよ！！」

変格、MS社が独自に設けている資格で変態的技能を持つ者に与えられる物で正式名称は変態資格である。しかも、これは試験で手に入る物では無く、勤務態度次第でいつの間やら付くと言う奴で上層部の愉悦の為に付けらるが、資格獲得理由を聞けば全員が頷くだけ性質が悪い。

これを持つている奴は変態だと言われるが、ヒールで踏まれて喜ぶ様な奴が持っている事は無い。変態的性格では無く、変態的技能に付けられる近くだからだ。

バトラの抗議に対して、片宮姉妹の2人はフンと拗ねた様にそっぽを向く。2人からすればパクファに構ってばかりだったバトラに対するお仕置きも兼ねていた。

バトラもパクファが関わった事で拗ねている事は理解出来るのだが、やはり性格的についな部分が多分に含まれているのでどうしようも無い。

それは片宮姉妹は重々承知の上だが、やはり乙女心的にはやはり理解は出来ても納得は出来ない。自分だけを見て欲しいと言うのが恋する乙女心と言うものか、無論それは口には出さない。無粋とかさう言う物ではなく、バトラは指揮官だ。

誰かだけを見ると言う事は誰かを鼻屑にすると言う事だ。ベルクトは新人だが、ベルクトから誘ったり大きな問題がない限りはバトラ

は単独で訓練するが、やはり訓練風景を見るのはベルクトの方が多い、パクファを外様故に気に掛ける事は理解しているし納得する。が、やはりと言う部分も多いのが片宮姉妹の想いだ。

「ん？ パクファ？」

パクファに袖を引かれて振り返ったバトラにパクファは現地で使われるネイティブなロシア語で時間だと告げるとバトラはベルクトへの見舞いの時間だと気付くと大急ぎでパクファを連れてベルクトの居る施設へと向かう。

パクファ自身も数少ないベルクトとの交流の時間であるが故にこの時間を楽しみにしていた。それを見送ったファントムは手持ち無沙汰の片宮姉妹を呼び寄せる。

「少し……いえ、なんでもありません」

ファントムらしからぬ行動に不信感を抱きつつも片宮姉妹は格納庫の戸締りをしっかりととして出て行く。

閉まる直前に入り込んだ小松の冬風がF-15Jのスクラップを撫でた。

作戦64 護衛任務

技本の施設内にあるアニメ用の検査施設、その中のCTスキャンの機械の様な台に白いアニメ、ベルクトが横たわっている。

それはまるで綺麗に管理された西洋人形が平坦で綺麗な台に寝かされている様な光景は何か視線を引き込まれる空間を作っている。

それは倒れているベルクトが何処か美しくも儂げな印象を与えているからだ。

そのベルクトに声を掛けるのは白い髪に青い瞳の男、バトラだ。

「気分は？」

「まだ少し夢見心地です……なんか色々な記憶が……」

欠けたスライス、簡単に言えば自分の記憶が戻る訳なのだが、預かり知らぬ記憶であるが故に何か異物感があるのだが、自分の物であるが故にその異物感は夢見心地と言うあやふやな物で感じていると語るベルクトの言葉と身体がフラついている事を見たバトラは戦線復帰は少し後かと悟る。

「暫くはお休みだな。不調な状態で出てもな……」

不調機での出撃は好ましくない。不測の事態に対応出来ないばかりか必要最低すらも満足にこなしてくれない場合もあるからだ。バトラも流石に緊急性の低い任務は不調機で出撃する事には渋る。故に複数機保有しておる訳だが、否応無く全ての仕事を拒否するのが身体が不調な時だ。

飛行機の操縦はある種では限界への挑戦でもあち、ジェット戦闘機となれば高度1万mを超える高高度、下手をすれば空と宇宙の狭間まで飛ぶ。そうなれば？生物が生きる事さえ許されない環境がパイロットと言う人種を蝕んでいく。そんな環境下に不調な状態で挑めば当然ながら悪影響が及ぶし、最悪は死ぬ。それを知っているからこそMS社でもアンタレス隊では不調な者を出撃させない。

パイロットという人種は後天的だが、生まれるには赤子よりも長く険しい道が存在するが故に命の価値が高い。この事を不満そうなベルクトに説明するとベルクトは渋々ながら頷く。

「(出撃がなかったのが救いかな?)」

仮にベルクトが治療中にザイが攻めて来た場合は、この前の迎撃戦に参加できなかったから働くと行って聞かなかった事はベルクトの性格から考えれば容易に想像出来る為に稼ぐが無かった事を考えるとバトラ的にはどうした物かと内心で頭を傾げているとバーフォードからの呼び出しを携帯で喰らったバトラはベルクトに今日も一日休暇だと釘を刺して病室を出る。

するとそれに入れ替わる様に八代通とファントムが入室する。意外な人物2人の登場に若干ではあるがベルクトは不信感を抱きながら無言で見つめると八代通は来客用の椅子に腰掛け、ファントムはベルクトに寝ている様に優しく両肩を押して寝かし付けると枕元に優雅に座り込む。

「ベルクト、これからかなり酷な事を話します」

ファントムの口から八代通とグリペン・彗と情報交換を行って決めた決断と少し先の確実に来る未来についての説明が始まるうとしていた。

「覚悟して下さい」

そう語るファントムの目尻が薄っすらと銀色に輝いていたのをベルクトだけが確認するとベルクトは横になったまま弱々しくも確かに頷いて見せた。

「よし!!」

装甲キャノピーを開けたままのバトラの視界には地上クルーがサムズアップする光景が映る。

バトラは自分の目でIレ―44 ウプイリのエルロンとカナード、ラダーと推力偏向ノズルが正常に動いている事を確認するとサムズアップで地上クルーに返す。

バトラは足で動かしていたステイックから足を退かしてシートに正常な座り方に座り直すと車輪止めを外す為に走る地上クルーが手を振るのが視界に映る機体を自走で前進させる。

ゆつくりと地上を自走し始めた愛機に満足気に頷きながら装甲キャノピーを閉じる操作を行う。

キャノピーが完全に降ろされた事でヘルメットに取り付けられたバイザーに計器の光が映り込む事を確認出来る程の暗闇がバトラを包むが直ぐに装甲キャノピーの裏側に施された全周ディスプレイが外の景色を映し出すと直ぐ横にフレンチベージュのSu-57が映る。

Ile-44と似た様なノツペリとした機体は全遊動式の尾翼と共に偏向ノズルを動かして動作確認を終えたのか、バトラを後ろをついて来る様に自走を始める。

それをバックミラーの代わりに搭載されたバックモニターで確認したバトラが前に意識を向けると黒いカナード付デルタ翼機であるラファールが自走していた。

胴体と主翼に増槽を搭載するその機体だが、後ろ姿がいつもと違う事にバトラは気付き、首を傾げる。

「うん？　CFT……要るのか？」

CFT、コンフォーマル・フューエル・タンク。日本で言うならば密着型増槽と呼ばれるそれは機体と一体化させた増槽だ。空中での途中放棄が出来ない代わりに主翼のハードポイントを潰さないと言う利点もある。だが、バトラの頭の計算だと胴体と主翼に搭載した増槽だけで小松からロシア領空への往復は十分に出来る事を考えるとどうも引っ掛かる。

〈私は本国に戻る。パクファを送ったその足でな〉

ラファールのパイロット、ブルーランジェは通信がオープンになっている事を察して回線を変えたのかその後の通信はバトラに聞こえなくなつたがオープンチャンネルで聞こえた一言だけで、ヨーロッパの軍が再編成を行っているのだと察すると同時に担当オペレーターのグレアムから通信が入った。

〈任務内容を確認します。ミッションは護衛任務、対象はSu-57

—ANM　パクファです。場所はウラジオストクまでです〉

〈飛行ルートは海を突っ切れば良いのか？〉

〈我々だけならそれで良いでしょうが、対象が不調機です。念を押し
て日韓の防空圏をなぞる様に飛びます。常に左舷に陸地を見て下さ
い。ロシア領空には旧吉林省東端から入り、ウラジオストク一直線で
す〉

〈敵機襲来の可能性は？〉

〈友社や友軍からスクランブルの報告は無いですが……って、わかる
訳ないじゃ無いですか!!〉

グレアムからのツツコミにバトラは笑いながら謝りつつも、滑走路
脇に到着すると小松空港の屋上に集まるカメラを構えた一般市民を
見つけた管制官からパクファとウプイリの2機による並走離陸の指
示が飛ぶ。

それを聞いた2人はバトラ、パクファの順番で滑走路へとアプロ
チすると先にパクファの方がスロットル操作を行って滑走を始める
と一息遅れでバトラもスロットル操作を行なって加速する。

小松基地、小松空港の滑走路を2機が少しずつれたタイミングで滑走
を始めるが、滑走路を走る2つの巨体が浮き上がったのは全くの同時
だった。

離陸速度の違う2機が同時に離陸する為にバトラワザと一息遅く
スロットルの操作を行っていたからだ、これを打ち合わせ無しで平
然とやってのけた2人の技量と知識は凄まじいの一言だろう。

バトラは離陸して一定高度まで上がるとパクファの方からロシア
語で通信が入るとバトラもロシア語で了承すると2機が同時にラン
ディングギアの格納を行い、編隊を組んだまま緩やかに旋回をして空
港屋上の上空へと向かう素振りを見せると管制官が止めようと口を
開いたタイミングで2機が急角度のバンクを掛けて急旋回、屋上上空
へと到達した2機はパスの瞬間に並んで飛行を行う編隊に組み直す
とパクファは左エルロンロール、バトラは右エルロンロールを掛けな
がら通り過ぎる。

〈最高だ!!〉

まさかのプチエアショーの開催に管制官は管制塔からサムズアツ
プで返したのを90度のバンクをしながら管制塔の側を駆け抜ける

タイミングで確認した2機は上下に主翼を振るバンクでサムズアップに答えるとスロットルを開けて予定航路の方角に機首を向けて徐々に上昇する。

〈遅かったな〉

上空で航路を進みながら待機していたラファールから小言が飛ぶとバトラは薄ら笑いを浮かべながら謝るとバレルロールを行なつてフィンガー・フォーの編隊を作る。

長距離の飛行に戦闘も予想される以上は燃費は抑えたい。編隊飛行は戦術的な優位もあるが、燃費を抑えて飛行する為にも行われるパイロットにとつての必須技能だ。が、今回のラファール・グリペン・パクファ・ウプイリと機体性能が全く異なる機体同士の編隊は危険性が跳ね上がる危険な手段だが、それを問題なく行える人員しかいない為に油断さえしなければ空中衝突という間抜けな事は早々に起きる事はないだろう。

〈なあ、少しいいですか？〉

〈ん？ 誰だ、官名を述べよ〉

〈BARBIE01です〉

BARBIE01、慧からの通信だとわかると今後は気を付ける様にと告げると要件を催促するバトラに慧はパクファから日本語、それも京都弁をキャラが立つからと学んだと聞いたと告げるとバトラは周囲を警戒しながらも頷いてから口を開く。

〈理由は知らんが社員が教えたぞ？ なんだ、キャラを立たせたかったからなのか〉

〈一升瓶での殴り方と殺人料理を作れるで充分だと思っんですよ〉
〈つまりは味が濃過ぎると？ 仕方ないね、なにせ勢いとノリに愉悦が混じったからな〉

慧にはわからないが、この時のバトラの顔は愉悦で歪んでいた。無垢な少女を変態的趣向で味付けする。(調教・歪ませるとも言う)をするのは愉しくて仕方がない事だ。

まあ、バトラとその取り巻きによるロシアへの当て付け、嫌がらせでもある。

信じて送り出した子がとんでもない変態達とつるんで染まっているなど親としては絶望物である。しかもこのキツカケがパクファからの物であるのだからしょうがない。

再発の防止にはロシアが今回の案件で空でも陸でもまともなアニメ作りをしてくれる事を祈るしかない。

通信機からは慧のバトラの奇行に対する小言が飛び始めた瞬間にI-44とSu-57のレーダーが所属不明機を200kmという距離で捉えた。

ロシア領空までもう少しであるが故に油断とは言わないが緊張の糸が緩んだ瞬間の登場だが、レーダーに探知出来た事で奇襲を未然に防げたと安堵するバトラだが、珍しく首筋を蜘蛛が這う感覚を味わった瞬間にディスプレイに所属不明機からネットワーク参加要請が届く。

「Link22……」

バトラの首筋に再び蜘蛛が這う感覚を味わった。

作戦65 バトラノダンス

「Link22?」

バトラは何でこんな物があるのだと言わんばかりに呟く。

Link22は最新鋭データリンクシステムなのだが、米軍が既存のLink16を推し進めた事もあってか普及しているのは欧州が中心でしかもごく一部の兵器のみ。バトラの場合は仕事が一時期ではあるがイギリスやトルコと言った場所だった事もあってかLink22対応の部品を載せており、搭載力に関して余力が溢れるウプイリにはLink16と22を両方をのせている。

「なんだコレは……」

起動する筈の無いシステム。

その起動と言う事実と今まで自分を助けてくれた首筋を蜘蛛が這う様な感覚。事実と感情に板挟みされるバトラの横からラファールが躍り出る。

その訳をバトラは視界に飛び込む様に現れたLink22の接続先がEF-2000-ANM タイフーンと言う情報で察してしま
う。

バトラは直ぐにLink22の情報からタイフーンに対してコンタクトを取り、教科書通りの対応を行うも、向こうからは無言の返答しか返ってこない。

通信が届いていれば、その場で反転せよ。さもなければ撃墜も視野に入れる

それでも無言どころか反転もしないタイフーンを確認したバトラは操縦桿を握り直したのと同時に再び首筋に蜘蛛が這う感触を味わうと事実よりも感情を優先する事を決意したバトラは舌打ちと同時にラファールに通信を繋げると同時に叫ぶ様に通信機へと言葉を投げる。

へアプローチを辞めろ！ 何かおかしい!!

その発言が終わると同時に既にアプローチしていたラファールから対ザイ用に開発されたLRAM長距離ミサイルが放たれる。

ザイを退ける為にLRAMがザイでは無く人間、それも友軍に放たれた事実にも慧もグリペンもパクファですら理解出来ずに反応が遅れる。だが、バトラだけは長年の戦場暮らしが功を奏したのか即座に機体をバンクさせて旋回させるとLRAMとヘッドオンに持ち込む。

「今だ!!」

ウプイリ専用設計の電子妨害ポットを腹のウェポンベイから取り出すと同時に起動させる。

ザイのEPCの電子妨害機能も付与されたコレはアニマが相手でも一定の効果を発揮する。が、今回はラファールの完アニユアル制動のミサイルだったが故に追尾はされるものの、電子妨害の影響でミサイルからの情報送信が無くなった事で誘導力は大きく低下する。

「躲してみせる!」

腹の下から突き上げる様な機動で迫るミサイルだが、バトラはミサイルを機体の腹で掴む様に機体を反らせるとエアブレーキにフラップを全開にして失速、そのままクルピットの様に機体を回しながら自由落下させる事で垂直下方に移動する。

バトラの回避機動をミサイルとレーダーからの情報では無く、電子妨害の影響でミサイルからの情報送信が無くなったラファールはレーダー上の情報でしか受け取れなかった故に初弾を外してしまう。それでもバトラは自由落下を使った普段ならば無茶だと称される機動で急制動を掛けなければ躲せないアニマコントロールのミサイルに息を吐く。

アニマとしての特徴を生かしたセミアクティブホーミングはバトラの腕を持つとしても呼吸を忘れる程に難しい相手だった。

〈ラファールのアビオニクスがハツキングされている〉

ラファールから推力差に物を言わせた動きで大きく逃れながらバトラは通信をグリペンとパクファに送れば、グリペンからはその可能性が大きく、タイフーンを倒さない限りはラファールが正気に戻る事は無いと告げ、Link22の接続を一方的に切る。

〈こんなならケチらずに長距離ミサイルを持つてくるべきだった〉

グリペンの通信が入ると同時にバトラは搭載武装の確認を行う。

上部ウエポンベイにEML、下部中央ウエポンベイに電子兵装、左下部ウエポンベイに短距離ミサイル、主翼半格納型ウエポンベイに短距離ミサイルである。

遠距離攻撃が可能な武装は上部ウエポンベイのEMLのみ。だが、短距離ミサイルをロケット弾としての運用するよりも長距離を狙えるというだけで兵器の種類としては有視界戦用だ。

LRAAMと撃ち合いが出来る兵器では無いしする兵器でも無い。

武装を護衛向けにして来た事で直接的戦闘には向かないセツティングになっていた事に装甲キャノピーを苛立ちを込めて拳で殴るが即座に脳みそを空戦の為の物に組み替える。

「無い手札を求めても意味はない」

ならば、ある手札を組み合わせて強い手を作る。

ポーカーでもJやQ、KやAを集めれば強いが2でも4枚集めればかなりの勝率を叩き出す。

意識を切り替えて回避行動を取り続けるバトラだが、タイフーンのレーダーに捕まり、ラファールからデータリンクを受けた情報を持つて放たれる。

露出している状態で速度を失う程の急制動を掛けていたお陰か機材の冷却は済んでいる。バトラはタイミングを合わせて再び電子妨害を行う事でLRAAMから逃れる。

〈武装を教えろ!!〉

短距離ミサイルとEML、電子妨害系武装。この3枚では足りない判断したバトラは僚機に頼る為に通信を入れながらタイフーンとラファールの欧州戦闘機2機から照射されるレーダーを右に左に機体を動かして引き？がし続ける。

〈短距離ミサイルのみ〉

グリペンからの通信にパクファからも短くも申し訳なきそうにだが、ロシア語で同じくと言う通信が入る。

グリペンはバトラと同じく積極的に攻勢に出る訳ではない為だが、パクファは特に急ピッチでMS社の倉庫から融通して貰う事で用意

した短距離ミサイルであるが故に高価な対ザイ用の長距離ミサイルを融通して貰うのは難しい故に致し方ない。

〈〈電子妨害しながら接近は……〉〉

〈〈ネガティブ!!〉〉

慧の遠慮がちな発言はロックオンされたバトラが機体を37度に傾けたまま上昇、スロットルをMAXどころか過稼働まで持つて行く事で速度を無理矢理に上げながら上昇、電子妨害装置だが、稼働限界の内部温度に到達したのか警告音と共に自動で電子妨害が停止してしまう。

強力な電子妨害を行えるが長くは使えない。しかも一度でもオーバーヒートした場合は安全装置が起動してしまい、冷却が終了しても暫くは使用が出来なくなる。しかも、ウエポンベイに格納が出来なくなるのです。ステルスと速度性能、加速性能が低下する。

「(ここなら……)」

通信機からは慧の言葉が吐き出されるが、バトラにそれを気にする暇は無い。

首を上に向ければ視界にラファールから放たれたミサイルが入る角度まで機首が来るとバンク角度を90度に変更、推力偏向ノズルを可能な限りで下に倒し、迷う素振りを見せずに『押すな』と言われたボタンを押し込んだ。

それは使用は控えろと言われた瞬間的に燃料、それもガソリンを使った瞬間的な推力増強機能を起動ボタンだった。

ウピリのアビオニクスはエンジンへの大き過ぎる過負荷に警告を発するが頑強な機体はその推力に物を言わせた垂直の横移動を行う。

擬似的にして、致命的なまでの代償を持ってラファールのミサイルをやり過ぎしたバトラだが、不自然な風に煽られたのか機体が僅かに暴れ周り、錐揉み回転を起こしてしまう。

「(こなクソ!! 言う事を!!)」

聞けと心で叫びながらフラップやエアブレーキを閉じると同時に錐揉み回転に入ると同時に休息を取らせたエンジンに火を戻し、ス

ロットルを入れた事で浮力が戻り、ふわりとした動きで空中に浮かぶ。

「500mか……」

錐揉みから500mも降下していた。

対ザイ戦を意識した改修で安定性向上の改造をしたとは言えども、安定性を欠くが故に高機動も意識したセッティング故に安定性の悪さは推力と揚力で補うウプイリは一度でも安定を失うとその復帰は至難の技。

ロシアでSu-57に正式採用の座を奪われ、艦載機に生きる道を探したウプイリが艦載機になれなかったのは艦載機として求められる能力を無視出来ないレベルで欠いていたからだ。

「安定した」

暫くは水平飛行したウプイリはバトラの手綱の指示で機体を45度に傾けると斜めに上方宙返りを行う事で速度を失いながらも高度を得ようとするが、ウエポンベイを全て閉じると同時に有り余る推力に物を言わせて増速しながら高度を手に入れる。

〈!!〉

そして前方に黒煙を吐くタイフーンが映るが同時に仕留めたつもりだったのだろうフレンチベージュのSu-57が空気の中から浮き出る様に現れると未だに健在のタイフーンをオーバーシュートしてしまふ。

〈スラッシュ!!〉

EMLがウエポンベイから持ち上がる様に露出されると折り畳み式の銃身が伸び切ると同時に鉄杭が音速の何倍もの速度で放たれる。

急な発射故にダメージは少ない上に狙いもズレた故に垂直尾翼を奪うに過ぎないダメージしか与えられなかったがバランスを崩して錐揉み回転するタイフーンにバトラはガソリン点火の加速で一気に距離を詰めると再びガソリン点火加速を真横に使用と同時にエルロンを操作した事で背面飛行のまま、慣性により、錐揉み回転するタイフーンを中心にバトラがドリフトダンスをする様に回転し始める。

そして機首を向けたまま、という事は機銃の射線に向けている事に

他ならならず、横滑りを維持したまま2門の銃身から放たれる30mm弾を浴びせ続ける。

放たれた銃弾は確かにタイフーンの装甲や翼、操縦席すらも穿つが、それで操縦桿のトリガーから指を離す理由にはならない。

ウプイリはドリフトダンスをしながら錐揉み回転をしながら降下するタイフーンと共に降下をしながら銃弾を吐き続け、遂に銃弾が切れるとトリガーから指を離し、左手のスロットルを開ける動作をする直前に右手の指でEMLを放つ。

放たれたEMLの鉄杭により穴開きチーズだったタイフーンを粉々に砕け、EMLの反動でバックをしたバトラのウプイリは開いたスロットルにより生み出された推力により浮力を得ると砕けたタイフーンの残骸を腹で撫で付ける様な機動で上を通り過ぎて高度を得ると3機で編隊飛行をしていたグリペンとパクファ、そしてラファールに合流する。

〈バ〉〈言うな。申し訳ないと思うなら行動で示せ〉

合流したバトラにラファールが申し訳無さそうな声で通信を繋げるがバトラは言の葉を投げる事で途切れさせる。

〈我々、飛行機乗りが犯した失態を返上したければ、行動で示すべきだ〉

ライジェル隊と言う裏切り者を出してしまったMS社とM42飛行中隊だが、バトラ達は裏切り者を出したと言う失態を世界を救う事で返上してみせた。

〈飛行機乗りが……言葉を飾る事に、意味は無い〉

〈……君は飛行機乗りの先輩だな。わかった、この失態は必ず〉
返すとは言い切らないラファール。

これがバトラの言葉を聞いたラファールの、行動で示すの答えだった。が、この雰囲気をぶち壊すには十分過ぎる音が突如として発生する。

それは、『バスツ』とでも書くのだろうか、何か爆発した音であり、その爆発音はウプイリの両方のエンジンからのものだった。

〈はいかん！ 推力が低下している！ エンジンをやってしまった

!!<>

両方のエンジンからは推力と共に黒煙を吐いていた。間違いなく墜落一步手前の戦闘機がこんな状況です。と動画付きで見せられたら誰もが頷いてしまう程には一大事な状況だった。

<>どうするんですか!!>

<>推力の低下だけだ！ 稼働はする！ でも、流石に渡洋は……不味いなあ……>

ウプイリはあの赤くも白い母なる大地が生み出した戦闘機だ。頑丈さだけは他国の追隨を許さぬ物を持つ。此処からパクファのエスコートを受けながらウラジオストクの航空基地までは絶対に持つ。

<>ロシア基地で直るまで宿泊だな！>

エンジンを騙し騙しで稼働させる準備をしながらバトラが笑いを含んだ言葉で言い切る。

幸いにだが、ウプイリのエンジンはロシア製のエンジンだ。カスタムパーツまでは無理でも純正パーツを集める事は出来る。最悪は渡洋飛行が安全に出来るレベルで修理できれば良い。

が、それがわからない慧は慌てふためいており、声にならない声が通信機から聞こえるも、それを聞いたパクファが責任を持って最寄りの飛行場まではエスコートを行い、パーツ集めにも協力するとロシア語ではあるが確約した事で慧も落ち着きを取り戻した頃にはロシアの領空の至近距離まで迫っていた。

<>私は此処で別れる<>

<>ウイルコ、Bon voyage<>

流石にフランス国籍の機体がロシア領空に居座る訳にはいかない。と此処で機首を振る為にバンクをしたラファールにバトラがフランス語で送るとラファールはバンクで返答しながら雲の合間に飛び込んで視界から消える。

慧もラファールを見送るとバトラの別れの挨拶をして去ろうとするがバトラが小松基地の僚機達に伝言を頼む。

「それじゃあ、少しの間だが……エプロンドレスの美女との余暇を楽しんで来るわ。他の奴に宜しく！」

通信の裏では計器板のボタンやスロットルをガチャガチャと言わせながらも心配させまいと冗談をめかした言葉遣いで投げたバトラだが、慧はこれを一字一句間違えず、アンタレス隊メンバー全員へ律儀に全員分も伝えてしまい、帰投後にバトラの死刑執行を決定した瞬間でもあった。

パクファアの延長授業が決定したバトラはパクファアの空中ドリフトダンスを伝授した後に帰国。

パクファアは自信満々に発表された空中ドリフトダンス、間違った伝統芸能の数々と関西弁と京都弁が混じった混沌な日本語、激ウマ料理から劇マズ料理と日本から輸入された9割要らない技能によりジュラーヴリクの胃壁が決壊、病院送りとなり、バトラへのヘイトが高まったのは完全な余談である。

作戦66 end of start

「よく集まってくれた。って、バトラはどうした？」

小松基地の一室にPMCであるMS社の小松基地派遣メンバー、詳しく言うならばM42飛行中隊とその専属整備隊のメンバーが集められた中で先頭の中央、パイロットが座る位置にMS社の誇るエース・オブ・エース、バトラの姿が有ったが、その顔は何かに殴られたかの様に、と言うよりも確実に複数人による殴打を受けた事を語る様に膨れ上がっていた。

「本当にどうした!!」

ホワイトボードの前に立っていた青い迷彩服を着たバーフォードがバトラの惨状に声を荒げるとバトラは腫れて僅かしか見えていないが、口と喉が問題無くは動かせるのか、声を発する。

「じよひようづあんづえづいったひよとづあがふあにふおらふえてぶおとづおとん」

訂正する。問題しか無かった。

因みにバトラは『冗談で言った言葉を真に取られてボロボロに』と言いたかった。

「ちよつと、何言ってるかわからない」

バーフォードには通じなかったが、今までの事からどうせM42飛行中隊の女絡みだと断定して話を続ける。

「つい先程だが、日本政府より依頼が来た。依頼内容は作戦名Cへの参加だ」

日本政府からの依頼は今まで通りの話だが、改めて依頼を出したと言う状況に会場がザワザワと騒ぎ始めるがバーフォードの咳払いで会場に静寂が満ちる。

「作戦名Cの内容を詳しく説明する。裏も表の意味を捨て、パワーゲームもイデオロギー無しでザイ本拠地を叩く作戦だ。参加兵力は正規軍のみで六十万、そこに各社民間軍事会社から派遣される戦力も加わる。作戦機は七千機弱、戦闘機だけで三千弱と言った所だろう」

全人類の可能な限りを集めたと言っても過言では無い戦力に再び

騒つくが、今回は敵の本拠地を叩く訳なのだから当然だろう。

プレジエクターが作動し、ホワイトボードに中国大陸が写され、アップで拡大される。

「我々、M42飛行中隊はBARBIE隊の護衛として参加する様に本社から指令が届いている。他PMCと正規軍と協力してモンゴル南西部、カシミール、キルギス、カザフスタン南西部より侵攻する」

此処までの説明を聞いたベルクトが手を上げる。

「あの……ただ多方向から攻めるだけとなると被害が……」

ベルクトの言葉にバーフォードは頷いて見せ、ホワイトボードに映された画像はベルクトが誘蛾灯の機能が停止する前に起こったザイの大規模侵攻の際の画像とデータだった。

「先の誘蛾灯事件の際、膨大な数があるとされる小型ザイのデータと超大型ザイの存在も確認された。今回の作戦が膨大なザイと共に超大型ザイも出現した場合は潰走、最悪は全滅だろう。故に支援攻撃が正規軍、一部PMCにより実施される手筈だ」

その言葉を聞いた詩鞍が手を上げる。

「軍艦などのミサイルですか？」

その言葉にバーフォードは短く否定の言葉を告げるとプロジェクトアターが写す画像が変わる。

「ICBM、SLBM、更には超大型大陸縦断巡航ミサイルによる支援攻撃だ」

映し出されたのはロケットに似たミサイルに潜水艦に積み重ねようとするロケットの様な物体、そして砂漠の中で発射される大型の巡航ミサイルだった。

「これって!!」

その巡航ミサイルにこの場における全員が見覚えがあり、詩苑が声を漏らした。

「気が付いたな。これはヴァラヒアのスピリダスII撃墜の為に使われたヴァラヒアからの鹵獲兵器だ。我が社は再びこれを使用する。無論ながら射程外故に発射装置を大型タンカーに移設、弾数も3発のみと心もとないが高速性を利用して燃料気化弾頭による直接的支援を

行い、ICBMとSLBMには通常弾頭が搭載される」

「囿、ですね」

京子が固唾を呑んで告げた。

その言葉にバーフォードは頷いて見せる。

「その通りだ。敵には無慈悲な核による過剰攻撃と思わせ、迎撃に戦力を割かせる」

これだけで此処にいるメンバーはこの作戦行動全ての目的と意味を察する。

バーフォードはソレを会場全体を見渡す事で察し、言葉が続ける。

「今回の敵はただ叩けば良い敵では無い。ザイの全機能を自爆させるプログラムが開発され、それをインストールさせる為に一部を除いたアニマを敵の中枢に近付けるだけで良い。無論ながらM42飛行中隊、ANTARES隊は最後まで戦場に居座る事になり、命を賭してもBARBIE隊の護衛を務める事になるだろう」

バーフォードは再び会場を見渡す。

「勝とうが負けようが、これが対ザイ戦最後の戦いになるのは間違いないのは今更だろう。各員の持てる力を存分に発揮しこの作戦を成功に導いてくれ。そしてパイロット諸君、先程は命を賭してでもと言ったが、無事の凱旋も命令に加える。必ず、成功させ、生きて帰って来るんだ……全パイロットの帰還がパイロットである諸君らの……最重要命令だ!!」

バーフォードの言葉が終わると同時にバトラが立ち上がり、一拍遅れで他の3人も立ち上がると無言の敬礼でそれに答える。それを見た他のメンバーも立ち上がり、無言でバーフォードに敬礼を送るとバーフォードもゆつくりと敬礼を返す。

それを見たMS社の人間はまさしく場慣れした人間の様に各々が何をすれば良いか分かっているのか初動に迷いは無い。

M42飛行中隊とその地上クルーはバトラと言うエースを100%稼働の状態で維持する為に選りすぐりのクルーと今後の維持の為に優秀な新人により構成されており、その仕事や動作は精鋭とその精鋭の部隊に入れられる為に必死に動くある種のプロフェッショナル

集団だ。そんな地上グループに対して地上に居る間の戦闘機クルーの動きは3人だけが何処か拙い。

M42飛行中隊は地上クルーへの被害こそ皆無だが、戦闘機クルーはバトラを残して何代も変わっている。それも異動では無く殉職と言う形で。それ故にだろうか1番機の隊長の階級は隊長を名乗るには低い立場のままその実力から特例部隊として維持されていると言えはその特異性がわかるだろう。

「あの……私達は……」

詩鞍がオズオズと話し掛ける。その言葉にバトラが同じ戦闘機クルーである3人を見渡す。

この3人はこう言った最終決戦前の経験は少ない。バトラ自身もそうだが、重要な作戦で彼女達の立場でやるべき事も隊長となった自分の仕事と共に知っている。

「休んで体力と精神力を温存しろ。スクランブル待機中もその2つの温存を考えろ。現場レベルの俺たちが動けばもう休めない」

如何なる形であろうと終わるまでは動いたら最後、もう休めない。そう言い放ったバトラは隊長としての仕事に入ろうとする。彼も自分が本業を行えば休みはない。故にこれからの酷使に耐える為に今の内に体力と精神力を温存する必要があるが、それだけをやると言う訳にはいかない。

背中で語るバトラに3人は顔を見合わせると自分に支給されている部屋に向かって眠ろうとするが、その足を突然の轟音と揺れが止める。

地震と見間違う程の揺れに地震に慣れていないベルクトを始め、マントルから離れた地震とはほぼ無関係な国出身のスタッフは踏ん張れず、重力に捕まって床へと引つ張れる

「よつと、管制塔!!」

スタッフ達が強かに身体を床にぶつける中でベルクトだけはバトラに襟首を掴まれたお陰で首が若干ながら締まったものの床へも顔面直撃は免れ、バトラは腰の通信機に管制塔スタッフに向けた怒鳴り声を叩き付ける。

「こ、こちら管制塔！ スクランブル！ ザイの襲撃だ!!」

通信機から管制官の焦りを見せる声を聞いた瞬間にその場の雰囲気はが日本という国に似つかわしく無い物へと変わり、バトラだけは首筋に大きな蜘蛛が這う様な感覚を受ける。

「今度こそ……」

傷を負った者が誓いの言葉を呟くがそれは途中で途切れ、その言葉は吐き出した本人にさえ聞き取られる事は無かった……故に気付かない。その言葉は狂気を孕んだ事へのサインだった事に……

作戦67 大規模空襲

スクランブルの警報と共に拡声器から何度となく放たれるスクランブルの叫ぶ声。これは管制官ですら、慌てる様な状況なのだ、片宮姉妹とベルクト以外の社員は全員が把握しており、その動きはキレが増し、把握が出来ていないが故に一息遅れている3人に怒号が飛ぶ。

この様な状況でもフォローを入れるだろうバトラも今回の様な状況では1秒でも早く空に上がらねばならない。その証拠にバトラはベテラン自衛隊員が乗る機体にコンマ遅れで格納庫から今回の乗機として選ばれたIel-44が自走で顔を覗かせる。だが、自走での移動速度は慣れているバトラの方がコンマ早く、滑走路に飛び込む様に侵入する。

へバトラ！　なんでそっちに飛び込んだ！

へサツサと上がれ！　陸地で死ぬるか！

2人の通信だが、上層部からは兎に角上げられる奴から上げろと言う指示に管制官は離陸距離から順番に離陸しろと言ったが、バトラはそれを無視したスロットル操作で加速。離陸した航空自衛隊のF-15のランディングギアが上がった瞬間にその下ギリギリを通る様にバトラの機体が高速で滑走して、離陸する。

へばっ！　なんて危険な事を！

へうっさい！　ゴムを掠めて無いだけマシだ！

ヴァラヒアとの戦争時代では大規模なスクランブル発進の際には離陸スパン向上を目的にエース同士を滑走路両側から離陸させると言う狂気の沙汰が当然の様に敢行されており、バトラも数回ではあるがそれを経験しており、バトラのコレは地面で相手のジェットエンジンノズルを受けるかどうかの距離を駆け抜けると言う物で難易度的にはノーマルのそれだ。

なのだが、上には上があり、先代の隊長は尾翼の先が先に離陸した相手のランディングギアが触れると言う何ともクレイジーな事をしてのけていた。余談だが別の会社の人外エース達はコレに編隊離陸

を足した何とも変態な事を当然の技術の様に行う。

〈こちら、パペットマスター。貴機を今作戦のみ、こちらの指揮下に組み込む〉

管制官の言葉を振り切って上昇したバトラに航空自衛隊の管制機、パペットマスターからの連絡が来る。

〈パペットマスター、了解。敵の位置は？〉

バトラの声に管制官はレーダーを睨みつけるがEPCMで詳しい場所までは表示されない事に苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべるが、バトラの機体が自衛隊には数少ないAJZ改修機である事を思い出すと古典的な方法を指示する事を思い付く。

〈EPCM脅威が微妙だがある。ザイは高速移動中、方位2-4-7に旋回、直進して目視で探してくれ〉

バトラは管制官からの指示に機体を素早く旋回させると緩やかなスロットル操作で機体を加速させると直ぐに視認性を考えた迷彩と言う概念を放り捨てた様な極彩色のザイは直ぐに見つける事が出来た。

〈ANTARES01、エンゲージ〉

バトラはマスターアームがONになっている事を確認するとミサイル発射のコードを通信機に吐きながら、操縦桿のボタンを押し込んで機体下部からマイクロミサイルを1発だが吐き出させる。

吐き出されたマイクロミサイルは複雑な軌道を描きながらザイに迫り、バトラは回避されても良い様に高度を取る軌道を行う。

ザイもミサイルの接近に気づいたのか回避行動を取るが、その動きはザイとは思えない程に鈍重で尚且つ速度が速過ぎたのか、互いの距離を食い潰し合った事で満足な回避行動も取れずにミサイルは命中し、空には機体サイズに見合わない火球を衝撃波と共に生み出した。

「ぬおっ！」

その衝撃波は凄まじく、距離を取っていたバトラの機体を揺らし、極小さな破片を機体に打ち付ける。

バトラはパニックボタンで水平飛行をコンピューターに任せて自分分は機体の損傷を目視とプログラムで確認する。

破片は小さく、陸上攻撃も意識したロシア製の機体は装甲が厚かったのか、破片そのものは装甲に突き刺さるが硬度の高い装甲を貫通するには至らず、エアインタークなどの弱点は複合装甲にしていたお陰か触らなければわからない程の極小さな傷で済んだ。

〈全機！ 被害状況を知らせ！〉

〈ANTARES01！ 敵の爆風と破片を喰らった。目に見える被害は無し、戦闘に支障なし！〉

突然の爆発は遠くを飛んでいた空中管制機にも僅かな衝撃波を電子装置で、コクピットからの視界で確認しており、全ての機体に被害状況の確認を行っていた。

幸いにもバトラ以外はまだ被害を負っておらず、管制官は胸を撫で下ろす。

〈了解。長距離攻撃で撃破しろ。今回の敵は高速の軽度だが、ステルス性を持った巡航ミサイル型だ。既に数発が日本に落ちている〉

既に被害を受けていると知った自衛官から息を飲む。

〈陸自が防空戦闘の用意、米海空軍も防空戦闘の用意をしているが暫くは時間が掛かる。可能な限り全弾日本海上空で叩き落とせ〉

全機から了解の意を示す言葉が様々な言葉で返ってくると管制官は満足気に頷くと全ての機体にデータ送信と言う形で新たに現れた反応と今まで発見した巡航ミサイルの位置情報を更新させる。

〈動きは鈍重だが、速度は速い。長距離からヘッドオンで撃墜しろ〉

バトラは管制官からの指示にマイクロミサイルの軌道を高機動機体を意識したプログラムから高速機を意識した速度重視のプログラムへと変更する。

これでミサイルは直線を意識した機動で飛んで行く。

バトラは長距離レーダーで捕捉した敵に向けて無誘導ロケット弾の様にマイクロミサイルを発射する。

ミサイルはロックオンこそされていなくても自分で機動を補正して真っ直ぐに敵機へ向かう。だが、距離があったのかザイは鈍い動きだが機動を変更し、ミサイルの探知距離から逃げようとする。

普通ならコレで逃げられるのだが、バトラの出身は操縦士では無

く、ドックファイト中でもミサイルの誘導が行える兵装機関士だ。終末誘導の距離に入る前に離脱しようとしたザイの動くをレーダーで見っていたバトラは手動で機動を修正、終末誘導の範囲内にザイを押し込んだ事でザイは無茶な機動を使用とするが機体形状が真つ直ぐ前進する事しか考えていない故に急な軌道変更は空気抵抗の増大を生み、機体全体がエアブレイキとなった事で減速、腹にミサイルの直撃を喰らう羽目になる。

巨大な火球と衝撃波がバトラの機体を再び襲う中、遅れて離陸した片宮姉妹とベルクトも情報整理を終えたカノープスの中に座るそれぞれのおペレーターから飛ぶ方向の指示を受けて飛行していた。

片宮姉妹は今回の作戦への参加機にA-10を選択していた。

〈今回は敵機の撃墜、と言うよりは巡航ミサイルの撃破だ。破壊力が高い。長距離で仕留めろ〉

バーフォードの指示を受けた3人だが、ベルクトが通信を返した。

〈あの……バトラさんは何処に？〉

バーフォードは自衛隊からのデータリンクからバトラさんは位置を割り出そうとするが、EPCMで元からブレた情報では正確な位置が分からず、バーフォードは少し殺した声でだが、ハッキリと返す。

〈中国大陸に近い位置で交戦中だ。3人の任務はバトラが取り逃がした巡航ミサイルの撃破だ〉

〈中佐！〉

グレアムの悲痛な叫びが機内を埋め尽くした。バーフォードは自分のモニターに映る情報を見て、言葉を失った。

モニターには日本海の全域から迫るザイの群れと過去に類を見ないEPCM反応が表示されており、自衛隊もこの情報を持っているのか、戦闘機を何処の部隊に対応させるのが適切か考える間も無く、1機でも多く、1秒でも多く参戦させると言う考えで動いていた。

なりふり構わない戦力投入だが、相手は一般機だ。ザイの波状攻撃を抑えられる様な物では無く、徐々にではあるが前線を突破したザイが日本本土に近付きつつあった。

〈コレで……だと〉

バーフォードですら、思考が停止しかけた事実だが、コレがただの大規模侵攻ならこうはならない位にはバーフォードも修羅場を掻い潜って来たが、この大規模侵攻がバトラがほぼ一人で可能な限りで抑えた結果の取り零しのザイだけでの状態であり、もしもバトラが補給を受ける為に下がれば更に悪化すると言う事が目に見えてわかる事実が目の前に横たわっていた。

「次！」

巡航ミサイル型の主翼を数発の30mmで器用にへし折って海に落とす事で自爆させたバトラはその事実を轟音だけで感じ取ると次のミサイルを探す。が、見つかったのか制空型の首を落とした鳥の様なザイに守られた巡航ミサイル型だった。

〈ドライブ!!〉

腹のランチャーから戦闘機用のプログラムでミサイルを自由落下で吐き出し、自分は急加速を行なって接近する。

ザイは急接近するバトラに気付いて迎撃の行動に移る。バトラはそれを確認しても真っ直ぐ巡航ミサイル型を指して加速し、制空型のザイは容易く背後を取ったが、その瞬間に後方から自立誘導で迫ったミサイルをエンジン部に喰らって爆発する。

自分を囷に確実かつ早急に撃墜すると言う危険な行動だが、それが行えるだけの実力はバトラにはあり、迎撃を即座に破ったバトラは巡航ミサイル型に迫る。速度を上げて逃げようとする巡航ミサイル型だが、バトラは背後に張り付くと距離が離れておりミサイルのしか当たらない距離だ。だが、此処で今まで閉じていた上部ウエポンベイが開く。

〈スラッシュ!〉

上部ウエポンベイにはEMLが納められており、電力のチャージを終えると弾丸を高速で撃ち出す。

発射された弾丸はサイズと重量がある故か音速を幾度となく超えたことを僅かなソニックブームを残しながら飛翔し、巡航ミサイル型

を中心から貫く様に撃墜する。

「チツ……残弾ゼロか……」

EMLが弾切れを起こし、ADMMも後数発が限界の上に機銃弾も残弾が乏しい状況だった。

〈エンジンゲージ!〉

それでも敵は迫って来る。バトラは腹を向けてADMMを撃ち尽くすとセミマニュアルで誘導、火球をいくつも生み出すとそれを背に機体を最寄りの基地である小松基地へと急がせる。

「……こいつは……」

ザイの波状強襲は無事に退けられ、日本各地の空に一時の平穏が戻った。が、MS社の為に作られた機銃弾を凌げる程の簡素な防弾設備を設置したプレハブな様な格納庫では整備長とバトラが死んだ魚を思わせる目で愛機である2機の機体について纏められた書類を見ていた。

「被弾はねえが……2機とも寿命だな」

各地の基地から日・米の機体が降りてきた事で騒がしくする中で2人の言葉は妙に空間に響く。

機体各所に整備ではどうしようもないダメージの蓄積が今回の出撃で見られる様になった。

と言うのも基地に戻っては機体を乗り換え、小松基地でないなら補給を済ませては戦場にトンボ帰りを20回以上も行った上に無茶な機動や動作の連発で機体寿命を短時間に大きく削いでいた。

「ウプイリだが、エンジンがやられてやがる。ガソリン点火装置の多用だな。バルムンクは全体的にヨレてる」

「ウプイリのアレは無茶な後付け、バルムンクは事故機の再生機だから仕方ない」

「2人は揃って頭を抱える。」

こんな状態の機体で出撃すれば何が起きるかわからない以上は出撃はさせられない。最終作戦も近い故に判断と行動は即決と即行が求められる。

「取り敢えず今回の事で追加物資がベトナムから船便で送られてきた。その船に乗せて、オーシア・ズ・ユークに渡そう」

その言葉にバトラの頬に嫌な汗が滴る。

今のこの状況でオーシア・ズ・ユークの名が出ると言う事の意味を即座に理解し、脳裏に片足に補助具を付けた凄腕の女技術者の顔が浮かび上がる。

「ああ……パーツも載せなきゃならんな、倉庫にある奴のリスト探さない……」

「そこは本社から適当に送っておいていいか？」

「申し訳ないが頼む。あ、あの3人は？」

バトラが今回の出撃で1度も合わなかった自分の部下である少女3人の顔を思い出しながら整備長の男に問うと話題に上がった3人の少女が駆け寄り、片宮姉妹の2人が纏めて抱きついた事でバトラはバランスを崩して纏れ込む様に倒れる。

「いてえ……」

強かに背中を地面にぶつけたバトラが僅かに上半身を起こしながら、ベルクトの笑みが何僅かに苦痛を隠す様な物に見えたが様な気がしたが、直ぐに視線を目の前に抱き着く2人に制裁の為の拳骨を落とす為に向けた事でその気が何処かに飛び、格納庫に少女2人の可愛らしい叫びが響く。

「いきなり何するんですか!」

「兄を心配する可愛い妹に!」

「ブーメランだよ! そして、ためーで言ったら世話ねーな!」

連続出撃直後に関わらずぎやぎやと煩い3人のパイロットに精強で名高い航空自衛隊のパイロット達は3人を自分とは違う存在を見る様な目で見つめるが、嫌に視界に映るのは何処か辛そうな雰囲気放つベルクトだ。

自衛官達はベルクトがああ空間から一歩引いた位置で辛そうに見つめる事に疑問を思いながらも彼女の中での話だと理解するとそつとしておくする事にする。

「はあ……機体状況を」

一段落したバトラが機体状況の報告を上げる様に指示をする。

「A―10ですが、重整備行きです」

「決戦ではF―3の使用が妥当ですね」

「……ドーターなので問題ないですが、エンジンの整備を少し……」

煮え切らない様子のベルクトにいよいよとなつて片宮姉妹も気が付き始めたが、その疑問を呈する前に通信で技本棟に来る様に言われた3人は大規模な出撃後と言う事も有つて急いで技本棟へと向かった。

作戦68 意思を示して

外の明かりが入らないカノープス機内に向けられた拾い休憩室にMS社の航空勤務の一部を除いたメンバーが集まっていた。

「今回の連続出撃はご苦労だったな」

時間となって最初に口を開いたのは疲れが残った顔のバーフォードだった。

ヴァラヒア事変を潜り抜けたベテランと言えども、今回の出撃では補給中は僅かでも休められる戦闘機パイロットと違い、常に上がって来る戦闘機パイロットに指示を飛ばし続けねばならなかった空中管制官の搭乗員であるバーフォードに休みなど無かった。

それは他の搭乗員も同じでその顔には僅かながらの疲労が見て取れる状況だった。

「今回のデブリーフィングの内容は被害状況についてだ。手元の資料にデータを送る」

バーフォードが手元のタブレットを操作して全員のタブレットにデータの送信を行うと一枚のデータと一枚の画像が表示される。

「最初にだが、今回の出撃では損傷機こそ多いが被撃墜機は無しだった。これは今回で出現したザイのタイプによる物だが、死傷者数も奇跡的な数と言って良い。此方はバトラが使い物にならなくなったがな」

バーフォードの苦虫を噛み砕いたかの様な表情にバトラは申し訳なさそうな苦笑いを浮かべる。

「だが、それよりも被害を受けた内約だ。これは非公式のタレコミ情報だが、2枚目の画像。この施設は対EPCM用の信管に使われるチップを研究開発する施設だ」

バーフォードの言葉に全員の目が強く開いた。中には席を揺らし程に驚愕する者も居た。

バーフォードの全員が反応を示した事で八代通から聞かされた言葉を自分の言葉にして吐き出し始める。

「グリペンの巻き戻しの情報。これは知られる前から研究していた物

でグリペンのそれは関係無い。情報の規制もバツチリだ」

「じゃあ、偶々に突撃した場所が此処だった……とか言いませんよね？」

「やられた場所が運悪く研究拠点でした。ってか？なんて酷い三文劇だよ。脚本家が名乗り出たら助走をつけてぶん殴るレベルだな」

グレアムの言葉にバトラがジョークで返すが、それで空気が軽くなるならなかった。こんな事を言っても可能性が高い仮説を全員が満場一致で組み上げていたからだ。

「我々がしてきた様に繰り返し返しの記憶はザイにもあるのだろう。事実として、今回の施設とは別に他の対ザイ研究の施設もやられていた。更には何の設備かわからない設備や施設もだ」

「徹底的ですな……」

京香の言葉が嫌に響いた。

ザイはバトラ達が取ってきた繰り返しからの記憶を使った攻略にしっぺ返しで返してきた。しかも自分達が消滅しない様に自分達とは違う技術ツリーの技術のみを的確に狙ってた。

「未来への剪定作業とも言える攻撃だったんだ。今回の襲撃はな」

重い雰囲気包んだ一同をバーフォードは机を叩いて自分に興味を向けさせる。

「今回の事で上は作戦を早める事になった。此方が滅亡するしかない未来しか残らない前にザイを消滅させる。やるかやられるかなら、やっつてのける！それが我々、アンタレス隊だ！Xデイは1月の9日だ！それまでに可能な限りで準備を終わらせる！」

バーフォードの言葉に気合を込めた返事を返す。ただ、ベルクト以外の全員は。

12月31日の日曜日の夜

大晦日の今日は去年のとは違い、暇な人員など数える程であり、そ

の暇な人員も大晦日の大掃除や年明けを祝う準備など出来る様な有様なのでは無く、小松基地はキツイ空気に満たされていた。

そんな小松基地に駐機された白いS U R 47のコクピットにベルクトが蹲り、隠れる様に収まっていた。

外界からの光の全てを装甲キャノピーが遮り、エンジンも何も発動させていないコクピット内部にはディスプレイの明かりも無いそこは、暗く狭い箱の様な場所になっており、ベルクトのその姿は何かに迷い、恐怖で動けず、震える事しか出来ないか弱い乙女の様だった。そんな場所に四方から明かりが漏れる様に飛び込んで来る。

「こんな場所に居た」

ベルクトが今は聞きたく無いバトラの声と共に。

「バトラさん……」

ラダーから降りようとするもラダーはバトラが乗っている物が1つのみ、降りられず、キャノピーを閉めようにも安全装置が発動していて閉じられない状況。

見つからないと思っていた場所は逃げ場が無い場所である事になった今気付いたベルクトはどうしようも出来ずに泣きそうになっていた。

「何を思い詰めているんだ」

最終作戦も近い。そんな状態になる程の物であるなら、乗機を失い、訓練も出来ない自分に吐き出せと告げるバトラにベルクトは声を押し殺して無言のまま、周囲に小さく涙を撒き散らしながら首を振る。

優しく笑いかけるバトラに感謝しつつもそんなバトラに優しくして欲しく無い本心が混じったベルクトの内心ではどうしようも出来ずにただそれ続けるだけだった。

「なあ、ベルクト……」

震えるバトラの手がベルクトの頭の上に優しく置かれ、小さく撫でられる。まるでそれはベルクトの存在を確かめる様な動きだった。

「お前はサーシャの件は知っているだろう」

バトラの言葉にベルクトが目を見開き、同時に自分のやっている事

がサーシャと同じ事をしている事に気付いた。否、気付いてしまった。故にベルクトの中で感情を堰き止めていた堰が壊れた。

「おい……ベルクト」

堰が壊れた瞬間にバトラに抱き着き、蚊の鳴くような声でごめんなさい、助けて下さいと謔言の様に繰り返すベルクトにバトラは右手で頭を優しく撫でながら、左手で背中をあやす様に叩く。

「何があつたんだ？ 言えない事か？」

その言葉にベルクトはバトラの身体に頭を埋めたまま、擦り付ける様に首を振り、涙声で訳を話し始める。

「フアントムさんから……」

その言葉からベルクトはフアントムに聞かされた事を話し始める。今回の作戦はザイの消滅、というよりはザイの生産補給と指揮統制を行うコア『球殻』を本質の世界であるアンフィジカルレイヤーへと追放した後に機能停止を行い、もう2度と現実の世界に戻る事無く封印。という表現に近い。しかしながらこの作戦、この唯一の手段では生産と補給を行う球殻の現実世界からの追放により、ザイへのエネルギー補給も断つという事であり、球殻から補充されるエネルギーを持って本質に受肉させているアニマもエネルギーが断たれる事で消えてしまう。

簡潔に言ってしまうえば、最終作戦が成功すれば確実にアニマ全員は未帰還。アニマのみは決死作戦となる。

それを理解したバトラはベルクトの強く抱きしめた後にラダーを滑る様に降りる。バーフォードへ決死作戦という愚かな作戦にベルクトを出撃させない為に……

「こんな時にー！」

駆け出そうとした瞬間を狙ったかのように本社からの緊急メールを知らせるアラームが鳴り、苛つく感情を表に剥き出しながら画面を睨みつける。

「は……」

その内容にバトラは我が目を疑った。

「お得意のハッキングか？」

冬の風が吹き付ける小松の海岸に2人の男女の影があった。

片方はMS社の冬用制服に袖を通したバトラ、もう片方はダツフルコートに身を包んだファントムだった。

「まさか来てくれるとは……」

「タイミングが良過ぎる。お前だと判断出来る状況証拠と……ま、お前ならやれるって言う信頼だ。で？ 作戦の事か？」

そう言つてバトラはメールを見せる。

そこには此処の位置情報と話さなければならぬと言う意思表示がファントムらしい言い回しで綴られていた。

「この際です。言葉を重ねる事に意味は無いでしょう？」

優しい言葉だが、ファントムは見抜いていた。

バトラが此処に立っている事が既に精神的に限界に近い事も、そしてこんな状態でトライクの運転を取り止めて、歩いて来る位には冷静である事も。

「単刀直入に聞きます。貴方はどうしたいですか？」

その言葉にバトラの口と鼻から呼吸の音すら消える。数秒経った頃にバトラの口が死に掛けの人間の様に動き始め、それと同時に風が止んだ事で無音の環境が出来上がる。

「な、に……が……」

ファントムが真っ直ぐにバトラを睨み付ける。それはまるでバトラを値踏みするように、そして風が強く吹いた事で鼓膜は風が揺する音のみを拾う。が……

「何が出来るって言うんだ！」

バトラの全てを壊すかの様な叫びは風の音を引き裂いて、ファントムの鼓膜を揺らした。

「俺たちは雇われ傭兵だ！ 作戦変更を行える発言力は無いんだぞ！」

それに……お前らはそれで良いのか！ 人の都合で産まれて！

人の都合で消えて行く！ お前はそれで良いのか！」

「バトラさん」

フロントムの眉が寂しがる様な、悲しがる様な押し下がりをする。

「私達は「人間じゃないって言うんだろ！ わかってんだよ！ 頭では理解してんだよ！ そんな事は！ お前達はそれぞれの戦闘機という存在を具像化された存在……そんな事はわかってんだよ！ 理解してんだよ……わかってるよ……だが……だけど……」バトラさん……」

両目を両の掌で抑えながら涙を止めようとするが、止められる筈が無く、腕を伝って落ちた涙は砂浜に吸われる消えて行く。

「だけど……わからなくなっただ……お前らが人間なのか戦闘機なのか……アニマと人間の何が違うのか……でも、心がな……フロントムもベルクトも全てのアニマは……人間と一緒にだと、なんら変わらない存在なのだと叫んでるんだ……」

「私達は人間ではないんですよ……」

フロントムが何か押しとどめる様に顔を伏せ、手はコートを強く握って耐え忍ぶ。

「……だから、あの娘は消える自分が貴方の記憶と思い出に残る事を、想い出に遺る事を嫌い、遠ざけようとした」

フロントムの声が震え始める。それでもしつかりと伝えなければならぬと己を奮い立たせ、それがフロントムの心にある感情を生む。

「……でも、あの娘の中に貴方の幸せを望む心があった。だから、隠せななかつた。本当ならベルクトにも話したくなかつた。話せば貴方に伝わる。貴方はただでさえ……ただ……で、さえ……」

フロントムの脳裏にある光景がフラッシュバックする。

それは初めてバトラのF-4のパーツを使ってダイレクトリンクをした際にパーツに残された残留思念がフロントムの中に流れ込んできたのだ。

整備員と一緒に簡単な整備を真剣な目でマニュアルと格闘しながら楽しそうに、愛情をどの整備員よりも注ぎながら整備する少し若いバトラに、ヴァラヒア事変を終え、ザイの出現までの僅かな間に飛ば

せない事を謝りながら機体を丁寧に磨くバトラ。

「ただの戦闘機にあそこまでの愛情を注げる人だから！」

パーツ単位にバラされながらも、最後の持ち主だったバトラへの愛情を隠さないRF-4TB AJZ ファントムIIの残留思念。そして、もう一つ。

『バトラを、レオスを守って上げてね。あの子は直ぐに無茶をするしからね』

バトラの隊長だった。未来奈の言葉だった。

「私はRF-4EJ ANM ファントムIIでは無く……」

『それと……あの子を幸せにして上げて。私では出来ないから。貴女達にお願いするわ』

「RF-4EJTP ファントムIIIです！ 未来奈さんの想いを託され、貴方のF-4の血を引いています！ だから！」

ファントムがバトラの両頬に手を這わせ、向き合わせる。

「貴方のF-4でもあるんです！ 貴方が敵を墜とす為の矛で！ 貴方の命を守る盾で！ 貴方を飛ばす為の翼で！ 貴方の意思を実現する為の存在です！パイロットである貴方が居なければ、私達は何も！」

ファントムが貴方の意思を知りたいと、涙で輝く瞳でバトラの瞳の奥を見つめて来る。

「仲間を失いたくない……どんな形であれ、今のアンタレス隊を失いたくない……勿論だけど、ファントム。お前も失いたくない仲間だ」

バトラがファントムを抱き寄せるとファントムもバトラを抱きしめると僅かに背を伸ばして、バトラの耳元に口元を持って行くとファントムは囁く。

「貴方の意思も受け取りました。そうあれと命令されれば貴方の意思に添い続けましょう。この身が朽ちるその瞬間まで」

それを聞いたバトラがファントムを抱く力を増やして、抱き寄せるとお返しだと言わんばかりにファントムの耳元で囁く。

「俺はパイロットだ。君達が飛べるなら俺の意思をもって飛ばしてみせよう。この意思が求める場所に行き着く瞬間まで」

作戦69 日の出の出撃

「数時間後には空に居させるんだ！」

小松の自衛隊、取り分けて独飛が専用で使う格納庫では独飛所属のドーターをほぼ専属で弄っている機付長、船戸の叫び声が響く。

というのも、F-15とJAS39の発進準備が遅れ気味であったからだ。

「……了解した」

そんな喧騒に包まれる中で取り分け静かに、冷静に少し燻んだ緑のRF-4EJのノーズしたで自衛隊の制服では無く、民間軍事会社MS社の制服を着たバトラが自衛隊の制服を着る老兵から機体の状況などの説明を受けていた。

バトラに説明を行う人物の他にも発進準備を行う機付員達も皆が熟練の見た目と雰囲気を持っており、ドーターの中では唯一と言って良い程に発進の準備が滞りなく行われている。

「そんな事をしなくても私の身体は万全です」

終わったタイミングでファントムがコクピットの縁に両腕を組んで乗せたまま覗き込む様な体勢で声を掛けて来たのは、ファントムだった。

ファントムの声にバトラと機付員が首を上げるとやるべき事は終わったいたタイミング故に自然な所作で機付員は別の仕事へ、バトラはタラップを登って前席へと身体を滑り込ませる。

「あの時のままか」

コクピットに乗ったバトラが驚いたのも無理はないだろう。

ファントムの前席はファントムでベトナムまで飛ばした時のままだったからだ。

ファントムはバトラの眩きに身体を前席の背もたれに枝垂れかかる様に上半身を動かして顔を上から覗かせる。

「ええ、また貴方を乗せようと思っていたのでそのままです」

普段は後席で操縦と火器管制をしていましたと妖艶な微笑みを浮かべるファントム。

それを聞いたバトラはなんて無茶をと思ったりが、ドーターは全周モニターに加えて、操縦方法はアニメで有ればダイレクト・リンクであるが故にそう大した問題にはならないのだろう。

「キャノピーを閉めるぞ」

座席のハーネスや酸素マスクなどの固定具合を確かめたバトラが発進の為にキャノピーを閉める操作を行う。フロントムは少し名残惜しそうにしながらも座席に戻り、座席に自分の身体を固定する。

「急な予定変更とは、やってくれる」

機体を格納庫から自走で誘導路の上へと動かしながら、出撃前の合同ブリーフィングの内容を思い出して呟いたバトラにフロントムはその独り言を聞いてか会話を楽しみたいのか、背後から言葉を投げける。

「実際にどうなんでしょうね。電子戦機か、或いはライノの様に」

思案を巡らせる様なフロントムの声にバトラも周囲の完全確認をしながら思案を巡らせる。

バトラ達がこうして出撃をしようとしているが予定ではもう少し後の予定だった。が、中国国境部で消息を絶った英空軍の電子戦機がNATOの戦術ネットワークに不正にアクセスされていた事が発覚、作戦内容がバレた可能性も考えて予定を前倒しにした訳だが、フロントムとしては如何して消息を絶った電子戦機が不正にアクセスをして来たかが気になるようだった。

「電子戦機ごとアンフィジカルレイヤーに連れて行って洗脳か……」

まあ、わからない事を考えても生産性は皆無だ」

「だから、目の前の仕事をやる。と？」

セルフを取られたバトラが背後に視線を向けるとフライトジャケットにアニメは被る必要が無いヘルメットのバイザーを上げたフロントムがしてやったりと言う感じで目を細めて見つめていた。

「流石が俺のF-4だ。わかっている」

そうやって前を向き直ったバトラの言葉にフロントムが目のバイザーの隙間からでも分かるほどに真っ赤にしているフロントム。

「（無意識か天然なんですか！）」

フロントムの声ならぬ声は怨嗟と歓喜が混じった目で語られるが、前方に向き、機体を滑走路脇の誘導路まで進める事に集中していたバトラに気付かれる事は無かった。

それが幸か不幸かはさて置いておき……

〈ANTARES01、滑走路への進入を許可する〉

バトラとフロントムの乗る戦闘機に滑走路への進入許可が降りる。バトラを手早く返答すると機体を進ませ、滑走路へと進入する。

〈ANTARES01、離陸を許可する〉

管制塔からの許可を聞いたバトラは念入りに滑走路上、滑走路脇に離陸を阻害する物が無いか確認する。

航空機はどの機種も通じて離陸時と着陸時が最も危険な時間だ。特にエアインタークからの異物侵入が襲撃を受けていない空港で最も多い墜落の原因だ。

「離陸する。準備はいいか？」

普段は一人乗りの機体に乗るバトラだが、最初は二人乗りの複座型搭乗員だったバトラが後方のフロントムに準備が良いか何うとフロントムは慌てた様に自分の身について確認すると大丈夫だと身振りで伝える。

〈ANTARES01、クリアード・フォー・テイクオフ〉

フロントムの身振りを確認したバトラも大きく頷いて了解の意を伝えると離陸の宣言と共にゆっくりとスロットルを操作して機体を滑走させる。

強化改造が施されたJ79—IH1—17Aから赤から青に変色した炎を吐きながら機体を押し進める。

最初はゆっくりと、だが徐々に加速する機体に合わせてキャノピーに施されたモニターに映る小松空港の風景が背後へと流れて行き、機体からフワリとした浮遊感が2人を襲い、機体は夜明け寸前の藍色の空へと吸い込まれる様に進んで行く。

機体はある程度の高度まで上がると水平飛行に移り、戦闘機にしてはゆっくりとした速度で、ランディングギアを出したまま直進飛行を行う。

〈ANTARES01、貴機の高度制限を解除する〉

〈ANTARES01、ラジャー〉

管制官からの言葉を聞いてバトラはランディングギアを機内へと格納し、機首を僅かに上に上げて安全な高度まで手早く上昇しようとする。

〈ANTARES01、小松の地から武運を祈る〉

〈……Thank you〉

管制官からの言葉に感謝の意を伝えるとファントムが無線のチャンネルを管制塔の物から空中管制機『カノーパス』の物へと切り替え、バトラはMS社で使われる独特なナンバリングで告げられた場所を太腿の地図で確認を行う間にファントムはリーダーで周囲を警戒、そして目視確認の合間に上昇する機体のバックミラーから小松の基地を眺めると翼端灯の間が妙に長い機体が滑走路に進入していた。

〈ANTARES03の離陸を許可します。幸運を〉

バトラとは違う女性の管制官からの言葉に詩苑は頷きながら返事の言葉を吐き出すと同時にスロットルレバーを操作する。

〈ANTARES03、クリアード・フォー・テイクオフ〉

バトラのエンジンとは違うエンジン音を吐き出しながら徐々に加速する黒いA-110は小松の地から重力の鎖を断ち切って、未だに夜の帳が残る大空へと進んで行く。

〈ANTARES04は滑走路へ進入しそのまま離陸して下さい〉

急かされているのか少し慌て気味な管制だが、それに慣れた様子で詩苑は機体を進め、滑走路へと進入、既に許可は出されているので新たな異物が無いこんでいまいか目視で確認した後は無線機のスイッチを入れ直す。

〈ANTARES04クリアード・フォー・テイクオフ〉

先々に飛び立ったA-110と似た音を奏でながら地面を滑る様に滑走路、重力を振り切れるだけの空気の流れを得た機体はフワリとした動きで地面から離れ、空中管制機から受けた方角へと機首を向ける。

〈ANTARES02、お待たせしました。滑走路へ進入して下さい〉
管制官からの指示を受け、滑走路へと入ってきた機体は先程の白と

は違う白をした装甲で覆われたS u | 47だった。

薄暗い小松空港の滑走路に白に輝く機体と薄っすらと光る青いハニカム模様は幻想的な光景だった。

〈進路上に障害なし、離陸を許可〉

〈ANTAREO2、ベルクト。クリアード・フォー・テイクオフ〉
ベルクトがスロットルを操作したのかエンジン後端部が赤く光り、次第に青い炎を吐きながらS u | 47の巨体を押し出し、地面を高速で滑らせて行く。

武装の搭載に加えて様々な装備を足した機体はそのエンジンパワーを持ってしても浮かせるには一苦労で小松基地の滑走路ではギリギリの長さでの離陸だが、安全な離陸を果たし、水平飛行に移行すると同時に管制官から高度制限の解除を受けてランディングギアを機体内部へと格納する。

〈ANTARE隊全機の離陸成功を確認した。編隊を組め〉

カノープスに乗るバーフォードの指示を受けてF | 4を戦闘にフィンガーフォアの編隊を組めANTARE隊の4機達。

エンジンを強化されたA | 10も最高巡航速度なら他の2機の最低巡航速度に追従できるまでは強化されている為に編隊を組み続けるのはそう難しい話ではない。

〈此れから長距離移動になる。自動操縦装置に不備はないな〉

バーフォードの言葉に4機から、1番機からはファントムの返信で異常がない事を伝えられると暗いカノープスの機内でバーフォードが頷くのとカノープスのコクピットに編隊を組むANTARE隊の4機が映るのは同時だった。

5機の機体が編隊を維持したままその機首を目的地の方角へと向けるとコクピットに赤い明かりが映される。

〈空が……〉

ベルクトの様々な思いが詰まった言葉が響く。

東の水平線から徐々に太陽が上がり始めようとしており、弱くも確かな明かりが水平線から漏れ出る様にしてカノープスのコクピットを照らし、ANTARE隊の戦闘機のコクピットには赤い明かりが映

し出され、その面積と光量は徐々に上がって行く。

〈夜明けです〉

〈綺麗ですね〉

詩鞍の言葉に歴史が決まるかもしれない時が近いと言っても変わらぬ姿で現れる夜明けに詩苑が無意識に抱いた感情を呟く。

陽光は徐々に空を輝かせ、戦闘機と空中管制機の装甲を照らされて僅かに赤く輝く。

「バトラさん。この戦争が終わった時にまた……」

「ああ、また……みんなで……」

ファントムの言葉にバトラも色々思いを混ぜた言葉で返すとファントムは映像の朝焼けの明かりに照らされながらもバトラのそれとは僅かに少し違うのだと不満そうな表情を浮かべるがバトラの事を考えればそう言うだろうと納得して頷く。

〈そうだ。この戦いに勝ち、ANTAREE隊全員でまた、この日の出を見よう。目指すはロシア連邦、ベラヤだ！〉

ファントムとバトラは会話が通信機で流れていた事に驚くがバーフォードの言葉にカノープスの乗員の全員が頷き、目付きを鋭くさせる。人間の戦闘機乗りも操縦桿を握り直し、アニメは座り直して前を見据える。

作戦70 白い世界で懐旧を……

MS社M42飛行中隊が到着したイルクーツクの大地は積雪と朝靄で白く煙り、排気炎が朝靄を朧げに照らず上に積もった雪が排気炎の光を反射して幻想的な光景を作り出す。

4機の戦闘機と1機の空中管制機が編隊を組んだまま、雪原の上を飛ぶ中で突如として自然物だけが支配する光景の中で突如として巨大な人工物が姿を現わす。

「やつと着いた」

夜通しで飛び、航続距離は空中給油で済ませた故にコクピット内で夜を越したバトラが狭いコクピット内で器用に身体を動かしてコリを取ろうとしながら呟く。

「アレですね」

フアントムが覗き込む様に前方のモニターを視界に納めて呟く。

それは幾何学模様を浮かべ、襞のような物の先には巨大な機影、爆撃機のシルエットが鎮座しているそれはロシア軍の空港施設のそれだった。が、それは空を飛ぶ人間達の一部はデータ上でしか確認出来ず、目視で確認すべき人間でも朧げな物に見える。

周りを包む朝靄に積雪、それらから反射や屈折で届く光は施設だけで無く、掩体の生み出す陰影だけで無く、併走する様に流れる河川の水の煌めきも、針葉樹林の樹の葉や枝に乗る雪の輝きすらも朧げな存在にさせてしまう程だった。

「到着してすぐブリーフィングは勘弁願いたいですね」

「シャワーだけでも浴びたいか？」

機体が高度を下げ始めた事でマスクを剥がしたフアントムに遅れてバトラは 一昔前までしか使っていない慣れないタイプである故に少しぎこちない手つきでマスクを口元から剥がした。

「ええ、ぶっ一緒にいかがです?」

「楽しみにしとけよ。覚悟出来てるって事だもんな」

バトラがバックミラーの反射でフアントムに見えるようにしつつ、バイザーも上げた上で口元に嫌らしい笑みを浮かべながら告げた瞬

間にフロントムがビクツと跳ねる。

ヘルメットを被って無ければ髪の毛が持ち上がる程に身体を跳ねさせると同時に顔を真っ赤するフロントムだが、コクピットの空気が甘い空気に変りかけた瞬間を狙ったかの様に警告灯が光り、警告音がコクピットを埋め尽くした事でバトラが反射に近い動きで機体に急旋回を掛けつつもループ機動を行う。

〈何を話してるかはわかりませんが、抜け駆けは許しません！〉

〈ベルクト越しにフロントムのEGGは観測してますからね!!〉

〈い、色仕掛けはいけないと思います！フェアに行くべきです〉

空対空ミサイルのロックオンをしてきたのは僚機の3機であり、ロックオンから逃れたバトラとフロントムは3人は口での攻撃を浴びせ掛けられながらも編隊の定位置に戻ってくるとバーフォードから連絡が入る。

〈ああ……そろそろ着陸の準備をしてくれ……〉

この談笑と冗談で判る通りにわかる通りに5機の航空機は迷う事なく飛行を続ける。全てが臆げで、曖昧で、不確かな空間でも、空に挑んだ者を、空に旅立った者を、空に生きる者を無条件に全てを受け入れ導く航空灯火が空を飛ぶ飛行機に帰るべき場所を、降りるべき場所を示し続けていくからだ。

4機の戦闘機は危なげなく滑走路へとアプローチを開始。最初にアプローチコースに入ったのはバトラとフロントムのRF-4EJ TP ANMだった。

他の機体は一足遅れで通常通りの迎え角を調整して機首上げ状態で降りようとする中でバトラは徐々に機体推力を落とし、可能な限りのエアブレーキを全開にまで作動させて徐々に機体を水平に保ったまま高度を下げて行く。

滑走路の端からは少し離れた場所まで来た瞬間にエンジンの出力を更に下げてエンジンカット寸前までエンジンの回転や出力を絞ってドシンとした衝撃を感じる程に3本のランディングギアで同時に降りたバトラとフロントムの機体だが、最初から速度を殺していたのとブレーキを強化していたお陰で直ぐに止まる事が出来た。

バトラは直ぐに滑走路を空ける為に管制官と早口で情報公開を要求、管制官も早口で返しあうと直ぐに機体を誘導路へと持つて行き、滑走路が空いた瞬間に片宮姉妹の2機がランデブーランディングをしようと進入し、ランディングギアが地面に触れて暫くした瞬間に2機が揃ってフラついた様に機首を降り始める。

「あ、滑った」

バトラが開けたキャノピーの端から見えた2人の機体を見て顔を手で覆う。

雪や濡れた滑走路では当然だが、スリップの危険がある為にパイロットはそれを考慮して少し乱暴に機体を地面に押し付けるように着陸する場合がある。

バトラがエンジンの出力を絞り3本同時に降り立ったのもスリップ防止の抵抗力を上げたからだ。無論ながらこんな無茶が出来るのは艦載機という足が強い機体であるからこそ、対して片宮姉妹はソフトな着陸をしてしまったのと滑走路上の雪が先に降りた機体の熱で溶けて水に戻り、マイナスを下回る気温とアスファルトの冷却効果で氷になっていた事、更に降りた場所がバトラの時よりも前だった事で機体が首を振る様にゆらりと動く。

「そこです!!」

直ぐに氷が薄いバトラの降りた場所を走った事に加えて、2人が巧みな機体の制御を的確に行っていた事で接触する事無く2機は誘導路へと進入すると空中待機していたベルクトが着陸体勢に入る。

「緊張しました……」

そう言うベルクトだが、ロシアの空を飛んでいた経験か、もしくはSu-47のアニメ故かスリップしないのは当然と言いたいのか、平然とした佇まいで機体を誘導路へと入ってくる。

無事に全ての機体が無事に地上へと降り立つとバトラの手が思い出した様に機体から降りる為に切るべきスイッチやバイパス、データを盗み見られ無いようにロックを掛けたりするとキャノピーが開かれる。

高高度を飛び、凄まじい空気抵抗を喰らう戦闘機、それも装甲キャ

ノピーのドーターとなれば外気の一切の侵入を許さない程の密閉性を持つが、電源が落とされたことでキャノピーが暗転すると即座に蒸気が排出される音と共にキャノピーが開き始めた事で外の明かりと共にロシアの寒気が侵入してくる。

「寒っ！」

雪が残り、滑走路も凍ったレベルとなると氷点下に至っている外気に冬季でのサバイバルを意識した飛行服でも身体を震わせてしまう程には冷気が身体を突き刺す。

「バトラさん」

バトラが身体が縮こまって動けなくなってしまうのを防ぐ為にストレッチをしていたバトラに頭上からファントムの声を聞いて見上げるとコクピットの淵を蹴って飛び降りようとするファントムの姿を捉える。

「危ねえ!!」

咄嗟にお姫様抱っこで受け止めたバトラだが、当のファントムは幸せそうに顔を赤らめながらもバトラの首に手を回して甘える様に自身の頬をバトラの胸元に擦り付ける。

「何をしてるんですか!!」

そんな光景を見せられて楽しく無いのは当然と言え、ファントムの抜け駆けが如き所業を見て、ファントムの顔面に手一杯の雪を押し付ける。

「いい気味です!!」「頭を冷やさない！」

器官が雪で押さえられたファントムはバトラの腕の中で必死に顔の雪を退けようともがいていると詩鞍と詩苑の2人がファントムをバトラの腕からはたき落とす。

落とされたファントムは足元の足首まである雪の中へと落ちた事で真新しい雪原にファントムの身体にピッタリ合う穴が製造され、空いたバトラの両サイドに詩鞍と詩苑がくっついてキープする。

「え、ええっつと……えいー！」

そんな2人を見て出遅れたと思ったベルクトだが、空いている正面に抱き付くと困る様で嬉しいが正直言うと少し邪魔だなと密かに表

情に出していたバトラの顔は真っ赤に染めたと周りの人間からも周りが白いだけに余計に赤く見えるバ。

何かと女性の多いM42飛行中隊のバトラだが、最初の1番機への恋慕が過去の物になった事と最終決戦が近い事もあってかアプローチが徐々に激しくなった影響かベルクトでさえもスキンシップを取る様になりバトラとしては不意な事や慣れない事をされると顔を赤くする場面が増えていた。

「昔を見ている様だ」

流石に正面から抱き付かれるのは慣れていない様子を隠す事無く見せるバトラを見たバーフォードが懐かしむ様に呟く。

初期のアンタレス隊は女子ばかりの華やかな部隊に別の場所から金で引き抜かれたバトラが加わると言う少し異色な部隊だったアンタレス隊だったが、バトラの性格が功をそうしたのか周りから目の前の光景の様な可愛がられを受けていた。

そんなバーフォードの横にマイケルが立って、バトラ達他愛も無いじゃれ合いの観察に加わる。

「違いがあるとすれば……」

バトラに引っ付く女性達がバトラに恋愛感情を抱いていたか否かだろう。

少なくとも今は亡きアンタレス隊の彼女達は一部を除いてバトラを息子が弟かの様な可愛がり方をしており、バトラもそれを何処かで喜んでいいる様な素振りを見せていた。

「……こんな光景が……」

いつの間にかマイケルとは逆の方に立ってバトラ達5人のじゃれ合いを見ていたグレアムが残酷な光景を思い出したのか寂しそうに呟く。

前のアンタレス隊でも出撃前はこうして隊の仲間同士でじゃれついていたが、作戦を終える度に人数は減り、戻っても顔ぶれは変わっていた。

「彼の人生を考えれば、な……」

バトラの若さに対して背負った不幸は余りにも大き過ぎ、大きな犠

牲の果てに手に入れた栄光や名誉ではその傷は癒せない。

人の心を傷付けるのは一瞬だが、その傷を癒すのは下手をすれば一生をかけても治らない物だ。

だからこそこんな何気無い幸福な日々が長く続いて欲しいと願うのはこの場の3人だけでなく、MS社でバトラの過去を知る者全員の想いでもあった。

「本当にこんな光景が長く続けば良いのにな……」

バーフォードの声をうら若きパイロット達は自身と仲間の楽しそうな笑い声で聞こえていなかった。

作戦71 時には穏やかなじやない昔話を

「……あー、フアントム?」

MS社に貸し出された格納庫の中で翼を休めるバトラの愛機。その機首下に膨れっ面でしゃがむ頬が微妙に赤いフアントムにバトラは手に雪を入れたビニール袋を下げながら声を掛けていた。

「なんですか?」

持ってきた雪で頬を冷やすフアントムがバトラの視線に気付いてジト目で問い掛けるとバトラは周りに視線を這わして、何かを確認するとフアントムの当てるビニールを支えるのを無言で変わると耳打ちする様に語り掛ける。

「何故……」

何かを言おうとするも肝心の言葉が出てこないバトラにフアントムはバトラの言いたい事がわかっているのか同じ様にバトラにだけ聞こえる声で答える。

「ザイの戦いの繰り返し。それを起こしたのは慧さんとグリペンです。その終わらせ方を決めるのもあの2人であるべきです」

「なら、尚更に……」

自分達がやろうとしている行動はその2人への背信行為とも言えるのではないかとバトラは目で語り掛けるがフアントムは慧さんには言いませんでしたが、と前置きを置いて語り出す。

「確かに繰り返しを開始したのは2人で、終わらせ方を決めるのもあの2人であるべきと言いましたが、今の……この時代を生きる人間には、この時代の進み方を決める権利と義務があります」

「その義務を為して権利を行使する意思があるなら、お前はそれに従い、そして力を貸すのか?」

「ええ、それが他者の意思を実現する為に生まれた私達であり……貴方の意思を叶えたいと思った私の意思でもあります」

真っ直ぐに見つめるフアントムの目とその言葉の真意を自分なりの理解をしたバトラは敢えてソレの答え合わせをせずに自衛隊に貸し出されている格納庫の方角へ顔を向ける。

「戦争は多くの教訓も残す。それが負であれ、正であれ、人に様々な成長と変化を強要する。今は彼にとって人として成長する時期だ。そして、この時期は未来に影響を与える。彼の望む未来、俺の望む「俺達の、間違いではないですか?」「」……そうだな」

何処から聞いていたのか詩鞍と詩苑、そしてベルクトの3人が現れるとバトラは申し訳無そうにしながらも微笑み、3人の言葉に同意する。

今ここに居るメンバーでこの戦争を終わらせる。詩鞍と詩苑は何の疑いも無くそう信じているからこそ、バトラはベルクトとファントムを連れ帰らねばならないと心の中で誓い直す。

〈世界経済に大きな被害を齎しています〉

誰かが持ち込んだのか分からない古い外観のラジオから、日本語の報道が流れ出す。

MS社でも日本での活動に染まったのか、ラジオの報道番組はアメリカと日本の物と出身国の物が入り乱れ易くなっていたが、今回は日本の物だったらしく、5人は耳を傾けると凶報。と言う物しか流れなかった。

「やっぱりかあ……」

ヴァラヒア事変にゴールデンアクス事件と全世界を巻き込んだ戦争とも紛争とも言える戦いを前線で生き延びた生き証人であるバトラは今回の戦力移動で起きると思っていた銃後の世界の被害が予想通りの展開になってしまった事に何とも言えない表情を浮かべていた。

「心苦しいです……」

ベルクトが小松の町も被害にあったと聞いて、憂いる様に片手を胸の前で握り込みながら告げる。

つい最近まではこんな凶報は無かったが、最終決戦に向けた戦力移動によりザイとの戦力バランスが崩れ、銃後の世界に戦火が飛び火してしまった。小松の町も自分達が離れた事により被害を受けてしまったとベルクトは感じてしまう。

「だが、中国に比べればマシだ。今後の政治家人生を棒に振るつもり

で何振り構わず動けばコントロール可能な状態だ」

ザイにより滅ぼされた中国では政府のコントロール力を超える被害や状況が続いた事で難民が溢れてしまう事になる。しかも、中国の一人っ子政策の影響か出生届を出されていない無国籍、存在しない筈の人間まで難民とかしたのだから手に負えない。

ニユースは防衛する軍隊の批判に変わろうとすると詩苑の口が開く。

「他の方々の尽力あってこそ、この被害なんですよね……」

無論ながら上の人間が穴が空いた所を開きっぱなしにはしない。

空いた穴には訓練を終えたばかりの新兵や2線、3線級のPMCパイロットで航空戦力の穴埋めを行うがアンタレス隊の穴を埋めるには遠く及ばない。

「もうすぐ終わるんですよね？　こんな戦争……」

詩鞍の縋る声が虚しく響いた。

Xデイと決めた1月7日の日の出から既に10時間以上は過ぎた頃に一向にバーフォードからも八代通からも作戦開始の通達はおろか、作戦の最終確認の命令すらこぞ、いき込んでいた地上クルー達は肩透かしを食らった様で脇に集まって温かい飲み物でまだか、まだかと愚痴を零していた。

「で、7日経った訳だが……ご感想は？」

そんな格納庫でカップ麺を手に詩鞍へ煽る様な発言をすると詩鞍は何と言えば良いかわからずに顔を怒りから赤くするだけだったのだが、ラジオからはここの1週間で更に被害が増えた各国の報道が流れており、都市部では電気ガス水道のいずれか、もしくは全てに被害を受けて生活インフラもままなら無くなったと報道される。

「ヴァラヒア事変やゴールデンアクス事件ではこんな事は少なかった……でんすよね？」

「ん？ ああ、アイツらは人間だからな」

詩苑の言葉にバトラは頷き、あの時の事を思い出すとバトラの代わりにファントムが答え始める。

「当時は正規軍が各地を防衛して、被害が出やすい攻勢はPMCにほぼ一任でしたからね。曲がりなりにも銃後を守る軍は居ましたからね」

「今回は正規軍もPMCも関係無く数と質を揃えて来たからこうなってる。まあ、当時も銃後の攻撃は……」

バトラが少し辛そうにしながらも心配そうに金属のカップを握るベルクトに目を向けるが直ぐに視線をズラすと微笑みをカップ麵の容器で隠す用にスプーンで喉を潤してから告げる。

「バラウールの砲撃だったり、東京やロンドンではステルス巨大……アレは攻撃機か？爆撃機か？」

「調べた限りですが……」

バトラの疑問にベルクトが自信なさげに声を上げる。

「スピリダスは攻撃機、オルゴイは爆撃機かと」

スピリダスは電磁砲と誘雷兵器での地上攻撃から爆弾以外での攻撃を行うと言う所から攻撃機と、オルゴイは機体重量に倒してハイパワーなエンジンによる高い機動性を持つが地上攻撃は爆弾のみだった事から爆撃機と判断していた。

「まあ、兎に角だ。巨大航空機での単機強襲だった。奴らは戦力差を加味して戦略目標をいち早く達成する事で大戦略の自分達の国の建国を行おうとし、ゴールデンアクス事件の首謀者、オリビエリはサンフランシスコを襲う事で経済的な支配を目論んだ」

「そう言う点ではヴァラヒアやオリビエリとザイは似てますね」

「？ どう言う事だ？」

空になったカップをゴミ箱に放り込んだバトラが問い掛ける。

「ザイが銃後の世界を襲うのは、人間の文化的な生活を壊す為です。そうなれば経済的なダメージから戦争行為をさせられなくなる。文

化を持つと言う点を巧みに攻めています」

今回の戦争も人類は世界を守ると言う大義名分で戦っているが、言い方を変えると今の文化形態を維持する為に戦っている。そして戦争を起こすのも文化が発端であり、文化によって成り立ち、文化によって終わる。

ヴァラヒアも核は明確な力を持つと言う文化を使う事で無理矢理に建国を行おうとし、オリビエリも経済という文化に傷を与え、その傷を自分が癒す事経済を支配しようとした。そしてザイは生活インフラと言う今の文化を支える人間を支える文化を無くす事で大勢の人類を消そうとする。

「速く終わらせないと！」

そう言つてバーフォードの場所に向かおうとする詩鞍の袖をバトラは掴んで辞めさせる。

「なんで、止めるんですか！」

詩鞍の言葉に脇に置いていた金属のカップで喉を潤すと苛つきを必死に隠した表情のバトラが言葉を紡ぐ。

「日本の独断で作戦決行を早めたんだ。当然ながら各国の政府はそれに文句を言うさ。早める前の作戦計画でもゴネる国が多くて大変だったとバーフォード中佐から聞いている。今ごろ高官達はパワーゲームの真つ最中だ」

俺たちみたいな現場の人間が行っても邪魔になるだけだと止めるバトラに詩鞍はどうすれば良いのかと食って掛かる様に迫ると意外な場所から言葉が飛んで来た。

「私達はただ全力を尽くすべき時に尽くすだけです。今は身体を休めましょう。此処で騒いで疲れてました。だけは、避けるべきです」

ベルクトの珍しく荒い声を上げるその光景を見た人間全員が固まっているベルクトは、ハッと表情を強張らせると急に恥ずかしくなったのか白い肌を余計に赤くしながら顔を伏せて近場の飲み物に手をつけて飲み干すが……

「それ俺のカフェモカ……」

カップ麺と言う塩っぱい物を食べた後はほんのりと甘い物が欲し

くなるバトラ。

此処が寒冷地と言う事もあって甘いココアでは無く、ココアにインスタントコーヒーを足したほろ甘くもほろ苦いカフェモカを用意していたのだが、用意してくれたスタッフが何のイジメかグツグツと煮立つ物を出した事で冷ましていた物をベルクトが飲んでしまった。

『ベルクト？』

誰の声か分からないが、ベルクトは意図していないがバトラが口つけた物を飲み干すと言う暴挙を犯してしまった。

ただ此処で誤解が無い様に記しておくが、此処でベルクトに怒気に向けるメンバーの中にバトラは含まれておらず、向けるメンバーの理由はバトラとの間接キスを成し遂げてしまった事に関してだ。

ジリジリと躰り寄る3人の黒と緑の少女達が発するプレッシャーから逃れようと白い少女が駆け出す。3人の少女達はそれを逃す気が無いのか追い掛けて何処かに行ってしまう。

「平和だな〜」

それを見送った少年が新しいカフェモカを入れる為に立ち上がりながら、決戦前とは思えない言葉を吐き出す。

決戦の時は静かに、だが着実に近付いていた。

彼の未来を決める分水嶺と共に……

作戦71 北の基地から

「よし、揃ったな。では、ブリーフィングを始める」

息の荒い慧を気にしていないバーフォードが部屋の電気を落とすとひとりでにプロジェクターが作動し、ホワイトボードに画像が映写される。

「まず、我々は持てる戦力を結集、モンゴル南西部、カシミール、キルギス、カザフスタン南東部の四方より攻勢を掛ける事でザイの迎撃戦力を分散させる」

画像のモンゴル南西部、カシミール、キルギス、カザフスタン南東部の部分から矢印が登るが途中でバツ印で矢印の動きが止められる。「こうする事で事で諸君らを球殻に到達させやすくするつもりだが、作戦の前倒しした事で集結予定だった戦力が消失している」

「中佐、具体的にどれほどでしょうか？」

バトラの挙手をしての発言にバーフォードはなんて事は無いと言う様子で半分から3分の1程だと答えると集まっていた航空自衛隊の人員達は騒つくが、MS社のメンバーが対ゴールデンアクス事件作戦展開初期段階では当時所属していた連合部隊全体で僅か数パーセントでしかないMS社だけの戦力で挑もうとしていた事を思い出せばなんて事は無い。寧ろ今は補給を他の組織はしてくれる分些かではあるが気が楽なくらいだった。

「無論ながらこんな数で飽和攻撃は無理だ。故に作戦を変えて一点突破だ！」

モンゴル南西部、カシミール、キルギス、カザフスタン南東部の矢印が一本になって真っ直ぐに球殻へと伸びる画像に変わり、バーフォードの拳が地図の中央を殴ると八代通が説明を受け継ぐ。

「モンゴル南部の敵哨戒網は先の作戦で寸断済みで正面戦力も他戦線の物よりは弱体である事も確認している。そこに全戦力を叩き付けて正面突破する」

八代通の説明にバーフォードが追加の説明を行うべくプロジェクターの画像が変わるとザイの勢力圏からいくつもの夥しい数の矢印

が伸びる。

「無論ながら他戦線からの救援が予測される。故に今作戦には制限時間は大目に見積もっても1時間とし、そうで無くとも他方面のザイが集まれば失敗となる。ま、即ちだ」

バーフォードがニヒルな笑みを浮かべる。

「敵が集まる前にザイには永遠に終わらない過去への時間旅行に出立して貰うと言うシンプルな話だ。正しく速度こそが今作戦の要になると思っただけだ」

納得しかけるMS社のメンバーに拳手をした事で全員の視線を一身に浴びるファントムが口を開いた。

「力押しの上に博打ですか？ しかも1時間で人類存亡を決めるなんて剛毅を通り越して狂気さえ感じます」

ファントムの挑発するような言葉にバーフォードはそれは無いから安心しろと朗らかに笑う。

「ウルムチを攻撃する事で陽動とする。今作戦を成功させる上で前提となるのは敵戦力の分散だ。それを運に任せる人間は此処には居ない。今回は陽動として先の作戦で行った敵防空網制圧を同時複数箇所で行う。こうする事で敵は我々の動きが読み難くなり、更に戦力を薄く広く展開せざるを得なくなる」

「敵が分散しなかった場合のプランは？」

バトラの言葉に隊長として様々な事を気にし始めたその姿に指揮官としての成長を見たバーフォードは嬉しく思いながら言葉を発し始める。

「流石のザイも広大な中国大陆を覆い尽くす事は出来ない。故に何処かが手薄になる。そこを偵察衛星で戦果分析を行って侵攻コースを決める。十字砲火の中に飛び込ませたりなんてしないから安心しろ」

バーフォードの話が終わると八代通が話はそう簡単では無いと言って立ち上がると地図の一部を張り手で叩くと其処がズームアップさせる。

「新疆ウイグル自治区ウルムチ市……?!」

表示された文字を読んだバトラが目を見開くと八代通が話を続け

る。

「天山山脈を背後に控える上にタクマラカン砂漠の入り口になる此処は敵戦力の集結地だ」

八代通の言葉に何を言いたいのか察したバトラが立ち上がる。

「球殻までの距離が複数の国境からの最短経路の上にレーダーサイトとそれに連動する地对空兵器が満載だ。確かに損害を与えられた時の戦術的な価値は高いだろうが、生きて帰れる確率より戦死する確率の方が高過ぎる場所だ！」

バトラの言葉に詩鞍と詩苑の身体がビクリと跳ね上がり、ベルクトは腿の上で静かに両手の拳を握りしめていた。

「此処に居るパイロットが主力にして唯一の戦力ですよね？ 戦力比は100対1と言ったところですよね？」

ファントムの言葉に八代通とバーフォードが揃って頷く。

「無茶にも程という物がありますよ。下手をするとこの作戦の我々の殆どが撃墜されかねませんよ」

その言葉に地上要員の顔が強張る。地上要員の彼等でも飛べる機体が無ければ何も出来ない。という所くらいは最低限で把握している。

「流石のバトラさんでも戦技や技術でカバー出来るとは思えませんし、バトラさんを下ろして専用機を取り寄せたとしても同じです」

ファントムの言葉が終わるとゆっくりとバーフォードが語り始める。

「確かに其処は死地と言って良い場所だろう。だからこそ、此方も君達の為に色々と動いて、戦力比は50対1にまで下げた。と言えれば何とか出来るか？」

バーフォードの言葉にファントムは重要目標の撃破であれば本当にギリギリだが可能だ。告げたファントムを見たバーフォードは満足そうに頷くとそれが合図になっていたと打ち合わせしていたかの様に扉が開く。

「まごころっかしいのは無しだ！ 目標が決まったならさっさと出撃して潰すまでだ！」

入室の挨拶も無しに叫ぶ様な声が響くと全員の視線が入って来た人物に向けられるが、向けられた人物はベルクトの姿を見せると微笑みを浮かべると空気を薙ぎ払う様に腕を振るう。

「ロシア航空宇宙軍第972親衛航空戦隊バーバチカ。ジュラーヴリク以下3機。今より独飛、並びにMS社との共同攻略作戦に入る。足を引っ張ったら承知しねえぞ！ おめえら！」

「うわあ……」

詳細な打ち合わせが終わったアンタレス隊の一行はいよいよ出撃と勇んでブリーフィングルームから出て、自身の身に装備をフルで身に付けてから外へ出たのだが、目の前の光景にバトラが懐かしさと分りきっていたが改めて突きつけられた事により生じた圧巻の感情から声を漏らしていた。

「わかってた事では？」

そんなバトラにアニマとしては嫌に重装備な格好をしたファントムが声をかける。

ベラヤの基地は暫定的な集結基地であったのだが、状況変化のより発生した今回の陽動作戦における出撃基地になった事で各国から集結する為に来た、正規軍とPMCの謂わゆる来る航空機の中にこれから出撃する謂わゆる行く航空機が混ざっている事で滑走路や誘導路、果ては駐機場に至るまでお祭り騒ぎの様相になっていた。

そんな中でも基地の強要はつい最近、それこそヴァラヒア事変などでは日常茶判事だったPMCの職員は少しずつ慣れ、そして思い出してきたのかスムーズに動き始め、一部では正規軍の人員に指示を飛ばす様になり始めると同時に周囲に戦闘機のエンジンが稼働する音が充満し、響き始めるとバトラが叫ぶ。

「総員搭乗！」

その指示を聞いた詩鞍・詩苑・ベルクトの3人は自分の乗機へと駆け足で近付き、バトラもフロントムを連れ立って自分の乗る機体へと歩み寄り、整備士から整備状況と機体の癖の確認を行い、前席へと収まったバトラから一呼吸遅れてフロントムも後席へと収まる。

バトラはミラーでフロントムの姿を確認するとプリタクシーチェックを開始した事で旧式なアナログ計器と比較的新しいデジタル計器が混じったPMC魔改造機よく見られる初見殺しな計器に火が点りエンジンの脈動が2人に伝わり始める。

「エンジン回転数、タービン排気温度、油圧、燃料、全てOK」

確認すべき計器を全て確認すると後ろを僅かに振り返り、フロントムが座っている事を確認するバトラにフロントムは頷いてみせる。

「レディオ・アンド・アビオニクス」

新旧入り混じった計器に外観は旧式なF-4から離れ切れていないチグハグな混沌としたコクピットに座るバトラの声に操縦桿はななく、近未来的なバケットシートに近未来的な機械の膝掛けを設けた様なコクピットシートに座るフロントムが新しい座席なので慣れませんねと言いながらも頷き、バトラの言葉に答えて行動を開始する。

「セット・フォー・デーパーチャー」

「グラウンド・イクイップメント」

「リムーブド」

何度か一緒に飛んだ事でぎこちなさが消えたやり取りにバトラとフロントムが同時に同様な安堵の感情を抱くと同時にキャノピーが下がり始めるが、安堵からか、少し広がった意識がバトラの耳にある音と首筋を蜘蛛が這う感覚を受ける。

「……なあ」

バトラのなにか憂いる感情が籠もった声にフロントムが機体の状況をチェックする為に閉じていた目を開ける。

「JAS-39 ANMだが、大丈夫だと思うか？」

バトラのこの台詞にフロントムは明確な違和感を感じるがそれを敢えて押し殺して告げる。

「……グリペンのE G Gは不安定です。何とか飛べるまで調整したそうですが……」

E G Gの乱れはアニメの精神的な部分での乱れから来る場合もあり、フアントムはその乱れがグリペンの精神状況における物である事は把握していた。そして同時にE G Gの乱れが電子機器への不調に直結する事も理解している。

「いや、そうじゃない……墜ちるエンジン音に似てるんだよ」

ボソリと告げた言葉を聞き返そうとしたフアントムだが、バトラは滑走路への進入を管制塔に要請し始めた事で聞き返すタイミングを逃してしまい、そのまま機体は滑走路を走って、空へと上がってしまった。

滑走路距離の長いフル装備の機体は後回しにされた所為か既に他の機体は空中に上がった後であり、MS社の航空機は1番機の入る位置を開けながらも編隊を組んで待っていた。

バトラは何の迷いも無く、慣れた動きで機体を編隊に滑り込ませるのと同時にフアントムが離陸前の言葉を聞こうとしたが、それよりも一息だけ早くバーフォードの通信が入った。

〈編隊全機の情報をアップデートする〉

バーフォードの言葉で情報が最新の情報に入れ替わるとそれぞれのオペレーターがそれぞれの言葉でその情報の説明を始める。

ただ、今回の作戦では戦力比の関係で全滅などが目的では無く、あくまでも次の作戦を行う上で厄介な存在となる戦術目標のみの破壊が目的であり、目標はウルムチ方面の滞空型のプラットホーム・天山山脈のレーダーサイト・通信施設だ。敵の要撃機や護衛機との戦闘は必要最低限に留め、迅速に戦略目標のみを破壊、撤収する作戦だ。

敵の撃破が主任務でない事をバーフォードから念押しされたジュラーヴリクが鼻を鳴らしせせら嗤う様な口調でバーフォードに言い返す。

〈景気悪いことぬかしてんじゃねえよ。邪魔する奴は全部墜とす、壊せるターゲットは片っ端から壊すでいいだろ〉

そのくらいの戦力は揃っていると声高らかに宣言したジュラーヴリ

クはこのまま本陣に切り込んでも構わないと告げるとイーグルはその判ろやすさからか歓声を上げる。

〈ジュラ姉様、この戦力で挑むのは無謀ですよ〉

妹であるベルクトから言われると強く言えないのか、流石に無線機の手で狼狽するジュラーヴリクにファントムが追撃を放つ。

〈ベルクトの言う通りですね。突撃馬鹿が早死にするだけなら、どうぞご勝手にと言う所ですが、私のバトラを巻き込まないで欲しいですね〉

〈ちよつと聞き捨てならない事が聞こえた様な気がしましたが?〉

〈機体がハッキングを受けています! お兄様は大丈夫ですか?!〉

〈ファントムさん! 抜け駆け、虚偽はよろしくないとします!〉

〈何を言っているんですか? この現実を見て下さい。バトラは私を選んでんです!〉

アンタレス隊の女性陣とファントムが痴話喧嘩をしている通信にジュラーヴリクは噛み付く気が失せたのかそつと通信を切り、デイー・オーはロシア語で楽しそうですねとバトラにだけ見えるディスプレイにメッセージを送り、それを読んだバトラはファントムにも気付かれない様に肩をすくめるがマスクの下では幸せそうな微笑みを浮かべていた。

この痴話喧嘩はバーフォードが無線封止を支持するまで続いた。

作戦72 北の空

〈ANTARES01、スパイク・ワン・オ・クロッカー〉

無線封止の上に逆探以外をオフにして最も外を飛んでいたバトラとファントムの逆探に敵のレーダー波を捉えると同時にファントムは無線封止を解除すると同時に意識を戦闘様に切り替えた上で機器の操作を行う。

〈ターゲットデジグネーターをネットワーク化します。各機に優先攻撃目標を転送。火器管制モードはセミオートにして下さい〉

ファントムの指示に無線封止直後まで言い争っていたジュラーヴリクは茶々も反発もする事なくその指示に従い、バトラの見るディスプレイに敵のマークとその諸元が映し出される。

〈下はバイパーゼロとパクファが行う〉

今回の陸上攻撃は敵の殲滅では無く、精密爆撃を利用した戦略目標の迅速な破壊であり、対空砲は耐えるでは無くそもそも狙われない様にする為にEGG迷彩を使える2機に行わせるべく、バーフォードが指示を飛ばす。

〈ANTARES03は2機の援護を〉

〈ANTARES04も2機の護衛に〉

精密爆撃を行う間は低速になる2機を制空型のザイの波状攻撃から守る為に武装搭載力が高く、その気になれば盾になれる様に装甲面にも改修を加えた2機のA-10を付かせるべく、2機のパイロットに付いている2人のオペレーターの声が絶好のタイミングで連続する。

ファントムの指示に指定された4機が地上攻撃を開始するべく高度を下げながら編隊を作り直すと同時に指定されていない機体は滞空型プラットフォームとその護衛の制空型ザイを相手にする為にエレボンかエレベーターを操作して機首を上に向けて上昇する。

〈プラットフォームはANTARES02が行います〉

〈バトラはベルクトの直掩に付いて下さい〉

〈ANTARES2、ROGER〉

〈〈01、COPY〉〉

白い輝きを放つSu-47が上昇しながら旋回を行うと緑の輝きを放つF-4が援護位置へと変わりながら追隨する。

〈〈残りの機体は制空型を足止めしろ〉〉

バーフォードの素地に黄色の輝きを放つF-15を先頭にして、そのすぐ後ろに紅色に輝くJAS39、その左右を挟む様に橙色に輝くSu-27と水色の輝きを放つMiG-29が続く。

〈〈敵機^{タリ}目視^{ホー}！〉〉

イーグルの興奮を隠さない叫びが開戦と合図となり、紅色、橙色、水色の輝きが散開するべくその翼を翻す。

〈〈エンゲージ！〉〉

そして滞空型プラットフォームの破壊を言い渡された2機もバトルの叫び声と共に開戦の火蓋が落とされ、同時に白い線が空に引かれる。

〈〈マスターアームオン！〉〉

そして地表近くでも2つの戦場と同じタイミングで片宮姉妹が開戦の合図と共に低速で飛ぶ味方機に食いつこうとしたザイに向けてイボイノシシが吠える。

「中佐、始まりました」

グレアムがカノープスの機内でレーダーを睨みながら、中央に指揮官用として増設されたビジネスクラスの座席をマルチディスプレイで囲んだ用な椅子に座るバーフォードへと告げる。

「わかっている。戦況は上々の様だな」

低空エリアを示したマップ上に事前偵察で把握された地上の戦略目標が1つ、また1つとその反応を消していき、空中目標もマップ上からもわかる片宮姉妹のコンビネーションに阻まれたザイが次々と消失していき、2人の女性オペレーターはそんな2人を言葉で援護するべく矢継ぎ早にオペレートしていく。

グレアムの担当がバトラという事もあってかグレアムはこんな時でも別の場所に声掛け出来るくらいには幾分かの余裕があった。

「?! バーフォード中佐! BARBIE01が!」

だからこそだろうか。誰よりも速く、本人の次にJAS39の異変に気付く事が出来た。

「これは?!」

バーフォードが自分のディスプレイに移る明らかにおかしい数値と動きにグレアムの指摘を受けて気付くよりも前、マイケルが異変に気付く直前にして、パイロットである慧が直面するよりも一息ほど早い時間。

〈FOX2〉

機体からミサイルをリリースすると同時に旋回降下を行うバトラの背後でミサイルは通常ではあり得ない軌道を描いて飛翔、ザイの撒いたフレアには眼もくれずに本体へと突き刺さり、ザイを爆発させる。

〈GUN〉

その爆風を背中に浴びながらもバトラは驚くほどに冷ややかな声で機銃の発射を告げるコードを唱えると同時に操縦桿のトリガーを引いた事で機銃からは20mmの弾丸が吐き出され、目の前のザイは片翼を千切られた事で乱回転しながら地上へと落ちて行く。

それを一瞬だけ横目で確認したバトラだが、身体を染み付いた動きが自然と行われた事で少し離れた場所でBARBIE01が3機のザイに背後を付けられているのをレーダー上で確認すると同時に機体を翻し、救援に向かおうとする。

〈バトラ! BARBIE01の様子がおかしい! 目視で確認してくれ!〉

バーフォードからの指示にバトラは了解と叫ぶ様に告げると同時にキャノピーのセンサーカメラを最大望遠に設定してJAS39とザイを捕らえるとフラフラとまるで故障機のように安定しない、安定させる事すら難しい飛行をする紅の機体を確認する。

「近い奴はガンで! 残りをミサイルで片すぞ!」

「はい!」

ファントムが強く頷くと同時に翼下からミサイルが放たれ、それはファントムの誘導であり得ない様な機動で飛び、ザイの回避行動を無

視し、当然の権利の如くザイを撃墜して見せると同時にバトラもブレイクしたザイの位置を予見していたと言わんばかりに20mmの銃口を向けていた。

「撃墜―」

主翼を根本から引き千切られたザイが横向きに回転しながら地面に落ちるのをフアントムが確認して放った言葉を聞きながらバトラは機体をグリペンの機体に寄せてフアントムが遠隔で操作出来る様に並走する。

〈異常か！〉

〈グリペンのEGGが乱れています。離脱を！〉

フアントムの叫びに似た声で出されら提案にグリペンは熱に浮かされながら戯事のように作戦を成功させなくてはいけないと繰り返し、正常な人間の状態で無い事をバトラがミラー越しにフアントムを覗けば、フアントムもミラーに映るバトラの眼を見て頷くとJAS39の機体を翻す。

〈作戦を成功させないと……〉

〈うるさいですよ〉

熱に魘された声で告げるグリペンの声が聞こえるとフアントムは一言でグリペンを黙らせると機体を基地に帰そうとするがその隙を突くつもりなのだろう。ミサイルを撃ち切ったザイが反転し、体当たり上等の急降下と急上昇で襲い掛かる。

「フアントム―」

ループ機動で回避機動を取ったバトラだが、フアントムが操作に介入するJAS39は回避が仕切れずに被弾してしまい、更にザイの1機が体当たりをしようとフルスロットルで接近する光景がJAS39のキャノピー裏の液晶から眺める慧の鼓膜は自身の速くなる鼓動しか聞こえず、誰かの叫び声を脳が理解していてもそれが誰の言葉で何を叫んでいるか理解出来ず、尚を接近するザイに恐怖を感じながら眼を閉じられずに見続けながら全身の毛は逆立つと同時に手足の感覚が無くなる。

「(やられる……)」

確信した瞬間にザイの身体が赤い光条に貫かれる。

僚機が赤い光条に貫かれた光景を見たからか、ザイ達が一齐に慌てた様な機動で回避行動や退避行動を取るがその悉くが狙撃用に断続的に飛来する光条に貫かれ、中には弾薬に引火したのか爆発するザイも現れる。

「アレはー！」

バトラが光条が飛んで来た方向を睨み付けると複数の同じ姿形をした戦闘機が挨拶をする様にバレルロールやエルロンロール、バンクなどをしながら通り過ぎると飛び回るザイ達に向けて喰らい付いて行く。

〈へごめんなさい。準備に時間かけちゃったわ〉

通信相手の顔が液晶に映るとそこには妙齡なフランス人女性の顔が映ると同時に並走する機体がファントムの視界に現れる。

固定式のウイングレット付きカナードにステルス性を意識した主翼に無尾翼という機体形状をした双発の戦闘機。

〈アマリアさん!!〉

フランスもUAVエースのアマリアだった。

バトラとも認識のある人物だったが、対ザイ戦闘ではザイのEPC M範囲内でのUAVは自律飛行しか出来無い筈なのだが、彼女の機体に関わらず、周りのUAVも満足の動いている。

〈間に合いました〉

そして新たに通信が入って来た事で現れた相手に記憶を巡らせるが聞いた事のある声でも無く、ディスプレイに薄い桃色が混じった白い髪に黒みのあるワインレッドの瞳を持った顔も見つた事が無い事にバトラもファントムも首を傾げると視界の先に通信相手の戦闘機が現れる。

ステルス性を意識した形状に前進翼を持った斜めに伸びる2枚の垂直尾翼に双発のエンジンを縦に持った小型の機体。

「あ、アレは?!」「うっそだろー！」

その姿を見たファントムとバトラが素っ頓狂な声を上げる。

目の前の機体はF-3 震電IIをパールホワイトに淡い桃色のハ

二カム模様で彩った機体にキャノピーは装甲キャノピーに変えられた機体を戦闘に海洋迷彩に彩られた同じ機体が編隊を組んでおり、その上下をUAVが編隊を組んで抑えている。

〈FX-3B ANM 震電Ⅱのアニマ、震電です！ 皆さんを援護します！〉

通信と同時にUAVからミサイルが放たれて、ザイへ殺到する光景を見る慧に震電は通信を入れる。

〈初めまして。自己紹介は追々にして、貴方の機体ですが撃墜したザイの破片で損傷をしています。私達が護衛するので帰還して下さい〉

そう言うが震電はグリペンが制御するアビオニクスにハッキング、操縦権を奪うと反対は許さないと云わんばかりに水平飛行の巡航速度航行で戦場から離脱させる。

UAV達も撤退する震電に従う様にミサイルを早々に撃ち尽くした機体から護衛の為に後退する。

〈アマリアさん？〉

〈地上でね〉

そう優しい声で告げたアマリアもミサイルを撃ち尽くしたのか後退を開始しており、通信にも若干では有るがノイズが混じっていた。

「多分、さっきのドーターの支援でUAVで空戦が出来る様になるんだ」

「彼女が撤退した以上は彼等も撤退しなければならない。ですが……」

フアントムの言葉と共に戦術マップがキャノピーのディスプレイに表示された事でバトラはフアントムが何故そうしたのかの意図を受け取り視線を走らせる。

「彼等のお陰で作戦が進み、戦況も好転しています」

「無駄では無いと？ 戦力比は？」

「現空域で増援なしで計算すれば10：1です。貴方と私でなら充分な差です」

フロントムが言い切った瞬間に何時ものメンバーから私達も居ますと通信機が叫ぶとバトラはマスクの下に隠された口が笑顔で歪む。

「残弾は？」

「充分にあります」

短くも確かな強さを秘めた言葉にバトラは頷くと機体を大きく傾けてザイへと果敢に襲い掛かる。

ミサイルも幾つか使っている事と機銃の弾も消費して居るが、そんな事は関係無いと言わんばかりに勇猛と言うべき機動でザイの背後を取る。

背後を取られたザイは必死に引き剥がそうとするがバトラはその機動にしっかりとついて来ており、さらに必中の距離になるまで機銃を撃たず、ミサイルのロックオンだけはしようと思えば機体をエアシユウの様に戻し続ける。

ザイは引き剥がせないかと判断すると急なコブラ機動で逃げようとする。

高速でのコブラ機動はGが強くなり易く、人間では危険な速度が存在するがそれが無いザイは普通の人間ならば絶対について来れない動きを行うが、バトラはオーバーシユートすると判断した瞬間にした方向にループし、最底面の場所でコブラ機動を行い、機首の向きを調節する。

コブラ機動から水平飛行に移ったザイだが、本来は居なければならぬ戦闘機が存在しないと認識した瞬間にフルスロットルで上昇して来たバトラの機銃を喰らって爆散する。

人間に対応出来ない機動をしたザイも判断は間違っていないが、カウンターマニユエバを得意とするバトラを相手出来る様な存在では無かった。

「背後に敵機！」

フロントムの警告を聞いたバトラは即座にバレルロールを行ってザイの機銃弾を間一髪で回避すると機体に減速を掛けてバレルロールの底面でストールを起こして僅かに機体を落下させながらエルロールを行い機体の向きを整えると同時にフロントムがミサイル

の発射と誘導を行い撃墜する。

「次は前からか！」

3機のザイが前方から襲い掛かる光景をバトラは認識した瞬間に操縦桿を握り直した瞬間に真ん中のザイが光条に焼かれ、左右の機体は大口径砲の弾丸を喰らったのか何かに押された様に一瞬だけ腹這いに下降した瞬間に爆砕する。

〈〈任務は達成しました。帰還しましょう〉〉

〈〈ご無事の様で〉〉〈〈安心致しました〉〉

MS社の僚機が集まって編隊を組んで帰投ルートに乗った3機の横に同じ様に色鮮やかなロシア製の戦闘機が3機集まって編隊を組んで帰投するが、作戦が成功した後の達成感に包まれた中で驚愕の情報渡される。

J A S 3 9 A N M グリペンが着陸時に事故を起こしたという情報だった。

作戦73 戦いの中の戦い

寒空から降りる冷たい空気に晒された空港に非常事態を知らせれるサイレンの音がその冷たい空気全てを震わせて温めるかの様に鳴り響く。

「グリペンのパイロットは無事なのか?!」

「急いで救助班を向かわせるんだ!!」

JAS39 ANM グリペンの滑走路事故。対ザイ戦において確かにエースと言うべき仕事をこなしてきた機体とパイロットの事故は否応無く正規軍の軍人達に尋常では無い衝撃を与えていた。

「基地要員は早くあの残骸を退けろ! VTOL機は対空防衛装備でその場に出撃させて護衛につかせるろ!」

「空中にいる機体で燃料不足な奴はいるか確認しろ! 今の連中は武器も燃料も無いかもしれないんだぞ!」

「大型格納庫に連絡!! もしかしたら空中給油の可能性がある! 滑走路が開き次第進入出来る様にしておけ!」

「空中にいる連中全員に連絡! 燃料の消費を抑えつつ空中にて待機と命令! こんな所で燃料切れからの墜落死などさせるな!」

「周囲に急設した臨時飛行場に連絡! 艦載機と丈夫な脚を持つ陸上機はそつちに着陸させろ!」

そんな混乱を貫く様に民間軍事会社の管制官の誰かが叫ぶと他の管制官達も立ち上がり自分の制服を見せつけると同時に叫べば、それだけで自分の会社がこの連絡を行うから誰かが別の事をしろとボディーランゲージで意思疎通を行えば、別の会社がこの状態で気付いていない穴やすべき事を会社単位で空中にいるパイロット達へ送られる。

「情報を統合して混乱を避けるんだ!」

そして地上管制塔から送られて来た情報を空中管制機に乗る管制官達はその情報を適宜修正すると同時に適切に送って行く。更には各機体からの報告も分かり易く可能な限りで脳内だけの編集を行い口頭で地上管制官に送れば、地上管制官も適宜、臨時飛行場に降りら

れる機体でかつ降りなければならぬ機体から優先して降ろして行く。

「バトラ。お前の機体は後だ。先にシャッターを持つ機に乗った連中から下ろす」

「エンジン吸気口にシャッターを持つ機体から優先ですね。了解です。給油機は上がりますか？ 低出力半滑空飛行も限界がありますよ。臨時飛行場は開きますか？」

「そつちもまだ臨時ですまんが駐機場の整備が終わり次第、飛行時間が少ない奴から優先する。お前たちエースは最後の方になる。何とか給油機は飛ばすがそれも先に着陸させて細かい破片を飛ばしてからだ」

「バトラ、了解した。もう少し耐える。それとあの2人は？」

「慧君の方は無事だが念の為に医務室へ、グリペンには八代通氏の場所だ。まだ詳しい報告が上がっていない。上がり次第には連絡する。オーバー」

通信を切られると同時にバトラは大きく息を吐きながら背もたれに身体を倒し直す。決して座り心地の良い座席。とは言い難い射出座席だが、それでも操縦桿から手を離す事が出来るのは人間であるバトラにはありがたかった。

「もう少し掛かりそうですか？」

「ああ、先に異物混入に強い機体から優先して降ろして安全確保を行うつもりらしい」

「わかりました」

機体の残骸や瓦礫を撤去出来てもまだ細かい破片は残る。普通ならそれも掃き掃除などで取り除くが今回は時間が惜しいからと細かな破片は空気供給口に異物混入防止用のシャッターを持つ機体着陸させる事でその時の風圧と衝撃で安全になる程度まで破片を飛ばそうと地上で判断されていた。

最初は正規軍側ではこいつらマジかと言う顔にしていたが、PMCでは割と良くある事だと片付けられて固まる背後をPMCの戦闘機が優先的に降ろされて行く。

それを見ていたファントムは酸素マスクをつけない口を動かしてバトラの鼓膜を優しい声音で揺らす。

「もう少し持たせてみせますから、居眠りくらいならしてもかまいませんよ?」

「そう言う訳にはいかん。それよりもこの後だ。グリペンのドーターが無い以上は作戦の根底が覆るぞ」

その言葉にファントムは少し以外そうな表情を浮かべ、バトラが首を傾げる。

「バックアップは私とベルクトが持っているので問題ないですよ?」

バトラさんの計画もある種では懸念材料が少なくなるので楽かと。お父様にはバトラさんの計画を省いて説明してますからね」

「兎に角は地上に無事に降りる事だ。でなきや話が進まない」

暫く空中で待機しながら他人に聞かせるのは避けた方が良い会話を交わしていた2人の耳に無線の呼び出し音が掛かり、2人は同時に口を塞ぐとバトラが無線进行操作して通信を繋げる。

〈ANTARES01、着陸を許可する。吸い込む様な破片はないだろうが滑走路が傷ついているので中止されたし〉

〈ANTARES01ラジャー。アプローチを開始する〉

「You have control」

「I have control」

ファントムが両手を前に掲げて操縦権が無いことを示すとバトラが操縦桿とスロットルレバーを握ると機体は一瞬だけグラつくが過ぎに姿勢を水平に戻すとゆっくりと滑走路へ最適な角度でアプローチを開始する。

〈進入コース適正〉

〈ギア、フラップダウン、エアブレーキ〉

徐々にスロットルを落としながらエンジン出力を抑え、エアブレーキを使って更に速度を調整して進入速度と角度を調整して行く。

〈速度、適正速度内〉

地面と近付くと地面効果翼で上がろうとする機体を機首を上げて減速する方法で更に減速する事で無理矢理に近い形で機体を更に下

げ、後輪が地面に触れると即座に前輪が地面と触れ合う。同時にバトラはエアブレーキとブレーキを掛けて機体に制動を掛ける。

〈お見事です。ANTARES01〉

適正位置に機体を止めたバトラは管制官の指示を受けて機体を誘導路に乗せると地上基地要員が誘導を引き継ぎ、機体を駐機場へと向かわせるが、途中で誘導が変わり、偽装された格納庫へ誘導され、エンジンを切る様に指示されてバトラはエンジンを完全に沈黙させる。

「お疲れ様です。ファントムさんも。この人の機動は大変でしょう？」

格納庫の中ではタラップを機体に横付けされ、それを登って顔を覗かせたのは見慣れた顔の担当整備兵だった。最前線とあってかその腰には工具と一緒に拳銃がぶら下がっている。

「ええ、いつも傷物にされます」

「そう言う誤解を受ける様な言い回しやめてくれないか？」

ハーネスを外されて逆側に取り付けられたフラップで地面に脚をつけたバトラをコクピットから確認したファントムがバトラに呼び掛ける。

「バトラさん」

「どうしたファント、ム?!」

上を見上げた瞬間にファントムがバトラの腕を目掛けて飛び降りるとバトラが条件反射に近い速度で反応してファントムは力強くキヤッチするとファントムとバトラの身体が当たる音と共にファントムのキヤッチと言う小さくも可愛い声が漏れるが周りが驚きの声を上げていた事もあり、その声は本人にしか聞こえなかった。が、その光景はジェット戦闘機のエンジン音を飛び越すほどの叫び声が格納庫に生み出す結果となる。

「ああー！ー！ー！ー!!」

それは後から入って来たベルクトだった。

開け放ったキャノピーから身体を持ち上げて力の限り叫ぶベルクトの格好は威嚇するかの様なポーズだが、周りの整備員からは出る場所を出たベルクトのプロポーションが対Gスーツにより強調されて

しまい、若い整備士は露骨に目を背けてしまう。

「早く梯子を下さい！」

鬼気迫るベルクトの言葉に若い整備兵がすぐに指示された物を取り付けると駆け下る様に降りたベルクトがバトラに抱えられる形で更に密着するフアントムに詰め寄り、引き剥がそうとする。

そしてベルクトの叫びを聞いて一足先に降りていた片宮姉妹も到着すると3人がかりでフアントムを引き剥がしに掛かる。

「お前ら！ 作戦はまだ続いてるんだから、気を張り続けろとは言わんが、少しは緊張感を持ってくれ！」

バトラがフアントムを降した事でそのまま3人に引き摺られる形で引き剥がされたフアントムとそれを行った3人の顔を見渡しながら告げるバトラにフアントムがいの一番に口を動かした。

「でしたら。バトラさんがこの中の誰を選ぶか明言されたらどうですか？」

フアントムの言葉に固まったバトラにベルクトが追撃を掛ける。

「そうですね。誰かを選べば他の人は引き下がるしかないでしょうし。(私は引き下がるつもり無いですが)」

ベルクトの言葉に頷いた詩鞍が更なる追撃を掛ける。

「そもそもの話でお兄様がその気にさせたらなんて言うからです。(詩苑なら恨みませんよ。私もセットですからね)」

詩苑も詩鞍の言葉の後に追撃を掛ける。

「その癖にフアントムさんに急接近するんですからこっちは気が気じゃないです(フアントムさんを選んだら詩鞍と凸るだけですけど)」

4人からの総攻撃にバトラは『あー』やら『うー』と言葉を探す様にしながらも大きく息を吸う。

それを見た恋する乙女4人が身構えた瞬間にバトラは急速回頭180度をぶちかましてそのまま逃走を選択。MS社航空戦力組の中では最高峰の陸戦能力を持つバトラに乙女達は置いてけぼりを喰らい、バトラはぶつちぎると言う表現が当てはまるほどの距離を開けると同時に視界からフェードアウトすると適当な段ボールに影に隠れる。

「一応はちぎったとは言えどもこのまま逃げ続けれるとは思えないよな……何処かに隠れて一晚経てばいいがファントムは恐らく部屋に張り込むだろうし……)」

八方塞がりだ。と言う言葉があえて内心でも口にせずには頭の中に押し込む。基地の外に出られない以上ははずれは捕捉される。そして捕捉されれば面倒事は間違いない。楽しい事は好きだが面倒な事は嫌いなバトラは何としても今回の事を気にしては要らない状況まで逃げ続けなければならぬ。

何もかもが重要な場所でへたれるバトラが悪いのだが……

「あの……どうかされました？」

そんなバトラに遠慮がちに語り掛けて来たのはアイドルを思わせる赤やピンクの服で身を包み、薄いピンクに柔らかな白い光沢のある髪が僅かに傾けた首に揺らされた泣き黒子のある可愛らしい顔立ちの少女。

この人類の最終局面とも言うべきタイミングで歴史の表舞台に現れたアニマ、FX-3B ANM 震電Ⅱだった。

「ちよつと仲間とトラブってな。逃げてる所だ」

「それは大変ですね。ほとぼりが覚めるまで私の部屋に身を隠しますか？」

震電からの誘いにバトラの頭が直ぐにメリット、デメリットの算出を開始する。

震電と自分の関係は殆ど無に等しいが震電は完全に日本のアニマだ。依存とも言える程に日本はMS社の関係は近くこれ以上の接近は必要が無く、外交官の様な立ち位置で接近したとは考えづらい。

「何が見返りだ？」

外交辞令が苦手なバトラはデメリットの算出の為に直接的に聞いてしまう。外交の場合ならば悪手も悪手だが、兵士として考えれば決して悪くない。そして震電はそんなバトラの事情を知ってか知らずか、少し恥ずかしそうに顔を僅かに伏せながら告げる。

「その……私は艦上機なのでお話する人は固定されてしまいますし……閉鎖的な空間なので昔話以外は殆ど一緒で……」

暫く黙ってしまう震電だが、バトラからのそれだと言う事なのかわからないから早く続きを話せと無言の圧力を加えられながらもゆっくりと言葉を探す様に続きを語る。

「エッジさんや色々な人から、そのー……MS社の一番機のお話がよく出てくるので気になって……」

その後は『あう』や『ああ』などの言葉が続くが、要はバトラの昔話や質問がしたいと言う事だろうとバトラは結論を下す。

「要は俺の昔話を聞きたい。そう言う事だな」

震電は少し恥ずかしそうに小さく頷くとバトラはそう言う反応をする物ではないだろうにと聞こえない様に呟くと震電の案内を元にスニーキングミツシヨン並みの安全確認を行いながらも、何度か危ない場面に遭いつつも震電に貸し出されている部屋へと辿り着く。

「あ、お茶入れますね！」

長丁場にするつもりなのだとはバトラは勧められた椅子の上で何処か楽しげに肩を竦めていると作り置きだったのか直ぐに戻って来ると楽しみですと子供の様な笑みを浮かべる震電が昔話を催促を始めたのと同時刻のとある格納庫。

「此処のパーツが凄い擦り切れてる！」

「こっちはもうグラグラってレベルじゃねー！ 此処だったから助かる様な物だぞ！」

それ以外の各所でも悲鳴と怒号が混じった声上がる。その音源は自衛隊の隊服を着た機付員だった。

自衛隊ではまず見ないであろう機体の消耗具合に慣れてきた筈なんだがなと呟きながらもやはり部品の壊れっぷりから悲鳴が上がってしてしまう。

「今回の通信ログやフライトレコーダーから考えればこんなはまだマシだよ。エースオブエースと訓練した時は廃棄寸前だったんだからな」

「いや、あれは寧ろ廃棄にするべきです」

「あの時の全バラしてパーツ交換95%したただけだろ？」

「あの時はまだ訓練用の軽戦でしたからね。それでもコクピットの内

部と配線とフレーム以外は全交換でしたね」

そんな会話をしながらもすっかりと整備を行うのはバトラと共に今まで戦い続けて来た熟練整備兵達だ。

此処までの戦いでもっと酷い消耗があったと言われると自衛隊員達は自分達の所だったら面倒くさい事になっているなと思いつつもいい経験だと思いつつも作業の手を進める。

「RF-4EJ ANM TPB スコーピオファントムか……流石は元が自衛隊機だな。しっかりしてるし他の国の官給品に比べると部品点数が変わらずに剛性を高めている」

RF-4EJ ANM ファントムをベースにバトラのF-4のパーツを使ってニコイチにされた機体だが、元になった機体の素性の良さがキーとなり予想よりも良い機体となっていた。

「こつちも初めてって事でちよつと浪漫に走りすぎたなあ」

そう言うのは熟練の自衛隊機付員だった。今回の機体の改造に関わった責任者で此処まで培って来た技術と趣味で作っていた研究ノートを引っ張り出して改造に参加。結果として設計段階での余裕を食い潰して機体限界を超えてしまい、アニメ単座操縦でも慣れを有する機体にしてしまった。

パーツの品数低下。これがこの機体にとってはいい方向に傾いている。

パーツの品数低下の際に壊れた際に副産物として危険性を生むであろう場所を優先で減らす様に作ってあるおかげで多少の故障でもワンフライト。それこそ損傷しながら帰還する程度なら正規軍のそれよりも安全にフライトする事が出来る。

「自衛隊でPMC仕様のファントムを使うのは無理だな」

逆にそれは機体寿命の低下を意味する。

無論ながら過去の新造に近いレベルでの修理を行えば問題無いがそれを正規軍でしろは当然ながら無理な話。MS社の前例も機密が無い旧式訓練機だったからこそだ。故にPMCでは基本的では有るが直せない機体は壊した奴が自腹を切って買い換える。専用機運用のPMCであるからこそその対応であり、メーカーも買い替えが基本思

想ゆえに機体寿命の延伸はそれをマーケティングポイントでない限りは軽視する。

機体の金は同じレベルの性能の敵機を十数機撃墜すれば釣りが来る程度の値段なのだから。

そして自衛隊では国民の血税で買うのだからそんな使い捨て品は買えない。買った方が最終的にも安いのは知っているが国民感情的に許されないし、それを言葉遊びで問題化させる政治家と国民が少なからず居る国なのだから……

「まあ、官給品にも官給品でいい所はあるしな」

1番は機体寿命だが、内装パーツの質、そして正規メーカーのパーツが使える事だ。そっちの方が確実性も高いしちゃんと最低限の品質を保証してくれる。PMC仕様は買い手の目と仕入れる人間の目と信頼がないと飛んだ瞬間に墜落もある得る為に正規軍では官給品としての正規仕様が購入される。最悪は機体はPMCでパーツは正規品だが、物によっては取り付けるボルト穴が無いなどで改造をしないと付けられない物もあるので現実的では無い。

「本当にパーツの取り付けをPMC仕様に改造した甲斐がありましたね。これが自衛隊仕様の国内製造仕様のまんまだったと思うと……」

のだが、バトラとファントムの機体ではその両方が混在している。と言ってもPMC向けパーツはバトラのデータや意見を元開発された専用厳選パーツ、最悪はオーダーメイド品なので問題無い。そしてもしも正規品のみだった場合は異物混入で墜落の危険がある壊れ方をしていた。

「まあ、壊れたパーツはユニット毎に交換だな。そうすれば次の作戦に間に合うだろう」

「自衛隊じゃあり得ない言葉だな」

「パイロット以外全交換よりはマシだな」

いや、それは機種転換か機体交換。と言う言葉を自衛隊の機付長は何とかして飲み込んだのと同時に滑走路に新しい爆音が響いていた。

作戦74 最後の日の前日に

「何処に消えていたんですか?」

恋する乙女の追撃を見事に振り切り、食堂での時間も震電の行為により部屋で済ませて逃げきったバトラ。だったのだが、朝食の終わり側にファントムに捕まり、そのまま片宮姉妹とベルクトに囲まれて冷たい床の上に正座をさせられていた。

「きつちりお話しして頂きますからね?」

珍しく底冷えする様なベルクトの言葉にバトラの身体が一瞬だけビクリと上へ跳ねさせるが、ニヒルな笑みを浮かべながらバトラが答える。

「うん? 誰が教えるんでも?」

「はあ……」

バトラの言葉に片宮姉妹が同時に溜息を吐く。

周囲にはそれに野次馬する人の姿は無い。と言うのもそんな事をしている暇がある人間がそもそも少ないと言うのが大きな理由だろう。

基地の周囲は様々な言語が飛び交い、ハンガーでは怒号や金属が擦れる音、叩かれる音や焼ける音が響き渡る。

車輛も忙しく動いており、燃料を運ぶタンクローリーから機体を動かす牽引車輛が彼方此方へ走り回っており、時折だがクラクションの音も聞こえるアルタイの基地。

最終決戦への準備が滞り無く進んでいる基地だが、男女の痴情のもつれは問題無く起こっていた。

普段で有れば此処で騒ぎ立てる者や楽しむ者が出るのだろうが、残念な事に今はそんな事をしている暇な者など居ないし、居たら別に現場に駆り出される。つまりは女性4人にとっては誰にも邪魔されずに裁判が出来る環境が皮肉ながら出来上がっていた。

「あれ? 何をしているんですか?」

そんな環境に純度100パーセントの心配性から参加して来る人の声に全員の視線が向くとその遠慮の無い様々な感情が混ざった視

線に晒されるのが初めてなのかその人影はビクリと震えて僅かに飛び上がってしまう。

「F—3B ANM 震電Ⅱですか。見世物ではな、あ！」

視線の先に居た痛んだ髪がほんの少し磨かれて本来の輝きが僅かに戻ったパールホワイトの髪を持った人物、震電の姿を認めたファントムがその正体を看破して直ぐにとある事を思い出す。

「とある女性兵士がパールホワイトの髪の少女と白髪の少年が昨日未明に一緒の部屋に入って、今日の朝遅い時間に同じ部屋から出て来たと言う噂話を聞きましたが、ご存知ないですか？」

「ふええ!？」

鋭い眼光のファントムの言葉を聞いて、周りのメンバーも眼光を輝かせた瞬間に震電が僅かに飛び上がる。

生み出されてこの方、殆どを護衛艦の上で過ごして来た震電には未知の体験であり、どうすれば分からずアタフタしている間にファントムは疑いが確信に変わって行き、ベルクトも噂の正体を察し、詩鞍と詩苑も震電の様子からその心理を探り当てかけた瞬間。

「ええつと、は、はい……」

「!!!」

自供してしまった震電にバトラがやましい事は無くても誤解からまず酷い事になると察して声にならない悲鳴を上げると同時に逃走しようとするが、ファントムが予め張っていたネクタイを使った足掛けトラップに掛かり、転倒、そこを片宮姉妹が2人掛かりで取り押さえ、ベルクトは笑みを浮かべながら震電を席に着かせる。

「さあ、何をしていたのか正直に話してください」

「あの……ベルクトさん……顔が凄く、怖いです……」

ベルクトの笑みに震電が震えながら告げるもベルクトは悪意も敵意もないですよと告げながら男性が見れば顔を赤くする程の微笑みを浮かべるその後でバトラは逃げられない様に何処からか取り出された縄で椅子に腕と背中、足を縛り付けられて逃げられない様にされていた。

「ええつと……バトラさんの昔話を聞かせて貰っていただけで……何

もやましい事はありません……よ?」

嘘を言っていないが気圧された様子で告げる震電にファントムとベルクト、片宮姉妹の4人が確信して頷き終えるとグルリ。と言う様な勢いでその顔がバトラの方に向けられる。

旗は立てて居ないが部屋で1人つきり。そう言う状況を自ら作った事が4人の堪忍袋の緒を刺激していた。

何か問題になる。と言う事を狭い空間で長期間を過ごす。と言う特異な環境の中で自然と培われていた震電が判断すると弁明の言葉を吐き出す。

「あの……私からお願ひしたんです。昔話や身の上話が好きなので……」

「其処が問題なんですよ」

震電の言葉に片宮姉妹が同時に返す。

「お兄様は身の上話を余りしませんからね」

「ある程度は規則で縛られているので仕方ないですが、私達と会う前のヴァラヒア事変の事も最初のウイングマンと」

「長機のパイロットの話以外は余り語られて無いので」

つまりは初めて会った女性に請われて、とは言えども余りしない身の上話をしたのが恋する乙女として許せないと言う話だ。

余談だが、既に調べていそうなファントムだが、バトラの生まれとMS社の前に入るまでの来歴の記録はお粗末の一言で途切れ途切れである事とそもそもとして存在しないと言う事。自称であれば幾らでも偽証可能と言う事でMS社でもデータ化されておらず、防諜の為に敢えて手付かずと言う風にもしている。

幾ら策謀に長けたファントムでも存在そのものが無い物を探る事は出来ない。

「その話。是非ともお聞かせ願ひたいですね……」

「いや、お前らに教えたのと大して変わら……」

と弁明しようとしたバトラだが、その言葉は途中から吐き出されず、逆流してしまう。何故なら

「それはこちらで判断します。なのでもう一度」

「詳しく同じ内容をお願いします」

「今、私達は冷静さを欠こうとしています」

「怖っ!!」

能面の様に感情を感じさせない顔で迫る4人の美女にやられているバトラととばつちりを喰らった震電も恐怖に身体を震わせたタイミングに新しい影が食堂に入室して来る。

「何してるんだ?」

困惑気味に聞いてきたのは格納庫でドーターの更新中の筈の慧だった。内部のコクピットの形式が変わり、古いシステムに慣れていた慧は一気に新しくなってしまうたコクピットの操作方法のレベルから躓いており、此処にはこない様な人物だった故にこっちの台詞だよ。とバトラは言いたかったが、恋する乙女4人からの制裁を受けようとしていた現状がそれを言わせなかった。

「ご用件はなんですか? 見ての通り忙しいんです」

フアントムの言葉に去ろうとした慧だが、言え、言ってくれとこれからの生命が掛かったバトラの必死の目線を前に口が動いた。

「いや、最後なんだ。盛大に遊ばないか?」

「よし、行こう!」

バトラが慧の背中を押して食堂から出て行く。それを見た2人のアニマと2人の少女はバトラの運の良さに呆れる様に溜息を吐き、1人のアニマは誰よりも早くスキップで2人の少年を追い掛ける。

慧の後を追った4人の前に慧に背中からしがみつくとイーグルにバイパーゼロが姫袖をクルクルと回して呼び、肩で風を切る様に振り返るジュラーヴリク、方々を眼光で威嚇するラーストチエカ、パクファが調子外れで奏でる鼻歌が飾る一団にバトラは助かったと安堵の表情で、フアントムは静かに合流し、詩苑と詩鞍はバトラの両手に自分の手を絡ませ様として、困った様な顔を浮かべたベルクトが2人の間に挟まり指を絡め、震電のスキップ音が更に一団を飾る。

色鮮やかで陽気な一団の大脱走が始まった。

広い空から落ちて来るのは冷たい空気、誰もが白い息を吐きながら砂と所々に雪が積もったアルタイ市街のアスファルトの上を当てどもなく散策する色取り取りの頭髮に美男美女の一団は地域住民の目を引いた。が、当の本人らはそんな事を気にせず入ったレストランで見慣れないメニューに相談しながら予想しながら決めたメニューがまさかな料理で互いに押し付けあったり、映画館ではバトラのへっぴり腰が発動して席の隣をグリペンと震電にしてしまった為にグリペンと震電が静かに窒息死しかけたり、売店で売っていた怪しげな食べ物で罰ゲームの様に押し付けあったり、雑貨屋に行けば女子達が男子2人を総出で困らせたり、反撃に片方が顔を赤くさせ、気付いたら片方は2人だけの世界に入って言葉は通じない筈なのに現地住人から砂糖を吐かせたり、店主からは修学旅行かと聞かれて知識でしか知らなかった学生生活を疑似体験して盛り上がるアニメ達。

よく笑った、よく喋った、よく楽しんだ。人種、国、思想、組織、そんなのは二の次に今という時間を必死に積み重ねる。色鮮やかで楽しい時間とは早く過ぎ去る物で気が付けば空から夜の冷気が増し、紅に染まっていた。陽気だった一団も次第に口は閉じ始めて基地への帰り道についていた。斜陽が赤く一団を照らして影を濃く、長く引き伸ばす。もはや語るべき言葉は無く、晴らすべき未練もなかった。そして空は星々の瞬きが美しい夜のブラックブルーに染まり、それが白い太陽の光に散らされ、スカイブルーの空へと戻って行く。明けない夜は無い。それは明日が必ず始まると言う事でもある。

それが人類の存亡と誰かにとっては何世界に行く末を決める決断と行動を強いられる日だろうと、例え、それが誰かにとっての最後の1日の始まりだったとしても……